

# 英雄伝説 異能の軌跡Ⅱ

ボルトメン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異能者キリコ・キュービーを待っていたもの。

1200年前から続く呪い。エレボニア帝国とカルバード共和国との戦争の足音。それらの裏で暗躍する黒い影。

そして、**“因縁深き”神**

砕けたはずの過去、死んだはずの神がキリコを新たな戦いへと誘う。

全てと引き換えに、キリコが走る。

『全ては、この手でやつを……！』

目次

序章

再臨

1

第一章 放浪篇

守護者

14

ノーザンロッジ

24

乱雲

41

牙

56

北方ユミル

73

黒竜関

92

翼

108

訣別①

122

訣別②

139

第二章 黒の工房篇

潜入①

157

潜入②

166

名前

177

帰還

185

断章

隠れ里エリン

198

野望のファイル①

212

野望のファイル②

228

フェンリール

254

ウド①

257

ウド②

283

ザ・ラストレッドシヨルダー

クメン①

クメン②

第三章 相克篇

鬼気

第一相克①

第一相克②

魔樹

攻城①

攻城②

賞金首

芝居

ドレックノール要塞

流星

餓狼

矜持①

矜持②

決意

第二相克

最終試験①

最終試験②

意地

飛行船

会議①

会議②

捕縛②	977
捕縛①	959
灼獣	935
月の霊場③	917
月の霊場②	896
月の霊場①	880
カレイジャスII	857
リターン	829
塵殺	809

## 序章 再臨

七耀暦1206年 8月1日

南オスティア街道外れの空き地には多くの帝都市民や報道陣が押し寄せていた。

彼らはこれから行われる世紀の瞬間を今か今かと待っていた。

「来たぞ!!」

誰かが発した大声に全員が振り向いた。

重厚な導力車から衛士四人に引っ立てられ、青い髪の男が降りてきた。男は目隠しをされ、猿轡を噛まされ、足以外を拘束されていた。

「あいつだ!!」

「あいつが皇帝陛下を襲撃した犯人か!!」

「どっかの士官学院生らしいぞ!」

「しかも共和国からのスパイだったとか!」

「帝都に破壊作業員を100人近く忍び込ませていたんだってよ!」

「この恥知らず!裏切り者!」

「おい衛兵!そいつの顔を見せろ!」

市民たちはさながら暴動のように詰め寄った。

『ご覧下さい!我らがユージェント三世陛下の暗殺を企んだ死刑囚が処刑台に引っ張られて行きます。しかし、この期に及んでまだ逃げ出そうとしているとは、あの死刑囚には恥というものがないのでありませんでしょうか?』

報道記者はマイクに向かって煽動的なコメントを口にした。

「……………んぐぐぐ……………んぐぐ……………」

「大人しくしろっ!」

死刑囚の男は拘束から逃れようと体を揺らすが、その度に衛士に頭部や腹部を警棒で殴りつけられ、設置された処刑台に引っ張られて行く。

いよいよ、その時が近づいた。

(ち、違う！俺じゃない！俺は何も知らないんだ！これは陰謀だ！誰か、誰か助けてくれ!!)

死刑囚の男は涙を流しながら暴れるが、屈強な衛士に取り押さえられ、首に綱を巻かれた。

「これより、大逆犯キリコ・キュービイーの処刑を執り行う！処刑の方法は、絞首刑とする！大罪人よ、お前には死後の安らぎという女神の配剤もないことを知るがよい」

帝国軍法務局長のベガルタ准将は死刑囚の男の眼前で冷酷に言いはなった。

『殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！』

市民たちは拳を高く突き上げ、連呼した。

「……始めろ」

(待ってくれ！止めろ！止めてくれえ!!)

死刑囚の男はなおも拘束を逃れようと体を揺らす、すでに身動きがとれなかった。

「……こんな恥も外聞もない……みつともない奴に……陛下は……！」

帝国軍法務局員は怒りをこらえ、処刑台のレバーを下ろす。

(た、助け……！)

8月1日 午前11:30

皇帝暗殺を企んだ男、キリコ・キュービイーの処刑は執行された。

この様子は帝国全土に報道され、各地の人々は沸いた。

『正義は成された』と。

そして処刑からわずか30分後、今度は帝都のドライケルス広場に鉄血宰相ギリアス・オズボーンによる、発表が行われた。

カルバード共和国への進攻作戦《大地の竜(ヨルムンガンド)作戦》

世界は一歩一歩、破滅へと進んで行った。

「ああ、予定通り執行されたよ」

』……………』

「正直、馬鹿馬鹿しいこの上ない。あれは単なるショーだ」

』……………』

「観客という名の市民の大合唱はなかなかだった。もはや中世の魔女狩りだな」

』……………』

「まあいい。今日はもう撤退しろ」

』……………』

「次のオーダーは明日の朝送る。期待しているぞ。……………」  
通信を切った男は口角を上げた。

処刑より少し前

クロスベル州に悠然とそびえるオルキスタワー下層では、戦闘が行われていた。

「はあ…はあ…はあ……」

「つ、強い……!」

』……………』

ロイド・バニングスとエリイ・マクダエル。

かつて教団事件やクロスベル事変を解決に導いたクロスベル警察特務支援課メンバーであり、クロスベルの英雄と目されている。

その二人は今、フルフェイスのヘルメットと赤い強化服のようなものに身を包んだ敵と交戦していた。だがその敵は二人の技量を上回っていた。

「早くエステルたちと合流しないと……!」

「キーアちゃん、絶対に離れちゃダメよ!」

「うんっ!」

場違いな声を発するのはロイドら特務支援課の保護下にあるキーア・バニングスだった。

元々はとある錬金術師の一族が幻の至宝と同調させるべく造りだされたホームクルスであり、クロスベル事変の引き金であったが、ロイドたちの尽力でその力を喪い、現在は普通の少女として過ごしてい



た。

「おい、お前！」

ロイドは物言わぬ相手に声を荒げる。

「わざわざ分断した理由はなんだ？」

「……………」

「まさか、狙いはキアか!？」

「……………」

「答える！」

ロイドは得物であるトンファー型の警棒を握り締める。

その瞬間、赤い敵は大型のナイフを手にロイドに突っ込む。

「クツ、エリイ！」

「任せて！」

ロイドはエリイと戦術リンクを結び、敵を迎え撃つ体勢を取る。

だがそれは悪手だった。

赤い敵はナイフを振り抜くタイミングで動きを止めた。ロイドはフェイントにまんまとひつかかってしまった。

「しまっ……!？」

慌てて引こうとするが間に合わず、ロイドは腹部に思いきり蹴りを叩き込まれ、後ろの鉄柵に激突する。

「ロイドー！」

エリイは銃を構えるが、敵の放った投げナイフに照準を狂わされる。

「そんな……速すぎる……」

敵はそのままエリイに近づき、右手で大型の銃を向ける。

「エリイ！」

「させるか……!？」

ロイドは激痛をこらえ立ち上がろうとしたが、その距離は遠すぎた。

「……………」

敵は引き金に指をかけた。

「させない！」

敵の頭上から栗色の髪の子が棒を振り下ろした。

「！」

それに気づいた敵はバックスステップでかわす。

「まだだ！」

黒髪の男が真横から双剣で襲いかかる。

だがその攻撃も銃とナイフを盾にして凌いだ。

「二人とも、大丈夫!?!」

「エステル、ヨシユア！」

「僕たちだけじゃない」

反対側から大鎌を携えた少女が歩いて来た。

「レンちゃん！」

「さつきぶりね、お兄さんたち。それにしても、エステルとヨシユアの攻撃を凌ぐなんて相当な手練れね」

レンと呼ばれた少女は敵を見据えた。

エステル・ブライトとヨシユア・ブライト。

この二人はカシウス・ブライトの子どもたちとして広く名を知られていた。

二人は四年前にリベール王国で起きた軍情報部クーデターやリベールの異変、影の国騒動を解決させた立役者として、帝国から警戒対象にされていた。

そしてレン・ブライト。

彼女は元々《殲滅天使》と呼ばれ、大陸各地で暗躍する結社身喰らう蛇の執行者だった。

現在は紆余曲折を経てブライト家に引き取られた。

彼女らは共和国へ戦争を仕掛けようとする帝国の思惑を調べるべく帝国入りを果たし、ロイドたちと共にオルキスタワーへ潜入した。

そこでエステルたちはロイドたちと分断させられ、向かって来る人形兵器を蹴散らしながら、遂にロイドたちと合流を果たした。

「ティアラー！」

ヨシユアはロイドに回復アーツをかける。

「すまない、ヨシユア！」

「まさか、ロイドたちをここまで追い込むなんて……！」

「レンの言うとおり、相当な手練れね……」

「でも、形勢は逆転したわ！」

エステルたちは赤い敵を囲むように陣形を形成する。

「……………」

赤い敵は使い物にならなくなった銃とナイフを投げ捨てた。

「よし、そのまま……」

「ロイド、待って！」

「え——」

その瞬間、赤い敵はフラッシュグレネードを起動させる。

「なっ!？」

「しまった！」

ロイドたちが混乱している隙に、赤い敵は逃走を試みる。

「甘いわー！」

先回りをしていたエステルが赤い敵に棒を突き出す。

赤い敵は吹き飛ばされ、そのまま最下層へと落ちて行った。

「なんとかなったわね」

「う、うん……」

エステルは棒の穂先を見つめる。

「どうかしたの？エステル？」

「ううん、何でもない。それより、早く行きましょ！」

「そうだな。時間が惜しい」

「うん！後少しだよ」

エステルたちは先を急いだ。

「……………」

エステルたちが去った直後、赤い敵はワイヤーフックを使って最下

層へと降りていた。

(当たる寸前で後ろに飛んでやり過ぎすのは正直賭けだったが、なんとか上手くいったな。ん？これは……)

最下層に到達した赤い敵は導力器を開いた。

『仕事は順調か？』

「ああ。中枢に近づく敵の足止め。オーダー通り足止めをした」

『ご苦労。さすがにA級レベルの遊撃士に特務支援課、元執行者が相手では荷が重かったようだな』

「知っていたのか？」

『連絡があったのだ。まあ後は彼らがやってくれるだろう』

「それより聞きたいことがある」

『なんだ？』

「本当に処刑されたのか？」

『ああ、予定通り執行されたよ』

「そうか……」

『正直、馬鹿馬鹿しいこの上ない。あれは単なるショーだ』

「……………」

『観客という名の市民の大合唱はなかなかだった。もはや中世の魔女狩りだな』

「……………でもいい」

『まあいい。今日はもう撤退しろ』

「わかった」

『次のオーダーは明日の朝送る。期待しているぞ。キリコ・キュービー』

通信は切られた。

「……………」

赤い敵はフルフェイスのヘルメットを脱いだ。

先ほどエステルたちと刃を交えた赤い敵。

その赤い敵こそ、皇帝襲撃犯として公開処刑されたはずのキリコ・キュービーだった。

キリコは中枢塔を一瞥し、オルキスタワーを後にした。

ヴァイスラント決起軍旗艦。パンタグリユエル

「……………」

ヴァイスラント決起軍主宰ミルディーヌ・ユーゼリス・ド・カイエンは帝都方面を見つめていた。

その両目は泣き腫らし、真っ赤になっていた。

(ミルディーヌ様……………)

(ずっとああしたままですな……………)

(無理もないわね……………)

その背中をオーレリア・ルグインとウオレス・バルディアスとヴァイター・クロチルダが陰から見つめる。

巨イナル黄昏が成就した日、新旧Ⅶ組と別れたミルディーヌは、オズボーン宰相一派と対峙するために極秘で組織していたヴァイスラント決起軍に合流、《大地の竜作戦》に対抗するべく、《千の陽炎（ミル・ミラージュ）作戦》を推し進めていた。

そんな時だった。

キリコ・キュービーの公開処刑が執り行われるという情報が入ってきたのは。

ミルディーヌは茫然自失となったが、敢えて心を鬼にしたオーレリアらに決断を迫られた。行くか退くか、と。

ミルディーヌは葛藤と苦悩の末、《千の陽炎作戦》を進めることを選択し、ラマール州上空に留まるよう命令した。

オーレリアらに編成を任せた後、ミルディーヌは自室で声を殺して泣き続けた。

オーレリアとウオレスもしばらくの間、ミルディーヌには何人たりとも取り次がせないように徹底した。

夕方になり、ミルディーヌは甲板から帝都方面を見つめていた。

「あの大馬鹿者めが。呪いごとくに屈しおつて……………」

「1200年前から帝国全土を覆う呪い。キュービーでさえも飲

み込むとは」

「……………」

「そして一足先に自由の身か。いつか煉獄で会ったら八つ裂きにしなれば気が済まん」

「しかし、妙ですな」

ウオレスは顎に手をやる。

「情報ではキュービイーの公開処刑というだけで、いつ、どこで、どのようにして捕らえられたのかがはっきりしていません」

「確かにね（その方が国民も納得するでしょうけど）」

「それに閣下も知るとおり、キュービイーは肝心な所でドジを踏むような奴でもない」

「そうだな…………」

「…………今さら言つてどうなりましょう？」

二人が顔を上げると、ミルディーヌが立っていた。

「ミルディーヌ様…………」

「既に終わったこと。私たちにはやることはありません。いつまでも立ち止まっついてはなりません」

「…………申し訳ありません」

「では参りましょう。最悪にして最低の一手を打つために…………」

ミルディーヌは艦内部に入つて行つた。

「…………明らかに、無理をなさってますね」

「ああ。私はしばらく、ミルディーヌ様の側にいることにする。

ウオレス、兵士たちへの対応は任せる」

「イエス・ママ」

「魔女殿はもう少し探りを入れてみてくれ」

「わかりました」

オーレリアとウオレスはそれぞれ動き出した。

（それにしても呪いの根源か…………。キリコ君は何と戦おうとしていたのかしら？）

ヴィータはどこかへ転移した。

「なんですか……………それ……………」

「キリコが……………!?!」

「公開……………処刑……………?」

エリンの里

魔女の眷属（ヘクセン・ブリード）の隠れ里にして、初代Ⅶ組のエマ・ミルステインの故郷。

エマの力で黒キ星杯から脱出した初代Ⅶ組と二代目Ⅶ組は里長であるローゼリア・ミルステインに導かれ、エリンの里に身を寄せていた。

里にやって来たユウナ・クロフォード、クルト・ヴァンダール、アルティナ・オライオンは激闘の疲労と教官のライン・シユバルツァーと初代Ⅶ組のミアム・オライオンを失ったシヨックからおよそ2週間近くも目を覚まさなかった。

目覚めた後、ユウナたちはリハビリがてら里の中を歩き、共に脱出してきた初代Ⅶの面々と言葉を交わした。

特に散華したミアムに最も懐かれていた、ユース・アルバレアはひどく落ち込んでいたが、それでも前を向くことを告げた。

ローゼリアのアトリエに戻ったユウナたちは、初代Ⅶ組の面々にラインとオズボーン宰相の関係性を問いつめた。初代Ⅶ組の教官でもあったサラ・バレスタインが逐一全部答えた。

全てを知ったユウナは、もう一度教官を取り戻すことを宣言した。この宣言に初代Ⅶ組も同調し、再び立ち上がった。

その直後、ローゼリアからもたらされた情報に、二代目Ⅶ組は愕然とした。

「これも、知ってたんですか……………?」

「ごめん……………」

「俺たちも知ったのはつい先日のことだった。いや、言い訳はすまない」

エリオット・クレイグとガイウス・ウォーゼルは申し訳なく頭を下げる。

「我らとて嘘だと信じたい。だが……………」

「今日の昼頃に……執行されたって……!」  
ラウラ・S・アルゼイドとアリサ・ラインフォルトは拳を握りしめる。

「エマ君、セリーヌと連絡は取れないのか?」

「もしかして、無理っぽい?」

「ごめんなさい。どうやら、念話も届かない場所にいるみたいです」  
マキアス・レーグニッツとフィー・クラウゼルの問いかけにも、エマは首を横に振るしかできなかった。

「状況は最悪か……」

「そうね。君たち、大丈夫?」

「は、はい……」

ユウナは何とかバランスを保つ。

「呪いに動かされ、贖としての役割を強制されたとはいえ、無罪とまではゆかぬか」

「ッ!」

「おばあちゃんっ!」

「大丈夫……です」

クルトは深呼吸をし、前を向いた。

「それでも、僕たちは行くしかありません」

「はい」

「あたしたち、VII組ですから!それに、キリコ君が死んだなんて信じませんから!」

「僕も同じです。この目で見たわけじゃない」

「わたしもです」

「君たち……」

「とにかく」

ローゼリアは手を叩き、全員を向かせる。

「今日は体も重かろう。今宵はゆっくりと休むがよい。明日からはそなたらをビシバシ鍛えてやるからの」

「鍛える?」

「お前らVII組をな」



アトリエに入ってきたのはⅧ組戦術科担当教官のランドルフ・オルランドだった。

「ランディ先輩！」

「おう。ユウ坊にアルきちにクルト」

「ランディ教官、僕たちを鍛えてくださるんですか？」

「まあな。お前ら、ここんとこ寝てたろ？その分体が鈍ってるだろうからな」

「ちなみに、我らもランドルフ殿に鍛え直してもらったのだ」

「三日くらいかかったけどね」

「そんなことが……」

「どうする？クルト君？」

「聞くまでもないさ。ぜひお願いしたい」

「よし、やってやるわよー！」

「……腹を括りましょう」

ユウナたち二代目Ⅶ組は結束を深めた。

(フッフ、若さじやのう。しかし……)

ローゼリアはアトリエを出た。

(なぜこうも納得ができぬ。あの小僧が処刑台がされたことも、黄昏は起きるまでの過程も)

(まるで、大きな力によって歪められたかのような……)

ローゼリアは空を睨んだ。

その日の夜

「キリコ side」

俺は今、東クロスベル街道外れの掘っ建て小屋で体を休めていた。

(俺の身代わりにされた奴は予定通りに処刑されたらしい。これで俺は公的に存在しないという訳か)

(皇帝を撃った罪で俺は処刑を待っていた。だが数日前にロツチナの手で出された。わざわざ薬で仮死状態にしたということは、オズボーン宰相一派にも内緒でやったことだろう)

(その後俺はロツチナが用意したこの掘っ建て小屋を拠点に奴の

オーダーを聞くことになった。おそらくクロスベルを混乱させることで帝国の眼を逸らさせるのが狙いか)

俺は西の、帝都方面を見つめた。

(あの日、ミリアム・オライオンが黒の聖獣に殺され、ライン教官と灰の騎神が暴走したらしい。暴走の末、黒の聖獣の息の根を止めたことで黄昏が起きた。ライン教官は勿論だが、あいつらは無事だろうか)

俺は冷めてしまったコーヒーを啜った。やけに苦かった。

「キリコ side out」

# 第一章 放浪篇

## 守護者

七耀暦 1206年 8月2日

キリコはクロスベル地下のジオフロントA区域奥深くのセキュリティ端末室にいた。

クロスベル警備隊の服装で。

「キリコ side」

(後はこの偽のデータを送るだけか……)

俺は今、ジオフロントA区域のセキュリティ端末室で作業をしている。

ロツチナからのオーダーはジオフロントA区域のセキュリティ端末室からタングラム門とベルガード門の両方に偽のデータを送信して混乱を起こせというものだった。

それだけなら難なくやれるが、このジオフロントには警備隊や軍警察から集まったレジスタンスが潜っているらしい。おそらく、昨日オルクスタワーでやり合った二人もその一味だろう。

さすがに人数の差がありすぎる。そこで俺はたまたま見張りに出ていたであろう警備隊員を気絶させ、そいつになりました。覆面を被り、警備隊員の持っていた地図を頼りにセキュリティ端末室に到達した。

後はセキュリティを操作し、データを送信するだけだ。

(それにしても、レジスタンスがここまでとはな。おおよそだが人数は総督親衛隊と大差ない。これに民間の協力者も加えれば逆転する、か)

俺は送信を確認し、セキュリティ端末室を出ようとした。

「ずいぶんとナメた真似をしてくれるじゃないか」

「ー」

どうやら潜入は失敗のようだな。

「キリコ side out」

「動くな」

セキユリテイ端末室の出入り口には、スーツを纏い眼鏡をかけた男が大型拳銃を構えて立っていた。

「ここで何をしていた？」

「……………」

「言っておくが、本当に撃つ」

「……………」

「いい度胸だ……!？」

キリコは眼鏡の男が言い終わる前にショルダータックルをぶちかます。眼鏡の男は膝をついた。

「グツ……貴様……!」

「遅い」

キリコはそのまま出ていった。

「逃がすか!」

眼鏡の男は立ち上がり、キリコを追って行った。

「……………」

キリコは眼鏡の男に追われながらも、冷静だった。

(確かこの先は広くなっていたはずだ。そこなら……ッ!)

キリコは急ブレーキをかける。

「見つけた!」

「……………」

キリコの頭上には両手にサブマシンガンを携えた女性警備隊員が待ち構えていた。

「追い付いたぞ!」

眼鏡の男も追い付いた。

「お疲れ様です!ダドリー警部!」

「警備隊のノエル・シーカー三尉か、助かる!」

眼鏡の男——アレックス・ダドリーは息を整え、キリコに大型拳銃

を向ける。降りてきた女性警備隊員——ノエル・シーカーもサブマシンガンを構えた。

「先ほど、気絶した警備隊員が発見されました。あなたが成り変わっているのはすべてお見通しです」

「抵抗するならやむを得んが、少々痛い目に遭ってもらう！」

ダドリーとノエルは戦術リンクを結ぶ。

(やるしかないか)

キリコもアサルトライフルを構えた。

「このー！」

ノエルのサブマシンガンが火を吹く。

「そこだっ！」

ダドリーの大型拳銃から大口径の弾丸が放たれる。

「……………」

だが異能者を相手取るには遅すぎた。キリコには一発も当たらないばかりか、掠りもしなかった。

「は、速い!？」

「クッ……………」

戦況はキリコに傾いていた。

さらにノエルはサブマシンガンや電磁ネットで牽制に回るが捉えられず、ダドリーは大型拳銃やショットガンで狙うも尽く外れた。

対するキリコはアサルトライフルと投げナイフを器用に使い、二人の動きをコントロールしていた。

ダドリーとノエルとて、教団事件やクロスベル事変を経験しており決して弱くはない。

ただ、相手が悪すぎた。

「そこっ！」

ダドリーは狙いをさだめ、引き金を引く。

「……………」

それでもキリコには当たらなかった。

「なん……………だど……………!？」

絶対に当たるといふ確信がダドリーにはあった。だが放たれた弾丸はまるで逸れるように外れた。

キリコは呆然とするダドリーに接近し、ダドリーの腹にボディブローを叩き込む。ダドリーは混乱し、その場膝をついた。

「ダドリー警部!？」

ノエルは思わず動きを止めた。

その隙をついてキリコが接近する。

「ッー調子に……!？」

ノエルはサブマシンガンを連射した。だが一発も当たらなかった。射程範囲内にまで接近したキリコは右手に持ったナイフをサブマシンガンに突き立てた。

「ッーまだ……」

ノエルはもう片方のサブマシンガンを構えようとした。

「……アーマーブレイク」

すかさずキリコは腰のホルスターに装備していたアーマーマグナムでサブマシンガンを撃ち落とす。サブマシンガンは大きく破損し、使い物にならなくなった。

「まだまだっ!？」

ノエルは腰からグレネードを取りだそうとしたが、キリコの手刀で延髄に当て身をくらい、グレネードを起爆させることはできなかった。

「……ッ……!？」

武器を失ったノエルは死を覚悟した。

「……!？」

だがキリコは一瞥しただけで立ち去ろうとした。

「……ま、待ちなさい!!」

一瞬呆然となったノエルがキリコの背中に怒鳴りつける。

「あなたがどこの誰かは知らない。でも、あなたがやっていることはこのクロスベルを永遠に奴隷にする行為なのよ!ここに住んでいる人の気持ちを少しでも考えてみなさいよ!」

クロスベルの守護者。

ノエルはその誇りと想いをぶつける。

「……知ったことじゃない」

だがキリコには響かなかった。

「なっ……!?!」

「俺にはやらなければならぬことがある。帝国もクロスベルもどうでもいい」

「ど、どうでもいい……!?!」

「ただそれだけだ」

キリコは振り返らずにそう言った。

「く……くううう……!」

「……………」

ノエルは悔しさを滲ませ、ダドリーは黙っていた。すると――

「ノエル三尉! ご無事ですか!?!」

「警部! 大丈夫ですか!?!」

通路の奥から警備隊員と警察官が駆けつけて来た。

「皆さん……」

「……こちらは無事だ。目標はやつた」

ダドリーの言葉にその場にいた全員がキリコに銃を向ける。

「逃げられんぞ」

「大人しく観念するんだな」

警察官と警備隊員たちは一歩一歩近づく。

だがキリコにはここに来た目的があった。

「……そろそろか」

「……………何?」

そう言うや否や、キリコは鉄柵を乗り越え、下の貯水槽に飛び込んだ。

「なっ!?!」

「どういうつもりだ!?!」

「……まさか。エマ君、今日は何日だ!?!」

「今日ですか!?! 今日確か、2日……」

「しまったー！」

ダドリーが除きこむと、貯水槽から水が流れ出した。

「総員、急いで港湾地区に急行しろ！やつめ、排水パイプを通って海に逃げる気だ！」

「し、しかし……！あんな所通って逃げられるとは……！」

「何度も言わせるな！追うんだ！」

「りよ、了解！」

警察官たちはすぐさま急行した。

「先に行く。シーカー三尉たちは？」

「私たちはミシユラム方面に向かいます」

ノエルも部下を引き連れミシユラム方面へと向かった。

結論から言えば、死体は上がらなかった。

ダドリーは悔しさに身を震わせると同時に、戦った相手の恐ろしさを肌で感じていた。ノエルは覆面の男から言われた言葉に歯を食いしばっていた。

「キリコ side」

「だいぶ無茶をしたな」

「……………」

「まさかジオフロントから排水パイプを通って脱出するとはな。それでも死なないのは異能者のつらい所だな」

「……………」

俺は今、ロツチナの運転する導力車に揺られていた。

ジオフロントでの戦闘の直後、俺は貯水槽の排水パイプから脱出した。

ジオフロントでは月に一度排水が行われるようになっており、たまにたまその日だった。

だが水の流れが速く、パイプの内面に数回叩きつけられた。

さらに、排水口にはスクリユーがあり、真正面から飛び込めば八つ裂きに遭うのがおちだ。

痛みに耐えながら俺は体を丸め、スクリユーの間をギリギリで潜り



抜ける。その際に背中を少し切ったが、気に留める暇もなかった。

息も絶え絶えに、俺は東クロスベル街道の岸辺に流れ着いた。そこでロッチナに救出された。

応急処置を受け、耐圧服に着替えた後、俺は導力車に乗せられた。

「とりあえず、オーダーは完了。今は寝ていろ」

「どこに連れていくつもりだ」

「ノーザンブリア州だ」

「……なんだと？」

「元ノーザンブリア自治州の州都、ハリアスクより西。そこにノーザンロッジというD∴G教団の施設があった。これからそこに行く」

「……何のためにだ」

「フフフ……」

ロッチナは気味の悪い笑みを浮かべた。

「お前とあの方の因縁は海の如く広い」

「何？」

「さて、そろそろ着く。彼女を待たせてある。行くとしよう」

「待て、俺の質問に答えろ」

「行けば分かる」

どうやら教える気はないらしい。仕方なく俺は窓の外を眺めた。

「キリコ side out」

午後 3:00

キリコたちは東クロスベル街道からアルモリカ古道を抜け、古い遺跡のような場所へとやって来た。

「……はっ」

「太陽の砦。表向きは中世暗黒時代の遺跡とされているが、実際はD∴G教団のロッジなのだ。以前お前が突入した星見の塔やマインツ山道外れにある月の僧院と同時期に建てられたものらしい」

「……………」

キリコはほとんど聞き流していた。

「さあ、あそこだ」

ロツチナの指さす方向には黒い軍用飛行艇が鎮座していた。そしてそこに、キリコに似たショートカットの女性が立っていた。

「待たせた」

「遅かったな」

「そこは目をつぶってくれ。では行くでしょう」

「……………」

(キリコ……)

テイタニアは軍用飛行艇に乗り込むキリコの背を見つめる。

「操縦は任せる」

「……………わかった」

テイタニアはエンジンを始動し、北西へと舵をきった。

「お嬢、錬金術師殿からの次のミッションですが……」

「……………」

一方、近郊都市リーヴス

宿酒場バーニーズにて、トールズ本校の制服に身を包んだシャーリー・オルランドは赤い星座連隊長ガレスの報告を気だるげに聞いていた。

「ゴホン、お嬢」

「あゝ、聞いてる聞いている。それで？」

「……………ノーザンブリアだそうです」

「ノーザンブリアねえ、マリアベルお嬢さんもめんどくさい所選ぶなゝゝ」

「……………心中はお察しします。ですが、あの男は既に処刑され「バリッ」……………失礼」

グラスを握り潰したシャーリーの怒気にガレスは詫びる。

「……………」

シャーリーはそのまま外を眺める。

「今夜、18:00にここを発ちます。後、団長も来られるとのことです。では」

そう言つてガレスは店主のいるカウンターに詫び料込みで1000ミラを置いて行つた。

「……………」

シャーリイはテーブルにつつぷした。

(……………あんなかつこわるい最期……………本当に見損なつたよ……………)

シャーリイの目には、失望の色が浮かんでいた。

午後 7:30

「起きろ、キリコ」

「……………」

いつの間にか眠っていたキリコはロツチナに起こされた。

「フライトは終わりだ。それよりキリコ、あれだ」

「……………」

キリコは目頭をこすりながらロツチナの指さす方向を見た。

そこには荒れ果てたポロボロの寺院が建っていた。

「あれがノーザンロッジだ。七耀教会以前の寺院をD∴G教団の連中が改装したものらしい。もつとも、用があるのは地下研究所だな。いや、実験場と言つた方が良いか」

「……………そうか」

「気にも留めないか。まあいいだろう。テイタニア、あそこに着陸しろ」

「わかつた」

テイタニアは指示通り、着陸した。

軍用飛行艇から降りたロツチナはノーザンロッジに入り、魔法陣のようなものが描かれた壁の前に立った。

「ふむ。どうやらまだ生きているようだな」

ロツチナは壁の数ヶ所を押し込む。

すると、壁が左右に動きだした。

「こんな仕掛けを施しているとはな」

「頭のおかしい連中の考えることは理解できんよ。さて、行くと

「…………どうやら歓迎してくれるようだな」

ロツチナの視線の先には、泥人形のような、亡者のような異形の存在が群れを成していた。

異形の存在はキリコたちの方向に向かって来ていた。

「あれは？」

「教団の実験体の成れの果てだ。自我はとうに失われ、目の前の物を駆逐するだけの人形だ。以前に殲滅したと思っていたが、まだ残っていたとはな」

「…………小さいのもしかしくなくても子どもか？」

「おそろく」

「…………下衆が！」

テイタニアは怒りを顕にし、銃を引き抜く。

「やる気だな。さてキリコ、お前は？」

「……………」

キリコは無言でアーマーマグナムを抜いた。

「聞くまでもなかったな」

ロツチナは下がった。

「…………キリコ」

「？」

「連携してくれ」

「ああ」

キリコとテイタニアは戦術リンクを結び、戦闘を開始した。

## ノーザンロッジ

異形の存在は群れを成して襲って来た。

彼らは元をたどれば、ノーザンブリアや帝国西部から拐われて来た子どもたちや教団の狂信者だった。

それがD∴G教団の非道なる人体実験の末、失敗作の烙印を押されただけか、このような姿へと変貌させられた。

「くらえっ！」

怒りに燃えるテイタニアは異形の存在に弾丸を撃ち込む。急所は普通の人間と変わらないのか、頭部や心臓にあたる部分を撃たれた異形の存在は倒れていった。

「フレイムグレネード」

異形の存在がひとかたまりになった所にキリコのクラフト技が炸裂する。異形の存在は吹き飛ばされ、塵になった。

「さすがだな」

「……………」

戦闘を終え、キリコはアーマーマグナムの弾を補充した。

「それにしても、なぜこんなにいる？」

テイタニアはロッचनाに詰め寄る。

「私にも分かん。かつての殲滅作戦であの者どもは全滅したはずだ。だがまだ生き残りがいるのかもしれない」

「……………」

「とにかく出発しよう。先は長いぞ」

「わかった」

キリコたちは探索を開始した。

「待て」

先行していたテイタニアが待ったをかける。

「どうかしたか？」

「どうやら我々だけではないようだ」

「ふむ？では少し急ぐか。この先は広い造りになっている。そこで様子を伺うとしよう」

ロツチナの言葉にキリコとテイタニアは同意し、一気に駆け抜ける。

そこでキリコたちは足を止めた。

（あれは……）

（赤い星座か）

キリコの指摘どおり、赤い星座の猟兵たちがいた。キリコたちは瓦礫の陰に隠れて様子を伺う。

「やれやれ。こんな場所に何があるって言うんだろ？」

「さあな。連隊長によると、あの錬金術師のお嬢さんからのオーダーらしい」

「無駄口叩くな。俺らは怪しいやつが来ないように見張るのが仕事だ。団長にどやされるぞ」

「了解です、部隊長」

大剣を持った部隊長の男が二人の隊員を諷める。

（六人、内一人が部隊長クラスか）

（瓦礫を迂回して背後から奇襲をかける）

（わかった）

キリコとテイタニアは得物を抜き、猟兵たちに奇襲をかけた。

「なっ!」

「奇襲!」

「チツ！迎え撃つ！」

猟兵たちも得物を構える。

だが奇襲をかけたキリコたちに分があつた。隊員三人はあつという間に失神させられ、残った隊員たちも追い詰められていた。

「クソッ……ん？その髪の色……」

一瞬、部隊長の男が動きを止めた。それを異能者とネクスタントが見逃すはずがなかった。

「合わせろ！」

「わかった」

テイタニアとキリコのリンクアタックが部隊長の男と残りの隊員たちに叩き込まれる。

「がはっ……!」

リンクアタックを受けた部隊長の男は膝をついた。

「お……お前……」

「？」

「副長に知らせ……なきやな……」

部隊長の男はそのまま気絶した。

「赤い星座が入り込んでいるとはな」

瓦礫の陰からロツチナが出てきた。

「先ほどこいつは団長と言ったが、あの闘神も来ているということか？」

「おそらくはな。どうする？キリコよ」

「このまま進む」

キリコは気絶した猟兵たちを脇にどかした。

「そうか。なら腹を括るしかあるまい」

テイタニアも銃に弾丸を装填する。

「フツ、頼もしくて何よりだ。では行こう」

ロツチナはまた歩きだした。

その後、キリコたちは分かれ道へと出た。

「分かれ道になっているのか」

「二手に分かれるしかないな」

「なら俺は左に行く」

「わかった、我々は右に進む。テイタニア、構わんな」

「わかった。キリコ、気をつけろ」

「ああ」

キリコは一人で左に進み、ロツチナはテイタニアを護衛に右に進んだ。

(だんだん見張りが目立つようになったな)

キリコは極力戦闘をかわしながら進んでいた。

その甲斐あって、キリコは弾薬を消費することなく、広い場所に出た。

(そろそろテイタニアたちと合流しても良さそうだが………ツ！)

頭上から殺気を感じたキリコはバックステップでかわす。

「チッ！」

敵は舌打ちをし、ライフルとチェーンソーが一体化した武器を構える。

「その武器……シャーリイ・オルランドか」

「ふーん？ テスタ・ロツサを知ってるんだ？ ならさっさ……と

………」

テスタ・ロツサを振り上げたシャーリイは固まった。

「………え………？」

「？」

「………な………なんで………!？」

「悪いが相手している暇はない。先に……」

「キリコー!!」

「!？」

シャーリイはテスタ・ロツサをしまい、キリコに抱きついた。

「夢じゃないよね?! ホントにキリコだよね?!」

「いいから離れろ」

「あははは♪ ホントにキリコなあ！」

「どうしたシャーリイ？ 何を騒いで……」

奥からシャーリイと同じ赤毛の偉丈夫がやって来た。

そして凍りついた。

「あつ、パパ！」

(シャーリイの父親……赤い星座の団長か)

シャーリイはキリコから離れ、父親の元に行った。

「………」

「パパ？ どうしたの？」

「………シャーリイ………その男は何だ？」



「ああ、そう言えば会うの初めてだよ。彼がキリコだよ」  
「そうか……………お前が……………」

シャーリイの父親は顔を伏せる。

「パパ？」

「……………さんぞ」

「はい？」

「断じて許さんぞ!!キリコ・キュービイイイツ!!」

広間に憤怒と悲壮の叫びが響いた。

「パ、パパ!？」

シャーリイは呆氣にとられた。

シャーリイの父親——シグムント・オルランドは双戦斧と呼ばれる得物を手に強い殺気をキリコに放つ。

キリコは今まで感じたことのない殺気にも係わらず、シグムントを見据える。

「ほう。一応、胆は据わっているようだな」

「あなたに用はない。そこを退いてもらおう」

「貴様……………筋というものを知らんようだな？」

「?」

「挨拶にも来ず、手土産も持たぬ。そんなしれ者の分際で……………」

シグムントはキリコに接近する。

「娘をたぶらかしよつてえええっ!!」

シグムントは双戦斧を振り下ろす。

「何の話だ」

キリコは攻撃をかわし、アーマーマグナムを撃ち込む。

「ぬうっ!どこまでもふざけた奴だっ!」

シグムントはアーマーマグナムの弾丸を防ぎ、双戦斧を投げつけた。双戦斧はキリコの周りを旋回し、ブーメランのようにキリコに襲いかかる。

(話の通じる相手じゃないな)

双戦斧をかわしたキリコはシグムントから一旦距離をとる。

「臆したかあっ!!」

シグムントは双戦斧を両手で振り下ろす。

振り下ろされた双戦斧から衝撃波が放たれた。

「グッ……!」

衝撃波を受けたキリコは背後の壁に叩きつけられた。

さらにその衝撃は天井を崩し、瓦礫がキリコにふりそそいだ。

「フン、他愛のない……」

「ちよつと、パパ!」

「お前は黙っている」

シグムントはシャーリイに背を向け、後から駆けつけて来た猟兵たちを迎える。

「大丈夫か、ザックス」

「面目ありません」

「まあいい。奴も仕留めた所だしな」

「あいつがああキリコ・キュービーだったとして、なんで生きているのでしょうか?」

「さあな………?」

シグムントは気配を感じて振り向いた。

「だ、団長……」

「何だと!」

シグムントとザックスが見たのは、瓦礫の中から立ち上がるキリコの姿だった。

「なぜ立ち上がれる!? あれだけの瓦礫を全て避けたとでも言うのか!」

「キリコはほとんど動いてないよ」

シャーリイが口を挟む。

「パパが破壊した天井なんだけどね、ヒビがキリコの所にはしらなかったんだよ」

「な、なんて悪運の持ち主だ……!」

(悪運? 違う!)

シグムントは冷や汗をかいた。

「だ、団長……?」

「確実に息の根を止めてやる。食らうがいい! クリムゾンフォー……!?!」

シグムントが必殺技を繰り出そうとした瞬間、足元が崩れ、バランスが乱れる。

それにより、シグムントのスクラフトは狙いが逸れ、地面を破壊した。

「くっ!」

キリコはそのまま地割れにのみこまれた。

「キリコ!」

シャーリイはキリコを追って飛び込んだ。

「あつ、副長!」

「もういい!!」

「団長!?!」

ザックスはシグムントの驚愕の表情から目を離せなかった。

「奴の背後と天井の岩盤は周りに比べて硬い。それにより周りだけが破壊され、瓦礫は一発も命中しなかった」

シグムントは先ほど自分が立っていた場所を見る。

「俺が技に入る瞬間、足元が崩れた。それにより狙いが大きくずれた。爆風でダメージは負うが、死ぬことはない」

シグムントは穴が空いた地面に目をやる。

「おそらく、地下に落ちただけで死んではない。地割れにのみこまれることで死ぬ確率は格段に減ったわけだからな」

シグムントは天井を見上げた。

「これが全て偶然か?! まるで何かがああ男を生かそうとしているかのようだ!」

シグムントは双戦斧を握りしめ、吼える。

「さすがの闘神でもキリコを殺せませんでしたか」

シグムントの後ろからロツチナとテイタニアが歩いて来た。

「お前らは、確か帝国政府の……」

「お初にお目にかかる。私はジャン・ポール・ロツチナ。こちらはテイタニア・ダ・モンテールウエルズ」

「……………」

「フン。いったい何の用だ」

「我々はこの研究所の地下に用があるのです。通していただけると」

「別に構わん。さつさと行け」

「では」

「待て」

シグムントは先に進もうとしたロツチナたちを呼び止める。

「何か？」

「あのキリコ・キュービーというガキはいったいなんだ？」

「フフ。人を、神を超えた存在と言えば満足ですか？」

「……さつさと行け」

シグムントは猟兵たちの元へと向かった。

一方、地下

「はあ……はあ……はあ……」

キリコは息も絶え絶えになりながら歩いていった。

（あれが大陸最強の猟兵団の団長……。さすがに危なかった……）

キリコはシグムントから逃れられたことに安堵した。

（しかし、かなり下に落とされたな。まずは上げられる所を……）

「おおい、キリコ〜！」

キリコの後方からシャーリイが駆けつけて来た。

「……………」

「やっぱり無事だったね」

「そうだな」

シャーリイはキリコの全身を見渡す。

「何をしている」

「やっぱりすごいよね。なんであんなに怒ったか知らないけど、パ

パと殺り合って五体満足で生き残れるんだから」

「たまたま偶然が重なっただけだ」

「運も実力の内って言うじゃん」

「……………」

「それはそうと、キリコ」

「？」

「なんで生きてるの？ボロボロで監獄に連行されて行ったのは見たし、処刑の瞬間だつて見届けたよ」

「……………」

「教えてよ、キリコ」

「……………わかった」

キリコはシャーリイに自身がロツチナの手で密かに監獄から出されたこと、処刑されたのはすり替えられた別人であることを告げた。

「そうだったんだ……………」

シャーリイは感嘆した。

「でも良かった…………キリコが生きて…………。あんなみつともない最期、本気で失望したし」

「みつともない？」

「知らなかったんだ？処刑の時のキリコ…………じゃなかった、ニセモノは涙と鼻水垂れ流して、往生際がほんつとに悪かったんだから」

「……………」

「じゃあさ、本物のキリコは何してたの？」

「…………クロスベルにいた」

「へえ、クロスベル。じゃあ、特務支援課のお兄さんたちに出った？」

「そこまではわからない」

「そっかあ」

シャーリイは両手を頭の後ろで組んだ。

「そろそろ行くぞ」

「はい。あつ、それでなんだけどさ」

「なんだ？」

「さつき向こうに扉があったんだけど、変てこな文字が書いてあつてさ。進めないんだよね」

「……どこだ？」

「こっちだよ」

シャーリイに案内され、キリコは大きな扉の前に立った。

「変てこな文字とは？」

「ここだよ」

「……」

キリコはシャーリイが指さす場所を見た。

(これは……!?)

キリコは驚愕した。見覚えがあるどころか、完全に理解できる文字だった。

「どしたの？」

「……扉を開くプロセスのようだ」

「え!? 読めるの!?!」

「……」

キリコは書かれている文字の通りに側にあつた機械を起動させる。(まさか……この世界で標準アストラード語を見ることがになるとはな。ロツチナの言うとおり、ワイズマンと何かしら関わりがあるようだな)

「………ねえ、キリコ」

「なんだ？」

「異能者って、何？」

「……」

キリコの手が止まる。

「………ロツチナか？」

「ううん………。鉄血のオジサンが言った」

「………俺は普通の人間じゃない」

「え……」

「さて、開くぞ」

キリコの言葉どおり、扉が開いた。キリコはそのまま入って行っ

た。

「あつ、ちよつと待つてよー！」

シャーリイはキリコを追って行った。

「何(なに)……」

「……………」

そこには巨大な水槽のようなものが並んでいた。

「前に行った黒の工房に似てるなあ」

「黒の工房？行ったことがあるのか？」

「うん。猟兵団なんかにも武器を卸しててね。あたしのテスト・ロツサやランディ兄のベルゼルガーも黒の工房製だよ」

「そうか(ロツチナやあの道化師の話だと、フルメタルドッグのような実験用機甲兵。そしてアルティナやミリアムを造った所らしいが)」

「でもカラッポだね。何容れてたんだろ？」

「…………どうせろくな物じゃない」

「そだね」

キリコたちはさらに奥へと進む。

「ここは…………」

「本がたくさんあるね」

キリコたちがたどり着いたのは、資料室のような部屋だった。

「遅かったな」

ロツチナとテイタニアが本棚の陰から現れた。

「ほう、紅の戦鬼も一緒とはな」

「まあね」

「まあいい。それよりキリコ。お前を連れてきた目的はここだ」

「……………ここはやつの息がかかっているんだらう？」

「なぜそう思った」

「この世界に標準アストララーダ語が存在するわけがないだらう」  
「標準…………アストララーダ語？」

「お前はキリコや私たちが転生したというのは知っているか？」

「うん……鉄血のオジサンが言ってたけど……」

「その転生してきたアストラギウス銀河で使われている言語が標準アストララーダ語だ。キリコは勿論、私やロツチナも解読できる」

テイタニアはシャーリイに説明した。

「なんだか難しいね」

「すぐに理解しろとは言わん。キリコ、その分厚い本があるだろう。読んでみるといい」

「……………」

キリコはロツチナの指す分厚い本を本棚から取り出す。

古い机に広げ、ページをめくる。

「!？」

キリコは目を見開く。

「さすがに驚くか」

「キリコ、何が書いてあるのだ」

テイタニアも横から本を覗き込む。

「……………」

テイタニアは沈黙した。

そこには、キリコの顔が挿し絵として載っていた。

「D…G教団……」

ロツチナはおもむろに口を開く。

「大陸各地から子どもを拐い、秘薬や機械を用いて人体実験を繰り返してきた。その目的はそこにあるように異能の開発。そして目指したのは超人を作り出すことだった」

「すなわち、異能者キリコ・キュービイーを作り出すことだ」

「……………」

話に追いつけないシャーリイは絶句するしかなかった。

「用いられたグノーシスという秘薬は人間のあらゆる感覚を何倍にも引き出すという。だが強すぎる力に耐えきれず自我を失い、失敗作



として怪物となった。その末路がああ異形の存在なのだ」

「連中は異能生存体を作ろうとしていたのか？」

「そうだろうな。だがお前も知るとおり、異能生存体は確率250億分の1で誕生する遺伝子だ。突然変異とも呼べるものをこの世界のレベルで作りに出すことなど不可能だ」

「……にもかかわらず、連中はそんな妄想に駆られていたのか」

「言っただろう。頭のおかしい連中のことは理解できんと」

「あのみさあ」

シャーリイが口を開いた。

「何かな？」

「連中の頭がおかしいってのはとつくに知ってるけどさ。なんでキリコが関わってくるのさ？」

「ほう？」

「だって連中は幻の至宝の復活が目的でしょ？まあ、特務支援課のお兄さんたちに食い止められちゃったけど」

「それはクロイス家に近い、言わば本流のことだろう。我々がいるノーザンロッジはそこから分派したロッジなのだ」

「へえ」

「私が調べたところによると、ここの連中は幻の至宝復活に早々に見切りをつけたようだ。その後、一人の錬金術師が啓示を得たらしい。そこから連中は死なない人間の研究を始めた」

「死なない人間……」

「お前も知っているだろう。弾丸を何発受けても死なず、僅かな間で復活した人間を」

「それが……キリコ……？」

「……………」

キリコは黙ったまま、ページをめくっていた。

「死なないと一口に言っても、それは強靱な生命力によるものだったり、偶然起こり得ることだったりするがな」

「先ほど闘神の足元が崩れただろうか？」

「うん。も、もしかしてあれはキリコが起こしたの!？」

「いや、異能者にそんな力はない。そもそも異能の発動条件は死の一步手前でなくてはならんようなのだ」

「死の一步手前……」

「そうだ。逆に言えば、そのレベルでなければ発動はしない」

「以前、私はキリコと戦ったことがある。第三者の手が入ったとはいえ、私はキリコを瀕死にまで追いつめた。その時だ、意識も朦朧となっっているキリコの放った弾丸が私の乗る機動兵器の亀裂の僅かな隙間を抜け、私に着弾した」

「なにそれ……」

テイタニアの話にシャーリイは茫然自失となった。

「キリコの意志とは無関係に発動し、因果すらねじ曲げる。それがキリコの異能なのだ。だから死なないというより、むしろ死ねないといった方が適切だな」

「すごいな……キリコ……」

「忌々しいだけだ」

キリコの言葉に怒りがこもる。

「え……?」

「俺は死ぬことが許されない。永遠にな」

「キリコ……!!?」

突如、背後の壁が崩れる。

「副長、ご無事ですか!？」

「あ、ザックス」

「やれやれ、時間切れか」

「そう言えば、お前たちはなぜここに?」

テイタニアはシャーリイに聞いた。

「うん。マリアベルお嬢さんからの依頼でさ。ここを跡形もなく破壊してきてって」

「根源の錬金術師、マリアベル・クロイスか。では脱出しよう。キリコ、その本はお前が持っている」

「……ああ」

「そんなじゃ、行くつか！」

キリコたちは赤い星座と共にノーザンロッジを脱出した。

その後、ノーザンロッジは赤い星座により跡形もなく破壊された。生存していたキリコを見たシグムントは憤怒の形相で詰め寄るが、シャーリーの「パパのこと、嫌いになっちゃうよ？」の一言で硬直し、すくすくこと引き下がる。

「これからどうするの？」

「さあな」

「あのさ……」

シャーリーはキリコの目を見る。

「キリコ、あたしと契約しない？」

「契約？」

「キリコって呪いの根源ってやつと戦うんでしょ？」

「そのつもりだ」

「その時にあたしも協力するってのはどう？」

「ちよ!?!副長!?!」

「みんなも聞いて。このままだと、世界が終わるんだって。そしてらあたしたちどうなる?」

「そりゃあ……」

「戦いがなくなったら、ゴハン食べられなくなるよ？」

「まあ……そうですね」

「まっ、西風のオジサンの受け売りなんだけどね」

「つまり、その呪いの根源とやらを倒すことがウチにとってメリットになるといふことですか?」

「そういうこと」

シャーリーは懐から蠍座のペンダントを取り出す。

「これは契約の証ね」

「? 返した覚えはないが」

「リーヴスに行った時に衛士隊が押収したのを手に入れたの」  
「衛士隊が?」

「リーヴスは衛士隊が接收してるの。それで第Ⅱ分校は今、衛士隊の基地になってるの」

「セドリックも許したのか？」

「やむなくって感じだね。でも少し前に衛士隊の一人が振る舞いに抗議した町長だか住民だかに暴行したらしくてね。それであの皇子様もプッツン寸前なの」

「そうか……」

「副長、そろそろ出発するそうです」

「はい。それじゃ、またね♪」

シャーリイはキリコにペンダントを握らせ、去って行った。

(ノーザンブリアに連れて来られたと思ったら、面倒なことになってきたな)

「紅の戦鬼との契約か。少なくともこちらにメリットはあると思うがな」

「……………」

「それより、行くのか？リーヴスに」

「……………」

キリコは無言で頷く。

「なら、魔煌機兵を取り寄せよう」

「魔煌機兵、だと？」

「その方がギリギリまで気づかれないだろうし、向こうも暴走したと認識してくれるはずだ」

「暴走……」

「魔煌機兵はその特性上、パイロットの精神汚染をきっかけに暴走を引き起こしかねん。お前の精神力ならのみ込まれる心配はないだろうがな」

「……………」

「私とテイタニアは表向きの仕事でルーレに行かねばならん。東リーヴス街道まで連れて行ってやろう」

「わかった」

キリコたちは軍用飛行艇に乗り込んだ。

(どこもかしこも戦いばかり。これもワイズマンが望んでいることだろう。やつを殺すために大きな戦いが必要なら俺は喜んでその引き金を引こう。全てに憎まれようとも戦い続けよう。そして、いつかは……)

## 乱雲

七耀暦1206年 8月4日 早朝

近郊都市リーヴスに赤黒い機動兵器の一団が向かっていた。

【後少しですね】

【ああ。それにしても、あの町の人間はどうなっている。我々を軽んずるようなあの態度は】

【リーヴスの町長はかつて有った男爵家の家臣らしいですが】

【その男爵というのは？】

【なんでも、詐欺師に騙されて何もかも無くした挙げ句、犯罪者にまで落ちぶれたとか】

【フン、そんな家の関係者なら礼儀がなっていないのも頷けるな。伝統あるトールズの二番煎じの者共を含め、ろくでもない街だ】

【全くですね】

一団の隊長格と副官はそんな話をしながらリーヴスに向かっていった。

【そう言えば隊長】

【なんだ？】

【あの新入りのことですが】

【ああ、上からの推薦らしいが、どうかしたのか？】

【妙だとは思いませんか？】

【妙、とは？】

【作戦開始のギリギリで参加が認められたということですよ。しかも顔中傷だらけのためとはいえ、覆面で顔が見えないとききました】

【確かに。だが我々の任務はリーヴスを制圧し、反乱分子を根こそぎ捕らえることだ。時間が惜しい今、そちらのことは後回しだ】

【……分かりました】

【よし、後少しで到着する。総員、気を……【隊長！】どうした!?!】

【新入りの動きに異変が!】

【なんだと!?!】

隊長格の乗る魔煌機兵メルギアが振り向いた瞬間、後方で爆発が起

きた。

【もう少しか】

ロツチナから回された魔煌機兵ゾルゲに乗り込んだキリコは二十機の魔煌機兵の一団の最後尾にいた。

【ロツチナによると、こいつらはリーヴスに乗り込んで数の暴力で住民を纏めあげるつもりらしいが……】

キリコはモニターと地図を見ながらプランを組み立てる。

【暴走に見せかけるなら………今だ！】

キリコは前方のゾルゲに狙いを定め、操縦桿のトリガーを引く。

【な、なんだ貴様!? うわあああつ!?】

前方のゾルゲがエンジンを撃たれ、爆発した。

【始めるか】

キリコは一度深呼吸をし、頭を切り換える。

【キリコ side】

【クソツ、冗談じゃないぞ！】

【リーヴスは目と鼻の先だつてのに！】

【隊列を乱すな！ 囲んで一気にねじ伏せろ！】

魔煌機兵の一団は混乱を極めた。

俺は手当たり次第に銃撃を叩き込む。周囲の魔煌機兵は反応が遅れ、次々に倒れていく。

魔煌機兵の武器は特殊な造りになっており、念じるだけで威力が上がるらしい。ただし、それをやればやるほど精神が乗っ取られ、暴走に至るとのことだ。

もつとも、俺には必要のないことだが。

【た、隊長！ 半数以上がやられました！】

【チー！ 仕方ない、リーヴスとグレンヴィルから援軍を要請しろ！】

【グ、グレンヴィルからもですか!?!】

【さっさとしろっ！ ここで挟み撃ちにするっ！】

【りよ、了解しました！】

チャンネルがオープンになっているのか、会話がだだ漏れだ。どうやら援軍が来るようだ。

【なら、ここをかたをつける】

俺はゾルゲのアサルトライフルを交換し、隊長格のメルギアに狙いを定める。

【クソッ！】

メルギアも応戦の構えをとるが、あまりにも遅い。

【させるか！】

数機のゾルゲがメルギアの前で壁になる。

【お前たち!?!】

【下がってください！ここは我々が！】

【コントロールも出来ず、暴走するような役立たずは……ここで！】  
ゾルゲの機体から黒いオーラが噴き出す。

【こいつらもイプシロンと同じか……】

相手が何をしようと関係ない。

立ちはだかるなら叩き潰すまでだ。

俺は数機のゾルゲを相手取った。

【キリコ side out】

【それは本当ですか!?!】

「うん。衛士隊の分隊がリーヴスを無理やり従わせようと魔煌機兵で乗り込むとか」

【なんとということ……】

「さ・ら・に・今、東リーヴス街道で魔煌機兵同士ドンパチやってるんだって。しかも演習とかじゃなく、魔煌機兵の暴走が原因みたいだって」

【……………】

少し前、近郊都市トリスタにあるツールズ士官学院本校。

生徒会室にてシャーリイからの報告を聞いたセドリック・ライゼ・

アルノールはその内容に頭を抱える。

【で??.どうすんの?】



「…………仕方ありません。彼らはここで切るしかないようです」  
「切るったってどーすんの？」

「幸い準備は整ってます。エイダ、フリッツ」

「はっ」

セドリツクの言葉に、エイダ・グラントとフリッツ・ガイトナーが生徒会室に入って来た。

「後三十分以内に全生徒をアイゼングラーフ号に。これよりリーヴスに向かう！」

「イエス・ユア・ハインス！」

エイダとフリッツは生徒会室を飛び出して行った。

「なるほどね。自分の肩書きを使って直接乗り込むってわけか。お坊ちゃんにしてはなかなかやるじゃん」

「あはは……お坊ちゃんはよしてくださいます」

セドリツクは思わず苦笑いを浮かべる。

「それよりさ、あれは使うの？」

シャーリイは険しい顔をセドリツクに向ける。

「…………緋の騎神テストロツサですか」

「どーなの？」

「…………以前の僕なら躊躇いなく召喚していたでしょう。ですが、それでは意味がない。あくまでも僕自身が出なければなりません」

「ふーん？」

「僕は近い将来、リンさんを含むⅦ組と刃を交えなくてはならない日が来ます。それまではテストロツサは使いません。そう決めました」

「へえ、わがままいっぱいのお坊ちゃんだと思ってたけど、そう言うこと言えるんだ？」

「はあ、僕をなんだと思ってたんですか……」

「調子こいて大口叩いて分校に乗り込んでって逆に返り討ちに遭ってズタボロにされたお坊ちゃん」

「……………そこまで言わなくても良いじゃないですか。まあ、あれがなかったら僕も成長できなかったのも事実ですが」

「やっぱりキリコのおかげ？」

「ええ」

「そっか。じゃ、あたしも行くね」

シャーリイは生徒会室を出ていった。

(シャーリイさん、ノーザンブリアにあつたという教団のロッジから帰って来て妙に機嫌が良いんだよな。何かあつたんだろうか……) セドリツクは首をかしげながらも、トリスタ駅を目指した。

【ば、馬鹿な……】

一方、東リーヴス街道。

隊長格の男は目の前の光景が信じられなかった。

魔導の力を発揮したゾルゲが素のゾルゲに一機残らず倒された。

【あ、あり得ぬ……！こ、こんなことが……！】

【……………】

キリコの乗るゾルゲはメルギアに狙いを定める。

【ク、クソッ！こんなはずでは……】

メルギアはキリコの乗るゾルゲの銃撃を受け、爆発した。

【……………？】

キリコが一息ついた瞬間、モニターに敵影の反応が映る。

【早いな。リーヴスからの援軍か】

キリコはゾルゲを操作し、近くに落ちていた未使用のアサルトライフルを装備する。

その僅か数分後、三十機の魔煌機兵がキリコの乗るゾルゲを囲うように陣形を形成する。

【チッ、役立たずのウスノ口共が】

【ただか一機のゾルゲに手間取るとはな。恥を知れ、恥を】

【まあいい、くだらない騒ぎもここまでだ。叩き潰してやれ！】

周囲を囲っていたゾルゲが一斉に襲いかかった。

【……………】

危機的状况にもかかわらず、キリコは冷静だった。

キリコは左右の操縦桿を互い違いにし、機体をスピンさせる。そし

て操縦桿のトリガーを引く。

【ぐわっ!?】

【おのれ……!】

第一陣のゾルゲの隊列が乱れる。キリコはその隙を逃さず特攻する。

【なめるなっ!】

数機のゾルゲが大剣を振るい、キリコの乗るゾルゲに襲いかかる。だが掠りもしなかった。

キリコの乗るゾルゲはローラーダッシュで回り込むように避け、背部エンジンに銃撃を叩き込む。

間髪入れず、アサルトライフルを構えていたゾルゲの脚部を撃ちこみ、転倒させる。

さらに、ブレーキを巧みに使い、ゾルゲの同士討ちを発生させた。

【馬鹿な……】

【こども易々と……】

【ば、化物か……!】

リーヴスからの援軍として駆けつけた部隊にもはや戦意などなかった。

【……………】

だがキリコは手を抜かなかった。

茫然とするゾルゲの背中に容赦なく銃撃を浴びせる。

一機、また一機とゾルゲが倒れていった。

【粗方片付いた。後は……いや、まだか】

リーヴスの方向から三十機の魔煌機兵の一団が向かって来た。

【前から三十。方向からしてグレンヴィルからか。そして……】

キリコの乗るゾルゲの後方からさらに二十機の魔煌機兵の一団が到着する。

【おのれ……ふざけた真似をしよってからに!】

【……………】

【見たところ暴走してはいない。貴様、初めから……!】

【……………】

【全機、攻撃開始！絶対に殺せ!!】

『ハッ!!』

メルギアから発せられた怒りの号令に魔煌機兵が動き出した。

「へえ？朝っぱらからドンパチやってるんで様子を見に来てみりや……」

キリコが戦っている場所から少し離れた場所から白髪の男が戦いの様子を窺っていた。

「まさか魔煌機兵同士で殺り合ってるとはな。しかし……」

白髪の男は倒れている魔煌機兵を見つめる。

「今戦ってるのが五十、いや四十機。んで倒れてるのが六十機。このまま最後までやりやトータル百機か」

白髪の男は思わずニヤリと笑う。

「素のゾルゲに乗ってるのは間違いないアイツだな。やれやれ、リインの奴もとんでもない野郎を生徒に持ったもんだな」

「そうね」

白髪の男の背後から蒼いドレスの女が現れる。

「よお、久しぶりだな、ヴィータ」

「本当にね……クロウ」

ヴィータは白髪の男——クロウ・アームブラストを見つめる。

「記憶、戻ったのね」

「まあな。しかし、大したモンだよな」

「ええ。まさかここまでとは思わなかったけど」

ヴィータは魔煌機兵を次々に仕留めていく光景にため息をつく。

「にしても、だ。アンタ、あのカイエン公の協力者なんだろ？なんだってここに？」

「キリコ君の存在は貴方が考えているより重要なものよ」

「確かに……あれだけの腕なら引く手あまただろうよ。だが大丈夫なのか？どう見てもアイツは人の下に付くタイプじゃねえだろ。いくらカイエン公や決起軍とやらが欲しがっててもムズいだろ」

「クロウ、貴方大事なことを見落としてるわ。今代のカイエン公爵

は女よ？」

「女？……マジで？」

クロウは女という単語からある答えを導き出す。

「フフフ、カイエン公はキリコ君に恋しているのよ。先日、やっとデートに誘えたようだけど」

「……なるほどな。だが連れてってどうするつもりだ？俺は二年前に緋の騎神に殺られてるし、アイツも公開処刑されたことになってる。言わば公的には存在しない人間だ。会わせたとこでハッピーとは限んねえだろ。むしろバッドエンドだろうよ」

「今は置いといていいの。私が聞きたいのはキリコ君の目的。呪いの根源が何なのかよ」

「ちようど良い機会かもな。俺も同行する」

「クロウも？」

「ああ。オルディーネに関係あることかもしんねえしな」

「……わかったわ」

クロウとヴィータは頷き合い、再びキリコの方角を見た。

「あ……あ……あ……」

メルギアに乗る指揮官は震える。

彼の目には魔煌機兵が悉く破壊された光景が映っていた。

「あり得ん、あり得ん！こ、こんなことが……！」

「……………」

「なぜ……このようなことを……。我々は帝国の、正義を成そうと……」

「……………」

「なぜ……だ……」

「知るか」

「な……に……？」

「命令を疑うことなく遂行するお前たちは軍人としては正しい。だが、全部が正しいわけではない」

「貴様……！」

【これで終わりだ】

キリコはゾルゲのアサルトライフルの銃撃を浴びせ、メルギアに接近する。そのままシヨルダータツクルと右アームのパンチを叩き込む。

反応が遅れたメルギアはなすすべなく攻撃に晒される。

【こ、この戦法……どこかで……まさか……】

指揮官はゾルゲの一連の動きから絶対にあり得ない結論を導き出す。

キリコの乗るゾルゲはメルギアの背中に回り、狙いを定める。そしてトリガーを引く。

【貴様は……キリコ・キュービ……！】

確信した指揮官はその名を呼ぼうとした。だが言い終わる前に機体は爆発し、彼の意識は途絶えた。

【……………】

キリコはゾルゲの自爆装置をセットし、機体から降りようとした。

【待て！】

【!?】

響いてきた声にモニターを見ると、そこには赤いシユピーゲルSがサーベルを手に突進してきた。

ゾルゲはローラーダツシュで辛うじて回避した。

【トリスタからアイゼングラーフ号で駆けつけてみれば、こんなことになっていたなんてね】

赤いシユピーゲルSに乗るセドリツクが周囲を見渡した。

【君がどこの誰かはこの際問わない。大人しく投降してもらいたい】

セドリツクは投降を呼び掛けた。

【……………】

キリコは敢えて無視した。

【答える気はないか。ならば、仕方がない】

シユピーゲルSは得物のサーベルを目の前に掲げる。

【エレボニア帝国皇位継承者、セドリック・ライゼ・アルノールの名の下に拘束する！】

そしてサーベルを構えた。

【自爆装置は既にセットしている。十分以内にかたをつける】  
キリコは操縦桿を握りしめる。

【ハアアアアッ!!】

シュピーゲルSはゾルゲに突きを連続で打ち込む。

【クッ！】

サーベルの連続突きを集中的に受けたゾルゲの右アームは破壊される。

メルギアを含めた魔煌機兵百機を相手にしたゾルゲは限界だった。そこでキリコは回避に専念し、来るべきチャンスを待っていた。

【何か狙っているな。だが関係ない！】

シュピーゲルS追撃の手を緩めることなく、ゾルゲの装甲を削る。

【後少し……】

装甲のほとんどが削られ、裸同然となったゾルゲだが、キリコは諦めてはいなかった。

【これで最後だ！メルトスライサー！】

シュピーゲルSは焰を纏わせたサーベルの斬撃をゾルゲに浴びせる。

【今だ！】

ゾルゲは突き刺さっていた大剣を引き抜き、シュピーゲルSの頭部めがけて特攻する。

【クッ！】

セドリックもゾルゲのカウンターアタックにも構わず操縦桿を握りしめる。

ゾルゲの大剣がシュピーゲルSの頭部をはね飛ばす。

【うおおおっ！】

頭部を失ったにもかかわらず、シュピーゲルSのサーベルがゾルゲのコックピットを貫く。

【!?】

その直後、ゾルゲは爆散した。

【自爆!?】

セドリツクは目を見開く。

ゾルゲは完全に判別がつかなくなっていた。

【愚かな……自爆して果てて……そんなこととして何になるというんだ!】

セドリツクはシュピーゲルSのパネルに両手を叩きつけた。

(あの魔煌機兵の動き、やっぱり来てたんだね。それにお坊ちゃん  
は気づいてないようだけど……)

シャーリイは自爆寸前にゾルゲから青い光が発していたことを見  
逃さなかった。

その後、リーヴスはセドリツク率いるトールズ本校の指揮下におか  
れた。

セドリツクはリーヴスの住民全員の前で謝罪し、衛士隊は一人たり  
とも街に入れないこと、地理的重要性からTMPを置くことを表明し  
た。

「……………?」

キリコは気がつくのと、違和感を覚えた。

「よお、元気そうだな」

「……………」

キリコは声の主を見つめる。

「つたく、本当にギリギリだったんだぜ? ヴィータが転移の秘術を  
使わなきゃあのまま死んでたんだぞ?」

「……………」

「とりあえず、立てるか?」

声の主は手を差し出した。

「……………」

キリコは無言で立ち上がる。

「返事くらいしても良いだろうが。つたく、リインはどんな教育し



てたんだ?」

「……じゃあな」

「おう、元気で……って、違えよ!人の話くらい聞けや!」

「……確か蒼のジークフリード、だったか」

「あゝゝゝ、それは忘れてくれ。何気に黒歴史なんぞな」

「あら、私は良いと思うわよ」

岩陰からヴェイターが出てきた。

「クロウよりカツコよかったりしてね♪」

「だあつ!マジでハズイんだって!」

「……………」

キリコは二人のやり取りを見せられ、呆れていた。

「それで、何の用だ?」

しびれを切らしたキリコが口を開く。

「ああ、そうだったな。まあ、まずは自己紹介といくか」

クロウは前が出る。

「二応、はじめましてだな。クロウ・アームブラストだ。よろしくな」

「ああ。それでここは?」

キリコは辺りを見渡す。そこは東リーヴス街道のただっ広い平原ではなく、鬱蒼とした森林地帯だった。

「ここはクロイツェン州にあるルナリア自然公園よ。ここは霊力が集まりやすいから転移してきたのよ」

「……そうか」

「さっそくなんだがよ、お前さんの知ってることを話してもらえねえか?」

「……………」

「キリコ君、君がこの帝国の呪いの根源と戦おうとしていることは知ってるわ。そのために君があのアッシュ・カーバイド君の身代わりになったってこともね」

「……………聞いてどうする」

キリコは二人を見据える。

「私たち魔女の眷属はね、大昔から呪いについて学んできた。そして呪いに突き動かされて、多くの人々が愚行を犯してきたのも知っている。でも、誰も手出しはできなかった。手を出せば、さらに大きな悲劇を生むから……」

「……………」

「でも、その負の流れを断ち切る唯一の可能性を持つ君の力が必要なのよ。この国を……いえ、この世界を終わらせないためにも」

「……あんたは？」

「俺にとっても無関係じゃねえ。コイツの起動者に選ばれたからな」

「……あの蒼い機影か？」

「おお。ちよつと離れてな」

クロウはキリコとヴィータが離れたのを見計らい、右手を高く突き上げる。

「来な、蒼の騎神オルディーネ！」

クロウの背後に蒼い騎士人形が顕れる。

「さて、そろそろ話してもらえるか？」

「……………」

「キリコ君」

「……わかった」

キリコはクロウとヴィータに知っていることを全て話した。

「……………」

オズボーン宰相からある程度聞いていたクロウと違い、初めて聞くヴィータは口を開けなかった。

「二応、これで全てだ」

「予想外にもほどがあるわね……。異世界から転生を果たしたってこと、不死身の異能を宿していること。そして人の犯す最大の罪……神殺しを為し遂げるなんてね」

「鉄血の野郎も言ってたが、そいつが全部関わっているんだな？」

「確証はないがな」

「……わかったわ。ありがとう、話してくれて」

「別にいい」

「ただ、これだけは答えて」

「？」

「キリコ君は、後悔しない？全てに憎まれ、怨まれながら生きること  
に」

「俺は戦いから逃れることも安息を得ることも許されない。生きて  
いる限りな」

「そう……」

ヴィータは顔を伏せる。

そしてキリコの左頬を思い切り叩く。

「!？」

「ヴィータ!？」

「これはあの子の分よ。残りは本人から受けなさい」

「……………」

「君が公開処刑されると聞いた時、あの子、本当はすぐにでも君を助けに行きたかったでしょう。でもできなかった。世界の終焉に立ち向かうために、最悪にして最低の一手を打つために動くことができなかった」

「その後……………泣いてたわ」

「……………」

「キリコ君がワイズマンと戦うのは運命かもしれない。それは全てとひきかえにしなくちゃ為し遂げられないのかもしれない。でもね……………」

ヴィータはキリコの目を見る。

「君のことを本当に想っている子がいる。それだけは忘れないで」  
ヴィータはキリコに背を向けてどこかへ転移して行った。

「……………とりあえず、よ。お前さんは一人じゃねえってこった」  
クロウはオルディーネに乗り込む。

【じゃあな】

クロウに乗せたオルディーネもどこかへ飛び去って行った。

「キリコ side」

(本当に想っている……か)

ヴィータに言われたことを反芻した。

(あいつの、ミュゼの態度はそういうことなのだろう。俺は感情がわからないわけじゃない。だが……)

俺は空を見上げた。

(俺は誰かを幸せにすることはできない。生きている限り、戦いから逃れられず、一時の安らぎすら許されない俺には……)

俺は歩き出した。

その先にやつが、ワイズマンがいることを確信して……。

「キリコ side out」

牙

七耀暦1206年 8月5日

リーヴスの戦いから一夜明けた。

キリコはクロイツエン州は交易都市ケルディックにいた。

「キリコ side」

ヴィータ・クロチルダの手によりクロイツエン州に飛ばされた俺は近隣にあるケルディックで身を休めることにした。

ここ、ケルディックは交易が盛んで月に一度開かれる大市が有名なしい。

だが2年前の内戦で先代のアルバレア公爵の私兵のクロイツエン領邦軍と北の猟兵の焼き討ちにより灰となった。

その後、領主代行のユーシス・アルバレアの尽力により、元の状態にまで戻ったという。

「ねえ、知ってるかい？バートラーさん」

「？」

ちなみに俺は今、エイジ・バートラーと名乗っている。

「なんかリーヴスってところで、テロリストが好き勝手してたんだってさ」

「……テロリスト？」

連中はれっきとした衛士隊だったはずだ。

「それを皇太子様がツールズの子たちを引き連れて乗り込んで行って、鎮圧したんだよ」

「……そうなのか」

「あんたねえ、帝国時報くらい読まなきゃダメよ。今にあたしの知り合いみたいにならしない人間になっちゃうよ」

「……………」

「まあ、読んでみなよ」

風見亭の女将から渡された帝国時報に目を通す。

そこには女将の言うような内容が書かれていた。

なお、魔煌機兵百機全てをセドリック率いるツールズ本校生徒たちが鎮圧したことになっている。

「そういやあんた、ここいらじや見ない顔だね。どっから来たんだい？」

「……帝都からだ」

「ふーん？まあいいさ。それにしても……」

女将は窓の外を見る。

窓の外では比較的若い者たちが決起集会のようなものをやっていた。

「困ったもんだよ。戦争が始まるかもってなってからああなんだ」

「戦争を知らない。そんな感じだな」

「そりやそうだよ。百日戦役の時はあの子たちががきんちよの頃だもの。2年前の内戦の時だって逃げ隠れてたんだから」

「……………」

呪いというのはここまで人を駆り立てるようだ。

「まったく……元締めが生きていれば……」

「元締め？」

「おいおい、兄ちゃん。元締めつつたら、オットー元締めに決まってるんだろ」

横から農夫のような男が話しかけて来た。

かなり飲んでいるらしく、酒臭い。

「生きていればという事は……」

「ああ……焼き討ちの時にね……」

「そうか」

「何もかも貴族が悪いっ！」

農夫の男がジョッキを叩きつける。

「あいつらは俺らを苦しめることしか頭にないのさ！到底払えないような税をかけたし、商売を邪魔するし、オットー元締めのような人格者だって平気で殺せるんだ！」

「……………」

「跡を継いだっていうのも同じさ！そのうち先代と同じことをする

だろぅさ！貴族様つてのは産まれた時から神様なんだからな！」

「ちよつと！あんた飲み過ぎだよ！ほら、そこの部屋貸してあげるから横になりな！」

「……ヒック。元締めえ……」

農夫の男はそのままカウンターに突っ伏して寝た。

「悪いね。この人は元締めを尊敬してたから。でもアルバレアの若殿様だつて直々に謝罪に訪れてくれたし、今までの税やらなんやらも全て清算してくれたしね。さすがサラちゃんが率いていたツールズVII組だよ」

「……………」

俺はミラをカウンターに置く。

「あら、もう良いのかい？」

「コーヒー、旨かった」

俺は風見亭を出た。

その後俺は決起集会を行っている連中を横目に、大市で薬や食糧を調達した。

「へえ、兄ちゃん帝都から来たんか」

「ああ」

「せやったら兄ちゃん、うちの娘を知らんか？」

「娘？」

「ベツキー言うてな。この間の夏至祭から行方が知れんねや」

「さすがにわからないな」

「そうか……。兄ちゃん、もし会うことがあったら心配してたつて伝えてくれへんか？」

「わかった。会うことがあればな」

「すまん兄ちゃん。このフルーツバー？とか言うのおまけにつけるさかい」

「悪いな」

「そう言えば兄ちゃん、どこかに行くんか？」

「……バリアハート方面だ」

「そうか。ま、気いつけてな」

俺は店主にミラを払い、東口からケルディックを後にした。

「キリコ side out」

ケルディックを出たキリコは、東にある翡翠の公都バリアアハートを目指していた。

(やはり馬を借りて正解だったな。それにしても……)

キリコは先ほど戦闘を行った魔獣が気になっていた。

(さっきの魔獣はそれほど強くはない。むしろ弱小の部類に入る。だが先ほどの戦闘では少してこずった。まるで突然強くなったかのようだ。これも呪いによるものなのか)

キリコは地図を見ながら推測をした。

(……とにかく、バリアアハートに行ってみるか。休憩をはさみながらなら1時間と少しで行けるはずだ)

キリコは馬に跨がり、バリアアハートに向けて走らせた。

午後 2:00

2時間後、キリコは魔獣の襲撃に遭いながらも、バリアアハートに到着した。

元々、バリアアハートでは貴族でさえあれば誰もが権勢を奮っていて、平民は平身低頭を強いられていた。

だが2年前の内戦でバリアアハートに住むほとんどの貴族が落ち目になり、貴族街を除くほとんどの区画で平民とのトラブルが起きていた。

「ふざけるな！私を誰だと思っている!？」

キリコは職人街にある喫茶店で遅い昼食を取っていた。その横で貴族の男が店主に食ってかかっていた。

「ふざけてなんかいませんよ。店で飲食をしたらミラを払う。子どもでも知ってることですよ」

「私は伯爵だぞ！平民ごときが楯突くつもりか！」

「伯爵だったってあなたは内戦で悪どいことやって財産のほとんどを



差し押さえられたそうじゃないですか。まさかワインのボトル一本の料金も支払えないとは思いませんでしたか」

「黙れ黙れ黙れ！こんな店、潰すことなど簡単なのだぞ！」

「やれるものならどうぞ。その前に罰せられるのはあなたですよ。私たちにはユーシス様がついておられるんですから」

「グツ……！」

ユーシスの名前を聞いた伯爵はそのまま頭を垂れた。

（バリアハートのトラブルはオルデイス以上だな。パワーバランスは今や完全に平民の方が上だ）

「……代金はここに置く」

「毎度。いやあ、お客さんはわかってるね。ミラを払うことは子どもでも知ってるってのに。それがわからないってのは不幸だよ、そう思わないか？」

「……………」

キリコは顔を真っ赤にした伯爵を尻目に喫茶店を出ていた。

「？」

突然キリコのARCU S IIに通信が入る。

「もしもし？」

『キリコか』

「……ロツチナか」

『今どこにいる？』

「バリアハートだ」

『バリアハート？一応、報告してもらおうか』

「……………」

キリコは現在に至るまでのことを話した。

『なるほど。蒼の騎士と深淵の魔女に会ったのか。それにしてもバリアハートとはな』

「？」

『実は今、オーロックス砦付近に来ていてな。今から来れるか？』  
「何のためにだ」

『ジギストムンドは覚えているな?』

「そいつは確かヘイムダル監獄に収容されたはずだ」

『栄光にしがみつくと愚か者、現実を直視できない馬鹿はどこにでもいるということだよ』

「……………」

『地図を送信する。馬か何かを使えば30分ぐらいで着けるはずだ。待っている』

「そうやって通信は切れた。」

「……………」

キリコは近くの商業施設で装備を整え、オーロックス峡谷道へと向かった。

午後 3:30

「来たか」

「……………」

「まあいい。こつちだ」

キリコとロツチナは峡谷道外れの高台へと移動した。

「いったい俺に何をさせるつもりだ」

「単刀直入に言う。オーロックス砦を落として来い」

「砦を?」

「本来ならば、オーロックス砦には第五機甲師団が入る手筈だった。だが領主代行不在の隙を突いて貴族派が要塞を占拠したのだ」

「ユーシス・アルバレアの政策に反発する貴族が、か?」

「その通り。既に関与した貴族はリストアップされ、捕縛されている頃だろう。問題はオーロックス砦には今、先代アルバレア公爵ヘルムート・アルバレアと腰巾着の貴族たち、さらに領邦軍のあぶれ者や落ち目になった正規軍貴族派が居座っているのだ」

「そいつらの拘束と兵士の排除か。正規軍は動けないようだな」

「ああ、開戦が迫る今、余計な出費は避けたいというのが本音のようだな」

「……………」

「どうだ？利害は一致すると思うが？」

「……………わかった」

キリコは黙考し、頷いた。

「そう言ってくれると信じていたよ」

「心にもない言葉より機甲兵なりなんなり寄越せ」

「わかってるさ。こっちに來てくれ」

「……………」

キリコはロツチナについて行つた。

そして大型のコンテナの前にやって來た。

「これは…………」

「お前へのささやかなプレゼントだ」

ロツチナはコンテナにパスワードを打ち込み、扉を開く。

「さあ、受け取ってもらおう」

「……………貴様……………」

キリコはロツチナを睨む。

コンテナの中に入っていたのは蒼い機甲兵だった。

頭部のターレットレンズは形状が変わり、回転式から固定式になつ

ていた。

左腕は三つの爪で構成されたアイアンクローになっており、さらに

銃口が覗かせていた。

「ラビトリードッグ。かつてワイズマンから与えられ、惑星クエン

トに押し寄せたギルガメス、バララントの大軍を震撼させたAT。そ

のノウハウを生かし、完成したのがこの機体だ」

「その名も『フェンリール』北方の神話に登場する、神をも殺す牙を

持つ魔獣から取つたものだ。今のお前にぴったりじゃないか？」

「……………俺が諸手を挙げて喜ぶとでも思ったか？」

キリコは苛立ちを隠さずに言つた。

かつてキリコはワイズマンを欺くためとはいえ、仲間たちや愛する

女性に銃口を向けた。その記憶は未だ風化されず、キリコにとってラ

ビトリードッグは因縁のある機体だった。

「文句なら後で聞こう。さあ、行け」

「……………」

有無を言わさないロツチナに苛つきながらも、キリコはフェンリーに乗り込む。

「コックピット内部はフルメタルドックとほとんど変わらない。問題は……」

キリコは計器類をチェックする。

「やはりフルメタルドックよりも活動限界時間は長い。せいぜい使わせてもらうが、いずれは……」

キリコはフェンリーの右手を操作し、バズーカ砲のような武器――ハンディソリッドシューターを掴む。

「どうかね?」

「機体に問題はない。それより、このままオーロックス砦へ乗り込めばいいんだな?」

「そうだ。だがオーロックス砦は天然の要害でもある。真正面から行くほかないぞ」

「それで行く」

「武運を祈っているよ」

「……………」

キリコはオーロックス砦目指してローラーダッシュを加速させた。

「いよいよですな。閣下」

「うむ」

一方、オーロックス砦ではユーシスの実父であるヘルムート・アルバレアがバリアハート方面を見つめていた。

ヘルムートは内戦後、領民虐待、騒乱、放火の罪で裁判が始まるまで屋敷に軟禁されていた。

その間もしぶとく権力の座に返り咲こうと根回しや画策をしていた。

だが帝国政府の決定に全て灰塵に帰した。

頼りにしていた偽りの長男のルーファスに見捨てられ、さらに平民の血が流れていると疎んじていた次男のユーシスが領主代行の地位

に着いたことで見通しが完全に狂い、一気に老け込んでしまった。

そんな中、突如として帝都で起きた異変。そして領主代行の失踪。これ幸いにと、ユーシスの政策に反発していた貴族たちがどさくさ紛れにヘルムートを連れ、オーロックス砦に立て籠った。

これに呼応し、統合地方軍にも入れなかった元領邦軍兵士や百日戦役以来冷遇が続く正規軍貴族派も加わり、一個師団並みの兵力を持つに至った。

「中央がごたついている今、我ら真なる貴族が立ち上がる時です」

「領主代行による蛮政も終わりです」

「我ら貴族から税を取ろうなどと、烏滸がましいというものだわい」  
「税とは平民の者どもから搾り取ると大昔から決まっているものですからな」

彼らにとつて、ユーシスの政策は受け入れ難いものだった。

領主代行に就いたユーシスは焼き討ちに遭ったケルデイックの再建に着手した。

そのため先代の政策を廃止し、領民寄りの政策を次々に打ち出していった。

決定的だったのは、貴族からの徴税だった。

ユーシスはケルデイック再建のための資金源として貴族たちに税を払うことを打診。

特に内戦以前から悪どい所業をしていた貴族には重い税が科された。

ユーシスの手腕を高く評価する貴族たちは最初から従ったが、大半の貴族たちは一斉に反発した。

だが帝国貴族の階級で最高位の公爵の意向に逆らえる者などおらず、従うほかなかった。

だが彼らの不満は燻り続け、件の異変をきっかけにそれが悪い方向に動き出した。

「閣下！大変です！」

「騒々しい。いったいなんだ？」

「機甲兵です！機甲兵が現れました！」

「なんだと!？」

兵士からの報告に貴族たちは慌てだした。

「敵はどれほどの数だ!」

「そ、それが……」

兵士が言いかけた瞬間――

「ぐわあああああつ!!」

砲撃音が響き、叫び声が轟いた。

「な、なんだ!？」

「まさか、砲撃してきたのか!？」

貴族たちは窓の外を見た。

そこには、蒼い機甲兵らしき機動兵器が戦車隊と交戦していた。

「たった一機だと!？」

「おのれ!」

「落ち着くがよい」

ヘルムートは狼狽える貴族たちを落ち着かせる。

「正規軍は余程余裕がないと見える。砦の全兵力を持って殲滅せよ。徹底的にな」

「わ、わかりました！全兵士に伝えろ！」

「イ、イエッサー！」

連絡役は司令室を出ていった。

(さて……………)

ヘルムートは紅茶の入ったカップを啜った。

「キリコ side」

「ば、馬鹿な……」

「そんな……………」

オーロックス砦付近に配備されていた戦車や装甲車を軒並み破壊した。後は機甲兵くらいだろう。

【落ち目になったとはいえ、一個師団並みの兵力は持っているようだな。しかし……】

俺は蒼い機甲兵フェンリールの操作性能の高さに違和感を覚えた。

【気味が悪いくらいにしつくりくる。おそろくフルメタルドックのデータと俺が書き上げたレポートを基に設計されたのだろう。あのシユミット博士も噛んでいるはずだ】

そんなことを考えていると、旧式のドラツケンが襲って来た。やはり新型は手に入れてないようだ。

【我ら貴族の捲土重来を邪魔する愚か者よ、くたばれええっ！】  
【遅い】

フェンリールのマシンガンでドラツケンの脚部を撃ち抜く。  
ドラツケンがぐらついたところにアイアンクローでコックピットの表面を抉る。

【あ、ががが……】  
【……………】

俺は一瞥することなく、要塞の壁に砲撃した。

【貴様！……ここをどこだと思っっている！】

『消し炭にしてくれる！』

罵声を響かせながらシユピーゲルと飛行挺が仕掛けて来た。だが関係ない。

俺は即座にシユピーゲルの両手足にハンディソリッドシューターを撃ち込む。

それと同時に飛行挺の真下へ移動し、エンジン部分を銃撃。

【うわああああっ!?!】

『そ、そんな馬鹿な……!?!』

シユピーゲルは爆発し、飛行挺はそのまま谷底に墜落していった。  
【いずれ償う】

俺はそんなことを思いながら、新たにやって来たシユピーゲルとドラツケンを相手取る。

【キリコ side out】

「さすがだな、キリコ」

「まったくくだよなあ」

「ほう、これは珍しい」

ロツチナが振り向くと、西風の旅団団長のルトガー・クラウゼルが歩いて来た。

「確か、サザーラント方面の予定では？」

「なあに、ちよつとした野暮用さ。あんたこそ何してんだ？」

「あの機体のテストですよ」

「あの連中はモルモットってわけかい。まさかあんたがお膳立てしたのか？」

「まさか。連中の暴走は計算外でした。だが嬉しい誤算というだけですよ」

「……なるほどな。しかし……」

ルトガーは数の差をもともしないフェンリールを見つめる。

「ゼクトールとガチンコで勝負が出来そうだな。薄い装甲つつう剥き出しの弱点を腕でカバーしてやがる。あれだけの腕を身につけられるってこたあ、アストラギウスってところはとんでもない場所のようだな」

「さすがの洞察力ですな。ただのごろつきとはわけが違う」

「ごろつき上がりなのは間違いないんだがなあ」

ルトガーは頭を掻いた。

「まあ、いいさ。それじゃ、後でな」

「もう帰られるのですか？」

「決まりきった勝負なんざ面白くも何ともねえだろ」

「………確かに」

「それにあつちにはあつちで面白そうなガキがいるんでな」

「ガキ？もしか……」

「ククク………来な、ゼクトール！」

ルトガーの呼び掛けに、紫の騎神ゼクトールが顕れる。

【またな】

ルトガーを乗せたゼクトールは飛び去って行った。

「………確かに決まりきった勝負は面白くも何ともない。だが、主演がキリコであるならば……」



ロツチナは再びオーロックス要塞を見つめる。

【ば……………化物……………】

……………】

キリコの乗るフェンリールはオーロックス砦に配備されていた機甲兵の四分の三を破壊した。

【た、頼む……………ここ、殺さないで……………】

【死にたくなければ降りろ】

【は、はい……………！】

キリコは兵士が降りたドラッケンを破壊した。

……………】

キリコはだめ押しと言わんばかりに、オーロックス要塞にハンディソリッドシューターの砲撃を次々に撃ち込む。

ハンディソリッドシューターの砲撃に恐れをなした兵士たちの士気はもはやがたおちになり、一人、また一人と武器を捨てて投降し始めた。

【後は首謀者だという先代アルバレア公爵を……………？】

その時、不意に上を向いた。

【あれは……………】

少し前――

貴族たちはフェンリールの圧倒的、ひたすら圧倒的な力に平静を失っていた。

【そんな……………!?!】

【あれだけの兵士たちは何をしている!?!】

貴族の一人が連絡役に食ってかかる。

「へ……………兵士の大半は戦死。残っている者も銃を捨てて投降して……………」

「馬鹿な……………」

食ってかかった貴族は崩れ落ちた。

「と、とにかく私は逃げるぞ！ただ連れて来られただけだからな！」

「ふざけるな！一人だけ助かるつもりか！貴公とてミラを出しただろう！」

「あ、あんな化物が来ることなど聞いてない！ミラは返してもらおう！」

「今さら一抜けなど許さん！それに知っているのだぞ！貴公は他所に平民の女を囲っていることをな！」

「黙れ！貴公こそ、召し使いに暴力を振るい自殺させただろう！しかも事故に見せかけてな！」

「あんな役立たずはいらん！そちらもそうだろう、娘を聖アストラアに裏口入学させようとして、赤っ恥掻いたそうじゃないか」

「き、貴様あ！男爵と子爵の分際で！」

(……誇りも何もない……我が身可愛さに……自己保身しか頭になく……罵り合う……)

貴族たちが掴み合い、互いを罵っている光景をヘルムートは黙って見ている。

(終わったな……こんなものが……帝国貴族だとは……)

ヘルムートはフラフラと屋上の階段へ歩いて行った。

そのことに貴族たちは気づいてもいなかった。

【あれは……】

キリコは屋上に立つ人影を見つめる。

【?】

すると、ARCUSⅡに通信が入る。

【どうした?】

『聞こえるか、キリコ。あれが先代アルバレア公爵だ。出来れば無傷で拘束してほしい』

【無傷で?】

『落とす所に持って行くためのな』

【やつだけ捕らえればいいんだな?】

『ああ。他の雑魚は放っておいて構わん』

【わかった】

キリコは通信を切ると、屋上に立つヘルムートを見る。

「さてと……?」

ロツチナが通信を終えると同時に何者かが転移してきた。

「ほう。これもまた珍しい客人だ」

「お初にお目にかかります。鉄機隊が一人、魔弓のエンネアと申します」

「帝国軍情報局大佐ルスケという」

「出来れば、本名をお願いします」

「フフ。ジャン・ポール・ロツチナ。これで満足かな?」

「はい」

エンネアは恭しく頭を下げる。

「……キリコにかね?」

「はい。我らがマスターが呼ぶようにと」

「ほう、鋼の聖女のご指名とはな。それでどこに連れて行けば良いのかな?」

「……明後日にユミルだそうです」

「ユミルか、遠いな。まあいい、飛行艇でも使えば行けるだろう」

「確かに伝えました」

「わかった」

「……それと一つだけ」

立ち去ろうとしたエンネアは、ロツチナに問いかけた。

「?」

「彼は、あの教団の……」

「D∴G教団とは直接は関係ない」

「……」

「だが、教団の異能の開発の切欠になったのは間違いない」

「……失礼しました」

エンネアは転移していった。

「フフ……」

ロツチナは思わず口角を上げる。

「……私のやってきたことは……無意味だったのか……」  
ヘルムートはこれまでのことを思い浮かべる。

「妻と追放した弟の不義の子を……貴族と公爵家の名誉のためにと受け入れたが……見捨てられ……平民の女の血を引く実子に……片隅に追いやられ……臣下もほとんど去った……此度の件も……貴族同士で……醜く自滅した……」

ヘルムートにはもう何も残っていなかった。

(……もう……疲れた……)

ヘルムートは目を閉じ、屋上から飛び降りた。

「……………」

キリコはフエンリールを操作し、落ちてきたヘルムートを掴む。  
「……………」

体を打ったのか、ヘルムートは完全に気絶していた。

【悪いな】

キリコはヘルムートと共にオーロックス砦を脱出した。

【連れて来た】

「ご苦労。降りて来い」

キリコはヘルムートを降ろし、ロツチナはヘルムートを丁重に拘束した。

「それとキリコ、お前に明後日行ってもらおう所がある」

「何？」

「実は先ほどとある人物から連絡が来てな。来てもらいたいそう  
だ」

「どこにだ」

「ノルティエア州北方のユミルだ」

「ユミルだ?!」

キリコは呆気にとられる。

「明日の昼まで私はここにいなければならん。ホテルを取っておい  
たから休むといい」

「行くとは一言も言っていない。それに呼び出したのは誰だ？」

「鉄機隊の一人。魔弓からだ」

「鉄機隊の？つまり俺を呼ぶのは」

「そうだ。結社身喰らう蛇、蛇の使徒第七柱鋼の聖女だ」

「……………」

キリコは思わず、拳を握りしめた。

その後、オーロックス砦は第五機甲師団に接收され、罵り合ってた貴族たちやわずかに生き残った兵士たちは全員捕らえられた。

なお、帝国時報ではオーロックス砦解放作戦と銘打たれ、全て第五機甲師団の手柄とされた。

無論、情報局が手を加えたことは言うまでもない。

首謀者のヘルムートは屋敷に連れ戻され、常に監視下に置かれる状態になった。もつとも、今のヘルムートは無気力そのものだった。

さらに、この件に関与していない貴族たちも見えて見ぬふりをしてたとして優先的に徴兵に回され、財産も没収された。

これをもって、バリアハートの貴族勢力は完全に息の根を止められることになった。

## 北方ユミル

七耀暦1206年 8月7日

キリコは飛行艇でバリアハートからルーレ、ルーレから導力ケーブルカーを乗り継いでユミルに着いた。

(ここがリイン教官の故郷か……)

「早かったな」

「待つてたわ、キリコ君」

キリコが周りを見渡していると、鉄機隊の剛毅のアイネスと魔弓のエンネアが歩いて来た。

いつもの甲冑ではなく、アイネスは青、エンネアは白を基調とした私服姿だった。

「あんたたちだけか？」

「マスターとデュバリイはあそこにある鳳翼館で待っている」

「では行きましょう」

「……………」

キリコはアイネスとエンネアについていった。

「お久しぶりですね、キリコ・キュービー」

「ああ」

鳳翼館の最上級の部屋で待つていたリアンヌ・サンドロットは微笑みながらキリコを迎えた。

リアンヌもまた、甲冑ではなく私服姿だった。

「わざわざ来てくださったこと、礼を申し上げます」

「別にいい」

「ちよつと！マスターがわざわざお声をかけたのに、その口の聞き方はなんですか!?!」

隣で控えていた神速のデュバリイはキリコの振る舞いを激しく咎めた。

「……………」

「そもそも、あなたは何か言うことはないんですか!?!あなたが足を

ブツ刺してくれたおかげで私は……」

「……………首を切り落とした方が良かったか？」

「「なっ!?!」」

鉄機隊の面々はキリコの言葉に驚きを隠せなかった。

「ふ、ふ、ふざけるのも大概にしなさい!この場で叩つ殺してもいいんですわよ!?!」

デュバリイは大剣を取りだそうとした。

「やってみろ」

「っ!?!」

デュバリイはキリコの静かな殺気に思わず硬直した。

「っ、この……………!」

「デュバリイ」

「マ、マスター……………」

「話が進まないでしょう。貴女は少し頭を冷やして来なさい」

「し、しかし……………!?!」

「二度も言わせる気ですか?」

「っ……………はい」

デュバリイは苦々しげに部屋を出た。

「……………」

「申し訳ありません。醜態を見せてしまいましたね」

「こちらもすまなかった」

キリコはリアンヌに詫びた。

「なんとというか、実直ではあるな」

「そうね」

アイネスとエンネアは二人のやり取りを眺めた。

「それで、鋼の聖女が俺に何の用だ」

キリコはリアンヌは問いかけた。

「貴方の力を借りたいからです」

「?」

リアンヌの答えにキリコは怪訝な顔をした。

「この里の裏手にそびえるアイゼンガルド連峰。先日、あの山頂に未知の霊窟が顕れたのです」

「霊窟……ブリオニア島にあるやつと似たようなものか」

「その通りです」

「俺がいなくても攻略ぐらいできるはずだ」

「それ自体ならば造作もないこと。問題はその霊窟に入るためには、奇妙な文字を解読しなくてはならないのです」

「文字……」

キリコは文字と聞いて、あるものを思い浮かべる。

「紅の戦鬼殿から聞きましたが、貴方はその奇妙な文字——標準アストラーダ語とやらを解読できるそうですね？」

「……」

「協力して頂けますか？」

「……わかった」

キリコは一呼吸置いて、了承した。

「ありがとうございます。では準備がありますので、先に行ってください」

「わかった」

キリコは部屋を出ていった。

(ここにも標準アストラーダ語。未知の霊窟とやらもワイズマンの息がかかっているんだろうか……)

キリコは雑貨屋で薬や弾薬等の準備を整え、アイゼンガルド連峰を見つめていた。

「ワン！ワン！」

「？」

すると、キリコの足元に猟犬と思わしき犬が駆け寄って来た。

(この犬は……)

「バド、どうした？」

「あ！男爵さまだ〜！」

近くで遊んでいた子どもたちが猟銃を持った男に駆け寄った。



(男爵……そうか、リイン教官の……)

「君、すまないな。バド、離れなさい」

「クーン……」

バドは寂しげに離れる。

「ふむ、ずいぶんとバドになつたようだな」

「そのようですね」

「おっと、自己紹介がまだだったな。私はテオ・シュバルツァー。一応、ユミルの領主ということになっている。君は旅行者かな？」

「俺はエイジ・バートラー。ええ、そんな感じですよ」

「そうか、まあゆっくりしていくといい」

「アイゼンガルド連峰に行くにはどうすれば？」

「アイゼンガルド連峰か……。最近、魔獣の動きが活発していてな。領主として行かせるのはあまり勧められんが」

「連れがいるので。最低限の武装は持っているので大丈夫ですよ」

「……そうか。ならあの坂を登って行くといい」

「どうも」

キリコはテオに礼を言い、アイゼンガルド連峰に向かった。

「……………」

テオはキリコの背中を見つめる。

(エイジ・バートラーと名乗っていたが、おそらくリインからの手紙にあつた教え子の一人だろう)

(なぜ偽名を名乗りこの地に来たのかはわからないが、彼なりの理由があるのだろう。女神よ、彼の行く末に光を)

「遅いですわよー」

アイゼンガルド連峰一合目に着いたキリコを、先に来ていたデュバリイが叱責した。

「いったいゼンたい何をしてらっしゃったのです!？」

「犬になつたか」

「は?」

デュバリイは開いた口が塞がらなかった。

「なるほどな。ユミルのシユバルツァー男爵家の飼い犬か」

「きつと、リイン君の匂いを嗅ぎ付けたのね」

アイネスとエンネアは犬という言葉から分析した。

「こ、この……!」

「さて、揃ったところで向かいましょう」

「マスター!」

「デュバリイ、時を無駄にすることは無益。そう教えたはずですよ」

「うっ……」

リアンヌの言葉にデュバリイは引き下がるしかなかった。

「……少し急ぎましょう（どうしても彼に聞きたいこともありますしね）」

「「イエス・マスター!」」

「……了解した」

キリコたちはアイゼンガルド連峰を登り始めた。

「ねえ、キリコ君」

山道を登るキリコにエンネアが話しかける。

「なんだ?」

「キリコ君は異能者?なのよね?」

「……」

エンネアの言葉にキリコは立ち止まる。

「そうなのね……」

エンネアは顔を伏せる。

「まさか、あんたは……」

「ええ……キリコ君の予想通りよ……」

エンネアはキリコを見つめる。

「私はね……D…G教団の実験体だったの」

「……」

「教団の信者だった両親に差し出されて、異能の開発の実験体にされた。グノーシスと呼ばれる秘薬を投与され、訳のわからない機械に繋がれた。それが毎日続き、ある日私は異能を手にした」

エンネアは弓を握りしめる。

「放たれた物体の速度や軌道を正確無比にイメージできる。私が魔弓と呼ばれるのもそこからよ」

「……そうか」

キリコは目を瞑る。

「俺は……「何も言わないで」……?」

エンネアの言葉にキリコは顔を上げる。

「確かに異能を、こんな力を持つことは望んではいなかったわ。でもこの力を、あの地獄から救いだしてくれたマスターのために使えるんだから」

「たとえば、キリコ君が教団の異能の開発のきっかけだとしても、私は恨んでなんかいないわ」

「すまない……」

キリコはエンネアに詫びるしかできなかつた。

キリコたちは開けた場所に到着した。

「これは?」

「かつての精霊信仰の名残でしょう(ヴァリマールとリイン・シユバルツァーはここを起点に活動していたらしいですが)」

「……………」

「少し良いか?」

「?」

アイネスに呼ばれたキリコは振り向く。

「聞きたいことがある」

「聞きたいこと?」

「君は一週間ほど前に公開処刑されたという」

「……………」

「ここにいる君は本当に本人なのかと思ってな」

「何?」

「たとえば……瓜二つの人形かもしれない」

「……俺がホムンクルスだとも?」

「その可能性も捨てきれない」

「……………」

キリコとアイネスは睨み合う。

「二人とも、そこまで。どうやら来たようです」

「ッ!？」

「……………あそこか」

キリコが見つめる方向の空間が歪み、人馬一体の魔煌兵レグスⅡザミエルが顕れた。

「これは……………」

「手強いのが出てきたわね……………」

デュバリイとエンネアが得物を構える。

すると、背後の空間が歪む。そこからもう一体のレグスⅡザミエルが顕れる。

「騒ぎは控えたかったです、仕方ありません。デュバリイ、アイネス、エンネア。キュービイーと協力して仕留めなさい」

「「イエス・マスター!」」

「キュービイー、力を貸して頂けますね」

「ああ、わかった」

キリコは頷いた。

「キリコ君、ARCUSⅡは持つてる?」

「ある」

「なら使えるかもしれないわね」

「?」

エンネアは星光陣を発動し、キリコとエンネアの間に戦術リンクが結ばれる。

「……………やはり同調しきっていない。最低限の働きしか期待できないな」

「それで十分よ」

「ちよっと!何を勝手に……………」

「それは後だ。キリコ、お前が本物だと言うならば、見せてもらおうぞ!」

「ああもう！どいつもこいつも！」  
戦闘が始まった。

「ピアスアロー！」

エンネアの一矢がレグスⅡザミエルに命中した。

「クリアブラスト」

サブマシンガンの銃撃が畳み掛ける。

「剛裂斬！」

アイネスのハルバードから斬撃が飛ぶ。

「グオオオオツ！」

レグスⅡザミエルが構えを変えた。

「させませんわ！神速ノ太刀！」

デユバリイの剣技がレグスⅡザミエルの構えを崩す。

「アーマーブレイクⅡ」

だめ押しにキリコは強化したクラフト技を叩き込む。

レグスⅡザミエルはたたらを踏んだ。

「さすがね」

「以前よりも強くなっているな」

「ごちやごちや言つてないで集中なさい！」

デユバリイは二人を叱責する。

「グオオオオツ！」

レグスⅡザミエルは大剣を振り下ろす。

「っ！」

キリコは後ろでも横でもなく、レグスⅡザミエルの懐に潜り込む。

「フレイムグレネード」

「なっ!？」

デユバリイが呆気にとられる中、キリコはレグスⅡザミエルの真下でグレネードを起爆させる。

レグスⅡザミエルは予期せぬ攻撃に深手を負う。

キリコも爆風を受けたが、軽傷で済んだ。

「なんとという胆力……！やはり本物か……！」

「確かに敵の懐に飛び込むならダメージは最小限に抑えられるかもしれない……でも下手したら踏み潰されて一貫の終わりよ!？」

「自殺同然なのに一切の躊躇いのなさ、あの男には恐怖つてもものがないんですの!？」

鉄機隊の面々はキリコの行動に驚愕する。

「合わせろ」

「え、ええ！メデューサーロー！」

キリコの攻撃にエンネアが石化の効果を持つ矢で合わせる。

「いきますわよ！豪氷剣！」

「兜割り！」

デユバリイの氷を纏った剣とアイネスの破壊に特化したハルバードの一撃が続く。

「グオオオオッ！」

ダメージを負ったレグスⅡザミエルから黄金のオーラが吹き出す。

「高揚か」

「ということとは、後少しかしら」

「面倒です。一気に決めますわよ！」

「承知！」

「了解、アーマーブレイクⅡ」

「[[デルタ・ストリーム!]]」

キリコのクラフト技を起点に、鉄機隊によるバースト攻撃がレグスⅡザミエルに炸裂した。

「グオオオオ………」

レグスⅡザミエルは断末魔の叫びと共に消滅した。

「やったわね」

「うむ、手こずらされた」

「まあ、腹七分目と言った具合ですけど」

「……………」

デユバリイたちが傷の手当てをする中、キリコはリアンヌの方を向く。

リアンヌは既にもう一体のレグスⅡザミエルを撃破していた。

「どうやら、終わったようですね」

「マスター！」

「ご無事で何より」

「貴女たちも無事で何よりです。キュービーもお疲れ様でした」

「ああ」

「先ほどの貴方の戦いを見せてもらいました。ずいぶん無茶をしたようですね？」

「さつさと決着を着けたかったからな」

「ふう、ダイスを思い出しますね……」

「？」

「マスター、ダイスとは？」

「獅子戦役の時代、ドライケルス軍の歩兵隊長を努めた戦士のことです。切り込み隊長を自称し、いつも最前線に身を置いてました。当然、無茶ばかりでドライケルスの頭痛の種でした」

「あのドライケルス大帝の……」

「ただ、いつも明るく笑顔の絶えない人物で、兵士たちからは慕われていました」

「それで、その御仁は……」

「……最期はオルトロス軍の猛将と相討ちになり、戦死しました」

「そのような人物が居られたとは……」

「そのダイスの口癖が「早く決着を着ければ良いじゃないか」でした」

「……………」

キリコは黙って聞いていた。

「フフ、詮なきことを言いましたね」

リアンヌは微笑む。

「……キリコ」

「？」

アイネスはキリコに近づき頭を下げる。

「すまなかった。先ほどの暴言を許してほしい」

「気にしてない」

「まったく、それならそうと……」

「ふふ、なんだかんだ言ってキリコ君を認めてるのね？」

「ば、馬鹿をおっしやい！何でこんな男を……！」

「てつきり背後から斬りつけるかと思っただが、杞憂に終わったな」

「そ、それはマスターの教えだからですっ！」

「そういうことにはしておきましょうか」

「だ、だから……！」

「それより、そろそろ出発しなくていいのか？」

「そうですね。目的地は後少しです。参りましょう」

リアンヌたちは再び歩き出した。

「つゝゝ!!」

デユバリイは地団駄を踏んだ。

アイゼンガルド連峰山頂に到着したキリコたちの目の前には、古い寺院のようなものが建っていた。

「ここが……」

「ええ目的の霊窟です。キュービィー、お願いできますか？」

「……………」

キリコは入り口に近づく。

そこには、人間の手の形をした窪みと標準アストラード語が彫られていた。

「なんと書いてあるのだ？」

「……俺でないと開けられないらしい」

キリコは膝をつき、窪みに手を置く。

すると、扉が光を放ち、ゆっくりと開いていく。

「あ、開いた……！」

「我らがどうやっても開けなかつたのに……」

「やはり、特別な資質が必要のようね」

「……………」

リアンヌがキリコを見つめる。



「なんだ？」

「……そろそろ教えて頂けますか？」

「マスター？」

「異能者、とやらにですか」

「ええ。そして、ワイズマンとやらについても」

「……………」

キリコは眼を瞑る。

「キリコ君……」

「……………わかった」

キリコは立ち上がり、リアンヌたちを見据える。

「わかっているとは思いますが……………」

「もちろん、他言無用を約束します」

「とつとと教えなさいな」

「……………」

キリコは異能者がどういうものなのか、その力がなんなのか。そして、自身とワイズマンの因縁についてをリアンヌたちに語った。

「……………」

さすがのリアンヌも驚きを隠せなかった。

「……異世界アストラギウスにおいて、確率250億分の1で誕生する突然変異……………」

「……あらゆる機械類への適応力、生まれつき高い反応速度、どんな重傷も僅かな間に完治する強靱な生命力、異常とされる生存率、強力な戦闘力……………」

「……ワイズマンは全てを陰から支配していた神、そしてキリコ君はその後継者……………」

デュバリイたちは思考すら止まり、キリコの言葉を反芻するしかできなかつた。

「ようやく分かりました。貴方が各地で混乱を引き起こしている理

由が。ですが……」

リアンヌはキリコの眼を見る。

「貴方はそれで良いと本気で思っていますか？」

「……………」

「貴方のしていることは闘争の誘発。言わば呪いを加速させているのと同じこと。呪いの根源が本当にワイズマンならば、彼らと共に戦うのが最善では？」

「皇帝を撃つた以上、俺が戻る場所はない。仮に呪いのせいにして  
も、全員が納得すると思うか？」

「それは……」

「不可能、かもしれないな」

「ヴァンダール家の子は特に、ね」

「それに俺は死んだことになっている。なら俺にできることは呪い  
根源を引きずり出すことだ」

「たとえば、あいつらと殺し合うことになろうともな」

「……それが貴方の覚悟ですか」

リアンヌは顔を上げる。

「そろそろ向かいましょう。ですが、デユバリイ、アイネス、エンネ  
アはユミルに戻りなさい」

「マスター!?!」

「何故です？」

「風が変わりました。どうやら、招かれざる者たちがこの地に近づ  
いているようです」

「分かりました。その者たちを追い払えばよいのですね？」

「行つてくれますか？」

「お任せください！」

デユバリイたちは魔法陣を出し、転移して行つた。

「では、我々も行きましょう」

「ああ」

「キュービー」

「?。」

「貴方の想いはよく分かりました。ですが、覚えておくことです」  
「貴方には帰れる場所があります」

「……………」

キリコとリアン又は霊窟に入って行った。

「キリコ side」

霊窟内部はヒンヤリとしていた。

魔獣の気配はほとんどしない。規模もそれほど大きいものではないようだ。

「帝国ではこういう場所は多いのか？」

「ええ。霊脈の流れの強い場所に建てられることが多いですね。ですが…………」

「？」

「この場所は霊脈の流れはほとんど感じないのです」  
「……………」

抽象的なことはわからないが、本来ここに霊窟は顕れないというのは理解できた。

これもワイズマンの手によるものだろうか。

「どうやら終点のようです」

「ああ」

俺たちの前に大きな扉があった。

どうやらこれも入り口と同じらしい。

俺が手を触れると扉はゆっくり開いた。

「何かが待っているようです。気を引き締めましょう」  
「言われるまでもない。」

俺はアーマーマグナムに弾丸を装填し、覚悟を決める。

扉を潜ると、かなり広い場所に出た。

(本当にわけのわからない場所だな)

「どうやら、これは試しの場のようですね」

「試し？」

「はい。おそろくは……………!」

急に鋼の聖女の顔が強ばる。

「これは……………」

「来ましたね」

前方の空間が歪み、影のようなものが顕れた。

「こいつは?」

「ロア||ファンタズマ。かつて私がアルグレオンと契約を交わす際に顕れた最終試練そのものです」

「アルグレオン……………あの機影か?」

「ええ。ですが、これは紛い物。見せかけに過ぎません」

「どっちみち、倒すことになり変わらない」

「参りましょう」

俺たちは戦闘を開始した。

「キリコ side out」

「リアンヌ side」

「アーマーブレイクII」

「シュトルムランツァー!」

やはり紛い物の類。

対象者を胎内に取り込むあの厄介な戦法を一度も用いてきません。

何よりも、あの時より格段に弱い。

「アングリアハンマー!」

構えを変えた紛い物を我が一撃で狙いをそらす。

「ハンタースロー」

すかさずキュービーがそれに合わせて追撃に出る。

「やりますね」

無駄のない足捌き、常に冷静沈着を保てる精神力。

ドライケルスの軍に合流した時の私でさえ、ここまでには至りませんでした。

「戦闘以外能がないからな」

「……………」

キュービイーの言葉に私は考えさせられました。  
アストラギウス銀河。

キュービイー曰く、炎と硝煙と死臭にまみれ、生きるために殺し合わなければならぬ。

そんな修羅畜生の世界がキュービイーの強さを作り上げたのでしよう。

(強さは認めます。ですが……)

彼はあまりにも危うい。

自分が戦い以外何もできないと本気で思い込んでいる。

私が言えた義理ではありませんが、他に生きる道もあったはず。

しかし、彼は戦場に身を委ねる道しか選べなかったのかもしれない。

それも、かけがえのないものを犠牲にしても成し遂げなくてはならない血塗られた道を。

手遅れになる前に、彼を元の居場所に返すことを考えなくてはなりませんね。

「来ているぞ」

「！」

紛い物の攻撃を捌き、逆に騎馬槍を撃ち込む。

「心配は無用」

「そうか……」

キュービイーはそのまま紛い物に攻撃を開始。

(キュービイー、貴方は人でありなさい)

「リアンヌ side out」

キリコとリアンヌはたたらを踏むロアⅡファンタズマを見据える。

「キュービイー、行きますよ」

「わかった」

リアンヌの騎馬槍とキリコのアーマーマグナムの一撃がロアⅡファンタズマに叩き込まれる。

ロアⅡファンタズマはそのまま消滅した。

「終わったな」

「ええ」

だが、ロアーフアンタズマが消えても何も起こらなかった。

「ここまでか？」

「拍子抜けですが、そのようですね」

リアンヌはもう一度見渡すが景色は変わらなかった。

「戻りましょう。これ以上ここにおいても無益です」

「そうだな」

キリコとリアンヌは出口目指して歩き出した。

『……………』

ローブを纏った者の存在に気づかずに。

霊窟を出た二人はユミル方面を見つめる。

「ユミルに来ているというのは衛士隊あたりか？」

「おそらく。彼らはリイン・シュバルツァーの故郷であるこの地を

狙っているのでしょう」

「となると、ノルティア州の関所黒竜関か」

「……………行くつもりですか？」

「そのつもりだ」

「先ほども言いましたが、貴方には帰れる場所があるのです。なぜ自ら捨てるような真似を？」

「俺にしかできないことだ。やつを殺すためなら、どれだけ血にまみれようがどうだっていい」

「それは己のためですか？それとも、仲間のため？」

「……………」

「後者、でしょうか？」

「……………」

「二つ、助言します。Ⅶ組の名を冠する者たちもまた、動き出したようですよ」

「!？」

キリコ思わず振り返る。

「各地で活性化していた霊脈の流れが治まりつつあります。貴方の学友たちもその中にいるでしょう」

「……………」

「……ともかく、一度ユミルに戻りましょう」

「……………ああ」

キリコはリアンヌと共にユミルへ転移した。

七耀暦1206年 8月8日 早朝

「どうしても行くつもりですか？」

「悪いが、もう決めたことだ」

「キリコ君……………」

早朝に荷物を纏めたキリコはリアンヌに、ユミルのふもとにある黒銀の鋼都ルーレまで転移してほしいと頼み込んだ。

「昨日も言ったとおり、俺は公的に存在しない人間だ。死人なら何をしようとかいつらには何の嫌疑も及ばない」

「仲間のために汚名を自ら被るか」

「そんな大層なものじゃない」

「……………分かりました。止めても無駄のようですね。お望み通りルーレへと送りましょう」

「すまない」

「ですがキュービィー、心しなさい。次に会う時は貴方を討ちます」

「わかっている」

「では、これを」

リアンヌはキリコに鉱石のようなものを渡す。

「これは？」

「盟主の加護を得ていない者が使う転移石です。一度きりですが、任意の場所に転移することができます」

「……………世話になった」

キリコは転移石を握り、転移して行った。

「マスター、これで良かったのですか？」

「彼はいかなる手段を用いても、目的を成し遂げるでしょう。己

の身にどんな災いが降りかかろうとも」

「おそろく……」

「ですが、いくら孤独を望もうとも、彼の眼には仲間の姿がありません。それに賭けましょう」

「はい……」

アイネスとエンネアはひざまづいた。

(キュービィー、貴方が死すら許されない境遇は分かりました。貴方がその流れを絶ちきろうとしていることも)

(ですが、それは傲慢に過ぎません。なればなおのこと、仲間を信じなさい)

(キュービィー、貴方は生きていますのですから)

リアンヌはキリコの行く末を案じた。

「………ところで、デユバリィは？」

「………まだ寝ているようです」

「時々寝言を言ってます」「まあ、すうくたあ」と

「………はあ………」

リアンヌは「娘」の一人の様相に大きなため息が出た。



## 黒竜関

七耀暦1206年 8月8日 午前7:00

リアン又たちと別れたキリコは黒銀の鋼都の異名を持つルーレ市内に転移していた。

キリコは黒竜関襲撃のため、フェンリールを寄越すようロツチナに通信を入れていた。

その間、ルーレ市最下層にある小さな食堂でコーヒーを注文していた。

(遅いな……む?)

カラランと音が鳴り、食堂にテイタニアが入って来た。

「待たせたな」

「今来た所だ。それよりロツチナはどうした？」

「当分オルデイス方面に詰めることになった。決起軍に動きがあるらしくてな」

「決起軍？」

「ヴァイスラント決起軍。カイエン公爵が首魁となって組織された軍だ。設立には四大名門はもちろん、伯爵位以上の貴族も囃んでいるらしい」

「ヴァイスラント決起軍……(ミュゼが私たちと言っていたのはそれか)」

キリコは運ばれてきたコーヒーを啜りながら、ミュゼに協力を打診された時のことを思い出した。

「何かあるのか？」

「なんでもない。そろそろ行く」

「一応聞くんが、本気なのだな？」

「ああ」

「黒竜関はクロイツェン州とノルティア州を結ぶ関所にして軍事拠点。当然配備される兵力も半端ではない。残りカスを寄せ集めたオーロックス砦とはわけが違う」

「わかっている。だがそれでもだ」

「……………嫌なものだな、異能者とは」

「自分で決めたことだ」

「……………わかった。機甲兵はノルティア街道の外れに隠してある。必要ないだろうが、武運を祈っている」

「……………ああ」

キリコはコーヒー代を払い、食堂を出た。

「……………」

テイタニアはその背中を見つめる。

(……………キリコ……………)

【どういうことだ?】

キリコはノルティア街道付近に隠されていたフェンリールに乗り込み、黒竜関を目指していた。

だが街道には警戒にあたっているはずの衛士隊の姿が見えなかった。

【警戒が緩すぎる。向こう側のクロイツェン州で何かあったのか。それとも……………?】

前方がキラリと光り、キリコはフェンリールを停止させ、片膝をつかせる。

【これは、ワイヤーか。さつそく仕掛けてきたか】

キリコはより慎重になった。

【そこにいる奴、出てこい】

「ククク……………なかなかイイ勘してるじゃねえの」

【!?!】

フェンリールのターレットレンズの先には、腕組みをしたルトガーが立っていた。

【猟兵王、か】

「よお、久しぶりだな。この間のオーロックス砦襲撃は見事だったぜ。あんな馬鹿野郎はバルデル以来だぜ」

【……………】

「鉄血のつつあんから聞いていたが、たいしたタマだよな、異能

者ってのは」

【どうでもいい。さっさとこのトラップを外してくれないか】

「おお、すまねえ。ゼノ、外してやんな」

「へいへいっと」

近くの岩陰から罫使い（トラップマスター）の異名を持つ、ゼノが仕掛けたトラップを外していく。

「実はよう、お前さんに話があつてな。ちよいと降りて来てくんなえか？」

【急いでいるんだが】

「まあ待ちなつて。今行つても分厚い守りに返り討ちに遭うのが関の山だ。お前さんも元兵士だつてんならわかつてるよな？」

【……………】

「そつちにおあつらえ向きに広場があんだ。来な」

【……………】

キリコはルトガーたちについて行つた。

【ここか】

「おう、降りて来な」

【……………】

キリコはルトガーに促され、フェンリールから降りる。

「改めて、久しぶりだな」

「ジュノー海上要塞以来か」

ルトガーと破壊獣（ベヒモス）の異名を持つレオニダスが話かける。

「それで、話とは？」

「ハハハ。ボン、そう焦るもんでもないで？」

キリコの隣でゼノがキリコの肩に手を置く。

「触るな」

キリコはゼノの手を振り払つた。

「なんや、つれへんな」

「ふっ……………」

「まあ、野郎に触られんのは嫌だわな」

「やかましいわー！」

「……………」

キリコは黙って立ち去ろうとした。

「だあつ！待てっちゆうねん！」

「つまらない雑談に付き合う気はない」

「団長」

「わーってるよ」

レオニダスに促されルトガーはキリコの前に立つ。キリコも腕組みをし、話を聞くことにした。

「話つてのは他でもねえ。お前さんがやろうとしていることにちよいと協力してやろうと思つてな」

「なんだと？」

キリコは怪訝な表情を浮かべる。

「俺としても世界が終わるなんてのは望んじやいねえ。そうなつちまったらおまんまの食い上げだからな」

「……………」

「我らだけではない。全ての猟兵が行き場を失うだろう」

「フィーと違うて、俺らは遊撃士なんかにはなれへんさかい」

「だからよ、お前さんにやちーつとばかり期待してんだよ。新VII組のひよつこ共もな」

「……………あいつらに会つたのか？」

「ああ。ハーメルの跡地でな。あの悪童アツシユ・カーバイドを誘おうとしたんだが、断られちまつた」

「……………そうか。全員無事か……………」

キリコは心の中で安堵した。

「……………」一応聞くがよ、お前さんはこのまま突つ走るつもりかい？」「ああ」

「世界最悪のテロリストのレットル張られてもか？」

「死人に口なしだ」

「……………そうかい。わかつた。ゼノ、レオ。キリコに協力してやんな」

「了解。さっそく始めるわ」

「できれば齒応えのあるやつを頼む」

「何をするつもりだ」

「まあ、見てな。面白れえことになるぜ」

ルトガーたちは不敵な笑みを浮かべる。

午前8:50

「ひ、非常事態発生！非常事態発生！」

「ええい！どうなっている!?!」

「なぜ魔獣が群れをなしてやって来たんだ!?!」

黒竜関は大混乱に陥っていた。

何の前触れもなく、クロイツェン州方面から魔獣の大群が黒竜関に迫ってきた。

黒竜関に詰めていた衛士隊や第六機甲師団分隊はその対応に追われる羽目になった。

結果として、ノルティア州方面の守りは手薄になった。

その様子を見つめる者たちがいた。

【あの機械で魔獣を呼び寄せているのか】

フェンリールはクロイツェン州側に設置されたアンテナのようなものを指差す。

「黒の工房が作ったモンらしくてな。ガラクタ同然だったんだが、何かに使えんじやねえかと思つてよ。まさかこんなことに使うとは思わなかったぜ」

【……あの二人は?】

「俺らは今のところ鉄血のどつつあん側だからな。魔獣の撃退に向いてるぜ」

【そうか。ではそろそろ行く】

「待ちな」

ルトガーが引き止める。

【?】

「お前さんにちよいと頼みてえことがある」

【頼み?】

「もしフィーに会ったら伝えてくれ。俺はお前のおかげで……」

【自分の口で言ってくれ】

フェンリールはルトガーを無視して黒竜関へ向かった。

「……へっ」

ルトガーはニヤリと笑う。

(どうやら俺も耄碌してきたな。どっちみち、あいつらと戦うんなら、そこで伝えりや良いじゃねえか)

「フィー……そんなときがさよならだな……」

午前9:00

「て、敵襲!!」

「敵襲だ!!」

「青い機甲兵です!オーロックス砦を陥落させたという青い機甲兵が現れました!」

「青い機甲兵だと?例の与太話のか?」

「し、しかし……!」

「まあいい。ノルティア州側の部隊をぶっける。それで終わりだ」

「こっちはそんな与太話に付き合っていないからな」

指揮官たちはクロイツェン州側に行ってしまった。

「りよ、了解しました……!」

伝令役の兵士も、持ち場に戻った。

彼らは気づけなかった。

それが大きな過ちであることに。

【守りは薄い。まずは……!】

キリコはフェンリールを操作し、戦車部隊を砲撃した。

「ぐわっ!」

「戦車隊の半数が全滅だ!!」

「ま、まさかあの噂は本当に……」

「ふざけたことをぬかすな！ たった一機で何ができる！」  
「しかし……現に……！」

「……………」

それから5分もしないうちに、戦車部隊は壊滅した。

「くそっ……くそっ……くそっ……！」

指揮官は機甲兵部隊を繰り出すことを決めた。

「恨みはないが、仕留めさせてもらおう」

フェンリールは機甲兵部隊に真正面から向かって行った。

「ククク、とんでもねえな」

ルトガーはフェンリールが次々に機甲兵を仕留めていく様を見つめる。

「あっちの方もぼちぼち終わる頃か。さあて、どうするかね？」

ルトガーが葉巻に火を付け、ルーレ方角を見る。

「にしても、なんでルーレは動かねえんだろうな」

「ザクセン鉄鉱山方面で未確認の魔獣が出たと通報があつてな。第六機甲師団本隊はそちらの対応に追われている」

ルトガーの疑問に歩いて来たティタニアが答えた。

「なるほどな。で、お前さんもあいつを見に来た口かい」

「どう受け取ってもらっても構わん」

「……………」

ルトガーが葉巻の火を消した。

「ますます誘いたくなつたぜ」

「望み薄だと思いがな」

ティタニアは背を向ける。

「行くのかい？」

「それでも情報将校なのでな。少しでもこちらへの対応を遅らせる」

ティタニアはルーレへと戻って行った。

「面白くなって来やがった」

「楽しそうだな」

ルトガーの背後に紫の騎神ゼクトールが顕れた。

「まあな。お前ももしかしたらあいつを起動者にしてたか？」

「いや、やつは我の求める者ではない」

ゼクトールはきっぱり言った。

「まあ、いずれな」

「うむ」

ルトガーとゼクトールはフェンリールを見つめる。

【仕留める】

【がっ……!?!】

シュピーゲルスはフェンリールのアイアンクローに引き裂かれた。

「やはり思ったが、左腕のアイアンクローはゼムリアストーンで出来ている。扱い方によっては騎神も倒せるかもしれないな」

機甲兵部隊が壊滅したことで、黒竜関内部への突破口が開いた。

【突入する】

フェンリールは黒竜関へ突入した。

「どうやら向こうは動いたな」

「せやな」

魔獣をあらかじめ倒したゼノとレオニダスは前線から後方へと下がろうとした。

「待て貴様ら！どこに行く!?!」

「どこについて、補給に決まっとるやないか。手持ちはパーなんや」

「どうも得物の調子が悪いのでな」

「ぶざけるな!」

のらりくらりとかわそうとする二人に第六機甲師団所属のゲインツ少佐は怒りを爆発させる。

「最強の猟兵団だか知らんが、そんないい加減な行動が罷り通るとでも思っているのか!」

「いい加減って、そんな大袈裟な……」

「良いか!ここの指揮官は私だ!貴様らは黙って私の命令を聞いて



いれば良いんだ!」

「……あん?」

ゲインツ少佐の物言いが二人の逆鱗に触れる。

「……おい。あんまり調子に乗るもんやないで?」

「何時から我々の雇い主になった?」

「な、何だと……!?!」

西風の連隊長から放たれる怒気にゲインツ少佐の怒りは霧散する。

「俺らがわざわざ手伝ってやっとするのは団長の命令だからや」

「貴様ごときの命令を聞く義理はあつても義務はない」

「き、貴様ら……!」

「なんなら、今からこの黒竜関を潰してもええんやで?」

「向こう側も騒がしいしな」

「ふ、ふぎけ……!」

「ふぎけとらん。昨日の敵は今日の友って言うやろ」

「殺し合った相手や別の勢力と共闘するなど、珍しくもない」

「……」

ゲインツ少佐顔を真っ赤にし、体を震わせる。

「まっ、冗談はさておき、向こう側も心配やさかい。序でに対応した

るわ」

「少佐殿はここでじつくりと腰を据えているといい」

ゼノとレオニダスは黒竜関へ戻って行った。

「……おのれ……ハイエナどもが……!」

ゲインツ少佐はどこかへ通信をかけた。

【と、止める!】

【これ以上破壊させるな!】

【……】

黒竜関内部に入ったフェンリールはプラットホームに停まっていた列車に積まれた兵器類や機甲兵を片っ端から破壊し始めた。

内部で待機していた機甲兵部隊は必死に応戦するが、キリコの技量に及ばず次々に潰されていった。

【魔煌機兵が一体もない。やはりラインフォルトの自社工場では開発されていないか】

キリコはプラットホームの制圧を終えると、内部通路にハンディソリッドシューターを向け、操縦桿のトリガーを引く。

爆発と爆音と共に、兵士たちと思われる悲鳴が響く。

【すまない】

キリコは心中で詫び、反対側にもハンディソリッドシューターを向け、砲撃した。

僅かな間に黒竜関内部は半壊した。

【大分片付いたみてえだな】

ノルティア州側からルトガーの乗るゼクトールがやって来た。

【あんたも来たのか】

【面白くなって来やがったからな。それより、まだ大物が残っているぜ】

【ああ】

フェンリールの視線の先からヘクトル式型のような機動兵器がやって来た。また、両脇をゾルゲが固めていた。

【刮目せよ、愚か者共よ！これぞ、新型の魔煌機兵ハンニバルだ！】

【ハンニバル……】

【おいおい。そんなもの持ち出して腹いせのつもりかい？】

【黙れ！貴様らのおかげで私は破滅だ！せめて貴様らの死体を献上して生き長らえてくれるわ！】

ハンニバルから黒いオーラが吹き出る。

【あの様子じゃあ、機体にのまれやがったな】

【さっさと破壊する】

【なら我らも交ぜてもらおう】

レオニダスとゼノがハンニバルの後方から歩いて来た。

【おう、そっちは終わったか？】

【バッチリや】

【んじゃ、両脇は任せる。俺らはこの新型とやらをブツ潰す。それで良いな……】

【わかった】

フェンリールとゼクトールは得物を構える。

【ぐぬぬ……!!どこまでも私をこけにしおって!!騎神だか何かは知らんがスクラップにしてくれる!!】

ハンニバルは戦斧を振り上げる。

【……………】

フェンリールはマシンガンをハンニバルの両腕に撃ち込む。

【なめるなっ!!】

ハンニバルは構わず戦斧を振り下ろす。

フェンリールはそれをスピンでかわす。

【そらよつと!】

隙をついてゼクトールがバスターグレイブでボディを薙ぐ。

【ハハ、修復したてだが問題ねえ】

【……………なまくらを持ってきたのか?】

【ククク……。新VII組のひよっこ共にヒビ入れられてなあ】

【……………そうか】

【貴様らあああつ!】

ハンニバルに乗るゲインツ少佐は怒りを爆発させる。

【ちったあ黙ってな!】

ゼクトールはバスターグレイブの切っ先をハンニバルに押し当て、衝撃波を放つ。

【ぐおおお!?!】

ハンニバルは後方へと押し込まれる。

【……………】

すかさずハンディソリッドシューターの追撃が叩き込まれる。

【パワーはまあまあだが、スピードが無えな】

【ヘクトルの発展系なら納得だがな】

【なるほどな】

(あの二人、おそろしく息が合つとるな)

(キュービィーは元傭兵らしい。おそろく通ずるものがあるのだろ

う)

既にゾルゲを倒したゼノとレオニダスはハンニバル相手に圧倒するキリコとルトガーを静観していた。

【ぐぐぐ……おのれ………！】

ハンニバルは再び戦斧を振り上げるも、その動作はガタガタだった。

【美味しい所は譲ってやる。決めちまえ】

【……………】

キリコは一旦距離を取り、試作のミッションディスクを挿入した。

【マーシャルコンバット、起動】

フエンリールのマシンガンがハンニバルを時計回りに銃撃する。続けざまにハンディソリッドシューターをボディに撃ち込み接近。シオルダータツクとアームパンチを打った直後、元の位置に戻る。その際にバックパツクから爆雷を投下。爆雷の爆破に合わせてハンディソリッドシューターをハンニバルの両手足に撃ち込む。止めにアイアンクローの一撃がハンニバルの頭部を引き裂いた。

【ハ、ハハハ……ハハハハ………！】

連続攻撃をまともに受けたハンニバルは行動不能に陥り、ゲインツ少佐はもはや再起不能となった。

【……………】

キリコは一瞥すらせず、ゼクトールの隣に戻った。

【………本当にとんでもねえな。まさか心まで折っちまうなんてな】

【……………】

【まっ、どのみちのまれてっから関係なさそうだけどな】

【……………】

【にしてもマーシャルコンバットか。射撃戦重視でなく、格闘戦重視の戦法か。なあ、やっぱり俺らと………】

【前にも断ったはずだ】

【チエツ！これで三連敗かよ】

「団長、とりあえず戻ろうや」

「第六本隊も来る頃だろう」

【そうだな……………？】

ルトガーはハンニバルの方を見た。

「な、なんや？」

「あれは……………」

ハンニバルから吹き出した黒いオーラが凝縮されていく。

【ヒヒヒ……………みすみす逃がしてたまるか……………。全て吹き飛ばが  
いい!!】

正気を失ったゲインツ少佐の声とともに、ハンニバルが震えだす。

【自爆する気か】

【チツ！ずらかるぞ！】

「おう！」

キリコたちは一目散に黒竜関から出ようとした。

【もはや遅いわ！イヒヒヒ……………！】

ゲインツ少佐は自爆スイツチのセーフティを叩き割った。

その瞬間、ハンニバルは大爆発を起こし、黒竜関は内部崩壊を起こした。

キリコたちは間一髪、黒竜関から脱出した。

【いや、びつくらこいたぜ】

ルトガーは胸を撫で下ろす。

「しかし……………見事に瓦礫の山やな」

ゼノの言うとおり、クロイツェン州とノルティア州の関所として名高い黒竜関は崩壊し、瓦礫の山と化した。

「これでまた、混乱が起きるだろうな」

【だな。これで満足かい？】

【……………】

キリコは無言で見つめる。

【……………一つ聞かせてくれ】

ルトガーはキリコに問いかける。

【……なんだ】

【お前さんは何のために戦ってたんだ？】

【……】

【俺ら猟兵はミラと戦いが全てだ。貴族様みてえに大儀だとか誇りのために戦ってるんじゃない。まあ、女目当てに戦うやつもいるらしいけどな】

【……】

【だが、お前さんはどうだ？呪いの根源を倒すらしいが、俺にはそれだけとは思えねえ】

【……】

【あるんだろ？】

【……あんたには関係ない】

【ククク……】

ルトガーは忍び笑いを漏らす。

【何がおかしい】

【安心したぜ。お前さんが空っぽな奴じゃなくてよ】

【？】

【それじゃ、俺は行くぜ】

【そうか】

【またな】

【いずれな】

【ああ】

ルトガーたちは去って行った。

【空っぽ……か。ひよっとしたらそうかもしれないな】

キリコはルトガーの言葉を反芻した。

【戻ったか】

【ああ】

キリコはノルティア街道の近くにフェンリールを隠し、ルーレ最下層でテイタニアと落ち合う。

「ザクセン鉄鉱山で魔獣が出たらしいが」

キリコはテイタニアから缶コーヒーを受け取り、話を促す。

「ああ。おそらく幻獣と呼ばれる類だろう。第六機甲師団が討伐に駆り出されたが、撃退するには及ばず、姿を消したらしい」

「そうか」

「そちらはどうだ。黒竜関が瓦礫の山と化したらしいが」

「それは——」

キリコはテイタニアに黒竜関での戦いを話した。

「わかった。ロツチナには報告しておく。それとキリコ……ご苦労だった」

「ああ……」

キリコはようやく一息ついた。

「そろそろ行く」

キリコはそう言って立ち去ろうとした。

「待て」

「なんだ？」

「一つ引き受けてほしいことがある」

「……なんだ」

「……ノルド高原にある調査に行つてほしい」

「ノルド高原？それに調査だと？」

「裏の情報をキャッチしたのだが、ノルド高原で秘密裏に戦艦が造られているらしいのだ」

「戦艦？」

「さらに、そこには第七機甲師団が関わっているらしい」

「第七が……。他に知るやつは？」

「一応、これを知っているのは私とロツチナだけだ」

「……鉄血宰相側が知らないということは、相当なものなのか」

「おそらくは。だが私もロツチナも表立っては動けん。そこでお前に頼みたい。引き受けてくれないか」

「……………わかった」

キリコは少し考えこみ、引き受けることにした。

「すまない、キリコ」

「一応聞くんが、戦艦とやらが本当にあつた場合、処理は俺の判断で構わないな?」

「無論だ」

「わかった。それで、どうやって行く?」

「20分後にノルド高原行きの貨物列車が出る。作業員として紛れ込めばギリギリまで気づかれなはずだ。ついて来てくれ」

「わかった」

キリコはテイタニアの後について行った。



## 翼

七耀暦1206年 8月9日 午前3:00

キリコはノルド高原の玄関口であるゼンダー門に潜入していた。ちなみにキリコは今、ゼンダー門の倉庫から拝借した第七機甲師団の軍服を着用している。

(やはりゼンダー門では戦艦とやらは影も形もないか。となると……)

キリコは軍服同様倉庫から拝借したノルド高原の地図を見つめる。(南側には円柱遺跡とやらがある。だがこちらは共和国監視塔と目と鼻の先。国際情勢が不安な今、リスクが大き過ぎる。一方北側はギリギリだが見つかる恐れのある地形ではない。やはり北を目指すべきか)

キリコは高原の北側にペンで丸を描く。

(そうと決まればいつまでもここにはいられない。とりあえず足があるな)

キリコはゼンダー門に設置された厩舎に入り、馬を適当に選ぶ。

「どうどう……。意外と大人しいな」

キリコが選んだのは芦毛の馬だった。キリコは芦毛の馬に鞍を乗せ、手綱を付ける。

(行くか)

キリコは芦毛の馬に跨がり、高原の北側目指して走らせた。

午前 5:30

東の空から太陽が登り、ノルド高原の固有種とも言える魔獣も活動を始めた。

キリコは極力戦闘を避け、かつ共和国監視塔から離れたルートを取った。

だが進むうちに、キリコはノルド高原の広大きさを甘くみていたと思いき知らされた。

夜明け前という時間帯だからか、食堂や酒保は閉まっており、キリ

コは水も食料も十分に得られなかった。

そのためキリコは喉の渇きに悩まされた。

仕方なくキリコは途中にあった集落で休憩を取ることを選んだ。

「キリコ side」

「エイジ・バートラーさんでしたか。つい最近赴任したんですか？」

「ああ」

俺は今、ゲルと呼ばれるテントのような家で軽食を取っていた。これはミルク粥というらしく、そこそこいける。

粥を食った後は、トーマの妹だというシーダという少女の淹れた茶を飲んでいる。

香りからして、どうやらハーブティーか何かのようだ。

ちなみに乗って来た馬は外で飼い葉を食べている。

「それにしても、お客さんなんて久しぶりだなあ。半年前にガイウス兄さんに会いにトマス神父さんが来て以来かな」

俺の目の前にいる男はトーマと言って、旧VII組のガイウス・ウォーゼルの実弟だと言う。

「ところでそっちにいるのは？」

出入口の所で見つめている者がいる。

「あつ！すみません。リリ、何してるんだ」

トーマが咎めると、シーダよりも若い少女が入って来た。

「えへへ……」

「もう！リリ！ごめんなさい、エイジさん。それにトーマ兄さん」

「いや、俺は良いんだけどね。すみません、妹がご迷惑を」

「別にいい」

俺は素焼きの湯呑みに入ったお茶を飲み干す。

「そろそろ行く」

「すみません、何もお構い無く」

「それで、聞きたいことがある」

「聞きたいこと、ですか？」

「高原の北側で人目につきづらい場所はあるか？」

「そうですね……北東部へ行ってみてはどうでしょう。あちらなら人目にはつきづらいいと思います」

「すまない」

「あつ、待ってください」

「？」

トーマが引き止める。

「……エイジさんはいったい何をしに行かれるんですか？」

「悪いが極秘任務だ」

「そう……ですか……」

「……俺は戦いに行くのではない」

「え……」

「この土地を戦火に包むことはしないしさせない。それだけは伝えしておく」

「エイジさん……」

「このお茶、悪くなかった」

「あ、ありがとうございます」

「またね〜!」

シーダは頭を下げ、リリは手を振って俺を見送る。

（このまま北に行けばラクリマ湖とやらに着く。だが見つかるリスクが高い。トーマの言うとおり北東を直指するか）

俺は馬に跨がり、高原の北東部を直指して走らせた。

「キリコ side out」

午前 6:50

キリコはノルド高原北東部に到着した。

（……向こう側は要り組んでいるように見えるな。行ってみるか）

キリコは芦毛の馬を橋のような道に進ませる。

（まるで橋のような地形。自然が作ったものだろうが、すさまじいな………!?!）

突然地面にひびが走り、足元が崩れはじめた。

「はあっ!!」

キリコは冷静に芦毛の馬にムチを入れる。

全速力を出した馬により、キリコは無事に渡りきった。

橋のような道は崩れ、向こう側と完全に途絶した。

(まさか崩れるとはな。これで戻ることは出来なくなったわけか)

キリコは再び前を向いた。

高原を少し進むと、洞窟の入り口のような場所に到着した。

「……………」

馬を降りたキリコは地面を見つめる。

(大勢の人間が入り込んでいるようだな。わざわざ足跡を消している辺り、どうやらここで間違いないようだな)

キリコはアーマー・マグナムに弾丸を装填し、覚悟を決める。

(何が出て来るかはわからない。だが俺には引き返すという選択肢はない。ただ進むだけだ)

キリコは洞窟へと入って行った。

(中はそれほど要り組んでいるわけではないようだ。それに魔獣の気配もない)

キリコは手探りで少しずつ進んで行く。

ある程度進むと、魔獣避けの導力灯が目についた。

(魔獣の気配を感じないのはこれが原因か。いよいよ核心めいてきたな)

さらに進むとかなり広い場所に出る。

(あれは……!?)

キリコの目の前には紅い飛行戦艦が鎮座していた。

(これは……カレイジャス号か? ロツチナによれば、黄昏の起きた日に黒の工房長と銅のゲオルグとやらの手引きでオリヴァルト皇子共々爆破されたらしいが)

キリコは思わず紅い飛行戦艦を見つめた。

「はあっ!」

「!?!」

背後から殺気を感じたキリコは間一髪で避ける。

襲撃者は大剣を振り下ろしてきた。

「ほう。この一撃をかわすとはな」

「……………」

キリコは無言でアーマーマグナムを構える。

「やる気か。面白い…………」

襲撃者も大剣を構える。

~~~~~♪~~~~~

突然、楽器の音が響く。

(この音は…………どこかで…………)

「お願い、無意味な争いは止めて。私のために争わないで」

奥からリユートを携えた金髪の男が歩いて来た。

また、左目には薔薇をあしらった眼帯をつけていた。

「……………」

襲撃者は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「あんたは……………」

キリコは驚きを隠せなかった。

「フフ。久しぶりだね、キリコ君」

その金髪の男とはカレイジャス号爆破によって命を落としたはずの、オリヴァルト・ライゼ・アルノールだった。

「キリコ? そうか、君が」

「俺を知っているのか?」

「弟からの手紙にあった。機甲兵戦術においてはかなりの使い手だと  
な」

「弟? まさか、あんたはクルトの…………」

「ああ」

クルトの兄は大剣をしまう。

「第七機甲師団所属のミュラー・ヴァンダール中佐だ。よろしく頼  
む」

「ええ」

「それにしても驚いた。弟と年は変わらないのに歴戦の戦士のような凄みがある。内戦である黄金の羅刹や黒旋風と渡り合ったというのも領けるな」

「生き残るのに必死だったただけだ。それにあくまでも機甲兵戦術での話だ」

「謙遜しなくてもいい。あの二人には随分と手を焼かされたからな。聞けばあの第九機甲師団にいたとか？」

「……………えつと……………二人とも、僕を置き去りにして盛り上がってないかい……………？」

完全に蚊屋の外になっていたオリヴァルト皇子は悲しげな表情を浮かべる。

「……………そういえばこのたわけがいたな」

「ヒドイッ！でもそういう放置プレイも……………♥？」

オリヴァルト皇子は頬を赤らめ、ミュラー中佐にウインクをする。

「キリコ君、俺はこれからあのたわけをしばらくつもりだが、協力してくれるか？」

「……………」

キリコは無言でポケットから何かを取り出す。

「それは、メリケンサックか？」

「軍服のついでに第七の倉庫で拝借した」

「……………」

ミュラー中佐は改めて軍服姿のキリコを見る。

「……………まあいい。一つ貸してくれるか？」

「……………」

キリコはミュラー中佐にもう一つのメリケンサックを渡す。

「ふむ。なかなかしつくりくるな。これなら良さそうだ」

「えーつと、二人とも？そんな物騒な物身につけてどうしたんだい？」

オリヴァルト皇子は軽口を叩きながらも冷や汗を流す。

「隠れていると言ったにもかかわらず、勝手に出て来て場を掻き乱

す。挙げ句、へらへらと何の反省もない……。少し空気の読み方というものを伝授してやろうと思つてな……!」

ミュラー中佐は指をペキポキと鳴らす。

「……………」

「あー、その、命だけは……………」

「殺しはせん」

「ほっ」

「その代わり再起不能になつてもらおう」

「ミュラー君?!」

「少なくとも世の中は静かになるだろう」

「キリコ君も!?えつと、ボク怪我人……………」

「遺言はそれでいいのか?」

「……………」

「スイマセンでしたー!!!」

オリヴァルト皇子はミュラー中佐とキリコの前で土下座した。

「それよりキリコ君、なぜここに?」

ミュラー中佐にこつてりしぼられた後、オリヴァルト皇子はキリコに問いかけた。

「とある奴からの以来でな。ノルド高原で戦艦が造られているとな」

「なるほどね。大方情報畑からだろう。だがそんなことより……………」

オリヴァルト皇子は微笑みを消し、キリコの眉間に愛用の拳銃を向ける。

「君は陛下暗殺未遂で処刑されたはずだ。なぜ生きている?」

「……………」

「それ以前になぜ陛下を撃つた?」

オリヴァルト皇子は目を細める。

「……………あんたは黄昏については?」

「無論知っている。我らアルノール家が代々に渡つて帝国を覆う呪いに苦しめられてきたこともね。だがアルノール家でない君にいつ

「たい何の関係がある？」

「信じるかどうかはあんたに任せる。まず、俺の話を聞いてほしい」

「……わかった」

オリヴァルト皇子は拳銃をしまい、笑みを浮かべる。

「許してくれたまえ。こうでもしないと納得する人間が出てこない  
と思っただね」

「……………」

「では聞こう。キリコ君、君の語る真実を」

「ああ」

キリコはオリヴァルト皇子とミュラー中佐にあの夜の出来事を、自身のことを、倒すべき宿敵のことを語った。

「……………」

二人は言葉を失った。

「……………」

キリコはただ、無言を貫いていた。

「馬鹿な……………」

「なんとということだ……………」

オリヴァルト皇子はキリコの顔を見る。

「私たちは、キリコ君一人になにもかもをおっ被せてしまっていた  
のか……………」

「気にしなくていい。俺は異能の力で戦いから逃れられないし、安  
息を得ることもない。生きている限りな」

「キリコ君、正直私は君を即座に撃つつもりだった。陛下の仇とし  
て、アルノール家の人間として」

「オリビエ……………」

「だが陛下は、父上は君に全てを託した。だから敢えて銃弾にたお  
れた……………」

「……………」

「本当にすまない。許してくれ」



「許さなくてもいい。こうなることはあの時から承知の上だ。それに例え、皇帝やあなた、それにセドリックが俺を許してもこの国の人間全員が納得するはずがない」

「キリコ君……」

(この若さでこの境地、いったいどれほどの地獄を見てきたというのだ……)

ミユラー中佐はキリコの佇まいに畏敬と畏怖を覚えた。

「それで、あれはカレイジャスカ?」

キリコは紅い戦艦を見ながら聞く。

「正式にはカレイジャスⅡだね。皇族専用機ではあるんだが、より戦艦寄りになっているんだ。艦首砲に加え、様々な特殊機能を装備させることになっている」

「カレイジャスの発展機か」

「そうとも、新しい翼というわけさ。いずれ光まとう翼となって帝国の空を飛び回るだろう」

「……建造に関わっているのはあなたたちだけじゃないはずだ」

「ほう?どうしてそう思うんだい?」

「普通に考えれば分かることだ。皇室の資産がどれくらいかは知らないが、それだけで造れるはずがない」

「やっぱり優秀だね。そうだな……具体的には四大名門などの有力貴族にZCFやラインフォルトなんかの企業。さらにリベール王室のバックアップも受けているよ」

「……………」

オリヴァルト皇子の口から語られる名前にキリコは啞然とした。

「おい、オリビエ。良いのか?彼は——」

「……戦艦などどこにもなかった。単なるガセに過ぎなかった」  
冷静さを取り戻したキリコはきっぱりと言ったのけた。

「フフ、とんだスパイだね」

「情報局の、ロツチナの狗になった覚えはない」

「ロツチナ?そんな人物が情報局にいるのかい?」

「表向きはルスケと名乗っているらしいが」

「ほう。情報局長のルスケ大佐、か。なかなかの癖の強い人物らしいが」

「知っているのか？」

「宰相殿の派閥に加わってないにもかかわらず、異例のスピードで出世していると噂になっていてね」

「かなり権謀術数に長けているらしく、敵対する者が一人もいないというがな……」

「……………」

「そういえば……」

「ん？」

「あなたは黄昏が起きた日、カレイジャスの爆破で死んだと聞いている」

「ふふ、何でだろうね？」

「……キリコ君は怪盗Bというのを知っているか？」

「怪盗B……神出鬼没のこそ泥か」

「そうだ。怪盗Bことブルブランの手によってオリビエは死なずに済んだのだ」

「もーっ！いきなりバラしちゃうなんてミュラー君てばイジワルなんだから。でも、そんな辛辣な所も……♡？」

「ヴァンダールの剣の一刀両断とアーマーマグナムの一撃、どちらか好きな方を選び」

「スミマセン調子にのりました」

「……………」

キリコは二人のやり取りに呆れるしかなかった。

「……ゴホン。あの日、カレイジャスに仕掛けられていた爆発物が起動してね。ブリッジにいた僕やトヴァル君、アルゼイド子爵閣下は死を覚悟したんだ」

「……………」

「だがすぐには爆発しなかった。むしろ何か結界のようなものが張

られていたんだ」

「結界？」

「最初からオリビエたちを殺すつもりではなかったのか……」

「その直後、見覚えのある魔法陣が展開されて、間髪脱出した。もつとも、爆風を浴びてよりハンサムになったけどね」

オリヴァルト皇子はにんまりと微笑む。

「オリビエ……」

「ということは、後の二人も？」

「いや、子爵閣下だけは行方が知れない。あの方に限ってそんなことは無いと思うが……」

オリヴァルト皇子は悲しげに目を伏せる。

「一つ聞きたいことがある」

「なんだい？」

「ロツチナによると、爆発物を仕掛けというのは銅のゲオルグという奴らしいが、心当たりは？」

「銅のゲオルグ……」

「……さあ、聞き覚えがないね」

「そうか……」

キリコは若干の疑念を覚えた。

「さて、キリコ君。君はこれからどうするんだい？」

「とりあえず帝国かクロスベルに戻る。いつまでもここにはいられない」

「いや、今は戻らない方がよい」

「なぜだ？」

「君はどうやら、ここに来る前に色々やらかしているみたいだね？」

「オーロックス砦に黒竜関、そこを襲撃した犯人を帝国軍が血眼になって探しているらしい。帝国全土は勿論、その捜査範囲はクロスベルにまで及んでいるらしい」

「捜査には情報局の、カカシ男や氷の乙女が絡んでいるらしい。今

戻っても彼らに摘発されて終わりだろう。ほとぼりがある程度冷めるまでここに留まるのが賢明だと思う」

「いや、俺は……」

「君の言う宿敵——ワイズマン。おそらく君は帝国各地を混乱の渦に巻き込むことで彼を引きずり出そうとしているんだろう。違うかい？」

「それは……」

キリコは思わず視線を外す。

「君とワイズマンの因縁は他人が、この世界の人間が口を挟めることではないだろう。だが敢えて言おう。君は間違っている」

「……………」

「君がこの数ヶ月、第Ⅱ分校で培ってきたものはなんだい？」

「質問の意図がわからない」

「君は一人で難問をクリアしていったのかい？」

「これは俺の問題だ。あいつらは……………」

「良かったよ。君が彼らのことを口にしてくれて」

「！」

キリコの反応にオリヴァルト皇子は微笑む。

「君はおそらく、仲間たちと完全に縁を切ったつもりでいるようだが、本当は今も思っているはずだ。じゃなかったら、あいつらなんて言葉は出てこない」

「……………」

「Ⅶ組というクラスの最大の特徴はね、仲間をどこまでも信じるということさ」

「弟だけじゃない。彼らは信じているんだろう、君が生きていることを」

「……………」

「君も、信じているんだろう？彼らと共に手を取る可能性を」

「……………」

キリコは帝国方面を見つめる。その後すぐにオリヴァルト皇子たちを見る。

「……俺は何をすれば良い？」  
「？」

「自分の食い扶持くらいは自分で稼ぐ」

「ふふ、決まりだね。ミユラー、案内してやってくれ」

「わかった。ついて来てくれ。一応、他言無用に頼む」

「わかっている」

キリコはカレイジャスⅡの仕上げに携わることになった。

(ついでと言っては何だが、あの人立ちに協力を仰いでみようかな)

(ちょうど、人材には困らないしね)

オリヴァルト皇子は鼻歌を歌いながら、ARCUSⅡを取り出した。

一方、その頃

「閣下」

「何かな？リーヴェルト少佐」

「先日の黒竜関襲撃の件ですが……」

「ああ、聞こう」

「襲ったのは二機。一つは猟兵王の紫の騎神であることは間違いありません。もう一つについては調査中ですが、いずれはつきりするかと」

「それはいい」

「え？」

「黒竜関を襲撃したという謎の蒼い機甲兵。既に工房の方で調べている。近いうちに結果は出るだろう」

「………わかりました。では、本業に戻ります」

「うむ」

リーヴェルト少佐はその場を後にする。

「………」

男は外の景色を見つめる。

「地獄から舞い戻って来たか。異界より来たりし不死の異能者、キ

リコ・キュービーよ」

男はニヤリと口角を上げた。

## 訣別①

七耀暦1206年 8月15日

ミシユラム湿地帯

【……………】

悠然と佇む蒼と黒の機甲兵の眼前には、大破したドラッケンⅡ、シユピーゲルS、ヘクトル式型、ケストレルβが転がっていた。

「皆……さん……」

目の前の光景に白い髪の少女はただ、膝を落とすしかなかった。

三日前 8月12日

（やはり衛士隊の数が少ない。動きからして、ミシユラム方面に集まっているようだ）

キリコはクロスベル市港湾区で衛士隊の動きを探っていた。

現在、クロスベルにおける駐留軍や衛士隊の動きが妙に静かだという情報を手にした。

不審に思ったキリコはオリヴァルト皇子の後押しを受けてクロスベルに潜入することにした。

（噂ではルーファス総督はミシユラムの湿地で何かやろうとしているらしい。どうせろくでもない何かだろうが。ん？）

キリコのARCUUSⅡに通信が入る。

「（この番号は……）なんだ？」

『ごあいさつだな。キリコ、今どこにいる？』

「どこだろうと構わないだろう」

『フム、クロスベル市の港湾区あたりかな？』

「……………」

『フフ、種明かしすると私もクロスベルに来ているのだよ』

「総督府の手伝いか」

『まあそれはさておき、直に話がしたい。中央広場にあるレストランで待っている。ではな』

「おい……………チツ」

キリコは舌打ちし、中央広場へと向かった。

レストランに到着したキリコはウェイトレスに案内され、二階の奥のテーブルに通された。

「待っていたよ」

「……………」

キリコは慚然としながらロツチナの座るテーブルについた。

ロツチナは気にも留めず、料理を注文した。

「さて、話というのは他でもない。お前に足止め役をしてほしい」

「足止め?」

「Ⅶ組のことだ」

「……………なんだと?」

「彼らの足取りを追ってみたところ、サザールアント州、ラマール州で霊脈とやらを静める活動をしていることがわかった。帝国東部の警戒が厳しい今、次にクロスベルに来るのは明白だろう」

「それはわかった。だがなぜだ」

「騎神は知っているな?」

「ああ」

「騎神は灰、蒼、緋、紫、銀、金、黒と全部で七体存在するのだが、その内の一体である金がここクロスベルにあるらしい」

「……………ルーファス総督の狙いはそれか」

「間違いなくな。さらにクロスベルの霊脈の動きが活発になっていくらしい。彼らが来る理由は言うまでもないだろう?」

「……………」

「それで?受けるか?」

「……………」

キリコは顎に手をやり、黙考する。

「……………いくつか条件がある」

「言ってみたまえ」

「それは——」

キリコはロツチナに二代目Ⅶ組の足止め役の交換条件として、ある



ことを告げる。

「……良いだろう。とりあえず、まずは……」

「ああ……」

翌日 8月13日

「……失礼」

「なっ!?なんですよ!あなたたちは!」

クロスベル市西通りにあるアパルトメント・ベルハイム。その一室に銀髪の女軍人が押し込む。

「リナ・クロフォードだな?」

「ええ、そうよ!軍人がいったい何の用なの!」

「あなたには国家非協力罪の疑いがある。そちらの子ども共々来てもらおう」

「国家非協力罪!?いったい何の証拠があつて……!」

「ごねるならさらに罪が重くなるが?子どものためを思うなら賢明な判断を求める」

「……」

リナはケンとナナの兄妹を見る。

「……」

「おかーさん!」

「どこ行くの!」

「……大丈夫よ。こんな疑い直ぐに晴れるから」

「さつさと来ることだ」

女軍人はリナたちを連行した。

「こちらだ」

「?」

リナたちは西クロスベル街道入り口に連れて来られた。

「彼から話があるそうだ」

「……」

リナは警戒心を露にするが、歩いて来た青年を見て驚きを隠せな

かった。

「わざわざ来て頂き、ありがとうございます」

「あなたは……キリコ君……」

「おねーちゃんのおともだちだ〜!」

「カッコいいおにーちゃんだ〜!」

ケンとナナはキリコに駆け寄る。

「こんな形で呼び出してしまったこと、お詫びします」

「キ、キリコ君……どうして……」

「落ち着いて聞いてください。近いうちに、衛士隊による人狩りが始まります」

「人狩り……?」

「国家非協力罪などとイチャモンをつけて連行し、タングラム要塞に送る。要するに体のいい徴兵です」

「そんなことが……」

「特に、Ⅶ組の一人であるユウナの家族ともなれば真っ先に狙われるでしょう。こう言ってはなんです、人質としては最高のカードと言えます」

「……………」

「その前に帝国へ脱出してください。あなたのご主人もいずれ俺が脱出させます」

「そういうことだったの……」

リナは目を伏せる。そして顔を上げる。

「キリコ君の気持ちは嬉しいわ。でもね、私たちは残るわ」

「なぜです?」

「私の役目はね、夫や子どもたちが帰って来る家を守ることなのよ。特にユウナはたくさん食べるから、ご飯をたくさん作っておかないと」

「……………」

「大丈夫よ。それにクロスベルの女はね、これくらいのことではこたれたりしないわ」

リナの精一杯の笑顔の前に、キリコは折れるしかなかった。

「……わかりました。ですが、くれぐれも」

「ありがとうございます。どうする？キリコ君もご飯食べていくっ。」

「せっかくですが、俺もやることがあるので。後、俺のことは内密に」

「わかったわ。キリコ君も気をつけてね」

「はい……」

「ケン、ナナ。行くわよ」

「は〜い！」

「またね〜！」

リナたちは戻って行った。

「……失敗だな」

「ああ」

「ユウナ・クロフォードの家族を帝国西方へ脱出させる。それがロツチナとの交換条件の一つだったな。だがああも言われては折れるしかないか」

銀髪の女軍人——テイタニアはキリコを労う。

「それで、どうするつもりだ？」

「……こうなった以上、他に手段はない。あいつらを止める」

「例え……殺してでも……」

「……そうか」

キリコの昏い目を見たテイタニアは去って行った。

二日後

（あの飛行艇はカプア宅急便の。わざわざ空からやって来るとはな）

キリコはロツチナからの情報で、東クロスベル街道外れにある場所へとやって来た。

（Ⅶ組は全員いるな。無事で何よりだ。だが……）

（……あいつらと会うのも今日までかもな）

キリコは二代目Ⅶ組の姿を確認し、去って行った。

「なんだか騒がしいですね」

「息苦しいような感じがしますね」

「うん……どこか慌ただしいというか……」

ユウナは故郷の空気に違和感を覚える。

「そういえば、ユウナの実家もこの近くだったな」

「うん。心配だし、ちよつと寄り道しても良いよね？」

「もちろんです」

「んじゃ、行こうぜ」

ユウナたちはアパルトメント・ベルハイムへと急いだ。

「ただいまー！」

「まあ、ユウナー！」

「お母さん……良かったあ……！」

ユウナは母親の顔を見るなり安堵の表情を浮かべる。

「大丈夫!? ケガとかない!？」

「大丈夫よ。あなたのお母さんはこんなことじゃめげないわ」

「それは何よりです」

「……………」

アルティナは部屋の中を見渡し、黙った。

「どうかしたのかよ?」

「いえ、何でも」

「?」

(軍靴のような跡が見受けられますね。おそらくは……)

「さ、今からお茶を淹れるわ。あまり時間は取れないでしょうけど、

少し休んでいきなさいな」

「お心遣い、感謝します」

「どうも」

「ここはお言葉に甘えるところでしょう」

「ありがとう、お母さん」

ユウナたちはしばしの休息を取り、ベルハイムを後にした。

「それよりよ」

ベルハイムを出た直後、アツシユは口を開く。

「なんかあったんだろ?」

「……………」

「な、何かって何よ?」

「……先ほど、ユウナさんのご実家の床に多数の同じ足跡が見受けられました」

「大きさと形状から言って、軍靴の類いかと」

「ぐ、軍靴って、何でそんなのがウチにあるのよ!?!」

「おそらく、衛士隊辺りがユウナさんのご実家にやって来たのかも  
しれません」

「な、なんで……」

「今のところ、僕たちⅦ組はお尋ね者扱いだ。多分、その家族である  
ユウナのお母さんは……」

「そんな……」

ユウナはうなだれた。

「そのガキ共、何してる」

「なっ!?!」

背後からの声にクルトたちは身構える。

「セ、セルゲイ課長!?!」

「よう、ユウナ」

セルゲイと呼ばれた男はニヤリと笑う。

「ユウナさんのお知り合いですか?」

「う、うん。この人はセルゲイさんって言って特務支援課の課長  
だった人よ」

「よろしくな、Ⅶ組」

「僕たちのこともご存知でしたか」

「おそらく、プラト―主任かランディ教官からお聞きになったんで  
すか?」

「まあな。とりあえず、ここじゃなんだ。駅前のジオフロントAを  
通ってジオフロントBに來い。話はそこからだ」

「大丈夫なのか？」

「罨、ではなさそうですね」

「アルってば、何言ってるのよ」

「罨だったらブチのめせばいいだけだしな」

「アツシユも！」

「ハハハ、企みがあるなら回りくどい真似はしねえよ。待つてるぜ」  
セルゲイは去って行った。

「とにかく、行きましよ」

ユウナたちはセルゲイの言うとおりに、ジオフロントAに向かった。

「おっ！来たな」

「……久しぶり」

「ヨナ！それにシユリさんも！」

ジオフロントBにある端末室についたユウナは眼鏡をかけた少年と青い髪の少女に駆け寄る。

「知り合いか？」

「ヨナ・セイクリッド。確かエプスタイン財団の연구원ですね。一時期はハツカー兼情報屋として活動していたとか」

「さすがは黒兎。ボクのこともご存知か」

「へえ？大したガキだな」

「限りなく黒に近いグレーなんだけどね」

「そちらの方は？」

「シユリ・アストレイドさん。アルカンシエルのアーティストなのよ」

「……よろしく」

「あのアルカンシエルの……！」

「ユウナさんは顔が広いですね」

「ほとんどはロイド先輩たちを通じてなんだけどね」  
ユウナは苦笑いを浮かべる。

「ククク、ずいぶんと打ち解けたみたいだな」

セルゲイが歩いて来た。さらにその後ろに二人の男女もいた。

「ダドリー警部！それにノエルさん！」

「騒がしいぞ、クロフォード」

「良いじゃないですか。ユウナちゃん、久しぶりだね」

「お二人もユウナさんのお知り合いなんですね」

「ああ、アレックス・ダドリー。元クロスベル警察捜査一課のエースと言われた凄腕だ。あっちがノエル・シーカー。元クロスベル警備隊若手のホープって言われてる」

「セ、セルゲイさん！」

「あはは、改まって言われると恥ずかしいです……」

「事実だろう。とりあえず、そっちの名前も聞かせてくれ」

セルゲイに促され、二代目Ⅶ組も自己紹介をした。

「んで？話ってなんだよ、おっさん」

「ちよつと、アツシユ！」

「別に構わん。さて、そろそろ情報交換といくか」

セルゲイの言葉にその場にいる全員の顔つきが変わる。

「まずはユウナ、お前らの話を聞かせてくれ」

「わかりました。良いよね、みんな」

「ああ」

「はい」

「まっ、良いんじゃないね？」

「お味方の方ですよ、信じてても良いかと」

「わかった。では報告します」

ユウナたちは黄昏が発現してから今日までのこと、クロスベルを訪れたことを語った。

「……………なるほどな」

「信じられん……」

「まさか、帝国でそんなことが起きたなんて……」

セルゲイは瞠目し、ダドリーとノエルは驚きを隠せなかった。

「マジかよ……！」

「黄昏……」

パソコンで作業していたヨナとそれを見ていたシユリは二の句を  
継げずにいた。

「そしてこのクロスベルの霊脈ってのが荒れているからそれを静め  
に来た、そうだな？」

「そうです」

「よしわかった。この件はお前らに任す」

「セルゲイさん!？」

「若いモンの可能性を信じるつてのが俺らオヤジどもの特権でな」

「実はめんどくせえだけじゃねえの？」

「ククク、そうとも言うな」

「あ、あはは……」

「まあ俺らも自由に動けないつてのが本音でな。今こうしてる間も  
衛士隊の連中の目を欺いている。それも長くは続かん」

「やはりそうですか……」

「衛士隊のほとんどは帝都憲兵隊から選抜された精鋭。彼らがその  
気になればクロスベルを武力制圧することも容易いかと」

「大人とガキの喧嘩みてえなもんだな」

「……その喧嘩にもなれば良いんだがな」

「課長……」

ユウナは不安そうにセルゲイを見つめる。  
すると――

「おいアンタたち!やべえぜ!」

ヨナが大慌てでユウナたちの方を向く。

「どうした!？」

「どうやら見つかったみたいだ。衛士隊の連中がジオフロント内に  
入って来てる!」

「チィ!仕方ない!霊脈の件、お前たちに任せる!」

「ダドリー警部……」

「お優しいのですね♪」

「カカ、ツンデレかよ」



「やかましい！」

ミュゼとアツシユの軽口にダドリーは憤慨する。

「まあまあ。とにかく、ここは私たちが時間を稼ぐから君たちは脱出してー。」

「大丈夫なんですか……?」

「大丈夫。それよりユウナちゃん、二人を頼むわね」

「ノエルさん……わかりました！任せてください！」

ユウナたちはヨナとシユリと共にジオフロント脱出を開始した。

「気持ちの良いガキ共だな」

「ユウナちゃん、良い仲間に巡り会ったようですね」

「さすがはバニングスの後輩なだけはある」

「あいつら、第Ⅱ分校ってことはランデイの教え子でもあるみてえだしな」

「ランデイ教官から、見てみたい気もしますね」

「想像は出来んがな」

殿を買ってでた三人は二代目Ⅶ組の背中を見つめた。

「……それにしても、どうしてここが」

「まさか、密告者が？」

「考えたくはないが、その可能性はある」

セルゲイたちは得物を構えつつ、不安に駆られた。

だが衛士隊は一向に現れなかった。

一方、ジオフロントAに展開していた衛士隊員たちは奥に進めずにいた。

「くっ！またやられた！」

「奴はスナイパーライフルを使っているぞ！」

「まさか、レジスタンスの奴らなのか!？」

「わからん！まずはぐわっ!？」

「おのれ！卑劣な真似を！」

次々と味方をやられていく光景に、衛士隊員の一人が吠える。

(長距離狙撃……以前マヤからコツを聞いていて良かったな。シドニーの説明は何一つ理解しきれなかったが)

偶然、二代目VIIがジオフロントAに入って行くのを見かけたキリコは嫌な予感を覚えた。

テイタニア経由でスナイパーライフルを入手し、ジオフロントで待ち構えていると、予感は的中し、衛士隊が突入。

キリコは迷うことなくゲリラ戦を展開、衛士隊の一方的な足止めに成功。

(そろそろ移動するか)

キリコは最後の狙撃を行い、ジオフロントを脱出した。

「ふう。何とか脱出できたわね」

「途中、魔獣や人形兵器と鉢合わせたけどね」

「とりあえず、ミシユラムを目指すか」

「いや、止めておいた方がいい」

シユリが口を挟む。

「え?どうして……」

「今ミシユラムへの船は一便も出てない。このまま行っても捕まるだけだぜ」

「そんな……!」

「ずいぶんと警戒しているみたいですね」

「ちよつと前にジオフロントに侵入した奴がいてさ。なんでも、タングラム門とベルガード門両方を混乱させようとしたらしいんだ」

「そんなことがあったの!?!」

ヨナの言葉にユウナは驚きを隠せない。

「しかもさ、その侵入者つてのがジオフロントの排水パイプを通じて海に逃げた。ちなみに死体は上がってない」

『……………』

ユウナたちは言葉を失う。

「とにかく、それ以来港湾区の警戒は強まっているのさ」

「ならどうすれば……」

「可能性があるとすれば、南のウルスラ間道かな」

「確かに、ウルスラ間道からならミシユラムの湿地帯に繋がっています。ですが」

「向こうも対策しているだろう」

「とにかく、行ってみましょう。結論を出すには早計かと」

「そうね。行ってみよつか！」

「話は決まったな」

「うん。二人とも、ありがとう」

「そんじゃ、ボクは行くよ」

「またな」

ヨナとシユリは去って行った。

「あたしたちも行きましたよ」

「……………」

「クルトさん？」

「いや、上手く行き過ぎてると思ってたね」

「え？」

「いくらジオフロントが複雑な造りをしてると言っても、相手は精鋭揃い。どこかで鉢合わせする可能性はあった」

「ですが、鉢合わせすることはなかった」

「偶然じゃないの？」

「アホかてめえ」

「何よ！」

「脱出路だけ開いてて他は全部閉まってました、んな偶然あるかよ」  
「しかも、ジオフロントA区域方面の扉はもれなく閉まってましたね」

「そ、そういえば…………！」

「偶然にしては不自然です」

「……………僕たちは誘き出されたのかもしれない」

「でも、何のために…………」

「それが分かれば苦労はねえよ」

「ミュゼさん、何か分かりませんか？」

「……………」

ミュゼは目を瞑り、異能を発動する。途中でフラリと倒れこんだので、ユウナが支える。

「大丈夫？」

「はい、ありがとうございます」

「何か分かったのかい？」

「……………分かりません。ただ……………」

「ただ？」

「まるで……………決められた盤面が何かに歪められているような感じがします」

「歪められている…………？」

「それも呪いが原因か？」

「分かりません……………」

「とにかく、そろそろ移動しましょう」

「だな」

「ミュゼ、歩ける？」

「はい、大丈夫です」

ユウナたちは移動を開始した。

（あの人はもう居ない……………なのに……………この気持ちはいつたい……………）

「フフ、衛士隊も事態の収束に大混乱だ。上手くやったな」

「成り行きだ」

ジオフロントを脱出したキリコはロツチナの手引きでミシユラムのホテルにいた。

「VII組はどうやってこのミシユラムに來ると読む？」

「どうにかして來るだろう」

「まあ、十中八九ウルスラ間道を通って來る。そのために湿地帯手前には中隊が陣を張っている。衛士隊もさらさら怠りない」

「……………」

キリコは腕を組み、瞠目する。

「フェンリールだが、お前の言っていた仕掛けは施してある。まあ、初見で気づかれることはないだろう」

「そうか。それで、他は？」

「直ぐに出来ることではないのはわかっているだろう。まあ、データは揃っているし、近いうちにお披露目できるよ」

ロツチナは紅茶を啜る。

「……………」

キリコはコーヒーを飲み干し、席を立った。

「矛盾しているな」

「？」

「口で言っていることと実際にやっていること。今のお前はまるで天秤のようだ」

「……………」

キリコは振り返ることなくホテルを出ていった。

「フフフ……………」

ロツチナは紅茶のお代わりを注文した。

ユウナたちはウルスラ間道を通り、湿地帯を目指していた。

だが手前で陣を張っている衛士隊に足止めを食っていた。

「やはり警戒されているな」

「いよいよ手詰まりですか」

「いや、そうとも限らない」

「諦めるのは早いよ」

「えっ!？」

ユウナたちが振り向くと、そこにはIX組主計科生徒のスタークとルイゼがいた。

「ルイゼ！」

「スターク！君もクロスベルに来てたのか！」

「うん。ユウナちゃんも久しぶりだね」

「君たちなら来ると思ってたよ」

「つたく、どいつもこいつもしぶてえな」

「ふふふ、それも第Ⅱ分校の美点かと」

「はは、言えてるかもね」

「とにかく、一度聖ウルスラ医科大学に行こう。もう一人クロスベ  
ルに來ている分校生徒がいるんだ」

「へえ、誰だろ？」

「じゃあ、出発だね」

新Ⅶ組はスタークとルイゼの先導で聖ウルスラ医科大学を目指す。

「まさかヴァレリーさんも来てたんですね」

「しかも医科大学の看護師見習いとしてですか」

新Ⅶ組はナース服を着た主計科生徒のヴァレリーに再会した。

「ククク、コスプレかと思っただぜ」

「……やめてくんない？その言い方」

ヴァレリーはジロリとアツシユを覗む。

「セシルさん、お久しぶりです」

「ユウナちゃんもね。そしてはじめまして、Ⅶ組のみんな。看護師

のセシル・ノイエスよ」

「はじめまして」

「ふふ、綺麗な方ですね」

「セシルさんもユウナさんのお知り合いでしたか」

「うん。近所に住んでて、昔から知ってるの」

「そうね。おっと、積もる話はあるけれど、そろそろ行かなくちゃ」

「患者さんの所にですか」

「ええ………」

セシルは階段を上がろうとしたが、ユウナたちの所へ戻る。

「セシルさん？」

「……あなたたちも会っておくべきかもしれないわね」

「え？」

「ほんとは守秘義務違反になるんだけどね。この医科大学には特別  
病棟があつてね。そこにある人が入院してるの」

「入院……」

「!?まさか……」

「ええ。エレボニア帝国皇帝ユーゲントⅢ世陛下よ」

「……………」

アツシユは拳を固く握った。

「では、我らはこれにて」

「陛下も今は御身のことをお考えください」

「うむ……」

ルーファス総督とヴァンダイク名誉元帥との面会を終えたユーゲントⅢ世は窓の外を見つめていた。

（世界は刻一刻と戦乱へと動いている。これを止められるのはⅦ組を冠する若者たちか、それとも……）

## 訣別②

「失礼します」

「入りましたえ」

ユウナたち二代目Ⅶ組はセシルと共に特別病棟へと足を運んだ。病室には気の強そうな女医とユーゲントⅢ世が待っていた。

「そなたらか」

ユーゲントⅢ世は微笑みを浮かべる。

「君たちが患者の言っていたトールズ第Ⅱ分校の生徒たちか」

「貴女は？」

「こちらは陛下の執刀医を務めるセイランド教授よ」

「セイランドだ、見知りおき願おう」

（あれ？セイランドって確か……）

（レミフェリアにある有名な医療機器メーカーですね）

「……面会なら15分までだ。それ以上は認めん」

セイランド教授は病室を出ていった。

「廊下で待ってるわ」

セシルも病室を出た。

「さて……」

ユーゲントⅢ世は二代目Ⅶ組の方を向く。

「改めて、よく来てくれた」

「陛下……」

「ご無事で何よりです」

「お元気そうですね」

「うむ。まだまだ本調子には程遠いがな」

ユーゲントⅢ世は次にミュゼを見る。

「ミルディーヌ公女もよく来てくれた。非公式ではあるが、カイエン公爵就任を祝わせてもらおう」

「もつたいない御言葉……」

ミュゼは深々と頭を下げる。



「そして……」

「……………」

アツシユは顔を伏せる。

「そなたも無事であったか」

「……なんでだ……………」

「？」

「俺は……あんたを……殺そうとしたんだぞ……………」

「それはそなたの意志ではない。古来よりこの帝国を蝕む呪いのせいなのだ」

「それに俺は……あいつを……………」

「……キュービーか……………」

「あ……………」

「キリコ……………」

「……………」

ユウナは顔を上げる。

「どうか、教えてください。どうしてキリコ君が貴方を撃つたのかを」

「ユウナさん……………」

「不躰ではありませんが、僕からもお願いします」

「お願いします」

「頼む……教えてください……！」

アツシユも頭を下げる。

「……良からう。心して聞くがよい」

ユーゲントⅢ世はあの夜の出来事を、キリコと呪いの根源たるものとの因縁を、そして呪いの強制力に動かされたアツシユの身代わりとして贄の役目を自ら引き受けたことを二代目Ⅶ組に語った。

「そして彼は余を撃つたことで贄としての役目を全うした。その後については断片的ながら聞いている。最期は悪足掻きの末に処刑されたそうだ……………」

「そ……んな………！」

「バカな……!?!」

「ありえません………!?!」

(キリコ………さん………)

ユーゲントⅢ世から語られた衝撃的な内容に二代目Ⅶ組は茫然自失となった。

「なんだよ……そりやあ………」

アツシユは拳を真つ赤になるまで握りしめる。

「そなたらの気持ちはよく分かる。余や宰相も初めて聞いた時には耳を疑った。だがこれらは事実だ。余が血を流したことで黒キ星杯が顕現し、黒の聖獣が討たれたが故に世界に黄昏が訪れた」

「全て黒の史書原本に記された通りにな」

「そんなんじやねえ!」

アツシユが吠える。

「予言だか何だか知らねえが、あんたに銃を向けたことは俺がやったことだ!なのに俺は……あの場にいたあいつに全部押しつけちゃったってことじゃねえか!」

「俺は………こんなにも力ついたことはねえ………!」

「アツシユさん………」

「………陛下………」

ミュゼが切り出した。

「キリコさんは………本当にご自分の意志で………?」

「うむ。汚れ役は己一人で良いと言ってな。全ては、そなたらを守るためにしたことだと思う」

「守る………」

「そうだ。それが………む………」

ユーゲントⅢ世の顔色が悪くなる。

「ツ!?!陛下!?!」

「そろそろ面会は終わりだ」

セイランド教授が病室に入って来た。

「もう時間ですか………」

「やむを得ない、出よう。アツシユ」

「……ああ」

二代目Ⅶ組はセシルに連れられ、特別病棟を出た。

一方、ミシユラム湿地帯

「ぐはっ!？」

「悪いな」

キリコは衛士隊員の一人を気絶させ、拘束した。

(ルーファス総督はまだ来ない。今のうちにやれることはやっておかなくてはな)

「どうやらそちらも片付いたようだな」

「テイタニアか」

奥から衛士隊の隊服を着たテイタニアが歩いて来た。

「作戦の邪魔が入らぬよう押さえしておく。後はお前次第だ」

「……………」

キリコはゆっくりと牙を研ぎ始めた。

「落ち着いたかしら?」

二代目Ⅶ組は医科大学に隣接する寮のセシルの部屋にいた。

「はい……ありがとうございます……」

「落ち着くまでここにいてもいいわ。悪いけれど、これから他の患者さんの所に行かなくちゃ行けないから……」

「いえ、お忙しい中ありがとうございます」

「……無理しないでね」

セシルは医科大学の方の方に向かった。

「呪いの根源たるものとの因縁、ですか」

「正直、頭の整理が追い付かないな……」

「もしかして、ミュゼは気づいてた?」

「いえ。そもそもキリコさんには異能の力を用いても視えないんです」

「視えないとは?」

「先日話したように私は物事の現在の局面、そこに至る過去と無数の未来の局面。さらにその背後に何者かの狙いがわかるという異能を持っています」

「内戦の結末もその異能で知っていたんでしたね」

「ホント、すさまじいわね」

「ですが、なぜかキリコさんに関しては何も暗闇がかかったように何も視えないんです」

「……なあ」

今まで黙っていたアツシユが口を開く。

「お前の異能ってやつならよ、あの日どうなるか知ってたんだろ？」

「……はい。バルフレイム宮に入る前までは、アツシユさんが陛下を撃つことがわかっていました。ですが、バルフレイム宮での祝賀会を皮切りに盤面が大きく変わりました。何かによって歪められたように」

「キリコにそんな力が……？」

「分かりません……」

ミュゼは顔を伏せる。

「今となつてはもはや確かめられませんか……」

「クソ……」

アツシユが爪を噛む。

「……みんな、そろそろ行こうよ」

「え？」

「確かに、あたしだってどう受け止めていいかわかんないよ。でも、あたしたち何のためにクロスベルまで来たの？」

「……そうだね」

「霊脈を静めるためにここまで来たんでしたね……」

「もういない人のことにはかり気を取られてもいられません。参りましょう……」

「……」

二代目Ⅶ組は無理やり気持ち奮い立たせ、出発した。

「ここが霊場か……」

ミシユラム湿地帯に突如として精霊窟が出現。その調査のため、ルーファス総督は湿地帯にまで足を運んだ。

「この先にあるという金の騎神。その力を持って、”父”たるあの方を超えてみせよう」

「……………」

「では行ってくる」

ルーファス総督は精霊窟に入って行った。

「ルーファス・アルブレア。どうやら一筋縄ではいかぬようだな。キリコと言えど、油断は禁物か」

魔煌機兵に乗ったテイタニアはルーファスの底知れぬ覇気に不安を抱いた。

「ここがMWLですか」

「思っていた以上に大きいんだな」

「つーか、普通に観光客とかいんだな」

「さすがにいつもよりは少ないけどね」

ユウナたち二代目Ⅶ組は聖ウルスラ医科大学からスタークが手配したボートで保養地ミシユラムに上陸していた。

「とりあえず、お父さんを探さなきゃね」

「確か、ユウナのお父さんはここに勤めているんだっただか」

「うん。リゾート開発部門の課長よ。お父さんなら湿地帯に出る方法を知ってるはずだしね」

「とにかく、行ってみようぜ」

ユウナたちはMWLへと向かった。

その後、ユウナたちはMWL内を探し回り、最終的にみっしーステージ付近でユウナの父親であるマシユ・クロフォードを見つけ出した。

最初は渋っていたが、ユウナたちの言葉を聞いたマシユは持っていた鍵を渡した。

そしてユウナを抱きしめ、必ず帰ってくるように約束させた。

ユウナも涙ながらに約束し、クルトたちも決意を新たにした。

『いってきますー!』

「気をつけてね」

マシユーと別れ、二代目Ⅶ組は湿地帯に足を踏み入れた。

【いくつか手を加えろとは言ったが、ロツチナ……】

キリコは湿地帯に隠されていた青黒い機動兵器に乗っていた。

また、所々に魔煌機兵のパーツが加えられており、初見では魔煌機兵のような見た目になっていた。

【まあいい。後はあいつらが来るのを待つだけだ】

キリコは頭を切り換え、集中する。

【あいつらと戦う以上、もう並んで歩くことはないだろう】

【たとえ悪魔に魂を売ってでも、ワイズマンを殺す……!】

突如、青黒い機動兵器のセンサーに複数の反応が出る。

【来たか】

決戦は近い。

【止まれ】

『!?!』

ユウナたちの目の前を、青黒い機動兵器が立ち塞がる。

「これって!」

「機甲兵!?!」

「いえ、この感じは……!?!」

【魔煌機兵】

青黒い機動兵器から変成器を通したようなくぐもった声が響く。

「魔煌機兵?」

【既存の機甲兵と内戦中に頭れた魔煌兵とのハイブリッド機。お前たちごときが敵う道理はない】

「んだと、コラー!」

「余裕のつもりか?」

【命までは取らない。さっさと引き返して母親の胸にでもすがりつ

いているといい」

「なめられたものですね」

「そんな大口、叩けなくしてやるわ！」

「クラウⅡソラス」

アルティナの背後にドラツケンⅡ、シュピーゲS、ヘクトル式型、ケストレルβが顕れる。

ユウナたちはそれぞれの機甲兵に乗り込んだ。

【……………】

青黒い機動兵器は持っていたライフルを構える。

【後悔するなよ】

哀しき戦闘が始まった。

「キリコ side」

【バ、バカな……！】

【避けた……きゃあああっ!!】

【ク、クソがつー！】

【何なの……何なのよ、いったい!!】

【……………】

クラフト技に移ろうとしたシュピーゲルSにライフルの銃撃を撃ち込む。

その間を縫ってケストレルβの狙撃が放たれるがそれをかわして反撃。

ヘクトル式型の武器をアイアンクローで叩き落として戦力を削ぎ、さらに蹴りを入れる。

ドラツケンⅡの懐に接近し間合いを潰す。後退しようとする瞬間を狙って頭部を殴り付ける。

相手が動き出す寸前に行動に移すことで初動を完全に封じ、連携のタイミングを崩す。

ユウナたちからすれば驚異的に見えるのだろう。

だが機体の特性と乗り手のクセさえ知っていれば何てことはない。加えてリミッターを最初から外している分、機体の性能を100%

引き出せる。おそらくフルメタルドッグでも結果は同じだろう。

【確かに以前より強くなっているな】

だが俺は攻撃の手は緩めない。

【悪いがここでリタイアしてもらおう。だから……】

俺は操縦桿を握りしめる。

【簡単に死んでくれるなよ】

「キリコ side out」

【はあ……はあ……はあ……！】

【攻撃が悉く当たらない……】

【というより、何もさせてもらえません……】

【このままじゃ罅が開かねえ。俺が押さえる。その間にあいつをブチのめせ】

【危険だけど、それに賭けるしかないわね。アル、援護をお願い】

「分かりました」

【んじや、行くぜ……!?!】

ヘクトル式型が動くこうとした瞬間、青黒い機動兵器から苛烈な銃撃が襲いかかる。

【ずいぶんと余裕だな】

【へっ、かかったな!】

青黒い機動兵器の背後の三方向からドラツケンⅡ、シュピーゲルS、ケストレルβが襲いかかる。

【もらった!】

【……………】

青黒い機動兵器は慌てることなく、機体を回転させる。

思わぬ反撃に三機の攻撃は遮られた。

そのまま青黒い機動兵器は接近してケストレルβを殴り付ける。

【きゃあああっ!】

ケストレルβは後方にはじき飛ばされる。

【ミュゼ!?!】

【遅い】



動きが止まったドラツケンⅡとシュピーゲルSに集中砲火が浴びせられる。

【ぐあつー！】

【……………】

結果、四機全てが倒されていた。

【強……………すぎる……………！】

【四対一でも、まるで歯が立たないなんて……………】

【チク……………シヨウ……………！】

【……………まだよ】

ドラツケンⅡが立ち上がる。

【こんな……………所で……………諦めてたまるもんですか！】

【……………】

【あなたたちがこのクロスベルで何を企んでるかは知らないけど、あたしが、ううん、あたしたちⅦ組が止めてみせる！】

【ユウナ……………】

【へッ……………！】

【ええ。まだ敗けていません！】

シュピーゲルS、ヘクトル式型、ケストレルβも立ち上がる。

【回復します】

アルティナが機甲兵用の回復アイテムを使う。

【……………そうまでしてなぜこの地を守る？クロスベルが塵と化すことは確定しているのだが】

キリコは敢えて鬼になることにした。

【……………え？】

【どういう意味だ!?!】

【わからないか？我ら帝国と憎き共和国との全面戦争。ならその戦場となるのはどこだ？】

【まさか……………】

【クロスベル……………】

【そうだ】

【そ、そんなことさせるもんですか！】

【お前の意志など関係ない。来る9月1日に戦いが始まる。両国に挟まれたクロスベルはゼムリア大陸から消える。永遠にな】

【あなた方は……！】

【……クロスベルの住民には多少なりとも同情している】

【ふざけるなっ！】

シュピーゲルSが斬りかかる。

【遅い】

青黒い機動兵器はシュピーゲルSの足元にマシンガンを撃ち込む。ぐらついた所でアイアンクロウがシュピーゲルSの腕をはね飛ばす。

止めにシュピーゲルSの背部エンジンにライフルを撃ち込んだ。

【ガハッ!?!】

シュピーゲルSから煙が吹き、火花を散らし倒れた。

【クルト君!!】

【余所見をするな】

続けて青黒い機動兵器はヘクトル式型に襲いかかる。

青黒い機動兵器はアイアンクロウを何度も何度も叩きつける。

ヘクトル式型は装甲はおろか、フレームをも斬り裂かれる。

止めに背部エンジンを挟まれ、ヘクトル式型は小規模ながら爆発し、動けなくなる。

【嘘……だろ……!?!】

【アツシユさん！】

【次】

青黒い機動兵器はケストレルβに接近する。

ケストレルβは必死に抵抗するも、焦りからか攻撃はかすりもしない。

マシンガンでケストレルβの武器を撃ち落とし、頭部をはね飛ばす。

ケストレルβは後方に倒れた。

【あ……あ……あ……!】

【ミュゼー……このお!!】

【……………】

青黒い機動兵器は大破したケストレルβを一瞥すらせず、ドラツケンⅡに狙いを定める。

【……………】

青黒い機動兵器はドラツケンⅡの両手足をライフルで撃ち抜き、だめ押しとばかりにコックピット付近を抉る。

ドラツケンⅡはその衝撃で地面に叩きつけられ、動かなくなる。

ここまではわずか15分の出来事である。

「皆……さん……」

アルティナは膝を落とすしかできなかつた。

【……許せとは言わない……恨むなら好きだけ恨め……】

キリコは虫の息のユウナたちに心の中で詫びた。

【……………】

ユウナたちは圧倒的、ひたすら圧倒的な力の前に完全に屈していた。

【……………】

青黒い機動兵器は一步一步近づく。

それは死神の足音にも似たものだった。

【今樂にしてやる】

青黒い機動兵器は動かないドラツケンⅡにライフルを向ける。

「う……………ぐぐぐ……………」

アツシユはヴァリアブルアクスを支えに立ち上がろうとする。

「ユウ……………ナ……………」

クルトはおぼつかない足取りでユウナに必死で呼びかける。

「いけないー！」

アルティナは感情を爆発させ、クラウⅡソラスを向かわせる。

（女神様……!!）

ミュゼは無力な自分を呪い、祈ることしかできなかつた。

【……………】

ユウナは眼を瞑り、齒を食いしぼる。

青黒い機動兵器のマニピュレータがトリガーに指をかけ、引き金を引く――

「うおおおおっ!!」

瞬間、湿地帯の奥から何かが突貫してきた。

【え……………】

突貫してきた何かは青黒い機動兵器のライフルを弾く。

「エリアルダスト!」

さらに風属性のアーツが青黒い機動兵器を襲う。

【くっ!】

青黒い機動兵器は後退を余儀なくされた。

「ユウナ!大丈夫か!」

「ロイド……………先輩……………?」

ユウナを救ったのは、クロスベル警察特務支援課のリーダー、ロイド・バニングスだった。

「あの人は……………」

「みんな、大丈夫?」

ロイドと同じく特務支援課メンバーのエリイ・マクダエルがクルトたちに駆け寄り、回復アーツをかける。

「あ、ありがとうございます……………」

「特務支援課の皆さん、ですね」

「良いタイミングじゃねえか……………」

「私たちだけじゃないわ」

エリイは青黒い機動兵器に目をやる。

「そりゃあああつ!」

青黒い機動兵器の頭上から棒が振り下ろされる。

【!】

青黒い機動兵器は右腕でガードするが、それは毘だった。

「今よ、ヨシユア!」

「わかった!」

ヨシユアと呼ばれた青年が青黒い機動兵器の真横を駆け抜ける。その際に、双剣で斬りつけられる。

「ふふ、隙を作っちゃダメじゃない?」

奥から歩いて来たスミレ色の髪の少女が手に携えた大鎌で青黒い機動兵器に奇襲をかける。

「すごい……!」

「あの二人はリベールの……。それにあの方は……」

「……………」

青黒い機動兵器は三人の連携にダメージを負う。

「ロイド先輩、あの人たちってもしかして……………」

「ああ。エステルにヨシユア、それにレン。リベールから来てくれたんだ」

ユウナを救出したロイドは三人を見ながら答えた。

「……さすがに分が悪すぎるか……………」

青黒い機動兵器はマシンガンで牽制しつつ、さらに後退した。

「つと!」

「一旦下がろう」

「仕方ないわね」

エステルたちも距離を取る。

「……………この場は引こう」

「……………」

「この地での俺の役目は終わった。ツールズVII組、お前たちはどこかで大人しくしているといい」

「ふ、ふぎけないで!」

「警告してやる。これはもう、普通の人間の手には負えるものではない」

「何を言っている?」

「普通の人間……………」

「……まるで、あんたが普通の人間じゃないように聞こえるんだが?」

ロイドは青黒い機動兵器を見据える。

「……………」

青黒い機動兵器はユウナたちに背を向けて去ろうとした。

「おっと、それは問屋が下ろさないわ」

「拘束させてもらうよ」

「……………」

青黒い機動兵器からカチツという音がし、光出した。

「なっ!？」

「まさか……………」

「自爆!？」

「クラウ||ソラス!」

アルティナが障壁を張る。

その瞬間、青黒い機動兵器は爆発した。

「きゃあああっ!？」

「なんてことだ……………」

「とにかく、調べないと!」

ロイドとエステルは残骸調べると、驚くべきことにコックピットは空だった。

「既に脱出していたのか……………」

「ここまで計算ずくってわけね」

「……………」

ユウナたちは呆然としていた。

「どうかしたの?」

「え? い、いえなんでも……………」

「大丈夫です……………」

「そう……………」

エリイは首をかしげる。

(あの一連のアクション……………どこかで……………)

(……………この……………感じはいつたい……………?)

ミュゼは胸を押さえた。

「機甲兵四機だけならまだしも、リベールの遊撃士に特務支援課まで加わったか。さすがにてこずったようだな」

自爆する寸前で脱出したキリコはロツチナと合流した。

「……………」

「まあいい。暫し休むといい」

「……………」

キリコは一瞥すらせず歩いて行った。

「はは……マジかよ」

キリコの前からレクター・アランドール少佐が歩いて来た。

「総督殿の見届けに来たら、とんだサプライズゲストがいるなんてな」

「……………」

「まあいいや、ぐくろーさん」

「……………」

キリコは無視して歩き出す。

「おい貴様！ いったいどういうつもりだ！」

キリコの態度が気に障ったか、軍人がキリコの肩を掴む。

「いいからいいから。ほら、疲れてんだろ？ 後はやっつくからよ」

「フン！ たかだか士官学生を足止めしたくらいでいい気になりおつて。まあ、反逆者同然のガキ共なん……………!?!」

突然キリコは軍人の喉を掴み、締め上げる。

「うぐ、ぐえっ……………きゃ……………」

「……………」

キリコは殺意を剥き出しにし、さらに力を加える。

「ぐ……………ああ……………っ……………!」

ギリギリと締め上げられ、軍人から声にならない声漏れる。

「ストップストップ！ それ以上やったら死んじまうって！」

「……………」

レクター少佐が慌てて駆け寄るも、キリコは意に介さなかった。

「そこまでだ、キリコ」

見かねたロツチナが止めに入る。

「それ以上はいくらもお前でも見過ごせん。その馬鹿者の処遇は私に任せろ。ここは引いてくれ」

「……………」

キリコは乱暴に軍人を離し、去って行った。

「フー、助かりましたよ、ルスケ大佐」

「今のキリコには近寄らん方が賢明だ」

「確かに。にしても、機械みたいな印象だと思っただんですがねえ」

「肉体面では破格の資質を持っているが、精神面は普通の人間と何ら変わらない。いくらあいつでも思う所はあるだろうさ」

「なるほど（難儀なもんだな、異能者つてのは）」

レクター少佐はキリコが去って行った方向を見つめる。

一方、ロッチナらと別れたキリコはルーファス総督と対峙していた。

「フフ、久しぶりだね」

「……………」

キリコはいつでもアーマーマグナムを抜ける体勢を作る。

「いや、今ここで君と戦う気はないよ。それはまたいずれ」

ルーファス総督は一瞬微笑み、直ぐに真顔に戻る。

「キリコ君、私と手を組まないか？」

「？」

「私の最終的な目的は父たるあの方を越えること。君にとっても利害は一致していると思うが？」

「くだらん」

キリコはルーファス総督に背を向ける。

「っ！」

その瞬間、ルーファス総督は騎士剣を抜き、斬りかかる。

「！」

キリコもアーマーマグナムを抜き、ルーファス総督に向ける。

「……………」

ルーファス総督は騎士剣を首に触れる寸前で止め、キリコはア―



マーマグナムを撃たず眉間に突きつける。

互いに殺気を放ち、微動だにしなくなる。

「……………フッ」

先に折れたのはルーファス総督だった。

「眉一つ動かさない鋼のごとき精神力。その力、弟や仲間たちを助けるのに使うといい」

ルーファス総督は騎士剣をしまい、優雅に去って行った。

「……………」

残されたキリコにあるのは、虚無感だった。

## 第二章 黒の工房篇

### 潜入①

七耀暦1206年 8月17日

「ここか？」

「そうだよ。ここが入り口」

キリコはサザラント州山間にあるという黒の工房の入り口を捜索していた。

その際にシャーリイと出会い、彼女の協力を得て、遂に入り口を発見するに至った。

「それで、どうやったら入れる？」

「こつちだよ」

シャーリイはキリコを魔法陣の所に案内する。

「ここに乗れば入れるよ」

「そうか。悪いな」

「気にしなくていいよ。いよいよ黒の工房に喧嘩売るんでしょ？」

「……………」

「あくあ、あたしも一緒に行つて大暴れしたいけど、あいにくレミフェリア方面での仕事が入ってるんだよね」

シャーリイは至極残念そうに言った。

「ここからは俺一人がいい」

「わかった。それより良いの？」

「？」

「トールズの新旧VII組、間違いなく来るでしょ？灰色のお兄さん助けに」

「……………」

「そんなときはさ、戦うの？」

「……………その可能性はあり得ない。あれだけ叩けば大人しくしてるだろう」

「そっか…………。それじゃ、そろそろ行くね」

「ああ」

シャーリイはキリコに別れを告げ、どこかへ転移して行った。

「……………」

キリコは眼を瞑った。

前日 8月16日

「キリコ」

キリコはロツチナに呼び出されていた。

ロツチナの表情にいつもの感じは無く、真剣そのものだった。

「今度はなんだ」

「…………黒の工房へ行け」

「なんだと？」

突然の言葉にキリコは不審がる。

「なぜ黒の工房に行く必要がある」

「工房長のことは知っているな？」

「黒のアルベリヒだったか。そいつがどうかしたのか？」

「奴は調子に乗り、愚かにも越えてはならん一線を越えた」

「越えてはならない一線？」

「お前にとつてはな」

「俺に？」

「これ以上は言えん。真実はお前自身が掴むのだ」

「……………」

キリコはロツチナの言うとおり、黒の工房へ行くことになった。

（越えてはならない一線……………いったい黒のアルベリヒは何をした？）

キリコは魔法陣の上に乗る。

（とにかく、行ってみるか）

キリコは黒の工房内部に入った。

キリコが黒の工房に入ってから数分後、どこからともなく魔法陣が

頭れた。

「着きましたね」

「ここが黒の工房……」

「ここまでは作戦成功ね」

「まだ気は抜けないね」

「……………」

「アル、大丈夫？」

「……………はい」

「無理をするでない」

「前衛は務めるから、下がっててもいいよ」

「すみません。ですが、大丈夫です」

「とにかく行きましょ。これ以上、あの人を……」

(アリサさん……)

エマが不安そうにしていると、ユウナのARCUSⅡに通信が入る。

「はい、こちらユウナです」

『どうやらこちらも無事のようにだな』

『とりあえず、作戦の第一段階は成功だね』

「皆さんもご無事でしたか」

『ああ。では予定通り、ラインがいると思われる中枢まで移動。その後合流ということだな』

『かなりの人形兵器が配備されている。せいぜい気をつけるといい』

「ユーススさん、その……」

『……………ミリアムのごことは置いておく。お前も無理はするな』

「あ、はい……………」

「あたしたちも出発します。皆さんもお気をつけて」

『ああ！ユウナもな』

『せいぜい遅れんなよ』

アッシュの言葉を最後に通信が切れた。

「向こうも動き出したみたいね」

「エマ、セリーヌとは？」

「……どうやら移動しているみたいです（セリーヌがああ姿になるほどの事態……）」

「時間がありません。参りましょう」

ミュゼの言葉を皮切りに、女子チームは動き始めた。

「……イカナクチャ………」

「ああ、もう！」

黒猫ではなく人の姿に変わったセリーヌは、拘束を自力で外し、歩を進めるリイン・シユバルツァーを追いかけていた。

「……ゼンブ………ホロボス………」

自身を嵌めたばかりか、かけがえのない仲間の散華を引き起こした元凶の抹殺。

呪いに侵され、理性すら失ったリインを動かすのはただ一つだった。

「クツ……！早いとこなんとかしないと、取り返しが……！」

セリーヌは賢明に追いかける。

「Aチーム side」

「これは……」

「人形兵器か！」

「それだけじゃない……！」

クルトたちの目の前には、人形兵器や戦術殻が大量生産されていく光景だった。

「アガートラムやクラウ||ソラスみたいなのがいっぱい……」

「どうやら、僕たちがいるのは人形兵器や戦術殻の生産ブロックのようですね」

「全部ブツ壊してえが、さすがに時間が足りねえか」

「仕方あるまい。とにかく急ぐぞ」

「ああ。もたもたしていると……」

マキアスが言い終わらないうちに、人形兵器が数体向かって来た。

「フン！一丁前に警備というわけか」

「ハッ！上等！」

「一気に殲滅する！」

「アーツは任せて！」

「わかりました！」

クルトたちは戦闘を開始した。

「Aチーム side out」

「Bチーム side」

「な、何よこれ……!？」

「これは……」

「もしかして……」

「おそらく……造り出すためのものかと……。私やミリアムさんのようなホムンクルスを……」

アルティナは声を絞り出すように言った。

「アル……」

「……大丈夫です。ここでの記憶はほとんど残ってませんから。それに、目的を果たした以上、現在は使われていないようです」

『……………』

ユウナたちは言葉が出なかった。

「それより、あれは何でしょう？」

アルティナの指さす方向には、カプセルのようなものが置かれていた。

「何かしら？」

「動いてはいないみたいだね」

「僅かながら熱源反応を確認。中に何か入っているようです」

「これも黒のアルベリヒが造ったものなのでしょうか……」

「気にはなるが時間が惜しい。次に……」

ラウラは突然黙った。

「ラウラさん？」

「皆さん、あれを！」

ミュゼの視線の先には、大型の水槽のようなものが鎮座していた。中には、女性と思わしきものが眠っていた。

「これは……………」

「ホムンクルス、よね？」

「見た目は大人みたいだけど……………」

「……………」

アルティナは一心に見つめていた。

「アル？」

「どうかしたの？」

「いえ…………（初めて見るはずなのに、私はこれを知っている…………？）」

「…………詮索は後回しよ。行くわよ」

『はいっ！』

サラの言葉で頭を切り替えたユウナたちは探索を再開した。

「Bチーム side out」

「Cチーム side」

「滅びヨ……………」

リインは襲って来る人形兵器を次々に破壊していた。

しかしそれは、八葉一刀流の剣技などではなかった。

「シャアアアッ！」

太刀を叩きつけ、斬るのではなく叩き潰す。力任せの暴力そのものだった。

その光景にセリーヌは言葉を失うばかりだった。

「…………このままじゃ、本当に……………」

「やれやれ、見てられねえな」

「まったくですわ」

「え…………？」

セリーヌの頭上から二つの影が降りてくる。

二つの影は携えた二丁拳銃と大剣で瞬く間に人形兵器を殲滅する。

「よっ、久しぶりだな」

「星杯以来ですわね」

「ア、アンタたち……」

二つの影——クロウとデュバリイはセリーヌの方を向く。

「にしても、お前そんなあざとかったか？」

「ずいぶんとお可愛らしい姿になりましたわね」

「う、うるさい！好き好んでこんな姿になってるんじゃないんだから！」

クロウとデュバリイの指摘にセリーヌは憤慨する。

「それより、アンタたちはなんでここに居るのよ!？」

「リインとヴァリマールがあんなだからな。ちよいと手助けにな。

こつちはそうじゃねえようだが」

「……私たちは……マスターから破門されましたわ……」

「破門……?」

「先日、マスターから力を見せるように言われました。真意を計りかねていると、マスターは今まで見たことのない表情で襲いかかってきました。本気のマスターに敵うはずもなく、私たちは地に伏せました」

「その直後、マスターに告げられました……貴女たちは破門とします。どこへなりと行きなさい、と」

デュバリイは唇を噛む。

「それって……」

「……わかっています。破門は私たちを巻き込まないようにしたものだ。ですが、それだけでは納得がいきません。ですから私たちはマスターの真意を聞くべく、工房に潜入したというわけです」

「そういや、他の二人はどうしたんだ？」

「アイネスとエンネアは他のブロックに行きました。おそらく、トールズのⅦ組と対峙しているかと」

「そこはわからないけどね。とにかく、リインを追わないと」

「だな」

「急ぎますわよ」



セリーヌたちは一心不乱に進むリインを追いかけた。

「Cチーム side out」

「キリコ side」

「また会ったな」

「ユミル以来ね」

「……………」

極力戦闘を回避しながら黒の工房を探索していると、鉄機隊の剛毅と魔弓に出会った。

「そなたも囚われているリイン・シユヴァルツァーの救出に来たのか？」

「違う」

「あら？違うの？てっきりⅦ組の子たちと別行動だと……」

「……………やはり来てしまったか」

「……………クロスベルでの戦闘のことは道化師殿から聞いている」

「彼らを関わらせないために、敢えて鬼になったそうね」

「……………」

俺は思わず拳を握りしめた。

「……………無理はするな」

「今のキリコ君を見ているても、無理をしているのは明白よ」

二人の言葉が俺の心に突き刺さる。

（最初から正しいとは思っていない。わかっていたはずだが

……………）

「それならあんたたちはなぜここにいる？」

「……………私たちはマスターに破門にされたの」

「破門？」

「ある日、我らはマスターに力を見せるように言われた。本気のマスターに敗れた我らは野に下ざるを得なかったのだ」

おそらく、鋼の聖女は鉄機隊を遠ざけるためにしたのだろう。俺があいつらに銃口を向けたように。

「私たちはマスターの真意を知りたいの。あの銀の騎神のことも含

めてね」

「そうか」

この二人も並々ならぬ覚悟を決めたらしい。

「それじゃあね。それと、キリコ君」

「？」

「無理はしないでね。マスターもおっしやっていたけど、キリコ君には帰れる所があるんだから」

「そちらの目的は分からぬが、武運を祈る」

剛毅と魔弓は行ってしまった。

「……………」

もう一度、あいつらと戦いになる可能性が高まってしまった。

(その時は……………いや)

そう思った俺は頭を切り換える。

優先すべきは黒のアルベリヒがしでかしたという何かの調査だ。

俺はそう切り換えた。

(行くか……………)

俺は探索を再開した。

「キリコ side out」

「フッフ、楽しいショーの幕開けだ。果たして彼らの運命はどうなるかな？」

フィンガースナップと共に、黒の工房に何かが顕れた。

## 潜入②

「Bチーム side」

「これって……」

「機甲兵、よね……?」

ユウナたちの目の前には、ドラツケンⅡとケストレルβに酷似した機甲兵が鎮座していた。

「どうして機甲兵が?」

「あちらには既に魔煌機兵があるはず。今さら機甲兵建造するとは思えん」

「罨?」

「調べてみましょう」

エマは魔導杖を掲げ、機甲兵を調べる。

「……霊的なものは一切感知しませんでした。魔煌機兵のように精神汚染されることはないでしょう」

「なら、ここはあたしが」

ユウナはドラツケンⅡに酷似した機体に乗り込む。

「僭越ながら、私も」

ミュゼもケストレルβに酷似した機体に乗り込む。

「中は……ドラツケンⅡと変わりないわね。ええつと、これで起動ね」

ユウナは機体を起動させる。

コックピットのディスプレイには、《ドラツケンⅢ・プロトタイプ》と表示された。

「ドラツケンⅢ・プロトタイプ……。ミュゼ、そっちはどう?」

「はい。こちらには《ケストレルβⅡ》とあります」

「アリサ」

「ええ。二体とも、試作機もしくは実験機ということかしら?」  
アリサが思案する横で、ユウナとミュゼが機体から降りる。

「二人とも、なんともないのだな?」

「はい、大丈夫です」

「なんともありませんわ」

「なら良いのですが……」

……p r r r r r……p r r r r r……

突然、ユウナのARCSⅡに通信が入る。

「もしもし？あつ、クルト君？」

『……………』

「うん。こっちにもあつたよ」

『……………』

「わかった。そっちも気をつけてね」

ユウナは通信を終えた。

「クルトさんからでしたか」

「向こうにもあつたのね？」

「はい。向こうにあつたのはシュピーゲル系とヘクトル系だそうです」

「シュピーゲルとヘクトル？」

「向こうにはクルトとアツシユがいるが……」

「偶然にしては出来すぎだね」

「……今は置いておくわよ」

サラはラウラたちを切り換えさせる。

「時間が惜しいわ。機体をどうするかは任せるけど、何か異常があつたら早めに報告すること。わかつたわね？」

「はいー！」

「では、クラウソラス」

アルティナはドラツケンⅢ・プロトタイプとケストレルβⅡを収束させる。

「そろそろ中枢も近い。乗り込むわよ！」

『イエス・ママ！』

ユウナたちは駆け足で進む。

〔Bチーム side out〕

〔Aチーム side〕

「そうか、わかった。そちらも気をつけてね」  
クルトは通信を終える。

「どうだ？」

「はい。向こうにも機甲兵があるようです。ドラッケンタイプとケストレルタイプだそうです」

「そうか……」

マキアスたちは二体の機甲兵を見上げる。

「両方とも、クルトたちが乗ったものとは別物なんだね？」

「はい。僕が乗ったのは、『シユピーゲルSS試作型』とありました」  
「俺は『ヘクトル式型・改』だったぜ」

「従来の機甲兵を元に造られたということか？」

「やはり、黒のアルベリヒが関わっているのだろうか？」

「元々機甲兵はアリサの父親が設計したという話だが」

「疑うとキリがないね……」

「とりあえず、動かしてみようぜ」

アツシユはヘクトル式型・改に乗り込もうとした。

「い、いきなりだな」

「あの二人も乗ったんだろ？なら問題はねえだろ」

「……そうだな。乗ってみよう」

クルトはシユピーゲルSS試作型に、アツシユはヘクトル式型改に  
乗り込み、動作を確認する。

「どう？」

「……不思議な感覚です。ものすごく馴染む」

「まるで俺に合わせて造られたみてえだな……」

クルトとアツシユは自分に合った操作性に驚きを隠せなかった。

「どういうことだ？」

「最初から二人を乗せるために造ったのか？」

「だとするなら、一体何のために？」

「フン、造った奴に聞けば良いだけのことだ」

ユーシスが鼻を鳴らす。

「【こちらは正常のようです】」

【とりま、行こうぜ】

「では、行こうか」

「お前が仕切るな」

ユースたちは先を急いだ。

「Aチーム side out」

「Cチーム side」

「こいつは……」

先行するラインを追うクロウたちは、大量の武器が造られていく光景に足が止まる。

「そうか……Sウエポンとか言う武器。ここで造られていたのね」

「私も初めて見ましたわ」

デュバリイもあちこちを見渡す。

「ここで造られた武器が赤い星座や西風の旅団なんかには卸されているんだらうな……」

「間違いないでしょうね」

「あくまで噂ですが、猟兵団以外にも提供先があるとか」

「やれやれ。武器だけで戦争をコントロールするってわけか。いよいよワイズマンとやらが怪しいな」

「……貴方もその名前をご存知ですか？」

「まあな。そういうあんたも？」

「ええ。私はユミルで彼から聞きました」

「ちよ、ちよつと！あんたたち、あのキリコと会ったの!？」

「おう。東リーヴス街道でゾルゲ乗り回して、敵の魔煌機兵百機をブツ潰してたな」

「私はアイゼンガルド連峰に顕れた精霊窟の調査に協力していただきました。その翌日、黒竜関襲撃に向かったそうです」

「……………」

セリーヌは放心状態に陥った。

「まあ、気持ちはわかるぜ……」

「共闘した私たちでさえ、信じられませんから……」

「……生きていたの……処刑されたって聞いてたのに……」

「処刑されたのは身代わりらしい。本人も薬で仮死状態にされて連れ出されたそうだ」

「何者かが裏で糸を引いているのは明白ですわね」

「……」

セリーヌは黙りこむ。

すると奥から何かを斬り裂く音が響く。

「チツ、話し込んでいる時間はねえか！」

「行きますわよ！」

「え、ええっ！」

クロウたちは再びリインを追いかける。

「Cチーム side out」

「キリコ side」

「やあ、キリコ♪」

「……」

探索を続けていると、道化師カンパネルラが俺の目の前に現れた。

「やっぱり来たね」

「……邪魔しに来たのか」

「まさか。プレゼントを持って来たのさ」

カンパネルラのフィンガースナップと共に、フェンリールが現れた。

「……」

「ついぞと言ってはなんだけど、あの四機も送っておいたよ」

「四機？」

「君はロッチナに頼んだはずだ。魔煌機兵に立ち向かえるように新しい機甲兵の設計を。わざわざユウナ、クルト、アツシユ、ミルディーヌ公女の戦闘データと一緒にね」

「……ロッチナがしゃべったのか」

「ボクが知ったのは本当に偶然だよ。それに面白そうだから協力したのさ。シュミット博士にコンタクトを取ったり、結界を張って工房

長に勘づかれないようにしたりね」

「……………」

「ちなみに名前は全て博士が命名したらしいよ」  
心底どうでもいい。

「それで、執行者はお前一人か？」

「いや？マクバーンも来てるよ……………」

すると、遠くから爆音が響く。

「……………わかった」

「やれやれ。目を離したらこれだもん。ま、灰色の鬼になった彼がいるなら無理ないか」

「鬼、か」

呪いの根源がワイズマンだとするならば、教官も奴の被害者ということになるのか。

「彼らも健気だよねえ。わざわざ毒蛇の巣穴に入り込んで来たりしてさ」

「……………大人しくしていればいいものを」

「……………矛盾してるねえ」

「何？」

「キリコ、心の中では彼らのことを思ってるでしょ？」

「……………」

「クロスベルで彼らに銃口を向けて、立ち直れなくしようとしたでしょ。本気の君なら命を奪うことは造作もなかったはず」

「……………」

「なのに君はしなかった。利用価値？増援が来たから？面倒くさい？どれも違うよね？」

「……………」

「仲間、だからでしょ」

「……………」

俺は何かを言おうとした。だが、言葉が出てこなかった。

「なら、キリコがこれからすることは一つしかないよね？」

「……………なぜだ」



「？」

「仮に俺があいつらと手を組めば、お前たちが不利になるだけだ」

「さつきも言ったけど、そっちの方が面白そうだからさ」

「……………」

俺は無言でフェンリールに乗り込む。

【行かせてもらう】

「どうぞ、ご自由に」

【…………最後に教えてほしいことがある】

「何？」

【最近、黒のアルベリヒは何かしたのか？】

「工房長？そうだなあ…………何でも、究極のホムンクルスが完成する

とか」

【究極のホムンクルス？】

「詳細はわからない。ただ…………」

【ただ？】

「もうじき世界に炎がくべられる、そう言っていたよ」

【炎……………】

心にズキリとしたものを感じる。

「えっと、キリコ？」

【……………】

俺は黒の工房中枢がけてフェンリールを走らせる。

「キリコ side out」

「行っちゃったよ」

カンパネルラはフェンリールの背中を見つめる。

「どうやら、工房長はとんでもないことをしでかしたみたいだね？」

「ええ、許しがたい愚行を」

カンパネルラは背後から歩いて来た男に問う。

「イプシロン、だったね」

「はい」

「君は出ないの？」

「……出動命令が出ていないので」

「ふーん？」

「道化師殿こそ、キリコを止めなくて良かったのですか？」

「止める気はさらさらなかったからね。本音を言えば、結社の計画遂行のために必要なのさ」

「なるほど……」

イプシロンは完全には納得しなかったが、それ以上の追及はしなかった。

「さっきの答えなんだけど、なんなの？ 工房長がしでかした許しがたい愚行って……」

「……少々長くなりますが」

「いいよ。それじゃ……」

カンパネルラはフィンガースナップを鳴らし、周囲に聞かれないよう結界を張る。

イプシロンはカンパネルラに真相を語り始めた。

「よくぞ己を取り戻したな、灰の起動者よ」

「……………」

「そして歓迎しよう。ツールズVII組の諸君」

「……………」

呪いの強制力から解放され、黒髪から白髪になったリインと、それぞれの障害を突破してきたVII組の前にギリアス・オズボーン、リアンヌ・サンドロット、黒のアルベリヒ、銅のゲオルグが立ちはだかる。

「デュバライ、アイネス、エンネア。やはり来てしまいましたか」

リアンヌは鉄機隊の面々を真顔で見つめる。

「マスター……………」

「ええ」

「最初で最後の命令違反、お許しください」

鉄機隊は主の視線を受けても、怯まなかった。

「クロウ……………」

「よう、ジョルジュ。少し痩せたか？」

「その名は偽名だよ。かつて君がCを本分としていたようにね」  
「……チツ」

「そこまでだ、銅のゲオルグ。時は無駄にするものではないよ」  
クロウと銅のゲオルグのやり取りを黒のアルベリヒが止める。

「それにしても、一杯食わされたな。まさか我々の知らない所で機  
甲兵を手に入れているとは」

「えっ?」

「こ、この機甲兵はそちらが造ったのではないのか!」

「ああ」

オズボーンは横目でカンパネルラに視線をやる。

カンパネルラは肩を竦める。

「まあいい。主賓の到着まで少しかかる。それまでは……」

オズボーンは禍々しい大剣を取り出す。

「あれは!」

「まさか……《終末の剣》……!」

「そうだ。根源たる虚無の剣とは違い、外の理により造られた剣。  
女神の加護を受けたものを屠る魔剣、とでも思えば良い」

オズボーンは終末の剣を手にも構える。

「その構えは……!」

「百式軍刀術の……!」

「父上から聞いたことがある。現役時代のオズボーン宰相は百式軍  
刀術の達人で知られていたと」

「フフ……今なお、だがね」

オズボーンは微笑みを浮かべる。

「……」

リアンヌも騎馬槍を携える。

「出でよ、ゾアールバロール」

黒のアルベリヒは奇怪な戦術殻を呼び出す。

「来い、ナグルファル」

銅のゲオルグも赤銅色の戦術殻を呼び出す。

「総員、戦闘準備!」

リインは太刀を抜く。

「相手は百式軍刀術の達人に槍の聖女……油断するな！」

『おお!』

『はいっ!』

「私たちも参りましょう」

「応!」

「マスター……お覚悟!」

「来な、相手してやるぜ」

VII組と鉄機隊、そしてクロウはそれぞれの得物を手に、オズボーンらに挑む。

「キリコ side」

【この音……既に始まっているようだ】

「よう、来たのか」

【!】

声のする方にカメラを向けると、そこには劫焰のマクバーンが立っていた。

「ちよつと小耳に挟んだんだがよ、お前不死身なんだってな?」

【悪いが先を急いでいる】

さすがに相手取るには厄介だからな。

「オラッ!」

マクバーンは右手から火球を投げつけてきた。

【くっ!】

かろうじて避ける。火球はフェンリールの立っていた背後の壁を焦がす。

「やるな。なら……!」

今度は連続で火球を放ってきた。

【問答無用か。なら!】

俺は照準をマクバーンに定め、引き金を引く。

「そうこなくちやな!おらっ、いくぜ!」

マクバーンは狼を象った焰を放つ。

【速い！だが……！】

ローラーダツシユで強引に回避し、マクバーンめがけてマシンガンの集中砲火を撃ち込む。

【これなら………なっ!?!】

放たれた銃弾は一発も当たらなかった。

それどころか、マクバーンのかざした右手の前で一つ残らず熔けていた。

【……焰の高熱で銃弾を一気に熔解させたのか………】

「まーな」

マクバーンは至極面倒くさそうに頭を掻く。

「そろそろ終いにするか」

マクバーンのかざした右手をにぎりこむ。

「燃え尽きろ………！」

その直後、フェンリールの足元から業火が吹き上がる。

【しまっ………！】

フェンリールは焰に包まれた。

そして地に伏した。

「キリコ side out」

## 名前

「それなりに面白かったが、この程度じゃな……」

マクバーンは燃え盛るフェンリールに背を向けた。

フェンリールは少しずつ熔解し、ゆっくりと崩れ落ちる。

「さて、灰色の小僧んところに行くとするか「ガタン！」……………!？」

突如聞こえた音にマクバーンは急いで振り向く。

そこには焔に包まれた何かが立っていた。

その右手にはアーマーマグナムが握られていた。

「てめ……………がつ!？」

だが、それさえ遅かった。

放たれた弾丸は正確にマクバーンの右足に着弾し、マクバーンは片膝を付いた。

「……………」

焔に包まれた何かはそのまま一步一步マクバーンの方向に進む。

「ちいっ！」

マクバーンは高密度の焔を右手に生成する。

「……………」

焔に包まれた何かは立ち止まり、アーマーマグナムを構える。

「燃え尽きろ！」

マクバーンは高密度の焔を放とうとした。

「ストップ！ストップ！そこまでだつてば!!」

二人の間にカンパネルラが慌てて入る。

「とりあえず……………えいっ！」

カンパネルラが手をかざし、焔を消す。

焔を消された何か——キリコはそのまま前に倒れる。

「邪魔すんじゃねえよ……………」

「これ以上やったら工房の方がもたないって」

「……………チツ……………!」

「それにしても、凄いよ。熔解した機甲兵の中から立ち上がって、あの焔を浴びながら生きてて、しかも反撃までするんだから……………つと、あ

治療もしなくちゃね」

カンパネルラはキリコに回復アーツをかける。

「ホント、異能者って規格外にも程があるよ」

「……………ッ……………」

回復を終え、意識を取り戻したキリコがゆつくりと立ち上がり、ヘルメットを脱ぐ。耐圧服に守られたためか、火傷はほとんどなかった。

「気分はどう？」

「……………」

「やれやれ……………」

だんまりを決め込むキリコにカンパネルラは呆れた。

カンパネルラがフィンガースナップを鳴らすと、キリコの耐圧服緑の光に包まれた。

耐圧服は汚れ一つない新品同様になった。

「これはサービスだよ。ここまでの大健闘に免じてね」

「……………」

キリコは軽く体を動かす。

「おい……………」

「……………」

マクバーンがキリコ近づく。

「次はねえ。覚えとけ」

「……………」

キリコはそのまま中枢へと向かおうとした。

「待った」

カンパネルラが待ったをかける。

「いくら何でもそのままは無謀過ぎない？」

「……………先を急いでいる」

「とりあえず、持ってきてきなよ」

カンパネルラはフィンガースナップを鳴らし、緑色の機甲兵を出した。ただし、右肩が血のような暗い赤色に染まっていた。

「……………」

「フルメタルドッグで良かったんだよね？」

「……何でもいい」

「フフ。それとキリコ……」

カンパネルラはキリコにあることを耳打ちした。

「………本当か？」

(彼、イプシロンから聞いたよ。工房長があ教授と似たような思考回路だからって、勇み足にも程があるでしょ)

(……間違いなんだな?)

(勿論)

(………)

キリコはフルメタルドッグに乗り込み、中枢へと向かった。

「………」

「何話してたんだよ？」

「んー？」

カンパネルラは頭の後ろで手を組んだ。

「彼を怒らせた以上、工房長もジ・エンドって話」

「??」

マクバーンにはわからなかった。

「この程度とは……見込み違いだったかな？」

一方、中枢では決着がついていた。

「………クツ……！」

「そんな……」

「これが……百式軍刀術の達人……！」

リイン率いる二代目Ⅶ組はオズボーンの実力に圧倒されていた。

「………」

「マスター……！」

「星光陣が通じないとは……」

「クツ……！」

鉄機隊の面々も、リアンヌの絶技の前にひれ伏すしかなかった。

「ハァーハツハツハ！お前たちごとときが、このゾアⅡバロールにか



なうものか!」

「と、父様……」

「強い……」

黒のアルベリヒは初代Ⅶ組に対して、尊大に振る舞う。

「……………」

「本当に変わっちゃまったんだな、ええ? ジョルジュ」

ナグルファルの攻撃を捌きながら、クロウは銅のゲオルグを睨み付ける。

「これ以上時間をかけるのは愚策。主よ、この場で彼奴らを皆殺しにしてもよろしいか?」

「……構わん」

オズボーンは新旧Ⅶ組殲滅の許可を出した。

「フッフ……」

黒のアルベリヒはフィンガースナツプを鳴らす。

すると、黒のアルベリヒの頭上に円錐形の物体が数機現れた。

「あれは……」

「ハーメルの跡地で見た……」

「確か、スクエアだったか?」

「神機の武装ではなかったのか!」

「フツ、死ぬ前にそんなことを聞いてどうするのかね?」

黒のアルベリヒはⅦ組の前に手をかざした。

数機のスクエアの先端が輝き出す。

黒のアルベリヒが冷酷な笑みを浮かべた。

「死ね——」

『ッ!』

新旧Ⅶ組が身構えた……次の瞬間

ズガガガガッ!

突如、銃声が鳴り響いた。

その直後、スクエアは全て撃ち落とされた。

「なっ!」

「フツ……」

黒のアルベリヒが大きく動揺する横で、オズボーンは笑みを浮かべる。

「来ましたか」

リアンヌも銃声の響いた方向を向く。

そこには右手にヘヴィマシンガンを構えた一機の機甲兵が立っていた。

「フルメタルドッグ!？」

「な、なんでここに……?」

「い、いやそれより……」

「乗っているのってまさか!？」

「嘘……だろ……!？」

新VII組は突然のことに動揺を隠せなかった。

「待っていたぞ」

オズボーンが一步前に出る。

「歓迎しよう。異界より来たりし不死の異能者……」

キリコ・キュービイー!」

「……………」

偶然か必然か。

世界の運命を動かす者たちが一堂に会した。

「キリコ……さん……?」

「異界より来たりし……」

「不死の異能者……?」

オズボーンが発した言葉の意味をVII組は掴みそこねていた。

「ふ、ふざけるな!たかが一人の人間に何ができる!」

激昂した黒のアルベリヒは更に多くのスクエアを展開した。

「死ねえ!」

スクエアは一斉に攻撃を開始した。

「……………」

フルメタルドッグはローラーダッシュを駆使して攻撃を回避。

「かかったな！これで……！」

黒のアルベリヒはスクエアをフルメタルドッグの頭上に展開した。  
だが……

【遅い】

異能者を止めるには不足過ぎた。

現れたスクエアはほとんど動かずに撃ち落とされた。

「速い！」

「スピードとかじゃない。ほとんど反応速度で対処してる」

「スクエアが現れるのを見てから反応してるってこと!？」

「そ、そんなことが人間に可能なのか!？」

「奴の言葉を聞く限り、キリコは普通の人間ではないということらしいが……」

「そんなはずありません!!」

ミュゼはユーシスの考察を一心に否定する。

「ミュゼ……」

「キリコさんは……キリコさんは普通の人間です！偶然が重なっただけに決まっています！」

「……教え子や後輩、共に学ぶ者が不死身の力を持つ化け物であることがそんなにも恐いか」

オズボーンが新旧VII組らに語りかける。

「貴方は……！」

「それはミルディーヌ公女、そなたとて同じはず。物事の全てを完全に見通せるなど普通の人間では到底不可能。それを容易く行えるそなたも同類ではないのかな？」

「ち、違……」

「まあ彼は皇族は勿論、四大名門、魔女、地精、騎神の起動者など遥かに及ばない特別な存在。信じがたいのも分かる」

「キリコさんは……キリコさんは……！」

「それはそなたの感傷に過ぎん」

オズボーンはミュゼの言葉を切る。

「彼と君たちでは住む世界が違い過ぎる。だからこそ、君たちと袂を別つたのではないのかな？」

「き、決めつけないですよ！」

「事実、彼は君たちに銃口を向け引き金を引いた。ミシユラムの湿地帯でな」

『!?!』

二代目VII組は言葉を失った。

「それも彼からのメッセージだろう。これ以上関わるなという、な」  
『……………』

「さあ、そろそろ決着が付く」

オズボーンはフルメタルドッグに目を向ける。

「バカな……!?!」

黒のアルベリヒは信じられなかった。

フルメタルドッグの周りには、撃墜されたスクエアが瓦礫の山を築いていた。

さらに、フルメタルドッグはほとんど無傷だった。

「こんな……こんなことが?!?!」

『……………』

フルメタルドッグはゆっくりと黒のアルベリヒに狙いを定める。

「くっ、ならば……!?!」

黒のアルベリヒはリモコンのようなものを取り出す。

『……………』

その瞬間、ヘヴィマシンガンの銃撃が放たれる。

「ぐわっ!?!」

黒のアルベリヒは寸での所でゾアIIバロールで防御するが、リモコンは黒のアルベリヒの手を離れる。

リモコンは銅のゲオルグの足元に滑り込む。

「ゲオルグ！早く起動するんだ！」

「し、しかし……まだ起動テストも済ませていないのに……」

銅のゲオルグは、言い知れぬ不安を感じ取っていた。

「早くしろ！」

だが今の黒のアルベリヒには手段を選んでいる余裕などなかった。

「くっ！」

銅のゲオルグはリモコンのスイッチを押し、作動させた。

オズボーンらの背後に何かがせりあがってくる。

「ククク……テストにはうってつけた。この究極のホムンクルスのな……！」

「究極のホムンクルス!?!」

「ホムンクルスの製造は終わっていたんじゃないのですか!?!」

アルティナは必死に問いかける。

「この工房が造りあげた完全な戦闘型ホムンクルスだ。モルモット同然のO zシリーズとはわけが違うのだよ」

黒のアルベリヒは狂喜的な表情を浮かべる。

「ククク……さあ、《F》の御披露目だ！」

黒のアルベリヒの背後に巨大な水槽のような物がせりあがった。中には成人女性と思わしきホムンクルスが眠っていた。

「あ、あれって……」

「先ほど見た……」

「あれが究極のホムンクルス……?」

「……そうか……」

「え?」

キリコの発した言葉にミュゼは思わず振り向く。

「……間違いであってほしかったが……やはりお前なのか……」

コックピットの中のキリコは静かに見つめる。

【ファイアナ……】

キリコが発した名前。

それは、かつてキリコが唯一愛した女の名前だった。

## 帰還

「ファイアナ……………」

キリコは目の前の完全なる戦闘型ホムンクルスを静かに見つめる。

「ファイアナ……………」

「完全なる戦闘型ホムンクルスとやらのことを言っているのか？」

「……………」

ユウナとクルトが不可解といった表情を浮かべる横で、ミュゼは胸に言い知れない痛みが走り、アルティナは戸惑いが浮かぶ。

「これはどうということかな？工房長」

オズボーンは黒のアルベリヒを問い詰める。

「完全なる戦闘型ホムンクルス？そんな報告は受けた覚えはないのだが？」

「黙っていたことは言い訳致しません。ですが、これも万が一に備えてです」

「《F》……………だったか。役に立てば文句は言わんが……………分かっているな？」

「無論です。じっくりとご覧下さい」

黒のアルベリヒはリモコンでいくつかの操作を行う。

水槽から水が排水され、中から《F》が出てきた。

「……………ッ……………!?!……………」

キリコは《F》の顔を見た。

その顔には一切の感情などなく、人形と言っても差し支えなかった。

「そして……………」

黒のアルベリヒがフィンガースナップを鳴らすと、魔煌機兵メルギアが顕れた。

「……………」

《F》はメルギアに乗り込む。

「さあ我が最高傑作《F》よ。我らに仇なす愚か者共を葬り、力を示せ！」

【了解しました】

《F》は抑揚のない声で答えた。

【……やるしか……ないのか……】

キリコは操縦桿を握りしめ、メルギアを見据える。

「あ、あたしたちも……！」

【止めておけ】

キリコはユウナたちを止める。

「キリコさん……？」

【あれは想像している以上に強い。お前たち程度では勝てん】

「待ってくれキリコ、なら僕たち全員で……」

【引っ込んでいろ。かえって足手まといになるだけだ】

「て、てめえ……」

【……キリコさんの言うとおりにしましょう】

「ミュゼさん？」

「……私たちでは足手まといにしかありません。ここは、下がりますよ……」

ミュゼの言葉に二代目Ⅶ組は引き下がった。

「我々も一旦下がるとしよう」

オズボーンらも下がる。

【……】

キリコは《F》の乗るメルギア、そして黒のアルベリヒを見据える。

【黒のアルベリヒとて最初からフィアナを造り出そうとはしていない。これも奴の影響なのか】

【ならば……俺は……！】

ギユイーン！ズガガガガッ！

フルメタルドッグとメルギアは激しく火花を散らす。

【この反応速度は……】

キリコはメルギアの動きを追いながら、何かを感じ取った。

【……】

《F》は淡々と正確に引き金を引く。

互いに撃ってはかわし、かわしては撃つ。

常人をはるかに上回る反応速度を持つ者同士だからこそできる芸当だった。

「凄い……………」

ユウナはフルメタルドッグとメルギアの戦いから目を離せなかった。

「…………あれが本気のキリコなのか…………！」

「あの動き…………やっぱりの時の……………」

「だとすれば、ミシユラム湿地帯で襲撃してきたのはキリコさんということになります……………」

「クソが、今まで手え抜いてたつてことかよ！」

「…………キリコから以前聞いたんだが、フルメタルドッグにはリミッターがかけられていたそうだ」

「え!?!」

「リミッター…………ですか?」

ラインの言葉に二代目Ⅶ組全員が振り向く。

「ああ。シユミット博士との取り決めだったらしいんだが、キリコと君たち分校生徒ではレベルが違い過ぎる。それこそ一日で全員の心をへし折ることも容易いくらいに」

「確かに、ミシユラム湿地帯の時はほとんど諦めていました……………」

「それでは肝心のデータが取れないということまで機体にリミッターをかけることになった。キリコもカリキュラムを潰すことはしたくないとそれに同意したそうだ」

「だとしても、キリコさんって一回も負けたことがないような……………」

「確かに…………そうだな……………」

「さらに操縦時にかかるGも半端じゃないらしくてな。耐圧服とか言う物を着ないと、良くて発狂、悪ければ内臓圧迫で死ぬこともあるらしい」

「そ、そんな危ないものを選びこなしていたんですか!?!」

「マジでイカれてやがる……………」



「だからこそそのリミッターというわけですね？」

「そうだ。ただ、これは後から聞いたことなんだが……」

「教官？」

「驚くべきことに、彼はリミッターがかけられている状態で神機と渡り合ったそうさ」

「はあっ!？」

リインの言葉にデユバリイが仰天した。

「まあ、あの三機は全て万全の状態ではなかったのだが……」

「本当に腕一つだったのね……」

アイネスとエンネアも嘆息した。

「まさかと思うけど、分校長やあの暗黒竜の時も……?」

「いや、さすがにリミッターを外したらしい。リミッターを完全に外した暗黒竜戦の翌日はその反動が酷かったそうさ」

「あ、あはは……」

「もはや何がなんだか……」

初代VII組からも嘆息が漏れる。

【確かに速い。だが……】

キリコは確信めいたものを感じた。

【動きが機械的過ぎる。セオリー通りのパターンしかない。俺の知るフィアナなら……!】

キリコは操縦桿を操作し、フルメタルドッグの攻撃体勢を解く。

【………】

メルギアは迷うことなく切り込む。

【やはり止まらないか】

フルメタルドッグはスピンドで攻撃をいなし、メルギアの頭部にカウ  
ンターでアームパンチを叩き込む。

【!?!】

メルギアはたたらを踏み、下がる。

【………】

フルメタルドッグはさらにヘヴィマシンガンで追撃する。

【アサルトコンバット、起動】

今のキリコに迷いはなかった。

フルメタルドッグはヘヴィマシンガンで銃撃しつつメルギアに接近し、ショルダータックルのぶちかましとアームパンチの連打の浴びせ、一旦距離を取った後時計周りに銃撃。とどめに両手足と頭部に銃弾を撃ち込んだ。

連続攻撃を受けたメルギアは戦闘に支障をきたすほどのダメージを受けた。

【…………キ…………リ…………コ…………】

【!?!】

キリコは追撃には移らず、メルギアから距離を取った。

【確かに聞こえた。メルギアとすれ違う瞬間、俺の名前を呼ぶ声が】

【あれは本当に、ファイアナなのか…………?】

「バカな…………」

黒のアルベリヒは愕然とした。

「いかに目覚めたばかりとは言え…………たかが人間一人に遅れをとるなどと…………!」

「当然だろう」

「えっ?」

オズボーンの言葉に黒のアルベリヒはハツとなる。

「いかに性能が優れていようと、ああも動きが機械的ではな。あれならキュービイーでなくても対処できよう」

オズボーンは黒のアルベリヒを冷ややかに見つめる。

「グッ…………!」

「だが…………」

オズボーンは続ける。

「駒としては悪くはない。一旦下がらせ、更なる研鑽を積みませよ」

「…………ハッ!」

黒のアルベリヒはメルギアに下がるよう指示を出す。

メルギアは命令通り、黒のアルベリヒらの元へと下がる。

「さて、余興はこれまでだな」

フルメタルドッグはヘヴィマシンガンを構え、オズボーンらを見据える。

「機体から発するその憎悪にも似た感情。君は余程アルベリヒを始末したいようだな」

「……………」

「キリコ君……？」

「あの《F》とやらと何か関係があるようだが……」

「……………」

二代目VII組にも戸惑いが広がる。

「まあ、我々は逃げも隠れもしない。潰したくば、いつでも来るが良いい。だがまずは不死の異能者のご尊顔を賜りたいな」

「……………」

オズボーンの言葉にキリコは奥歯を噛んだが、機体から降りた。そしてヘルメットを脱いだ。

「……………」

「あ……………」

「キリコ……」

「生きて……………いたんですね……………」

「……………」

(キリコ……………さん……………！)

ヘルメットの下から露になったキリコの顔から二代目VII組全員は目を離せなかった。

「こうして直に会うのは星杯以来か」

「……………そうだな」

「えっ!？」

「キリコも来ていたの?」

「だが、何のために……………」

「それは呪いを引き起こすためだ。そうだろうか?」

『!?』

オズボーンの言葉に二代目旧VII組は呆然となった。

「彼は巨イナル一の根源とも言える存在と深い因縁を持っていることは知っているかね?」

「それは……」

「ユーゲント陛下から聞かされましたが……」

「僕たちはユウナたちからだけ……」

「なら話は早い。彼はその存在をあぶり出すために危険を省みず、星杯に潜入した」

「自ら、呪いを引き起こすために……?」

「わ、わけがわからないぞ……」

「そもそも、貴方やキリコさんの言う呪いの根源とも言える存在がいったい何なのかが分かりません」

「ふむ……」

オズボーンは腕を組む。

「かつて、女神から二つの至宝を授かり、争った末、後に魔女の眷属と地精に分け隔てられた者たちがいた」

「ローゼリア殿もおっしゃっていたが……」

「そしてその二つの一族を影から操り、巨イナル一誕生の発端とも言える大規模な闘争を引き起こした者がいた。その者は賢者を名乗っていたという。そしてその賢者は巨イナル一完成と同時に命を落としたと黒の史書の原本は残している」

「賢者……?」

「そ、そんな話、聞いたことはありません!」

「フツ、君のお母上は断片的ながらも真相にたどり着いたらしいが」

「え……!?!」

エマは魔導杖を落としそうになった。

「エマの、お母さん……?」

(確か、不幸な事故が原因で命を落としたそうだが……)

リインは以前セリーヌから教わったことを思い出した。

「まあ、真相は緋のローゼリアに聞くといいだろう」

「魔女の里の長のことまで……」

「貴方はいったい……」

「本題に戻るが、その賢者は闘争を利用し、巨イナル一を完成させた。そして争っていた二つの一族が手を取り合い、七の騎神を生み出すまでにした。キュービイー、何が言いたいかわかるかな？」

オズボーンはキリコに問いかける。

「……闘争を以て、二つの一族に調和と進化をもたらした。違うかな？」

「そう。君の知るやり方だ」

「キリコの知る……？」

「おいおい、そいつが1200年前以上前の人間だって言うのかよ？」

「……それは違う。それどころかこの地の人間ですらない、そうだな？」

「……ああ」

「この地の……？」

（この地の人間ですらない……。異界から来たりし不死の異能者………異界？）

リインはオズボーンの言葉を整理する。

（まさか……キリコは……！）

リインはとんでもない仮説にたどり着いた。

「キリコ……もしかして君は……」

「………」

リインがキリコに問いかけようとした。

その瞬間――

「フツ……」

オズボーンの背後に黒く禍々しいものが顕れた。

「なっ!？」

「黒の騎神………イシユメルガ………!」

「あ、あれが黒の騎神……!？」

（なんだ？この気配は……）

周りが圧倒される中、キリコはイシユメルガから強烈な何かを感じた。

「フフフ、灰と蒼と銀、そして異能者の気配に呼び寄せられたか」

「……ッ………！」

「チイツー！」

「………！」

リインとクロウは拳を握りしめ、リアンヌはイシユメルガに怒りに似た視線をぶつける。

「灰と蒼の起動者よ。此度は真の闘争に非ず。せいぜい、勝ち上がって来るといい。場所を移す、アルベリヒは《F》を回収後、例の場所に」

「ハッー！」

オズボーンはイシユメルガに乗り、どこかへと移動した。

「マスターー！」

「お、お待ちをー！」

「………！」

リアンヌも鉄機隊の声を振り切り、銀の騎神アルグレオンと共に飛び去って行った。

「ま、待てー！ いったい何の………！」

「今は下がれ！ 今のお前らじゃ勝ち目はねえっ！」

クロウはリインの肩を掴み、撤退するよう押し留める。

「クロウ………」

「あの野郎に対抗するにはあることをしなきゃならねえ。今は堪えろ」

「………！」

「………！」

キリコは元来た通路へと戻ろうとした。

ガシッ！

「ー！」

キリコの右手をミュゼがしっかりと掴んだ。

「……離せ」

「イヤですー!」

ミュゼはさらに力をこめる。

「全部……話してもらいます! キリコさんのことも、何があったのかも、どうして一人でいるのかも全部みんな!!」

「……話すことは何もない」

キリコはさっさと行こうとした。

「い、いい加減にしなさいよ!!」

ユウナが怒りの形相で詰め寄る。

「キリコ君が何考えてるのかはわからない。だけどこれだけはわかるわ……キリコ君は逃げてるだけよ!!」

「……俺の何を知っている——」

「わからないさ。だが、僕もユウナと同じ気持ちさ。今のキリコはあまりにも無責任だ!」

「あの場にいた者として、説明を求めます。それだけでなく、先ほどオズボーン宰相が言っていたことについても」

ユウナに続き、クルトとアルティナもキリコに詰め寄る。

「お前たちの出る幕ではない——」

「ザケンじゃねえよ……!」

アツシユはキリコの胸ぐらを掴む。

「てめえは散々俺をコケにしやがった。そのけじめもつけねえでドコ行くんだよー!」

「……コケにしたつもりはない」

「その澄ましたツラが気に食わねえんだよ!!」

アツシユはキリコにさらに詰め寄る。

キリコは一切抵抗することなく、無言でアツシユの目を見る。  
「……………」

「クソツ……タレが……っ!」

アツシユは拳が真っ赤になるほど握りしめる。

「……キリコ」

リンがゆっくとキリコに近づく。

「……正直、俺は正気を取り戻したばかりでまだ混乱している。だが、いくつかわかったことがある」

「……………」

「例えば、あの機甲兵……君が関与しているんだろう？」

「……やはり、そうだったのね」

「アリサさん……？」

「……あの機甲兵は万人に向けられて造られているわけじゃない。それこそ個人のために造られた、言わばオーダーメイドの機甲兵と言つても差し支えないわ」

「オーダーメイドの機甲兵……」

「これは俺の推測なんだが……ユウナたちへの償いなんじゃないのか……？」

「えっ……」

「償い……？」

「君はミシユラムの湿地帯でユウナたちを完膚なきまでに叩きのめしたという。それは本心じゃなかったはずだ。おそらく宰相の言うとおり、これ以上関わらないようにするためのメッセージなんじゃないか？」

「ではなぜ……」

「君は知つたんだろう？ 魔煌機兵の強さを」

「……………ええ」

キリコは遂に口を開く。

「……魔煌機兵の性能は機甲兵のそれを上回る。それに対抗するには性能はもちろんだが、搭乗者に合わせた専用機はどうしても必須だった」

「そうだったのか……」

「考えてみれば、キリコさんはユウナさんたちの戦闘データを閲覧することは容易のほうです」

「キリコ君……」

ユウナたちはキリコの言葉をゆっくりと受け入れた。

「ならなおさら、私たちと一緒に来るべきです」



ミュゼはキリコの目を見る。

「キリコさんは償いのつもりで機甲兵製作に関わったのでしよう。ですが、まだ終わっていません」

「……………」

「まだ貴方にはやらなければいけないことがまだまだあるんです！それを自分勝手な理由で行動しないでください……………」

ミュゼは涙目でキリコに詰め寄る。

「私たちは……………VII組じゃないですか……………」

「VII組……………」

キリコは周りを見渡す。

『コクン』

二代目旧VII組はキリコの目を見ながら、大きく頷く。

「……………わかった」

キリコは顔を上げる。

「……………償いというなら、確かにまだ終わってはいらないな」

「キリコ……………」

「俺も行こう……………」

「うん！」

「これで……………」

「ようやく揃いましたね」

「ケツ！遅えんだよ」

「キリコさん……………」

それは、VII組の最後のピースがはまった瞬間だった。

「それで、どこに行くつもりだ？」

「つたく、切り換えが早すぎるでしょ」

「……………お前は？」

「そういえば知らなかったか、タイミング的に」

「ここにいるのはセリーヌだ。今は魔法で擬人化しているそうだが」

「……………」

フィーとラウラの言葉を受け、キリコは思わずセリーヌを見つめる。

「な、何よ！言っとくけど好き好んでこんな格好してるんじゃないんだからねー！」

「まあまあ……」

「キリコさん、これから私たち魔女の隠れ里であるエリンの里へと転移します。こちらに来てください」

「……………」

キリコはエマとセリーヌが顕現させた魔法陣の上に乗る。

「……………ところで連中は？」

「クロウたちなら……あれ？いない……」

「先に行ってしまったようだ」

エリオットとガイウスが周りを見渡すがクロウと鉄機隊は既になかった。

「まったく、自由人なんだから」

「あいつなら大丈夫でしょう。デュバリイさんたちも一緒ならまた会う機会もあるでしょう」

「そうね、クロウだもんね」

リインの言葉にサラも納得した。

「それで良いのか……？」

「フン、あの男のことなど気にしても仕方あるまい」  
頬をかくマキアスにユースィスが鼻を鳴らす。

「……………言いたい放題だな」

「クロウさんって結構イジられ役なのかな？」

「まあ、先輩の貫禄はなかったわね」

「さあ、そろそろ移動するわよ」

「では、行きますー！」

エマとセリーヌの魔法によりⅦ組と物言わぬヴァリマールは黒の工房を脱出した。

その道中、ミュゼはキリコの左手にそつと手をそえる。

(本当に……………お帰りなさい、キリコさん……………！)

## 断章

### 隠れ里エリン

七耀暦1206年 8月18日

黒の工房から帰還したⅦ組はエリンの里で体を休めていた。

そんな中、初めて里に足を踏み入れたキリコは里長であるローゼリアと対面していた。

「よく眠れたかの？キリコ・キュービー」

「……………」

「無口なのは相変わらずじゃのう、まあよいわい」

「……………」

「監視役はカイエンの娘か。大仰なものでもないから少しくらいリラックスしても良いのではないか？ん？」

「ふふっ、そうですよ。キリコさん」

キリコの後ろでミュゼが微笑む。

Ⅶ組の一員として帰還したとはいえ、無条件というわけにはいかなかった。

そこで二代目Ⅶ組メンバーが交代で監視に付くことになった。

「まあシュバルツァーのように複数がついていっているわけでもないしの。それよりおぬし……………」

ローゼリアの顔が険しくなる。

「大分泣かれたようじゃの」

「……………」

キリコは里に着いた後、Ⅶ組とローゼリア、そしてローゼリアのアトリエで世話になっていたレンとキアに皇帝襲撃から今日に至るまでのことを一部を除いて話した。

そして、例え全てから怨まれようと進み続ける覚悟を語った。

誰も彼もが茫然自失する中、ミュゼはキリコに食ってかかった。

なぜ頼ってくれなかったのか、と。

涙ながらに訴えるミュゼにキリコは沈黙するしかなかった。そこから様々なことを問いただされた。

なお、ヴィータがキリコの頬を張ったという話を聞いたエマとミュゼは呆れと羞恥から思わず頭を抱えた。

また、キリコから「すまなかつた」と謝罪を受けたレンとキアは「お兄さんにも都合があつた」「気にしてないよ」と笑っていた。

その後、ローゼリアから続きは翌日ということにして、一同は解散した。

「それにしてもヴィータの奴め、やけにカイエンの娘の肩を持つとう」

「クロチルダさんとは内戦の終結直後からのお付き合いですから」

「なるほどの。まあ元気でやっているなら良い。それはそうとキュービー……」

「?」

ローゼリアはニヤニヤしながら腕を組む。

「お主も隅に置けんのおう♪複数のおなごから想われとるんじやからのおう♪」

(ムムム……)

ミュゼは思わず顔をしかめた。

「黙つとつてもおなごから寄つてくるとか、これが”ぷれいぼうい”、”リア充”というものなのかのう?」

「キ、キリコさんはそのような軟派な方ではありません!」

「ん?なんでここでお主が出てくるんじや?」

「そ、それはその……な、仲間が不当な評価を受けていることへの抗議ですつ!」

「抗議のう。その割には顔が赤いが?」

「ううう……!」

真っ赤になり睨むミュゼと終始笑顔のローゼリア。

「……………」

キリコは二人のやり取りを完全に無視していた。

「お・ば・あ・ち・や・ん・?」

部屋に入って来たのは怖い笑みを浮かべたエマだった。

「エ、エマ……?」

「あんだ、さっきから何してるのよ……」

一緒に入って来たセリーヌも呆れていた。

「こ、これはあれじゃっ! 若人たちと親密になろうと……」

「途中から目的変わってない?」

「とにかく、少しお話があります」

エマはローゼリアの襟首を掴む。

「ま、待てエマ! 妾は……」

「いいですね?」

「ヒッ!?!」

エマの迫力にローゼリアは怯える。

「すみません、キリコさんにミュゼさん。ちゃんと言い聞かせておきますから」

「あ、ああ……」

「どうぞ……」

ローゼリアはエマに引きずられていった。

「言っとくけど、あんなのはごく一部だからね」

セリーヌもついて行った。

「……………行くぞ」

「はい……………」

キリコとミュゼはローゼリアのアトリエを出た。

アトリエを出たキリコたちはガンドルフの店に入る。

「おっ、来たな」

店主のガンドルフはキリコを見て ニヤリと歯を見せる。

「キリコさん、こちらはガンドルフさんと言ってエリンの里で唯一の導力工房のマイスターなんですよ」

「まあ。お前さんがキリコか。よろしくな」

「ああ」

「さっそくでなんだけだよ、お前さんの得物を見せてくれねえか？」  
「……………」

キリコは無言でアーマーマグナムを取り出す。

「なるほど……。こいつがアーマーマグナムか」

ガンドルフはアーマーマグナムを手に取り、しげしげと眺める。

「悪いんだが、少しの間俺に預けてくれねえか？」

「何？」

「この銃はまだまだ改良の余地がありそうだからな。勿論ミラは要らねえ。どうだ、俺に任せてもらえねえだろうか」

「……わかった。任せる」

「すまねえ」

ガンドルフはアーマーマグナムを解体し始める。

「キリコさん、よろしかったんですか？」

「……正直、限界だったからな。直してもらえるなら願ったり叶ったりだ」

「なるほど……」

キリコとミュゼは工房を出た。

「こんにちは、アウラさん、ユークレスさん」

「ええ、こんにちは」

「やあ、いらっしやい」

ミュゼはアウラと挨拶を交わす。

「??」

「キリコさん、こちらは里の薬師のアウラさん。男性の方は旦那さんのユークレスさんです」

「貴方がキリコ君ね。話は聞いてるわ」

アウラはキリコに薬のような物を手渡す。

「これは？」

「魔女の里の秘薬よ。受け取ってちょうだい」

「良いのか？」

「勿論だとも。君たちⅦ組には期待しているからね」

「……………」  
ユークレスらの言葉を受け、キリコは秘薬を懐にしまった。

次にやって来たのは万屋レムリックだった。

「ほっほっほ。来よったな」

「よし、青いの。久しぶりだな」

「こんにちは、オーロイさんにジングゴさん」

「なぜこいつがいる？」

「それはまあ、後ほど。こちらはオーロイさん。この里で万屋を営んでおられる方です」

「ローゼリア様から色々とお便宜を図るよう言われとる。好きなだけ見ていくといい」

「そうか」

「青いのー、ジングゴが仕入れた火器弾薬買ってけー」

「後でリストを寄越せ」

キリコはジングゴを尻目に店内に並べられた品物を眺めた。

「これは？」

キリコは黒い一冊の書物を手に取る。

「お目が高いのう。それは知られざる伝承について書かれた書物じゃよ」

「知られざる伝承、ですか？」

「うむ。教会や一般には伝わっていない、もしくは何らかの理由で正しく伝えられなかった伝承のことじゃよ。教義に反するだけの古代遺物絡みだのとな」

「え、でもそれって……………」

「うむ、教会からは禁書指定を出されるかもしれないな」

「笑っている場合ではないかと……………」

笑い飛ばすオーロイにミュゼは呆れる。

「……………いくらだ？」

「キリコさん？」

「ふむ……………お前さん、何か目的があるようじゃな？」

「ああ……」

「よかろう。それはタダで譲ってやろう。じゃがくれぐれも悪しき目的に使わぬようにな」

「わかつている」

キリコは書物を持って店を出る。

「……………」

ミュゼはキリコの背中を見つめる。

「……お嬢ちゃん」

「……はい」

「支えてやりなされ」

「はいっ……………」

ミュゼはキリコを追いかける。

「なんだあれ？」

「お前さんにはまだ早いわい」

「ふーん？」

ジンゴは不思議そうな顔をした。

書物を部屋に置いた後、キリコとミュゼは宿酒場月影亭へと足をのばした。

「いらっしやいませ。お二人ですか？」

店主のトムソンが二人を出迎える。

「はい。絶賛監視中です♪」

「それはよかったですね。カウンターなら空いていますよ」

「キリコさん、あちらに座りましょう」

ミュゼはキリコの腕を引っ張る。

「……………」

キリコは無表情のままカウンター席に座る。

「注文は何にするんだい？」

「……コーヒー、それとサンドイッチをくれ」

「私はアイステイーをください。後特製シフォンケーキもお願いし  
ます」



「あいよ」

注文を取った女将のライザは調理に取りかかる。

「あら、君たちも来てたの?」

キリコたちが振り返ると、サラがジョッキを片手に飲んでいた。

「あもう、サラさん。まだ昼間ですが」

「ほっといいいよ。無駄だから」

「こうなったサラ教官は梃子でも動かんのだ」

同じテーブルにいたフィー、ラウラが呆れる。

「……………」

キリコに至っては見ようとしなかった。

「やれやれ、昼間から飲んだくれとは良い身分だな」

ユーシスが呆れながら入って来た。

「こんにちは、ユーシスさん」

「二人も来ていたか。それにしても本当にミルディーヌ公女が監視役を買って出たのですね」

「ユーシスさん、敬語は不要ですわ。ミュゼとお呼びください」

ミュゼとユーシスが話している横でキリコはが焙煎したコーヒー豆を挽いているを眺めていた。

「それと、キリコ」

「?」

「父上とその取り巻きの愚行を止めてくれたこと、感謝する」

「成り行きでのことだ。礼を言われることじゃない」

「それでも言わせてほしい。あんな男でも、たった一人の父だ」

「ユーシスさん……」

「……………」

「お待ちせしました。キリコさんはコーヒーとサンドイッチ、ミュゼさんはアイスティーとシフォンケーキですね」

トムソンは二人の目の前に料理と飲み物を並べる。

「ありがとうございます」

「……………」

キリコはサンドイッチをかじる。

「……………悪くない」

「ここはお料理も美味しいんです。このシフォンケーキはアルティナさんも好きなんですよ」

ミュゼはシフォンケーキも優雅に食べる。

「そうか……」

キリコはそう言つて、コーヒーを啜つた。

「キリコさん……」

「？」

「こんな風に、二人でいるのって……夏至祭以来じゃないですか？」

「そうだな」

「ふふふ♪」

ミュゼは微笑んだ。

「……………」

ラウラとフィーは二人の様子を見ていた。

(なんかいい感じだね)

(そつとしておかなければな)

(サラは私が抑えとくよ)

(任せたぞ、フィー)

「何〜？なんかあったの〜？」

「何でもない」

すっかり出来上がっているサラにフィーは素っ気なく答える。

「ほう？お前さんがローゼリア様のおっしやってた……」

月影亭で腹を満たした二人はの占い師の家に来ていた。

「ここは？」

「占い師のダリエさんのお宅です。ダリエさんはローゼリアさんも認める占い師なんですよ」

「悪いが占いだとかそんなものは好かん」

「だろうね。あんたはいつ如何なるときも己だけを信じて進んで来た。違うかい？」

「……………」

キリコはダリエを睨む。

「あわわわ……………」

その様子をダリエの弟子のシギユンが不安そうに見つめる。

「まあ、あんたのことには踏み込まんさ。でもそこのお嬢ちゃんやお仲間には真実くらい話してやるんだね」

「……………」

キリコは押し黙る。

「キリコさん……………」

「…………お喋りが過ぎたようだね」

ダリエはキリコに背を向ける。

「……………」

キリコは無言で出ていった。

ミュゼも慌てて追いかける。

(…………あの男)

ダリエはキリコらが出ていった扉を見つめる。

(あたしが考えている以上に大きなものを抱えているね。果たして世界に何をもたらすか…………)

ダリエの家を出た二人は近くのベンチに腰を下ろしていた。

「キリコさん、その……………」

「別に気にしていない。あの婆さんの言うことも間違っではないな  
い」

「……………」

ミュゼは目を伏せる。

「キリコさんは……………」

「？」

「キリコさんは、何を抱えているんですか？」

「……………」

キリコは腕を組み、目を瞑る。

「ある意味、呪いだな」

「え!?!」

「生きている限り、戦いから逃れられない。そして死ぬこともできない」

「……………」

「お前も宰相から聞いたはずだ」

「不死の……異能者……」

「ああ……」

「……………」

「……………」

二人は無言になった。

「……そろそろ戻る」

「キリコさん……」

「今度はなんだ？」

「いえ……なんでも……」

「？」

「それより行きましょう」

「あ、ああ……」

ミュゼはキリコの手を引つ張る。

（やっぱり……聞けなかった……。キリコさんがあのホームクルスをなぜファイアナと呼んだのか……。どうして……こんなにも怖いのか……。）

ミュゼは言い知れぬ不安を呑み込み、ローゼリアのアトリエへと向かった。

その夜

（まさか温泉まであるとはな）

キリコは湯に浸かりながら空を眺める。

（飛び猫に似た魔獣が番をしているのは驚いたが、ここではどうも普通のことらしい。敵意に似たような感じだったが、おそらくは……）

「おっ、先に来てたか」

「邪魔すんぞ」

クルトとアツシユはキリコの隣に座る。

「ふーっ」

「気持ちいいな」

「お前たちは教官についていたのか?」

「ああ。といっても、近くのサングラール迷宮にね」

「サングラール迷宮?」

「ローゼリアさんが用意してくれた修行場所だよ。この里で目覚め  
てから何度か攻略しているんだ」

「シユバルツァーの野郎、修行だとか言って付き合わせやがって  
……」

「なんだかんだ言つて、アツシユが一番はりきってなかった?」

「同感ですね」

湯衣を纏ったユウナとアルティナが入って来た。

「……男女関係無いのか」

「そう言えばキリコさんは知らなかったんですね。この温泉は混浴  
になってるんです」

「まあ、最初はあたしも戸惑ったけどね。それにしてもミュゼつて  
ば、遅いわね」

ユウナは脱衣場の方向を見る。

「……………」

脱衣場から、ミュゼがおずおずと歩いて来た。

その顔は赤く、動きは拳動不審だった。

「ミュゼさん?」

「大丈夫? 顔が赤いけど……………」

「ただだ、大丈夫です……………」

(あん?)

「もしかして、具合でも悪いのかい?」

「い、いえいえ! ど、どうかお気になさらず……………(ううう……………! 距離  
は離れているとはいえ、キリコさんとお風呂に入る日が来るなんて  
……………!)」

ミュゼはかろうじて平常心を保ちつつ、入浴する。それから二代目Ⅶ組は今日あったことをそれぞれ話しあった。その間ミュゼは平常心を保つことに必死で、会話に参加できずにいた。

温泉から出た二代目Ⅶ組はローゼリアに集められていた。

だがローゼリアは機嫌が良くなかった。

「おばあちゃん?」

「どうかされたんですか?」

「……キュービィー」

「なんだ」

「お主に客じゃ」

「客?」

ローゼリアは杖でテーブルの方を差す。

「……………」

そこには軍服の男が本を読んでいた。

それを見たキリコはため息をつく。

「あ、あの人は……?」

「貴方は、情報局長のルスケ大佐!」

「情報局長だあ?」

アルティナとアッシュは驚きを隠せなかった。

「帝国軍情報局のトップ。以前業務でお会いしたことはあったが

……」

マキアスは眼鏡のブリッジを上げる。

「鉄血オヤジの傘下でないにもかかわらず、大佐にまで上りつめた実力者。ただ……」

「権謀術数に凄まじく長けていて、かなりグレーなやり方だっただけ聞いてる」

サラとフィーはギルドの情報を口にした。

「そして、アルティナやレクター少佐の上司というわけか」

リインはルスケ大佐と呼ばれた男を見る。

「フフフ……」

ルスケ大佐と呼ばれた男は本を閉じ、新旧Ⅶ組の方を向く。

「夜分遅くに済まないな、トールズⅦ組の諸君。そして——」

「また会ったな、キリコ」

「なぜここにいる」

キリコは苛立ちを隠そうともしなかった。

「ぞ、そうじゃ！お主、どうやって結界の中に入って来れたのじゃ  
！」

ルスケ大佐と呼ばれた男は懐からペンデュラムを取り出す。

「それって……！」

「魔昌石の……!?!」

「あたしたちのと同じ……?!」

「深淵の魔女殿からフリーパスチケットを頂いたのでね。さっそく  
有効活用させてもらったというわけさ」

「姉さん……」

「あのアマ……！」

エマとセリーヌは呆れ果てる。

「それで一体何の用だ。ルスケ、いやロツチナ」

「ロツチナ？」

「どういうことだ？」

「ジャン・ポール・ロツチナ。それが本名というわけだよ」

「え!?!」

「ぎ、偽名ってこと!?!」

「と言うか、良いんですか!?!そんなこと話して……!?!」

「かなり問題があるんじゃない？」

突然の暴露にⅦ組は驚きを隠せない。

「厳密に言えば、ルスケというのはこちら側での本名さ。ロツチナ  
の名を知るのはキリコを含め、数人しかいない」

「こ、こちら側……?!」

「わ、訳が分からないぞ……」

「……………」

周囲が困惑する中、リインは黙考していた。  
そして顔を上げた。

「やはり、そういうことか……」

「リイン？」

「どういふこと？」

リインはキリコを見つめる。

「キリコ、君は——」

「この世界の人間じゃない。そういうことなんだろう……？」

『?!?!?』

Ⅵ組は衝撃のあまり、声も出せなかった。

「……ああ」

「え!?!」

「まさか!?!」

「本当に……?」

「アストラギウス。俺は所謂異世界から転生してきた」

周囲が唾然とする中、キリコはゆっくりと秘められた真実を口にす  
る。



## 野望のフアイル①

「アストラギウス。俺は所謂異世界から転生してきた」

『……………』

キリコの言葉にⅦ組は言葉を失った。

「だが教官、なぜそう思った？」

「黒の工房で宰相が言っていたこの地の人間ですらないという言葉。そして異界より来たりし不死の異能者という言葉さ」

リインは一つ一つ話し始めた。

「まず、この地ですらないという言葉。最初に思ったのはこの大陸の外から来たんじゃないかということだ。だが、君はエレボニア帝国の出身であることには間違いないんだろう？」

「ああ」

「そうなってくると異界という言葉の意味合いが変わってくる。大陸の外の世界を指すのではなく、文字通り異なる世界を指す。勿論これは俺の推測にすぎないし突拍子もないことは百も承知だ。だがこれは……………」

「何一つ間違っていない。俺は前世の記憶と異能を引き継いだままこの世界に転生してきたようだ」

「ちよ、ちよつと待っててください！」

ユウナが待ったをかける。

「さつきから聞いていれば……………！そんな馬鹿げたことを信じろって言うんですか!?!」

「ユウナの言うとおりです。信じろという方が無茶ですよ」

「キリコさんの思い込みとしか考えられません」

「異世界からの転生だあ？オカルトにも程があんだろが」

ユウナたちはリインとキリコのやり取りに大きく反発する。

（キリコさんの言葉が真実だと言うならば、私の異能でも見通せない理由に辻褃が合います。……………でも、そんなことあるはず……………）

ミュゼは否定しようとするも、それが無駄だということも理解していた。

「残念だけど、そいつが転生者ってのは本当らしいわよ？」

「セリーヌ、知ってるの!？」

「あんたたちも知ってるだろうけど、あたしは暴走したシユバルツアーと一緒に星杯に残ったでしよ。その時にオズボーン宰相から聞いたのよ」

「そんな大事なことをなんで言わなかったの!」

「仕方ないでしよ。昨日まで死んだと思ってたんだもの。ちなみに、その場にいた騎神の乗り手は全員知ってるわ」

「では、クロウや皇太子殿も知っているとということか」

「それに猟兵王や槍の聖女、勿論兄上もご存知か」

「それだけなら良いんだけどね……」

「まだ何かあるの?」

「あんた、人が犯す最大の罪……神殺しを成し遂げたそうじゃない?」

『は……?』

Ⅶ組は再び言葉を失った。

「神……殺し……じゃと……?」

ローゼリアも頭が真っ白になった。

「フフフ……」

ロツチナはただ、可笑しそうに笑っていた。

「何が可笑的い」

キリコはロツチナを睨む。

「いや、予想通り過ぎてな。とはいえ、全て真実だ」

「真実って……」

「あ、貴方はいつたい……」

「……こいつも転生したらしい」

「はあ!？」

「ルスケ……いえ、ロツチナ……大佐?」

「ルスケで構わんよ。ロツチナという名前は前世、つまりアストラギウスでの本名だからな」

「なるほど、こちら側とはそういうことですか……」

「理解が早くて助かる」

「ということは貴方もキリコさんと同じ……」

「それはない」

ロツチナは即座に否定した。

「あの……そもそもなんですけど……」

「何かな？」

「異能者ってなんなんですか？」

「異能者……アストラギウスにおいて、特別な存在。あらゆる機械への適応性、生まれ持った高い反応速度、どんな重傷をも短期間で回復する強靱な生命力、戦場における異常ともいえる生存確率、そして強力な戦闘力を発揮することにある。それは超人と言っても過言ではない。君たちも覚えがあるんじゃないかな？」

「そ、それは……」

「そしてキリコの場合、異能生存体と呼ばれる特別な遺伝子を有している」

「遺伝子って確か……」

「最近レミフェリアで研究が始まった分野ですね。何でも、生命の謎を解き明かす鍵だそうですが」

「間違っていない。遺伝子は人間を含めたあらゆる動植物が有しているもので、生命の設計図と言い換えてもいい」

「生命の設計図……」

「例えば、レーグニッツ監察官」

「はい？」

「君とお父上は揃って視力が悪いだろう？」

「え、ええ……」

「それが遺伝だよ。子が親に似るといするのは女神がそう決めたわけじゃない。ちゃんと理由があるのさ」

「な、なんだかともないことを聞いてしまったような……」

「教会関係者が聞いたら怒りだしそうね……あ!？」

「ガ、ガイウス!？」

「大丈夫だ。正直、俺もさっぱりだ」  
ガイウスは苦笑いを浮かべる。

「話を戻そう。キリコの持つ異能生存体はある一定の確率でしか誕生しない、一種の突然変異なのだ」

「ふん。その確率とやらがどれほどかは知らんが、妾には及ぶまい」  
ローゼリアは胸を張る。

「あれ？ 確か黒の工房で……」

「キリコは皇族や四大名門、魔女、地精、騎神の起動者すら及ばない特別な存在だつて言つてたけど……」

「何を言うか。妾の方が上じやろうに」

「何張り合つてんのよ」

「……ルスケ大佐はご存知なんですか？」

「ああ。知っている。とある科学者が研究の末に発見した、異能生存体の誕生の確率——」

「それはおよそ、250億分の1とされている」

「……………」  
遂に全員の思考は止まった。

「……………」

ローゼリアに至つては、何とも言えない表情になっていた。

「に……250億分の1……？」

「ほとんど奇跡じゃないか……」

「突然変異と言つても限度というものがあるのかと……」

「ごめんなさい……なんて言つていいか……」

「気にしなくていい」

キリコは首を横に振る。

「そうだな。気にすることではないな」

「教官……？」

「いや、正直俺も頭が全く追い付いていないんだが。だが、キリコはキリコだろう?」

「それは……」

「そうかもしれないませんが……」

「君たちに聞くが、例えばアルティナがホムンクルスだと聞いて態度は変わったか?」

「別に変わんねえな」

「アルはアルですから!」

「だろう? なら、答えは決まっているんじゃないか?」

「……そうですね!」

「ええ、最初から決まっていたんでしよう」

「あと、済まないアルティナ。君を例に使ってしまった」

「気にしないでください。それがⅦ組だと思えます」

「なんだかんだでいい加減だよな」

「だがそれが我らの美点だろう」

「だね」

「考えてもみると、僕たちって色んな生まれなんだね」

「初代Ⅶ組出身者は地方貴族の養子の俺に、帝国最大の重工業メーカーの令嬢のアリサ、帝国最強の師団長の息子のエリオット、光の剣匠の息女のラウラ、帝都知事の息子のマキアス、魔女の眷属であるエマ、アルバレア公爵家の御曹司のユーシス、元猟兵のフィー、蒼穹の地からの留学生のガイウス、白兔のコードネームを持つミリアム、蒼の騎士でジュライ出身のクロウだな」

「改めて聞くと壮観ね……」

「よく纏まっていったものだな……」

アリサとユーシスは呆れた。

「一方、二代目Ⅶ組メンバーはクロスベル警察志望の留学生のユウナ、帝国の名門ヴァンダール家の次男のクルト、黒兔のコードネームを持つアルティナ、ラクウエルの悪童にしてハーメルンの遺児のアッシュ、カイエン公爵家の継承者であるミュゼ。そして異界より来たりし不死の異能者キリコ」

「あく、教官辞めといて良かった♪こんなのもう面倒みきれないわよ」

「サラ、ぶつちやけ過ぎ」

「フィーはジト目を向ける。」

「凄い濃いメンツね……あたしたち……」

「あらゆる意味でね……」

「私のは特に……」

「いや、チビウサも相当だろ」

「二代目Ⅶ組メンバーは構成メンバーにため息が出た。」

「……」

「フフフ……」

「なんだ？」

「なかなか良い縁に巡り会えたじゃないかと思つてな」

「……そうだな」

（キリコさん……）

「キリコ」

「ガイウスが唐突にキリコに問いかける。」

「……」

「キリコは神殺しを成し遂げたという。そのことについて教えてもらえないだろうか」

「あ……」

「それがあつたか……」

「周りは不安そうにキリコを見つめる。」

「それは……」

「それについては私から説明しよう」

「ルスケ大佐……」

「だがそれを語るにはアストラギウスについて語らねばならない。時にローゼリア殿——」

「……何じゃ？」

「隅でいじけていたローゼリアはロツチナの方を向く。」

「この建物の地下に開かずの扉があるとか？」

「貴様なぜ……いや、言わんでも良い。どうせあやつが喋ったのじゃろう？」

「まあ、そういうことです」

「おばあちゃん、そんなものがあつたの？」

「うむ。古くよりこの地下に扉がある。じゃが特殊な護りがかけておつての。先代の里長でさえ解けなかったが故、開かずの扉として長らく放置されとつたのじゃ」

「先代の里長つて、相当昔からあつたつてことですよね」

「少なくとも、800年以上前だな」

「それとキリコと何の関係が？」

「もしかして……」

「ミユゼはあることを思いつく。」

「キリコさんならば開けられる、ということでしょうか？」

「その可能性はある」

「ま、待てい！どうしてそうなるんじゃ！」

「私の予想が正しければ、ですがね。さあ、案内して頂けますか？」

「ぬぐぐぐ……まあ良い。ついて来るが良い」

ローゼリアは地下へと通じる階段を降りる。

新旧Ⅶ組は戸惑いながらも、ついて行つた。

一行は大きな扉の前に来た。

扉の隙間から何かが漏れていた。

「なんだこりゃ？」

「おそらく、この先は空間が歪んでおるのじゃろう」

「空間が？」

「それよりキュービィー、お主の出番じゃぞ」

「……………」

キリコは前に出て、扉を調べる。

「ふふん、妾を含めた住民全員の魔力でさえ開かなかった扉がそうそう……」

(これか)

キリコは扉に彫られた窪みに手を合わせる。

ゴゴゴゴ……………」

扉は輝いた後、ゆっくりと開いていく。

『……………」

VII組とローゼリアは呆気にとられた。

「やはり私の予想は正しかった。異能者であるキリコこそが鍵だったな」

「……………」

キリコは顔色ひとつ変えなかった。

「なんなんじゃ……………」お主は……………」

「?」

「妾は魔女の長じゃぞ!普通ここは妾の出番じゃろ!?!それを……………」

「あゝあ、痲癩起こしたわね……………」

「いいの?」

「良いんです。ああなると長いので放っておくしかないんです」

「そ、そうか……………」(ローゼリアさんの扱いを完全に心得ているな……………」

リインは苦笑いを浮かべる。

「……………」

キリコは歪んだ空間に足を踏み入れる。

「ちよ、キリコ君!」

「大丈夫なのか!」

「問題ない」

キリコは進んで行った。

「お先に失礼するよ」

ロツチナもキリコに続く。

「……………」行くか」

「はいっ!」

VII組も後から続く。



「……………」

ローゼリアは目に涙を浮かべながらとぼとぼと入って行った。

扉の先は白一色の空間が広がっていた。

その真ん中には台座のような物が置かれていた。

「これは？」

「おそらく、お前の記憶を読むための装置だろうな」

「つまりこれは……」

「お前の想像している通りだろう」

「……………」

キリコの目付きが険しくなる。

「な、なに……」

「なんて広さだ……」

「おそらく、空間が歪んでいるからかもしれない」

「まさかこんな場所につながっていたなんてね」

Ⅶ組メンバーは次々と入って来た。

「……フーン！」

最後に不機嫌な表情のローゼリアが入って来た。

「いつまで拗ねてるのよ」

「拗ねてなんかおらんもん！」

「はあ……」

子どもじみた様子のローゼリアにエマは大きいため息をつく。

「これに触れば良いのか？」

「見る限りな。だが……」

ロッチナは光っている数字を指さす。

「ここにIとあるように、段階を踏んでいく仕組みなのかもしれん」

「……………」

キリコは台座に触れようとした。

「ちよつと待ってー！」

ユウナが待ったをかける。

「どうした？」

「いや、さすがに心の準備つてものが……」

「これから僕たちは何を見るんだい？」

「説明を願います」

クルトとアルティナもキリコに問いかける。

「……俺がアストラギウスで戦ってきた記憶だろう」

「記憶？」

「つまり……前世のキリコさんということですか……」

「おそろくな」

「そもそもアストラギウスってのはどんな所なんだよ？」

「……………」

キリコは黙った。

「オイ？」

「まあ、それは嫌でも分かることさ。百聞は一見にしかず、という諺があるように」

「……そうですね」

リインは台座の方に視線をやる。

「キリコ、本当に良いんだな？」

「俺にとっては遠い過去でしかない。皆は良いのか？」

『(コクン)』

VII組は揃って頷いた。

「……わかった」

全員の意志を確認したキリコは台座に触れた。

「こ、これは!？」

「星空……?」

キリコが台座に触れた瞬間、VII組の周りは星空のような光景に変わった。

「何もねえぞ？」

「当然だ。ここは宇宙だからな」

『宇宙!』

VII組は仰天した。

「天の彼方にある、空の女神が住まうとされる聖なる場所……」

「だが、これは……」

「当たり前だ」

「え……?」

「空の上には天国など存在しない。あるのは、暗く冷たい闇がどこまでも広がる地獄しかない」

キリコはまるで吐き捨てるように言った。

「キリコさん……」

「ねえ、みんな！あれを見て！」

エリオットが指さす方向には巨大な戦艦があった。

「嘘……だろう?」

「戦艦が飛行している……?」

「初めに言っておくが、アストラギウスの科学力はゼムリアのそれを遥かに超越している。さすがのラインフォルトでも、大気圏突破まで100年はかかるんじゃないかな?」

「そこまでは……ううん。それ以上かもしれないね」

「そもそも空の上に行こうという発想がないからな」

「ああ。人の身では許されざる所業とされているからな」

「人の身では許されざる所業、か……」

ロッチナはそう呟く。

「ルスケ大佐?」

「では見るがいい。その所業を嫌というほどな」

ロッチナがそういうと、場所が変わった。

「なんだ、あれは……」

ユーシスが指さす方向には、巨大な球体があった。

「あれは惑星サンサ」

「惑星……」

「宇宙には何も星が一つしかわけではない。むしろ何万何億と集まって銀河を形成している。これら全てを総称してアストラギウス銀河と呼ばれている」

「では、あのサンサという星もその一つなのですね？」

「そうだ」

「見た所、変わった様子はないが……」

「では降りてみようか」

「そういうと、また景色が変わる。」

「なっ!？」

「こ、これは……」

VII組は目の前の景色に驚きを隠せなかった。

誰も彼もが逃げ惑っていた。周りの家々は炎を上げて燃えていた。

「アストラギウス銀河では二つの軍事星系、ギルガメス連合とバララント同盟の間で戦争が起きていた」

「第三次銀河大戦。通称《百年戦争》」

「百年……だと!？」

「それも百年間ずっと戦い通しだ」

「しよ、正気じゃないわ!」

「そう。開戦の理由も大儀も忘れ去られ、ただ今日という日を生き延びるために殺し合う。アストラギウス銀河には常に炎と硝煙と死臭が立ち込めているのだ」

『……………』

VII組は言葉を失った。

「これでわかったかな？アストラギウスがどのような世界か」

「ひどい……」

「ただ生き延びるためだけに刃を向け合う。まるでそれは……」

「獣、だね」

「獣か。だが本当におぞましいのはやはり人だろうな」

「まだ何かあるんですか!？」

「みたまえ、あの少年を」

『え!？』

ロッチナの指さす方向から、青い髪の少年が走って来た。

「キリコ……さん……?」

「……………」

キリコはじつと見つめる。

すると、少年の目の前にフルメタルドッグを小さくしたような機動兵器の大軍が歩行してきた。

「あれって、フルメタルドッグ？」

「あれはアーマード・トルーパー。百年戦争が産んだ最高にして最低の兵器。ATとも略されるが、そのコンセプトからボトムズとも呼ばれている」

「ボトムズ、最低な人たちという意味ですか……」

すると、機動兵器は手に持った銃のような物を構えた。

「まさかっ！」

その瞬間、銃のような物から炎が吹き出し、少年は炎に包まれた。

「いや……いやああああああああっ!!」

あまりに凄絶な光景にユウナは悲鳴を上げる。

「あ……あ……あ……」

ミュゼは顔面蒼白になり、後退った。

「……………」

キリコは拳を握りしめる。

「なんなんだ……」

「教官……」

「なんなんだこれはっ!!」

リインはロッチナに掴みかかる。

「落ち着きたまえ」

「ふざけるなっ!!」

「それについて説明しよう。まずは離してくれるかね？」

「……………クッ！」

リインはロッチナの胸ぐらから手を離した。

「あの軍人が見えるかな？彼の名はヨラン・ペールゼン。サンサを襲撃した部隊レッドシオルダーの創設者にして総司令だ」

「ペールゼン……」

「そして彼は異能生存体の発見者でもある。彼は死なない人間の研究を行っており、この作戦もある種の実験だったというわけだ」

「ふざけないでよっ！こんなこと、許されるわけないでしょ!？」

「では少し時間を早めて見るか」

ロツチナが言うと、景色は変わった。

「あれは……?」

「多分、難民キャンプだね。昔団の作戦で見てことある」

「難民キャンプ……」

「皆さん！見てください!」

アルティナの指さす方向には、あの少年がいた。

全身を焼かれたはずだが、髪は生え揃い、火傷の跡一つなかった。

「嘘……」

「生きてるってか……」

「まさか、これも……」

「そうだ。これもキリコの異能だ。もつとも、な」

「ああ」

「キリコ……?」

「しばらくの間、俺は過去のこと何一つ思い出せなくなった。同時に重い神経症も患っていた」

「当然でしょうね。あんな目に遭えば……」

「だとしても、とんでもないわね。アンタの異能ってのは——」

「ちなみに記録によると、後にキリコは全身火傷、頭蓋骨陥没、脊椎損傷、内臓破裂、大腿骨の複雑骨折等の重傷をいくつも負いながらも生存し、僅か十日ほどで病院周辺を歩き回れるようになったらしいが？」

『……………』

VII組は再び思考が止まる。

（確か……テイタニアと初めて交戦した時か）

キリコは自身の記憶をさかのぼる。

「あ、あは、あはははははは……」

「理解……不……能……」

「ユウナさん！アルティナさん！お気を確かに!!」

「マジもんの不死身じゃねえかよ!？」

「ふ、普通死んでるか一生寝たきりじゃなければおかしいぞ?！」

二代目Ⅶ組は半ばパニックになる。

「凄まじいものよの。じゃが、考えようによつてはそれは——」

「好きで持っているわけじゃない……!！」

「!！」

ローゼリアの言葉にキリコは怒りを孕んだ口調で答える。

「すまぬ……」

ローゼリアはキリコに詫げる。

「その後、お前は記憶をなくしたまま、サンサからメルキアに渡り、軍に志願したんだったな?！」

「……確か14歳ぐらいだと思つたな」

「14歳!？」

「アルティナちゃんほとんど変わらないのに……」

「少年兵……いえ、それにしても若すぎる……」

「百年戦争の末期は凄惨かつ凄絶を極めた。倫理も道德も何もかも二の次三の次になり、キリコのような少年兵が次々と前線に送られ死んでいった。誰も彼もが終わりの見えない泥沼の戦いに疲れきつていた」

「もう、戦争じゃないわね……」

「軍に志願したキリコはATのパイロット―装甲騎兵となり、前線を転々としたそうだ。17歳になる頃には曹長にまでなつていたんだつたな?！」

「ああ」

「曹長……」

「軍隊における、下士官のトップね。ベテランの曹長ともなると、兵士の代表として一個師団の団長とサシで話ができるとまで言われているわね」

「新任の将校なんかじゃ及ばない影響力を持ってるらしいよ」

「よくそこまで出世できたな……」

「別に特別なことじゃない」  
「？」

「上も下も関係なく死んでいく。生き延びられれば欠員の補充という形で昇進できるというわけだ」

「これも百年戦争末期だからこそだな。もともと、実力がなければ屍の仲間入りだが」

ロツチナもキリコに続く。

「……………」

リインはロツチナの方を向く。

「そろそろ教えてもらえませんか？」

「？」

「なぜ貴方はそこまで詳しいんですか？」

「そ、そういえば……………」

「…………私はある方の命令で、キリコの追跡と異能者の研究をしていた。それだけさ」

「ある方？」

「それはあの——」

「いや、ペールゼンではない。もっと大物だよ」

「大物？」

「いざれこの台座が教えてくれるだろう。では続きといこう。むせるほどに炎と硝煙と死臭にまみれたアストラギウス銀河の地獄を生き抜いた男の物語を」

ロツチナはⅦ組に背を向けた。



## 野望のフアイル②

「では続きといこう。むせるほどに炎と硝煙と死臭にまみれたアストラギウス銀河の地獄を生き抜いた男の物語を」

ロツチナの言葉と同時に場面は変わった。

VII組の目の前に厚い大気に覆われた惑星が現れた。

「あれは?」

「惑星オドン。とある部隊の訓練場としてギルガメスは所有している」

「とある部隊?」

「論より証拠。まずあの艦を見てみよう」

場面は戦艦内部に変わる。

そこには兵士と思わしき屈強な男たちが乗っていた。その中に呼吸が荒く、顔色の悪いキリコもいた。

兵士の一人から絡まれるも、その隣にいた別の兵士に庇われていた。

「カースン……」

キリコは自身を庇ってくれた兵士の名を呟く。

「知り合いか?」

「僅かな間だがな」

「フツ……」

「ルスケ大佐?」

「なんでもない。さあ、着陸するぞ」

ロツチナの言うとおり、戦艦は惑星オドンの荒野に建てられた基地に着陸した。

「これから、君たちの想像を絶する光景が次々と現れる。もしかすると、正気を失うかもしれない。怖いもの見たさなら、退室することを勧める」

ロツチナは真剣な眼差しでVII組に問いかける。

「……いいえ。お願いします」

ミュゼは前が出る。

「私たちが戦わなくてはならない相手が、キリコさんの過去と密接だということとは薄々感じていました。ならば、知らなくてはなりません。たとえ、どんなものであろうとも……!」

「僕も同じです」  
クルトも前が出る。

「正直シヨックは隠せません。ですが、僕は知らなければいけない。これからⅦ組全員で戦うかもしれない相手を」

「返さなきやなんねえ借りがあるしな」

「帝国もクロスベルも異世界も関係ない。それがあたしたちですから!」

「そのとおりです」

アツシユ、ユウナ、アルティナも続く。

「それは勿論自分たちもです」

リインたち初代Ⅶ組も真剣な顔で出る。

「……つくづく果報者だな」

「ああ……」

ロツチナはキリコに微笑む。

「では続けよう。キリコ」

「……………」

キリコは台座に触れる。

「キリコ side」

「こ、これは……!?!」

Ⅶ組は目の前の光景に茫然自失となっていた。

それはAT同士の戦闘、いや一方的な殺戮だった。

「おいキュービー! なんだよあれは……!」

「共食いだ」

「共食い?」

「味方同士を殺し合わせて、生き残った者を合格とする、レッドシヨルダールの入隊試験のことだ」

「なんだと……!?!」

「ま、待ってください！レッドシヨルダーというのはキリコさんを……」

「さつきも言ったが、当時の俺は過去のことを何一つ忘れてしまっていた。それに……」

俺は思わず奥歯を噛む。

「好きで入ったわけじゃない……！」

「キリコ君……」

「レッドシヨルダーは総司令のペールゼン大佐自らが抜擢した者で構成されている。もつとも、その後の命がけの訓練で脱落する者も多かったそうだが」

「レッドシヨルダーとはあくまでも一部隊のはずです。なぜ軍の上層部は動かなかったんですか？」

「レッドシヨルダー——第24メルキア方面軍戦略機甲歩兵团特殊任務班X—1は疑惑の極みにあった。たとえばとある戦いで味方が何万人と戦死する中、レッドシヨルダーだけが生き残ったという事例も存在する」

故にレッドシヨルダーは味方を殺してでも生き残る、吸血部隊とも呼ばれていた……。

「だが、それでも動けなかった」

「なぜですか？」

「当時、レッドシヨルダーは各戦線ですさまじい戦果を挙げてきた。それこそ、疑惑すら有耶無耶にしてしまうほどにな」

「無茶苦茶じゃないか……！」

「無論、手をこまねいていたわけじゃない。レッドシヨルダーは予算を湯水のように使い、人員を過剰に損失させ、軍部内でもその詳細は一切知らされない。ペールゼンを反目する連中は手を変え品を変え、その秘密を探ろうとした。ほとんどが失敗に終わったが」

（たとえスパイがいても即座に始末し、敵の襲撃であるとして表には出さない。徹底した情報統制と更正という名のリンチで内部を纏め上げ、外部はペールゼンの政治手腕で他に逸らす。こうして見ると、ある意味完璧な部隊だったようだな）

その後、俺を含めた四人が生き残った。だがその内の二人は兵士としては完全に再起不能だったため、結局合格したのは俺とカーソンの二人だった。

カーソンとしては目論見通りだったようだ。

「それはそうと、聞きたいことがある」

俺はフィー・クラウゼルに問いかける。

「何？」

「猟兵団でも似たようなことはあるのか？」

「実弾や真剣で訓練することはあるよ。生き残れなかったら戦場で生き残れない。だからレッドシヨルダーは強いんだと思う」

「それもそうだな」

「……前々から思ってたけど」

「キリコとフィーさんで仲良いような……」

「片や西風の妖精として知られた元猟兵フィー・クラウゼル、片や元兵士にして傭兵としての過去を持つキリコ。似たような価値観を持つのは当然だな」

「なるほどな……」

「ホント、教え子じゃなくてよかったわ。フィーとラウラだけでもめんどくさかったのに……」

「……ほとんどノータッチだったような気がするんですけど」

エリオット・クレイグが顔をしかめた。

「ま、これからもリインのことヨロシク」

「わかった」

「そんなこともあってか、当然生き残った者はスパイとして疑われる」

話を戻したロツチナの言葉を皮切りに、さらに場面が変わる。

それは俺が三人の兵士に尋問されている場面だった。

「あの人たちは……」

「グレゴルー・ガロツシュ前任上級曹長、バイマン・ハガード伍長、ムーザ・メリメ伍長。俺がレッドシヨルダーにいた頃の戦友だ」

「戦友……?」

「そんな感じには見えないんだが……」

「ロツチナが言ったとおり、俺もスパイとして疑われた。もつとも、腹いせとしての意味合いが大きかったんだろうが」

「腹いせで尋問するのかよ」

「しかもその直前にキリコさんを痛めつけてましたし」

その後、俺はカースンに助けられた。

だがスパイの疑惑は晴れていなかった。

その後、工場区画に呼び出された俺はグレゴルーたちに銃を向けられた。

その際、放たれた弾丸は僅かに逸れた。さらにムーザの持っていたマシンガンは突然故障した。

これにはⅦ組も息を飲んだんだろう。誰一人として言葉を発していなかった。

その直後、指令のインゲ・リーマン少佐の声が響く。

リーマン少佐に嵌められ、俺とカースンと曹長たちはレッドシヨルダ―の連中と戦う羽目になった。

激しい抵抗の末、俺たちは基地を壊滅させた。

だがその直後、基地にいた何倍のレッドシヨルダ―隊員が待ち構えていた。

弾薬も底をついた俺たちは降伏を余儀なくされた。

その後、俺はペールゼンに呼び出され、尋問を受ける。

そこで俺は異能生存体を有していること、なぜレッドシヨルダ―に選ばれたのかを告げられた。

話が進むにつれ、ペールゼンは俺の過去に触れようとした。神経性の発作が始まり、新旧Ⅶ組でさえ引いてしまうほど暴力的になった。

そして俺は、ペールゼンの持っていた拳銃で撃たれた。だが俺は死ななかった。

サザラントでシャーリーに撃たれた時と同様、弾丸が心臓を逸れていた。

二日間の休養の後、俺はサンサ攻略に組み込まれた。

改めて見て分かった。ペールゼンは滅多なことでは死なない俺に恐怖を覚えていた。そして自らの願望に叶う俺が誰にも従わない氣質を持っていたことに絶望した。

だからこそ、俺を戦場の最前線に送り込み、そこで殺そうとしたんだろう。

「サンサで戦っているうちに、俺は過去を思い出した。俺はメルキアではなくサンサで生まれ、レッドシヨルダーに過去をズタズタにされた」と

「神経性の発作は起きなかったのかよ？」

「戦闘中だったからな。ATに乗っている以上、気にしてもいられない。作戦が終わる頃には完全に克服していた」

「そうかよ」

「ねえ」

「？」

アリサ・ラインフォルトが声をかけてきた。

「さつきから気になってたけど……なんなの、あのATって機動兵器は……!」

「アリサ……」

「あの装甲はあまりにも脆すぎるわ!それに僅かな被弾であの爆発はあり得ないわよ!」

「今まで見てきただろうが、ATの装甲は薄い。おそらく、太刀や槍でも破壊できるくらいにな」

「なんだって!?!」

「ATは機甲兵以上の汎用性と過剰とも言える生産性を誇る。小一時間の訓練さえ積み重ねれば誰でも扱えるし、町工場レベルの設備で整備や改造も出来る」

「で、でも……!そんなレベルじゃ……」

「そうだ。まともな機動兵器なら脱出装置なりあるだろうが、ATには無駄なものでしかないから搭載されていない。生産性と引き換えに、装甲やサバイバビリティは徹底的に削ぎ落とされている」

「さらに、ATはマッスルシリンダーとポリマーリングル液と呼ばれる人間で言う筋肉と血液のようなもので動くわけだが、ポリマーリングル液は揮発性と引火性が非常に高い。仮に銃弾がかすっただけで引火して、中の乗り手は火だるまというわけだ」

「ふざけないで！そんなことが罷り通って良いと思ってるの！」

「言ったはずだ。ATは最高にして最低の兵器だ」と

「……………」

「ちなみに、俺を含めて多くの兵士が乗っているスコープドッグは開発されてから一度もモデルチェンジされていないらしい」

「……………」

アリサ・ラインフォルトは悔しそうに唇を噛む。

彼女の立場を考えれば当然か。

「……………失った記憶を取り戻している間もなく、俺は味方から襲撃を受けた」

「え……………」

「異能生存体を発見したペールゼンとは対照的に、リーマンは終始懐疑的だった」

「……………」

「サンサ攻略戦のさなか、俺の中の異能を確かめると言って、襲撃された」

実際、俺は命を落としかけた。

肩や手足を撃たれ、出血多量に陥った。眼はかすみ、呼吸するだけで意識が途切れかけた。

正直、俺は曹長たちに手当てを受けるまでどうやって生き延びたのか未だに思い出せない。

場面がいきなり撤退時になったことから台座も読み取れなかったようだ。

俺は死ねなかった。

そして、これは始まりに過ぎない。

「キリコ side out」

「その後、俺は負傷を理由にサンサから後方へと移された」

「サンサはどうなったんですか？」

「……サンサはレッドシオルダーの総攻撃を受けて陥落した」

「大きな爪痕を残してな」

「爪痕……」

「やはり、ただではすまなかったみたいね。それより、レッドシオルダーはどうなったの？」

「サンサを落としたことで、ペールゼンはメルキア軍部で確かな地位を獲得した」

「当然、そうなるか」

「だが奴の天下とはならなかった」

「どうということ？」

「サンサで戦死したカースン、あいつこそがスパイだった」

「あのカースンさんが……」

「事切れる寸前、俺に真相を明かしてくれた。すでにメルキア本営はレッドシオルダーの秘密を全て掴んでいると」

「つてことは……」

「ああ。ペールゼンは失脚し、軍事裁判にかけられることになった。そしてレッドシオルダーは解散させられた」

「それならキリコは……」

「そこで終わりではない。レッドシオルダー隊員に待っていたのは厳しい処分だった。俺を含めたレッドシオルダー隊員は全員激戦地の最前線に送られることになった。ようするに裁判をせずにそのまま死刑宣告だ」

「そんな……」

「そんなに顔をしなくていい。たとえレッドシオルダーに入らなくても、それ以前にもそれと同じようなこともしてきた。それすらも過去だと割りきれなくなるくらいにな」

「キリコ……」

「そういう意味では俺は壊れているのかもな——」



「やめてください！」

ミュゼは叫ぶ。

「どうして自分を卑下なさるんですか！」

「そうだよ！キリコ君の悪い癖だよ！」

「……………」

ミュゼとユウナの剣幕にキリコは黙る。

「気持ちにはわからなくてもない。だが君はアストラギウスのキリコじゃない。ゼムリアのキリコ、そうなんじゃないのか？」

「いや、こじつけだろ」

「ですね」

アッシュとアルティナはリインに辛い評価を下す。

「……そうだな」

キリコは頷いた。

「……………」

「教官、形無しですね」

クルトは落ち込むリインに言葉をかける。

「どうやらもう少し続くようだ。このまま続けても構わんかな？」

「待つてください。今どれくらいの時刻なんでしょう？」

「そういえばそうだな」

「マキアス、確か時計持ってたよね？」

「わかった。ええつと……………」

マキアスは腕時計を見る。

その直後、不思議そうな顔をする。

「どうかしたのか？」

「変なんだ」

「何が？」

「時計の針がほとんど動いていない」

「は？」

「時計が？」

「修理くらいちゃんとしておけ」

「言っておくが、これは先月修理に出して戻ってきたやつだ」  
ユースとマキアスが睨み合う。

「確か外に時計が掛かっていたはずです。ちよつと見て来ますね」  
近くにいたエマは部屋を出る。そして戻って来た。

「どうだった？」

「えつと……それがですね……」

「？」

「入った時間からほとんど経っていないんです」

「ええっ!？」

「2時間くらいいたと思ったが……」

「おそらく、この空間のせいじやろうな」

「時間の流れが違うってことですか」

「そんなことがあるのか……」

「うむ。しかし、祖先はなんのためにこんなものを用意したんじや  
ろうか……」

「考えられんのはコイツのためだよな」

「賢者なる存在は焔の眷属と大地の眷属双方と関わりがあり、かつ  
キリコさんとも関係があるというならば辻褄は合います」

「それはわかっておる。なぜ見せる必要があるかじゃ。お主に心当  
たりはあるか？」

「……皆目検討もつかない」

キリコは首を横に振る。

「まあ、そこはゆっくりと考えていけばいいだろうさ。では始める  
としよう」

ロツチナはⅦ組に背を向ける。

「キリコ side」

Ⅶ組の目に映ったのは巨大な河だった。

「キリコ、これは……」

「レッドシヨルダー解散後、俺は惑星マナウラでタイバス渡河作戦  
に参加していた」

「渡河作戦……」

「河の向こうにある敵基地の奪取、そんなところかしら？」

「そうだ。確か、40万の兵力が投じられたらしいが」

「40万!？」

「相当デカい作戦だな」

そして作戦は始まった。

俺が組み込まれた第一陣は河を渡り始めた。

だがいきなりアクシデントが起きた。

雨が降り、水量が増した河をATでそのまま渡るのは自殺行為だ。

そこで杭を打って、ワイヤーで走るように渡るのが当初の作戦だ。

その杭を積んだ戦艦がバララントの攻撃を受けて撃沈。積んでいた杭が降り注ぎ、第一陣の足枷になった。

痺れを切らした第二陣が出撃を開始。前線は混乱した。

加えてバララントの攻撃は続く。

元々地の利があり、バララント側に優勢だった。

河でまごついているところを砲撃され、岸にたどり着いても即座に

銃撃される。

銃撃される。

とはいえ、この行動には意味があった。

前面に集中させ、伏兵から目を逸らさせる。いわば囷の役割だ。

これを見たユウナやクルトは歯軋りをしていたが、戦争ともなれば

こういった作戦はむしろ常識の部類に入るだろう。

俺がそういうと、ユウナは「絶対に全面戦争なんかさせないんだ

から!」と決意を露にした。

こうなるとますますわからない。

ワイズマンは何をしようとしている？

作戦は成功した。だがその直前、杭に雷が落ちて水面に浮かぶポリ

マーリンゲル液に引火。

近くの機体が爆発し、機体を降りていた俺は巻き込まれた。

重傷を負い、意識を失った俺は野戦病院に移送、最前線の惑星ガレ

アデに転属させられた。

アデに転属させられた。

治療を終え、戦線への復帰が決まった俺はリハビリを兼ねて近くを歩いてみることにした。

そこで俺はある兵士に出会った。

その兵士はガリー・ゴダン曹長と名乗った。ガレアデへ運びこまれた俺をぞんざいに担架にのせた兵士だった。

ゴダンの隣に座って話を聞いていると、近くの石が砕け散った。

直後に銃声が鳴り響いたことから、どうやらスナイパーライフルによる狙撃のようだ。

当初、元レッドシオルダーである俺への報復だと思っていた。

だがそれは杞憂だったと後に知らされることとなる。

なんとか襲撃をかわした俺とゴダンは作戦指令部に呼び出された。

そこには学者肌の兵士ノル・バーコフ曹長と療養中の俺を襲った少年兵のゲレンボラツシュ・ドロカ・ザキ伍長が待っていた。

俺たちは作戦指令部から前線基地で待機しているあと一人を加えた特別分隊として独自の行動を取れと命令された。

正直不可解だったが、軍にいる以上命令は絶対だ。

前線基地で待機していた老け顔の兵士ダレ・コチャツク軍曹も合流し、俺たちはバーコフ分隊としての任務に就くこととなった。

「なかなか個性的なメンツが揃いましたね」

「そうだな」

「分隊を任せられるってことは相当優秀な経歴の持ち主なんだろうな——」

「ところがどっこい。むしろ逆だ」

「逆?」

「元レッドシオルダーのキリコは勿論だが、どいつもこいつも立派な経歴の持ち主だ」

「立派な?」

「分隊長のバーコフは理知的とは裏腹に敵前逃亡の常習でな、中尉から曹長へ格下げされた臆病者というわけだ」

「なにそれ……」

「ゴダンは激戦地を渡り歩いたが戦死した同僚になりすますことで生き長らえてきた。そのことから死神シユラスコとも呼ばれている」

「死神、言いえて妙だな」

「コチャックは病的なままでな臆病さと無責任さから信頼はゼロに等しい故に相手にされなかったが都合が良かった。なぜならやつはガレアデ作戦指令部とメルキア情報省の三重スパイだったからだ。まあ現場の人間にしてみれば卑怯者も同然だな」

「確かに追及を逸らすにはある意味スパイ向きとも言えますが……」

「ザキ、彼については分からん。まあ、補充兵として登用されたとか言えないな」

「なんか釈然としないけど……」

Ⅶ組はバーコフ分隊の面々の正体に引いているようだが無理もない。俺たちは腕を買われたわけじゃない。

「キリコさん、この分隊とはいったい……」

「それは——」

「異能生存体の持ち主である可能性が高かったからだ」

「え!?!」

「ペールゼンはレッドショルダー創設にあたり、戦場における生存率の高い兵士を探していた。その中でキリコを含めた5人を選びだし、研究した。その研究書はペールゼン・ファイルズと呼ばれ後生にも残っている」

「ペールゼン・ファイルズ……」

「ですが、ペールゼンは……」

「彼は軍事裁判にかけられていた。判決が下される寸前、とある人物がペールゼンに耳打ちした。その瞬間、彼は狂人のごとく叫びだした。知つてのとおり、心神喪失及び心神耗弱者は裁判にはかけられない。その人物はペールゼンを手中におさめることに成功した」

「誰なんですか?その人物というのは」

「メルキア情報省官僚、フェドク・ウオツカム。異能生存体に興味を抱き、バーコフ分隊の産みの親だ」

「ペールゼンはどうなったんですか？」

「そこはおいおい話そう。まずはキリコの足跡を辿るとしよう」

俺たちに下された最初の任務は夜間に乗じて敵前線基地を奇襲、マニド峡谷を通る本隊の手助けだ。

予定通り俺たちは出撃。

だがコチャツクミスで奇襲が気づかれてしまった。

とはいえ夜間ということもあってか、敵の士気は低い。外は分隊長たちに任せて、俺とザキは内部に侵入。

内部で展開していた敵ATを殲滅しつつ、奥へと進む。

その時、ザキのスコープドッグが突然襲いかかってきた。

なんとか静めると、ザキは頭を抑えながら謝ってきた。なぜこころで俺に対して殺意を抱くのか。あの時分かっていたら、別の終わり方になっていたのかもしれない。

外に出ると、ゴダンがコチャツクを締め上げていた。

なんでも、戦闘中にパニックに陥ったコチャツクはゴダンに向けて発砲したらしい。

その責任を取らせる形でまだ息のある敵に止めを刺させた。

だがコチャツクを一人にしたのがまずかった。

生き残っていた敵兵が戦略兵器を起動させようとしたのだ。

コチャツクを責めている暇もなく、俺は戦略兵器発射阻止に向かう。

発射は阻止できたが、敵は兵器ごと自爆し、峡谷は崩壊した。

その結果、本隊は壊滅し、バーコフ分隊の初任務は失敗に終わった。

「とんでもねえ無能がいたもんだな……」

「敵より厄介な味方、というわけですか」

アツシユとミュゼの評価は辛い。

とはいえ、後にやつ技能に助けられることになるのだから、あの無能よりはるかにマシだろう。

「それにしても、キリコはいつもこんな戦いを強いられていたのか

？」

「兵士なんてこんなものだ。中には生身でATと戦わされる者たちもいたらしい」

「うーん……父さんは絶対にそんなことしないしさせないと思うけど……」

エリオット・クレイグは複雑そうな表情を浮かべているな。

「こちらと向こうでは戦争の規模そのものが違いますから、比べられるものではないと思います」

「確かに、こちらの常識も想像も遥かに越えた戦いばかりだな」

「まあ……戦争を起こそうとしている私が言えた義理ではありませんが」

「ミュゼさん……」

「すみません。詮なきことを言いました」

ミュゼは詫びた。

「この後はどうなったんだ？」

「任務失敗の責任を取らされる形で俺たちはガレアデ極北基地に配置転換させられた。だがその前にいざこざが起きた」

任務に失敗したことで俺たちは白い目で見られることが多くなった。

そんな時、何者かに襲撃を受けた。

ポリマーリングル液工場に追いつめられ、身動きが取れなくなった俺たちは正に絶体絶命だった。

それでも諦めるわけにはいかない。

そこで俺たちはポリマーリングル液のタンクから脱出することを試みた。

活動限界時間ギリギリまで粘った末、俺たちは脱出することに成功した。

だがこれが後に大きな災いと呼ぶことになるとは思わなかった。

「どんな人生を送っているんだ……」

「あり得んだろう……」

マキアス・レーグニッツとユーシス・アルバレアは呆れ果てている。

「言っておくが、キリコの過去を知る上ではまだ序の口、まだオードブルかスープくらいだぞ?」

「だいぶ腹はいっぱいなのだが」

「フッフ、デザートまではまだまだ遠い。続きといこう。キリコ、確か輸送中にもいざこざがあつたそうだが?」

「ああ」

それは輸送艦での移動中に起きた。

整備が完璧だったにもかかわらず、突然エンジンが停止し、不時着した。

その直後、何者かに襲撃された。

狙撃に警戒する中、スピーカーから声が響く。

連中はギルガメス浄化委員会を名乗り、死神シユラスコ、つまりゴダンを引き渡せと要求してきた。

俺たちはこの時初めてゴダンの素性を知った。

コチャツクは無理やりにも追い出そうとしていたが、今は生き延びて前線基地に行くことが先決だ。

なんとか襲撃者たちを殲滅させ、前線基地へとたどり着いた。

だがそこで、大きなツケを支払うことになる。

ポリマーリングル液工場脱出の際、俺たちは工場を爆破させた。

その時に舞い上がったガスが太陽を覆い、ガレアデ極北基地付近にダウンバーストの前兆を作り出してしまった。

気象科学者でもあるバーコフの見立てによると、零下二百度に達する、正に冷気の爆弾が降り注ぐという。

おまけに、基地指令となつたワツプは威張るだけで何の役にも立たない能無しだ。

そのため俺たちは、零下二百度にも耐えられるポリマーリングル液精製に奔走することになった。

コチャツクが自らの舌で配合を決め、試行錯誤の末、完成した。人



は見かけで判断してはいけないとこの時は思ったものだ。

数時間後、俺たちバーコフ分隊は迫りくるバララントの大軍を適当に蹴散らしつつ、その時を待っていた。

タイムリミットが近づき、俺たちは一ヶ所に集まり、ATの機能をいくつか停止させる。

その瞬間、ダウンバーストが始まった。

零下二百度の大寒波は動く物全てを氷漬けにする。

自然のおりなす大災害にVII組は言葉をなくしていた。

しばらくして、俺を呼ぶ声が聞こえる。

張り付いた氷を払い、外に出る。

そこは俺たち以外の全てが凍りついていた。

そしてバーコフ分隊は全員無事だった。

俺たちは迎えを待ったため、基地へと帰還した。

「キリコ side out」

「ダウンバースト……知識としては知っていたが……」

「自然の力とは時に脅威であることが改めて分かりましたね」

「この後はキリコ君はどうなったの？」

「ガレアデを離れた後、俺たちは惑星クズスクに召集された」

「どんなとこなの？」

「それは——」

「惑星クズスクはメルキア情報省所有の星だ。軍関係者の保養所が設置されている」

ロツチナが新旧VII組に説明した。

「保養所……ですか」

「情報局絡みってのが胡散臭いな」

「良い読みだ。保養所とは名ばかりで、政治犯などが収監されている。高級軍人とできえクズスクの名を聞けば震えが止まらなくなる程だ」

「な、なんでそんな所に!？」

「転属のためだ」

「転属？」

「つまり、キリコたちは情報省の？」

「ISSとか言う情報省設立の特殊部隊にな」

キリコは自身の記憶を辿る。

「そろそろ大詰めだな」

「大詰め、ということとは……」

「百年戦争の終結間際、ギルガメスは史上最大の惑星奪取作戦に打ってでた」

「……モナドか」

「そうだ」

「モナド？そういう星があるのか？」

「惑星モナド。バララントの戦略的重要拠点が置かれている星だ。

動員兵員数は約1億2000万人とされている」

「1億2000万人!？」

「さらに毎秒45億ギルダンのカネが飛んでいった」

「毎秒45億……」

「無茶苦茶なんてもんじゃねえな……」

「ギルダンの価値は分かりませんが、相当なものであることはわかります……」

「では見届けよう。だが先に言っておこう」

『?』

新旧VII組は首を傾げる。

「真実はいつも残酷だ」

「……………」

「キリコ side」

俺たちバーコフ分隊に惑星モナドへの出撃命令が下された。

わざわざ専用のATまで用意する辺り、力の入れようが分かる。

改めて俯瞰してみると、このモナド攻略戦はウオツカムの点数稼ぎ以外の何物でもない。

ロツチナ曰く、疑問視する声を一蹴して可決させたという。なぜそ

ここまで知っているのかはどうでもいい。

実際、モナドでは激しい攻防戦が繰り広げられた。

俺たちは破壊されていく僚機を尻目に、奥へと侵攻していく。

その時だった。

突然目の前の光景が変わった。

どこまでも暗く深い闇に堕ちていくような感覚、不意に頭に響く赤子の声のようなもの。

俺にはそれが地獄の釜の蓋がこじ開けられたように思えた。

気がつくと、俺たちはかなり深い所に倒れていた。

こんな状況に置かれれば歴戦の兵士と言えど、動揺が生まれる。

怯えるバーコフを皮切りにゴダンとコチャックが取っ組みあいと罵りあい始めた。

そんな中、ザキは俺に向かって言った。

お前、レッドシオルダーなんだろう？と。

全員から疑惑の目で見られる中、俺はこの分隊が何のために集められたのか、その仮説を話した。

今思えば話すべきではなかった。あの時言葉を選んでいたら、違った結末になっていたのかもしれない。

「そこから分隊はモナド脱出のため走りだした。俺たちは死なない、そんなことを叫びながら引き金を引き続けた」

「でも、生き残ったんでしよう？全員異能生存体っていうのを持ってたんだから」

「確かに、今までのことを考えれば……」

「……いや」

教官は訝しげな表情を浮かべる。

「真実はいつも残酷……そういうこと、なんだろう……？」  
「ええ」

そう、真実とは甘いものじゃない。何時だって残酷だ。

バララント兵を倒す内に、コチャックは躁鬱状態に陥ったようだ。

バーコフの制止を無視して敵に突っ込んだ。

その結果、待ち構えていたバララント兵に蜂の巣にされた。

不死身であるはずのコチャツクの死は分隊に大きな衝撃を与えた。

続くゴダンもパニツクになり敵陣に攻撃を仕掛けるが、敵に吹き飛ばされる。

コックピットは血まみれで助かるはずもなかった。首筋に薬を注射し、安楽死させた。

ここにきてバーコフは悟った。俺以外は異能生存体ではなかったと。

「ペールゼン・ファイルズ曰く、キリコ以外の四人は近似値に過ぎない。これはペールゼンがウオツカムのような人間を嵌めるためにわざと書き残したそうだな」

「な……!？」

「で、でも分隊は何度も……」

「それはあくまで結果論だ。彼らは単にそれぞれの得意分野で切り抜けてきたに過ぎない」

ロツチナはバツサリと切る。

「では、ウオツカムという人物はペールゼンに嵌められていたと?」

「その通り。ペールゼンは裁判の後、クズスクで尋問と拷問を受けていた。だがペールゼンの方が上手だった」

「上手?」

「予め部下を潜り込ませていた。拷問のそれに見せかけるべく、白剤を調整させていたとかな」

「な……!？」

「その後、作戦失敗で全てを失ったウオツカムの前に現れ、真実を告げた。ウオツカムも余程追いつめられていたのだろう。ウオツカムは自殺した」

「自殺……」

「確かに、待っているのは極刑だろうが……」

「後味が悪すぎるだろう……!」



て死ぬことも許されない」

「たとえばこの里が戦火に巻き込まれ、君たちと里の住民全員が命を落としたとしよう。それでもキリコは必ず生き残る、それが異能生存体だ。とはいえ、まさか転生という形で生存するとは予想外だったが」

「肉体という器が減んでも、魂と記憶と異能は生き続ける、というわけじゃない」

「それって……!」

「キリコさんには、本当の意味での死というものが訪れないと……?」

「そういうことになるな。たとえこの世界で寿命が尽きても、異世界への転生という形でキリコ・キュービーは永遠に生き続ける。少なくとも私はそう見ている」

「そんな……!」

「それすなわち、キリコに永遠の孤独を宿命づけるということ。キリコの異能は神の祝福などではなく、呪いと言っても過言ではない」

「……だからこそ、俺はこの忌々しい異能をなんとしてでも消し去らなくてはならない」

「それだけではないだろう。お前の望みは」

ロツチナが口をはさむ。

「……」

「キリコ……?」

「……人間として死ぬためにだ」

キリコは口を開いた。

「人間として死ぬ……」

「それが君が第Ⅱ分校に来た本当の理由か」

「ええ。少なくともヒントだけでも得るために」

「それがキリコ君のやりたいこと……」

「どうして、話してくれなかったんだ?」

「……言ったところで信じるか?」

「それは……………」

「無理……………かもしれません……………」

キリコの言葉にクルトとアルティナは目をそむける。

「それなら、ローゼリアさんなら……………」

「なんとかなんじやねえのか?」

「おばあちゃん……………」

「う、ううむ……………」

ローゼリアは渋い表情を浮かべる。

「構わない」

「……………キュービイー、お主も分かっているのじやろう?」

「無理、か」

「な、なんで!?!」

「カイエンの娘や劫焔の異能とキュービイーのそれとでは話が違う。遺伝子という人の生命の根幹を弄るということは殺すと同義。じゃが、記憶を見たとおりに殺すことはできぬ。これ以上は女神の奇跡の領域、妾ではもはや手も足も出ん」

「……………やはりそうか」

「そんな……………」

「……………お前たちが気にすることじゃない」

「キリコ……………」

「俺自身が認めたくなかったただけなのかもしれない……………」  
『……………』

新旧VII組は誰一人、言葉を紡げなかった。

「ルスケよ、これ以上先は視れんのか?」

「ええ、鍵となるものが無ければ。それが何なのかは私にも分かり

ません」

「キュービイー、お主はどうじゃ?」

「わからない」

キリコは首を横に振る。

「結局は振り出しか」

「うん、何のためにキリコ君の過去を見せるんだろう？」

「何か大事な答えにでも繋がっているのだろうか……？」

「今は置いておくしかないな。それとみんな、明日ブリオニア島に行くことになる」

「ブリオニア島？」

「何でだ？」

「ああ……」

リインはポケットからメモ用紙を取り出す。

「教官、それは？」

「クロウのメッセージだ。どさくさ紛れにコートの中に入れておいたらしい」

「い、いつの間に……！」

「とりあえず、ブリオニア島に来いつての？」

「はい。新旧VII組全員で」

「どういうつもりだ？」

新旧VII組は戸惑う。

「話し合いの所悪いが、これで失礼させてもらうよ」

「えっ……ああ、はい……」

「お疲れ様でした……」

「ではまたいずれ」

そう言ってロツチナは出ていった。

「キリコ君、結局あの人ってなんなの？」

「……さあな」

「まあ……いいけど……」

ユウナは踏み込むことを止めた。

新旧VII組が部屋を出ると、ほとんど時間が経過していなかった。

「やはり記憶の部屋の外との時間が隔絶されていると見て間違いないな」

「記憶の部屋って名前になったんですね」

「これも魔女の秘術なのでしょうか？」



「もしくは古代遺物とか？」

「ま、うだうだ考えても仕方ねえだろ」

「それもそうだが……？キリコ？」

「……先に部屋に戻っている」

「キリコさん!? ああもう！ 待つてくださ〜い！」

階段を上がるキリコをミュゼが慌てて追いかける。

「……健気だね」

「監視役云々は抜きにしてね」

「余程惚れておられるようだな」

「肝心の本人はどう思っているのかは分かりませんが」

「キリコさんはどちらかと言えば勘は鋭い方だと思います。……

教官と違って」

「そうね……こちらから何か動かないと全然気づかないし」

「朴念仁で鈍感でシスコン」

（やれやれ、こんな所も先代に似なんでも良かろうに。いや、シスコ

ンは違ったか）

ローゼリアはかつての同胞を思い出す。

「とりあえず、見守ろうか」

「そうですね」

「何かあつたらフォローしてやれば良いだろうしな」

「その何かがあればね」

「セリーヌっ！」

「まあまあ……」

新旧Ⅶ組女子は淑女協定を結んだ。

「……………」

キリコはベッドに寝転がりながら、記憶の部屋の意図を考えていた。

（賢者とか言う奴が本当にワイズマンだとしたら、やはり意図が読めない。仮に俺の記憶が必要なら、どちらかと言えば地精だろう）

（やつの書いた絵図に乗るのは気に入らない。だが今は大人しく乗

るしかないか。だがそれは……)

キリコの眼は鋭くなる。

(いずれ会うその日まで、俺がやつをこの手で殺すまで………!)

## フエンリール

実験用機甲兵 フエンリール

全長 7アーヂュ

重量 6・8トリム

材質 クルダレゴン合金（フレーム、装甲）

### 武装

アームパンチ（右腕のみ）

大型アイアンクロー

12mmマシンガン

ハンディソリッドシューター

VMAX

### 概要

フルメタルドッグに代わる新たな実験用機甲兵。

ロツチナが書いた草案とフルメタルドッグの戦闘データを基に、黒の工房に一時身を寄せていたG・シユミット博士が設計し、造られた機体。また、道化師カンパネルラが故意に隠していたため、工房長である黒のアルベリヒですら知ることはなかった。

同じ実験用機甲兵であるフルメタルドッグとの大きな違いはその安定さにある。格闘能力を向上させることで総合力を底上げさせ、武装を限定させることで活動限界時間を増加させることに成功。結果、射撃戦寄りかつ短期決戦寄りだったフルメタルドッグに比べ、本機は継戦能力に優れた長期戦寄りとなっている。

特に防御力がケストレルβ以下であったフルメタルドッグに対して、フエンリールはフレームと装甲を神機などに使われるクルダレゴン合金を用いることで、シユピーゲルス並みにまで向上している。ただし、リアクティブアーマー機能は搭載されていないため、実際の防御力はドラツケンⅡ程度と思われる。

頭部のターレットレンズは回転式から固定式に変更された。また、

一つ一つが防弾板で補強されており損傷率は低下した。

コックピット内部の作りを見直し、コントロールボックスを内部に据え置くことで背部バックパックの換装を容易にする。その代償にコックピットはフルメタルドッグのそれより狭い。

ターンピック機構とローラーダッシュはフルメタルドッグと性能は遜色ない。ただし耐久力は上がっている。

フルメタルドッグと違い、外付けの武装は開発されていない。これは前述の通り、武装を限定することによって活動限界時間を増加させているため。

格闘能力向上のため、左腕を大型アイアンクローに変更。大型アイアンクローの爪はゼムリアストーン製であり、機甲兵はおろか魔煌機兵の装甲すら引き裂く。生産に限りがあるためコストは計算不可能となっている。

大型アイアンクローには12mmマシンガンが内蔵されている。これは後述のハンディソリッドシューターの対比であり、連射による牽制が目的だが、当たり所によっては機甲兵や飛行艇をも撃墜する。再装填には専用の弾装を大型アイアンクローに着脱する。最大弾数は200発。

メインの武装としてハンディソリッドシューターが挙げられる。前述の12mmマシンガンと違い、一撃必殺をコンセプトとして開発された。とはいえ連射性はそこまで低いわけでもない。再装填は専用の弾装を着脱する。最大弾数は32発。

残る右腕はマニピュレータを守るために、籠手とナックルガードが一体化したような形状になっている。これはアームパンチを使用した際のショックを和らげる仕組みになっている。とはいえ、連発し過ぎると故障することには変わりない。最大弾数は6発。

機体の性能が高い反面、操作性はフルメタルドッグ以上にピーキーなものになっている。二代目VII組はおろか、機甲兵搭乗経験のあるリインですら移動が困難なほど。

以上のことから、フェンリールはキリコ専用機として運用されていくことになる。ただし、キリコ自身は過去の因縁から本機を好んでお

らず、全てが終われば即座にスクラップにすることを心に決めて  
いる。

オーロックス砦や黒竜関を立て続けに陥落させたため、帝国軍人  
たちの記憶に深く刻みこまれている。なおかつ、とある暗殺者コンビな  
どの裏側の存在からも注視されており、後に乗り手共々《蒼き災厄》と  
呼ばれることとなる。

実は、装甲とフレームにクルダレゴン合金を用いたことで製作者サ  
イドですら想定外の機能が宿ることになった。

キリコとフェンリールが極度に追いつめた際、キリコの生存本能と  
仲間たちとの戦術リンクが組合わさり、それらがクルダレゴン合金に  
感応し、蒼いオーラを纏うこととなった。

その状態になった時、フェンリールの全能力は飛躍的に向上する。  
その威力は文字通り桁違いで、あらゆる攻撃が必殺の一撃に跳ね上  
がる。これにより、ドレックノール要塞に押し寄せた魔煌機兵部隊を  
殲滅させている。

この戦闘でのデータはティータ・ラツセルによる解析の後、最大値  
への転換という意味からV-MAXと命名される。

そもそもクルダレゴンは精神感応力が著しく高く、同じ素材を用い  
た神機は碧の御子を介した至宝の力で圧倒的な力を奮った。

フェンリールの場合、機甲兵クラスにダウンサイジングしたことに  
よって至宝に頼らずとも真価を発揮することが出来た。ただし、これ  
らは上記の通りイレギュラーであることを書き記しておく。

キリコにとっても切り札になり得るのだが、その発動条件がフェン  
リールの損傷率90%以上に追い込まなくてはならないため、リイン  
をはじめとするVII組から使用厳禁を言い渡される(キリコとしても合  
理的でないため、一応同意している)。

名前の由来は北欧神話に登場する魔獣フェンリルより。

たとえば神にも従わないキリコが神話に登場する魔獣の名前を冠し  
た機体に乗るに込められたのは皮肉としか言い様がない。

## ウド①

午後 7:30

「なるほど、そういうことじゃったか」

エリンの里に帰還したⅦ組を出迎えたローゼリアは、思わぬ客人に狼狽した。

リインから詳細を聞かされ、クロウ、デユバリイ、アイネス、エンアの言葉を聞いたローゼリアは里に留まることを許可した。

許可されたことにデユバリイたちは戸惑うも、心の広い方だとローゼリアに感謝を述べた。

威厳たつぷりに振る舞うローゼリアを見て、アツシユを筆頭に何人かはいつ化けの皮が剥がれるのかを予想し始めた。

「それにしても、騎神の眷属化か。相克の歴史上始まって以来の珍事じゃな」

「やっぱり前例はないんですね」

「アームブラストから聞いておるじゃろうが、相克で敗けた騎神は勝った騎神に取り込まれる。各々の持ち味を自分の力としてな」

「そして最終的に巨イナル一に達するとうわけですか」

「うむ」

ローゼリアは首を縦に振る。

「つくづく先代の起動者に似とるわい」

「ドライケルス大帝に？」

「あやつは情け深い男でう。負けた者を斬り捨てることなく、己の配下とした。中には獅子戦役後に重職に就いた者もおるそうじゃ」

「新帝国憲法の父、アルフォンスですね」

「先々月、帝国史で出てきましたね」

「第六皇子ルキウスの軍師だったとか」

「え……そうだっけ？」

「ユウナ……」

変な汗をかくユウナにクルトは呆れた。

「……………ドライケルス大帝のことはわかりました。それはそうと、獅子戦役の時は相克ではなかったんですか？」

「うむ。獅子戦役もまた、相克と言っても過言ではなかった。とはいえ、金と黒が出て来なかったために不完全な相克であったが」

「どうして出てこなかったのでしょうか？」

「分からぬ。1000年以上も姿を現さんかった故に、七体の騎神の中でも最も謎の多いのが黒でな」

「では金は？」

「金は獅子戦役以前、自身の絶大な力を畏れ、今のクロスベルの地に自らを封印したらしい」

「そして、その金の騎神は兄上によって封印は解かれた」

「そういうことじゃな」

「……………」

ユーシスは思わず拳を握りしめる。

「ルーファス・アルバレア。内戦時から何か企んでいるような男でしたが」

「そういえば、先日キュービイーは総督殿とクロスベルで会っているそうだが」

「ああ」

「俺たちも聞きました。父たるあの方を超える、そう言っていたんだな？」

「ええ」

「父たるあの方…………」

「この場合、先代アルバレア公爵ではなく…………」

「オズボーン宰相、ですね」

「確かユーシスさんと総督は…………」

「アルティナ」

クルトがアルティナに待ったをかける。

「…………構わん。俺もアルノーや父の代から仕える家臣たちを問い詰めて真相を聞き出した。間違いなく、俺と兄上の方に血の繋がりはない」

「不義の子、というわけですか」

「何度聞いても信じられないな」

「ルーファス総督はずっと貴族を恨んでいたのかもしれないな」

「……………兄上の気持ちもわからなくはない。明らかに歪んでいるにもかかわらず、それを見て見ぬふりをするばかりか、正しいことだと開き直る。これでは絶望されるのも無理はない」

「ユーススさん……………」

「リイン、頼みが——」

「わかってるさ。ルーファスさんを止めるんだな」

「ああ。貴族の有り様に絶望し、それを正さんとしたまではいい。だがそのために世界を終焉の危機に陥れるなど言語道断。絶対に俺が目覚まさせてやる」

「その意気だ、ユースス」

「私たちもお手伝いします!」

(ふふふ、若さじやのう)

「さて、ここからが本題じゃ」

「本題?」

「そーいや、婆さんに呼び出されてたんだったな」

「……………まあよい。キュービイー、お主の力が必要なのじゃ」

「……………」

今まで顔を伏せていたキリコが顔を上げる。

「もしかして、記憶の部屋に変化が?」

「うむ。まあ実際に見てもらった方が早いかな」

「あの……………」

デユバリイが手を挙げる。

「なんじゃ?」

「何なんですか?その記憶の部屋というのは?」

「この家に古くから存在していた場所です。どうやらキリコさんの過去を見せるためのものようです」

「ようですって、知らなかったんですの?」



「……………異能者によって扉が開かれた。それまでは開かずの扉として長らく放置されておったのじゃ」

ローゼリアは顔をしかめながら説明した。

「なるほどな」

「キリコ君の過去って、アストラギウスのことよね？」

「うむ。そのとおりだ」

「えっ……………」

「あ、貴方は……………」

「久しぶりだな。まさか鉄機隊の諸君も一緒とは」

ローゼリアのアトリエに入ってきたのはロツチナだった。

「また来おったのか」

「深淵の魔女殿がご親切にも教えてくださったので」

「チツ……………あの不良娘が」

「クロウさんは本当に姉さんの行き先をご存知ないんですか？」

「悪いな。ヴィータを捕捉すんのはガラ湖からガラス片を見つけるのと同じことだぜ？」

クロウは肩を竦めた。

「……………はあ」

エマは大きくため息をついた。

「ミュゼの方も知らないの？」

「生憎、私の方でも」

「まあよい。それで、今回も来るんじゃない？」

「この男よりはいささか社交的だと自負しております故」

「いちいち引つかかるが、まあよいわ。では参ろうぞ」

ローゼリアを先頭に、ロツチナとⅦ組と鉄機隊の面々は記憶の部屋に足を踏み入れた。

午後 8:00

「な、なんですの、この場所は……………!？」

デュバライは白一面で統一された記憶の部屋に驚きを隠せなかつ

た。

「里長殿、ここが？」

「うむ。ここが記憶の部屋じゃ」

「ここでキリコ君の記憶を見ることができるとね」

「そういうことだ」

ロツチナは中央の台座を調べ始めた。

「キリコ」

「？」

「見てみる」

「……………」

キリコはロツチナの指さす方を見た。

「……………やはりか」

「前は“Ⅰ”だったが、今回は“Ⅱ”になっている」

「え!？」

リインも駆け寄る。

「……確かにⅡになっていますね。しかし、まさか……」

「シュバルツァー、心当たりがあるようだな？」

「はい……………」

「教官……………」

「おそらくだが……第一相克に勝利し、蒼のオルディーネを取り込んだからだろう」

「相克に？」

「ですが、タイミングと辻褄は合いますね」

「だな」

「七体の騎神誕生に関与したとされ、焰と大地の両眷属を争わせた賢者なる存在。何かしらのつながりがあっても不自然ではないでしょう」

「ただ、何のためにこんなものを遺していたのかが分からないんだよね」

「結局のところ、キリコの過去から何かを割り出すしかないのが現状だね」

「なんだかよ、掌の上で転がされてる気がしてなんねえな」  
(確かに。ワイズマン、何をしようとしている?)

「さて、と」

ロツチナは手を叩き、全員を向かせる。

「そろそろ始めるとしよう。いくら隔絶されていると言っても、時間の浪費は無駄なことだからな」

「隔絶? どういうことですか?」

「ここでは一切時間が流れていないんです」

「時間が?」

「前回、ここで2時間近くいましたが、部屋の外に出てみると入った時とほとんど時間が経っていませんでした」

「そうなの……?」

「ふむ。鍛練にはうってつけではあるな」

「私も同じことを思っていました、剛毅殿」

ラウラがアイネスに同調した。

「やはりこの二人、気が合うのかもしれない」

「大概にしときなさいよ」

アリサはため息混じりに言った。

「………脳筋パイセンが」

「アツシユさん」

「八つ裂きにされても助けられないからな」

「へいへい」

アルティナとクルトの言葉にアツシユは引っ込んだ。

「ゴホン……では始めよう。キリコ」

「………」

キリコは台座に触れた。

「キリコ side」

最初に映ったのは戦艦の中で作戦を待つ場面だった。

この時の俺は惑星モナドから帰還したばかりだった。

だが兵士に休息はほとんどない。たとえ戦争終結間近でもだ。

既に退役艦となった戦艦テルタインに載せられた俺はナンバー2のコールサインを与えられ、小惑星リドへの奇襲作戦参加を言い渡された。

だが、それは巨大な陰謀だった。

小惑星リドの基地へ着いた俺は混乱せずにはいられなかった。

なぜなら、俺たちが襲っていたのは敵であるバララントではなく、味方であるギルガメスだったからだ。

俺は小隊長のコニン少尉に何度もこの作戦の内容を問うた。

だが教えてくれるどころか、作戦の邪魔だと通信回線を切られてしまった。

数分もすると、こちらの損害はほぼ無傷のままリドの基地を陥落させた。

他の連中が基地の金塊を物色する中、俺はひたすら作戦の意味を考えていた。そして、目当てのものがまだ何かあると。

そんな時だった。

金塊が入っていた大金庫の近くに、棺桶ともカプセルとも取れるものが置いてあった。

俺はそれに近づき、カバーを開けた。

そこには、頭髮の一切生えていない裸の女が入っていた。

いや、人間かどうかも怪しい。

次の瞬間、俺とそいつは目が合った。感情など全く感じられなかった。

俺は言い知れぬ何かを感じ、銃を向けた。

だがなぜか引き金を引けなかった。

我に返った俺はカバーを閉じた。

それでも頭がぐちゃぐちゃだった。あれはいったいなんだ。

そんな時、コニン少尉が声をかけてきた。

妙な物を発見したと言ったら、コニン少尉らはそれこそ探していたものだと言い出した。

直後、俺は外にいるテルタインを呼んで来いと命令された。

みんな、知っている。俺が見た何かは何なのかを知っている。なぜ

隠す。

考えてがまとまらずに動いていた為か、背後から迫る爆弾に気づくのに遅れてしまった。

爆弾は爆発し、小惑星リドはチリとなり、宇宙の闇に消えた。

俺は完全に気を失い、宇宙を流されていった。

「キリコ side out」

『……………』

VII組と鉄機隊の面々は黙って見ていた。

「なるほど。小惑星リドではこのような状況だったのか」

「ああ……………」

ロツチナの問いかけにキリコは素っ気なく答える。

「本当に苦労ばかりしているんですね」

「いやいや、苦労の一言で済ませていいものではないでしょう!？」

「望まぬ部隊に入れられ、あちこちで戦うしかなかったキリコ君に較べれば、マスターに拾われた私たちは幸運だったのかもしれないわ」

「うむ。レッドショルダーにバーコフ分隊だったか」

「……………待て」

キリコは待ったをかける。

「……………なぜそれを知っている?」

「……………え?」

「そ、そういえば……………」

「キュービーが異世界から転生してきたことは以前聞いた。だがその詳細までは聞かされてなかったはず……………」

鉄機隊の面々は思わず動揺した。

「俺も知ってるぜ。ISSつてのに編入されて、モナドつて星が崩壊して、ザキってやつを吊ったんだよな?」

「な?」

「どうなっているの!?!」

「……………もしかしたら」

「リイン？」

「ここで見たものは部屋に入っている者だけに共有されるんじゃないか？」

「共有？」

「俺たちは一回目から見た。対してクロウやデユバリイさんたちは二回目だ。なのに一回目の内容を知っているってことは、そういうことじゃないか？」

「なるほど」

「筋は通っているな」

「なんだかやけに親切なシステムね」

「となると、変に人を入れない方がよさそうね」

「だろうな。こんなもん、混乱させるだけだぜ……つと、すまねえな」

クロウはキリコに詫げる。

「気にしなくていい」

「お婆あちゃん」

「わかっておる。里の者に調査させようと思つとつたが、断念せざるを得んな」

ローゼリアは腕を組み、ため息をつく。

「結論が出たところで、続きといこうか」

「……………」

キリコは台座に触れた。

「キリコ side」

気がつくど、俺は機械やコードが付いた椅子に座らされていた。

両手両足は拘束されており、身動きが取れなかった。

突然、声が響いてきた。

そこから、名前と生年月日、所属先などの質問に答えていった。

ようやく俺は尋問だと気づいた。

最後に俺は妙な質問をされた。

『素体はどこだ』と。

何のことだが全く分からなかった。声は棺桶のようなものがあつたはずだと言つた。

俺は見なかつたと答えた。あれが声の言う素体なのかも分からなかつたからだ。

声は俺の言葉を嘘だとはねつけ、尋問は拷問へと変わった。

脳内に電気ショックを流され、叫び声が部屋中に響いた。

ふと、横目で見ると、クルト、アルティナ、アツシユは言葉を無くし、ユウナとミュゼは両耳を押さえていた。

これは無理もないな。

初代Ⅶ組も似たようなものだった。

鉄機隊は睨むように見ているところを見ると、少なくともこういう場面は見慣れているらしい。

電流が止み、俺は声の主——ロツチナを含めた数人に押さえつけられ、注射器から何かを打ち込まれた。

それが何なのか気づけたのは大分先のことだ。

その後、惑星メルキアの軍基地に連行された俺を待っていたのはひたすら拷問の日々だった。

毎日のように薬物刺激と電磁刺激を併用した拷問を受け続け、体も精神もボロボロになっていた。

何度言われようとも知らないものは知らない。

だがその言葉は届くことはなく、電圧を最大にまで上げられた。

その僅か数秒後に意識を失つた。どうやら心停止しようだ。

蘇生させようと高電流を流され、俺は海老反りに拘束具をぶち破りながら床に投げ出された。

意識が朦朧とする中、俺は偶然近くを転がっていたナットを握りしめた。

今見ると、これも異能の力なのだろう。

拷問が終わり、俺は部屋に戻された。

その際、ほんの一瞬の隙を突いて俺はドアの下にナットを転がした。

故障かと思いつて来た兵士を気絶させ、マシンガンをもう一人に発砲。

そこからは立ちふさがる兵士は有無を言わず殺し、ひたすら空港を目指した。

息も絶え絶えに戦闘機を奪い、俺は基地を脱走した。

俺の運命を狂わせてきた、あの忌々しい戦争は、その日終結した。だがそれは、何の意味もなかった。

あれを見た時から俺自身の戦いが始まっていたのだ。果てのない戦いが。

「キリコ side out」

「……すさまじいな」

「でも、どうしてこんなに……」

「そ、そうですね！なんでここまでして……！」

ユウナはロツチナに食ってかかる。

「キリコが見たのはメルキアの軍事機密の中でも最高レベルの案件だ。同じ立場なら帝国軍でも同じことをやると思うが？」

「し、しかしそれでも……！」

「どうなのだ？アルティナ・オライオン情報局員？」

「……否定は……しません……」

「そんな……」

「……情報は時に命よりも重くなる。もしそれが漏れれば取り返しのつかないことになる。軍隊や猟兵団に懲罰部隊が存在するのもそのためよ」

サラは敢えて厳しい口調で言った。

「……………」

ユウナとクルトは顔を伏せるしかなかった。

「……………」一つ、よろしいでしょうか？」

「？」

ミュゼがキリコに問いかける。

「キリコさんは兵士でいらっしやっただすよね？」



「ああ」

「百年戦争は終わったんですよね？」

「正確には休戦だ」

「その……軍隊には戻られたのですか……？」

「いや、それはない」

『えっ!?!』

キリコの意外な言葉に全員がキリコを見る。

「軍の最高機密を見た以上、軍に居場所などあるはずがない」

「ま、待て！つまりお前は……」

「脱走兵だ」

『えええええっ!?!』

キリコが語る真実にⅦ組と鉄機隊は驚愕した。

「脱走兵!?!」

「確かに円満に除隊してる姿は想像しちやいなかったが……」

「まさかのカミングアウトでしたね……」

「……ぶっちゃけ過ぎ……」

「マスターがお聞きになったらどのような顔をなさるか……」

それぞれが心情を口にした。

「というより、キリコ君心停止にまでなったのに死なないのね……」

「不死の異能者に偽りなしだな」

「……………」

「ロツチナ side」

私の手を逃れたキリコを待っていたのは、また地獄だった。

地獄の名は、ウド。

元々は巨大なコンピューター工場が存在したが、それ故にバララン  
トの標的として爆撃を受けた。

ボロボロになった街にメルキア各地から戦火を逃れた難民や食い  
詰めた軍隊崩れが集まり、巨大な闇市を作りあげた。

治安など最悪の部類に入る。退廃と混沌とをコンクリートミキ  
サーにかけてぶちまけた、そんな喩えが良く似合う。

もしかすると、この世界が終焉を迎えた後はこうなるのかもしれない。

キリコがウドの街に入ったのは終戦直後の混乱のまった中だった。

この地獄の様相を呈した街が、キリコによって更なる地獄に見舞われるとは、いったい誰が予想しただろうか。

ウドの街に入り込んだキリコは闇市をぶらついていた。すると、遠くからけたたましい爆音が響いてきた。

街の住民は皆、血相を変えて逃げ出した。

当時、ウドの街はブーン・ファミリーと呼ばれる暴走族が牛耳っており、住民にとっては恐怖の象徴だったそう。

取り締まるべき治安警察は目こぼしを平然と行い、裏で上前をはねているばかりか、トップですら暴走族とつるんでいる。

逃走を試みたキリコも捕らえられ、連中のアジトに連行された。

キリコはそこで労働に従事する羽目になった。

「ひどい……」

「街だけではない。まるで人の心を失ってしまったかのようだ」

「終戦直後ということも手伝って、どこの街や一部を除いた国々は混乱を極めた。まるでこの国の未来を見ているようだな」

「帝国がこの街のようになる？」

「帝国だけではない。共和国にクロスベル、隣接するリベールやレミアミアもこうなるだろう。このまま世界が終焉を迎えれば、な」

「そんなことさせない！」

「ふむ、氣勢を吐くのは結構。だが叶えられなければそれは子どもの戯れ言だぞ？ま、私はどうなろうとも構わないのだが」

「あ、貴方って人は……！」

私にとってはキリコの行く末の方が遥かに重要なのでな。

それさえ見届けられるならこの世界が滅んでも構わん。

「ロツチナ side out」

「キリコ side」

ブーン・ファミリーに捕らえられた俺は何を掘っているのかも分からないまま、労働についた。

途中、拐われてきた住民と思われる男に食い扶持という名のヂヂリウムを見せてもらった。

ヂヂリウムは希少な液体金属で、コンピュータの回路などに利用されている。

そもそもブーン・ファミリーのアジトとなっている場所は巨大なコンピュータ工場だった。

それがバララントの爆撃を受けて、ヂヂリウムが四方八方に飛び散ったらしい。

それに目をつけたブーン・ファミリーは街で捕らえてきた人間に掘らせている。

この時はこのヂヂリウムが俺の運命に大きく関わってくるとは夢にも思わなかった。

掘っている途中で赤い色をした雨が降ってきた。

百年も続いた戦争の穢れが赤い酸の雨となって降ってくる。当然人体には有害で、俺たちの体をジワジワと溶かしていく。

VII組全員は目に見えて分かるほど引いていた。

この世界の導力技術ならこうはならないかもしれないが、絶対にならないとも言いきれない。

作業中、さつきの男が苦しみだした。俺が駆け寄ると、見張りが銃を発砲してきた。

それに腹を立てた俺は掴みかかるも、あつという間に多勢に無勢になり痛めつけられた。

その夜、俺は脱走を決意する者たちとともに混乱を起こした。

俺は同室だった男が気になり、ブーン・ファミリーの長のブーンの屋敷に潜りこんだ。

最上階の一室に入ると、ブーン・ファミリーの幹部と思われる者たちは死んでいた。

その中に一人だけ身なりのいい中年の男が上座に座っていた。この男も死んでいた。

瀕死の重傷を負った同室の男によると、中年の男はウド治安警察の署長だと言う。

治安警察とは名ばかりに、構成員のほとんどが軍隊崩れの連中で、暴力と権力でウドの街の住民からは恐れられていた。

さらに、暴走族を取り締まるどころか、裏で上前をはねているというのだから余計たちが悪い。

ユウナは怒りに震えているようだ。彼女の目標としている警察がこんなぎまでは無理もないかもしれない。

同室の男が息を引き取った直後、俺は避難していたブーン・ファミリーの幹部に追いかけて回される羽目になった。

乗っていたバイクもミサイルで破壊され、絶体絶命に追い込まれた。

その時、突然幹部の額に銃弾が撃ち込まれた。そのまま幹部はバイクの爆発に巻き込まれ死んだ。

そのまま逃げようとしたが、逃げた先はダストシユートになっていた。

そこで俺は錆び付いて役目を終えたATを発見した。

俺は錆び付いたATのコックピットの中に入って休息を取ることにした。

冷たい鉄の棺桶のはずだが、俺はまるでお袋の胸に抱かれたかのように眠りについた。

「キリコ side out」

「ふいふい、波乱万丈とはこのことかよ」

「これまで見て来ましたが、初めて安らいだお顔になりましたね」

「確かに、うって変わったようにも見えるが」

「コックピットの中だからこそ、だな？」

「ああ」

キリコはロツチナの推測を肯定した。

「コックピットの中だからこそ……」

「キリコに限らず、戦争帰りというのは何かしら後遺症を抱えているものさ。キリコの場合、泥沼のような戦争に病んでしまい、コックピットの中でしか安心して眠ることができないのだろう」

「キリコさん……」

「……確かに、百日戦役直後の父さんはどこかイライラしていて、よく魔されていたって」

「まさしくそれだ。特に最前線で戦う兵士は如何程のものかは想像するに難くない」

「……今なら分かる気がする。父さんがどうして音楽の道に猛反対したのか」

「エリオット……」

「戦場のなん足るかを知り尽くした御仁だからこそなのだろうな」

「感傷に浸るのもいいが、続きといこうか。キリコ、そろそろあの三

馬鹿が出てくる頃合いか？」

「……そうだな」

(あら？キリコさん……なんだか)

ミュゼはキリコの顔に僅かながら変化があつたことを見抜いた。

「キリコ side」

目が覚めた俺はコックピットを出て、軽く体を動かした。

不意に物音がしたため、鉄棒を構えた。

そこにいたのは白髪の男だった。

警戒を解き、白髪の男について行った先で俺は林檎を齧っていた赤い髪の女に出会った。

いきなり舌を出され、面食らった。

赤い髪の女——ココナが去った後、俺は食事がありつくことができ

た。  
白髪の男——ブルーズ・ゴウトと名乗った男は働き口があるから契約しないかと持ちかけてきた。

だがこんな胡散臭い話にホイホイ乗るほど馬鹿じゃない。

その代わり、比較的動けそうなATを手に入れた。さっそく修理に取りかかっていると、モジャモジャ頭の男がトラックでやって来た。

モジャモジャ頭の男——バナラ・バートラーは馴れ馴れしく接してきたが無視した。

暴走族の執拗な追っ手が迫る中、ゴウトとバナラの手を借りなんとか修理に成功。

街中で暴走族を迎え撃つことになった。

途中、治安警察の戦闘ヘリが奇襲をかけてきたため、大混乱に陥った。

この抗争でブーンを含めた暴走族の大半は命を落とし、組織としての力は急激に衰退していった。

俺の乗るATはミサイルの誘爆によって引火、炎の中で幻覚を見た。

その後、ゴウトに助け出された。

「キリコ side out」

「……無茶苦茶にもほどがあんだろ」

「そうだな」

「それにしても、なぜ治安警察は暴走族を攻撃したのでしょうか？」

「新しい署長、ギムアール・イスクイ署長のやり方だよ。逆らう者は徹底的に叩き潰すという風にな」

「誰が悪いのかも分からなくなっちゃったわね」

「それはそうとルスケ大佐。貴方はなぜここまで詳しいんですか？」

「簡単なことさ。私もウドの街にいたからだよ」

「貴方もいたんですか？」

「当時、我々は奪われた素体がウドの街に運び込まれたのはおおよそ掴んでいた。そして偶然キリコもウドの街にやって来たというわけさ」

「それだけではありませんよね？」

ミュゼが口をはさむ。

「ほう？」

「追われていたキリコさんは偶然助かったように見えたんですが、これは第三者の手引きがあつてのことですよね？ルスケ大佐？」

ミュゼは微笑んだ。

「お見事。先ほどキリコの体に打ち込んだのは実はメルキア軍製のビーコンだね。惑星メルキアの軌道上から24時間監視し続けることが可能なのだよ」

「ビーコン!？」

「宇宙から視てたってか。そりや逃げられねえわな」

「キリコは気づいていたのか？」

「……それがビーコンだと気づいたのは大分先のことになる」

「少なくともこの時点では気づいていなかったわけか」

「そういえばキリコ君、さっきルスケ大佐が言つてた三馬鹿つて人たちは……」

「ユウナさん、失礼ですよ」

アルティナかユウナの発言を咎める。

「あーぐ、ごめん……」

「……闇のつく武器商人のゴウトとバニラ、戦災孤児のココナ」  
キリコは遠くを見るように顔を上げる。

「最初は互いに利用し合う歪な関係だったが、ウドでのある一件を経て、俺たちは戦友とも腐れ縁とも呼べるようになった」

「キリコにとって、忘れられない人たちなんだな」

「ああ」

(フツ、一番忘れられないのはフィアナだろうに)

ロッチナは心中で鼻で笑った。

「キリコ side」

ゴウトに助け出された俺は、ゴウトの事務所で手当てを受けた。

ゴウトの言うとおり、あの頃の俺は助けられたのが逆に迷惑だとも言わんばかりの目をしていただろう。

Ⅶ組と魔弓からまるで同情のような視線を送られたが、今さらだ。手当てが終わると、ゴウトは一枚の紙を寄越してきた。それはバトルリングの選手としての契約書だった。

ココナとの一悶着の後、俺はゴウトに連れられてバトルリングの会場に足を運んだ。

その際に、黒塗りの高級車が会場に入って行くのが見えた。

ゴウト曰く、乗っているのはファンタムレディと呼ばれる謎の女だ。女が現れる日は必ず死人が出るという。

だがなぜだろう。俺には全くの赤の他人とは思えなかった。

バトルリング。

俺と同じく戦場帰りで食い詰めたあぶれ者たちがATでコンバットを見せ、観客は勝つ方に金を賭ける。

戦争の空気がいまなお残り続けるこの時代に、バトルリングが生まれるのもある意味当然だった。

ちなみにバトルリングはこのウドの街が発祥らしい。

俺とゴウトは選手控え室に行き、そこでボモーというAT乗りとトラブルになった。

長く戦場にいた俺にとって見れば、バトルリングなど所詮、遊びだ。その一言が勘に触つたらしい。

そこでゴウトの提案で、バトルリングのレギュラーゲームで決着をつけることになった。

レギュラーゲームとは武器弾薬を用いず、アームパンチのみで戦う。とはいえ、打ち所が悪ければ死ぬことだってある。

試合で使うATを選んでみると、殺気を感じた。これは控え室でトラブルになった奴じゃない。

この時、俺もゴウトも気づかなかった。このバトルリングは仕組みられたものだったことに。

バトルリングが始まる直前、電光板に表示されたのはレギュラーゲームではなく、リアルバトルになっていた。

リアルバトルは武器弾薬が使用可能であり、文字通りの実戦。



そして賭け金もレギュラーゲームとは桁違いのため、会場は一気に興奮の坩堝と化した。

ゴウトは俺に意地を張るなど必死に止めようとしたが、もう手遅れだ。

殺るか殺られるか、俺の頭にはそれしかなかった。

運ばれてきたヘヴィマシンガンを構え、バトリングが始まった。

最初は探り合いに始まり、有効射程距離にまで詰めていく。

相手の声が聞こえてくる距離にまで詰めると、俺は相手の声に驚きを隠せなかった。

なぜなら相手はボモーではなく、コニン少尉本人だったからだ。

隙を突かれ、コックピットにヘヴィマシンガンに突きつけられた。

コニン少尉は言った。『お前は死ぬべきだったんだ』と。

ただで死んでやる義理はない。

銃撃をギリギリでかわし、コックピットにアームパンチを叩き込む。

俺もギリギリだったとはいえ、殺してしまった。

これではあの不可解な作戦は何だったのか、なぜ俺を殺そうとしたのが分からなくなってしまう。

そうとは知らないゴウトとバナラとココナは親しげに近寄って来た。

その時、突然治安警察の戦闘ヘリが乱入してきた。

どうやら俺を探していたらしい。

俺は治安警察に逮捕されることになった。

「キリコ side out」

「一難去ってまた一難、じゃのう」

「……………」

「にしても、バトリングだったか。なかなか刺激的じゃねえの」

「どこがよー！」

「だいたい、何なんですあれは！流れ弾を気にもしないばかりか、逆に興奮するなんて！」

ユウナとデユバリイはバトリングの様相に憤慨した。

「戦場の空気を楽しんでる、そんな感じに見えました」

「これがバトリングだ。百年戦争は文化や娯楽といった物を徹底的に破壊した。にもかかわらず、戦争の残り香が色濃く残る。そんな状況下において、バトリングが生まれるのもある意味当然と言える」

「ホント人間って、血を見るのが好きなのかしらね？」

「セリーヌ!!」

「冗談よ。さすがにここまでくると無いわ」

セリーヌは本気で怒るエマに肩を竦める。

「もしかすると、この帝国で機甲兵同士の間擬戦闘がギャンブルとして認められる日も来るのではないですか？」

（極一部では機甲兵排除論も出ているらしい。そうすると、食いつめた兵士の行き着く先が賭博という可能性も否定できないか）

キリコは自身の経験から一つの可能性を見いだす。

「どうなのだ？マキアス」

「……法律の観点からだとかさすがに難しいだろう。官民一体型のイベントとしてならともかく、賭博としてはさすがに認可は下りないだろう」

マキアスは眼鏡のブリッジを上げながら答えた。

「さすがにそうだよな」

「ただ、違法な地下ギャンブルなんかだと行われるかもしれない。そう思うと気が滅入ってくるな……」

「フン、せいぜい過労死しないようにな」

「フン、言われなくとも」

ユーシスとマキアスは互いに背を向ける。

（やっぱりこのお二人……）

（息びったりですね）

「それはそうと、キリコ君は治安警察に逮捕されちゃったけど、どうしてなの？」

「ああ。それは……」

キリコは再び台座に触れた。

「キリコ side」

治安警察本部に連行された俺を待っていたのは尋問と拷問だった。当初はポロー司祭による尋問だったが、効果がないと分かるとイスクイ署長による拷問が始まった。

鎖で吊るされ、警官による鞭打ちが連日続いた。

なぜ俺がこの街にやって来たのか、何が目的なのかをここまで執拗に問うてきたのか。

当時はさっぱり分からなかったが、改めて見るとよく分かる。二人は俺をメルキア軍のスパイだと思い込んでいたのだ。

それもそのはず、イスクイ署長とポロー司祭はかつてメルキア軍の将校で、小惑星リドから素体を強奪した一味のメンバーだった。

だから、あの作戦で死んだはずの俺を執拗に狙っていた。

そして口を割らない俺に対して、業を煮やしたイスクイ署長は銃殺刑に処すつもりだった。

そんな時、ゴウトたちはわざわざ危険を犯してまで、俺を救出に来てくれた。

治安警察本部を脱獄した俺たちはバニラの隠れ家で身を潜めていた。

そんな時、ゴウトの元に一本の電話がかかってきた。

それは、バトリングのマッチメーカーからリアルバトルの申し込みだった。

ゴウトは断る気ではいたが、報酬の5千万ギルダンに躊躇していた。

金なんぞには興味はないが、奴らの正体を暴くチャンスだ。

そう思った俺はゴウトたちを退けて、バトリングを受けることにした。

バトリングの会場に着いた俺はいきなり砲撃を受けた。敵は複数らしい。

離れた所でバニラたちがごちゃごちゃ言っているが、どうでもいい。

それにしてもこの戦法は見たことがある。

相手の声を聞いて俺は確信した。相手はオリヤ大尉だ。以前オリヤ大尉から市街地での戦闘の手解きを受けたことがある。二人一組になり、片方が囮となって敵をひきつけ、もう片方が敵を撃つ。

厄介な相手だが、地形を利用すれば勝機は必ずある。

一機ずつ確実に倒し、最終的にオリヤ大尉を追いつめた。

俺はオリヤ大尉に銃を向け、小惑星リドの作戦の内容から、あれが何なのかを聞き出そうとした。

だがどこから飛んできたミサイルの直撃をくらったオリヤ大尉は死に、俺も爆撃に晒された。

バナラを先頭に下水道を通ってなんとか逃げきった。

この日を境に、俺は治安警察との抗争に身を投じることとなった。

「キリコ side out」

「全然尻尾を出さんな」

「あのミサイルは完全に口封じでしょう。そうじゃなければ、説明が付きません」

「君も災難だな」

「愚連隊の次は警察組織ですか」

「……あんなの警察じゃないわよ」

「治安警察の大半はあんなものだ」

「クロスベル軍警の方がよっぽど骨があるな」

「あつたりまえです！ろくな捜査もしないであんな目に遭わせて！しかもどう見ても即刻銃殺刑だなんて！警察だつてこと自体名乗ってほしくないわー！」

「ユウナ……」

「後、ルスケ大佐！聞きましたよ！キリコ君にオーダーだが何だかを出してクロスベルを混乱させてたつて！」

ユウナはロツチナに食ってかかる。

「全ては黒の史書を書かれた呪いの根源を引きずり出すためだよ」「だ、だからって……」

「それに、君たちは君たちで知らない所でキリコに借りをつくっているのだぞ?」

「えっ?」

「借り?」

「どういうことですか?」

「もしかすると……」

「あん?」

「以前、クロスベルのジオフロントで脱出する際……」

「そういえばやけに簡単に脱出できたけどよ……おいつ!まさかてめえ!」

「……アツシユの想像どおりだ」

「……なるほど。私たちはキリコさんのおかげで脱出できたわけですか」

「他にも、衛士隊の追っ手を長距離狙撃で足止めをしたり、とかな」

「マジか……」

「考えてみれば、君もクロスベル入りしていたんだよな」

「というかキリコ君、狙撃も出来るの!」

「以前、マヤから手解きをしてもらったことがある」

「そんなことがあったのか」

「こと戦闘については万能ですね」

「そうでもない。俺は武術はからつきしだ」

「確かに刀剣とナイフは別物だが……」

「そういう問題でしょうか?」

アルティナはクルトの視点に呆れた。

「そしてその後、私たちはキリコさんに足腰が立たなくなるまで散々に弄ばれたということですね♪」

「誤解を招く言い方やめい!」

ユウナが突っ込んだ。

「……マスターのおっしやっていたとおりですわね」

「寡黙だが決して利己的ではなく、仲間のためとあらば命を投げ出

すことも厭わない。既に見抜いてらっしやっただらう」

「義侠心に篤い男は嫌いじゃないわね♪」

「エンネア!？」

(ククク……なかなか面白いことになってんじやねえか)  
離れて見ていたクロウの口が歪む。

(ふぬぬぬ……！絶対にキリコさんは渡しませんから!)  
ミュゼは密かに対抗心を燃やしていた。

「しかし、見れば見るほど若いな。今のキリコとは雲泥の差だ」  
「……………」

「……前から気になっていたんだが」

クルトが口を開く。

「キリコはその……一度死んで転生したんだよな」

「ああ」

「その……言いづらいことだが……」

「77歳だ」

「え？」

「アストラギウスで俺は77歳まで生きた」

「ほう、わりと長生きした方だな」

「77歳……」

「確かに長生きした方ですね」

「そして今のキリコさんは18歳ですね」

「なるほどな……」

ロツチナは納得したかのように頷く。

「クルト・ヴァンダール君、君の疑問には私が答えよう。前世の記憶、すなわちキリコが生きた77年分の記憶は確実に受け継がれている。単純に言えば、キリコの精神年齢はこちら側と合わせて95歳ということだ(まあ、32年も眠っていたことはカウントしなくていいだろう)」

「95!？」

「若い肉体に老練な精神力に異能者の力。加えて第Ⅱ分校で得た知

識と経験。もはや私の知るキリコ・キュービーとは別物となっているのだ」

『……………』

二代目Ⅶ組は空いた口が塞がらなかった。

「……………つまり、キリコの強みは異能者というよりも、長きに渡る戦いによって培われた経験則とやりたいわけですか」

「いかにもそうだ」

「やっぱりそうでしたか……………」

「め、滅茶苦茶すごいってことは理解したわ……………」

「とはいえ、演習中でのキリコさんの言動や行動から考えると、納得できるものがありますね」

「サザーラントでの『戦場ではこういったことは畳み掛けるのが常だ。泣き言を言う前に、この状況をなんとかしたいとは思わないのか？』は最たるものかもしれませんね」

「それだけ言葉に重みがあるんだろうな」

「ケツ！前からどうもジジ臭えと思つてたんだよ！」

「……………そう言ってる割には、キリコ君の助言には耳を傾けてなかった？」

「私たちは勿論ですが、アツシユさんは特に顕著だったかと」

「うるせえ！」

「どうどう。とにかく、キリコ」

リインはキリコに向き直る。

「……………」

「君のその力は紛れもなく君自身の力だ。その力を、俺たちに貸してくれないか。世界を終わらせないために」

「……………わかりました」

キリコはリインの目を見て答える。

（フッフッフ……………これで面白くなってきた。ワイズマンよ、キリコという名の針は確実にあなたの心の臓を捉えはじめてきましたよ）

ロツチナは愉快そうに嗤った。

## ウド②

「キリコ side」

治安警察からの追っ手を振り切った俺は、バナラの隠れ家でゴウトたちから詰問された。

だが俺は何も答えるつもりはなかった。

隣の部屋で横になっていたが、このままジツとしていても埒が明かない。今こうしている間にも、俺の命を狙う算段が着々つついているはずだ。

俺はココナを目を盗んで隠れ家を抜け出た。

目的地は一つ。治安警察本部だ。

ちようど酸の雨が降っていたので、警官を後ろから気絶させるのは簡単だった。

警官に成りすまし、治安警察本部へとバイクを走らせた。

治安警察本部に入ると、ゲートで仕切られていた。

俺は待機していた警官を招き寄せ、銃を突きつける。

これがもし、まともな警察官なら抵抗はせずとも応援を呼ぶなりするはずだ。だが警官は命が惜しいのかロツクを解除した。

ゲートをくぐると、俺は裏拳で警官を突き飛ばす。警官は壁に頭を強打し、動かなくなった。とりあえず警官を座らせ、ヘルメットを被せた。

エレベーターに乗り、俺は署長室に入る。

イスクイ署長は怪訝な表情を浮かべるが、ヘルメットを取って見せるとその顔は驚愕に変わる。

人を呼ぼうとしたが、間一髪俺の方が間に合った。

そのまま俺はイスクイ署長に小惑星リドでの作戦のことを問いつめる。

何も言わないので、俺はイスクイ署長を殴り飛ばした。

ようやく観念したのか、イスクイ署長は街外れにある場所で全ての秘密が分かると洩らした。

俺はイスクイ署長の背中に銃を突きつけながら、街外れの空港にへ



りで移動した。

だが、イスクイ署長は既に手を打っており、空港に到着するといきなり攻撃された。

さすがに多勢に無勢なので、ここは逃げの一択だ。

追っ手を振り切ったと思ったら、三人の警官が目の前に現れたので先手を取る。

だがその三人はゴウトたちだった。聞けば、どさくさに紛れて金目の物をおろさらいに来たらしい。

一悶着はあったが、とりあえず脱出することになった。

脱出口を探す俺たちは、暗い照明の部屋に入った。

そこには、シャワーを浴びる裸の女がいた。

ここでバナラがあることに気づいた。女が浴びているシャワーはチドリウムを加工した物のようだ。

それにしても、似ている。俺がリドで見た、あの素体と呼ばれた物体に。

俺は真実を確かめるべく、女を後を追った。

先ほどとは打って変わって、豪華な部屋に出た。

女は鏡の前で髪をとかしていた。

俺は女に対し、俺を覚えているかと問いかけた。

女は何も言わず、逃げるように去って行った。だが俺には確信めいたものがあつた。あの女こそ、あの不可解な作戦の真相の鍵を握っている。

その後俺はバナラの操縦するヘリで脱出した。

「キリコ side out」

「なあ、キリコ」

記憶を見たクロウはキリコの方を向く。

「?」

「ホントにあの女がその素体ってやつなのか?」

「間違いない」

「そもそも、素体って何なの?」

「それは……………」

「まあ、それはお楽しみにしておくといい。いずれはつきりする、そうだな？・キリコ」

「ああ……………」

(キリコさん……………?)

ミュゼはキリコの横顔が気にかかった。

「それはそうとよ。あのモジャモジャ頭、あんなもんが操縦出来たんだな？」

アツシユはバニラの操縦技術に関心を持った。

「バニラは元々、メルキア空軍の二等空士だ。場所こそ違うが、あいつも百年戦争の地獄を潜り抜けている」

「へえ〜」

「あの陽気さからは想像もつかないな」

「それでもどこかしら歪んでしまっているのは確かだろう。無論、キリコもな」

「キュービイーも？」

「人の性格は育った環境に左右される。キリコの場合、地獄のような戦場で歪められたものであることは十分に推測できる」

「……………分かる気がする」

ロツチナの話聞いていたファイーは同意した。

「ファイー……………」

「大丈夫。それより続きを見ようよ」

「わかった。キリコ」

「はい」

キリコは台座に触れた。

「キリコ side」

アジトに戻った俺は再びゴウトとバニラに詰問された。

分け前がどうか言っているが、そんな物欲しくもなんともない。

俺の頭にはあの女にどうやったら会えるのか、それだけだった。

とにかく、情報を集めるのが先決だ。

そう思った俺は街に出た。ココナがつけてきているが、放つておい  
ていいだろう。

闇市で食事を取っていると、気になる言葉が聞こえた。

店の主人によると、空港から大量の物資が治安警察本部に運びこま  
れる、運び出しというのが近々行われるらしい。

だが日時と時間までは得られなかった。

そこで俺はとある店に入り、ゴキブリ退治に使う餌を調達した。

物陰で息を潜めていると、早速掛かった。

警官に運び出しは？と聞くと、警棒を手に威嚇してきた。

懐から革袋を取り出すと、警官は賄賂だと思っただのか、中身が何な  
のかを確かめもせずに袋を開けた。

中から飛び出たのは惑星カーチマスで捕獲される、エウノイと呼ば  
れる黒い毛で覆われた虫だった。エウノイは警官の顔に張りついた。

俺はそいつは猛毒を持つ毒虫で、解毒薬を飲まなければ後数分の命  
だと警官に告げた。

警官はもがきながら、運び出しが行われる時間と場所を吐いた。

俺は解毒薬という名のただのカプセルを捨てた。

実はエウノイは毒虫ではなく、人間の血をコップ一杯分吸うだけで  
人体には害はない。店の主人曰く、最新しく出された健康法で2、  
3日経てば生まれ変わったようになるらしい。

その間は口も聞けなくなるようだが、こいつにとってはためになる  
だろう。

横目で見てみると、Ⅶ組と鉄機隊は分かりやすく引いていた。今は  
放つておいてもいいだろう。

アジトへ戻ろうとすると、ココナが馴れ馴れしく声をかけてきた。  
長くなりそうなので、背中にエウノイがいると言って振り切った。

アジトに戻ると、ゴウトとバナラはヘリをより戦闘用に改造してい  
た。

ココナのことを聞かれたが、何処かへ行ったと告げた。二人は心配  
するそぶりも見せず、女一匹どうとなり生きて行けると爆笑してい  
た。

すると、ココナが戻ってきた。髪はボサボサで衣服も所々破れていた。

俺と別れた直後、暴走族の残党に乱暴されかけたが、運び出しの情報と引き換えに逃げてきたそうさ。

開き直り、自己保身に走るココナをバナラが強く咎めるとココナはその場に泣き崩れた。海千山千の闇商人と言えど、泣く子には勝てないらしい。

ココナが泣き止むと、ゴウトは襲撃を中止しようと言い出した。だが、これはチャンスだ。

中止に傾きつつあるゴウトたちに、俺は用心棒を買って出た。

運び出しの日、空港に向かうと治安警察と暴走族が争っていた。互いの目は相手にしか向いていない。

傾合いをみて、俺たちは動き出した。

こういった乱戦は俺の得意分野だ。

警官や暴走族を蹴散らしつつ、俺たちは脱出した。大量のヂヂリウムとともに。

「キリコ side out」

「……………前々から思ってたんだけど……………キリコ君で……………」

「アツシユさん以上に手段を選びませんね……………」

「いや……………俺でもここまではしねえよ……………」

「なんだかアツシユがまともに思えてきたな……………」

「全面的に同意致します……………」

二代目VII組メンバーはキリコの過去の所業に完全に引いていた。

「……………そなたには誇りや大義というものがないのか?」

ラウラ呆れつつも、キリコに問いかける。

「考えたこともないな」

「そうか……………」

「考えている余裕もないしな」

「何?」

「余裕?」

「俺はアツシユのように器用なわけじゃない。それに当時は小惑星リドでの真相が知りたくて焦っていた」

「……確かに、行動の一つ一つに焦りが見えますわね」

「今と違い、年相応なのだな」

「まあ、僕も似たような経験あるしね」

エリオットは苦笑しながら言った。

「正確には俺たち、だな」

ガイウスがつけ加える。

「そういう意味では、ラインたちも君たちも変わらないってことよ。もちろん、キリコ君もね」

「そう……ですよね」

「チビウサを除いてな」

「……私だって悩んだり焦ったりすることもあります」

アルティナの言葉に、少しだけ笑顔が戻った。

「……………」

キリコは全員の様子を見ながら、台座に触れる。

「ロツチナ side」

治安警察から大量のチヂリウムを強奪したキリコたちは早速問題にぶち当たっていた。

当然だろう。あれだけ大量のチヂリウムを足が付かずに捌くのは並大抵ではない。

さらに、ウドの住民は密告や誹謗中傷を三度の飯よりも好む。八方ふさがりとはこのことだな。

だが、三馬鹿の内の一、ゴウトは解決策を見出だした。

なんと、強奪したチヂリウムを元の持ち主である治安警察に売りつけようというのだ。

二人が心配している横で、キリコはどこ吹く風。奴らしいと言えば奴らしい。

数時間後、ゴウト飛びはねながら戻ってきた。

強奪したチヂリウムをイスカイ署長相手に金貨で30億ギルダン

で取引してきた。

この金貨というのがポイントだな。紙幣ならいくらでも偽装できる。

30億ギルダンは四等分にするつもりだったようだが、キリコがいらないと断つたため、その浮いた分の7億5千万ギルダンをめぐる醜い争いが起きた。

元々、キリコが金銭や出世欲には希薄そのものなのは知っていた。

ツールズ第Ⅱ分校でもそのスタンスは変わらず、現地貢献でも手柄はほとんど全て新Ⅶ組メンバーのものとしていたと報告書に記載されていた。

その夜、キリコたちは待ち合わせ場所へと赴いた。

先に来ていたイスクイ署長と警官が姿を現し、トランクから金貨を見せた。

ヂヂリウムを載せたトラックは治安警察本部近くに置いていたようだ。

だがイスクイ署長は約束を守る気は最初からなかった。多数の銃口にゴウトは悔しそうに引き上げて行った。

ゴウトが瓦礫の陰に隠れた瞬間、キリコの乗るATが飛び出す。

突然のことに、警官たちは反撃する間もなく蹴散らされた。

その隙にバナラとゴウトは金貨の入ったトランクを奪い、キリコに後を任せて逃走した。

警官をあらかじめ蹴散らしたキリコだったが、そこへ赤いATが襲いかかってきた。

キリコは迎撃に撃って出るが、弾丸は尽く当たらず、回避しようとしても先回りされて撃墜された。

さすがのキリコもまだPSには敵わなかったか。

その後キリコはコックピットから引つ張り出され、イスクイ署長らに捕らえられた。

『……………』

二代目Ⅶ組は言葉を失っていた。

考えてみれば、彼らがキリコが一方的に負けた場面を見るのは初めてに近いのかもしれないな。

「すさまじいな……」

「反応速度、操縦技術、戦闘センス。どれを取っても最高のレベルですわね」

「異能者以上とはな……」

「……この時点ではキリコは異能者だとは全く知らない」

「え!?!」

「あくまでキリコは異能生存体を宿しているというだけで、異能者としての力には自覚はない。そうだな?」

「ああ……」

「キリコさん?」

「異能者だと知るのは大分先の話だ」

「そ、そうなのか……」

「まあ、今はキリコの救出を見届けよう」

きつと度肝を抜かれるかもしれないな。

治安警察に捕らえられたキリコは、治安警察本部に連行されることになった。

大方、銃殺刑にでもしようと言うのだろう。

本当に滑稽だ。無意味だ。キリコはどうやっても生き残る。知らないとは罪、哀れだ。

さて、治安警察の車両はウドの中心街にやって来た。

警官たちは野次馬を追い払いつつ進んでいる以上、スピードは遅い。

そこへ、戦闘ヘリが上空から突入して来た。

どうやらキリコの乗る護送車ごと拐おうとしているようだ。浅はか以外のなものでもない。

キリコも騒ぎに乗じて脱出しようとしたが、イスクイ署長による暴徒鎮圧用の閃光弾で身動きを封じられ、更なる暴行を受けた。

頼みの綱とも言える戦闘ヘリも逃げるように飛んで行ってしまっ

た。

普通ならここで諦めるだろう。だが奴らは思いもよらぬ方法に打って出た。

再び現れた戦闘へりに警官たちは迎撃体勢を取る。

すると、警官の頭に何かが落ちてきた。

それは金貨だった。

空から降り注ぐ金貨に警官と住民の視線は全て金貨に向いた。

奴らはキリコの救出するために、命を的に手に入れたカネをばら蒔いていたのだ。

餓鬼のように細せていた住民と自分のことしか頭のない警官。

降って沸いたこの状況にどちらもまるで血を見た鮫のようにギラついていた。

そこから数分もしないうちに、警官と住民の間で争いが起きた。カネの魔力というのは本当に恐れ入る。

護送車の真上に戦闘へりからののはしごが垂らされ、キリコは金貨に一瞥することなく悠々と去って行った。

キリコ一人に金30億ギルダン。確かに高い買い物だ。

だが1000億ミラを積んでも手にいれる価値はある。それがキリコ・キュービーイーなのだ。

「ロツチナ side out」

「見ての通り彼らは金貨30億ギルダンという大金をむぎむぎドブに捨てたという訳だ」

「いや……これはすごいな……」

「ええ。これを真の仲間と言わずしてなんと言うでしょう」

ロツチナの言葉にアイネスは目を見開き、デユバリイは感動すら覚えなかった。

「キリコが忘れられないというのも頷ける。君も心なしか、表情が柔らかくなったように思えるな」

「キリコさんがおっしゃっていた、とある一件とはこれのことだったんですね」



「ああ」

「仲間、ね」

「なあに？羨ましいの？」

「……うるせえ」

ニヤニヤするユウナにアツシユは両手を頭にやる。

(これがツンツンデレデレというものですか)

アルティナはアツシユの横顔を見ながら思った。

「だがキリコ」

ユーシスはキリコに話しかける。

「？」

「治安警察もただ黙っているわけではあるまい？」

「そうよね。彼らにも面子というものはあるでしょう。どれだけ

腐っけていても」

「どうなのじゃ？」

「……無論、ただでは済まなかった」

「やはり……」

「出来ることならば、僕たち全員で行って問い質してやりたかったが」

クルトは両手を握りしめる。

「思想や大義よりも足元のカネ。そんな時代に騎士道だなんだ言っても嘲笑されるだけだ」

「くっ……！」

キリコの言葉にクルトは顔を伏せる。

「だがここはアストラギウスじゃない。本気で戦争を止めたいなら叫ぶのを止めるな」

「キリコ……」

「キリコさん……！」

(孤独を語り、無頼でいようとしても仲間を常に気にかける。もしかしたらこれがキリコの本来の人格なのかもしれないな)

リインはキリコの隠れた優しさを見抜いた。

「次にいく」

キリコは台座に触れた。

「キリコ side」

早朝、嫌な予感がして俺はアジトの外に出た。

15―B地区の周りは車両で囲まれているようだった。

すると車両から炎が放たれた。どうやら火炎放射器のようだ。

遅れてきてゴウトとバナラ、寝ぼけ眼のココナがやってきた。

業を煮やした治安警察は大掛かりな大掃除に取りかかったようだ。

無論、燃やすゴミは俺たちだ。

急いで逃げようとしたが、空からミサイルがどんどん撃ち込まれた。

脱出路は塞がれ、俺たちはあつという間に炎に囲まれた。

ゴウトがどこで聞いたのかレッドショルダーのパルミスでの戦いの話をし、ゴウトはやけくそ気味に憤慨し、死を自覚したのかココナは泣きわめいていた。

その間俺は瓦礫の山から何とか脱出できそうな箇所を探しだした。作業を手伝わせようと、バナラたちに鉄パイプを寄越す。

自暴自棄になり諦めかけていたバナラを殴り、脱出できそうな箇所に引きずっていく。

バナラの髪の毛を一本引き抜き、脱出できそうな箇所にかざす。空気が流れていて、髪の毛がゆれる。

ここの岩盤はそう深くはない。そう言うとバナラは俄然やる気になり、ゴウトとココナも作業にのり出した。

何とか穴を掘り、アジト内部に入り込んだ。だがアジトはそう長くは持たない。

するとバナラがテーブルをどかした。そこには脱出口が設置されていた。

どこに通じているかわからないため、俺は脱出口に取り付けてあったはしごを下りる。

はしごは途中までしかなく、飛び降りるには高すぎる。

周りを見ると、通気孔のダクトが見えた。

俺はゴウトにロープと短いパイプを要求した。

はしごにロープを結び、パイプを括り付けた方をダクトの方向に放る。

上手く引つかかったのを確認し、一人ずつ下りてくるように告げる。最初はバナラだ。

途中で留まっている俺にバナラは怪訝な顔をした。下を見て怖じ気づくバナラに、飛行機乗りのくせに怖いのか？と聞いた。バナラは悪態をつきながらも移動して行った。

次にココナが下りてきたが、途中で足を滑らせた。ギリギリで襟を掴み事なきを得た。

最後にゴウトを呼ぶ。爆撃が激しくなり、揺れが大きくなる。ゴウトがロープの真ん中にきた所で爆発が起こり、はしごが外れた。

俺とゴウトは投げ出されたが、何とかダクトの支柱に掴まり、俺たちは一人も欠けることなく街におりることができた。

奥まった所にあつた空き家に入り、ゴウトたちが缶詰を頬張っている横で俺は得物の手入れをしていた。

そろそろ話しておく必要があるな。

俺はゴウトたちに、なぜ治安警察に執拗に追われるのかを話した。

ゴウトから命は惜しくないのかと聞かれたが、俺は簡単には死なない。

改めて見て思ったが、この発言もワイズマンの手の内なのかもしれない。

三人について来るなら止めないと言ったが、全員尻込みしていた。さすがに強要できる次元ではないからな。

ゴウトたちと別れ、俺はバトリング会場へと向かった。

バトリング会場に詰めていた見張りを倒し、倉庫のシャッターを開けた。

比較的状态の良いATを見つけ、ハンディソリッドシューター、九連装ロケット弾ポッド、二連装対戦車ミサイルの武装を取りつけていく。

作業を進めていると、ゴウトたちが息を切らせて入って来た。

俺がここにいるのがバレたらしいが、そんな事は想定内だ。

その後、ゴウトたちの手を借り、ATの改造を進める。

その途中、バナラが左肩をスプレーで赤く染めた。

本人はレッドシオルダーにあやかったようだが、レッドシオルダーの赤は血のように暗い赤であることと、塗る位置が右肩であると訂正した。

この瞬間、俺が元レッドシオルダーだということが露見したわけだ。

レッドシオルダーだった頃の痛みなど、当時のバナラたちにはわからないだろうな。

直後、治安警察のものとと思われる攻撃が始まった。

今度こそ、決着をつけてやる。

「キリコ side out」

「やっぱりレッドシオルダーというのは、アストラギウスでは特別な意味を持っているのね」

サラは腕を組みながら言った。

「地獄でもやってける、か。大いに賛成だな」

「クロウはずいぶんキリコを買っているのね」

「まあな。東リーヴス街道で魔煌機兵百機を一機残らず叩き潰した場面を見ちまったからな。おまけにほぼフレームの状態でセドリック皇子様と相討ちに持ち込んだんだからな」

「何度聞いても信じられないんだが……」

「そういえば、キリコは精神を乗っ取られなかったのか？」

「魔煌機兵に乗った者は大抵精神の汚染を受け、攻撃的になるそうだが」

「妙な感じはしたが、問題なかった」

「そ、そう……」

「それを踏まえてもう一つ。アツシユさんの身代わりになった時はどうだったんですか？」

「頭の中で怨嗟のような声が響いてきたが、問題なかった」

「真面目に答えてください——」

「鉄血から聞いたんだけどよ、お前呪いを力ずくで抑え込んだんだって?」

「は……………?」

「お、抑え込んだ……………」

「そ、そんなバカな……………」

セリーヌ、エマ、ローゼリアは言葉を失う。

「アッシュの左目の呪いを移された際、あまりにうるさかったからな。黙れと叫んだら大人しくなった」

「フフ、神にすら御せなかつた男に呪いの一つや二つが通じる訳がなからう」

「そ、そういう問題ですか!?!」

「……………魔術や呪術にとって意志の力は術の発動に必要なフアクターの一つ。キュービイーの鋼のごとき強靱な意志の力が呪いの力を凌駕したとしか思えぬ」

「本当に無茶苦茶……………」

「それほどの意志……………そなたはどうしてそこまで……………」

「ワイズマン、よね?」

ある程度聞いていたエンネアはキリコに問いかける。

「ああ」

「ワイズマン?」

「……………なるほど」

話を聞いていたミュゼは顔を上げる。

「キリコさん。それが貴方が殺したという神の名前なのですね?」

「ああ」

キリコは表情を変えることなく、肯定した。

「なんでそんなことがわかんだよ」

「ワイズマンは賢者という意味だ。そして、黒の史書原本に記された存在もまた賢者となっている。そう読んだんだろう?」

「はい。さすがはライン教官ですね」

「相変わらずの読みだな」

「大した洞察力ですわね」

「これが現カイエン公爵……」

(クク……あのクロワールのオツサンよりも数枚上手だな)

見つめるの読みに、デュバリイとエンネアは舌を巻き、クロウは先代カイエン公爵以上の器を感じた。

「なるほどな。そのワイズマンとやらがこの世界に転生を果たしたというのか」

「現時点では推測でしかない。たまたまやり口が似ていただけかもしれない」

「やり口?」

「そうだ、奴は——」

「まあまあ。それは後々のお楽しみということにしよう」

ロツチナが待ったをかけた。

「ロツチナ……」

「物事には順序というものがある。ワイズマンが何物なのかはまだ先のことじゃないか?」

「……………」

「我々が今やることはキリコの記憶を見ることじゃないだろうか」  
『……………』

VII組と鉄機隊は迷いつつも、ロツチナに従うことにした。

「では見届けるとしよう」

「……………」

キリコはロツチナに促され、台座に触れた。

「ロツチナ side」

治安警察の車両から降伏を促す声が響く。無論、キリコはそんなものに応じるタマではない。

キリコは正面に躍り出て、アーマーマグナムで車両基地ライトを撃ち抜く。

警察車両も距離をおき、砲撃の体勢を取る。

キリコはラビットを逃がせとゴウトに告げる。他の面々はポカン

としているが、私はキリコの狙いがわかった。

姿を現したATの赤い肩に警官たちに動揺がはしる。

重装備のATが飛び出し、警察車両数台を破壊。そのまま逃走を試みる。

だががら空きの背中を撃たれ、引火したATは大爆発を起こした。これではパイロットは無事では済むまい。

レッドシヨルダーを撃破したことで、警官たちの気が緩んだ。

それこそがキリコの真の狙いだ。

背後から近づき、引き金を引いた。爆発が起こり、警官たちは途端にパニックに陥った。

実はキリコの言うラビットとは、ミッションディスクで動く囷のことだ。

ラビットで注意をひきつけ、背後から一気に殲滅する。兵法の基本だな。

警察車両を一台残らず潰したキリコは治安警察本部へと向かった。信管を加えた不発弾が目を覚ました以上、これで治安警察に明日はなくなつた。

そういえば、この時の私は軍の出動要請をかけるか否かという所だったな。

仮にメルキア全軍でウドを攻撃しても、キリコは必ず生き残るだろうがな。

「ロツチナ side out」

「キリコ side」

治安警察本部へと向かう俺は、その道中で警官たちによる妨害を受けた。

だが落ち目になりつつある治安警察など、俺の敵ではない。

二連装対戦車ミサイルで橋桁を破壊し、警察車両を全滅させた後、ビルの周りを飛ぶ戦闘ヘリを撃ち落としていく。

だが弾薬は無限ではない。

九連装ロケット弾が尽きた隙を突かれ、被弾した。

離れていくへりをハンデイソリッドシューターで撃ち落とすも、コンプレッサーをやられ、身動きが取れなくなった。

その時、ゴウトの声が聞こえてきた。

俺は下で受け止めるように告げ、ATから飛び降りる。

ゴウトたちの持つてきたATに乗り換え、再び治安警察本部を目指した。

治安警察本部前にまで来ると、奴が出てきた。

抵抗も虚しく激しい攻撃にさらされ、一方的に追い込まれた。

赤いATからシオルダータックルを受け、吹き飛ばされた。その際俺はアーマーマグナムを手に持つ。

コックピットが開けられ、俺に触れようとしたところでアーマーマグナムの銃口を向ける。

だが、奴は抵抗することもなく投降した。

そのまま俺は女と共に治安警察本部へと入った。

ロツチナはユウナに俺が単独でクロスベル警察を破り、オルキスタワーを占拠するようなことと告げていた。さすがに言葉が出ないようだ。

女はプロトワンと名乗ったが、そんなものは名前ではない。

女によると、生まれた時からそう呼ばれてきたという。

抵抗する素振りを見せないの、俺はナイフで縄を切った。

そして、小惑星リドの研究所で何がおこなわれていたのかを問いつめる。

だが女は何もわからないと言った。一切の記憶がないという。

普通なら、信じる必要はなかった。だが、俺は女の話信じられた。

他のことを聞こうとしたが、物陰に警官が潜んでいた。

そいつを追い払った後、俺は女と共に治安警察本部から脱出を図った。

エレベーターに乗り、最下層を目指す。だがどういうわけか、不安が募った。

女が機転を利かせて、床に穴を空けた。俺は扉にプラスチック爆薬を仕掛けた。



扉が開くと同時にプラスチック爆薬が爆発した。爆発とともに悲鳴が響き、俺の不安は的中した。

どうやら治安警察はバトリング選手を刺客として雇ったようだ。ただのごろつきとなめてかかれば痛い目を見るのはこっちだ。俺と女は別れて戦うことにした。

バトリング選手数人を倒した後、俺は女の方へ向かった。

女は相手のATに苦戦していた。女は相手のATのぶちかましを受けた投げ出された。

俺は無我夢中で助けに入った。そして叫んだ。

ファイアナ、と。

「キリコ side out」

「ファイアナ……？」

「その名前は……」

「あの《F》に対して言った……」

「そうか。君たちは見たのだな？黒の工房が造り出した完成なる戦闘用ホムンクルスを」

「ルスケ大佐もご存知でしたか」

「うむ。最初に聞いた時はこう思ったよ。なんたる愚かなことかと」

「愚かな……？」

「あの男、黒のアルベリヒは愚かにも越えてはならん一線を軽々しく越えた。これでは破滅が約束されたのも同然だ」

「破滅!？」

「いったい何だつて言うんですか!」

「あの……ルスケ大佐……」

ミュゼはおそるおそる手を挙げる。

「何かな?」

「どういうことなのでしょう……?キリコさんが言う”ファイアナ”

とは……………」

「……………」

「いったい……………どういう繋がりが……………」

「……………そんなに知りたいかね？」

「……………」

「良いだろう。君たちも聞くかね？」

「……………」

Ⅶ組と鉄機隊は首を縦に振る。

「よろしい」

ロッチナは全員の方を向く。

「……………ファイアナ」

ロッチナはゆっくりと口を開く。

「メルキアが生んだ完全なる兵士パーフェクトソルジャー」

「パーフェクト……………ソルジャー……………？」

「文字通りの意味ですが……………」

「そして、キリコにとって生きる目的であり……………」

キリコが唯一愛した女だ」

「え……………」

ロッチナの言葉に、Ⅶ組と鉄機隊は茫然自失となった。

「終わりの見えない泥沼の地獄の中で戦い、殺し続け、破壊と混沌を

潜り抜けてきたキリコは、多くの感情を失っていた」

「……………」

「人間誰しも、異性に安らぎを求めるものだろうか？」

「安らぎ……………」

「では、キリコは……………」

「そう。キリコはファイアナに安らぎを見いだした」

「そして、キリコが生きる目的。それは名誉でも栄光でもない。た

だ一つ、ファイアナへの愛に他ならない」

「愛……………」

(意外にも程があるぜ……)

「では……黒のアルベリヒは……」

「黒のアルベリヒ自身は意図したことではないのかもしれないかもしれん。だがこればかりはいけない。奴はキリコの逆鱗に触れた。黒のアルベリヒ、いやフランツ・ラインフォルトは惨殺を持ってツケを払うことになるだろうさ。キリコという名の猛毒に触れた以上、な」

『……………』

(父……様……)

「キリコ side」

Ⅶ組と鉄機隊は茫然自失といった状態になっているが、今は放っておく。

ファイアナと共に脱出を図るが、敵の妨害を受けて引き離されてしまった。

直後、ゴウトたちに拾われたが、俺は残ることを告げた。

考えを変えない俺は一緒にずらかる算段だったゴウトたちから縁切り宣言を受けた。

その直後、上の階層が爆発とともに崩れた。

バナラはまた戦争が始まったのかと言ったが、ココナの言うとおりそれに関連するニュースは出ていない。

おそらく、軍が本腰を上げたのだろう。

地上が上がつてみると、パラシュートパックを背負ったATが次々に降下してきた。既にあちこちで煙が上がっている。

この光景にゴウトたちも言葉をなくす。

もはや隠し通せはしない。

俺はゴウトたちに小惑星リドでの謀略と、それにイスクイ署長が関わっていることを話した。

ゴウトたちも、俺がなぜこうも治安警察を憎んでいるのか納得してくれた。

それにしても、軍隊は人殺しが商売か。思う所がないわけではないが、的を射ているとも言えるな。

ゴウトたちはずらかることを止めた。この分だと空港も全て軍が  
接収しているだろうしな。

俺たちはウドから脱出すべく、行動を開始した。  
彷徨っていたATに近づき、ココナが墨のような物をターレットレ  
ンズにぶち撒ける。

パニックになったところを俺がコックピットをこじ開け、パイロッ  
トを倒した。

これで戦力を手に入れた。

迫り来るAT部隊を蹴散らしつつ、進んで行く。

その時だった。

別の区域からメルキア軍とは異なるAT部隊が現れた。

別のAT部隊の参戦で戦況は混乱を極めた。

さらにメルキア軍の破壊行動により、ウドの街は音をたてて崩れて  
いく。

俺は無我夢中で戦った。

気がつくとき、動いているのは俺だけだった。

いつの間にかゴウトたちとは離ればなれになってしまったようだ。

どこだ……みんなどこにいるんだ。

一人に……一人にしないでくれ。

そんなことを思いながら、俺は崩壊するウドの街から脱出した。

また、生き残ってしまった。

「キリコ side out」

「ここまでがウドでの記憶だ」

キリコはVII組らの方を向いた。

「なるほどな」

「長い戦いだっただんな」

「あれ？　そういえばイスクイ署長ってどうなったの？」

「さあな。 ロッチナは？」

「……メルキア軍の突入とともに私は部下を連れてイスクイ署長を  
捕らえに向かった。だが運悪く、爆薬の爆風にイスクイ署長を巻き込

んでしまつてな。吹き飛ばされたイスクイ署長は首が折れて死んでしまった。これで謎の組織との唯一の手がかりを失つてしまったというわけだ」

「そういうことでしたか。それとキリコさん。あのATはなんだったのですか？」

アルティナはキリコに話しかける。

「ああ。途中からやって来たゴツいやつな」

「キリコの乗っていたものとは別物ということとは分かるんだが」

「あれはトータス系と呼ばれるATだ。パワーと耐久性が高いが機動力に欠ける。特に初期生産モデルは接近戦用のアームパンチとローラーダッシュ機構を持たないため近づいたら手も足も出ないということからドン亀などと呼ばれている」

「ドン亀……トータス系になぞらえての蔑称ということですか」

「間違つてはいない」

「軍では採用されていないのですか？」

「軍ではキリコを初め、ほとんどの兵士がドッグ系と呼ばれるATを好む傾向にある。トータス系を採用している所は僅かで、それこそバトリングでしか見ないな」

アルティナの疑問をロツチナが答える。

「そういや、キリコの奪ったAT、カラーリングが違つたんだが、なんか違うのか？」

クロウは薄紫色のスコープドッグを思い出しながらロツチナに聞いた。

「あれはメルキア軍のエリート部隊の一つ、ヘルダイバー部隊のカラーリングだ。まあ、別格の証だな」

「ヘルダイバー、地獄の潜航者ですか」

「なるほど。敵に狙われやすそうな色は戦士としての誉れか」

「どこにでも前時代的なものはあるのね」

「フフ。否定はせん。それにレッドシヨルダーの赤の方が人々の記憶に深く刻まれているだろうさ」

「ここまでは見てきたけど……」

「まだ台座は光っていますね」

エマは台座を見つめる。

「この後はクメン王国だな」

「ああ」

ロツチナの言葉をキリコは肯定する。

「クメン王国……そんな所があるのか」

「それについては後で。その前に……」

キリコの顔が険しくなる。

「何かあるのか？」

リインはキリコに問いかける。

「そういえばキリコ、お前は確かドライダ高地に赴いたんだっただな」

「ああ」

キリコは顔を上げる。

「俺にはもう一つ、決着を着けなくてはならないことがあった」

## ザ・ラストレッドシヨルダー

「俺にはもう一つ、決着を着けなくてはならないことがあった」  
「決着？」

「なんだ、それは」

「……ペールゼンと、レッドシヨルダーだ」

「え!？」

「ペールゼンは失脚したはずでは？」

「失脚はしたが奴はしぶとく生き残っていた。そして、イスクイ署  
長らと同じ組織に身を置いていた」

「マジかよ……」

「そして百年戦争を生き残った元レッドシヨルダー隊員のほとんど  
がペールゼンの手足になっていた」

「忠義、とでも言うのか？」

「……俺と同じような目に遭ったにも関わらず、変わらずペールゼ  
ンに尻尾を振る奴らなどの考えなど知らん」

キリコは吐き捨てるように言った。

「つまり、キリコさんが決着をつけねばならない相手とは……」

「過去の亡霊、というわけか」

「そうだ」

(フフ……)

ロツチナは意味深に笑みを浮かべる。

「キリコ side」

俺がウドを脱出して一月が経った頃、とある街で懐かしい名前を聞  
いた。

かつてレッドシヨルダーに所属していた時の戦友、グレゴルーが仲  
間を集めているということだった。

目的は口に出さずともわかっていた。

グレゴルーたちはペールゼンに復讐するんだろう。

正直迷ったが、やはり俺は行くことにした。

集合場所であるバカラ・シテイにある工場に行くと、さっそくバインとムーザが揉めていた。

「どうやら、古いATの具合をみるのに誰が乗るか揉めているようだ。」

「俺が乗ろうと言うと、グレゴルーたちは俺を歓迎してくれた。」

「挨拶もそこそこに、俺は古いATに乗り込み動かしてみる。機動は悪くない。」

「だが左のターンピックの調子が悪すぎる。こんなすり減った状態ではブレーキなど期待できない。」

「これもバラすしかないようだ。」

「グレゴルーが両の頬を叩き、ボロボロのスコープドッグの改造作業が始まった。」

「キリコ side out」

「皆さん、生き残っておられたのですね」

「ああ」

「さすがは元レッドショルダー隊員だな。キリコほどではないにせよ、生存率は並みの兵士を上回る」

「(キリコさんと比べるのは無理がありすぎるかと……)」

「ただ、あのグレゴルーという男は大分風貌が変わったような……」

「やはり過酷な戦場につけられたのか？」

「それは今わかる」

「キリコは再び台座に触れる。」

「キリコ side」

「作業中、俺はバインマンからグレゴルーとムーザのことを聞いた。」

「グレゴルーは激戦地の最前線に送られ蜂の巣にされたそうだ。一命はとりとめたが、全身縫い跡だらけになったらしい。」

「ムーザは極秘作戦に着くことになったらしいが、故郷にいる家族に作戦内容を洩らしたとあらぬ疑いをかけられ、家族を皆殺しにされたそうだ。」



バイマンは？と聞いたが、はぐらかされた。だが、あの右腕は……。当てにならないスクラップ品を寄せ集めて、ようやくタイプ20と呼ばれる、スコープドッグ・ターボカスタム四機が完成した。

腰部にガトリング砲と二連装対戦車ミサイルを、右肩に七連装ミサイルポッドを、左肩に三連装スモークデイスチャージャーを取り付け、手数と火力を高める。

さらに、両足のローラーダッシュ部分に高機動用のジェットローラーダッシュ機構を増設させる。これにより素晴らしい加速力を得るが、反面操作性が劣悪になる。

当然、パイロットの負担も跳ね上がる。負担が上がるということは、死亡率も向上するということだ。

以上のことから、軍はおろかレッドシオルダーでも制式採用されなかつた曰く付きの機体だ。

それでもこのタイプ20を選んだのは、こちらから強襲するためだった。

機体が組み上がるとバイマンは肩を赤く塗れば完成だと言った。すかさずグレゴルーが『貴様塗りたいのか』と凄んだ。

バイマンもさすがに本気ではなかつたようですぐに引っ込んだ。

最後に補給用のPL液をタンクに詰め、少しばかり仮眠を取った。

「キリコ side out」

「タイプ20……そんなものを組み上げていたとはな」

「現時点で、強襲用ATはタイプ20が最適だ」

「それもそうだな」

ロツチナは頷いた。

「キリコ」

「？」

「君はパールゼンやレッドシオルダーのことは本当に許せないんだな？」

リインはキリコに問いかける。

「ええ。絶対に生かしておくわけにはいかない」

「そ、そうか。だが、復讐は……」

「ここで済ませておかなければ、一生後悔することになるので」  
「……………」

キリコは横顔を見たリインは二の句が継げなくなる。

「後悔、か」

クロウはキリコを見つめる。

「おぬしは復讐を否定せんのか？」

「否定はしない」

ローゼリアの問いにキリコはきっぱりと答える。

(復讐……)

(キリコさん……)

ユウナとミュゼはキリコを不安げに見つめる。

「……まあよい。続きを頼む」

「わかった」

「キリコ side」

早朝、俺たちはペールゼンとレッドシオルダー残党が潜んでいるというデライダ高地へと出発した。

情報源となる写真はバイマンが持ってきた。バイマンは単独で情報収集に力を注いでいたらしい。

デライダ高地へ向かう道中、レーダーに奇妙な反応があった。

百年戦争により、惑星メルキア総人口の四分の三が死に絶え、植物は一部地域の除いて消えてなくなり、デライダ高地も例にもれないはずだった。

だがデライダ高地にある、基地のような建物から植物の反応が出た。

バイマンは老後の道楽にランの栽培をしているかと軽口をたたく。  
だが俺にはなぜかわかった。デライダ高地の基地ではとんでもないものを造っていることが。

途中で休息を取っていると、突然ムーザがこの作戦から降りると言い出した。

原因はバイマンの態度に業を煮やしたからだだった。元々皮肉屋のバイマンと生真面目なムーザは馬が合わない。俺がレッドシヨルダーにいた頃も些細なことで口論になっていた。グレゴルーがなだめるが、ムーザはそれでも聞く気がないようだ。そこで俺は火のついた木材をバイマンの右手に投げてよこした。バイマンは悲鳴をあげずに平然としていた。グレゴルーとムーザはどういうことだと目を見開く。無理をするなどという俺の言葉に、バイマンは黙って右の手袋を外す。

俺の予想通り、バイマンの右腕は義手だった。バイマンは激戦地に送られた後、敵の攻撃で右腕を吹き飛ばされて失った。それ以来、ペールゼンのことを恨み続けていた。この事実にもムーザも思わず、大丈夫なのかと聞いた。バイマンは、ペールゼンを絞め殺せる武器があると笑みを浮かべる。

その後、俺たちは改めてペールゼンを殺す決意を固めた。

「キリコ side out」

「なるほど」

ロツチナは軍帽を被り直す。

「いよいよ、復讐劇の幕開けか」

「……………」

「おいおい、復讐ってのはそんな愉快そうに言うもんじゃねえんだぞ。」

「確かに、君の言うとおりだ。ジュライ市国最後の市長の孫にして、帝国解放戦線リーダー《C》君」

「……………喧嘩売ってんのか?」

ロツチナの言葉にクロウは殺気が溢れる。

「クロウ」

「……………チッ!」

「ルスケ大佐も煽らないでください」

「フッフ、失礼」

「……………」

「キリコ side」

俺たちはATに乗り込み、ドライダ高地に建てられた基地に近づいた。

すると、バイマンがムーザに詫びを入れようとした。

驚くムーザだが、そんなことは終わってからにしろとグレゴルーが待ったをかける。

そうだ、ここは既に戦場だ。

俺たちが頭を切り換えるや否や、奥から黒いATが群れを成して襲いかかってきた。右肩が血のように暗い赤。

間違いなくレッドシオルダーだ！

俺たちは一斉に引き金を引き、黒いATを殲滅した。

だがレッドシオルダー残党がこれだけのはずがない。

俺たちは覚悟を決めて基地に突入した。

「キリコ side out」

「これほどとは……」

「キリコ君たちは勿論だけど、他もなかなかの腕を持っているわね」

「無論、敵も手強そうですわね。キュービィー、あの黒い人型兵器は？」

「レッドシオルダーに回された新型か何かだろうな」

「知らないんですの？」

「ボロー司祭のいる組織は独自の技術を持っている。軍には採用されていない機体を持っていても不思議ではない」

「そうなんです。ルスケ大佐はご存知ありませんか？」

「資料で目にしたことがある。名前は確か、ブラッドサッカーだったな」

「ブラッドサッカー……」

「吸血鬼、とも言いますね」

「真祖ならここに居るぞ」

「黙ってなさい」

セリーヌがピシヤリと言う。

「しかし、あの赤い肩は変わらないんだな」

「何を以て、あのような色になったのか……」

「……敵の血潮で濡れた肩」

「「え？」」

ロツチナの言葉にマキアスとガイウスが振り向く。

「レッドシオルダーの肩の色は敵の返り血が染まったものというのが、当時の兵士たちの見識だよ。それほどまでに畏れられていたということさ」

「そんなにも……」

「他にも吸血部隊、地獄の使者、情無用命無用の鉄騎兵、赤い肩をした鉄の悪魔。レッドシオルダーの名は恐怖と共にアストラギウス銀河全体に響き渡ったのだ」

「なんとも……恐ろしいのお……」

「キリコの場合、たった一人で魔煌機兵部隊、オーロックス砦、黒竜関を潰してきた。これをワンマンアーミーと言わずして何と言おうか」

「ワンマンアーミー……たった一人の軍隊ですか……」

アルティナは息をのむ。

「フフフ、次はいつたいどこを標的にするのかな？ ジュノー海上要塞か？ それともドレックノール要塞か？ いやいつそのこと帝都へイムダルか？」

「ル、ルスケ大佐!？」

マキアスは思わず狼狽える。

「それとも……クロスベルを舞台にカルバード共和国と戦争してみるか？」

「……………」

「……………お前の知ったことじゃない」

キリコはロツチナを睨む。

(そうですね、地の利を考えるならやはり……!?わ、私今何を考えて……!?)

無意識に戦略を描いていたミュゼはハツとなった。

(私は………)

「キリコ side」

レッドシオルダー残党を蹴散らしながら、俺たちは奥へと進む。すると、一機の黒いATが襲いかかってきた。

ムーザ機は俺たちを先に行かせて応戦するが、一発も被弾しなかった。

成す術なく、ムーザ機は爆散した。

バイマンとグレゴルーは目の前の光景が信じられないようだった。だが俺は見覚えがある。

この反応速度は普通の人間じゃない、PSだ。

乗っているのはフィアナなのか？

そう思っていると、通信が入った。

声の主は忘れもしない、ペールゼンだった。

ペールゼンは、俺たちを追うのは人間では到底敵わない存在だと言った。

だがそれでも止まるわけにはいかない。ここで済ませておかなければ、一生後悔するからな。

その直後、グレゴルー機が黒いATの前に立ちふさがった。

グレゴルーと別れた俺とバイマンは二手に別れ、さらに奥へと進む。

広い場所に出てきた。そこにはレッドシオルダーが待ち構えていた。

通信から、俺をレッドシオルダーの落伍者と罵る声が響く。

ペールゼンなんぞに尻尾を振るくらいなら俺は落伍者で十分だ。武装をフルに使い、一機ずつ確実に潰していく。

「キリコ side out」

「キリコ……！」

「……ムーザとグレゴリーはここで命を落とした」

「そうなのか……」

「それよりよ。あの黒いATに乗ってんのは……」

「アツシユ！」

ユウナはアツシユを強く咎める。

「大丈夫だ」

「で、では……！」

「そうだ。乗っていたのは別人だ」

(そして、後にキリコと血で血を洗う死闘を演じることになる)

ロツチナはひそかにほくそ笑む。

「……………」

キリコは台座に触れる。

「キリコ side」

あらかた倒し終えると、例のATが襲ってきた。

俺は何度も呼びかけるが、反応はない。

叩きのめされ、遂に機体から投げ出された。

止めを刺そうとATはアサルトライフルを向ける。

すると、どこからか女の声が聞こえてきた。

間違えるはずがない。俺が会いたくてたまらなかったフィアナの声だ。

フィアナの声に反応したのか、パイロットが降りて来た。

降りて来たのは銀髪の男だった。フィアナはこの銀髪の男をプロ

トツと呼んだ。どうやらこのプロトツもPSのようだ。

プロトツーは見た後、俺に銃を向ける。フィアナはそれを必死に止めようとした。

愛するのがどういふことか。そう言ったフィアナはプロトツーに口づけをした。

俺は放心するしかなかった。

今思えば、プロトツーに対する精一杯の愛情表現なのだろう。

そのままフィアナはプロトツウを連れて行ってしまった。遠くから銃声が響いてきたことで俺の意識は現実に戻った。

俺はふらつきながらも、さらに奥へと進む。最奥ではペールゼンが待っていた。

久しぶりを見るペールゼンにはあの頃の凄みは全くなかった。

あのプロトツウでも俺を殺せなかったことに恐怖を感じているようだ。

ペールゼンはいきなり拳銃を発砲。同時に膝から落ちた俺は被弾を免れる。

これでペールゼンはさらに恐怖にかられたようだ。

俺には今のペールゼンはただの弱々しい老人にしか見えなかった。

ペールゼンが殺せと言った直後、銃撃がペールゼンを襲った。

ペールゼンは吹き飛ばされ、ピクリとも動かなかった。

俺の目の前に、バイマンが倒れこんだ。

ペールゼンを撃ち倒したことに安堵していた。

だが、もはやバイマンには手の施しようがなかった。

バイマンは俺に最期の別れを告げて息を引き取った。

その直後、基地が大きく揺れる。どうやら自爆装置が発動したようだ。

俺はありつたけの力を振り絞り、基地を脱出した。

背後に巨大な火柱が上がり、基地は消滅した。

この日をもって、レッドシヨルダーは完全に消えた。

だが俺の胸に達成感などこれっぽっちもなかった。

また一人だけ生き残ってしまったこと。フィアナのこと。

俺は全てを忘れるため、いずこかの戦場を探し求めることにした。

「キリコ side out」

「ここまでのようだな」

キリコがそう言うのと台座は輝きを失った。

「キリコ君……………」

ユウナは顔を伏せる。



「どうした？」

「あたしも……キリコ君と同じだったのかも……」

「……………」

「帝国にクロスベルを占領されて、憎くてたまらなかった。近所でも、帝国に復讐するって話も多く出てて、そうするべきだってあたしも思ってた……」

「……………」

「でも……そんなことしても、空しいだけなのにね……」

「ユウナ……」

「ユウナさん……」

クルトはユウナの肩に手を置き、アルティナはユウナの震える手を握る。

「ユウナが気にすることじゃない」

キリコはユウナの目を見る。

「これはあくまで俺自身がやりたいと思った結果だ。何も後悔して  
いない」

「キリコ君……」

「ユウナが帝国に復讐したいなら俺は別に止めはしない。だがユウ  
ナ、後悔はしないか？」

「後悔なんて……するに決まってるじゃない！」

「ユウナ……」

「それでいい」

「キリコさん……」

「中途半端な気持ちで復讐をしようと、結果は見えている。全てを  
犠牲にしても成し遂げる覚悟がいる」

「覚悟……」

「俺のようになるな」

「キリコさん……！」

「チッ！まだるっこしいんだよてめえは」

アッシュは頭を掻いた。

「キリコ君」

「？」

「ありがと……」

「気にするな」

(キリコ……)

「さて、私はこのあたりで失礼させてもらうよ」

「もう行くのか？」

「何分多忙な身ですので」

(よく言う)

(アル、ルスケ大佐ってどういう人なの?)

(情報局員としては他に例え難い有能な方なんですが)

(確かに、クロウさんの身元を言い当てたしな)

「また会おう、ツールズ新旧Ⅶ組に鉄機隊」

「待て、ロツチナ」

キリコはロツチナを呼び止める。

「何かな？」

「一つ頼みたいことがある」

「ほう。お前から頼みとは珍しい」

「フルメタルドッグの武装のことだが……」

「わかった。いくつか取り寄せよう。運搬はどうする？」

「里まで持って来ないのか？」

「私のペンデュラムでは一人が限度らしい」

「そうか」

「ならば、里の者を手伝わせよう」

ローゼリアが名乗り出る。

「ちよつと、良いのアンタ？」

「ある程度融通は効かせんとな。ここまできたら妾も最後まで見届けねばならん」

「え?」

「ルスケよ、おぬしは以前申したな?この帝国を覆う災いをたった一人の男に覆される瞬間を見てみたくないか、とな」

「フフ、そんな会話もありましたね」  
「忌々しいがキュービィー、妾は賭けるぞ。おぬしの持つ異能の力にな」

「……………」

「ローゼリアさん……」

「決まったようですな。では」

ロッチナは記憶の部屋を出ていった。

「とりあえず、俺らも出ようぜ」

「そうだな。なんだか風呂に入りたいな」

「結構汗かിച്ചったし」

「そうね。温泉に入りたい気分ね」

「あら？温泉まであるんですの？」

「そういうえば、湯気が立っていたな」

「妖精の湯と言って、とても良い温泉ですわ。美白美人になること

請け合いなしですよ？」

「そ、そう言われると入ってみたくありませんわね」

「よし！そうと決まればさっそく妖精の湯に向かおうぞ」

ローゼリアを先頭に、一行は記憶の部屋を出た。

午後 8:30

「なんで温泉が男女で仕切られていないんですの!!？」

妖精の湯に着いたデュバリイは脱衣場で吠える。

「言い忘れていたんですけど、ここって混浴なんですよ」

ユウナが前に出る。

「一番伝えなきゃいけないものをなんで言い忘れてやがるんです!？」

「デュバリイさんたちは混浴は初めてなんですか？」

「当たり前でしょう！私たちは聖女の異名をとるマスターの下僕。

皆、純潔を貫いています！」

「でも、里の人たちも当然のようにご入浴なさっていますよ？」

「む、むう……」

「仕方ないわね。覚悟を決めるしかなさそうね」

「そうだな。まあ、不埒な真似をする者には制裁を食らわせればいいだけだ」

アイネスは指を鳴らす。

「ああ、その点は心配ないと思いますよ?」

「まあ、なんだかんだ言って私たちも慣れちゃったしね」

「うむ。皆でユミルの温泉に入ったこともあったな」

「確か、エリゼさんとアルフィン殿下もおられたんでしたね」

「最初こそあれだったけど、わりと早く馴染めたよね」

「貴女たちいったい何者なんですか!?!」

デュバリイは再び吠える。

「まあまあ。とはいえ、ここの温泉はそれほど広くはないのでまずは乙女からという取り決めになってますから」

「そ、それを早く言いなさい!」

デュバリイは湯着を纏い、脱衣場を出る。

「デュバリイさん、さっさと行っちゃいましたね」

「フフフ……」

ローゼリアは意味深な笑みを浮かべる。

「ローゼリアさん?」

「リアンヌの一番弟子、デュバリイと言ったのう。なかなか弄り甲斐がありそうじゃのう」

ローゼリアは両手を動かしながら脱衣場を出ていった。

「えーつと……」

「放っておきましょう……」

「……もしやアリサさんも?」

「……聞かないで」

「……どんまい」

「アリサさん……ごめんなさい」

エマはアリサに詫びる。

「なんだかデジャブを感じるわね」

「紅の戦鬼殿と似た目付きと動作だったな」

その直後、デユバリイと思われる悲鳴が響いた。

午後 9:30

VII組女子と鉄機隊が温泉を堪能した後、VII組男子が温泉に浸かって  
いた。

「はあくくっつ!」

クロウは両腕を伸ばす。

「いや〜、良い風呂じゃねえの」

「そうだな。ユミルの温泉と甲乙つけ難いな」

「温泉郷ユミルですか、行ってみたいですね」

「ルーレより北にあるんだよな?」

「ああ、今の季節は涼しくていいぞ。冬はかなり寒いけどな」

「冬の温泉も悪くないよねえ」

「雪を見ながら熱い湯に浸かる。あの感覚は平地では味わえまい」

「皆さんも行かれたことがあるんですね」

「うん。一度目は内戦勃発の少し前。一泊二日の小旅行でね」

「確かあん時は季節外れの猛吹雪になったんだよな?」

「猛吹雪?内戦の少し前なら十月ですよね?」

「あの時、結社身喰らう蛇の執行者の一人である怪盗Bが現れてな。

アイゼンガルド連邦に続く山道で猛吹雪を起こしたんだ」

「怪盗B!?あの神出鬼没の泥棒と言われる!」

「マジかよ……っか、結社の一員かよ」

「信じられないかもしれないが、事実だ」

「何とか追い払って、騒動は解決したんだ」

「その後、お前は師から中伝を名乗ることを許されたんだったな」

「ああ。よく覚えてるな」

「そうだったんですか」

クルトは大きく頷いた。

「二度目は内戦でバラバラになった後、全員が揃うまでお世話にな  
っていたんだ」

「そして、カレイジャスに乗って内戦に介入したと?」

「そのとおりだ」

「そういや、よ。カレイジャスは学生だけで運用してたって噂があるんだが、ホントか?」

「アツシユ、いくらなんでもそれは……」

「本当だぞ?」

「トワ先輩が艦長代理でね」

「ええっ!?!」

「マジかよ!?!」

クルトとアツシユは揃って驚いた。

「アルフィン皇女を神輿にして、そんなところだろう」

「神輿という言い方はあれだが、内戦介入にあたって、俺たちの後ろ楯になっていたのだいた」

「そもそもカレイジャスは皇族専用艦だからな。西部へ行かれたオリヴァルト殿下の代理として、ご活躍なされていたよ」

「なるほど」

キリコは両手で顔をふく。

「そういえば、キリコは内戦でオリヴァルト殿下に会ったことはないのか?」

「ほとんどすれ違いだったから戦時中は会ったことはない。西部のあちこちで火消しをしていたことは噂にはなっていたが」

「それでも戦いは止まなかったんだね」

「あの二人が素直に聞くとは思えない」

「あの二人……」

「誰を指しているのか一発で分かったな」

「クロウはキリコの噂とか聞かなかったの?」

「あの総司令が周囲に上手く隠しててな。単なるガセだと思ってたんだよ。黄金の羅刹と黒旋風が愚痴つてんのを又聞きしたぐらいだな」

「へえ」

「まあ、変に広めて損害被ったんじゃ本末転倒だもんな」

「確かにそうかもね」

その後、Ⅶ組男子はのぼせる前に温泉から出た。

午後 11:15

「……………」

他のメンバーが寝静まる中、キリコはローゼリアのアトリエを出て、空を見上げていた。

(フィアナ…………)

「キリコさん……………」

「!？」

キリコが振り向くと、そこにいたのはミュゼだった。

「どうした？」

「なんだか眠れなくて」

寝間着の上に着る一枚羽織ったミュゼはキリコの隣に立つ。

「キリコさん……………」

「なんだ」

「フィアナさんとは…………どんな方だったんですか？」

「なぜそんなことを聞く」

「ご無礼は承知の上です。ですが、知りたいんです」

「……………」

「……………」

しばらく無言が続き、キリコは口を開く。

「…………俺は戦うことしか能のない兵士だった」

「……………」

「過去も夢も砕かれ、未来を閉ざされた俺には今しかなかった」

「……………」

「だがウドでフィアナと出会った時、こう思った。もつと生きたい、と」

「生きたい…………そうだったんですね」

ミュゼは顔を上げる。

「キリコさんは、フィアナさんを本当に愛していらっしゃったんですね」

「……………ああ」

「そうでしたか。ふふ、とつても素敵です」

ミュゼは笑顔を浮かべる。

「おやすみなさい、キリコさん……………」

ミュゼはゆっくりと戻って行った。

「……………」

キリコは再び空を見上げる。

(《F》……………あいつが本当に俺の知るフィアナならば、俺はどんな手を使ってでも、止めなくてはならない)

キリコは両手に力をこめる。

(もう一度……………眠らせてやる)

「ミュゼ side」

(私……………夢を見ていたのね)

部屋に戻り、私はベッドの中に潜り込みました。

(キリコさんが時々見せる、あの寂しそうな眼は、フィアナさんを想ってのことだったんですね)

最初から私が踏みいる所なんかなかったんですね。

(なら知らなければよかった……………ううん、今さら言っても仕方ありません。お二人の間を邪魔することなんてもっての他です)

(それに私はカイエン……………公爵……………夢のことなど忘れ……………て……………)

なんで……………涙が出てくるんでしょう。だって……………だってもう……………!

(やつぱり……………忘れるなんてできない……………!!)

シーツを掴み、歯を食いしばり、声をたてないようにして、私は泣きました。

(ああ……………キリコさん……………キリコさん!)

こんなにも……………こんなにも……………貴方のことが……………!

「ミュゼ side out」



## クメン①

「ここは……!!」

「な、なんて広い……」

「これだけの人数が丸々入ってしまいました……!」

「こりやたまげたぜ……」

セドリツク、エリゼ、アルフィン、ランディは記憶の部屋の規模に  
圧倒された。

「霊的なエネルギーに満ちています。それになんでしよう?何か映  
像のようなものが流れ込んで……?」

「そ、そういえば私も……」

「炎に、フルメタルドッグみたいな機動兵器が……」

ティオの指摘に、トワとティータが戸惑う。

「理屈は分かりませんが、ここで見たものは部屋の中にいる者全員  
に共有されるみたいなんです」

リインは記憶の部屋の仕組みについて話した。

「変わった仕組みだよな」

「ですが、いったいなんのために……」

「それについては私にも掴みかねております。我々に出来るのは、  
ここでキリコの前世の記憶を見ることだけでしよう」

「キリコさんはよろしいんですか……?」

「別に問題はない。三回目ともなればなおさらだ」

キリコは中央の台座を見る。

「やはり『Ⅲ』となっているな」

「本当に相克が鍵になっているのか……」

「とにかくさ、見てみようよ」

シャーリイはキリコを促す。

「前はデライダ高地までで、次はクメン王国だな」

「ああ」

キリコは台座に触れた。

「キリコ side」

デライダ高地でレッドシオルダー残党を壊滅させてから数カ月。レッドシオルダー基地での出来事を忘れるため、俺は戦う場所を探し求めた。

そこで俺はクメン王国の内乱に傭兵として参加することにした。クメンは惑星メルキア内にありながら、親バララント派だったため、メルキア政府との軋轢が絶えなかった。

それに加えて、クメンの支配層と住民が集まって神聖クメン王国を樹立、内乱が勃発した。

自国の兵だけでは賄いきれなくなり、俺のような傭兵が必要になるのは必然だったのだろう。

俺は他の傭兵たちと前線基地となる場所にボートで向かっていた。他の傭兵たちは文句たらたらで、見張りでさえ気を抜いていた。その時だった。

岸边から銃撃を受けた。

突然の奇襲で何人かが命を落とした。

俺は弾幕を掻い潜り、ボートの舳先に移動した。

舳先にはガスボンベがいくつもあり、俺は火炎放射器にセットし、岸边に向かって放射した。

辺りは火に包まれ、そこかしこで悲鳴が響く。

ある程度焼いた後、反対側に火炎放射器を向ける。

気も狂う暑さと湿気。死や熱病を運ぶ虫たち。

緑に塗り込められているが、ここは地獄に違いない。

だが俺には天国に感じられた。

俺は戦うため、忘れるためにここに来たのだ。

「キリコ side out」

「なかなかハードだな……」

「て言うか、あんなの卑怯じゃないの!？」

「ゲリラ戦なんてあんなもんだよ。ボサツとしてる方が悪いんじゃないん」

シャーリイは呆れたようにユウナに言った。

「し、しかし……今度の相手は……」

「俺が戦うことになる相手は兵士ではない」

「え!?!」

「そ、それって……!」

「彼らはビーラー・ゲリラと呼ばれ、元々は現地の農民だったのだが、神聖クメン王国の支配層と共に武器を手に立ち上がり内乱を起こした。キリコを含めた傭兵たちはそんな連中を相手に殺し合いをえんじることになる」

「い、一般人を相手にだって……!?!」

「こちらの世界でも珍しくはない。大陸中央部では似たような状況下にある国や地域は多い。女神を恨むばかりで自ら立ち上がろうとしないことが異常だ」

『……………』

ロツチナの言葉に何人かが目を逸らした。

「事実、俺は多くのビーラー・ゲリラを殺した」

『ツ!!』

キリコの言葉に一部の除いた多くの者が大きく反応した。

「……別に見ることは強制ではないようだ。耐えられそうにないなら、すぐに部屋を出るといい」

キリコは全員に聞こえるように言った。

「大丈夫だ……最後まで見るよ」

セドリツクは毅然と顔を上げる。

「セドリツク……」

「……私も大丈夫です」

アルフィンも毅然とした。

「皇女殿下も……」

「私も残ります」

エリゼはアルフィンの側に立った。

「大丈夫なのか？エリゼ……」

「はい。帝国を覆う呪いを晴らすヒントがあるかもしれないなら、

見て見ぬふりは出来ません」

「エリゼさん……」

「大丈夫です。万が一何かあれば、私とセリーヌが術を使って対処しますから」

エマは魔導杖を手に言った。

「わかった。他の人は……」

「俺は大丈夫だ」

「私も大丈夫です」

「わ、私も……！」

「ティータには俺がついてる。問題はねえ」

「私も残るよ」

「ここで尻尾巻くわけないだろう？」

ランデイ、ティオ、ティータ、アガット、トワ、アンゼリカは残ることを選択した。

「決まりのようだな」

「キリコ、続きを」

「はい」

リインに促されたキリコは台座に触れた。

「キリコ side」

ビーラーゲリラの襲撃を振り切り、俺は前線基地であるアッセンブルEX-110に到着した。

ここは他の基地と比べてビーラー・ゲリラの攻撃は激しい。

にもかかわらず、敵の襲撃を何度かはねかえしてきた実績がある。

基地内に通された俺は熱病のワクチンを接種し、レントゲン検査の他に身体を、それこそ尻の穴まで徹底的に調べられた。

この世界での兵役検査はどういうものかは知らないが、たぶん同じだろう。

それが終わると、部隊長のカン・ユー大尉と基地司令のゴン・ヌー將軍の演説を聞かされた。

演説が終わり、指定された宿舎へ向かっていると、俺は意外な人物

と会った。

ウドの闇商人のゴウトだった。

身に着けていた服からかなり羽振りが良さそうだった。

なんでも、クメン政府軍や俺のような傭兵を相手に武器やATを売ることで富を築き上げ、今やクメンの名士になっていた。

宿舎に荷物を置き、俺はゴウトと共にATを見繕いに行った。

そこには、新型のATがいくつも並んでいた。

短時間ながら潜水機能を持つ、ダイビングビートルは湿地が多いクメンの環境にもってこいだろう。

だが俺は使い慣れている方が良く、スコープドッグを湿地戦用に改修した、通称マーシイドッグを注文した。

ドックを出ると、俺たちは兵士に囲まれた。

カン・ユー曰く、俺はメルキアのスパイだと言う。

多勢に無勢ということもあり、俺は基地に連行された。

俺は妙な機械に拘束され、レーザーのようなものを当てられた。

その後すぐに拷問が始まった。

鞭やゴム製の警棒で容赦なく打たれた。

何の証拠があるんだと聞くと、意外な答えが返ってきた。

俺の体内にはメルキア軍のビーコンが埋め込まれていたという。

俺はようやく、あの時に射たれたものが何なのかわかった。

暫しの間耐えていると、ゴウトとゴン・ヌーが入ってきた。

ゴウトが動いてくれたようだ。

司令室に連れてこられ、俺はゴン・ヌーからいくつか質問された。

その中で俺はPSを見たからだと言った。

PSを知っているらしいゴン・ヌーは目の色を変えたが、何も知らないカン・ユーにはおふぎけに聞こえたようだ。

俺の胸ぐらを掴んできたが、ゴン・ヌーが止めた。

俺とゴン・ヌーのやり取りにカン・ユーが口を挟んできた。

何も知らなかったことを棚に上げ、カン・ユーはなぜ言わなかったと凄んできた。

何も知らない奴にペラペラ喋るほど俺はお人好しじゃない。だから

ら分かる相手になら話していたと返した。

とりあえず俺はそこで解放された。

この後ゴウトにカン・ユーは蛭のような奴だと聞かされ、後に目の上の瘤だと思いい知ることになる。

「キリコ side out」

「またなんか一癖のありそうな野郎だな。あのゴン・ヌーってハゲは」

「酸いも甘いも噛み分けた歴戦の将だということは分かるな」

「それに引き換え、カン・ユー大尉は大物という感じはしないね」

「むしろ小物」

「ああいう威張ってるのはだいたいそうだもんね」

「人の上に立つには役不足感が否めませんわね」

「とりあえず着いていきたいとは思わないな」

カン・ユーに対する評価は辛辣そのものだった。

「みんな言いたい放題だな。キリコ、君はどうだ？」

「バーコフ分隊にいたコチャツクの方がはるかにマシだ」

「そ、そこまでのの……？」

「最後まで見ていれば分かる」

「ま、そうだな」

「ルスケ大佐はキリコさんがクメンに入ったことはご存知だったんですか？」

「無論だ。だがクメンとメルキア政府は長らく対立してきた歴史がある。そんな国に潜り込まれたともなれば、我々として強硬策は取れんさ。ま、今は置いておいていいだろう」

ロツチナは薄ら笑いを浮かべた。

「キリコ side」

俺はゴウトに連れられ、補給地としての顔を持つ都市ニイタン来た。そしてとある酒場に着いた。

看板にはファンタムクラブと書かれていた。知らない人間なら良いかもしれないが、名前が気に食わない。店内に入ると、傭兵らしい男たちで溢れていた。誰も彼もがジョッキを片手に昼間の愚痴に興じていた。俺はゴウトとカウンターに座った。そこでバーテンとしてグラスを拭いていたバナラと再会した。その直後、白鳥をモチーフにした衣装を着たココナが俺の隣に座った。

俺はバナラに何か食べる物とコーヒーを注文した。そこで俺はゴウトたちからウドを出てからのことを聞かれたが、俺は忘れるためにここに来た、と答えた。

ゴウトたちが怪訝な顔を浮かべていると、カン・ユーが部下を連れてドカドカと入ってきた。

軍の命令で酒場の営業は17時までと決まっているらしい。

カン・ユーはコーヒーを飲み終えた俺に絡み始めた。

その時、爆発音が響いた。

どうやらビラー・ゲリラの夜襲のようだ。

俺はゴウトたちに別れを告げ、宿舎に戻った。

基地近くにはトータス系のATが展開していた。

一機ずつ確実に落としていくと、奥から青のカラーリングのトータス系ATが現れた。

俺は青いATに狙いを定め、攻撃を仕掛ける。

だが一発も当たらなかった。

この反応速度は間違いなくPSだ。PSなら彼女以外考えられない。

俺はATから降りて、青いATに直接呼びかけた。

だが青いATは容赦なく撃った。

俺はなんとか脱出して難を逃れた。だが、なぜだ。

「キリコ side out」

「なかなかスリリングだな」

「見る限り、キリコはともかく他は押されてたよね」

「土地勘や地形を利用した戦法はビーラー・ゲリラの方が上だ。中には偽装撤退戦術を使う者もいたらしい」

「偽装撤退戦術……」

「負けた風に見せかけて、引き寄せて一気に皆殺しにする戦術だね。西風なんかがたまにやってたよね？」

「そっちは基本的にイケイケドンドンだからね。だからカルバード近郊で負けたんでしょ？」

「レミフェリアの時はこっちが勝ったじゃん。誰かさんがランディ兄にムキになったせいだ」

「そういうシャーリイだって団長に絡んで返り討ちに遭ったでしょ？」

「言っちゃうんだ？それ？」

「事実じゃん」

「もう一回泣き見たい？だんちよおおって」

「……………」

フィーは無言で双銃剣を抜く。

シャーリイもテスタロツサに手をかける。

「落ち着け！フィー！キリコ、この後は!?!」

「シャーリイも止めろっての！なるべく急ぎで頼む！」

リインとランディはいがみ合う二人を押さえながらキリコに続きを促す。

「……………」

キリコはため息をつきながら台座に触れた。

「キリコ side」

翌日、俺はゴン・ヌーに呼び出され、カン・ユーの尋問を受けた。ある意味当然だろう。殺してくれと言っているようなものだ。

俺はあれは思いつきで、普通の人間なら戸惑ってくれると思ったからだと答えた。



この言葉にゴン・ヌーは戦った相手がPSではないかと睨んだ。数枚の写真を出し、ここ数カ月前から謎のATにやられるケースが増えたと言った。

写真の精度は悪いが、間違いなくあの青いATだ。

PSの対処方は何かと質問された時に俺は有効な手立ては思いつかなかった。

カン・ユーは重装甲のAT特別部隊の編成を主張したが常人をはるかに上回る反応速度を持つPSにそれは逆効果だ。

俺は出会ったら速やかに撤退することだと告げた。

カン・ユーは軍法を盾に異論を唱えたが、ゴン・ヌーはカン・ユーを制し、満足げな表情を浮かべた。

尋問が終わり、俺はファンタムクラブに足を運んでいた。

すると、俺と入れ替わりになにやら怪しげな男が黒いトランクをカウンスターの下に置いて出ていった。

単なる忘れ物だと思った。

だがそれは最悪の忘れ物だと直感で気づいた。

俺はトランクを手に外に駆け出そうとした。

だが一人の傭兵に阻まれた。

こいつはこのトランクの中身が何なのか気づいていない。

俺は傭兵を振り切って店の外に出た。

そこでトランクを思いきり投げた。

傭兵が俺を取り押さえた瞬間、放り出されたトランクが爆発した。

周りが呆然とする中、俺は再び店に入った。

傭兵は礼は言わないと言ったが、俺は店のためにやっただけだ。

俺はようやくコーヒーと食事がありつけた。

その帰りに俺はゴウトから内乱の成り立ちについて聞いた。

だが俺にはただの内乱とは思えなかった。もしかしたら、組織の実験が絡んでいるのかもしれない。

そこで俺はゴウトの事務所のコンピュータを借りて、対PS専用のミッシェンディスクの製作に取りかかった。

「キリコ side out」

「よく見抜いたものだね」

「これ見よがしにトランクを置いていけばな。そういえば、帝国では似たような話はあるのか？」

キリコはマキアスの方を見た。

「ホテルや空港に爆弾が仕掛けられた事例は多い。どれも表沙汰にならないよう防がれたからあまり知られていないのも無理はない」

マキアスはブリτζを上げながら言った。

「クロスベルにも似たような事例はありますよ。隠蔽されることも多いみたいですけど」

「クロスベルは各国から良くも悪くも注目されているからな。市民感情の悪化を鑑みるに、隠蔽するしかなかったんだろう」

「遊撃士にもそうせざるを得ねえ時がある。臭い物に蓋じゃねえが、そうした方が良い場合もある。ハーメル的一件もな」

「……………」

アツシユは苦い顔をした。

「アガツト…………」

「……………一応、あの一件は呪いのせいらしいが、とんでもねえクソ野郎が絡んでやがったとだけ伝えとくぜ」

「とんでもない…………？」

「《白面》かね？」

ロツチナが口を開いた。

「やっぱ知ってやがったか」

「結社身喰らう蛇、元第三柱ゲオルグ・ワイスマン。敵だけでなく身内からも嫌われていたらしいな？」

「…………ええ」

「マスターから聞いたことですが、リベールの異変で命を落としても、盟主以外から何の同情もなかったそうです」

「なんだそりゃ？」

「よっぽどだな」

「……………」  
アツシユの胸にやりきれない思いが募った。

「なかなか興味深い話だが、今はこちらを優先しよう。キリコ」

「……………」

キリコは何か引つかかるものを感じたが、台座に触れた。

「キリコ side」

明くる日、俺は対P S専用ミッションディスクが完成しないまま、エアポートに集合していた。

俺を含めた数人が輸送部隊護衛の任務に就くことになった。

そこで俺は理知的な雰囲気を持つ傭兵ポル・ポタリアと、ファンタムクラブで突つかかってきた傭兵ブリ・キデーラと挨拶を交わした。

そして、後に俺の終生の戦友となるクエント人傭兵のル・シャッコと出会った。

シャッコのあまりの体格に当時の俺だけでなく、教官たちも驚いている。

このクエントという言葉が俺の運命に深く関わってくるとはこの時は夢にも思わなかった。

俺たちはATに乗り込み、さらにATをハングマンと呼ばれる輸送ヘリにドッキングさせる。

ハングマンとは絞首人を意味し、吊るされている間は対空砲火に滅法弱い。つまり絞首台に吊るされたも同然というわけだ。

幸い、対空砲火を受けずに指定の場所まで来ることが出来た。

ここからは輸送ポートの両側にATを二機ずつ固めて出発する。ここからは我慢比べだ。

敵はいつ、どこから襲ってくるのかわからない。

ATのレーダーを頼りに、いつ終わるかわからない緊張感を宿し、進んでいた。

その時、シャッコが何か捉えたと言った。

カン・ユーはレーダーの故障だと言ったが、ポタリアの言うようにクエント製レーダーはピカイチの性能を誇る。

そうこうしているうちに、カルデの沼に着いた。

そこからムナメラ川本流へと向かう時にアクシデントが発生した。

ボートが浅瀬に座礁してしまったのだ。

そこでカン・ユーは俺に前方の岩にボートのウインチのケーブルを結び付けてこいと命令した。

俺でなくてもと思うが、文句を言っても受け付けるはずがない。

マーシイドツグにケーブルを引かせ、岩に結び付けた。

合図と同時にボートが動き出し、ムナメラ川に無事入った。

その直後、ビラー・ゲリラが奇襲をかけてきた。

俺はケーブルを結んだ地点から移動し、例のブルーのATを探しながら応戦した。

ある程度撃破すると、遂に姿を現した。

俺は対PS専用のミッションディスクを挿入した。

まだ未完成ではあったが、それでも効果を発揮した。

そうこうしているうちに、ビラーのATは大半が撃破されていた。

不利を悟ったのか、ブルーのATは撤退していった。

「キリコ side out」

「……………」

キリコはシャッコを懐かしそうに見つめる。

「あのル・シャッコという人物とも何かあったんだな？」

「シャッコとは後に惑星クエントで共闘することになる。それ以降もだがな」

「キリコさんにとっても大事な方なんですね」

「そうだな」

「それにしても大きな方ですね。クエント人、でしたか」

「巨人みてえだよな」

「惑星クエントの原住民だ。クエント人の男は普通らしい」

「あ、あの大きさを普通なんだ……」

「寿命も普通の人間より長く、平均で200年生きると本人から聞

いたことがある」

「ほう。それは興味深いのお」

ローゼリアは腕を組んだ。

「そういえばあんたは差別などはしないんだな？」

キリコはエマに聞いた。

「はい。魔術は使えるけれど、私たちは人間ですから」

「エマ……」

「ある意味、俺たちの中で一番フラットな目線を持っているからな」

「そんなエマだからこそ、俺たちの委員長が務まったんだろう」

「さすがですね」

「すごいですよ、エマさん！」

「あ、あはは……そんなに持ち上げられても」

エマは苦笑いを浮かべた。

「それはそうと、次はどうなったのよ？」

セリーヌはキリコに問いかけた。

「ビーラーの攻撃は激しさを増していった」

キリコは台座に触れた。

「ロツチナ side」

輸送部隊護衛の任務から数日後、基地はビーラー・ゲリラの夜襲を受けた。

キリコはアサルトライフルを手に応戦した。

ほとんどは射殺されたが、数人のゲリラは取り逃してしまった。

ある程度見回りを終えた後、ゴウトが奢ると言って傭兵たちに酒を振る舞っていた。

そんな中、キリコはポタリアの態度が気になっているようだな。

翌朝、キリコたち傭兵は広場に集められた。

ビーラー・ゲリラの拠点とみられる、ムナメラ川上流のゾンム村を潰すための先発隊を発表するということだった。

カン・ユーの口からブリ・キデーラ、ポル・ポタリア、ル・シャツコ、そしてキリコの名前が告げられた。

彼らはそれぞれのATに乗り、エアポートから出発した。

1時間後、ゾンム村を発見した。

カン・ユーは二機の爆撃機に爆撃の命令を出した。

ポタリアは異を唱えるが、カン・ユーは意に介さない。キデーラなどは報償金しか目が映らないのか、呑気に眺めていた。

爆撃が終わり、ゾンム村周辺から炎と黒煙がもうもうと上がっている。

新VII組から抗議の視線を受けたが、これが戦争だ。

ゾンム村に降り立ったカン・ユーは村長を呼び出し、質問した。

村長は無関係を主張したが、カン・ユーには通じなかった。

カン・ユーは歩兵に村を徹底的に搜索するよう命じた。

結局、ビーラー・ゲリラと結びつくものは出てこなかった。

さらにカン・ユーは村長や先ほどの搜索で見つかった女を含めた5人を横一列に並べた。

そして拳銃の弾を一発だけ残して渡した。

所謂ロシアンルーレットか。

村長から始まり、一人ずつトリガーを引いていく。

空の薬室を打ち抜き、虚しい音を立てた時、皮肉にも生への充足が歓喜となって肉体に溢れる。

こんな遊びこそ、この世に似合うのかもしれない。

最後の一人——モニカという女はポタリアの制止を振り切り、こめかみに銃口を当てた。

その時、キリコの機体からヘヴィマシンガンの火が吹いた。

モニカの手を離れた拳銃は暴発し、銃声が鳴った。

キリコは拳銃遊びだと吐き捨て、キデーラとシヤツコは村の祭壇に発砲した。

祭壇の奥から、ビーラー・ゲリラのAT部隊が姿を現した。

村は阿鼻叫喚に包まれた。

他の連中がAT部隊に目がいく中、キリコは村の裏手にある岩山の麓に来ていた。

待機していたATを倒したキリコは青いブルーのATから攻撃を受けた。

キリコはメルキア軍で使用されている信号を送り続けている。確かにファイアナなら理解できるだろうな。

ブルーのATは動きを止め、コックピットが開いた。

そこにいた人物にキリコは立ちすくむ。

プロトツート、イプシロンだったからだ。

そのままキリコはビーラー・ゲリラたちに拘束された。

「ロツチナ side out」

「今の人……」

「トワ教官、知っているんですか？」

「うん……プリシラ皇妃様とジュノー海上要塞にいた時に」

「え!？」

「どういうことだ？キリコ」

「理屈はわからないが、奴も転生したようです」

「ルスケ大佐は知りませんか？」

「奴はクロスベルの湿地帯で倒れているところを私が保護した。虫の息だったところを黒の工房に預けておいたのだ」

「あいつ、めちやくちや強いよ」

「シャーレイさん？」

「戦ったことあんのかよ？」

「黄金の羅刹とタッグを組んで殺り合ったんだけど、実質負けていたしね」

『な……!?!』

リインたちは絶句した。

「ほう、あの黄金の羅刹でさえ手に余るか。キリコ、やはりPSに勝るのはお前くらいだな」

「……………」

「いったい、何なんです？PSって」

「……………ここで私が言うのは簡単だが」

ロツチナは帽子を被り直した。

「それだと面白くないだろう?」

ロツチナはニヤリと笑みを浮かべる。

「さあ、まずは囚われの身になったキリコを見よう」

「……………」

キリコは台座に触れた。

「キリコ side」

ビーラー・ゲリラに捕らえられた俺はクメン奥地にあるカンジェルマン宮殿へと連行された。

俺は内乱の首魁カンジェルマンの前に引きずり出された。また、その両隣にフィアナともう一人のP S イプシロンが控えていた。

周りからの罵詈雑言が響きわたる中、イプシロンはクメン伝統の武術バランシングで決着を着けるとカンジェルマンに申し出た。

クメン出身でない俺はバランシングなどやったことも、ましてや聞いたこともない。

体の良い見世物だが、ここは素直に受けるしかなかった。

イプシロンの長槍の穂先をかわすが、石畳に足を引っかけたしまい、バランスを崩して転がった。

「たちまち嘲笑に包まれたが気にしてられない。」

なんとか立ち上がったが一本も入れられず、逆に負傷した。いよいよ止めという時に、フィアナが止め役を申し出た。

フィアナは長槍を手に、俺の肩の一撃を入れた。

余興はここまでとして俺は地下牢にぶちこまれた。

その夜、牢番が誰かと話している。

音がする方を見ると、そこにフィアナがいた。

やはり俺の知るフィアナだった。

フィアナは俺に肩を貸し、カンジェルマン宮殿の裏手に連れて行ってくれた。

そこにはゾンム村にいたモニカとかいう女がいた。

俺はフィアナと一緒に来るように言ったが、チヂリウムが手に入ら



ないという理由から奴らの元にいるしかない。

俺はファイアナに暫しの別れを告げ、モニカの用意したボートで脱出した。

ファイアナが無事だった。

それだけで俺は満足だった。

「キリコ side out」

「こんなことがあったのか……」

「キリコはどう思っていたんだ？その……ファイアナさんに……」

「……正直、信じられなかった」

「やはり……」

「だが目を見た時、殺気がまるでなかった」

「それで見抜いたんだな。彼女に何かあると」

「はい」

（キリコさん……）

ミュゼは少し下がった。

（大丈夫よ）

アルフィンミュゼの肩に手をおいた。

（姫様……）

（これはあくまでキリコさんの過去だもの。きっと貴女の想いは届くわ）

（はい……）

ミュゼはなんとか自分を納得させた。

「そういや、他の連中は何してたんだ？」

「俺が拘束された時には、撤退していたらしい」

「はあっ!?!」

「キュービーがまだいるのにですの!?!」

「後日、聞いた限りではな。カン・ユーの命令らしい」

「なんだそのふざけた命令は」

「どう考えても逆恨みだろう……!」

「無能にも程があるでしょ!？」

「……………」

キリコ自身も辟易していた。

「私も報告は聞いていたが、ここまでとは思わなかったな。さあ、キリコ。続きを」

「キリコはこの後どうなるんだ？」

「二応、ビーラーのテリトリーからは逃れられた」

「キリコ side」

テリトリーから逃れた俺はヘリ部隊に保護され、アッセンブルEX—10の医務室に運ばれた。

そこで俺はいかにも重病人のようにチューブをいくつも付けられた。

ゴウトたちが見舞う中、カン・ユーが特別尋問だと言ってやって来た。

カン・ユーは俺がビーラーと何らかの取引をしたと宣い、ゴウトたちに病室を出るように強く言った。

対してゴウトは一步も引くことなくカン・ユーが俺を見捨てたことを強く咎めた。

そんな時、ゴン・ヌーが止めた。

ゴン・ヌーはカン・ユーに俺に指一本たりとも触れるなど厳命した。カン・ユーはしぶしぶながらも返事し、病室を出ていった。

そこで俺はようやく落ち着けた。

俺はビーラーは想像以上の軍勢であること、組織の奴らがいたことを話した。

そんな時、あるニュースを耳にした。

クメンの首都ザイデンにメルキアの使節団が来たという。

これまで争ってきたメルキアとクメンが手を結べばこの内乱は終わるだろう。

商売に影響が出るのか、ゴウトもザイデンに向かった。

俺としてもやはり気になる。

俺は病室を抜け出し、ゴウトの事務所で連絡を待っていた。

ゴウトから連絡がきたのは日付が変わる頃だった。

メルキアとの停戦合意が決まり、傭兵の立場は危うくなるらしい。電話を切ると、事務所にカン・ユーと兵士数人が入ってきた。

カン・ユー曰く、俺はビーラーと何らかの取引を行ったスパイで、今の電話もそのためだという。

俺が何を言っても聞く耳持たず、俺は基地に連行された。

VII組の方を見ると、完全に呆れかえっている。

特に帝国軍最強と言われる第四機甲師団長を父に持つエリオットは何とも言えない顔をしていた。

俺はカン・ユーから尋問を受けていたが、あまりにも馬鹿馬鹿しかった。

改めて見るまでもないほど視野が狭すぎる。そのくせ思い込みは超一流。

ゴン・ヌーの審美眼はかなりイカれているようだ。すると隣にいた兵士が変わると言い出した。

前から俺を殴ってみたかったと宣った。

俺は上体を後ろに倒し、おもいつき蹴りあげた。

兵士は壁に叩きつけられ失神したようだ。

その直後、ノックの音が聞こえた。

カン・ユーは必死で隠そうとしたが、ポタリアとキデーラに乗り込まれた。

二人は縄をほどいてくれた。

さらに立て続けに兵士が入ってきた。

基地周辺でビーラー・ゲリラが出たらしい。

カン・ユーは尋問の途中だと言ったが、ポタリアの説得もあり、出動することになった。

ATに乗って出動したはいいが、敵の数があまりにも少ない。ましてやATの反応が一機もない。

今のところ見つかったのは高射砲くらいだ。

そのとき俺はこれは罠だと悟った。

一応、顔を立ってカン・ユーに報告するが聞く耳持たずだった。基地防衛も重要だがニイタンは補給地として重要な拠点だ。

何よりあそこにはバニラとココナもいる。

俺は単独でニイタンに向かうことにした。

さらにポタリアとキデーラも続いた。

カン・ユーは軍法会議にかけると吠えたが何事にも例外はある。

ポタリアの言うように指揮官が無能の場合はだ。

途中カン・ユーの配下が道を塞いだ、シャツコの乗るトレーラーに吹き飛ばされた。

俺たちもトレーラーに乗り込み、ニイタンへと急いだ。

俺たちが到着すると、ニイタンは既に炎に包まれていた。

俺はビーラーのATを撃破しながら店へと急いだ。

だが無情にも店は焼け落ちていた。

俺はバニラとココナを逃がし、応戦した。

敵を全滅させたのは空が白くなってきた頃だった。

基地の方向から数台のヘリが飛んでくるのが見えた。

キデーラの言うように、ようやく事態に気づいたらしい。

あの時素直に応じていれば少なくとも、ニイタンが全て灰にならずに済んだだろう。

もっとも、あの無能に期待するのは無駄だろうが。

「キリコ side out」

「ほんつとに腹立つわね！何なのよあれ！」

「マジでクソだな」

「僕もそう思う。キリコ、本当にあれで指揮官なのか？」

「あれでも一応、功績を立てた上でのものらしい」

「……軍の規律を疑わざるを得ませんね」

「まったく！自分の無能ぶりを柵に上げてキリコさんにあんな態度を取るなんて！」

新VII組はカン・ユーの独善ぶりに憤慨した。

「み、みんな……」

「いや、これはユウナ君たちが正しいね」

「こいつあ自分が無能だつて気づかない無能だな」

アンゼリカとクロウは新VII組に同調した。

「クロスベル警察のキツネさんも似た感じですけど……」

「いやテイオすけ、そりゃピエールのオツサンがかわいそうだろ」

テイオとランディはクロスベル警察副署長を思い出していた。

「まさかあの執事崩れと似たような無能が存在していたとは」

「組織において何の得ももたらさぬ愚物か」

「キリコ君、本当にお疲れ様ね」

鉄機隊はため息が止まらなかった。

「あんなタイプは猟兵団ならどうなるんだ？」

「ん、即射殺かな？」

「団長だったら、上手いこと言い含めて鉄砲玉に仕立て上げるかもね」

「北の猟兵なら有無を言わさず私刑も考えられるわね」

アガットの質問にシャーリイ、フィー、サラはそれぞれ答えた。

「……キュービィーに同情せずにはいられんのお」

ローゼリアは終わったら月影亭でキリコにコーヒーを奢ることを決めた。

「フフ。この世界でも彼の無能ぶりは堪えるようだな」

「ルスケ大佐、彼に指揮官の地位は分不相応過ぎませんか？」

「まあ、我慢して最後まで見ることだ。それに君たちの溜飲が少しでも下がるようなことを教えよう」

「なんですか？それは？」

「フフ。とにかく、今はキリコの足跡を追うとしよう」

ロツチナはキリコを促した。

「……………」

キリコは一度身体を伸ばし、台座に触れた。

## クメン②

「キリコ side」

ニイタンの焼き討ちの翌日、俺はゴン・ヌーに呼び出されていた。ゴン・ヌーは命令違反について申し開きはあるかと言ったが、俺からはなかった。

俺の言葉を聞いたゴン・ヌーは自分の権限で命令違反は不問にすると言った。

カン・ユーは反発したが、ゴン・ヌーから指揮能力の無さ、ニイタンを灰にしたことを責められて何も言えなくなった。

俺は基地防衛も任務の内だと言ったが、後のことを考えると、更迭させた方が良かった。これは本当に悔いが残る。

カン・ユーを退室させた後、俺はロツチナと再会した。

そこで俺はロツチナからPSについてようやく知ることが出来た。

『.....』

PSがどういうものなのか。

それを知った者たちは言葉を失っていた。

いや、青ざめていたと言うべきか。

「これがPSだ」

ロツチナは意にも介していなかった。

「オライオン姉妹のようなホムンクルスはあくまでも人間に似せて造られた、言わば人間の模造品」

「だがPSは違う。遺伝子工学、生物分子学、脳生理学などあらゆる分野のエキスパートを集めて造り出した生命体」

「加えて人間の持つ本来の能力を増幅させ、脳そのものに手を加えることで発達したコンピュータに匹敵する力を得た。これを新人類と言わずしてどう言おうか」

「ふざけるなっ!!」

リイン教官は激怒した。

それはそうだろう。普通の人間の感覚ならこうなるのが自然だ。

「あんたは……あんたたちは命をなんだと思ってるんだっ!!」

リイン教官はロツチナの胸ぐらに掴みかかる。

「これが軍というものだよ。それにPSはあくまで人間の形をした兵器。利用価値はあるこそすれ、人間だと思ふことはない」

「この……人でなし!!」

ユウナも吼える。

「何と言われようと、これは実際にあった出来事。そしてキリコの過去なのだ」

「くっ……!」

「それにプロトワン……ファイアナについても想定外の出来事だった」

「想定外……?」

「元々、プロトワンと呼ばれるようになる素体はキリコによって目覚めさせられた」

「リドとか言う研究所でだよな」

「その際、素体は完全に空白の状態でキリコを見た。これが何を意味するか分かるかね?」

「空白の状態でキリコを?」

「……そうか。刷り込みですね?」

エマ・ミルステインは理解したようだ。

「そう。卵から孵ったばかりの雛が初めて見たおもちやの鳥でさえ親だと思ひ込むように、素体の潜在意識の中にキリコの存在が強く刷り込まれたのだ。キリコはファイアナに安らぎを、ファイアナはキリコに愛情を。まるでアダムとイブのように」

「アダム? イブ?」

「アストラギウスの伝説に登場する、最初に誕生した男と女だ。そして人類初の夫婦になったと言われている」

「そんな伝説が……」

「まあそれは置いておいていい。続きといこう」

俺は無言のまま台座に触れた。

俺はキデーラ、ポタリア、シャツコらと共に、ムナメラ川を塑行し、ビーラー・ゲリラの巢窟へと向かうことになった。

また、敵に悟られないように、この作戦は隠密行動ということも決まった。

だがここで無能がやってくれた。

奴は俺が隠密作戦の指揮を取るのがよほど気に食わないらしい。

ボートでムナメラ川を塑行している時、野菜や果物を積んだボートとすれ違いになった。

正直、怪しいがここは無視しておく。

だがこの無能は積んであった機関銃を乱射し、ボートを沈めた。

ポタリアは声を荒げて抗議したが、無能は聞く耳持たずだ。キデーラに至っては興味すらないようだった。

しばらく進むと、大きな建物が見えてきた。

ポタリアによると、ラモー寺院と言うらしい。

俺は無視するべきだと言ったが、無能は調べると言つて聞かない。言い合いの末、俺たちはラモー寺院に乗り込むことになった。

ラモー寺院のあちこちを調べてもビーラー・ゲリラに関するものは見つからなかった。

こうしている間にも、俺たちのことはビーラー・ゲリラに知られているだろう。

ようやく、ラモー寺院から出ることが出来た。

だがこの無能はとんでもないことをしてくれた。

一艘のボートをわざと川に流した。

その瞬間、ボートは爆発した。

無能はビーラー・ゲリラの巢だと息巻いて突っ込んで行った。

これでは寝ている子どもを叩き起こすようなものだ。

結局、俺たちはラモー寺院を徹底的に破壊し尽くした。

無能はビーラー・ゲリラの巢を叩き潰したと得意気になっていたが、もはや隠密作戦など失敗だ。

俺は念のために後方へと連絡を取っておいた。



無能は勝手なことをするなどほざいたが、どの口が言っている。任務に支障が出たなら報告するのが常識だろうに。

しばらくして、アツセンブルEX―10から連絡係が来たが、その連絡係とは何とバナラだった。

後でゴウトに聞いたところ、店を焼かれたバナラは戦争にたかるのは飽き飽きしたと言って、ゴウトのつてをたどって軍に志願したそう  
だ。

実際、まともな職に就いて大成功をおさめることになることを踏まえると、この時の決断が功を奏したのだろう。

バナラが無能に皮肉を言っている中、俺は瓦礫の山となったラモ―寺院を見つめていた。

何かを求めて戦場に来る者。その日の糧のために引き金を引く者。理想のために己を手を血で染める者。そして炎と硝煙の中でしか生きられない俺。

ここは神の住処なんかじゃない。

ただの瓦礫の山だ。

「キリコ side out」

「救いようがないね」

「作戦って意味を調べ直して来いっての」

シャーリイとランディは揃ってため息をついた。

「どうだっがいい」

「良いんですか？キリコさん」

「あれでも一応、上官にあたる。嫌味ったらしい上司などめずらしくもない」

「それは、まあ……」

キリコの言葉に何人かが頷く。

「本来ならもっと進んでいたってことですよね？」

「妨害はあるだろうが、少なくとも意見を求めることはなかったはずだ」

「でしようね」

「ここからはどうなったんだ？」

「ボートを失った以上、歩いて行くしかない」

キリコを台座に触れた。

「ロツチナ side」

キリコたちはゴン・ヌーから指令を受け、三日月湖を目指すことになった。

だがラモー寺院襲撃により、敵に筒抜けなのは明白だ。

余計な道草を食っておいて大手柄とは笑わせてくれる。

カン・ユーは未だしやしやり出てくるが、もはや面従腹背と言っても過言ではなかった。

様々な感情が渦巻く中、キリコたちは三日月湖に到着した。

まるで地雷原を行くが如く、神経を張りつめながら一步一步進んでいる。

だがやはり地の利はビーラー・ゲリラにある。

三日月湖の中洲に差し掛かった時、ビーラー・ゲリラから襲撃を受けた。

キリコたちは必死に応戦するが、数では劣っていたし、なによりイプシロンも出撃していた。

そんな時、三日月湖上空を一機のヘリが旋回していた。

一瞬だけしか見えなかったが、乗っているのはフィアナのようだ。

おそらくキリコがイプシロンに倒される瞬間を見せつけるためにヘリに乗せたのだろう。どこかの心理学者は強いショックを与える」と記憶が上書きされると言ったらいいしな。

まあ、戦闘中ということもあってかキリコは気づいていないようだな。

キリコは対PS専用ミッションディスクをセットし、イプシロンに挑んだ。

だがそれでもイプシロンには一歩及ばなかった。

イプシロンの乗るATの猛攻を受け、キリコは敗北寸前まで追いつめられた。

その時だ。

ファイアナらが乗るヘリが二機の間を断ち割るように湖面を叩いて通りすぎて行き、墜落した。

キリコもようやくファイアナの存在に気づいたようだ。

このどさくさに紛れてファイアナはヘリから逃げ出した。

「ロツチナ side out」

「キリコ side」

俺たちは当初の目的通り、PSの奪取に動くことになった。

カン・ユーは敵本拠地突入に拘っているが、それでは作戦の目的が変わってしまう。

ポタリアたちが俺の方についてくれたこともあり、カン・ユーも折れざるを得なかった。

しばらく進行していると、ビーラーのATから攻撃を受けるイプシロンとファイナの姿があった。

俺たちはビーラーとイプシロンを討つために奇襲をかけた。

難なく後ろを取り、ビーラーのATを撃破していく。

そんな中、俺はカン・ユーの姿が見えないことに気づいた。

いやな予感がして、俺は急いで探すことにした。

川のほとりでカン・ユーがファイアナにナイフを向けていた。

俺は夢中でカン・ユーに飛びかかった。

揉み合いの末、俺はカン・ユーを増水した川に蹴り落とした。

既に疲労困憊の状態になっていた俺は、ファイナの顔を見上げながら気絶した。

気がつくと、朝になっていた。

なにやらうまそうな匂いがする。

体を起こすと、ファイナが軍用レーションで料理をしていた。

腹がへったと言ったらファイナが可笑しそうに笑った。

食べてみると、不思議と味が違う。

元々、食べ物に関して俺は無頓着だった。

腹を満たせば味は二の次だと思っていた。

フィアナによると戦闘や日常生活に関することを何から何までプログラムするわけではなく、自分で覚えたのだという。

その点イプシロンは戦闘に関するのが大半なのだろう。

食事を終えた後、俺はカンジエルマン宮殿に連れて行ってほしいと頼んだ。

フィアナは自分と共に逃げてと言った。

ウドの時の俺なら共に逃げていただろう。

だが俺は死に行くわけじゃない。

フィアナと共に生きるために戦う。

その原動力は間違いないなく、フィアナへの愛だろう。

「キリコ side out」

「まもなくクライマックスみたいだね」

「そうだな」

「でもよ、お前大丈夫なのかよ？」

クロウは微妙そうな顔をした。

「カン・ユーのことか」

「少なくとも、上官殺しを犯したことになるもんね」

「キリコさん……」

ミュゼは不安そうな顔をした。

「やはり咎められたようだな」

「ええ」

キリコは台座に触れた。

「キリコ side」

カン・ユーを殺った。

俺の言葉にキデーラ、ポタリア、シャツコは愕然となった。

これは至極当たり前のことだ。

傭兵の集まりとはいえ、歴とした上下関係が存在するし、規律も存在する。

俺のやったことは組織において絶対不可侵のタブーだ。

その時、ファイアナが俺を庇った。

そこで俺はファイアナがPSだと話した。

ここまですると全てを話さなくてはならない。

俺は三人に小惑星リドでの出来事を語った。

一応は納得してくれたが、キデーラはカン・ユーを殺したことに悩んでいた。

連行するつもりはないが有耶無耶にはできない。

キデーラがポタリアに意見を求めたら、意外なことを語った。

ポタリアは元々クメン王国の王室親衛隊だったらしく、カンジェルマンは上官だったそうだ。

そしてポタリアの真の目的はカンジェルマンの首ただ一つだという。

そんな時、味方機が飛んできた。

どうやらカン・ユーが呼び寄せていたらしい。

どうするか迷っていると、キデーラが撃ち落とされた。

キデーラはイプシロンを捕らえて叩き売ると豪語した。

そんな中、シャツコは契約が残っているからと、ここに残ると言った。

シャツコはある意味、俺たちの目的から一番縁遠い。

キデーラは優等生と吐き捨て、俺たちは出発した。

その後俺たちはファイアナの先導でカンジェルマン宮殿を目指す。

ファイアナの反応速度は見事なもので、僅かな音からの確に敵を発見する。

これには百戦錬磨の傭兵も舌を巻いた。

そうこうするうちに、俺たちはカンジェルマン宮殿付近に到達した。

だが何か様子がおかしい。

辺りを探っていると、ファイアナは通信機を手に入れた。

傍受してみると、カンジェルマン宮殿に全兵が終結しているのとこのどだった。

ポタリアは愕然となった。  
確かにおかしい。

やつらの強みは神出鬼没のゲリラ戦にある。  
兵力差を考えるなら、愚策の極みと言わざるを得ない。

ポタリア曰く、カンジエルマンは王国一の軍略家としての顔を持つ  
という。

やはり不可解だ。

そんな時、キデーラはどっちでもいいから行こうと言った。

こういう時、らしく明るく振る舞うやつの存在はありがたい。

俺たちは何らかの疑惑を感じながらも、カンジエルマン宮殿に潜入  
することにした。

「キリコ side out」

「ロツチナ side」

キリコたちがカンジエルマン宮殿付近に到達した時、私はギリギリ  
まで軍の派遣を見極めていたんだつたな。

そのためにゴン・ヌーを煽り、その気にさせた。

クメン統治において傭兵の存在ほど煩わしいものはない。

ゲリラども共々灰になってもらうしかない。

一方、キリコたちはビーラー・ゲリラに紛れ、悠々と敵の懐に潜り  
込んでいった。

これほどの混乱ならキリコでなくとも潜入は可能だろう。

機を見て、キリコたちは攻撃を開始した。

ビーラー・ゲリラは対応に移ろうとしたが、味方がひしめきあつて  
いたのが災いし、同士討ちを恐れて応戦ができなくなっていた。

さらに逃亡する者がいたことから、敗戦ムードが満ちていたのだろ  
う。

あつという間にビーラー・ゲリラは大半が潰された。

ここでポタリアはカンジエルマンを討つべくキリコたちと別れた。

キリコも秘密組織と決着をつけるため、さらに奥へと進んだ。

「ロツチナ side out」

「いよいよ総攻撃ですわね」

「もう、良いんじゃないの……？」

「ユウナ……」

「だって、敗けることは目に見えてるんだよね？何で降参しないの……？」

「あなたが言うんですの？クロフォードさん？」

「でも……！」

「戦争とはこういうものだ」

「キリコ……」

「もう理屈では済ませられない。あらゆる感情が渦巻き、気が済むまで終わらない」

「……」

「戦争を止めたいなら、目に焼きつけろ」

「……うん」

ユウナは顔を上げた。

「それは僕も同じだ」

「目を背けてはいけないものだと思います」

「最後まで付き合ってやるよ」

新VII組も続いた。

「……」

ただ一人、ミュゼは暗い顔をした。

(カイエン公……)

アンゼリカは不安そうにミュゼを見た。

「ではキリコ、最後の戦いを見ようじゃないか」

「……」

キリコは台座に触れた。

「キリコ side」

奥に行けば行くほど、蜂の巣をつついたような騒ぎになっていた。キデーラと一旦別れた俺たちはボローを探すことにした。

奥にあるという開発エリアに来ると、ボローを発見した。  
ここで逃がすわけにはいかない。

俺はエレベーターに狙いを定め、引き金を引いた。

ボローは縁につかまりかろうじて落下を免れたようだ。

俺は眼下に広がる光景から目を離せなかった。

開発エリアとは言うが、科学プラントと呼んでも差し支えない。

これならば、実現できるかもしれない。

俺はボローに銃口を向け、尋問を始めた。

ボローは殺せと喚くが、そのつもりならとつくにそうしている。

俺はPSを使って内乱に参加した理由を問うた。

ボローによると実験だという。

さらに問い詰めると明かしてくれた。

PSは肉体的には完成しているが、精神的には完璧には程遠いという。PSはあくまでも兵器なので純粋な憎悪が必要なのだという。

言いたいことはわからなくもない。敵を倒す、もしくは殺す兵器に情けは要らない。

俺は言葉を飲み込み、次の質問に移ろうとした。

どこからともなく、イプシロンの声が響く。

周りを見渡すと、俺のいる位置と対岸の出入りに形は違えどブルーのATが立っていた。

俺はイプシロンを落ち着かせ、ボローに問うた。

PSを当たり前の人間に戻すことはできるのか、と。

これはフィアナもイプシロンも気になるようだ。

ロツチナを除く、記憶の部屋の誰もが注視している。

だがボローは残酷な事実を告げた。

不可能だ、出来るわけがないと。

俺には信じられなかった。

だがここは戦場。呆けている場合じゃない。

イプシロンは俺と戦うつもりだ。

その時、キデーラの声が聞こえてきた。



よくみると、キデーラはイプシロンの後ろに回っていた。俺は必死に止めたらがキデーラが聞くことはなかった。

キデーラの乗るATは突っ込んだが、既に感知していたイプシロンに回避され、蜂の巣にされた。

そのまま落下し、ATは爆散。キデーラは戦死した。

仲間の死を悼む暇もなく、俺とイプシロンの戦いが始まった。

最初はパイプの上で戦っていたが、どちらに有利ともいえない状況がそう長くは続かない。

最終的に俺たちは底に貯まっていた堆積物の上に落ちた。

見覚えがあるので、よく見てみるとチヂリウムだった。

おそらく、新たなPSの生産までも計画していたのだろう。

底までたどり着いたボローは俺を殺せとイプシロンに命令した。

この状況では俺は不利だった。

だが意外なことに、イプシロンは機体を降りた。

自身の手で止めをさすと叫んだ。

俺も機体を降りることにした。

すると、俺とイプシロンの間に機銃が掃射された。

撃ったのはフィアナだった。

イプシロンはフィアナが自分を撃つわけがないと高を括っているようだ。

だからこそ、俺との距離を詰める。

フィアナは懸命に退くように懇願する。

だがイプシロンは聞く耳を持たない。

最終的にフィアナは引き金を引いた。イプシロンに向かって。

イプシロンは後方に吹き飛ばされるも、ゆっくりと立ち上がった。

頭部から鮮血が滴り落ち、イプシロンの顔を赤く染めた。

この出来事がきっかけになったのだろう。イプシロンが憎悪に身を委ね、幾度となく繰り広げられた俺と殺し合いの。

突如として、下卑た声が響いた。

ゴン・ヌーが到着したようだ。

ゴン・ヌーはファイアナとイプシロンを捕らえて引き渡せと宣った。俺はファイアナと共に逃げるつもりだった。だが上を取られているためうかつには動けない。

その時、メルキア軍の攻撃が始まった。

ゴン・ヌーはほくそ笑んでいたが、すぐに動揺に変わった。

メルキア軍はゲリラも傭兵も手当たり次第に攻撃していた。

ゴウトの言うとおりに、傭兵の存在はクメンに不要のようだ。

攻撃が激しくなり、パイプや機材が落下してきた。

その内のいくつかがボローの上に落ちてきた。

ボローはイプシロンに助けを求めたが、当のイプシロンはボローを見つめるだけだった。

ガソリンが引火し、ボローは焼け死んだ。

俺とファイアナは一瞬の隙を突いて逃げ出した。

脱出する術がないか探していると、バナラが待っていた。

バナラによると、ポタリアはカンジェルマンを倒したそうだ。

バナラの先導で俺とファイアナは脱出機のドッグまで来た。

カンジェルマンのために用意された物らしいが、本人にその気はなかったらしい。

バナラは俺に脱出機のキーを寄越した。

だがこの脱出機は単座だった。一人しか乗れない。

ファイアナが調べると、座席の後ろの弾薬スペースにPS用のカプセルが置いてあることがわかった。

これで脱出できるかと思っただが、まだ問題があった。

殺したと思っていたカン・ユーが生きていたのだ。

カン・ユーはメルキア軍への鞍替えを目論み、俺とファイアナを狙ってきた。

ここで、俺でさえ予想してなかった人物が動いた。

カン・ユーの身勝手さに怒りを覚えたシャツコが初めて反抗した。

カン・ユーも予想してなかったのか、大いに狼狽していた。

カン・ユーは悪あがきと言わんばかりに、シャツコの腿に向けて発

砲した。

シャッコは痛みをこらえ、カン・ユーを投げ落とした。  
あんたは人間のクズだな、と言って。

シャッコの手当てを済ませ、俺はファイアナをカプセルに入れた。  
ボローの言葉はファイアナを傷つけていた。

俺はボローは嘘を言っているだけだと言った。いや、そう言うしかなかった。

攻撃が激しくなってきた。

俺はバナラに促され、エンジンに火を入れた。

スロットルを全開にし、全身にGがかかる。

クメンでの戦いが終わった。

振り返れば、緑の地獄が遠ざかっていく。

俺はファイアナと共に、次の戦いの地に向かった。

「キリコ side out」

台座から光が消えた。

「クメンはここまでか」

「ああ」

「キリコ……」

セドリックがキリコに近寄る。

「本当に、なんと言ったらいいか……」

「どれれえ過去を背負ってたんだな」

「そうだな」

「あの……」

ティータが拳手した。

「クメンはどうなったんですか？」

「悪いがほとんど知らない。ロツチナ」

キリコはロツチナの方を見る。

「あの後、クメンは王制から共和制に移行した。だが従来のみがらみからメルキアはクメンに対して最低限の支援しか出来なかった。加えて住民の抛り所であると言えた王室の廃止によって国全体に混

乱が生じた」

「そんな……」

「カルバード共和国成立当時も相当揉めたらしいけど、どこの国も一緒ね」

「この事態に終止符を打つべく誕生したのがポル・ポタリア大統領だ」

「ポタリアは大統領になったのか？」

「もつとも、先ほど述べた混乱の影響でクーデターと政権交代を繰り返す羽目になるがな」

「そうか……」

キリコはポタリアの熱い言葉を思い返した。

「結局、カンジエルマン王は何をしたかったんでしよう？」

「戦後、ポタリア大統領に会った時に語ったことだが、カンジエルマンは自分もろとも滅ぼすつもりだったという」

「自分もろとも!?!」

「そもそも神聖クメン王国に集った連中はそのいずれもが旧勢力だ。国を再建するにあたって一番の障害はそれだ。カンジエルマンは旧勢力を一纏めにして玉砕することで新たな歴史の餞にするのが狙いだったようだ」

「なんだそりゃ!?!」

「理解出来ません……」

「……」

新VII組が理解できない中、セドリツクは思案していた。

「殿下……?」

「どうかされたのですか？」

「え、あ、ああ……。カンジエルマン王のやったことは許されなことだ。でも、気持ちはわからなくもなくてね」

「え……」

「たとえば、兄上やアルフィンが帝政を全て廃止すると発表したとしよう。僕個人はその方がいいと思ったとしよう。でも、古い勢力は

皆皇太子である僕に期待するだろう。元の帝国に戻してくださいと」  
「それは……」

「たぶん、カンジエルマン王も同じだったんだと思う。個人ではそう思っているけど、王族としての宿命がそれを許さなかったんだ」

「セドリック……」

「おっしゃる通りだと思います。自分も、殿下に期待してしまうでしょう」

リインは胸に手を当てた。

「おそらく、ここにいる誰もが」

「……………」

帝国出身者たちは無言になった。

「大丈夫ですよ。僕は間違っていることにはきちんと否定しますから」

セドリックはおどけたように言った。

「それとキリコ」

「？」

「カン・ユーのことだが、奴も来ていたようだぞ」

「……………」

キリコはどうでもいいような顔をした。

「ここからは心して聞け。奴は4年前に起きたパルミス孤児院放火の張本人だ」

「!？」

さしものキリコも顔を上げた。

「ルスケ大佐！それは本当ですか!？」

「本当だ」

ロツチナは断言した。

「ですが、なぜ孤児院を？」

「当時、帝国各地で遊撃士ギルドが襲撃される事件が相次いだ。軍や憲兵隊は血眼になって犯人グループ摘発に乗り出した。そんな中、愚かにもカン・ユーは全く無関係の孤児院をアジトだと思ったそう

だ」

「ふざけてんのか……!」

「頭ん中に生ゴミでも詰めてんじやない?」

「それからどうなったんだ?」

「放火を行った部下が内部告発した。良心の呵責に耐えかねてのことうかはいいが。奴は逮捕され、秘密裁判にかけられた。その後へイムダル監獄に収監され、死刑を待つ身だった」

「これも隠蔽ってわけ?」

サラはジト目を向ける。

「さすがに影響が大きいのでね」

ロツチナは落ち着きをはらう。

「で、そいつは?」

「処刑されたよ。8月1日にね」

「8月1日?」

「それって……」

「ん?」

「まさかつ!」

ミュゼはロツチナを見る。

「そのまさかさ。キリコの処刑の数日前に薬で眠らせ、裏社会で行われている整形手術を施し、処刑に合わせて目覚めさせる。これでキリコ・キュービーは公的に存在しなくなったというわけさ」

「……………」

キリコは頭痛を覚えた。

「そんなことが行われていたとはな」

「とりあえず、無実の方が犠牲にならなくて何よりです」

「ま、本物のキリコが生きてて良かったよ」

ミュゼとシャーリイは喜びを口にした。

「それとシュバルツァー」

ロツチナは真剣な目を向ける。

「悪い知らせだ」

「っ！なんですか？」

「今日未明、飛行挺が何者かにハイジャックされた」

「飛行挺が？」

「そして、飛行挺はアイゼンガルド連邦に降り立ったとのことだ」

「アイゼンガルド連邦に……」

「それとほぼ同時に、衛士隊が中隊が編成され、ユミルに侵攻しようとしている」

「なんですって!?!」

「そんな!?!」

リインとエリゼは驚愕した。

「衛士隊の主張としては、ユミルの住民が飛行挺の乗客を人質にとった。その黒幕はシュバルツアー男爵と灰色の騎士だそうだ」

「なっ!?!」

「その乗客というのは？」

「名簿にはハイアームズ侯爵やイーグレット伯爵夫妻といった穏健派貴族の名前があった」

「ハイアームズ侯が……」

「ミュゼのおじいさんおばあさんも……」

「教官!」

「わかってている。おそらく、俺や父さんに罪を擦り付けて動きを封じるのが狙いだろう」

「絶対に止めないと!」

「だが、どうする？全員で行けば事が大きくなるだけだ」

「ルスケ大佐。衛士隊は今どちらに？」

「ルーレに集結しつつある。だが付け入る隙はある」

「隙？」

「そこからは自分たちで考えたまえ」

ロツチナは記憶の部屋を出て行った。

「えらいもん放り込んでいってくれやがったな」

「まさか教官の故郷が……」

「とにかく、対策を考えましょう。ラインさん」

「はい。入浴は少し遅くなりませんがよろしいですか」

「こんな時にお風呂なんか入れませんよ」

「さっそく始めましょう」

ラインたちは人質救出&ユミル防衛の作戦を立てることになった。



### 第三章 相克篇 鬼気

七耀暦1206年 8月19日 早朝

二代目VII組は一足先にエリンの里の空き地に集まっていた。

「こ、これって……」

「僕たちがクロスベルで戦った魔煌機兵に似ているが……」

「……………」

キリコを除く二代目VII組はいつの間にか置いてあつた蒼い機甲兵に驚きを隠せなかった。

もつともキリコは、ロツチナが置いていったものだということを知り、ローゼリアから知らされていた。

「キリコさん……もしかしてこれは……………」

「フェンリール。黒の工房で造られた実験用機甲兵だそうだ」

「フェンリール……確か北方の神話に登場する魔獣の名前ですね。

神をも殺める牙を持つとされています」

「牙ねえ。確かに左腕はゴツいけどよ」

「それより、あれって魔煌機兵じゃないの？」

「お前たちが見たのは装甲に細工を施した、言わば紛い物だ」

「紛い物……」

「……私たちは紛い物に大敗したということですか」

「お前たちがそう思うならそういうことだな」

「うう……はつきり言うわね」

「総合力と継戦能力ではフルメタルドッグは勿論、現行の機甲兵のそれを上回る。ついでにリミッターも最初から外してあつた。いくらか経験を積んでいようとも、万が一にも敗けることはない」

「てんめつ……………」

「ですが、事実であるのは否めないかと……」

「夕べ見たキリコの前世もそうだが、今の僕たちと圧倒的な差がある。この機甲兵の総掛かりでも敵わないだろう」

クルトはフェンリールとフルメタルドッグと共に並ぶドラツケンⅢ・プロトタイプ、シユピーゲルSS試作型、ヘクトル弐型・改、ケストレルβⅡを眺める。

「でも諦めたわけじゃない。いずれ、キリコに比肩できるくらい強くなってみせるさ」

「勿論、あたしもよ！」

「負けっぱなしは我慢ならねえんでな」

「キリコさんのお隣は私の定位置ですの♥？」

「ミュゼさんだけは違うような気がします……」

二代目Ⅶ組はさらなる研鑽を誓った。

「……………」

キリコにはその姿勢が羨ましくも感じた。

「そういうえば、キリコ君はどっち使うの？」

「……おそらく今回はあのクロウ・アームブラストと蒼の騎神との戦闘になるだろう。実力を考慮すると、フェンリールだろうな」

「それにしても、フェンリールというのは凄そうだな」

「キリコさん。もしかしてあの爪は……」

「ああ。ゼムリアストーンでできているらしい」

「ゼムリアストーン……！」

「ヴァリマールの太刀にも使われている伝説の鉱石ですね」

「コストもばかにならないでしょうに、よく開発できましたね」

「言っておくが、俺は設計にも開発にも一切関わっていない」

「そうなのか？」

「ロツチナとシユミット博士は間違いないだろうがな」

「容易に想像できるわね」

ユウナはげんなりとした表情を浮かべる。

（それに、全てが終われば即座にスクラップにするつもりだしな）

「キリコさん？」

「どうかしたのかよ？」

「何でもない。それより、来たようだ」

キリコの視線の先には、初代Ⅶ組らが歩いて来た。

「すまない。待たせた」

「いえ、大丈夫です」

「とにかく、これで全員揃いましたね」

「まず、魔の森を抜けてエイボン丘陵に出よう。そこに迎えが来る  
手筈になっている」

ガイウスはⅦ組メンバーに向けて言った。

「迎え、ですか？」

「……なるほど、星杯騎士と言えればあれね」

「あ？知ってんのか？」

サラの物知りようにアツシユは聞き返す。

「ま、自分の目で確かめることね」

(何かあるようだな)

「そろそろ出発しよう。アルティナ」

「了解しました」

アルティナは機甲兵を収束させる。

「こうやって運んでいたのか」

「あ、そっか。キリコ君は知らなかったんだっけ」

「というより、この一ヶ月間お前たちが何をしていたかも知らない」

「そういえばその辺りの説明をしてなかったな」

「では、僭越ながら私の方から説明させて頂きます」

ミュゼが説明役を名乗り出た。

キリコは魔の森を歩きながらⅦ組の足跡を聞いた。

「里で目覚めた後、サザーラント州に向かい、ハーメルの廃村で西風の旅団と交戦。次にラマール州へ行き、オスギリアス盆地で鉄血の配下に宣戦布告。そしてクロスベルか」

「猟兵王や鋼の聖女から動いていたことは聞いてはいたが、よく無事だったな」

「いや、それを言うならむしろ君の方がよく無事だったな」

「まさかノーザンブリア州にまで行っていたとは」

「D∴G教団……あの外道共のロッジがあつたなんてね」  
サラは腕を組んだ。

「それにユミルにも行っていたんだ」

「話を聞く限り、内戦の時に顕れた霊窟とは別物のようですね」

「その翌日、黒竜関に出向いてほとんど一機で陥落させたそうですが……」

「帝国時報では、オーロックス砦解放作戦と銘打って第五機甲師団による功績だと報じられていたんだが、間違いないなくあのルスケ大佐が裏から手を回したんだろうな」

マキアスは先日読んだ内容を思い返す。

「黒竜関襲撃は謎のテロリストによる自爆テロだと報じられていたわ。実際犯行に使われた機動兵器は不明、というかここにあるんだけど……」

アリサは複雑そうな表情を浮かべる。

「混乱や闘争をもたらすことで呪いの根源を引きずり出すためというのはわかった。だがキリコ、それでは君は……」

「世界最悪のテロリスト、というレッテルが貼られることになるな」

「だったら……!」

「こうなることは最初から覚悟の上だ」

「キリコさん……」

「どうにも……ならないのか……?」

「どうにもならないな。それが俺の運命なら」

『……………』

VII組は沈黙に包まれる。

しばらく歩き、VII組は石碑の前に到着した。

「これは里の空き地にあつた物と同じか」

「ええ。この石碑はエイボン丘陵に繋がっているんです」

「ちなみにもう一つはイストミア大森林に通じているわね」

「そうか」

「あんたねえ、もう少し何かリアクションはないわけ?」

「まあまあ」

ミュゼがセリーヌを宥める。

「では、参ります」

エマの一言と共に、キリコの視界は一瞬真っ白になる。

その直後には、景色が変わっていた。

「ここがエイボン丘陵か」

「キリコ君は来たことはあるの？」

「ない。話には聞いたことはあるが」

「岩が風化などの影響を受けて、長い時間をかけて姿を変えた物は

エイボンの奇岩と呼ばれていますね」

「まさに自然の奇跡だな」

「それにしても、本当に広いな」

「導力バイクを受けて走らせたらさぞや気持ちいいだろうな」

「ああ。つと、どうやら先客が来たな」

Ⅶ組の目の前に魔獣の群れが駆けて来た。

「迎えとやらが来るまでの暇潰しにはなりそうだな」

「数は多いけど、私たちならやれる」

「行きましょう、教官！」

「よし！Ⅶ組総員、戦闘準備！」

『おおっ！』

Ⅶ組はそれぞれに分かれ、戦闘を開始した。

「螺旋撃！」

「ジェミニブラスト！」

リインとユウナのクラフト技が大型の猪型魔獣を撃破する。

「行くぜクルト！」

「ああ！」

アッシュとクルトが狼型の魔獣の群れを連携で一網打尽にする。

「ブルーアセンション！」

「カルバリーエッジ！」

ミュゼとアルティナのアーツがドローメの群れを一掃する。

「アーマープレイクⅡ」

キリコのクラフト技がアーツの余波を受けた怪鳥型魔獣を撃ち落とす。

「相変わらず強いな」

「私たちもそれなりにレベルアップしているはずなのですが」

「本当に遠い背中ね……」

「無駄口を叩いている暇があるなら次に対処しろ」

「キリコの言うとおりだ。まだまだ来るぞ！」

「わかってるっつの」

「では、第二部と参りましょう」

リインたちは襲いかかってくる魔獣の群れを次々と倒していく。

その光景に痺れを切らしたのかは不明だが、小型の猪型魔獣が群れを成して接近してきた。

「フレア・デスペラード」

間髪入れず、キリコはSクラフトで振り返りにした。

これを最後に、魔獣の群れは完全に全滅した。

「終わったか」

「はあ…はあ…：…なんとかあったね」

分かれていた初代Ⅶ組メンバーも集まる。

「ユウナたちは勿論だが、キリコも強くなっているな」

「確かに。以前より洗練されているね」

「相当な修羅場を潜り抜けているだけあるわね」

「やっぱり、普通にしても強くなれないのかな？」

「なんなら、今からグレンヴィルにでも力チコミかけるか？」

「極端過ぎます」

「下手したらテロリストの汚名を被ることになるぞ」

(必要なら俺が出ればいだけだがな)

キリコは腕を組み、そう思った。

「来たか」

ガイウスが空を見上げた。

その直後、何もない所に飛行艇が現れた。

「ええっ!？」

「急に現れた!？」

「そ、それよりあれって……!」

「七耀教会の紋章……」

「守護騎士に与えられる専用の飛行艇……《メルカバ》だったかしら？」

「ええ。サラ教官もご存知か」

「星杯騎士とは縄張り争いになることもあるのよ。勿論、基本的には共闘関係だけだね」

「なるほど……」

話を聞いていたラウラは頷いた。

「当面の移動手段というわけか」

「そういうことになる。とりあえず、全員乗ってくれ」

ガイウスはⅦ組と共に、メルカバに乗艦した。

「ようこそ、メルカバへ」

ブリッジで待っていたのはシスターのロジャーヌだった。

「久しぶりだな、ロジャーヌ」

「リインさんもご無事で何よりです」

「メルカバにいるってことは、あんたがガイウスの副官なの?」

「いえ、ウォーゼル卿は守護騎士を叙任して日が浅いので、私がライサンダー卿の元から出向という形で乗艦しているんです」

「彼女には色々と助けてもらっている。勿論、皆にもな」

ガイウスの言葉に他の星杯騎士たちも頷く。

「すごいですね、ガイウスさん」

「うん。僕たちも想像してなかったよ」

Ⅶ組は仲間の、或いは先輩の姿にため息が出る。

「キリコさん、お久しぶりですね」

ロジャー又はキリコに話しかけた。

「ロジャーとも会っていたのか？」

「ブロン通りに身を潜めていた時に。騎士団の副長とも会っていません」

「ブロン通り……」

「まあ隠れるにはうってつけだろうが……」

エリオットとマキアスの表情が暗くなった。

「お二人は知ってるんですか？」

「ユウナが知らないのも無理ないかもね。帝都市民なら誰もが知っている区画だよ」

「 Heimダルの掃き溜めなんて言われるくらいの悪所でね。ブロン通りを訪れば未解決事件も解決するなんて言われてるんだ」

「そ、そんな場所があるんですか……」

ユウナはため息をついた。

「その話はいずれ聞くとして、そろそろ出発しよう」

「わかりました。場所はブリオニア島ですね」

「ああ」

ガイウスが艦長席に座り、ロジャー又は星杯騎士たちに指示を飛ばす。

「メルカバ………発進！」

ガイウスの号令と同時に、メルカバはブリオニア島に向けて発進した。

「キリコ side」

ブリオニア島に着くまでの間、俺は得物のチェックをしていた。

まさか工房まであるとは思ってもみなかった。

「キリコさん、こちらに居られたんですね」

「ずいぶんと熱心なんじゃない？」

エマ・ミルステインとセリーヌがやって来た。

「ブリオニア島は独自の魔獣の巣になっている。その上クロウ・アームブラストが待っている。戦いになるのは火を見るより明らか



だ」

「そのための準備ですか」

「……なんなら、その魔導杖も見ておくが？」

「良いんですか？」

「こちらはほとんど終わっているからな」

「すみません、お願いしていいですか」

「わかった」

俺は魔導杖のチェックに取りかかる。

目立った不調は見受けられなかった。これなら問題はなさそうだな。

「問題ない」

「ありがとうございます」

「なかなか器用じゃない？」

「こんなことぐらいしか出来ない」

「なら、向こうもどうにかしてあげれば？」

セリーヌの視線の先にはユウナが立っていた。

「どうした？」

「えっと……キリコ君……あたしのも見てくれる？」

「見せてみる」

ユウナからガンブレイカーを預かる。

「……………」

あまり手入れをしていないようだ。

「……手入れくらいきちんとしてろ」

「ギクツ……」

「いぎという時、泣きを見るぞ」

「はい……」

「特にお前の得物は銃器としての面を持つ。手入れを怠れば照準は間違いなく狂う。肝に命じておけ」

「うう……すみません……」

どうやらぐうの音も出ないようだ。だが整備不足が原因で命を落としたなど、笑い話にもならない。

「そっちは良いのか？」

ユウナの後ろにいたミュゼに聞いた。

「すみません、私もお願いします」

ミュゼから魔導騎銃を預かる。

こちらは手入れを怠っていないようだ。

「……問題ない」

「ありがとうございます」

「ミュゼはちゃんと手入れしてるのね」

「はい。何かあつた時には大変ですから」

「そっか、そうだよね」

ユウナもわかつてくれたようだな。

その後、俺はメルカバのラウンジで到着を待った。

その間、リイン教官とクルトとマキアス・レーグニッツとコーヒーを片手に雑談していた。

「キリコ side out」

メルカバはブリオニア島西側の海岸に着陸した。

「着いたな」

「二ヶ月ぶりくらいですね」

「あの時はミリアムさんを追って島に上陸したんでしたね」

「アル……」

「大丈夫です。それはそうと、クロウさんはどちらに？」

「おそらく、あそこだろうな」

リインは陽霊窟のある方角を指さす。

「教官？」

「分かるんですか？」

「なんとなく、だがな」

「なんだそりゃ？」

「やはり、贄であるリインさんは感じるんですね？」

「ああ……」

リインは腰に差した太刀を握りしめる。

「とにかく、行きましょう」

「そうですね。おそらく、クロウさんだけじゃないはずです」

「あの鉄機隊の三人も一緒でしょう」

「覚悟はできてます」

「行こうぜ」

「……………」

二代目Ⅶ組は顔を上げる。

「よし。行こう！」

Ⅶ組は陽霊窟目指して歩き出した。

「あれは……………」

一行の目の前には魔獣の群れが待ち構えていた。

「ここで倒すしかなさそうだな」

「チッ！面倒な……………」

Ⅶ組は得物を構える。

「……………待ってくれ」

リインが待ったをかける。

「リイン……………」

「どうかしたのか？」

「……………試すには絶好の機会だと思ってね」

「!?まさか……………」

「鬼の力を……………」

「だ、大丈夫なんですか……………!?」

「里で修復したペンダントがあるからある程度は抑え込めるかもしれないわ」

「ですが、それ以上は……………」

「わかっている。だが、ここで怖れていては前には進めない。頼む

……………」

「教官……………」

「……………わかりました。ですが、無理と判断した場合は止めます」

「すまない……………」

リインは太刀を正眼の位置に構える。

「鬼気解放!!」

リインは鬼の力を解放する。

「行くぞー!」

戦闘が開始された。

「滅・緋空斬!」

リインの太刀から赤黒い斬撃が飛ぶ。鬼の力も手伝ってか、その威力は通常時を上回る。

魔獣の何体かは、斬撃に飲み込まれる。

「滅・弧月一閃!」

赤黒い太刀が岩石型の魔獣に叩き込まれる。破壊を伴った太刀の一閃は魔獣を粉々にする。

「す、すごい……!」

「なんとという威力だ……」

「だが、これは……」

「はあっ!」

リインが近くにいた最後の魔獣を斬る。

「ぐっ……うおおおおっ!!」

鬼の力がリインの全身を覆う。戦闘は既に終わったが、リインは太刀を構えた。

「いけない!」

「暴走するのか!?!」

「キュ、キュリア!」

エリオットが治療アーツをかけるも、効果はなかった。

「そんな!?!」

「アーツでは効かないのか!」

「チツ! 止めんぞ!」

アッシュは得物を構える。

「シャアッ!」

「!?!」

リインは離れていたキリコに猛然と斬りかかる。

「なっ!？」

「キリコさん!」

「手は出すな」

キリコは大型ナイフを取り出す。そしてリインの太刀を受け止める。

「キリコ!」

「ここは俺がやる」

「キリコ side」

リイン教官は他には目もくれず、俺だけを狙っている。

リイン教官の鬼の力は帝国に撒き散らされた呪いに起因しているらしい。

となれば、ワイズマンに起因しているとも解釈できる。

俺だけを狙うのもそこら辺が関係しているのかもしれない。

ならば、俺が止める……!

「オオオオツ……!」

「ぐっ!」

鏢競り合いの形になったが、依然として劣勢だった。

「ホロ……ビヨ……!」

「お断りだな……!」

太刀を弾き、隙ができる。

その隙を狙って腹部に蹴りを入れる。

だが、リイン教官は自分から後方に跳んだ。ダメージはほとんど無  
いだろう。

「シヤアアアッ!」

リイン教官は再び斬りかかって来た。

(得物さえ奪えば……!)

俺はリイン教官に接近し、振り下ろされる前に腕を掴み、万力の力を  
込める。

「グウツ……!」

さすがに痛みを感じたのか、太刀を手離した。隙を突いて、そのまま教官を投げ飛ばす。

「ハンタースロー」

矢継ぎ早にナイフを投げる。

これはかわされたが、一気に距離を詰めて、大型ナイフで斬りかかる。

剣士なら得物を失った時点で勝負は決まったようなものだ。

だが俺はその認識は間違っていたかと思ひ知らされた。

「餽潰拳!!」

リイン教官は黒いオーラを纏った掌底突きを放ってきた。

咄嗟に腕を交差させてガードしたが、突きの重さに後方へと吹っ飛ばされる。

「八葉一刀流・八の型《無手》……!」

ラウラ・S・アルゼイドの眩きが聞こえた。

どうやらリイン教官の扱う八葉一刀流とやらには、徒手空拳の心得があるらしい。

やむを得ず、俺はアーマーマグナムを構える。

「グツ……!ウオオオツ……!」

すると突然、リイン教官が苦しみ出した。

「教官!」

「鬼の力に抗っている……!?!」

「今だ、エマ!」

「はいっ!」

エマ・ミルステインとガイウス・ウォーゼルが魔術と聖痕の力でリイン教官を正気に戻す。

色々と疑問が残るが、とりあえず終了だな。

「キリコ side out」

「キリコさん!大丈夫ですか!?!」

ミュゼがキリコに駆け寄る。

「俺はいい。それより教官は？」

「なんとか落ち着いたようです。本当に大丈夫なんですか？」

「問題ない」

キリコは立ち上がり、リインに近づく。

「キリコ、すまない……」

「気になさらず。それより、あれは？」

「八葉一刀流・八の型《無手》。得物を失った時に行う技き……かつてユン老師に徹底的に叩き込まれたんだ。だが……」

「？」

「それは決して教え子に向けるためじゃなかったはずだっ……！」

「リイン……」

「皆にもすまない。もうこの力は絶対に使わない。それは約束する」

『……………』

VII組は言葉をかけることが出来なかった。

「……………」

キリコは腕を組み、何かを考えていた。

その様子を高台から見つめる者たちがいた。

「つたく、一度のまれたくらいでビクつきやがって」

「仕方ないでしょう。それにしても鬼の力、あそこまではね」

「シユバルツァーは北方戦役の折り、制御が効かなくなり、力を抑え込んでいたそうだが」

「フン。ただの先延ばしでしょうに」

「とりあえず、あいつらが来るのを待つ。そのときに決着つけてやりやあい」

「特に誰かさんには色々と返すもんもあるしな」

「……本当に良いんですの？」

「ん？」

「どちらが勝つにせよ、貴方は……」

「いいや、違うな」

「え？」

男は刃が二つ付いた武器を担ぐ。

「勝つのは……あいつさ」

リインは全員に詫びた後、太刀を拾いに行つた。

「それじゃ、行こうか——」

「帰らせてもらう」

『!?』

突然のキリコの言葉にⅦ組に動揺が走る。

「キ、キリコ君!」

「じよ、冗談を言っている場合じゃ……」

「冗談なんか言っていない」

キリコは毅然としていた。

「なぜだ?ここまで来て」

「いちいち言わなければわかりませんか?」

「っ!」

リインはキリコの言葉に押し黙る。

「……ビビって腰引けた教官様には従えねえってか?」

アツシユが前に出る。

「……そうだな」

「へッ、こういう時は気が合うな」

「俺が……ビビっている……?」

リインは何を言われているのか分からなかった。

「鬼の力というのはあんた自身の力だろう」

「……」

「その力に怯えたままこの先の戦いに勝てるのか?」

「……」

「そんなに怖いか?」

「え……?」

キリコは一呼吸置いて言った。

「……ミリアム・オライオンの二の舞が」



「っ！」

リインは両の拳を握りしめる。

「今のままなら、確実に同じ事が起きる。それが初代Ⅶ組か二代目Ⅶ組か、それとも両方か」

「いずれにしても、あんたが原因になるのは目に見えているが」

「ちよつと！キリコ君！」

「黙っているろ」

キリコは憤慨するユウナを制した。

「どうなんだ？」

「……………怖いさ」

リインは震えながら答える。

「あの時、俺は力にのまれて……………ミリアムを見殺しにしてしまった……………。今だつてそうだ……………俺は……………また……………」

「教官……………」

「……………見損なうな」

「え……………？」

「何カ月あんたの下で学んだと思っている」

「キリコ……………」

「あんたは言ったはずだ。教官と生徒というだけでなく、仲間として共に汗をかき、切磋琢磨していこうとな」

「それって……………」

「僕たちが初めて会った時の……………」

「この言葉は協力して障害に立ち向かえとも読み取れる。それを最初に言い出したあんたが守らないと言うのか？」

「あ……………」

「そ、そうですよ！こういう時こそ、みんなで立ち向かうべきですよ！」

「二人で抱えこまないでください。それに、ミリアムさんだって、見殺しにされたとは思っていないはずです」

「……………」

二代目Ⅶ組の言葉にリインは顔を伏せる。

「それは我らとて同じだ」

「僕たちだってⅦ組の仲間でしょ？」

「どんな難題だって僕ら全員で乗りこえてきただろう」

「そんなことも忘れたか」

初代Ⅶ組もリインに声をかける。

「……………」

リインは一言も発しないまま下を向いた。

『もうぐぐ、しつかりしなよ！』

『え!?!』

突然、輝く根源たる虚無の剣が現れ、懐かしい声が響く。

「これは……………」

「根源たる虚無の剣が……………」

「いや、それよりこの声は……………」

『ミリアム!!』

『そうだよ!ボクだよ!』

「ど、どうして……………」

『どうしても何も、この剣はボクの魂そのものから出来てるからね。』

よーやく意識を取り戻せたんだ』

「なんだそりゃ……………」

「この……………阿呆が……………」

ユーススは拳を握りしめる。

「ミリアム……………その……………」

『あつ、それよりリイン?ボクを見殺しにしたとか言ってたけど、何言ってるの?』

「え……………」

『ボクはリインやアーちゃんを守りたいから黒の聖獣に飛び込んだんだよ。リインの言うようなことなんか何一つしてないよ?』

「それは……………」

『ボクは剣になっちゃったけど、みんなを守れたってだけで嬉しいんだよ』

「ミリアム……!」

『だから……負けないで』

「ああ………ああっ!」

リインは涙を流しながら頷く。

『えへへ……あつ、ごめん。そろそろ限界かな……』

根源たる虚無の剣は輝きを失う。

「ミリアム……」

リインは根源たる虚無の剣を握りしめる。

「……すまない、キリコ。また君に教えられた」

「気になさらず。それに……」

「?」

「俺が言えた義理じゃない」

「キリコさん……」

「つたく。めんどくせえんだよ、てめえは」

「まあまあ。教官も大丈夫ですか?」

「……確かなことはまだ言えない。とにかく、クロウに会ってみよ

う。多分それが……」

リインは根源たる虚無の剣を腰に差す。

「贅である俺がやるべきことなんだろう」

「わかりました」

「僕たちもお供いたします」

「勿論、俺たちもな」

VII組も頷いた。

「それとキリコ、君に頼みたいことがある」

「なんです?」

「これをしばらくの間、預かってほしい」

リインは愛用の太刀をキリコに渡した。

「なぜ俺に?」

「俺がそうしたいと思ったからさ。それじゃ不満か?」

「……わかりました。ですが、もし同じようなことがあれば」

「ああ。その時は遠慮なく叩き折ってくれて構わない……!」

リインは毅然と答えた。

「リイン……」

「それが、リインの覚悟か」

「……………」

キリコは一旦アルティナにフェンリールを出してもらい、太刀をコックピット内に無造作に置いた。

「それじゃ、行きましょう」

「ああ、行こう」

(蒼の騎神と蒼の騎士……内戦では幾度となく聞かされた名前。その実力は半端ではないはずだ。なぜ精霊窟を指定してきたかはわからないが、おそらく、オズボーンの言っていた闘争というのに関係があるのだろう。ならばやることは変わらない)

VII組は陽霊窟目指して歩き出した。

『まったくもう、世話がやけるなあ。でも、もう大丈夫かな』  
根源たる虚無の剣に宿るミリアムの思念はそう呟いた。

## 第一相克①

VII組一行は陽靈窟に到着した。

「着いたね」

「この先にクロウが待っているのか」

「でもどうして、わざわざ精靈窟に呼び出したんでしょね?」

「その答えを、クロウが持っているんだろう。エマ、何か感じるか?」

「そうですね……」

エマは意識を集中させる。

「……………」

「どうですか?」

「……霊窟内に幾つか大きな気配を感じます。その内の一つが……」

「蒼の騎神、というわけか」

「アルティナ、機甲兵は?」

「大丈夫です」

アルティナは機甲兵を出現させる。

「二応、全て持ってきていますが、絞る必要がありますね」

「ヴァリマールは当然として、後二機はいるな」

「教官、蒼の騎神とはどういう?」

「そうだな……」

リインは顎に手をやる。

「蒼の騎神……オルディーネはダブルセイバーと呼ばれる中世暗黒時代の得物を巧みに操る。さらに飛翔能力にも優れているのが特徴だな。後……」

「後?」

「オルディーネには第二形態というものが備わっている」

「第二形態?」

「今のヴァリマールのようにですか?」

「そこに至った経緯まではわからないけどな」

リインは腕を組み、かつての出来事を思い出す。

「宰相の狙撃と同時に帝都が占領され、それと前後してトリスタが貴族連合軍に襲撃された時があったんだ」

「帝国時報で読んだぜ。今のツールズ本校は貴族に従わねえってんで、貴族連合軍が占領。住民も教官もまとめて軟禁されてたってな」

「だいぶ穿った見方だが、まあそういうことだな」

アッシュの発言にマキアスは呆れながらも同意した。

「あの日、俺たちは初めて機甲兵を目の当たりにした」

「僕もパルムで見ましたが、圧倒されました」

「貴族連合軍の侵攻を食い止めるべく、俺たちは生身で機甲兵ドラッケンに立ち向かったんだったな」

「生身で!?!」

「無謀過ぎます……」

「何とかドラッケンは食い止めたんだよね」

「食い止めたのかよ!?!」

アッシュは仰天した。

「だがシユピーゲルには敵わなかったのだ。機体に搭載されていたリアクティブアーマーのせいだな」

「ホント、厄介なもの作ってくれたわね……」

アリサはため息をついた。

「えつと……機甲兵はアリサさんの実家で作られたんですよね?」

「そうか。ユウナは知らなかったんだな」

「ラインフォルトと一口に言ってもそれぞれ部門別に別れているのよ。たとえばARCSUS関連は会長直轄の第四開発室と言った具合にね」

「そういうえばアリサさんは第四開発室長でしたよね!」

「あはは……そんなに偉い立場じゃないんだけど。問題は開発に携わった第一開発室が貴族派寄りで、しかも第五開発室が完全に取り込まれていたってことなの。彼らは鉄鉱石の横流しを行ってフレームや装甲に必要な鋼鉄を揃えたのよ」

「横流し……叔父の主導によってですね。実行していたのはログナー侯と領邦軍によるものでした」

「確か、アハツエン2千台分だっけ？」

「なっ!？」

「に、2千台分!？」

「当時、ラインフォルトが開発した新型戦車ですね……」

「ううん、実際はそれ以上の数よ」

「あり得ねえ……」

「……」

二代目Ⅶ組が圧倒される中、ミュゼは申し訳なさそうに俯く。

「ミュゼさん……」

「貴女が気にすることではない」

「はい……ありがとうございます……」

「そうよ。だいたい母様だって気づいていて放っておいたんだから」

「ほ、放っておいた……?」

「どんな形であれ、ラインフォルトの利益につながることは変わらないからよ……」

アリサはため息混じりに言った。

「な……」

「聞きしに勝るビジネスライクですね」

(それでもなければ巨大資本のラインフォルトを動かすことも出来ないんだろうな)

「……話が脱線したな。こちらの攻撃が一切通らず、俺たちは諦めかけていた。その時、頭の中に声が響いた。『汝、力を求めるか』とな。

そして俺はあいつを呼び出した」

「それが、灰の騎神ヴァリマル……」

「ああ」

「ただの騎士人形かと思ったら、ラインが乗り込んで本当に動きだしたんだからな」

「あの時の衝撃は未だに忘れられん。帝国に伝わる巨大な騎士の伝承そのものだったからな」

「そんな伝承があるんですか？」

「帝国の伝承の中でもお伽噺と類されるもの。今思えば、それは騎神のことだったんですね」

「詳しくはおばあちゃんが知っているはずですよ」

「伝承のことは分かったが、教官はどうなった？」

「ああ。ラインが呼び出した直後に、シユピーゲルを撃退したんだったな」

「現代における、初の人型機動兵器同士による戦闘……」

「確かあの時、ヴァリマールは武器すら持っていなかったんじゃないか？」

「素手で機甲兵を倒したということですか!？」

「先ほどの徒手空拳か」

「ああ。その通りだ」

ラインは頭を掻きながら言った。そこからすぐに真顔になった。

「その後、オルディーネに乗ったクロウが現れた」

『っー』

二代目VII組の表情が引き締まる。

「そしてその時初めて知ったんだ。当時、帝国政府が血眼で探していた、帝国解放戦線リーダー《C》の正体がクロウ・アームブラスト本人だということに」

「帝国解放戦線……通商会議の時にオルキスタワーを襲った……」

「それは帝国解放戦線幹部《G》こと、ミヒヤエル・ギデオンですね」

「やっぱり知っていたんだな？」

「はい、視えていました。そして、2年前の夏至祭でその方が姫様やエリゼ先輩を拐い、あろうことか人質に取ることも……」

「そうか……」

「君が気に病むことじゃない」

「すみません……」

ミュゼは再び俯く。



「それはそうとよ、あんたあの蒼の騎士と戦ったのかよ？」

「ああ、戦った」

「武器はどうしたんだよ？」

「わざわざ機甲兵用のブレードを投げ渡してくれてな。何とか膝をつかせる所まではいったんだ」

「勝ったんですか！」

「いや……」

リインは首を横に振る。

「……第二形態とやらか」

キリコは頭の中で整理した結論を口にした。

「さすがに分かるか。勝ったと思った矢先、オルディーネは第二形態に変化した。そしてたった一撃で敗北したんだ」

「たった一撃で……」

「まあ、俺が乗ったばかりなのに対して、向こうは3年以上乗り回しているそうだからな。地力の差があったんだ」

(確かに3年以上の差はデカイな)

「でも、最終的にはヴァリマールが勝ったんですよ？」

「ああ。煌魔城の最上階でな」

リインは物言わぬヴァリマールを見つめる。

「さあ、そろそろ切り換えよう。クロウだけじゃなく、鉄機隊も待っているはずだ」

「ここからは死地ですね」

「覚悟はできています」

「あの男からも色々聞くこともある」

「トワ会長の元にも連れてかなくちゃ」

VII組も気持ちを引き締める。

「キリコも大丈夫か？」

「無論だ」

キリコもアーマーマグナムに弾丸を装填する。

「ちつとは動揺したらどうなんだよ」

「そんな暇はない」

「スイッチの切り換えが速すぎないか？」

「かもな」

「やっぱリクールでドライね……」

「おそらく、そういう風に自身を律してきたのかもしれない」

（でも、それでは……）

「よし、では——」

「リイン、忘れているぞ」

ラウラが待ったをかける。

「そうだね」

「いつものアレがないと」

「さっさと済ませるがいい」

「……ああ、わかった」

リインは前に出て、Ⅶ組の方を向く。

「トールズⅦ組、これより陽霊窟へ突入する。この先に待っているのは蒼の騎神と鉄機隊、命のかかった戦いだ。みんなでこの死地を乗りこえるぞ！」

『おおっ!!』

Ⅶ組は陽霊窟に入った。

「よお、待ってたぜ」

クロウは腕を組み、立っていた。

「すまない。少し遅くなった」

「つたりまえだ。つーか、入り口の真ん前で何こつ恥ずかしいこと暴露してくれてんだよ」

「実際本当のことだろう？ 留年ギリギリで泣きついたことも、後輩から50ミラくすねたことも」

「泣きついた？」

「あいつ、サボり過ぎて単位不足で落第寸前の所をあたしに泣きついてきて、Ⅶ組に一時編入することになったのよ」

「うわ……」

「では、50ミラをくすねたというのは？」

「トールズ本校に入学したての頃、俺が持っていた50ミラでコイントスをやってな。両手に掴んだかと思えば、持っていた袋に落とされていたんだ。勿論、返してもらっていない」

「へえ？上手いこと企んだもんだな？」

「セ、セコい……」

「言われてるわよく、クロウ先輩？」

「笑いながら言うんじゃないよ！」

クロウは憤慨しながらも、キリコに視線をうつす。

「お前さんも久しぶりだな」

「……蒼のジークフリードか」

「だからよ、それはマジの黒歴史だから止めろっての」

「そう言う割には満更でもなさそうだったが？」

「目え腐ってんのかこの野郎！」

「死体に言われる筋合いはないな」

「死体とか言うんじゃない!!」

「……今ならあの世に帰るのを手伝ってやってもいい」

「上等だてめえ!!アストラギウスとやらに送り返してやるよ!!!」

真顔のキリコの挑発にクロウは怒りを爆発させる。

「キリコ君……」

「わざとやっているようにしか見えません」

「ま、喧嘩ってのは如何にてめえのペースに乗せるかどうかで勝ち負けが決まるもんだからな」

「確かに、ここまでの主導権は確実にキリコさんが握っていますね」

♪

「それで良いのか……?」

クルトは呆れるしかなかった。

「ゴホン、そろそろ宜しいでしょうか？」

クロウの後ろから鉄機隊の面々が歩いて来た。

「まったく、どいつもこいつも低俗な争いを」

「口喧嘩は完全にキリコ君のペースね」

「蒼の騎士殿、とにかく一旦落ち着かれよ。それでは話すら出来ぬ

ぞ」

アイネスは憤慨するクロウを諫める。

「……チツ、それもそうだな。どうせどちらかはいなくなるんだからな」

『!?』

クロウの一言にⅦ組は衝撃を受ける。

「どちらかはいなくなる、だと?」

「ど、どういうことだ!?!」

「……やはりそうなんだな?」

周りが動揺に包まれる中、リインは直感的に気づいた。

「リインさん……」

「贄であるが故に、ですね」

「ああ。そういうことみたいだ」

「……なんとなくは気づいていたみてえだな?」

クロウはⅦ組と距離を詰める。

「元々、騎神が巨イナル一から分かれてできた存在なのは知ってるな?」

「ああ。ローゼリアさんから聞いている」

「それが一つに戻ろうとしてるって言ったら信じるか?」

「え!?!」

「一つに戻る……?」

「……巨イナル一は二つの眷属の闘争の果てに精製された一つの鋼。それが再び現世に顕れるということでしょうか」

「ヴァイータから聞いたとおりの慧眼だな。ならこの闘いの結末も見えてんじやねえか?」

「さあ?どうでしょう?」

ミュゼは微笑んだ。

「本題はここからだ。七体の騎神が集まってもいきなり巨イナル一になるわけじゃねえ。そこに至るまでにはいくつかの手順を踏んでいく必要がある」

「手順……」

「……闘うんだな？最後の一体になるまで」

「ああ……」

リインの直感とも言える答えにクロウは頷く。

「そもそも巨イナルーは今で言う魔女と地精が争った末に出来ちゃった。そしてその時の闘争の記憶は本能という形で確実に受け継がれている」

(そして、その根本的な原因は……！)

キリコはクロウの話を聞き、目付きが鋭くなる。

「だから必要なのさ。騎神同士の殺し合いがな」

「で、でもっ！どうにかならないんですか!？」

「無理だ。全ての騎神とその起動者が揃った今、《相克》と呼ばれる闘いの火蓋は切って落とされた。これが騎神に関わっちゃまった者の定めだ」

「そんな……!」

「……」

周りが見えなくなる中、リインは顔を上げた。

「なら、煌魔城での闘いはどうなんだ？」

「ん？」

「煌魔城の最上階で俺とクロウは闘い、その後に魔王となった緋の騎神と闘っただろう。あれは相克とやらなんじゃないのか？」

「あん時はまだ金の騎神が目覚めてなかったからな。相克としてはノーカウントらしい。その証拠もあるしな」

「証拠？」

「……そろそろ時間切れだ」

クロウは唐突に話を打ち切った。

「クロウー」

「お話はここまでだ。それ以上が欲しけりや……!」

クロウはダブルセイバーを取り出す。

「……実力で来い、か」

リインは根源たる虚無の剣を抜刀する。

「きよ、教官……」

「リイン……クロウも……」

「いいんだな？」

「ああ。だが、このままフェードアウトなんてさせない。いい加減戻って来てもらおうぞ」

「言ってる。てめえらも覚悟決めろ！」

クロウはⅦ組に殺気を飛ばす。

「問答無用か……！」

「言われなくとも！」

Ⅶ組はそれぞれの得物を取り出す。

「私たちも参りましょう」

「心得た！」

「手加減は無用ね」

鉄機隊も得物を構える。

「二代目Ⅶ組は俺と！初代Ⅶ組は鉄機隊を頼んだ！」

『はいっ！』

『おおっ！』

相克の幕が開く。

「くらえやー！ランブルスマッシュⅡ！」

アッシュが飛びかかり、ヴァリアブルアクスを振り下ろす。

「甘いつつの」

クロウはそれをかわし、ダブルセイバーで薙ぎ払う。

「ぐおっ!？」

アッシュはたたらを踏む。

「アーマーブレイクⅡ」

その隙を突いて、キリコのアーマーマグナムが火を吹く。

「おっと！危ねえ危ねえ、まともに当たったら穴が開くどころじゃねえな」

クロウは弾丸をかろうじて回避し、頬の血を拭う。

「お返しさせてもらおうぜ！ネメシスバレット！」

クロウは武装をダブルセイバーから二丁拳銃に変え、発砲する。  
「これは……」

銃弾を掠めたキリコは、戦術リンクのラインが途切れていることに気づく。

「チッ！味な真似しやがる！」

「なら、シルバーソーン！」

「エアリアル！」

アルティナとクルトのアーツが叩き込まれる。

「うおっ!？」

「そこだ！業刃乱舞！」

クルトは踊るような剣技をくりだす。

「ブレイブスマッシュ！」

ユウナがキリコと入れ替わり突っ込む。

「気合いだけじゃな！」

クロウはユウナのクラフト技を回避した。

「教官！」

「二ノ型、疾風！」

リインがクロウめがけて斬り込んだ。

「悪いな。見えてるぜ！」

クロウは再びダブルセイバーに持ち替え、リインの太刀を受け止める。

「くっ!？」

「……チッ……!？」

リインと打ち合ったクロウは思わず舌打ちした。

(もう少し追い込む必要があるか……)

一方、初代VII組は鉄機隊と刃を交えていた。

「兜割り！」

「洗閃牙！」

アイネスのハルバードとラウラの大剣が激しくぶつかり合う。

「メデューサーアロー！」

「しまっ……っ！」

エンネアの矢を受けたエリオットは石化した。

「キュリアー！」

すかさずマキアスが治療アーツをかける。

「アークスライサー！」

同時にユースィスが斬り込む。

「甘々ですわ！」

デュバリイが盾で受け止める。

「豪炎剣！」

炎を纏った剣で反撃に出る。

「させるかっ！」

ガイウスが横から槍を打ち込む。

「チイツ！」

デュバリイは一旦下がる。

「もらった」

下がった位置にフィーが咄貫する。

「甘いな」

いつの間にか移動していたアイネスがハルバードをフィーめがけて振り下ろす。

「エクスクルセイド！」

「フレアバタフライ！」

アリサとエマが空と火属性アーツを放つ。

「っ！やるな……っ！」

アイネスはアーツをギリギリで防ぐ。

「アイネス！なら……っ！」

「させないわ！真・鳴神！」

サラはクラフト技をエンネアの足元に撃ち込む。これが効を奏し、エンネアの狙いが大きく外れた。

「さすがに一筋縄ではいきませんか……っ！」

「よく言う。数の差をもつともしないとは」

「執行者と同等と言われるだけあるわね……っ！」



「だが、俺たちも一歩も引くわけにはいかん」

「それはこちらとて同じこと！」

「いくわよ……！」

鉄機隊はさらに士気を高める。

「向こうも本気のようにすね……！」

「ならこちらもギアを上げるだけ……！」

「いくわよ！あんたたち！」

『おおっ！』

初代Ⅶ組も気合いを入れる。

「……どうしたよりイン？その程度か？」

「はあ……はあ……はあ……」

リインはクロウに追い詰められ、膝をついていた。

「きよ、教官……！」

「教官、か。大層な肩書きだな……でもよ！」

クロウはダブルセイバーを手に、息を切らせているユウナに斬りかかる。

「させない！」

クルトは双剣を交差させて受け止める。

「ほら、足元がお留守だ」

クロウは足払いをかけて、クルトを転ばせる。

「まず一人……」

「させません！オワゾーブルー！」

ミュゼがクラフト技を放つ。

「つと」

クロウはクラフト技をかわし、そのままカウンターを仕掛ける。

「ハンタースロー」

キリコはクロウの動きに合わせてクラフト技を放つ。

「おおっと！抜け目ねえな」

クロウはダブルセイバーを回転させて防ぐ。

「よそ見してんじゃねえっ！」

アツシユは大鎌で斬りかかる。

「してねえよ」

クロウは屈んでかわす。さらにアツパーカットでアツシユの顎を打ち抜く。

「ぐはっ!?!」

「ちまちまやっても面倒だな」

「っ！来ます！」

いやな気配を感じ取ったアルティナはクラウⅡソラスでガードを張ろうとした。

「遅えよ。クロス・リベリオン!!」

『!?!』

クロウのSクラフトが二代目Ⅶ組に直撃する。

「そ、そんな……」

「これが……蒼の騎士……」

「以前よりも強くなっています……」

「く、くそが……!」

「このままでは……!」

「……………」

二代目Ⅶ組は全員膝をつかされた。

「ま、力を出し惜しみする教官様の教え子なんざこんなもんか」

「出し惜しみ……?」

「ああ」

クロウはリインに目をやる。

「教え子共に渴を入れられたにもかかわらず、この期に及んで力を引つ込めてる有り様じゃあなあ」

「なんだと……!」

「俺を騙せると思うなよ。さつき打ち合った時、迷いを感じたからな。わかってんだろ?」

「迷い……?」

(鬼の力のことか)

キリコはクロウの言う迷いにあたりをつける。

「……………」

心の内を見透かされたのか、リインは剣を握りしめる。

「てめえの力はてめえ自身の問題だろうが。拒絶して、逃げて、先延ばしにしたところでなんになるんだ？」

(俺自身の……)

「いつまでもビビってんなら、仕方ねえ。こいつらを八つ裂きにするまでだ」

クロウは殺気と共にダブルセイバーを構え、二代目VII組を見据える。

「まずは……………」

「まずいつー！」

「ぼ、防御を……………」

二代目VII組は防御体勢を取ろうとする。

(そうだ、この力は…………)

「くらえやつー！」

クロウは斬りかかった。

「！」

キリコは大型ナイフを手に、立ちほだかる。

「キリコさん！」

「いけない！」

「くそおおおっー！」

ダブルセイバーの刃がキリコに迫る。

(これ以上、逃げてどうする！)

「！」

刃が迫る刹那、キリコは動きを止める。

(遅いぞ)

キリコの目の前には、鬼の力を解放したリインがダブルセイバーの刃を根源たる虚無の剣で受け止めていた。

「教官……………」

「間に合いましたか……………」

ユウナとミュゼは安堵した。

「リイン……」

「一時はどうなるかと思ったが」

「まったく、人騒がせな」

初代Ⅶ組も差異はあれど、リインの様子にほっとした。

「ちよつと！いつまでよそ見してやがるんですの!？」

「待つてたくせによく言うよね」

「神速殿もリインのことが心配だったのである」

「ば、馬鹿も休み休み言いやがれですわ！なんであのような男の心配などを……!？」

「顔に出ているぞ」

「デユバリイつてば、リイン君に惚れちゃった？」

「ブツた斬りますわよ!!」

デユバリイは顔を赤くしながら吼える。

「まあそれはともかく、さすがはツールズⅦ組ね」

「我らの攻勢を凌いだばかりか、打って出るとはな」

エンネアとアイネスは初代Ⅶ組を称賛した。

「……そちらもなかなかの腕前だ」

「数の差では私たちが有利でしたが、質はそちらが上でしたね」

「実際、危なかったもんね……」

「それに、星洸陣……だったかしら。連携力もあんたたちに分があつたわね」

「たとえ不利な状況に陥ろうとも、力を合わせれば貫けないものはない。それは俺たちが一番わかっていることだからな」

「ええ……。あなた方の強みはその絆の強さでしょう」

「そしてそれは彼らも同じ……」

初代Ⅶ組と鉄機隊は二代目Ⅶ組を見つめる。

「はああああっ!」

「はっ!やりやあ出来んじゃねえか!」

リインとクロウは互いに打ち合う。

「ああ、大分痛い所を突かれたからな！」

「なら遠慮はいらねえ！行くぜ！リイン！！」

「来い！クロウ・アームブラスト！！」

「剣戟はなお激しさを増す。」

「すごい……！」

「なんて剣戟だ……」

「ですが、このままでは……」

「また暴走すんのがオチだぜ」

「いや……」

「キリコさん？」

「ミュゼたちはキリコを見る。」

「顔つきが変わった。もう少し様子を見る」

「そんな悠長な……」

「ユウナは呆れる。」

「ですが、キリコさんのおっしやるとおりかと」

「確かに、今の教官からは迷いを一切感じさせない……」

「だが、武装は解除するな。アルティナ、いつでも撃てるようにして

おけ」

「了解しました」

アルティナはクラウⅡソラスの照準をクロウに合わせる。

「仕切ってんじゃねえよ」

アッシュはぶつくさ言いつつも、キリコに従った。

「へっ、なかなかやるじゃねえか」

「はあ……はあ……！」

「だがそろそろ時間だろ？」

「そうだな。だから……」

リインは根源たる虚無の剣を構える。

「この一刀で終わらせる」

「面白れえ。来やがれ、リイン！」

「おとおおっ！」

リンはクロウめがけて突っ込む。対するクロウも迎撃体勢を取る。

「灰の太刀・黒葉!!」

リンの全身全霊の一刀がクロウに直撃する。

「へへ……これで……」

クロウは笑みを浮かべ膝をつく。

## 第一相克②

「灰の太刀・黒葉!!」

リインは全身全霊の一刀にて、クロウから勝利を掴んだ。

「勝った……!」

「気を抜くんじゃねえ!」

「まだ鬼の力が!」

アツシユとアルティナが待ったをかける。

「くっ……ううう……!」

リインの身体を黒いオーラが侵食していく。

「リイン!」

「こ、このままじゃ……!」

「キ、キリコ……!」

「!」

リインはキリコ握りしめの方を向く。

「お、俺に……キュリ……アを……!」

「了解」

キリコはリインに治療アーツをかける。

治療アーツを受けると、リインを包んでいた黒いオーラは霧散していった。

「鬼の力が……」

「さっきはまったく効かなかったのに……」

「あんた……自力で抑えこんだっていうの?アーツでも対処出来るレベルに」

「はあ……はあ……!正直、賭けだったが、上手くいったみたいだな……」

「賭けて……」

「危険過ぎです」

「教官?またキリコさんに襲いかかる事態に陥っていたらどうなさるおつもりでしたか?」

微笑むミュゼの目はまったく笑っておらず、額に青筋が浮かんでい

た。

「いや……それはだな……」

「どうなんです？リイン・シュバルツァー教官？」  
さらに殺気も出ていた。

「……………教官はほとんど確信していた。仮に暴走したとしても、聖痕に魔女の秘術がある。目くじらを立てることじゃない」

見かねたキリコが口をはさむ。

「キリコさん……」

キリコの言葉を聞いたミュゼから殺気が消える。

（キリコ君ナイス！）

（変な汗が出てきました）

ユウナとアルティナは心の底から安堵した。

「無論早めに対処はするが、間に合わなければ力づくになる。それで良いなら」

「ああ。その時は任せるよ——」

「うし！そんなときは俺にもやらせろよな、キリコ」

「好きにしろ」

「いやあの——」

「それでいいのか。まあ、教官の自業自得だけど」

「ならば、我らも加わろう」

「二代目だけに押し付けるわけにもいかないしね」

「これでも痴漢撃退の護身術の心得くらいあるのよ？」

「えつと……」

「無論、僕たちもな」

「み、皆さん……やり過ぎは……」

「良いんじゃない？」

「……………」

リインは絶対に対策を講じることを決意した。

「とにかく、やりましたね」

「ああ、これで……」



「浮かれるのもそこまですておけ」

「んだよ、ノリ悪いな」

「様子がおかしい」

すると、キリコたちの足元が輝き出した。

「な、何これ!？」

「……まだ終わっていないということですか」

「……何となくは察してるみてえだな」

クロウは埃を払いながら立ち上がった。

「今までののは闘争の場を温める、言わば前座だ。そしてこつからが相克の本命だ」

「そ、そうか。相克というのは騎神同士の争い……」

「となれば……リイン」

「わかってる」

リインは根源たる虚無の剣を納刀し、拳を突き上げる。

「来い。灰の騎神、ヴァリマール!」

リインの呼びかけに、ヴァリマールが転移してきた。

「おい、後二人呼びな」

「二人?」

「お前の教え子は準起動者でもあるからな。多少なりとも関わられるみてえだ」

クロウの言葉とともに、Ⅶ組のARCUSⅡが淡く輝き出した。

「これは……!」

「ここにいる全員の意志を感じる……」

「ヴァリマールの力は完全には失われてはいないようね」

「よし、早いとこ決めよう」

「一人はキリコ君なのは決定として……」

「待て。なぜ俺を?」

「お前にとっても無関係じゃねえだろ」

「騎神誕生に関わっているという賢者。その謎を知ることがキリコさんにとっても私たちにとっても十分プラスになるかと思えます」

「あくまで推測ですが、相克の場がキリコさんに何らかの効果をも

たらず可能性があります」

「……………分かった」

ミュゼとアルティナの言葉を受け、キリコは出陣を了承する。

「ではもう一人を…………」

「私が務めさせていただきます」

ミュゼが名乗りを上げる。

「ミュゼさん？」

「あんだねえ、気持ちは分かるけど…………」

「いいえ。私はただ、当家所有の物を返していただきたいだけですわ」

「所有の？」

「ククク、そうくるよな」

ミュゼの言葉にクロウは嗤う。

「オルディーネは元々、カイエン公爵家が秘密裏に管理してきたんだってな？」

「なんだって!？」

「そ、そうだったの？」

「正確に言うと、蒼の騎神に認められるための試練の場を、ですな。ヴィータさんが導き手となり、試練を克服したクロウさんが起動者となったと聞いています」

「そのとおりだ。カイエン公爵家城館の地下水道の奥にひっそりあったのをヴィータが起こして、俺が七つの試練を乗り越えた結果、オルディーネに選ばれたってわけだ」

「僕たちと同じように…………」

「ううん。私たちは全員で挑んだのに対して、クロウはたった一人で乗り越えている」

「我らでさえ何度も躓きかけた試練をか…………」

「強いはずだよな」

リインは納得したように笑みを浮かべる。

「キリコ、ミュゼ。頼んだ」

「了解(しました)」

キリコはフェンリールに、ミュゼはケストレルβⅡに乗り込む。

【!?キリコさん、教官】

すると、Ⅶ組全員のARCUSSⅡが淡く輝く。

【……………】

【やっぱりみんなも選ばれているみたいだな】

リインは自身のARCUSSⅡを見つめる。

【そろそろおしゃべりは止めにしようぜ】

クロウの顔から笑みが消える。

【肚を括れよ、後輩ども】

【ああ。そうだな、先輩】

リインの表情も引き締まる。

【援護はお任せください】

【……………】

オルディーネとヴァリマール、ケストレルβⅡ、フェンリールが対峙する。

その瞬間、場の輝きがさらに増す。

【これが相克……………!】

【熱気さえ感じますね……………】

【……………】

リインとミュゼが場の空気に息を飲む横で、キリコは“敵”を見据えていた。

【それじゃ、始めるか!】

オルディーネはダブルセイバーを構える。

【これが、俺とお前の最後の勝負だ!】

ヴァリマールは根源たる虚無の剣を構える。

【はああああああああっ!!】

【うおおおおおおおっ!!】

灰と蒼がぶつかり合う。

【キリコ side】

灰の騎神と蒼の騎神が真っ向からぶつかり合う。

【そろそろ仕掛ける】

【はい！】

俺とミュゼは照準を蒼の騎神へと向ける。

その時、蒼の騎神の左右隣に魔法陣のようなものが三つ顕れる。

【何?!】

【あれは！】

魔法陣から現れたのは以前、アイゼンガルド連峰で戦った魔煌兵だった。

【魔煌兵?!】

【レグスⅡザミエル、だったか】

これも相克によるものだろうか。

【どういうことだ、クロウ！】

【チツ！相克の場に惹かれて余計な奴らが来やがったか！】

闘いの空気に惹かれるというのは、人間も魔煌兵も変わらないらしい。少なくとも、アームブラストにとっても不本意のようだ。

もつとも、何が来ようとも敵であることに変わらない。

【さっさと片づける】

【ですが、向こうは……】

【既に対処にはいつている】

もう二体は機甲兵に乗ったユウナたちと初代Ⅶ組と鉄機隊が共闘することになったようだ。

【援護は任せる】

【了解しました！】

これで後顧の憂いはなくなった。

【いくぞ】

レグスⅡザミエルめがけてハンディソリッドシューターの砲撃を叩き込む。

【そこっ！ストームルージュ！】

ぐらついた隙を狙ってケストレルβⅡのクラフト技が命中する。

グオオオオオオッ!!

突如、レグスⅡザミエルが吼える。

【気に触ったらしいな】

【ですが、容赦する理由がありません】

【奴の周りから削る。お前は来るべきチャンスを狙え】

【わかりました。お気をつけて】

【ああ】

いつぶりだろうな。本気で背中を預けるとするのは。

「キリコ side out」

フェンリールはレグスⅡザミエルの周囲からマシンガンの銃撃とハンディソリッドシューターの砲撃を浴びせる。

レグスⅡザミエルは怒りのままに大剣を振り下ろす。

しかし、大剣は掠りもせず、フェンリールを捉えることはなかった。隙が生じた瞬間を狙い、ケストレルβⅡから狙撃される。

ケストレルβⅡに狙いを変えるも、無防備な背中を即座に撃たれる。

さらに怯んだ所を大型アイアンクロウが挟る。

レグスⅡザミエルはたまらず、防御体勢を取る。

【防御を固めたようですね】

【動かないなら押しきるだけだ】

【はいっ！】

フェンリールはマシンガンの銃撃を一点に集中させる。

ケストレルβⅡも防御の薄い箇所を狙って撃つ。

二機の連携の前に、レグスⅡザミエルは確実に追いつめられていた。

グオオオオオオツ！！

最後の悪あがきと言わんばかりに、レグスⅡザミエルが輝き出す。

【高揚ですね】

【時間が惜しい。さっさと倒すぞ】

【了解しましたー！】

フェンリールは一気に距離を詰め、ハンディソリッドシューターの砲撃を叩き込む。

ケストレルβⅡはチャージした魔導騎銃から狙撃する。

【仕留める】

レグスⅡザミエルの体勢が完全に崩れた瞬間を狙い、大型アイアンクローの一撃がレグスⅡザミエルに致命傷を与える。

グオオオオオオッ……………!!!

断末ともに、レグスⅡザミエルは消滅した。

【やりましたね！】

【喜ぶのはまだだ。お前は向こうを頼む】

【わかりました！】

フェンリールはヴァリマールに、ケストレルβⅡは逆サイドに加勢すべく、それぞれ動き出す。

少し前、逆サイドでは……

ドラツケンⅢ・プロトタイプ、シユピーゲルSS試作型、ヘクトル式型・改は二体のレグスⅡザミエルに果敢に挑む。

【クロスブレイク！】

【双剋刃！】

【シヨックブレイカー！】

それぞれのクラフト技がレグスⅡザミエルに炸裂する。

【本当に扱いやすいわね、この機体！】

【ああ！こちらが思ったとおりに動いてくれる！】

「キリコさんの持っていたデータが100%活きているようです  
ね」

【よっしゃ！ガンガンいこうぜ！】

ユウナたちは自分たちの乗る機甲兵のポテンシャルの高さにさらなる闘志を燃やす。

「僕たちも行くよ、アクアマター！」

「ロードフレア！」

「シャドウライズ！」

「ゴルトアロー！」

さらに初代Ⅶ組の援護が加わる。

「遅れは取りません、影技・剣帝陣！」

「兜割り！」

「ピアスアロー！」

だめ押しとばかりに鉄機隊のクラフト技が叩き込まれる。

グオオオオオオツ!!

二体のレグスⅡザミエルは怒りを滾らせ、高揚状態になった。

「高揚に入りました！」

「おまけに二体同時かよ！」

「仕方ないわ!ここは——」

「いえ、ご心配なく」

突如、二つの弾丸がレグスⅡザミエルの頭部を撃ち抜く。

「ミュゼ！」

「向こうはキリコさんと私で片をつけました!加勢致します！」

「チツ!あの野郎！」

「ライバル心剥き出しにしてる場合じゃないでしょ！」

「ここは一気に決めるぞ！」

「【おおっ!!】」

ドラツケンⅢ・プロトタイプの銃撃、ヘクトル式型・改の剛撃、ケストレルβⅡの狙撃がレグスⅡザミエルを襲う。

「【とどめだ!ミストラルブレード!!】」

シュピーゲルSS試作型の渾身の斬撃が叩き込まれる。

グオオオオオオツ……………!!!

二体のレグスⅡザミエルは呪詛とも取れる断末魔とともに消滅した。

「勝った！」

「おっしやあ！」

「やりました！」

「見事……………！」

「ええ。後は……………」

Ⅶ組と鉄機隊は一つの方向を見た。

【閃光斬！】

【カオスセイバー！】

ヴァリマールの剣とオルディーネダブルセイバーが激しくぶつかり合う。

【クロオオオツ!!】

【少しはやるようになったじゃねえか！】

オルディーネはダブルセイバーでヴァリマールの剣をいなす。

【今度はこつちの番だぜ！】

オルディーネは攻撃に転じる。

【くっ……!】

ヴァリマールは剣で防御するも、連続攻撃の前にジリジリと後退していく。

【これで……つと！】

オルディーネは横からの攻撃を一旦下がって回避する。

【かわしたか】

【いや。割りとギリギリだったぜ。なかなか抜け目ねえな】

【キリコ！】

【加勢する。文句は？】

【いや、正直助かった】

【構わないな？】

【ああ、お前ともやりあってみたかったしな。かかって来な！】  
相克はさらに高まっていった。

【キリコ side】

【ブレードスロー！】

蒼の騎神はダブルセイバーを投擲してきた。

それを大型アイアンクローで弾き、ハンディソリッドシューターを撃ち込む。

【弧月一閃！】

砲撃と同時に灰の騎神が斬りかかる。

【なかなかやるじゃねえか。でもよっ！】



蒼の騎神はダブルセイバーで斬り上げ、根源たる虚無の剣を弾く。

【接近するぜっ！】

蒼の騎神は狙いを俺に定め、突っ込んできた。

【くっ……！】

なんとか大型アイアンクローで掴んで受け止める。

【やっぱゼムリアストーン製か。他の素材なら一発でオシヤカだったのにな】

【喋っているとは随分余裕だな。だが現時点で貴様の負けは決まった。このまま吹き飛ばしてやろう】

ハンディソリッドシューターで胸部に狙いをつける。

【言ってるろってんだ！】

蒼の騎神は強引に得物を引きはがし、空中に逃れる。

【撃てるもんなら撃ってみな！】

これで射線上に灰の騎神が重なる。

【……………】

どうということはない。

【教官】

【伍の型・斬月！】

【何っ!?ぐおっ!?!】

灰の騎神が飛び上がり、居合い斬りを放つ。背部を斬られた蒼の騎神は壁際に吹っ飛ばされた。

今のはなるべくしてなったものと言っても良いだろう。

後ろに灰の騎神がいる以上、左右には動けない。ならば、蒼の騎神は上にしか行けない。

さらに、灰の騎神は大型アイアンクローでダブルセイバーを掴んだ辺りから既に納刀していた。

だがそのままではフェンリールごと斬ることになりかねない。

それが分からないイイン教官ではないだろう。

なら話は簡単だ。引き離すよう仕向ければ良い。

偶然と言われればそれまでだが、とにかく連携は成功した。

【大丈夫ですか?】

【なんとかかな。それよりキリコはどうだ？】

【左腕に少し不調が見られますが、問題ありません】

【わかった。だが油断するな】

無論だ。

「キリコ side out」

【……………やってくれるじゃねえか】

オルディーネは得物を支えに立ち上がる。

【まさかあんなちやちな手に引つかかるとはよ】

【一瞬でも教官から意識を逸らせられたからな】

【チツ！さっきの台詞はそういうことか】

クロウは思わず舌打ちをする。

【キリコ君……】

「らしくない口調はそういうことですか……」

「心理戦にも精通しているということか……？」

【いや、今のは偶然だろ】

「とは言え、今のはキュービイーの胆力に軍配でしょう」

【胆力、ですか？】

「戦闘時において、軽口を叩くというのはリスクが高いものです。

それなりに胆力、この場合は度胸ですか。それが備わっていないければ

相手に隙をみせる以外の何物でもありませんわ」

「なるほど」

「我ががマスターもお認めになるほどの胆力、見せてもらった」

「それにしても手慣れているわね。そういえばキリコ君、あのバ

ラッド侯をアーマーマグナムで恫喝しつつ、君たちを完璧に欺いたの

よね？」

『……………』

エンネアの放った一言を受けた二代目VII組は揃って顔を背けた。

【まあいい。そろそろ本気を出さねえとな！】

オルディーネは両腕を突き出すように構える。

【ハアアアアアアッ!!】

オルディーネから莫大な霊力が溢れ出す。

その瞬間、オルディーネの形状が変化した。

【来るぞー！第二形態だー！】

【……………】

キリコは前面に集中する。

【オラアッ！】

【！】

オルディーネはフェンリールめがけて突っ込む。

すばやく反応したフェンリールはバックして回避する。

【遅えー！】

【グッ!?】

オルディーネはダブルセイバーを横薙ぎでフェンリールに斬りつける。

フェンリールはコックピット付近を斬り裂かれた。

【キリコー！】

【よそ見すんなー！】

続けざまにヴァリマールにダブルセイバーを振り下ろす。

ヴァリマールは剣で受け止める。

【まだ終わらねえ。悔しかったら死に物ぐるいでかかって来い！】

【言われ……………なくても!!】

ヴァリマールは剣でダブルセイバーを弾く。

【……………】

その隙を狙い、マシンガンの銃撃がオルディーネを襲う。

【チッ！ホントに抜け目ねえー！】

オルディーネは一旦下がる。

【キリコ！助かった！】

【いえ……………】

ヴァリマールとフェンリールも一旦下がる。

【ここが正念場だ！死力を尽くすぞー！】

【了解】

まもなく、決着の時間が訪れる。

【螺旋撃！】

ヴァリマールの斬撃がオルディーネの腕を斬り裂く。

【オラアッ！】

オルディーネは返す刀でヴァリマールの胴を斬る。

【くっ……！】

【ここは俺が】

キリコの言葉を受けたリインはヴァリマールを後退させる。

【いくぞ】

フェンリールはハンディソリッドシューターを撃ち込みながら接近する。

【チイッ！】

砲撃に晒されたオルディーネは防御体勢を取る。

【そこだ】

すかさず大型アイアンクロードオルディーネの肩を引き裂く。

【グッ……てめえ……！】

クロウの怒りに反応したオルディーネはフェンリールに斬りかかる。

【………】

キリコは冷静に捌きつつ引き金を引く。

【チッ！】

オルディーネは一旦距離を置こうとスラスターを噴射させる。

その瞬間を狙ってフェンリールはもう一度接近し、大型アイアンクロードで装甲を引き裂く。

【クソッ！カオスセイバー！】

【！】

オルディーネは起死回生のクラフト技を放つ。

フェンリールはギリギリでかわし、オルディーネの頭部にアームパUNCHを叩き込む。

【後少しか】

【ナメてんのか!】

【そうじゃない。復活するまでだ】

【復活……ハッ!?】

クロウの視線の先には、根源たる虚無の剣を構えるヴァリマールがあつた。

【俺はただの時間稼ぎだ】

【ナマ言いやがって……いいだろう、来やがれ!】

オルディーネはダブルセイバーを構え、ヴァリマールとフェンリールを見据える。

【教官】

【ああ!…いくぞ!】

ヴァリマールとフェンリールはオルディーネに突っ込む。

【夢想覇斬!】

【起動、マーシャルコンバット】

二機の必殺技がオルディーネに炸裂する。

【へへっ……ここまで……か……】

【ああ……そのようだ……】

オルディーネは静かに両膝をついた。

第一相克の勝者は、ヴァリマールに決まった。

「やった!」

「リインとキリコの勝ちだ……!」

VII組はリインとキリコの勝利を讃える。

「これで相克は終わりか……」

「そうみたいだな。だが……」

機体から降りたキリコとリインは呼吸を整える。

「……心配すんな。相克はこれで終わりさ」

クロウは片膝をつきながら笑みを浮かべる。

すると、クロウとオルディーネが光出す。同時に蒼い霊力がヴァリマールにゆっくりと流れ込む

「なっ!?!」

「これは……」

「ははっ、まさかノーリスクで済むとでも思ったか？」

「えっ……!？」

「ま、まさか……!？」

「察しがついてるようだが、そういうことだ。そもそも騎神は巨イナル一から分けただれた存在。相克で負けた騎神は勝った騎神にその性能ごと取り込まれるのさ」

「な、ならクロウはどうなるの!？」

「忘れたのか？俺は不死者だ。不死者つてのは黒の工房が大昔に確立した禁忌の業の産物。その力の源は騎神に関する物らしい」

「その騎神が消えるなら俺も消えるってもんさ」

「なんですって……!？」

「それが運命ってもんだ。相克で敗けた不死者のな」

「騎士殿……」

誰もが言葉を無くした。

「……………るな……………」

「あ？」

「ふぎけるなっ！クロウ・アームブラストっ!!」

一人を除いて。

「きよ、教官……?」

「お、おい……」

「世界が滅ぶかどうかの、この状況で……自分だけ先に退場するつもりか!？」

リインがクロウの胸ぐらを掴む。

「だから……言ったら?俺はもう……」

「甘ったれるなっ!!」

リインの手に力がこめられる。

「お前にはまだやる事が残っているだろう！トワ会長にジヨルジュ先輩のことも、お前がケリをつけるべきだろう！」

「あ、諦めちゃダメですよっ!」

「教官が貴方のことをどれだけ大切に思っていたと思ってるんで

す!？」

「へへっ……ありがとよ……」

「クロウさん……」

「でもな……これが相克なんだよ。勝った奴は敗けた奴の力を受け取って、前に進む。そうやって勝ち続けた末に、世界の結末が決まる……」

「結末……」

「その結末に少しでも助力になりや……本望さ。死んだ爺さんも笑って——」

「赦されることなどない」

キリコが治療もそこそこに口を開く。

「あんたの爺さんがどう思っているかなど、所詮あんたの思い込みに過ぎない」

「……」

「死んだ者の気持ちや考えなど、誰にも分かりはしない」

「キリコさん……」

「なら……どうするよ?」

「……決まっているだろう」

リインは力を解放した。

「そんなルールなんか……否定してやる」

その瞬間、流れ込んでいた霊力が逆流を始める。

「こいつは……」

「ま、まさか!?!融合するはずだった力が……!?!」

「リインさんの……意志なの!?!」

「……無茶苦茶ですわ……」

困惑する面々を横に、リインはクロウを抱きしめる。

「何が相克だ……そんなもの誰が受け取ってやるものか……。そんな事をするくらいなら生きて、生き延びて、世界をどうにかするために足掻け!死にたくなくなるくらいに足掻いて、50ミラの利子を今度こそ熨斗を付けて返してみろ!」

「リイン……!」

「……見て！ヴァリマールも！」

その隣で、消えかけていたオルディーネにヴァリマールが手を差し伸べる。二つの騎神は黄金の光に包まれる。

「き、消えかけていたのに……！」

「これは……双方の間に新たな何かが……？」

「ええ、ひよつとしたら……」

ミュゼの異能は全く新しい可能性を読み取った。

「戻ってこい、クロウ！俺には……俺たちにはお前が必要なんだ!!」

「……………あ……………」

リインとクロウは光に包まれる。

光が収まると、リインとクロウは倒れていた。

「教官！」

ユウナたち二代目VII組は気を失っているリインに駆け寄る。

「外傷はないな」

「どうやら命に別状はなさそうだが」

「クロウさんは如何ですか？」

「大丈夫よ。こっちも気を失っているだけみたい」

「とりあえず、外の管理小屋に運ぼう」

「あんたたちはどうすんの？」

サラは鉄機隊に問いかける。

「致し方ありませんわね」

「我らも同行しよう」

「色々知りたいこともあるしね」

「……決まりだな」

キリコはリインを担ぐ。

「キリコさん、大丈夫なんですか？」

「問題ない」

「ではクロウは俺が担いで行こう」

ガイウスはクロウを担いだ。

「では参りましょう」



VII組と鉄機隊は陽霊窟の出口を目指して歩き出した。

「……うつ……うつん……」

管理小屋に備え付けられたベッドに横たわっていたリインが目覚める。

「ようやくお目覚めか」

「……ここは……?」

「管理小屋ですよ、教官」

「そうか……。あの後ここに運んでくれたんだな」

「お礼ならキリコに言ってください。教官を担いで運んで来たのは彼ですから」

「……そのキリコは?」

「棧橋にいます。少し一人にしてほしいと」

「そうか……」

リインはキリコの言葉を頭に浮かべる。

「そろそろ話していただけませんか?」

「デュバリイさん?」

「本来であれば、アームブラストは消えるはず。ですが、このとおり存在しています」

「……確かに。リイン、お前何しやがった?」

「……言っただろう。ルールを否定してやる、と」

「……おそらくですが、ヴァリマールに流れ込んでいた霊力を交換し、自身の力として逆流させたのだと思います」

「えっと……つまり?」

「蒼の騎神の霊力を取り込みつつ、霊力を分け与えることで蒼の騎神を眷属化したってことよ」

「そんなこと可能なんですか!?!」

「アタシに聞かないですよ。こんな現象、前例も何もあつたもんじやないわ」

「とにかく、蒼のジークフリードさんは消えずに済んだってわけだな?」

「だから止めろつつの。とはいえ、今の俺は限りなく実体に近いつてだけだ。相克にケリが着いたら即消えるだろうな。そうなんだろう？」

「……………はい」

「どうにも……………ならないんですか？」

「すみません……………」

「良いんだ。てめえのことは俺が一番良く分かってる。ともかく、相克が終わるまではよろしく頼むぜ」

「えっ……………!?!」

「それでは……………」

「ああ。俺も付いてくぜ。落とし前をつけなくちやなんねえ」

「クロウ……………!」

「やっと戻ってきたわね……………!」

クロウの復帰宣言に初代Ⅶ組に少しだけ笑顔が戻る。

「……………で? あんたらはどうすんだ?」

アツシユが鉄機隊に問いかける。

「我々は本来敵同士。馴れ合うつもりはありませんわ」

「同じく」

「破門されたとはいえ、私たちはマスターの弟子だもの」

鉄機隊の面々はきつぱりと言い放つ。

「……………」

リインは顎に手をやりながら思案する。

「教官?」

「でしたら……………」

「「?」」

「俺たちを鍛えてくれませんか?」

「は……………はあ?!」

デュバリイは思わず声が裏返る。

「灰の起動者であり、贖である俺自身はもちろんですが、俺たちⅦ組を鍛えてくれませんか?」

「ふむ……」

「それは構わないけど……」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！ さっきの言葉を聞いていたんですの！？」

「今の俺たちでは、このまま相克に挑んでも勝ち目はないでしょう。ですが、Xデーまでの時間は限られています」

「確かに、一から鍛え直すには時間が足らな過ぎますね」

「それにデュバリイさんたちは俺たち以上に実戦経験が豊富だ。師と仰ぐならうってつけじゃないか？」

「なるほど……」

「お断りしますわ！ それにあなた方はマスターと争う宿命。そんな方たちを強くする義理はありませんわ！」

デュバリイはリインの言葉をはねつけた。

「……果たしてそれが正解でしょうか？」

「……なんですって？」

「確かに、貴女たちから見れば俺の提案はリアンヌさんへの裏切り  
に等しいでしょう」

「……」

「ですが、リアンヌさんのお相手をするならば、相応の実力がなくてはなりません。それはおそらく、貴女たちも同じだと思います」

「それは……」

「……マスターに弓を引けと？」

「クロウのことで確信を得ました。俺はリアンヌさん、いやルト  
ガーさんやセドリツク殿下と共に黒の騎神に挑むつもりです！」

「リイン……」

「教官……」

フィーとクルトは揃ってリインを見る。

「あんた……鋼の聖女や猟兵王も眷属にするつもり？」

セリーヌは呆れ果てたような目を向ける。

「そのためにはどうしても強くなる必要があるんです。どうか  
………お願いします」

リインは頭を下げる。

「……………」

鉄機隊の面々は互いに顔を見合わせる。

「……………シユバルツァー」

デュバリイは真つ直ぐ目を向ける。

「……………はい……………」

「その言葉、決して違えぬとここで誓いなさい」

「デュバリイさん！」

「だが、心しておけ。もしその言葉を違えた瞬間……………」

「世界がどうなろうと、リイン君の首を貫うわ」

アイネスとエンネアも続く。

「……………マジかよ」

「ふふっ♪（また一つ、世界の命運が変わりました）」

「わかりました！リイン・シユバルツァーの名に懸けて！」

「言っておきますが、鍛えるからには一片の容赦はしませんわよ」

「ふっ、望む所だ」

ラウラの顔に笑みが宿る。

「……………仕方ない。肚を括るとしよう」

「あはは……………そうだね」

「よろしく願います！」

ここに、Ⅶ組と鉄機隊との共闘の誓いが成った。

「……………というわけで、この人たちも一緒に行くことになったんだ」

「それはそれは……………。大変でしたね」

メルカバで報告を聞いたロジーヌは驚きつつも、了承した。

「これがメルカバですか」

「クロスベルに来ていたのは伍号機と玖号機だったな」

「《千の護り手》のグラハム卿と《蒼の聖典》のヘミスフィア卿だな」

「ああ。確か《外法狩り》から改名したのよね？」

「ワジさん……………ホントに星杯騎士だったんだ」

それぞれに面識のあるサラとユウナは言葉をはさむ。

「やっぱり初めてなんですね」

「そもそも私たちと教会は不倶戴天の敵同士。こんな状況でもなければ、乗り合わせるなんて天地がひっくり返ってもあり得ないでしょう」

「事情はリインさんから聞きました。それでも今は協力しなくてはなりません。短いあいだですが、よろしくお願いいたします」

「わ、わかりましたわ。せいぜいよろしくされるが良いですわ」

ロジーヌの言葉を受けたデュバリイはそっぽを向く。

(さすがロジーヌ……)

(デュバリイさんでも敵わないなんてな)

「それはそうと、エンネアはどこに行ったのです?」

「うむ。先ほどキュービーと甲板に出て行ったぞ」

「はあ!？」

「キリコ君とエンネアさんが!？」

「へえ?意外とモテンだなアイツ」

「確か、ランドルフの妹からも好意持たれてたな」

「分校長からも好意的に見られていたと思います」

「かーっ!隅に置けねえ野郎だなオイ」

「……………」

周りが囁し立てる中、ミュゼの意識は遠くに行っていた。

「……………なんだか騒がしいわね」

「どうだっついていい」

キリコはメルカバ内部の喧騒を切って捨てる。

「それで、聞きたいことって?」

「あんたは知らないか?異能を消すヒントか何かを」

「……………残念だけど、ご期待に添えそうにないわね」

「そうか……………」

キリコは顔を一旦伏せ、エンネアを見る。

「すまない」

「……………いいの。キリコ君が望まない異能を宿していることは知って

いるから」

「……………」

「でももしかしたら、道化師殿なら何か——」  
その時、メルカバが風であおられる。

「キャッ!?!」

「!?!」

体勢の崩れたエンネアがキリコに抱きつく。

「……………」

結果として、エンネアはキリコに密着するような形になった。  
「ご、ごめんなさい!」

エンネアは慌てて離れた。

「気にしなくていい」

「あ……………」

「先に戻る」

「……………う、うん……………」

キリコはメルカバ内部に戻って行った。

その瞬間、キリコは一斉に嘸し立てられた。

また、ミュゼは頬を膨らませ、キリコを睨む。

「……………まさか、ね?」

エンネアはエイボン丘陵に着陸するまで甲板に佇んでいた。

## 魔樹

七耀暦1206年 8月20日

「おうボウズ！ローゼリア様たちが全部調べ終えたってよ！」

「わかった。今行く」

ガンドルフに呼ばれたキリコは里の空き地に向かう。

右手には、一枚の製図が握られていた。

午前7:30

A R C U S IIにロツチナからの通信が入ったキリコは二代目VII組と共に魔の森を抜け、エイボン丘陵に足を運んだ。

そこにはロツチナではなく、テイタニアがコンテナと待っていた。

予期せぬ人物に驚くアルティナをよそに、キリコはテイタニアから肝心のロツチナは軍務で不在であることを聞いた。

キリコは少し機嫌が悪くなったが、テイタニアと二代目VII組の取り成しで怒りを静めた。

テイタニアが立ち去った後、キリコはユウナたちからあれこれ聞かれたが、適当に流した。

その後、エマやローゼリアらを呼び、コンテナを里の空き地に転移させた。

その際、ローゼリアたち魔女は何らかの術がかけられていないか調べることをキリコに告げた。キリコは全て任せることにした。

その間キリコは、ローゼリアのアトリエでフルメタルドッグの改修案を製図に書き記していった。

午前10:00

「終わったようだな」

「うむ」

「これも大事なことなのね？」

「はい。里にあやしい魔術を持ち込ませないための措置なんです」

エマがアリサに説明した。

現在、リインたちⅦ組の一部メンバーと鉄機隊はラマール州の情報収集のために、ガイウスのメルカバで巡回に出ている。そのため里にはキリコ、アリサ、エリオット、エマ、マキアス、フィー、ユーシス、サラが残っている。

ちなみにキリコたち以外はそれぞれ里の防衛に就いている。

「それで、検査の結果は？」

「術式らしきものは見つからなかった。すまんの、里長として里の安寧が第一じゃからな」

「いや、いい。おかげで改修案もまとまった」

キリコは手に持った製図を見せる。

「それで、どうするのじゃ？」

「この七連装ミサイルポッドと三連装スモークデイスチャージャーを宙に浮かせることはできるか？」

「宙に？」

「宙に浮かせたミサイルポッドとスモークデイスチャージャーを肩にはめ込み、セッティングする。ここに導力クレーンがない以上、そうするしかない」

「なるほど。考えたわね」

「あんたねえ、魔法の秘術を便利な道具みたいに考えてんじやないわよ」

セリーヌは苦々しい表情を浮かべる。

「ガハハ、ボウズやお嬢ちゃんみたいな普通の人間にはそういう捉え方が一般的なんだろうよ」

ガンドルフはキリコとアリサを見ながら豪快に笑う。

「仕方あるまい。じゃが皆を少し休ませてやってはくれぬか？」

「わかっている。頼むのは最後の工程になってからだ」

「ありがとうございます」

「気にしなくていい。元々無理を言っているのはこっちだ」

「なら、内面は私も協力するわ」

「オレも手伝うぜ。お前さんの仲間の機甲兵のメンテもやってたしな」



「助かる。アリサ・ラインフォルト、あんたは脚部の調整を。ガンドルフ、あんたはエンジンの調整を頼む」

「わかったわ！」

「任せろ！」

キリコたちはそれぞれ作業を開始した。

「アリサ side」

(なるほどね。これなら高速戦闘も可能ね)

私は今、キリコに頼まれてフルメタルドッグの脚部の調整を行っているの。

元々はドラッケンIIをベースにしているとのことだけど、完全に別物と化しているわね。

特に、足回りは独自の理論に基づいている。敢えて足回りを重くすることでバランスをとりつつ、ローラーダッシュを安定させる。

対空戦は厳しいけど、地上戦なら桁違いの性能を發揮できるようになっているわね。

フルメタルドッグの調整を行う中、私はある不安を抱えていた。

それは父様のことだった。

フランツ・ラインフォルトではなく黒のアルベリヒとして、多くの悪事を働いてきた。

そして、キリコのかつての恋人であるフィアナさんを戦闘型ホームクルス《F》として造り出してしまった。

(わかっている)

あの人がしてきたことはとても許されることじゃない。

キリコにしてみれば、思い出を踏みにじられたに等しい。

ルスケ大佐の言うとおり、惨たらしい死をもって償われることになるかもしれない。

(それでも……やっぱり……)

あの人が私の父様であることになって変わりない。

もし、キリコが父様に手をかけようとしたら、私は身を呈してでも守るだろう。

そして、私はもうⅦ組を名乗ることはなくなるだろう。

(リイン……………ごめんなさい……………!)

私は熱くなる目頭をこすり、作業を続けた。

「アリサ side out」

午前12:20

それぞれの作業を終え、キリコたちは月影亭で休息を取っていた。

「またこうして君のコーヒーを飲めるとはな」

「うーん、二日酔いに効きそうね」

マキアスとサラはキリコの淹れたコーヒーに舌鼓を打っていた。

「マキアスはともかく、サラ教官もキリコのコーヒーのファンだったんだね」

「サラの場合、酔い醒ましたが目的なんだろうけど」

「また呑んでいたのか」

「お風呂上がり、蒸留酒を一瓶呑んでみたいですよ……………」

「しかも若干乱れていたみたいだし……………」

「そこ。うるさいわよ」

フィー、ユースス、エマ、アリサからの言葉を受けたサラは鋭い目を向ける。

「自業自得でしょう……………」

マキアスは肩を竦める。

「……………」

キリコは無言でコーヒーを啜る。

「そう言えば、あのテイタニア特務中尉が持ってきた武装は何があるんだ?」

「確か、ガトリング砲、三連装対戦車ミサイル、七連装ミサイルポッド、三連装スモークディスプレイスチャージャーだったわね」

「また凶悪な武装ね」

「多対一が前提である以上、どうしても重武装になる」

「ま、手数があるに越したことはないしね」

「後、あのソリのような物は見覚えがある」

「不整地用のトランプルリガーだ。接地面積を広くすることで、荒地でも難なく対応できる」

「量産のメドがついたの？」

「博士が好き勝手やっているんだらう」

「それはさすがに……ないこともないのか」

「あんた助手なんですよ？止めないの？」

「ティータでも止められない以上、無理だ」

キリコはばつさりと断言した。

「はあ……」

つられてアリサもため息をついた。

「……そろそろ休息も終わりにしましょう。おばあちゃんも待っているでしょうから」

「そうだな。僕たちも行くとしよう」

「……………」

フィーは顎に手をやる。

「フィー、どうかしたの？」

「……あ、うん。何でもない」

フィーは席を立った。

「……………」

キリコは何か引つかかるものを感じながら、空き地に向かった。

午後1:05

(……………遅いな)

キリコ、アリサ、エマ、セリーヌはフルメタルドッグの前でローゼリアたちを待っていた。だがローゼリアたちは現れなかった。

「もう、いったい何を……」

「おぬしら！ちようどよかつた！」

ローゼリアと魔女数人が息を切らせて駆け込んで来た。

「どうしたのよ。そんなに慌てて」

「うむ。どうやら童たちが魔の森に入ってしまったようなのじゃ」  
『!?!』

キリコたちは顔を上げた。

「確かなの!？」

「里中を探し回ってもおらんかった!おそらく結界の薄い箇所  
に迷いこんだのじやろう」

「そんな!？」

「その子どもというのは？」

「ニーナとアルビオレオとノアじゃ!」

「すぐに探しに行きましょう!」

「頼むぞ!森になにやら不気味な気配が満ち始めておる!」

「不気味な気配……?」

「おーい!」

エリオットたちが駆けつけて来た。

「皆さん……」

「エマたちもこれから魔の森に行くんだね」

「はい。どうか力を貸してください」

「任せたまえ!」

「これも貴族の義務だ」

「民間人の保護は遊撃士の努め」

「キリコ君も来るわよね?」

「ああ」

キリコはサラの呼び掛けに応えた。

「とにかく、急ぐわよ!」

『おおっ!』

「了解」

午後1:15

魔の森に入ったキリコたちは、いつもとは違う空気に慎重になっ  
ていた。

「静かすぎるな」

「魔獣が一匹もないだど?」

「午前中に見回りをした時も魔獣はあんまり見かけなかった。リイ

ンたちが帰って来てから相談しようと思ってたけど……」

「おそらく、この不気味な気配と関係があるのかもしれない」

「ねえ、今までこういうことはなかったの？」

「私を知る限りほとんどないわね。いったいこの森で何が起きてるの……？」

「答えはあれだ」

キリコは息を切らせている犬型魔獣を指さす。

「あれは？」

「まるで何かから逃げているような——」

エリオットが言い終わらないうちに、犬型魔獣は蔓のようなものでグルグル巻きにされた。

犬型魔獣は叫びながらどこかへと連れ去られた。

「な、なんだ今のは!?!」

「追いかけるわよ!」

『はいっ!』

キリコたちは大急ぎで追いかける。

「!?止まって!」

フィーの声にキリコたちは止まった。

「な!?!」

「何よ、これ……」

キリコたちの目の前には、巨大な樹木型の異形の幻獣が立っていた。

「魔獣? ううん、違う!」

「常識はずれのこの大きさ。それにこの輝きは……」

「まさか……幻獣か!?!」

「聞いたことがあるわ。大地の霊力を活動エネルギーとする、魔樹フォルネリアス!」

セリーヌは臨戦体勢に入る。

「そして魔獣がいなくなった原因だろう」

「え……?」

「見ろ」

キリコはフォルネリアスを指さす。

フォルネリアスは先ほど捕らえた犬型魔獣を腹部に放り込んだ。

一分も経たないうちに、フォルネリアスは犬型魔獣と思われる骸骨を吐き出した。

「なっ!?!」

「た、食べちゃった!?!」

「おそらく、自分の養分とするために森の魔獣を食い荒らしているんだろう」

「その成れの果てがあれね」

サラは骸骨の山を見ながら言った。

「あれ全部……」

「このまま食い荒らし続けばどうなるんだ?」

「…………おそらく、霊体型の魔物しかいなくなるでしょう」

「チイツ!おぞましい真似を!」

「そ、それはともかく、子どもたちは!?!」

「それは…………ツ!」

「まずい!」

キリコとファイは魔樹フォルネリアスがめがけて飛び込む。

今まさに、フォルネリアスの蔓が三人の子どもたちを捕らえようとしていた。

「いけない!」

「一斉に援護!!」

サラの怒号のような号令と共に、アリサたちは一斉に攻撃を開始した。

一斉攻撃を受けたフォルネリアスは子どもたちを落とすとした。その隙にキリコとファイは子どもたちを抱えて離脱した。

「やった!」

「子どもたちは無事のようなだな」

「油断しないで!来るわよ!」

獲物を取られた怒りからか、フォルネリアスはキリコたちに狙いを

定める。

「食事を邪魔されて怒っているのかしら？」

「ろくに動きもしないで貪り喰らう。気にいらんな！」

「ああ。こんな植物は即刻駆除しないと！」

「子どもたちは転移させました！もう大丈夫です！」

「ならさつさと倒す」

「うん！僕たちならやれる！」

「行くわよ！」

『おおっ！』

魔樹との戦闘が始まった。

「ロゼッタアロー！」

「ドレッドブレイカー！」

アリサとマキアスのクラフト技がフォルネリアスに叩きこまれる。

「解析完了！みんな！風属性と幻属性が弱点だよ！」

「わかったわ！エアリアルダスト！」

「ガリオンフォート！」

エリオットの解析が終わり、サラとエマのーツが直撃した。

「アークブレイド！」

ユーシスのクラフト技を受け、フォルネリアスの体勢が崩れる。

「合わせるがいい！」

「了解」

キリコのアーマーマグナムの追撃が加わり、フォルネリアスは若干後退する。

「（根が生えているわけではないのか）フレイムグレネード」

キリコのクラフト技を受けたフォルネリアスは火傷を負った。

「サイファーエッジ！」

続けてフィーのクラフト技がフォルネリアスの脇腹を抉る。

「アステルフレア！」

エマの魔導杖から放たれた炎がフォルネリアスを包みこむ。

「押しているわね！」

「これなら——」

「油断しないで！あいつには……！」

「……………」

攻撃を受け続けたフォルネリアスは青い光を放つ。すると、攻撃を受けた箇所が回復していった。

「なっ!？」

「回復しただど!？」

「あの魔樹は大地の霊力を糧に動いています！つまり、霊力が枯渇しない限り……！」

「無尽蔵、というわけか」

「じよ、冗談じゃないぞ！」

「霊力の枯渇……現実的には絶対不可能……！」

「クツ……！」

マキアスたちは折れかけの心を必死に繋ぎ止めていた。そして同時に理解していた。

この幻獣を倒すことは極めて至難の業であることを。

「……………」

キリコはフォルネリアスを観察するようにつめる。

「……………かなり危険だが、俺に策がある」

神にも従わないこの男が、諦めるといふ選択肢を甘んじて受け入れるわけがなかった。

「策……だど？」

「ああ……」

キリコはフォルネリアスの根元を指さす。

「あいつの根元の草を枯れさせることはできるか？」

「草を？」

「でも、それだけじゃ焼け石に水だよ」

「それでいい。枯れさせた後、攻撃をして注意を引いてほしい」

「注意を……」

「……………続けて」



「その後は……」

キリコはしまつていたグレネード数個を極細のワイヤーで束ねる。

「こいつを奴の腹の中に放り込む」

「なっ!？」

「そのためにはかなり接近しなくてはならないがな」

「危険です!」

「だ、ダメだよそんなの!」

「そんなことをしたら、君は!」

キリコの提案に、エマたちは反対する。

「これ以外に奴を倒す方法はない。下手に放置すればどうなるかは明らかだ」

「だ、だが……!」

「自棄になっているなら、目を覚まして」

「自棄になどなっていない」

「いい加減にしなさい!!」

サラはキリコに怒鳴る。

「あなたの力量は知ってるわ。多分、あなたの策なら幻獣に致命傷を与えることができるかもしれない!けどね!」

「……………」

「そんな捨て鉢みたいなことを、あたしやリインがさせるとでも思ったの!?!あんなだっけ知ってるでしょう!リインが……あの子がそんな真似を……!」

「……それだけか?」

「なんですって!?!」

「あなたの言い方だと、誰も死なせたくないと言っているように聞こえる」

「……ええそうよ!北の猟兵にいた頃から、危機的状況を覆そうとして、何人もの仲間が命を落としたわ!」

「サラ……………」

フィーはサラを見つめる。

「俺はそう簡単には死なない。それに」

「それに？」

「ここであんたたちに倒れられるわけにはいかない」

「キリコ……」

「こういうことは俺の役目だ」

キリコはアーマー・マグナムに弾丸を装填した。

「役目だって……!？」

「この世界において、異物でしかない俺にはな」

『……………』

アリサたちは二の句が継げなくなる。

「……………わかったわ」

サラは観念したように顔を上げる。

「その代わり、絶対に成功させなさい。吐いた唾は飲み込めないわよ」

「無論だ」

「サラ教官……」

「あんたたちも全力でキリコをサポートしなさい。異論はある？」

『……………』

アリサたちも大きく頷く。

「これより、作戦を開始する！」

「にしても情けないわね」

サラはため息をついた。

「えっ？」

「このあたしが気圧されるなんてね……」

「教官……」

「修羅場はいくつも潜ってきたはずなんだけどそれ以上の地獄を渡り歩いてきた『本物』には敵わないか」

「『本物』……」

「まったく、リインにラウラ、フィーにクロウにキリコ。なんであたしの下にはあんな覚悟が備わってんのかしら？」

「あはは……その六人は別格のような気が……」

「勿論、あんたたち新旧Ⅶ組もよ」

「僕たちも……」

「この帝国で戦おうと思うと、必ず貴族派か革新派に分れることになるのは言うまでもないわ。そしてⅦ組の何人かの身内はそのどちらか、または両方に影響している」

「はい……」

「でも君たちはどちらでもない、第三の道を行くことを決めた。言い方を変えれば、身内の意にそぐわないことをしようとしている」

「意にそぐわない……言えてるね」

「そうですね」

「だが、身内と敵対する覚悟など、とうに出来ている」

「ああ。この道を進むと決めた時からな」

「少なくとも、強制されたわけではありません」

「それは巡回に出ているメンバーも同じはず」

「そうですね。私たちはⅦ組だものね」

(………やっぱり眩しいわね。あたしもアラサーなんて言ってもらえないわね)

サラは顔を上げる。

「そろそろ始めましょう」

「わかりました。セリーヌ」

「始めるわよ」

「……………」

エマとセリーヌが魔法陣を展開する。

「……………」

キリコも集中力を高めた。

「大地の精霊よ、我が声に耳をかたむけたまえ……」

エマとセリーヌが描いた魔法陣から魔力が溢れだし、フォルネリアスの根元と周囲の草が残らず枯れた。

「ごめんなさい……どうしても必要なんです」

「謝るのは後！さあ、行きなさい！」

「ああ……！」

キリコはフォルネリアスめがけて走り出す。

「今よー！一斉掃射！」

『はいっ！』

サラの号令でアリサたちは一斉に攻撃を開始した。

フォルネリアスの視線はキリコから外れる。

「これで………っ!？」

キリコは予定通り、束ねたグレネードを投げようとした。だがキリコの体勢が崩れた。

「な!？」

「な、なんで………!？」

「あれって………！」

セリーヌの視線の先には、里の少女ノアが使い魔として連れて歩いている飛び猫型魔獣のロキだった。

キリコは走り出した先で飛行していたロキに気づき、無理にブレーキをかけようとして、体勢が崩れてしまった。

それに気づいたフォルネリアスは再びキリコに狙いを定める。

フォルネリアスは蔓を伸ばし、キリコを捕らえようとした。

キリコは蔓が届く前に駆け出し、フォルネリアスの腹部に接近。

だが別の蔓がキリコの右腕に巻きつく。

その瞬間、キリコは大型ナイフを深々とフォルネリアスに突き立てた。

この行為がフォルネリアスの怒りを買った。

フォルネリアスはキリコの両足と胴に蔓を巻きつけた。

そしてキリコを思いきり地面に叩きつけた。

「まずいー！」

「総員、攻撃を——」

「待ってサラ！」

フィーが待ったをかける。

すると、フィーたちの周りに植物型魔獣の群れが現れた。

「なんだコイツらは——」

「まさか、幻獣の眷族!？」

「くっ!こんな時に!」

「急いで撃退しなきゃ!」

「行くわよ!あんたたち!」

『はいっ!』

サラたちはフォルネリアスの眷族と戦闘になった。

(……………ぐ……………ぐ……………!)

一方、キリコはフォルネリアスの執拗な攻撃にギリギリで意識を保っていた。

だが一向にくたばらないキリコに業を煮やしたのか、フォルネリアスは地面だけでなく、周囲の木の幹にキリコを叩きつけ始めた。

(……………このまま……………では……………)

上下左右に、縦横無尽に叩きつけられたキリコの意識は確実に削られていき、フォルネリアスの執拗な攻撃の前に、遂に意識を手放した。

「……………」

フォルネリアスは気絶したキリコを満足げに持ち上げた。

「……………」

フォルネリアスの腹部が開いた。中は暗く、酸のような液体で満たされていた。

「……………」

フォルネリアスはわざわざ、フィーたちに見せびらかすように向きを変えた。

「まずい!」

「こっちも手一杯だっというのに……………」

「よせっ!!」

「やめてえええっ!!」

アリサたちの懇願を無視し、フォルネリアスはキリコを腹部に放り込もうと逆さに吊り上げる。

「……………っ!!」

BANG!!

偶然か否か、左腰のホルスターから滑り落ちてきたアーマーマグナムがキリコの左手の人差し指に引っかかった。

戦士としての本能か、キリコは無意識にフォルネリアスめがけてアーマーマグナムを構える。そして引き金を正確に引いた。

放たれた弾丸は正確に大型ナイフに吊り下げられていたグレネードを撃ち抜いた。

ピンが全て外れたグレネードはフォルネリアスの内部で大爆発を起こした。

その瞬間、フォルネリアスの蔓がほどけた。爆風を浴び、キリコはアリサたちの足元に投げ出された。

「キリコ!!」

「すぐに治療しないとー!」

「はい!!」

エリオットとエマはキリコの治療を大急ぎで始める。

その間に、サラたちは深手を負ったフォルネリアスに止めを刺すべく攻撃を開始した。

「二気に行くわよ!」

『おおっ!!』

サラの斬撃を基点としたバーストアタックが炸裂。フォルネリアスは回復する間もなく、叫び声を上げる。

「ノーザンライトニング!!」

「ジブリール・アロー!!」

「ジャステイスバレット!!」

「アイオロスセイバー!!」

「リーサルクルセイド!!」

だめ押しとばかりに各々のSクラフトがフォルネリアスに叩きこまれる。

フォルネリアスはもがき苦しみながらも、最期の抵抗とばかりに、蔓を振り上げる。

「アーマーブレイクⅡ」

だが、意識を完全に取り戻したキリコの一撃に阻まれた。魔樹フォルネリアスは呪詛とも取れる断末魔の悲鳴とともに消滅した。

「た、倒せた……」

「はあ……はあ……な、なんとかね……」

「ふう……さすがは幻獣ということにしておくか……」

アリサとエリオットは肩で息をし、マキアスはフォルネリアスの夕フさに呆れていた。

「まったく……寿命を縮ませんじやないわよ！」

「結構焦った」

「すまなかった」

「まあまあ。とにかく、負傷だけで済んで良かったです」

「それはそうと、あの魔獣は？」

「……あそこね」

セリーヌは岩陰で震えていたロキをみつける。アリサたちはロキを刺激しないようにそっと近づく。

「この子って、あのノアって子の使い魔よね？」

「温泉で番をさせられていたよね」

「どうしてここに……」

「………飼い主を探しに来た、そういうことだろう」

マキアスの肩を借りたキリコが推測を口にした。

「飼い主……じゃあ、この子は……」

「わざわざ危険を犯してまで探しに来たんだね」

「見上げた度胸………と言いたい所だが、お前のおかげでキリコは危険な目に遭った。どうしてくれる？」

ユーシスはロキを殺意の籠った目で睨む。

「~~~~~!!」

ロキはさらに震え上がる。

「ユ、ユーシスさん……!」

「おしおきしたい所だけど、この場はキリコが決めるべき」  
「チツ！」

ユーシスはフィーに諭され、舌打ち混じりに下がる。

「キリコ、貴方はどうする?」

アリサはキリコに問いかける。

「……………」

キリコはロキをジツと見つめる。

「……………」

キリコはロキの後方を指さした。

「?!?!」

ロキは驚きのあまり、キリコと自分の後方を何度も見つめる。

「お前の飼い主は里にとっくに戻っている。さっさと行ってやれ」

「……………」

ロキはキリコに頭を下げ、エリンの里の方角に飛行して行った。

「キリコさん……………」

「あれでよかったんだね?」

「いちいち怒っていてはキリがない」

「優しいんですね」

「別に。これくらいのアクシデントなど、物の数じゃない」

「こ、これくらいって……………」

「あくあ、ホントに受け持ちじゃなくてよかったわ〜♪」

「サラ教官……………」

「……………せめてキリコのいない場所で言え」

「あ、あははは……………」

エマは苦笑いを浮かべる。

「とにかく、戻るとしよう」

「そうね。リインたちはまだ戻ってきていないだろうけど」

「まだ仕事も片づいていない」

『え?』

キリコの発言に、アリサたちは呆気にとられる。

「し、仕事…………?」



「もしかして、フルメタルドッグの改修……?」

「そうだが?」

「ダメに決まってるでしょうが!」

「そうだよ!ただでさえボロボロなのに!」

「休憩時間はしっかり取り取りたまえ!労働基準法違反だぞ!」

「レーグニッツは黙っている!コイツをベッドに放り込んでおけ!」

「ラジャー!」

サラたちの怒号が飛び交う。

「製図は見せてもらったから、私の方でやっておくわ!エマ、まだ魔力は切れてないわよね!」

「大丈夫です!お任せください!」

アリサとエマはやる気を引き出した。

「しかし……」

「あなたの今やることは休むことよ。たまには他人に任せてみたら?」

「……………」

セリーヌの言葉を受け、キリコは少し考える。

「……………わかった。ラインフォルト、あんたに任せたい」

「お安い御用よ」

「それじゃ、戻るわよ」

キリコたちはエリンの里へと戻ることにした。

(この後どうなると思う?)

(たぶん、一悶着起きると思う)

(御愁傷様です……)

「本当に馬鹿なんですか!」

夕方、西部巡回を終えてリインたちは戻ってきた。

アリサたちはリインたちに魔の森で起きたことを報告した。

その際、キリコの行動を聞いたミュゼは怒りとともに、キリコの部屋に押しかけた。そしてベッドで本を読んでいたキリコにこんこん

と説教を始めた。

「貴方は普通なら寝たきりになってもおかしくないほどのけがを負っているんですよ!？」

「頭部への裂傷、全身打撲、肋骨が数本折れていたらしいが、クレイグとミルステインの治療を受けたから軽傷で済んだ」

「しかもそんな状態で機甲兵の整備をしようとするなんて……もつとご自分のお体を大切にしたらどうなんですか!？」

「バレストラインたちにも言ったが、あれくらいのアクシデントは物の数じゃない」

「アクシデントで済むわけがないでしょう!!」

「結果論だが、俺は生きている（いや、また死に損ねたと言わなければならない）」

「ああもう！ああ言えばこう言う!!」

ミュゼは両手を上下に振り回す。

「………本当に、心配しているんですよ………」

ミュゼは後ろを向いた。

「………わかってている」

「………わかってませんよ………」

「すまない」

「遅いですよ………」

「………」

「でも、ご無事で良かったです」

ミュゼは再びキリコの方を向く。

「ああ」

「ふふ………。あ、そういうえば、キリコさんにお伝えしたければならぬいことがありました」

「なんだ?」

ミュゼの表情に真剣味が宿る。

「………明日、私たちは海都オルデイスに潜入することが決定しました」

「オルデイスに?」

「現在、オルデイスのカイエン公爵家の城館にプリシラ皇妃様とカール・レーグニッツ帝都知事閣下が監禁されていることが判明致しました」

「皇妃と帝都知事が？」

「はい。私たちはお二人の救出に向かいます。その際にですが、キリコさん」

ミュゼはキリコの目を見つめ、息を吸う。

「明日の潜入作戦、キリコさんには外れていただきます」

「……それが決定か」

「はい……」

キリコの問いに、ミュゼは頷く。

「わかった。なら仕方ない」

「キリコさん……」

ミュゼはキリコの側に近づく。

「なんだ？」

「ここからは内密に」

「……」

「……私の読みでは、今こうしている間に、皇妃様の身柄はジュノー海上要塞に移されているでしょう」

「(ジュノー……確か、ゼクス將軍率いる第三機甲師団が詰めているはずだな?)」

「(いえ、強引な人事により、第三機甲師団と衛士隊が丸ごと入れ代わりました)」

「(ならオルデイスには……?)」

「(はい。第三機甲師団とTMPの精鋭。さらに黒の工房からの刺客が待ち構えています)」

「(そうか)」

キリコは目を瞑る。

「(それで、俺に何をさせたいんだ?)」

「(はい……)」

ミュゼは一旦うつむき、顔を上げる。

(ジュノー……海上要塞を……陥落させてください)  
(……)

キリコはミュゼはジッと見つめる。

(……例の陽炎作戦とやらの一端か)

(……はい)

(……わかった。その仕事、引き受けよう)

(キリコさん……)

(お前の異能の力がなくとも、いずれこうなっていたことだ)

(キリコさん……！)

(これも俺の運命だ。お前が気に病む必要はない)

「……ッ！」

ミュゼは部屋を出て行った。

「……」

キリコは読みかけの本に目を通し始めた。

(本当に……ごめんなさい……！)

ミュゼはアトリエのバルコニーの片隅で蹲っていた。

(キリコさんの言うとおり、この未来は来てしまうのかもしれない。

でも、それはもつと先に来ること……)

(でもここでキリコさんが動かないと、帝国の未来がさらに歪んで  
しまう。それなのに、他に取るべき選択肢が何一つ存在しない……  
！)

(でもキリコさんは……運命の一言で受け入れてしまった……)

ミュゼは両肩を引っ掻くように両手に力をこめる。

(私には……キリコさんを……産まれて初めて好きになった人を

……戦場に追いやることしか出来ない……！)

(こんな思いをするなら……異能なんて、いつそ無くなってしま  
えばいいのに……!!)

ミュゼの想いは涙となって流れ落ちた。それが決して叶わないこ  
とを理解しながら……。

## 攻城①

七耀暦1206年 8月21日

早朝、Ⅶ組は転位石の前に揃っていた。

「では、行ってきます」

「しっかりとやってくるのじゃぞ」

「それと、キリコのことでもよろしくお願いします」

「うむ。任せておけい！」

ローゼリアは胸を叩く。

「なんだか心配なんだけど」

「丸め込まれてたりしてね」

(信用されていないんだな……)

「とにかく、今日はちゃんと野菜を食べること。わかったわね？」

「わ、わかっとする！それよりお主たちも気をつけるんじゃ」

「わかりました」

「行ってきます」

新旧Ⅶ組は転位して行った。

「さーて、そろそろあやつも……」

ローゼリアはアトリエに戻って行った。

「ぬわーにをしとるんじゃ?」

「……………」

アトリエに戻ったローゼリアはラマール州の地図を前に腕組みをしているキリコに話しかける。

「まさかとは思うがお主、行こうなどと考えておらんよな？」

「もとよりそのつもりだが?」

「……………呆れて物が言えぬわ」

ローゼリアは額を押さえる。

「やっぱりそう思われるか」

「徹頭徹尾も大概にしなさいな」

アイネスとデユバライもため息をつく。

「第一、どこに何しに行くつもりなの？」

「……………ジュノーにな」

「ジュノー海上要塞に？」

「ふむ。そうきたか」

ローゼリアは意味深に微笑む。

「里長殿？」

「どうも、その辺りに魔の力が集まりつつある。逆に海都からは薄れておるのでな」

「魔の力…………」

「魔煌機兵のことでしょうね」

「それが薄れているという…………」

「さて、キュービー。ここからはカイエンの小娘が絡んでおるのじやろ？」

「ああ」

「やけに素直に答えますわね」

「隠し通せるものでもないからな」

「なるほど…………」

「それで、カイエン公からはなんて？」

「それは——」

キリコは昨夜ミュゼから聞いたことをローゼリアらに話した。

「なるほど。そんなことが」

「ジュノー海上要塞には皇妃が捕らわれている。さらに衛士隊が第三機甲師団に代わり、守護している」

「見方を変えれば、皇妃は衛士隊の人質になっているということね」

「そういうことらしい」

「…………マスターの存在は？」

「話に出なかった以上、出てくることはないと考えていいはずだ」

「そうですか…………」

デュバリイは安堵のため息をついた。

「じゃがのう、妾の役目はお主を里から出さんことじや。いくらお主が戦うさだめを背負っているとはいえな」

「……………」

「なんと言おうとダメなものはダメじゃ。さて、妾はとおきの菓子を――」

「菓子か」

キリコは顔を上げる。

「なんじゃ？欲しいのか？じゃがやらんぞ」

「……………あんたの言うとおきの菓子とやらより美味しい菓子を俺が買って来るといふのはどうだ？」

「……………」

ローゼリアの肩が一瞬揺れる。

「な、なんじゃと……………」

「戸棚の奥に大事そうに隠している所を見ると、だいぶ菓みに飢えているようだな」

「あ、ああ……………。ここ数年の間、エマや里の者たちから口煩く言われ続けていてな。この妾を幼子扱いして、食べたい物も食べさせてくれぬ。代わりに、妾が嫌いな物ばかり食べさせようとするのじゃ」

「ひどいな、それは」

「じゃろう!?妾だって、妾だって菓子くらい好きに食べたいんじゃない!!」

ローゼリアは机に両手を叩きつける。

「そうか、わかった。食事と寝床の恩がある。見返りと言ってはなんだが、あんたの望む菓子を買って来てやる」

「真か！」

「ああ」

「まさか、お主と菓子の話をする日が来ようとはのう」

「……………それで、どんな菓子が欲しい？」

「うゝむ、そうじゃのう。甘くて色とりどりで最後まで飽きさせない。そんな菓子が食べたいのう」

「それなら心当たりがある」

「おおっ！」

「それで良いんだな？」

「うむ！」

「本当に良いのか？」

「構わぬ！」

「……良いんだな？」

「良いと言っておるであろう！」

「……ッ！気を悪くさせたならすまない」

キリコはローゼリアに詫びる。

「いやいや、妾もすまんかった。久方ぶりの菓子に興奮しておった」

「……………」

「それで、どこにお主を送ればよいのじゃ？」

「西ラマール街道に頼む。それと、護身用として機甲兵に乗って行

く

「あいわかった。早速準備するがよい」

「準備なら整っている」

「ほうほう！さすがはリインの教え子じゃな。では参るぞ」

ローゼリアはキリコを連れてアトリエを出た。

「……………」

鉄機隊の三人は茫然としていたが、扉の閉まる音を聞き、慌てて後を追った。

「では行つて来るがよい」

【わかった】

「いやいやいや！待ちなさい！」

里の空き地でフルメタルドッグを転位させようとしたローゼリアをデュバリイが慌てて止める。

「なんじゃ、騒々しい」

「貴女の役目はキュービイーを里から出さないことでしょうか!?何堂々と破ろうとしてるんです！」

「こつそりやれば問題なからう」

「バレるに決まってるでしょう！」

「筋書きはこうじゃ。キュービイーとて若人。里の物に飽き、どう



しても外の甘味が食べたくなかった。そこでお主らのいずれかが付き添うことを条件に買い物に行った、ということにする」

【……………】

キリコはやり取りを無視していた。

「機甲兵はどう説明される?」

「偶然、どこぞのごろつきが襲いかかって来たので、やむを得ず妾が送ったことにすればよい」

「そんな場当たり的な…………」

デュバリイは思わず嘆いた。

「それよりお主らの内一人、キュービイーと共に行く者を決めねばならぬ」

「ふむ…………」

「それがあるわね」

「貴女たち!止めないんですの!」

(キュービイーには何か策のような物があるように思える)

(策?)

(考えてもみて。キリコ君が里長さんに同調したり、しかもお菓子を買って来るなんておかしいと思わない?)

(…………確かに)

(その場しのぎの嘘で乗り切るかと思っただけど、本人も本気のようなね)

(むう…………)

(ならばここはキュービイーの策に乗るのが最善か)

(…………仕方ありません。それで、誰がキュービイーと?)

(私は近くにあるサングラール迷宮に籠る。今日一日は鍛練に励みたい)

(そういうことならば私も付き合います。申し訳ありませんが、ここはエンネアに任せます)

(わかったわ)

「おーい。決まったのか?」

「はい。キリコ君には私がついて行くわ」

「お主か。キュービーも構わんな？」

【ああ……】

「では長殿、よろしくお願いいたします」

「あいわかった」

ローゼリアはフルメタルドッグとエンネアを転位させた。

【……………】

ローゼリアにフルメタルドッグごと送ってもらったキリコは、ジュノー海上要塞付近で陣を張る衛士隊の様子を窺っていた。

「やはり相当な数が集まっているわね」

【魔煌機兵がおよそ百五十機、アハツエンが三十台か】

「全部で百八十……勝算は？」

【ある】

「自信満々、というわけね」

【そういうわけではないが】

「キリコ君、一つだけ答えて」

【？】

エンネアはフルメタルドッグを見つめる。

「私はこの戦いについては意義を感じないわ。キリコ君に限ってそんなことはないだろうけど、もし貴方が血に飢えて戦いを無闇に拵げようとしているなら——」

エンネアは戦弓を構える。

「ここで止めるわ。たとえ敵わなくても」

【……………】

フルメタルドッグはエンネアに背を向ける。

「答えて！」

【……俺には責任がある】

「え……………？」

エンネアから殺気が霧散する。

【ジュノーには皇妃が人質になっている】

「ええ。そうよ……………ッ!？」

エンネアはハツとなった。

「まさか……キリコ君……」

【……………】

キリコは何も言わず、ジュノー海上要塞を見つめる。

一方、オルデイスに潜入したⅦ組は街を見回っていた兵士やTMP隊員の姿に身動きが取れずにいた。

その時、アリサの親友でもあるフェリスと再会し、フェリスの実家であるフロラルド伯爵家に身を寄せていた。

「ごめんなさい、フェリス。大勢で押しかけてしまつて」

「気になさらないでください。アリサや皆さんのお役に立てれば何よりですわ」

「うむ。作戦が決まるまでゆっくりしていくがいい」

「貴方たちは私たちツールズOB、OGの希望なんだからね」

「ありがとうございます。ヴィンセント先輩、マルガリータ」

リインはヴィンセントとマルガリータに礼を言った。

「とはいえ、いつまでもここにいるわけにはいきませんね」

「そうね。それにしても、どうして衛士隊の数が少ないのかしら?」

「そのことなんだけど……」

マルガリータが口を開く。

「衛士隊はジュノー海上要塞の方の守備についたらしいのよねえ」

「ジュノーに!？」

「第三機甲師団が詰めているんじゃないんですか!？」

「急な事だったから詳しくはわからないが、衛士隊と第三機甲師団がそっくり丸ごと入れ代わったのだ」

「じゃあ、城館の守りにっているのは……」

「叔父上率いる、第三機甲師団……!」

「そしてTMPの精鋭か……」

「それだけじゃなさそうだぜ」

「え?」

「そういえばクロウ、オルデイスに入ってから城館の方を気にして

たね」

「ああ、《氷の乙女》とは別に——昔馴染みを見かけた気がしてな。それこそトワがいたら飛び上がったって喜びそうなヤツが」

『!?!』

VII組は唾然とした。

「本当か、それは!?!」

「間違いねえ」

「あのアンゼリカさんが……」

「……もしそれが本当なら更に一筋縄では行かなそうですね」

「あの破天荒パイセンか……。面白くなってきたじゃあねえか。こうなりや忍び込むしかねえだろ。大貴族サマのお屋敷によ」

「簡単に言うな……君は」

「だが、それが可能であるならばリーグニッツ知事の真意を確かめられるな」

「真意?」

「ああ。妙じゃないか? 鉄血宰相の盟友と言われるリーグニッツ知事がどうしてオルデイスに軟禁されているのか」

「あの御仁に限って、戦争を後押しするとは思えんが」

「……それかもしれないな」

マキアスは眼鏡のブリッジを上げる。

「え?」

「父だからということとは置いておいて……」

マキアスは一つ咳払いをした。

「あの人は鉄血宰相のやり方を常に支持していたわけじゃないんだ。時には反対の立場に立って意見をしたりもした。多分、今回の一件も……」

「対立する形になってオルデイスに異動させられた、ということか」

「ユーシスさんの指摘通りでしょう」

ミュゼは毅然と肯定した。

「とにかく、まずは本人に会わなくてはな」

「ねえ、ミュゼ。城館に入るためのルートはないの?」

「ユウナ……」

「侵入する前提で聞くのはどうかと……」

「ふふ、公女であるとはいえ、そこに拘りはありません。亡き両親との想い出の城館に囚われしあの方々を、必ずやお救いしましょう」

「そうか——わかった」

「ならば、我らも肚を括らなければならぬな」

「そして侵入経路ですが、クロウさんがご存知ではないかと」

「へっ……」

「つて、そうなのかよ!?!」

「つたく、ヴィータのヤツもどこまで教えてんだよ……」

「クロウは頭をガシガシと搔くと、すぐに笑みを浮かべる。

「付いてきな。良い所に案内してやるよ」

「クロウはそう言つて、フロラルド伯爵家邸宅を出て行つた。」

「キリコ君、そろそろ出なくていいの?」

「今から出る」

「キリコはフルメタルドッグの最後の調整を終える。

「魔煌機兵と戦車隊は俺がやる。あんたは里に戻ってくれていい」

「え!?!」

「その代わり、これをオルデイスで購入していてくれ」

「キリコはエンネアにメモ用紙と紙幣を渡した。

「これって……ええっ!?!」

「エンネアはメモ用紙の内容に驚く。

「ちよ……大丈夫なの?このチョイスで」

「ローゼリアの出した注文に相違ないだろう。それに三回も聞き直してなお、それを買って来いと言われた以上、文句を言われる筋合いはない」

「わかったわ……でも、ここで見届けさせてもらいます」

「好きにしろ」

「キリコはフルメタルドッグに乗り込んだ。」

「キリコ君」

【？】

「武運を祈ってるわ」

【……………】

フルメタルドッグはトランプルリガーを展開し、走り出した。

【……………】

エンネアはフルメタルドッグの背中を見つめる。

「キリコ君……………絶対に皇妃を救出し、責任を果たして来て。たと

え、皇妃に拒絶されようとも」

「……………やはり間違いではなかったか。あの背中が」

「あ……………あなたは……………！」

エンネアは背後に現れた人物に驚きを隠せなかった。

【ええい！どうなっている!?!】

【こんな不整地で……………どうしてこんなに動ける!?!】

『一番隊壊滅！二番、三番隊損傷甚大！』

『戦車部隊は何をしている!?!』

『こちら戦車隊！迎撃に……………うわあ!!』

『どうした!?!応答せよ！応答せよ!』

ジユノー海上要塞に展開していた衛士隊作戦指令部は蜂の巣をつついたような騒ぎに陥っていた。

どこからともなく現れた一機の機甲兵に横腹を突かれ、魔煌機兵部隊は反撃も出来ずに倒されていった。

また、背後に展開していた戦車隊も機動力に勝る機甲兵に劣勢を強いられたばかりか、半数以上が潰された。

『バカな……………こんなバカな……………!!』

『ええい、要塞からも魔煌機兵を出せ!』

『し、しかし……………あれは要塞守備隊の……………!』

『うるさい！物量では此方が圧倒的なのだ！徹底的に叩き潰せえ!!』

作戦指令は唾を撒き散らしながら命令を飛ばす。

故に気づけなかった。

これから始まる蹂躪劇の幕開けに。

「キリコ side」

【さすがに兵士の練度は高いな。だが指揮官がああではな】  
フルメタルドッグの通信回線を敢えてオープンにしておいたが、聴こえてくるのは指揮官の雑言くらいだ。

海上要塞の守備隊から戦力を惜しみなく投じてくる所を見ると、指揮官は相当殲滅戦に拘っているらしい。

だが要塞から戦力が出てくるというなら、それはそれで好都合だ。ここである程度戦力を叩いておけば、その分あいつらが楽になる。炎と硝煙にまみれ、血で染め上げられようとも、俺は戦い続ける。戦って戦って戦い抜いて、呪いを消し去る。

これが俺にできる、精一杯の償いだ。

「キリコ side out」

フルメタルドッグは銃撃と爆撃を十分に活かし、魔煌機兵部隊のおよそ四分の三を壊滅させた。

戦車隊のほとんどが恐れをなし、生き残ったパイロットはほうほうの低で要塞へと撤退して行った。

「く、くそっ！」

【死にたくなければ降りろ】

【ツ!?ほぎけ!】

メルギアがブレードを振り上げ斬りかかる。

【遅い】

フルメタルドッグは冷静にいなし、背部エンジンに撃ち込む。背部エンジンをやられたメルギアは倒れこみ、爆発した。

【くっ……!】

【た、隊長が……!】

【し、仕方ない……ここはひとまず——】

ゾルゲがフルメタルドッグに背を向けた瞬間——

【敵前逃亡は死刑だ!!】

ヘクトル系を思わせる重装甲の魔煌機兵が棍棒で背を向けたゾルゲを叩き潰した。

【なっ!?!】

【あれは確か……開発中の——】

【貴様らは知らんでも良い】

空からケストレル系を思わせる魔煌機兵が残りのゾルゲのコックピット部を細身の剣で突き刺す。

【おそらく、パイロットは即死か】

キリコは目の前の二機を見据える。

【さて。我はジュノー海上要塞守備隊長のゲーアノート大尉である。我が軍馬たる剛力のハンニバルで直々に処刑してくれようぞ!】

【雑兵をいくら潰そうとも、この私ジュノー海上要塞守備隊長と副長のレオポルド中尉が操る神速のモルドレッドの前には虫けら同然!】

【……………】

二機から響く声に、キリコは耳障りを覚える。

【さて、そのパイロット】

【……………】

【このままむぎむぎ死ぬのは面白くないだろう? 名を名乗れ】

【……………キリコ・キュービー】

【……………】

ゲーアノート大尉とレオポルド中尉の動きが止まる。

【ワツハハハハハツ!!!】

弾けたように笑い出した。それは嘲りだった。

【アツハハハハハツ!! た、大尉……こやつ、頭がイカれているようですよ!】

【言うに事欠いてキリコ・キュービーだと?! 可哀想に、恐怖でハツタリしか出てこんか!?!】

ゲーアノート大尉とレオポルド中尉は、フルメタルドッグを前にしても余裕綽々といった態度だった。

【……………】



キリコは怒りを通り越して呆れ果てる。

【まあいい。貴様は死ねえ!】

ハンニバルは棍棒を振り上げる。

【……………】

フルメタルドッグは後方に下がって回避した。

【甘いわっ!】

先回りしていたモルドレットが後方で待ち構える。

【……………】

キリコは冷静に左脚のターンピックを展開し、機体をスピンさせる。そのままの勢いでモルドレットにカウンターパンチを叩き込む。

【ぐあっ!?!】

モルドレットは後方に突き飛ばされる。

【き、貴様あ……………!】

【……………】

【落ちつけ。そんなものはただのマグレよ!】  
ハンニバルは棍棒を振り上げ、接近する。

【……………】

フルメタルドッグは反時計回りに回り込み、ハンニバルの背中に銃撃をくらわせる。

【ぬおっ!?!】

ゲーアノート大尉は一瞬、何が起きたのかわからなかった。

【お、おのれ……………!】

【……………時間が惜しい】

【何っ!?!】

【茶番はさっさと終わらせる】

キリコは操縦桿を握りしめる。

【……………】

「そうだ。俺はここでオルディーネと契約したんだ」

一方、地下水路からカイエン公爵家城館を目指すVII組は歯車のようなものが彫られた扉の前に立っていた。

「元々はお前さんの先祖が管理していたんだろ？」

「はい。獅子戦役の後年、蒼の騎神が眠りについたこの場所を当時のカイエン公が偶然発見したそうです。その後、代々のカイエン公爵の爵位継承と共に明かされる秘密として、実に200年以上守ってきたのです」

「そうだったのか……。そんなに長い間守ってきたのか」  
リインはミュゼの明かす秘密に感嘆した。

「もつとも……。それはカイエン公爵家がアルノール家に対する怨みを募り続けてきた証でもありますね」

「あ……」

「ミュゼ……」

「そうか、そなたの先祖は……」

「はい。皇太子マンフレートを謀殺した、偽帝オルトロスです」

「そ、そうなの!？」

「四大名門はそれぞれアルベルト、オルトロス、グンナル、ルキウスの四人の皇子の血筋だと言われているんだ」

「他の貴族と別格なのは伊達じやないわね」

「遡れば、皇族なんだからな」

「ミュゼやユーシスさん、それにアンゼリカさんってそんな凄い血筋だったんだ……」

ユウナは頭がクラクラした。

「別にそこまで畏まる必要はない」

「そうですよ。あくまでご先祖はご先祖ですから」

「おばあちゃんから聞きましたけど、ミュゼさんの異能は古のアルノール家の血が極まったものだそうです」

「アルノール家の血と言っても、大分薄くなっていると思いますよ?」

「それでいいのか?」

リインは呆れた。

「そろそろ行くとしようぜ。多分、この先には隻眼や氷の乙女が待ち構えているだろうしよ」

「《隻眼のゼクス》か。かなりの腕利きなんだろう？」

「ああ。叔父上は帝国で五本の指に入る達人だ」

「あの方が敵に回るとは考えづらいが、警戒するに越したことはないか」

「とにかく、気を引き締めていこう」

VII組は探索を再開した。

(そろそろキリコさんの元へと着いた頃でしょうか)

【バ、バカな……！】

【こ、こんなハズじゃ……！】

ゲーアノート大尉とレオポルド中尉は目の前で起きていることが信じられなかった。

性能差では圧倒的に勝るはずの魔煌機兵はフルメタルドッグに  
いように振り回されていた。

ハンニバルが攻撃を仕掛けても、背中に回り込まれて撃たれる。

モルドレットが上下左右に動いても、動きが捉えられて後の先を取られる。

【た、大尉……！】

【う、狼狽えるな！どんな手を使ったか知らぬが、性能は此方が上だ！  
！このまま潰り潰してしまえええっ！】

【……………】

二人は気づかなかつた。

キリコは何ら特別なことはしていないということ。

【……………】

フルメタルドッグはハンニバルの背中に回り、機甲兵用ブレードを  
質量弾にして投げつける。打ち所が悪かったのか、ハンニバルの動き  
が鈍る。

【ちよこざいな——】

【これで……！】

だめ押しとばかりに、ミサイルポッドからありったけのミサイルを  
背部エンジンに撃ち込んだ。

【ぬ、ぬあああああっ!?!】

ハンニバルは爆発し、ゲーアノート大尉は爆死した。

【大尉!?!おのれえ!】

レオポルド中尉は怒りのままに、モルドレットを突進させる。

【遅い】

フルメタルドッグはモルドレットの脚部をへヴィマシンガンとガトリング砲で集中的に狙う。

【うわっ!?!】

モルドレットはもんどりうつ。

【……………】

フルメタルドッグは接近してモルドレットにおもいきりシヨルダータックルをぶちかます。

モルドレットは一気に岸壁まで追いやられた。

【な、なんのこれしき!】

レオポルド中尉はモルドレットのエンジンを吹かす。

だがモルドレットが浮くことはなかった。

【し、しまった!】

【これで……………!】

フルメタルドッグはモルドレットの足元に二連装対戦車ミサイルを撃ち込んだ。

浮遊することができないモルドレットは足を踏み外した。

【い、いやだ……………いやだあああっ!!】

レオポルド中尉の絶叫と共に、モルドレットは海に落ちていった。

【外は終わった。後は——】

【やはり貴様か、キリコ・キュービィー!】

【!?!】

キリコは声のする方向を見る。そこには腕組みをし、威風堂々とした女性が立っていた。

【久方ぶりだな。キュービィー】

【オーレリアか……………】

立っていたのは、元ラマール州領邦軍指令にして、トールズ第Ⅱ分

校長のオーレリア・ルグインだった。

「さすがだ。キリコ」

ジュノー海上要塞外回廊で、フルメタルドッグの戦いを見ていた者がいた。

「あの紛い物の存在は私にとっても憎んでも憎み足りない。だが今は我慢してやるが、アルベリヒめ」

両手をきつく握りしめる。

「早く上がって来い、キリコ。お前を倒すのは私だ」

## 攻城②

フルメタルドッグから降りたキリコはオーレリアと対面した。

「先日、ミルディーヌ様からそなたの生存の事を聞いた時はとても信じられなかったが、まさか本当に生きていたとはな」

「……………」

「しかも不死身の異能を持った異界からの転生者だと？まったく、そなたはどこまで私を楽しませるつもりだ？」

「……………」

（キリコ君に黄金の羅刹殿を楽しませるつもりは毛頭ないと思うけれど）

オーレリアの発言にエンネアは呆れる。

「そして、蒼の騎士に槍の聖女の弟子たちも加わるとはな。これもひとえにシュバルツアーの人徳か？」

「さあな」

「まあよいわ。それより行かんのか？」

「行くなって、貴女もジュノー海上要塞に？」

「ああ。ここに皇妃様とハーシエルが囚われているそうだからな」

「トワ教官が？」

「知らなんだのか？カイエン公爵家城館にいるのはオルデイス暫定統括者となったレーグニッツ帝都知事だけだ」

オーレリアは意外と言わんばかりの顔をした。

「……………」

「キリコ君は初耳……………のようね」

エンネアはキリコの横顔を見て苦笑いを浮かべる。

「まあミルディーヌ様にも何かしらお考えがあるのである。それよりその、出てこい」

「アハハ、見つかつちやった☆」

赤い髪の派手な女がジュノー海上要塞の門の陰から現れた。

「貴女は、紅の戦鬼殿……………?!」

「……………シャーリィ・オルランドか」

「そういうこと。久しぶりだね、キリコ」

「そういえば、戦鬼殿はキリコ君とノーザンブリアにあったD∴G  
教団のロツジを崩壊させたのよね？」

「ほう、そのようなことがあったのか」

「まーね。魔弓のお姉さんはともかく、黄金の羅刹もいるなんてね。  
みんなで要塞に突っ込んでみんではしょ？」

シャーリイはジュノー海上要塞の天守を指さす。

「我らは皇妃様とハーシエルの救出のためだ。だがオルランドよ、  
そなたはなぜここに？」

「イプシロンって奴のフォローだよ」

「イプシロンがここににいるのか？」

キリコは顔を上げた。

「キリコ君、知ってるの？」

「…………古い付き合いだ」

「アストラギウスとやらのか？」

「ああ…………」

キリコは天守を見つめる。

「ならばそなたは我らの敵のはずではないのか？」

「ここんところ、あのアルベリヒのネチネチべつとりした指示がずつ  
と続いててさ。ストレスが溜まりまくってて何でもいいから憂さ晴  
らししたいんだよね」

「なるほどな…………」

オーレリアは少し考えた。

「良かろう。そなたも戦列に加わるがよい」

「羅刹殿!」

「腹に一物抱えている者より信用できる。それにキュービィー、そ  
なたならば分かるだろう？」

「この先は人数が多い方がいい」

「そーなんだ？」

「以前、我が居城に新旧VII組と共に突入した際、主攻と副攻に別れて  
いてな。これ以上は言わぬでも分かるであろう？」

「もっちらろん♪」

シャーリイはニヤリと笑みを浮かべる。

「とりあえず、班分けする必要があるですね」

「手っ取り早くジャンケンで良いんじゃない？」

「……………」

「良かろう。では…………」

ジャンケンの結果…………

「頼むぞ、紅の戦鬼よ」

「はいはい！」

オーレリア・シャーリイ組と

「よろしくね、キリコ君」

「……………」

エンネア・キリコ組が決定した。

「では次に、主攻と副攻を決めねばならぬな」

ジユノー海上要塞に入った四人は、二つのルートをどちらかが行くことを話合っていた。

「…………主攻でいい」

「そっちに行くんだ？まあ、キリコが良いならそれでいいけどさ」

「イプシロンとやらと戦うためか？」

「ああ」

「その前に我らが倒してしまうやもしれんぞ？」

「それはない。いくらあなたたちでもイプシロンに勝つことは難しい」

キリコは断言した。

「…………なんだと？」

「あんたはコンピュータより速く動けるのか？」

「キリコ君、それどういう意味？」

「奴は普通の人間じゃない。戦うために生まれたPSだ」

「PS？」

「完全なる兵士、パーフェクトソルジャーの略称だ」



「完全……」

「そうだ、奴は……」

キリコはオーレリアたちにPSについてのことを余すことなく語った。

「何……それ……」

「脳に手を加えて、能力を強化された人間兵器!」

「おぞましいものだ。よもやそのようなもので生み出すとは……」

オーレリアたちは顔をしかめた。

「これでわかっただろう。わかったら奴とは戦わな——」

「……面白い。ますます戦ってみたくなかったわ」

「なんだと……?」

「異世界の完全なる兵士、我が剣にて調伏させてみせようぞ」

「あたしも戦ってみたいなあ。なんか面白そうだし」

「よせ。敵う相手じゃない」

「フッフ、だからこそ燃えるのだ。武人故の性かな」

オーレリアはニヤリと笑みを浮かべ、戦意を露にする。

「最近、歯応えのない敵ばっかできさ。思いつきり暴れたいんだよね〜♪」

シャーリイは得物であるテストタロツサを取り出す。

「そういうわけで、我らに主攻は譲ってもらうぞ」

「……わかった。好きにしろ」

キリコは副攻のルートに向かって歩き出した。

「ま、待って!」

エンネアはキリコの後を追いかける。

「さて、我らも行くとしよう」

「オツケー。な・に・が現れるかな〜?」

オーレリアとシャーリイも出発した。

「あの二人、大丈夫かしら?」

「イプシロンに出会わなければな」

キリコとエンネアは衛士隊や人形兵器を蹴散らしながら、副攻を突き進んでいた。

「そんなに強いのか？」

「身体能力は勿論、思考速度と情報処理は常人のそれをはるかに超える。更にはつきり言えば、俺より上だ」

「キリコ君以上……」

エンネアの背中に冷たいものが流れる。

「そう言えば、キリコ君の記憶に出てきた……」

「ああ。デライダ高地のレッドシオルダー基地で目覚めたあいつこそがイプシロンだ」

「なるほど……」

「奴は強い。もし出くわしたら先に行っててくれ」

「キリコ君……」

「奴は俺との決着を望んでいる。機甲兵はないが、やるしかない」

「………わかったわ」

キリコとエンネアは速度を上げた。

「何者だ、貴様は」

一方、副攻と同じように敵を蹴散らしながら主攻を進んでいたオーレリアとシャーリイは銀髪の男と対峙していた。

「やあ、イプシロン」

「紅の戦鬼殿か。持ち場を離れられては困る」

「ほう、そなたがイプシロンか」

「黄金の羅刹か……戦鬼殿、これは貴女が裏切ったとみて良いな？」

「裏切ったわけじゃないけどさ。ただ、ちよつと味見したくてさ♪」  
シャーリイは得物を取り出す。

「イプシロンとやら。キュービーの言うPSとやらの力、試してくれよう」

オーレリアも宝剣を抜く。

「……良かろう」

イプシロンは穂先が湾曲した長槍を構える。さらに人形兵器も二

体現れる。

「紅の戦鬼に黄金の羅刹。相手に取って不足なし。パーフェクトソルジャーの力、受けてみる」

一方、カイエン公爵家城館では……

「待っていたよ。Ⅶ組の諸君」

饗応の間でⅦ組は紫色の髪的女と対峙していた。

紫色の髪的女は仮面を被っていた。

「へっ……やっぱりお前が出張つてやがったか。ゼリカ——いや今は《紅のロスヴァイセ》だったか」

「フフ、元ジークフリード君だったか。確かに私の存在は再規定されている。いかなる温情も通用しない。まあ、麗しき公女殿を連れてきたのは個人的にはグツジョブと言いたいが」

「ふふ、恐れ入ります」

「アンゼリカさん……本当に……」

「フツ、金髪の君も青髪の君もワガママボディの君も妖精のごとき君も紫電の貴女もピンク派の君も黒兎の君も今宵の獲物にふさわしい。後で存分に語り合おうではないか！」

『アンゼリカ（さん）!?!』

新旧Ⅶ組女子は一斉につっこむ。

「……ふふ、しかし久しぶりだ。リイン君にツールズⅦ組の諸君」

紅のロスヴァイセが一旦下がり、眼鏡をかけた男性が口を開いた。

「レーグニッツ知事……」

「そして良く来たな、マキアス。だがな、これはいかん。司法監察官の権限を逸脱した越権行為が過ぎるようだが？」

「ああ、百も承知だ。だが司法監察官には緊急時のための超法規捜索手順が存在する。プリシラ様だけでなく、民間人のハーシエル先輩。お二人がジュノー海上要塞に軟禁となっている時点で行政への強制監禁案件にはなるんだ」

「そのとおり。その場合、帝都知事であろうと一切の権限は及ばない」

リーグニッツ知事は穏やかな表情で言った。

「……っ！」

マキアスはそんなリーグニッツ知事の態度に腹が立った。

「カール・リーグニッツ！それがわからない貴方じゃないだろう！それなのに何故、帝国政府の意向のまま、お二人の軟禁に手を貸している!?僕の知っている貴方ならば中央政府の意向など撥ね付ける気概くらい——」

「……逆らったからこそ閣下はオルデイスへと異動させられたのです」

リーグニッツ知事の後ろで控えていたクレア少佐が進み出た。その表情はひどく辛いものだった。

「なっ!?!」

「まさか……」

リインたちは二の句が継げなくなる。

「私の立場から説明するのもおかしな話でしょうが……黄昏の日以來、知事閣下は信頼できる方々と共に様々な形で戦争に反対の道を歩まれました」

「国家総動員法への反対に、帝都庁を挙げての反戦キャンペーン、皇陛下の暗殺未遂が共和国の陰謀というのは誤りであるという指摘、ですね?」

ミュゼはクレア少佐の言葉に答える。

「そのとおりです。しかしそのどれもが実を結ばず、不自然なまでの失敗に終わりました。賛同者の突然の心変わり、もしくははあり得ない誤解と連絡不足。さらには事故に巻き込まれての関係者の入院。どれもまったくの偶然によって」

「………な………」

「ま、まさか、まさかそれまでもが………」

「巨イナル黄昏の呪い……」

「因果律操作機能とでも言うべき、強制力ですね」

「みなさんもご覧になってきたと思います。戦争に懐疑的だった方々が一転して開戦を望むようになってしまう様を」

「ですが、そういった分かり易い変化以上に“見えない力”が帝国の在り方を歪めている。特に軍や行政の現場においてそれは顕著……違いますか？」

ミュゼはレーグニッツ知事に鋭い視線を向ける。

「……そこまでか……」

「父さん……本当なのか？」

「肯定するつもりはない。私は私の政治信条で動いたままで。そしてそれが裏目に出たとしてもそれは政治家としての私の力量不足」  
対するレーグニッツ知事は毅然とした態度を示す。

「国家総動員法の下に帝都の行政管理が一時的に統合され、代わりに海都の行政管理に回されたのも全ては私自身の限界によるものだろう」

「知事閣下……」

「その見えない力でいつの間にか底に詰め込まれてたつてことか」

「貴方は……それで良いんですか？」

「結果を受け止めるのも政治家であり、更には行政担当者というものだ。そして今の私は海都の暫定統括者。統括府であるこの城館並びに要塞の管理も任されている」

「では、ここにプリシラ皇妃様とトワ教官が居られないのは……」

「——二人を解放したくば『強制監察』及び『保護』の名目で挑んできたまえ。ただしこちらにも職務を全うさせてもらう」

レーグニッツ知事が右手を挙げると、控えていたTMP隊員たちがVII組を囲む。

「職務……ですか」

「父さん、貴方は……」

「……知事閣下の思惑と私の責務は異なりますが」

クレア少佐は導力銃を取り出す。

「元より衛士隊主導の軟禁……ですが見過ごすわけにはいきません。鉄道憲兵隊として、既に手配されたVII組を捨て置くことも——何よりも呪いの依代でもある、『鉄血の子供』としての使命のためにも！」

クレア少佐の瞳の色が変わった。その瞬間、TMP隊員たちに何か  
が伝播する。

「あれは……!?!」

「ブレイブオーダー!?!」

「いえ、何か違います!」

VII組に動揺が走る。

「――総員、戦闘体勢に移行!」

『!』

ラインの号令で平静さが戻る。

「良いでしょう。ですが、こちらにも譲れないものがあるんです!」

「これより、強制監察を開始する!」

新旧VII組は戦闘を開始した。

「どうした。この程度か?」

「はあ…はあ…はあ……」

「あはは……こりやわりとピンチかもね……」

オーレリアとシャーリイはイプシロンに追いつめられていた。

「人形兵器はともかくパーフェクトソルジャー、これほどとは」

「当然だ。如何に黄金の羅刹と言えど、PSである私には及ばない」

「くっ!」

「キリコの忠告……聞いたくべきだったか……」

「だが、引くわけにはいかん……!」

オーレリアが斬りかかる。

「遅いな」

イプシロンが一瞬速く動き、長槍で払う。

「うぐっ!?!」

防御が遅れたオーレリアは下がらざるを得なかった。

「斬り刻んで――」

「ハアッ!」

イプシロンはシャーリイの懷に飛び込み、テスタロッサの軌道を変  
える。

「嘘っ!？」

「ぬうんっ!」

「カハツ!」

長槍の連撃を受けたシャーリイは後方へとふき飛ばされる。

「そろそろ楽にしてやろう」

イプシロンは二人に止めを刺そうと長槍を構える。

「じよ、上等じゃん……!」

「できるものなら、な!」

シャーリイとオーレリアも死力をふりしぼる。

「フツ、良い覚悟だ——」

突然、イプシロンのARCU S IIに通信が入る。

「チツ、こんな時に……」

イプシロンはARCU S IIを開いた。

「どうした。……そうか」

イプシロンは通信を切り、長槍をしまう。

「既にキリコは軟禁場所に到達した。遺憾ながら、撤退させてもら  
う」

イプシロンは転移して行った。

「……………」

残された二人は得物をしまった。

「フーッ!」

「あれが完全なる兵士パーフェクトソルジャー……ぬかったわ」

「正直、撤退してくれて良かったかもね……」

「うむ。あのまま続けていれば、こちらが危うかった。もつと精進  
せねばならんな」

「あたしもいざれ借りは返さなきやね」

二人の闘志は萎えるどころか、さらに燃え上がる。

「とにかく急ぐぞ。既にキュービイーたちは皇妃殿下たちの元へと  
たどり着いたようだ」

「んじゃ、行こっか!」

二人は走り出した。

「本当に……キリコ君なの？」

「はい」

少し前、キリコはプリシラ皇妃とトワとの再会を果たしていた。

エンネアは部屋の外で待機していた。

「陛下を撃った罪で公開処刑されたって……」

「あの日、公開処刑されたのは別の死刑囚による身代わりだったそうです。俺自身は薬で仮死状態にされ、ヘイムダル監獄から逃がされました」

「身代わり……そうだったんだ……」

トワはキリコの話をしつかりと聞いた。

「キリコさん……」

プリシラ皇妃はキリコを見つめる。

「……」

キリコの表情も険しくなる。

「良かった……本当にご無事で何よりです」

プリシラ皇妃は憤怒でもなく悲壮でもなく、安堵の表情を浮かべる。

「っ！」

キリコは予想外の言葉に顔を上げる。

「俺はあんたの夫を撃った」

「はい……」

「罵らないのか……？」

「……貴方はエレボニアを覆う呪いに囚われたご友人を救うために身代わりになったと聞きました。それなのに、真実も明らかにされなのまま処刑されたと聞き、心を痛めていました」

「……」

「皇妃様はね、ずっと悩んでおられたの。キリコ君を死なせたのは、自分たちなんじゃないかって」

「……」

「でも……本当に良かった。皇妃様、どうかキリコ君を——」



「トワ教官、許していただく必要はありません」  
キリコはきつぱりと断りを入れる。

「キリコ君!?!どうして……!?!」

「なぜですか……?」

「たとえ許しを得ても、この国の人間が納得するはずがない」

「キリコさん……」

「下手をすれば、皇族の茶番劇だと言われるのがオチだ」

「それは……」

トワは言葉が見つからなかった。

「……それはアルノール家の落ち度です」

プリシラ皇妃はキリコをまっすぐ見つめる。

「全ての原因は、呪いの存在を知らながら放置していたアルノール家の責任です。たとえキリコさんが関わっていたとしても、それを責めるのは筋違いだと思います」

「キリコ君が呪いに?」

「ロツチ……ルスケ大佐辺りから聞かされたか」

「はい。キリコさんが異世界から転生したこと、不死の異能を持つこと、そして呪いの根源たる存在と因縁を持つことを」

「ど、どういうこと……?」

「それは……」

キリコはトワに自身についてのことを説明した。

「……………」

トワは茫然自失となった。

「二応、新旧Ⅶ組と一部の人間は知っています」

「そ、そうなんだ……」

トワはやつとこさ言葉を絞り出す。

「俺がここに来たのは二人を救出することと、ジュノー海上要塞を陥落させることです」

「どうして……!?!」

「俺の目的は呪いの根源たる存在を引きずり出すこと。これまで帝国各地で混乱を引き起こしたり要所を潰してきた理由もそれです」

「帝国各地の要所……」

「クロスベル、オーロックス砦、黒竜関。トワ教官も聞いたことがあるはずですよ」

「も、もしかして謎の蒼い機甲兵!？」

「はい」

「……………」

トワは二の句が継げなくなる。

「リイン教官たちは七の相克を勝ち進むことで呪いの根源に迫る姿勢ですが、その根源が俺が知っている存在であるなら呪いを俺自身の手で加速させなくてはなりません」

「で、でもキリコ君……それじゃあ……………」

「たとえ世界最悪のテロリストのレッテルを貼られようとも、俺にはこの道しか存在しない」

「どうにも……ならないの……………?」

「それが、俺の運命なら」

「さだめ……」

プリシラ皇妃はキリコの背負う宿命を垣間見た気がした。

「そろそろここを脱出する」

「脱出するのはいいけど、どこに行くの?」

「現在、オルデイスには教官たちがいます。カイエン公爵家の城館に連れて行きます」

「キリコ君はリイン君の指示でここに?」

「ここに来たのは俺の独断ですよ」

「え……………」

「とにかく、ここを出しましょう」

「う、うん。そうだ——」

突如、キリコたちの近くに魔法陣が顕れた。

「やはり来ていたか、キリコ」

「イプシロン……………!」

キリコとイプシロンは互いに殺気を放つ。

「キュービィー!」

後ろの扉が開き、オーレリアとシャーリイが入って来た。

「分校長!?!それに貴女は……!?!」

「オーレリア將軍……」

「皇妃殿下、ご無事で何よりでございます。ハーシエルも変わりないな?。」

「は、はい。そ、それより分校長、その傷は……」

「そこにいるイプシロンにつけられたものだ。キュービイーの忠告を無視した結果よ」

「強いなんてもんじゃないね。根っこの部分からして違うんだからさ」

「そんな相手が……」

トワは思わず後退りした。

「キュービイー」

「……………」

「任せて良いのだな?」

「ああ。だがその前に」

キリコは懐から封筒のようなものを取り出し、オーレリアに渡した。

「これは——」

「書いてあるとおりだ」

「えーと、退学……届け?」

横から覗きこんだシャーリイは封筒に書かれた文字を読む。

「キリコ君!?!」

思わぬ言葉にトワは狼狽えた。

「理由は言わなくても分かるはずだ」

「……………」

キリコの目を見たオーレリアは一瞥した後、懐にしまった。

「一応、預かっておく」

「すまない」

「礼などいらん。さっさと倒して帰って来い」

「キリコ、また会おうね」

「では参りましょう」

「は、はい……」

「……わかりました」

プリシラ皇妃とトワはオーレリアとシャーリイとエンネアに連れられて出ていった。

「やるべきことは終わった」

「そうか。なら……!」

イプシロンは長槍を構える。

「ああ」

キリコもアーマーマグナムをイプシロンに向ける。

一方、カイエン公爵家城館では決着がついていた。

アンチオーダーと呼ばれる特殊な機能の前にⅦ組は苦戦を強いられたが、ブレイブオーダーと似たものと理解し、反撃に転じた。

最終的には、クレア少佐率いるTMP隊員たちと紅のロスヴァイセは膝をつくことになった。

「フツ、なかなか熱い……!さすがは氷にヒビを入れた——」

突如、紅のロスヴァイセは頭を抑え、苦しみ出した。

「ア、アンゼリカさん!」

「……………ト……………ワ……………クロ、ウ……………ジョル、ジユ……………!」

紅のロスヴァイセはたどたどしく、名前を絞り出す。

「あ……………」

「まさか、記憶が戻りかけてんのか!」

「やっぱりあの仮面か……………」

クロウは前が出る。

「おいゼリカ——アンゼリカ・ログナー!しっかりしやがれ!!」

「ア……………アンゼリカ……………?」

「そうだろ!お前はログナー家の鼻つまみで、オンナばっかのハーレム作って、俺らと1年間好き勝手しまくっただろうが!」

「……………ち……………違う……………私、は……………紅のロス……………」

「いいえ、それは仮初の役割です……!」

「先輩、自分を強く持つてください! そうすれば、きつと……!」

「お前にはまだやる事が残ってんだろ! 戻ってこいや! ゼリカアアアツ!!」

「グツ……うああああつ!!」

次の瞬間、仮面は完全に砕けて地面に落ちた。

「……………」

「あ……………」

クレア少佐は安堵したような表情を浮かべる。

「せ、先輩……!!」

「アンゼリカさん!」

リンたちは膝をつくアンゼリカに駆け寄る。

「つ……………はは……………」

アンゼリカは微笑みを浮かべる。

「……………頼みがあるんだ……………アリサ君たち。

……………もう少しだけ近くに寄ってくれないか……………?

……………その可愛い顔は仮面越しじゃ……………堪能出来なかったからね」

「ゼリカ、お前……………」

「記憶が戻ったんですね!」

「アンゼリカさん……………良かった……………」

ユウナは涙を拭う。

「フフ、ユウナ君。君には涙は似合わないよ。ラウラ君にサラ教官、凛々しい姿はどこにいったのかな? ファイ君にアルティナ君にセリーヌ君、このまま抱き締めても良いかい? それとも、アリサ君とエマ君の胸の中で溺れてしまおうか……………」

「つたく、アンタって娘は……………」

「空気読んでもものを読みなさい」

「つーかこのパイセン……………一気に元に戻り過ぎだろ」

「ふふ、元々の記憶や人格はそのままだったみたいですし。あの仮面で強制的に役割を与えていたに過ぎないでしょう」

「俺の時とは事情が違うってか。ヘッ……ジオルジュの野郎、妙にツメが甘いつつうか」

クロウは自身の経験と比較した。

「……それが彼に僅かに残った『隙』なのかもしれないね。……いいえ、きつと私も……」

「クレア少佐……」

「……まだ、戦いますか？」

「いいえ。残念ですが……任務は失敗のようですね」

クレア少佐は導力銃をしまう。

「リーヴェルト少佐……」

レーグニッツ知事はクレア少佐を見つめる。

「どうやら区切りはついたようだな」

饗応の間に、眼帯をかけた軍人が入って来た。

「貴方は……!」

「……お疲れ様です、將軍閣下」

「叔父上!」

新旧Ⅶ組は眼帯をかけた軍人を驚愕の目で見つめる。

「初めての者もいるようだ。第三機甲師団司令ゼクス・ヴァンダーという。久しぶりだな、シュバルツアー君。そしてⅦ組の諸君」

「……お久しぶりです。中将——いえ、將軍閣下」

「自分たちを捕まえに……というわけでもなさそうですが」

「うむ——事態の收拾に來ただけだ。それよりもⅦ組の諸君、久闊を叙している場合ではない。一刻も早くジュノーに向かうのだ」

「ジュノーに？」

「そうだった!ジュノー海上要塞には皇妃様とトワ先輩がいるんだ!」

「衛士隊がわんさかいるらしいんだがな」

「その付近にも戦力が集結していることは間違いないだろう」

「いや、既に壊滅状態であった」

『!?!』

Ⅶ組とクレア少佐は言葉を失う。

「か、壊滅!？」

「精鋭揃いの衛士隊が……!？」

「部下に遠目から偵察させた。要塞付近で大規模な戦闘が確認された。いや、もはや戦闘とは呼べぬ。一方的な蹂躪であろう」

「し、しかし、いったいどこと……!？」

「分からぬ」

ゼクス将軍は断言した。

「リーヴェルト少佐、後のことは……」

「はい。お任せいたします、将軍閣下」

クレア少佐は頭を下げた。

「現時刻を以て鉄道憲兵隊は城館から撤退、リーヴス方面へと戻ります」

「リーヴス……」

「そういや、リーヴスにはあの皇太子が本校生徒ごと入っているんだったな」

「セドリツク殿下が？」

「東リーヴス街道で魔煌機兵が暴走する事態が起きたろ。元々は衛士隊が住民を脅しつけるために侵攻したものだっただけだ」

「なんですって!？」

「はい。その後、事態を重く見た殿下がツールズ本校生徒と共にリーヴスに入り、皇太子権限でTMPを置き、衛士隊は一人たりとも入らせない措置を取ったんです」

「殿下……」

「なぜそのようなことを自分たちに？」

「こう言っただけなんです、僕たちは追われる身です。何か策謀があると考えるのが自然です」

「……現在、あなた方にかけている指名手配が通用するのは鉄道憲兵隊と帝都憲兵隊、そして衛士隊に限られています。あなた方が上手く立ち回るためにはそういった「隙」を突いていくしかないですよ」

「隙……」

「では、失礼いたします」

クレア少佐はTMP隊員たちと共にVII組らに敬礼をして去って行った。

「クレア教官……」

「あの人も色々あるのでしょうか」

「そう……だよね」

「とりあえずシュバルツァー、行くんだろ」

「ああ、とにかくジュノーに行こう！」

『おおっ！』

「何が起こるか分からぬ。十分に気をつけるのだぞ」  
新旧VII組は饗応の間を飛び出して行った。

一方、キリコとイプシロンの戦闘は激化していた。

「ハアッ！」

イプシロンが長槍で斬りかかる。

「っ！」

キリコは刃をギリギリでかわす。

「クリアブラスト」

返す刀でキリコはクラフト技を放つ。

「くっ！」

イプシロンは横っ飛びでかわす。

「ハンティングスロー」

キリコは強化された投げナイフをなげる。

「甘いっ！」

イプシロンは投げナイフを長槍ではたき落とす。

「アーマーブレイクII」

続けてリミッターを外したアーマーマグナムの一撃を放つ。

「無駄だっ！」

イプシロンは最小限の動きでかわし、突きを放つ。

「クッ！」

キリコは回避した際に体勢を崩した。



「もらったー！」

イプシロンは長槍を振り下ろそうとした。

「……………」

キリコは体勢を崩しながらも、天井のスプリンクラーをアーマーマグナムで撃ち抜いた。スプリンクラーから大量の水が流れ落ちて、イプシロンがそれを被る。

「しまっ…………ぐはっ!？」

キリコが死角からイプシロンを殴りつける。イプシロンは吹っ飛ばされた。

「いくらPSでも、見えなければ何もできん」

キリコは起き上がるイプシロンを見つめる。

「確かにな。今のは効いたぞ」

イプシロンは長槍を取り、構え直す。

「やはり立ってくるか」

「当然だ。貴様を殺すことで、私の存在を証明できるからだ」

「イプシロン…………」

「無駄話は終わりだ。行くぞ、キリコ！」

イプシロンはキリコめがけて斬りかかる。

「……………」

キリコは微動だにしなかった。

「臆したかあっ!!」

キリコの首に長槍の刃が迫る。

「っ！」

キリコは寸前でかわした。刃はキリコの髪の毛先を斬っただけだった。

「なっ!？」

イプシロンは一瞬硬直した。

「これで…………！」

キリコは大型ナイフを抜き、イプシロンの心臓に狙いを定め、一気に突き刺す。

「!？」

だが大型ナイフが突き刺したのは、人形だった。

「これは……っ!？」

人形から硝煙の臭いが漂い、キリコは大型ナイフを手放す。床に落ちた瞬間、人形は爆発した。

「人形を利用したトラップか。出てこい」

「フフフフ……」

女の笑い声が響いた。

空中に魔法陣が顕れ、その上に金髪の女が現れた。

「ごきげんよう。貴方が不死の異能者ですわね」

「……あんたは？」

「これは失礼。私は結社身喰らう蛇の使徒第三柱《根源の錬金術師》  
マリアベル・クロイス。以後見知りおきを」

「……………」

マリアベルは優雅に挨拶をしたが、キリコには慇懃無礼にしか感じ  
なかつた。

「それにしても妙ですわね。あの人形に仕込んだ爆薬は突き刺した  
瞬間起爆するようになってはいるはずなのに」

「偶然、粗悪品だった。そういうことだろう」

「なるほど。やはりダブルチェックは欠かせませんわね」

「それで、いったい何の用だ」

「黒のアルベリヒの指示で、イプシロンの回収に来ましたの」

「待て！私はまだ……………」

「……………」

マリアベルはフィンガースナップを鳴らした。イプシロンは糸の  
切れた操り人形のように崩れ落ちた。

「な……………」

「フフ、これくらい造作もないこと。それにしても貴方……………」

「？」

マリアベルはキリコを見据える。

「私の造ったお人形の相手にはもう少し進歩していただかないといけませんわね」

「人……形………?」

「フフ。そう、《F》という名前のね」

「なんだと!」

キリコは必死に心を落ち着かせる。

「……《F》は黒のアルペリヒが造ったのではないのか?」

「あの男がやったのはあくまでも調整。あの《F》は私の作品の一つ」

「……………」

「まあ、愛しのローゼンベルク人形には遠く及ばない駄作ですが」

「……………」

キリコはマリアベルを怒りの表情で見据える。

「何ですか?その目は」

「なぜあんなものを造った」

「うーん、そうですねえ。強いて言えば気まぐれでしょうか」

「気まぐれ?」

「そう、気まぐれ。ですから、どこぞの誰かさんに負けた時はスクラップにしてしまおうと思っただんですけど、あの男がねだるものから仕方がなく譲ったんですの」

マリアベルはいくつかのローゼンベルク人形を取り出した。

「ああ、私の可愛い子たち。やっぱりあなたたちさえいればいいわ

♥?」

「……………」

キリコはマリアベルめがけてアーマーマグナムの引き金を引く。

「!」

マリアベルは障壁を張って防御する。

「あらあら。どういいうつもりかしら?」

「この場で殺す」

「フフフ、出来るかしら?」

マリアベルは魔導杖を掲げる。  
すると天井に巨大な魔法陣が描かれる。

「これは……!」

「ではぎげんよう」

マリアベルはイプシロンを連れて、転移して行った。

(色々と言いたいことはあったが、今は脱出が先か)

キリコは頭を切り換え、部屋を出ようとした。だが扉は何らかの力が加わっていてびくともしなかった。

「チッ!」

キリコは窓側へと走る。

その瞬間、魔法陣が輝き出す。その数秒後……

ジュノー海上要塞は大爆発を起こした。

キリコは爆風を浴び、窓の外に吹き飛ばされた。

「なっ……!?!」

「ジュノーが……!」

「な、なんなのよ!あの爆発は!」

Ⅶ組は、ジュノー海上要塞が大爆発を起こした瞬間を目撃した。

「セリーヌ、今のは!」

「一瞬だけど、魔術の反応があったわ。まさかあの女……」

「残念だけど、深淵のお姉さんとは違うよ」

「なっ!?!」

「き、君は……」

「シャーリイ・オルランド……!」

新旧Ⅶ組は歩いて来たシャーリイの存在に驚愕し、ファイは双銃剣を構える。

「……何しに来たの?」

「まあまあ落ち着きなって。別に戦いに来たんじゃないんだから」

「どういうつもりかしら?」

「フフ、こういうためだ」

シャーリイの後ろからプリシラ皇妃を連れたオーレリアが歩いて

来た。

「ぶ、ぶ、分校長!？」

「それに皇妃殿下!？」

VII組は驚きを隠せなかった。

「ど、どうしてこちらに……」

「どうしてもこうしてもない。皇妃殿下の危機に駆けつけたまでよ」

「ご、ご無事で何よりです……」

「そなたらも無事で何よりである。それとアンゼリカ嬢」

「なんででしょう?」

「貴女にお会いしたい者がおりまする」

「へ……」

オーレリアは脇に逸れる。

「え……」

「あ……!」

「……ト……ワ……?」

「マジ……かよ……」

「アン……ちゃん……」

トワの両目から大粒の涙が溢れる。

「アンちゃあんっ!!」

トワはアンゼリカの首元に抱きつく。

「ぐすっ、よかった……!アンちゃんがいなくなってから……」

いっばいいっぱい心配してたんだからね!？」

「すまない、トワ。もうどこにも行かないよ」

アンゼリカはトワの頭を撫でる。

「グスツ……本当によかった……」

「ああ」

リインは改めてプリシラ皇妃の方を向く。

「皇妃様、ご無事で何よりです」

「ありがとうございます。リインさんにVII組の皆さん。ですが、急を要します」

『!』

VII組はプリシラ皇妃の言葉に顔を上げる。

「何かあったんですか!？」

「あの要塞には、キリコさんがおられるのです」

「キリコが!？」

クルトは驚愕した。

「なんでも、皇帝を撃った責任を取るためにお姫様を助けに来ただってさ」

「責任……」

「なんという無茶を……」

「あのクソ真面目野郎が……!」

「ウォーゼル卿、そなたは飛行艇を持っているな？」

「無論です。メルカバを出すぞ！」

『おおっ!!』

「皇妃殿下は私が城館にお連れしよう」

「はい。父さ——レーグニツツ暫定統括者なら大丈夫でしょう」

「それにゼクス將軍閣下もいらっしやいます」

「わかりました。皆さんもお気をつけて」

プリシラ皇妃は頭を下げ、その後ゼクス將軍に引き渡された。

「シャーリイ、君はどうするんだ？」

「あたしもそろそろ行くよ。それじゃ、ランディ兄に会ったらよろしく伝えといて〜」

シャーリイは手を振りながら去って行った。

「やっと嵐が去って行ったわね」

「まだ一つ残っていますけど」

「とにかく、いってみよう」

VII組は出発した。

「こ、これは……!」

「まさに戦場だな」

「やれやれ。目視できるだけでも二百機近くはいやがるな」

「城門付近でスクラップがなっているのは主力戦車か。三十台はあるな」

「これ全部……」

「あり得ねえ……」

「はい……」

二代目Ⅶ組は眼前の光景に言葉をなくす。

(キリコさん……)

ミュゼはキリコの安否を祈る。

「……」

リインはそれを複雑な目で見た。

「ツ！生命反応あり！城門付近です！」

「よし！着陸体勢！」

メルカバは城門付近に着陸した。

「この近くに……」

「アル、どう？」

「……そちらです！」

アルティナは近くの崖を指さす。

「これは……」

そこには、崖に突き刺さったナイフを握りしめるキリコの姿があった。

「発見しました！」

「よし！ロープを持ってきてくれ！」

「了解しました！」

ユウナが持ってきたロープをリインは腰に巻き付ける。

「頼むぞ」

「任せてください！」

「こつちもオーケーだよ！」

「行ってくる！」

リインは少しづつ崖を降りて行った。

「キリコ、大丈夫か!？」

「……ええ……」

「まったく。君も大概だな」

リインは上に合図した。

合図を受けたⅦ組はロープを引っ張り上げる。

先にキリコが上がり、リインも続いた。

「まあ、色々と言いたいことはあるが……皇妃様とトワ先輩の救出、ご苦労だった」

「いえ」

「ただ、一つ教えてくれ。あの爆発は君が？」

「いえ、マリアベルとか言う金髪の女の仕業です」

「えっ!？」

マリアベルの名前を聞いたユウナに動揺が走る。

「キリコ君、それホント!？」

「知っているのか？」

「うん! マリアベル・クロイス! デイター元大統領の娘さんよ!」

「あのクロスベル事変の首謀者か……」

「確か、結社の使徒クラスの大物よ」

「そんな相手がやったってのか……」

「これでまた、混乱が広まるわね……」

「キリコ君……」

「これでいい」

「キリコ……」

「……………」

キリコは崩壊したジュノー海上要塞を見つめる。

「とにかく、まずはエリンの里に戻ろう。アルティナ、フルメタルドッグの回収を頼む」

「了解しました」

アルティナはクラウソラを出して、フルメタルドッグを回収した。

「エンネア、あれは買ったか？」

「ええ。金額通りにね」



「あれ？」

「またコーヒーか？」

「いや、ローゼリアに頼まれたものだ」

「エンネアさん……どういふことでしょうか？」

「それは——」

エンネアはキリコとローゼリアのやり取りを説明した。

「なんだそりゃ……」

「上手いこと丸め込んだものだ……」

VII組は呆れた。

「それでわざわざ買いに来たのか？」

「それが里を出るための交換条件だからな」

「まったく。ですが、キリコさん——」

「大丈夫だ。文句は言わせない」

「は、はあ……」

「いやいや、エマ君。そこで引き下がってどうする」

「とにかく戻ろう。ガイウス」

「うむ。そうだな」

一行はメルカバに乗り込み、エリンの里へと帰還した。

「のう、キュービイー」

「約束は守った」

エリンの里に戻ったVII組はローゼリアに報告を入れた。

そしてキリコが買ってきた菓子を渡されたローゼリアはご機嫌ななめだった。

「確かに妾は言うた。甘くて色とりどりで最後まで飽きさせない菓子が食べたいと」

「条件に合うのはこれだ」

「なんでよりによって野菜チップスなのじゃ!!？」

ローゼリアはテーブルを思いきり叩く。

「あんたには同じ質問を三回も聞いたはずだ。そしてあんたは三回全て構わないと言った。違うか？」

「妾は菓子を買ってこいと言ったはずじゃぞ!」

「だから菓子だ」

キリコはコーヒートを啜りながら受け流す。

「こんなことだろうと思っただわよ……」

セリーヌは呆れるしかなかった。

「でも、この野菜チップス美味しい」

「確かに色とりどりね。ニンジンのおレンジ色にタマネギの白、カボチャの黄色にパプリカの赤。紫色なのはビーツかしら?」

「エンドウ豆の緑もありますね。黄金色のはサツマイモチップスです」

「王道のポテトチップスも少な目だが入っているな。それにしてもこのクオリティで850ミラとは思えないな」

「この甘味は野菜本来の甘味なのかな?」

「おそらくな。それにしてもこれは美味しい。しかも最後まで飽きさせぬ」

「野菜だから後味が軽いのもかもしれないね」

「ジャンクフードとは思えねえな。もう食っちゃまったぜ」

「うーん、ビールのツマミにピッタリね♪」

ローゼリアとは対照的に、VII組には好評だった。

「キリコ君ってこういうのも食べるんだ」

「どうしても昼が取れない時はな」

「確かに腹には溜まるが……」

「……やっぱりある意味一番偏っていますね」

「もう……ちゃんとしたお昼ご飯食べなきゃだめだよ」

「やはり……ここは私の愛情こもった手作りランチを……!」

「はいそこ離れるー」

ユウナはキリコにすり寄るミュゼをひっぺがす。

「ズルいぞキリコ君! そうだミュゼ君、私にも愛情こもった手作りランチを!」

「あんたはいい加減にしなさい」

サラはアンゼリカを抑える。

「しかし、よく野菜チップスなんて思いつきましたね」

「…………あれだけ野菜野菜と毎日聞かされていてはな」

『ああ……………』

リインたちはキリコの言いたいことを見抜く。

「正直、鬱陶しかった」

「ご、ごめんなさい……………」

エマは申し訳なさそうに頭を下げた。

（だからって野菜チップス贈る？）

（善意の欠片どころか悪意しか感じないな…………）

（しかもそれをあのポーカーフェイスでやってのけますからね

…………）

（やっぱエゲつねえ…………）

（本当に敵に回らなくて良かったです…………）

二代目Ⅶ組メンバーはなんとも言えない顔つきでキリコを見る。

「少し横になります」

「わかった。ゆつくり体を休めるといい。後、明日の巡回には君も

参加してもらおう」

「了解」

キリコは部屋に戻って行った。

「未代まで貴様を恨むぞくく!!キリコ・キュービィィィイツ!!」

ローゼリアの呪詛が聞こえたが、キリコは完全に無視した。

## 賞金首

七耀暦1206年 8月22日 午前10:00

キリコを入れた二代目Ⅶ組とエリオット、ガイウス、トワ、クロウ、アンゼリカを乗せたメルカバはラクウエル上空を飛んでいた。

「うーん。なかなか素直でいい子じゃないか」

メルカバの操縦桿を握るアンゼリカはご満悦といった表情を浮かべる。

「さすがはアンゼリカさんです。もうメルカバを自在に操れるなんて」

ロージーヌはアンゼリカの操縦技術を高く評価する。

「ははは、一癖あるカレイジャスに比べれば大人しいものさ。ガイウス君、北ランドック間道の外れに停めればいいんだね？」

「ええ。ステルスを使えばそうそう見つかることはないでしょう」

「了解だ」

アンゼリカは指定されたポイントへ舵を切った。

「さて、今回はラクウエルとアルスターを重点的に回ってみよう」

「そうだな。オルデイスは警戒体勢が敷かれているみてえだからな」

「その分、今言った二ヶ所は警戒が比較的手薄の状態になっているみたいだね」

「衛士隊はキリコに叩き潰されて再編成の名目でオルデイスに駐留を余儀なくされ、その穴埋めを第三機甲師団が請け負っているってのが現状だろうな」

ポイントに降り立ったリインたちは巡回プランを話し合う。

「アルスターはともかく、ラクウエルは正規軍の出入りも多いだろうから、警戒を怠らないようにしないとね」

「特に誰かさんはな」

アツシユはキリコを横目に軽口を叩く。

「……………」

「でも、キリコ君って顔はほとんど知られていないはずでしょ？」

「というより、公的には存在しないことになっています」

「名前だけが一人歩きしているようなものか」

「クク……幽霊みたいだな？」

クロウはニヤリと嗤う。

「もう、クロウ君！」

「まあ、警戒するに越した言葉ないさ。とにかく、気をつけて行動しよう」

巡回班はアルスターを目指して歩き出した。

一方、残りの初代Ⅶ組と鉄機隊はエリンの里からエイボン丘陵へと転移していた。

「ん〜、着きましたわね」

デュバリイは大きく伸びる。

「それじゃ、もう一度確認するわよ。リインたちがラクウエルとアルスターを回っている間に、あたしたちがミルサンテ周辺の巡回。そしてリーヴスへの抜け道の探索よ」

「ミルサンテはグレンヴィルの隣ですから、正規軍の出入りは容易に予想される。気を抜かないでいこう」

「私たちの顔は既に割れていますからね」

「だがそんなリスクは承知の上だ」

「うん。特にリーヴスへの探索はなんとしてでもやっておきたい」

「ああ。二年前の内戦の折り、我らが学院を取り戻したあの時の喜び。新Ⅶ組にも味わわせてやりたい」

「そうね」

初代Ⅶ組はかつての想いを回想する。

「帰る場所か、羨ましいな」

「何を言うのです。私たちにもあるでしょう」

「ええ、そうね」

鉄機隊の面々も想いを馳せる。

「浸っているのもここまでにしましょう。それじゃ、気合い入れて

行くわよっ!」

『応!』

『承知!』

初代Ⅶ組と鉄機隊は出発した。

午前11:30

(アルスターか……)

キリコたちはアルスターに到着した。

「キリコ?」

「そういえば、キリコさんは来るのは初めてでしたね」

「いや、二、三度来たことはある」

「そ、そうなの!?!」

「養父や村の若衆と共に酒の買い付けでな」

「アルスターは蒸留酒が特産品だからね」

「つーか、村ってのは?」

比較的事情に明るくないクロウはキリコに聞いた。

「俺は身寄りのない孤児だ」

「らしいな」

「俺が帝都近郊のパルミス孤児院から引き取られたのは、ここからさらに山奥にあった村だ」

「あったってのは?」

「以前話したと思うが、貴族連合軍のジギストムンドの襲撃を受けて消滅した」

「あ……」

「キリコ君……」

「そんな顔をしなくてもいい。もう終わったことだ」  
キリコはそう言っつてアルスターを見渡す。

「ここはあのオリヴァルト皇子の出身地らしいな」

「ああ。正確にはオリヴァルト殿下の母君の故郷でもあるそうだが」

「本当に惜しい方を亡くした」

「……………」

「真実を知るキリコは腕を組んだ。」

「とりあえず、村を回ってみようよ」

「そうだね。サラ教官からのリクエストもあるし」

「リクエストって……」

「アルスター特産の蒸留酒ですか」

「つたく……あの飲んだくれが」

「如何いたしましょう？」

「サラ教官には悪いが今回は我慢してもらおう」

「リインはきつぱりと言い切った。」

「それじゃ、行きましょう！」

「サンデイやグスタフもいるかもしれないしね」

「ふふ、びっくり仰天されるかもしれませんね？」

「お化けく……なんつってな？」

「……………」

「リインたちはアルスターの巡回を開始した。」

「キリコ side」

「本当にお久しぶりです、リインさん」

「見た目は大分変わりましたが、お元気そうですね」

「久しぶりだな。カイ、ティーリア」

「アルスターを回る巡回班は初代Ⅶ組と面識のあるカイとティーリ

アの兄妹に出会った。」

二人によると、アルスターの住民は日に日に変わっていつていっているという。

黄昏の発生に加え、オリヴァルト皇子の乗るカレイジャス爆破の悲報を皮切りに戦争に協力する者が現れている。

それ自体は別に咎められるものではない。

敬愛する人間がテロで命を落としたとなれば仇討ちに走るのは自然なことだ。

たとえ真実が歪曲されていたとしても。

「そういえば、サンデイはいないのか？」

「サンデイさんは他の場所に行くと言って二日前に出ましたよ」

「うーん、すれ違っちゃったか……」

「ちなみにどこに行くかは聞いてないか？」

「すみません……そこまでは」

「ううん、ありがとう。無事なのが確認したかったから」

トワ教官は二人に礼を言った。

その後、サンデイの両親が営む宿酒場で休息を取った後、ラクウエルを目指すことになった。

「キリコ side out」

「……………」

アルスターの巡回を終えたリインたちはラクウエルを目指していた。

キリコ、リイン、アンゼリカは険しい表情を浮かべていた。

「どうかしたのかよ？」

「……つけられている」

「えっ!？」

キリコの言葉にユウナは驚く。

「つ、つけられているって……!？」

「うん。微かにだが、僕も感じる」

「みんな静かに。ここは気づかないふりをしよう」

トワの言葉通り、巡回班は歩幅と歩くスピードを変えずに歩く。しばらくすると、リインとアンゼリカは止まるように指示を出した。

「どうやら行ってしまったようだ」

「はくくっ!」

ユウナは大きく息を吐く。

「ユウナさん、お疲れさまでした」

ミュゼはユウナを労う。

「それにしても、いったい誰が」



「軍って感じじゃないな。それこそ猟兵か山賊かだな」

「山賊って線は考えられるね。似たような気配だったしね」

「似たようになって？」

「以前、リベールの霧降り溪谷って所で山賊の一団と事を構えたことがあってね。良い修行になったよ」

「マジか……」

「無茶苦茶です……」

あつけらかんと言うアンゼリカに新VII組は呆れる。

「これもひとえに、無力な子猫ちゃん涙を拭うためさ！」

「よーするに、山賊の被害に遭った女に変わって単身アジトに乗り込んで大暴れしたってわけか」

クロウはアンゼリカの発言から事の真相を推理する。

「ふふ、流石はアンゼリカお姉様♥？」

「いやいや！さすがにおかしいだろう!？」

「クルト、この時のアンゼリカ先輩は誰にも止められない」

「もう……アンちゃんってば……」

「……話を戻す」

キリコが場を締める。

「尾行していた奴とはこの先のラクウエルで出くわすはずだ」

「そんなときにブチのめすわけだな」

「それらしいのがいたらな。後なるべく派手に頼む」

「穏便に、ではなく？」

「敵を見つけやすい」

「なるほどな。陽動役というわけか」

クロウはキリコの考えを見抜く。

「それは俺とアッシュとログナーでやる」

「任せろや」

「承知」

アッシュとアンゼリカは同意した。

「残っている者は怪しい動向をしている奴がいなか探ってほしい」

「わかった。ただやりすぎるなよ」

「了解」

「わかってるっての」

「まあまあ。目に余るようなら私が止めるさ」

「では行こう、ラクウエルへ」

巡回班は出発した。

午後1:35

「おらあ！」

「ぐはっ!？」

「せいっ!」

「うおっ!？」

「っ!」

「あぐっ……ほ、骨が……!」

アッシュ、アンゼリカ、キリコは武器を持った数人の男たちを相手に大立回りを演じる。

ラクウエルに着いた巡回班は一計を用いて、自分たちをつけて来た男たちを人目につきやすい路地に誘い出した。

挑発に挑発を重ね、相手を怒らせることに成功。現在に至る。

「うーん、相変わらず強いわねえ……」

「泰斗流を修めているアンゼリカさんは言うに及ばずですね」

「アッシュさんは天性のバネを駆使して上手く立ち回っていますね」

「キリコは敢えて初動を僅かに遅らせ、後の先を取っている。さらに逆技も使っている」

「確か、アームロックでしたか」

「キリコは徒手空拳や制圧術の実習でも好成績を叩き出していたからね」

「や、やりすぎないようにね〜!」

ユウナたちが周りを警戒している間に、キリコたちはチンピラ全員を倒した。

「こんなものか」

「やれやれ。齒応えがなかったね」

「(所詮チンピラか)……それよりも」

キリコは周りを見渡す。

「出てこい」

「……チツ！」

路地裏からやさぐれた男が出てきた。

「あなたは……」

「ミゲル……やっぱあんたか」

「以前に会った情報屋さんか。私たちをつけていたのはあなただな？」

「へっ！お尋ね者が雁首揃えてりや、追いかけたくなるのが性つてもんよ」

「御託は聞きたくない。目的はなんだ」

キリコはミゲルに鋭い視線をぶつける。

「憎たらしいほど落ち着いてやがる。さすがは皇帝陛下暗殺を企んだだけはある」

「……………」

「なっ!？」

「貴様……!」

ガイウスは怒りを顕にする。

「……状況はこちらに有利だ。大人しく話せば危害をくわえない」

「話さなかったら?」

「ズドン……だぜ?」

クロウは腰の二丁拳銃に手を置く。

「ククク……わかった。おれの負けだ」

ミゲルは両手を頭の上に上げる。

「……………おれ一人ならな」

ミゲルの足元に何かが投げ込まれた。

「っ!?!伏せろっ!」

直後、強烈な光と音が巡回班を襲う。

「クク、あばよ」

ミゲルはどきどきに紛れて逃げ出した。

「くっ！スタングレネードですか！」

「そ、それよりオジサン逃げたわよ！」

「今は放つとけ！なんかヤバいぞ！」

クロウは周囲に漂いはじめた不穏な空気を感じ取る。

「これは……！」

ミュゼも顔を上げる。

「どうかしたの？」

「ラクウエルが……」

「ラクウエルが？どうかしたのかい？」

「……炎に包まれます！」

「えっ!？」

「それは——」

突如、近くで爆発音が響く。

「なんだ!？」

「この反応……皆さん！ラクウエルは包囲されているようです！」

「何だっ!？」

巡回班は突然のことに大きく戸惑う。

「きゃあああアツ!？」

「に、逃げろーっ!!」

あちこちで叫び声が上がった。

「どうなってるの!？」

「わからない。とにかく今は——」

「へへ、見つけた見つけたあ!？」

『!？』

巡回班の前に、猟兵らしき男たちが立ちはだかる。

「猟兵!？」

(装備がバラバラ……ごろつきの寄せ集めか)

キリコは猟兵たちの服装や装備が一致していないことからそう読んだ。

「てめえら、何のつもりだ！」

「仕事に決まってるだろうがよ。お前らを衛士隊に引き渡せば一生遊んで暮らせるミラが貰えるんだからなあ！」

「っ！そんなことのために街を！」

「ケケ……俺たちがの上がるための必要な犠牲つてやつだ」

「外道が……！」

「わかったら大人しく捕まっちゃまえ！」

猟兵たちは武器を手に襲いかかる。

「ふざけんじやないわよ！」

「そんな身勝手が通るとでも思っているのか！」

ユウナとクルトは武器で猟兵たちの攻撃を捌く。

「この街には子猫ちゃんたちがいるんでね。お仕置きさせてもらおう！」

アンゼリカは両手をポキポキと鳴らす。

「総員、一人たりとも逃がすなっ！」

『応！』

巡回班はラクウエルを襲ってきたいくつかの猟兵の一団の対処に追われた。

キリコたち戦闘チームが猟兵の一団を倒している間、エリオット、ユウナ、アルティナ、ミュゼはラクウエル住民の避難と手当てに専念していた。

その結果、猟兵の一団は一人残らず拘束され、住民たちから怪我人は出たものの死者は一人も出なかった。

そして現在、リインたちは捕らえた猟兵のリーダー格の男に対して、尋問を行っていた。

「チイツ、ガキだと思つて油断した……」

「クソ……一攫千金が……！」

「……先ほど面白いこと言つてたな」

クロウはリーダー格の男の頭部に拳銃を突きつける。

「一生遊んで暮らせるミラが手に入るんだっけか？」

「ぺっ……」

別のリーダー格の男がキリコの足元に唾を吐きつける。

「……………」

キリコは別のリーダー格の男の顎を蹴り上げる。

「ぐべっ!?!」

別のリーダー格の男は一撃で失神した。

さらにキリコは腰の投げナイフを構える。

「お、おいつ!」

「キリコ! やりすぎだ!」

リインが待ったをかける。

「……………」

キリコは無言でリインに従う。

「くっ……」

このやり取りを見た猟兵たちは抵抗を止める。

「……さっきの質問だ。一攫千金とはどういうことなんだ?」

リインが再び猟兵のリーダー格の男に問いかける。

「それは——」

「それは私が説明しよう」

『!?!』

不意に聞こえた声にリインたちが振り向くと、ロツチナが立っていた。

「貴方は……」

「帝国軍情報局長のルスケ大佐……」

「また会ったな。トールズVII組の諸君」

ロツチナは笑みを浮かべる。

「そして久しぶりだな、トワ・ハーシエル君。いや、今は第II分校のハーシエル教官だったか」

「お、お久しぶりです……ルスケ大佐……」

「知っているんですか?」

「うん、本学院を卒業する前に情報局からスカウトされたことが

あつて、その時の面接官だったの」

「ええっ!？」

「初耳です……」

アルティナは開いた口がふさがらなかつた。

「確かにトワは各方面からお呼びの声がかかっていたが」

「彼女の能力は魅力的だったのな。来てくれるならば彼女を中尉待遇で迎えるつもりだった」

「それは……なかなか破格の待遇ですね」

「普通、士官学校卒は将校として最下級の准尉からのスタートですから」

「そ、そうなの？」

「警察組織で言うキャリアによる待遇と言えればご理解いただけますか？」

ポカンとするユウナにミュゼが説明した。

「ま、それはいい。それより君たちの疑問に答えるのが第一優先だな」

ロツチナは咳払いをし、リインたちの方を向く。

「君たちは闇の相場というものを聞いたことがあるかね？」

「や、闇の相場!？」

「いかにもって名前が出てきたな……」

「闇の相場ですか……」

アルティナの表情が暗くなる。

「アルティナ……?」

「……さすがにご存知ですか」

「ミュ、ミュゼも……?」

「どこの世界にも格付けが好きなのは存在する」

ロツチナは周りを見渡し、こう切り出した。

「それは裏社会でも同じ。犯罪組織のトップや政財界の大物、有事に於いて暗躍するフィクサーなどがめぼしい人物を特定、その人物の格付けをし、最終的に賞金を懸ける」

「それは……」

「その後、裏のネットワークを通じて賞金首として裏を流れ、先ほどの裏の実力者たちのお遊びの駒なるというわけだが、稀に表に出ることがある。おそらく奴らはその情報をキャッチしたのだろう。救いようなない愚かな奴らよ、当然それ相応の実力が伴っているというのに」

ロツチナは連行されて行く猟兵たちを蔑視しながら言った。

「ふざけないでよ……!」

ユウナが食ってかかる。

「そんなの……許されるわけないじゃない!人をなんだと思ってるの!?!」

「言っておくがエレボニアだけでなく、カルバード、リベール、クロスベルの人間も関わっているらしい。真偽は不明だが、レミフェリアの高官やアルテリアの司教もいるとか」

「ば、ばかな……!」

「そんな……!」

「これが……裏というものだよ。表からいくら声を大にして上げようとも、彼らには蚊ほども感じない」

「さらに分かりやすく言えば、クロスベルを長年牛耳っていたルバーチエ商会とその後ろ楯だったハルトマンでさえ、闇の相場から見れば虫けらに等しいと言われる」

ロツチナは断言した。

「嘘……!」

ユウナは茫然自失となった。

「さらにここからが本題なのだが、コイツらの言うようにキリコとシュバルツアーには懸賞金が懸けられている」

「えっ……!?!」

「リインも……だと!?!」

「そうだ」

ロツチナはリインを見た。

「内戦勃発以前から各地で厄介事に介入し、貴族派の企みを挫かせ、内戦でも第三の道と称しながらも貴族連合軍に抵抗し続けたトール



ズ士官学院の若者たち。その有翼の獅子たちを牽引してきた灰色の騎士リイン・シュバルツァーは色々な意味で注目を集めた」

「ツー！」

リインは思わず奥歯を噛む。

「そして此度の黄昏を引き起こしたことから、懸けられた懸賞金は高いものになった。私の調べではシュバルツァーは2億5千万ミラの賞金首になっている」

「2億5千万!?!」

「……確かに一生遊んで暮らせるかもな」

「驚くのはまだ尚早だぞ。キリコに懸けられた懸賞金はシュバルツァーのおよそ20倍。50億ミラだ」

『……………』

リインたちは茫然自失に陥るも、ロツチナは構わず続ける。

「内戦時に於いて、黄金の羅刹や黒旋風の軍と渡り合い、ツールズ士官学院生たちと見劣りもしない武功を挙げた。黄昏発現後も各地で要所を潰して回る。これだけの事をしておいて放つたらかというわけにはいくまい」

「なるほどな。つーか、内戦でそんなに活躍したのに政府も情報局も放つといたのかよ?」

「放つておくわけではない。そこで私は政府とのイザコザに防ぐべく、キリコの記録や戦歴を抹消した」

「イザコザ?」

「神にも従わない男が素直に首を縦に振ると思うかね?」

「な、なるほど……」

「確かにホイホイと乗つかるようなタイプじゃないな、キリコは」

「そのわりにはリインの言うこと聞いてるじゃねえか」

「そこは教官と生徒の関係と割りきっているからだろう。記憶の部屋で語られるだろうが、キリコは力づくで押さえつけようとする相手には徹底的に抵抗する」

「確かにそんなタイプだね」

「私としてはアーヴィング少佐が一度もキリコに殴られなかったの

が不思議なくらいさ」

「言えてんな」

「こらアツシュ」

クルトはアツシュを窘める。

「なるほど。それで君たちが来ていたのか」

ロツチナはなぜキリコたちがラクウエルに来ていたのかを聞いて、頷いた。

「それで。君たちはこれからどうするのかね？」

「どうする、とは？」

「キリコの手によりプリシラ王妃が奪還され、新旧VII組らによりオルデイスが衛士隊の手から離れつつある。ジユノー海上要塞が陥落した今、オルデイスを枕に挙兵する絶好の機会だと思うが？」

「それは……」

「それに、ヴァイスラント決起軍が準備している《千の陽炎》作戦だったか。名前をぶち上げるだけでも十分人が動くと思うのだが、どうなのかね？」

「……今はまだその時ではありません」

ミュゼが前に出る。

「ほう？」

「世界の命運はここににいる者だけに委ねられるわけではないのです」

「ここに……？」

「ミュゼさん、それは……」

「結構。今のでだいたい察しはついた」

ロツチナは落ち着き払っていた。

「……一つお聞かせください」

「なにかな？ミルディーヌ公女」

「貴方はキリコさんを使って何を成そうとしているのですか？」

「私にキリコを使いこなせる技量はないさ。ただ、見たいのだよ」

「何をですか？」

「長きに渡り、エレボニア帝国を覆い続けてきた呪いが本来存在しないはずの異能者によって破られる瞬間が」

「……………」

「……正気の沙汰とは思えません」

「キリコの持つ猛毒に侵されて以来、正気などとうに失ったよ」

「……………」

ロツチナはニヤリと口角を上げる。

「ミルディーヌ公女、君も理解しているのではないかな？キリコ・

キュービイーの存在が本来あるべきはずの流れを変えていることを」

「……だからなんだと言うのです？」

「既にこの世界の行く末など誰にも予想できないものになっているということだ。言い方を変えれば、世界はキリコによってねじ曲げられたとも言える」

「……………」

「もう一つ、君たちに道を示そう」

「道を……？」

「アルフィン皇女のことだ」

「えっ!？」

「アルフィン殿下の行方をご存知なんですか!？」

「現在、アルフィン皇女はセントアークのとある貴族の屋敷に軟禁されているという」

「サザーラントのとある貴族……」

「まさか……ハイアームズ侯爵家が!？」

「いや、ハイアームズ侯爵は国家総動員法に反したということと衛士隊に追われているらしい」

「ハイアームズ侯爵閣下が……」

「そこでとある有力貴族が暫定的統括者として入っているそうだ」

「有力貴族……？」

「そんな人いたっけ？」

「ミュゼ、心当たりは？」

「うーん、わかりません（まさか大叔父様が就いていようとは。とはいえ、飾り同然での扱いですが）」

ミュゼは心の中でセントアークの暫定的統括者が誰なのかを読んだ。

「それだけでなく、かのラッセル博士の身内もいるらしい」

「ティータも捕まっているんですか!？」

「よしリイン君！今すぐ乗り込もうではないか!!」

「落ち着いてください。アンゼリカ先輩」

「心配なのはわかるけど、無策で乗り込んでもダメだよ」

リインとトワがアンゼリカを窘める。

「とりあえず、このことについてはひとまず持ち帰ろう」

「そうだね。多分、いや間違いなく父さんも関知しているだろうし」

「第四機甲師団のクレイグ將軍ですか」

「エリオットさんのお父さんでしたよね」

「初見じゃ見破れねえけどな」

「ク、クロウ君……」

「とにかく、伝えることは伝えた。後は君たち次第だ」

ロッチナはそう言って去って行った。

「俺らも行くとしようぜ、シユバルツァー」

「そうだな。長居は無用のようだ」

「教官、街は……」

「まもなく第三機甲師団がやって来るだろう。それにクレア少佐が言ってきたらどう？俺たちは指名手配されているって」

「あ……」

「そうでした」

「遺憾ですが、離れた方が良いかと」

「これ以上のトラブルはゴメンだ」

「わかった。全員、北ランドック間道に戻るぞ」

巡回班は急いでラクウエルを脱出した。

午後5:00

リインたちはローゼリアのアトリエでそれぞれの成果を報告し合った。

「リインとキリコに懸賞金!？」

「それに闇の相場とはな」

ロツチナからもたらされた情報はアリサたちに衝撃を与えた。

「ユーススは知ってるの？」

「代行とはいえ、バリアハートの領主として携わっていれらばな。単なる与太話と本気にはしていなかったが」

「確かに本気にするまでにはいかないだろうな」

「僕も業務上聞いたことがある。おいそれと手が出せないブラックボックスだとね」

「ブラックボックス……」

「如何にもって感じですね」

「んで？どうすんだシユバルツァー？」

「……これについては無視する。俺たちが関わるには荷が重すぎる」

「ええ。下手をすれば、どうなるかわかったもんじゃないわ」

「おそらく、皇帝陛下や鉄血宰相でさえ手を出しあぐねる存在なんだろう」

「表が活きるためには、裏の存在が不可欠というわけか」

「ええ。それは魔術でも同じことよ」

「決まりだな」

Ⅶ組は闇の相場については不可侵を決定した。

「では次にアルフィン皇女についてか」

「セントアークにおられると言っていたんだな？」

「ああ。ティータと共に軟禁されているらしい」

「ティータもあたしたち分校の仲間です。なんとか救出に行きたいと考えてます」

「それは我らも同じこと。是が非でも救出せねばならん」

「では、セントアークへの潜入ルートの特定から始めよう」

新旧Ⅶ組はアルフィン皇女とティータの救出に向けて動き出した。

(この流れのまま行けば、第四機甲師団との武力衝突は必至……)  
ミュゼはそつとキリコを見た。  
(キリコさん………)

「……………」

キリコもミュゼの視線に気づいていた。

(第四との衝突は避けて通れないらしいな。おそらくライルたちと戦うことになるだろう)

(だが……戦うしかない。これが俺に課された運命ならば)

## 芝居

七耀暦1206年 8月23日 午前7:00

二代目VII組はエリンの里の空き地で待機していた。

「まずはメルカバで南サザラント街道の空き地に移動し、セントアークに潜入するんでしたね」

「サザラント方面はランデイ先輩と一緒に行った時以来ね」

「ああ。アツシユが戻って来る前だな」

「カイリさんやパブロさん、タチアナさんもおられたんでしたね」

「タチアナなんかアツシユをさがしに、ハーメル廃道に入って行っちゃったのよね」

「そんなことがあつたんですか。これもひとえに、アツシユさんを想う愛の力ですね♥?」

「アホか……」

アツシユは呆れたような顔をする。

「……そういえばアツシユ」

「ん?」

「俺が帝都から逃がした後、お前はどこで何をしていた?」

キリコはアツシユに問いかける。

「……チツ、そーいや話してなかったな」

アツシユは頭をガシガシと掻く。

「あの後、目が覚めたオレはしばらくぼーっとしてた」

「……………」

「けどよ、頭ん中かき乱すような声が聞こえなくなったのがわかった途端、自分が何をしようとしてたのかがどっど押し寄せてきやがってな。気づいたら帝都に背を向けていた」

「アツシユ……」

「逃げて、ひたすら逃げて、最終的にオレはあそこにいたんだ」

「ハーメルの廃村か」

「ああ……」

「そういえば、あの二人に見捨てられたと言っていたが」

「昔な、兄貴分が二人いたんだ。かすかにだが、覚えてはいる。確か……レーヴェとヨシユア、だったと思う」

「その方たちは……」

「結社の執行者《剣帝》レオンハルトとリベールのB級遊撃士ヨシユア・ブライトのことですね」

「ヨシユアさんなら知ってる。教団事件や碧の大樹の時に手を貸してくれたって、支援課の先輩方に聞いたことあるんだけど……」

「見捨てられた、というのは……」

「考えてみりゃわかんだろ」

「アツシユは腕を組んだ。」

「そもそも百日戦役は14年も前だぞ。ガキ二人に状況判断なんざつくかよ」

「ハーメルの遺児……ですか」

「その……アツシユはその二人のことは……」

「恨んでるのか？」

キリコはクルトの言葉を引き継ぐ。

「……わかんねえ」

「そうか」

「復讐なんざ無意味ってか？」

「別に。復讐は否定しない」

「そうかよ……」

「キリコさん……」

「前に俺が聞いた時、お前から聞こえてきたのは無理やり言わされているような感じがしたのでな」

「無理やり……」

「おそらく呪いの強制力なのでしょう。キリコさんも陛下からお聞きになったはずですよ」

「……人の闘争本能や憎悪を強め、突発的に惨劇を巻き起こす。そう言っていた」

キリコはユーゲント三世との会話を思い出しながら言った。

「なあ、キリコ」



アッシュはキリコに問いかける。  
「？」

「オレの左目にあつた呪い、お前が引き受けたんだよな」

「……あの時はそれが最善だと思つた。呪いの根源が本当にワイズマンドというなら、俺が立ち向かわなくてはならない」

「そうかよ……」

アッシュは顔を背けた。

「キリコさん……」

「その……無理、しないで」

「ああ……」

キリコは腕を組み、目を瞑つた。

その後、二代目VII組はメルカバで南サザーラント街道外れの空き地に移動。エリオット、ユース、アンゼリカとともに降り立った。

「潜入にはアンゼリカさんも来られるんですね」

「ああ。セントアークならパトリック君もいるはずだしね。もっとも、今いるのはあの人しかないようだけど」

「あの人？」

「ヴィルヘルム・バラッド侯爵さ」

「ええっ!？」

「バラッド侯ですか!？」

「なんであの放蕩オヤジが統括者なんかやってんだ？」

「領邦会議でも話したが、彼がある意味、有能な人物なのは間違いない。特に己の財産と利益を守る事においては天才的と言ってもいいが――」

「目先の欲望に振り回され過ぎた挙げ句、結局は政府に良いように利用され尽くしている」

「その挙げ句の果てが、海都での取り返しのつかない大失態とカイエン公爵候補罷免という自業自得の結果というわけですか」

「アルティナ、言葉を選ぼうな」

リインはアルティナを窘める。

「……その情報源はミュゼか」

「ふふ、さすがに分かりますか」

「ロツチナの言葉だけでは説明が足りない」

「恐れ入ります」

ミュゼはスカートの裾を軽く持ち上げる。

「なら、早く二人を助けないとね！」

「その通りだユウナ君。あの天使たちを放蕩好色オヤジの元から解き放たなければ！」

アンゼリカは目の色を変えた。

「……どーすんだシユバルツァー」

「アンゼリカ先輩におかしなスイッチが入っちゃったね」

「はあ……」

リインは深いため息をついた。

「とにかく行くしかない」

キリコはセントアークの方角を見つめる。

「ずいぶん積極的だな」

「まだはじめをつけていない」

「はじめ……皇室への償いか」

「キリコ君……」

（たとえ赦されることのない荊の道だとしても迷わず行くか）

（ああ。まるで、殉教者の如く……）

「……そろそろ出発しよう。とにかくにも、まずはバラッド侯に会わなくてはならないからな」

「そうですね」

「では参りましょう」

リインたち潜入班は出発した。

午前8:00

潜入班は南サザラント街道を越え、セントアークの門の前にたどり着いた。

「さてと、ここからが本番だな。もつとも、第一関門はクリアのよう

だが」

「どうやら警備が手薄のようだ」

「誰かの手引きじゃねえのか？」

アッシュはミュゼを見る。

「あいにく、私の存じ上げることではありません。本当に何かあったのかと」

(確かに街中が騒がしいな)

キリコは訝しげに門の奥を見つめる。

「さつさと入るとしよう。ここでは目立ちすぎる」

「そうだね。まあ、この後目立つことになるんだけどね」

「……憂鬱です……」

「アルなら大丈夫よ」

「ここは折れてくれないか？」

「……わかりました」

「すまないな。じゃあ、入ろう」

潜入班はセントアークに足を踏み入れた。

午前8:25

セントアークに入った潜入班は騒ぎの原因が何なのかを素性を隠して聞き込みを行った。

その後、フィーから紹介された臨時の遊撃士ギルドに身を寄せた。

「……確かに騒ぎになってはいたな」

「そりゃあ、ね」

「暫定的統括者が勝手に外に出ようとして……衛士隊に引きずられながら邸宅に連行されていればな」

「街の人曰く、大きな駄々っ子のようだとか」

「はあ……情けない……本当に情けない……」

騒ぎの元を知った潜入班の士気は下がり下がりに下がっていた。

特にミュゼはあまりにあんな内容にため息が止まらない。

「……本当に行かなきゃダメですか？」

「ユウナ、あそこにはアルフィン殿下とティータがいるんだよ」

「それがなかったら本当に帰ってるぜ」

「気持ちは十分に解る。だがここは堪えてくれ」

リインは二代目Ⅶ組に懇願するように言った。

「とりあえず、第二段階を進めよう……と言いたいが、騒ぎが収まらないと難しいな」

「全く、余計なことをしてくれ……」

「今ごろなら、フィー君とサラ教官の知り合いが渡りをつけてくれた劇団と打ち合わせをしてたはずなんだが」

「知り合い？」

「なるほど、こういうことかよ」

『!?!』

潜入班が振り向くと、赤毛の男が腕組みをして立っていた。

「貴方は……」

「お久しぶりですね、アガットさん」

「まーな。しかし……」

アガットはリインとキリコの両方を見る。

「シユバルツアーは風貌が大分変わったのはいいとして。処刑されたはずのキリコ・キュービーが生きてたなんてな」

「アガットさん、キリコは——」

「フィーとサラから大体は聞いている。俺もぶっ飛んだ奴はたくさん見てきたが、お前さんがトップクラスだな」

アガットはニヤリと口角を上げる。

「……………」

「そ、そういえば、アガットさんが話をつけてくださったんですか？」

「いきなりサラから通信が来てな。セントアークに劇団が来ているかどうか調べてくれてな。加えて、エリオットの出演交渉をやっついてってな」

「あはは……ありありと浮かびますね」

「エリオットさんの出演については話を通ったんですね？」

「まあな。ぜひともお願いしたいそうさ。名前を出したら一発OKだった」

「やっぱりエリオットさんってスゴいんですね」

「レコードも数枚発売しているし、若き天才演奏家として評価されているからね」

「あはは、まだまだだよ。僕が目指す、理想の音楽家像はね」  
エリオットは苦笑した。

「しかし何かあると思っちゃいたが、バラッド侯に会うためだったか」

「ええつと……」

「やっぱりマズかったですか?」

「いや。犯罪目的なら別だが、この場合はシロだ。お姫さんはもちろんだが、ティータは絶対に助け出さなきゃならねえ」

「アガットさん……」

「これも愛の力ですね♥?」

「あんたはそれしかないの?」

ユウナは呆れた。

「とりあえずシユバルツァー、手配した劇団は聖堂前で待ってる。  
俺とエリオットで打ち合わせしてくる」

「そうですね。大人数で行っても目立つだけですからね」

「その代わりと言っちゃなんだが、これ受けてみないか」  
アガットは懐から書類を数枚取り出す。

---

パルム間道の手配魔獣

希少食材の回収

徴兵家族支援基金について

---

「これって……」

「ギルドに寄せられた依頼ですか」

「演奏が始まるまで時間がある。だらだら待つよか良いだろ？」

「そうですね。皆はどうだ？」

「良いと思います」

「異論はねーな」

「ギブ&テイク、ということですね」

「同じく」

「二代目Ⅶ組は揃って承諾した。」

「私も構わないよ」

「時間潰しにはなりそうだな」

「アンゼリカとユースも承諾した。」

「決まりだな。アガットさん、引き受けさせていただきます」

「悪いな。そんじゃ、ぼちぼち行くか」

「ええ。ちよつと行って来るね」

アガットとエリオットは出ていった。

「では教官」

「あたしたちも行きましょう」

「よし、まずは……」

リインたちも市内に向かった。

「クルト side」 パルム間道の手配魔獣

僕たちはアガットさんから頼まれた依頼の一つである、魔獣討伐を行うことに決めた。

依頼書によると、モモイロヒツジンなる魔獣が群れを成して行商人などを襲い、その損害は計り知れないものとなっている。

セントアークに来ていた乗馬クラブの方から馬をお借りして、パルム間道へと向かった。

襲撃された場所に向かうと、そこだけがピンクに染まっていた。

僕たちはそつと近づき、先手を取ることに成功した。

だが厄介なのはここからだった。

単体なら対処出来たが、群れ単位で襲ってくる個体があったのだった。

倒しても倒してもどこからか現れ、戦力が補充されていくというわけだ。

さらにモモイロヒツジンの群れによる拳打の威力は相当なもので、キリコでさえ手傷を負った。

それでも引くわけにはいかなかった。

(あの方の、殿下の隣に立つまで、僕は負けるわけにはいかない！)

「レインスラッシュⅡ！」

一段階進化させたクラフト技で起死回生の隙を作る。

「教官、お願いします！」

「わかった！」

教官とのラッシュ攻撃がモモイロヒツジンの群れを撃滅する。

これでもう被害に遭われる人はいなくなるだろう。依頼は達成だな。

パルム間道の手配魔獣 達成

「クルト side out」

「ユウナ side」 希少食材の回収

タイタス門で依頼人さんが待っていることから、セントアークに戻らず、そのまま行くことになったの。

タイタス門は南にあるリベール王国との国境で、すぐ近くにハーケン門という大きな門が見える。

以前ティータに聞いたところ、ハーケン門を守っているモルガン將軍って人は遊撃士嫌いで有名ならしいんだけど、理由を聞いても半笑いで教えてくれなかった。

それはともかく、あたしたちは依頼を出したオーヴィッドさんに話を聞いた。

オーヴィッドさんはリベール王国から来た商人さんで、珍しい食材を専門に扱っているそう。

今回、オーヴィッドさんが探しているのは竜涎香という物。

ミュゼ曰く、東方ではお香に使われる物で、びっくりするほどの高価で取引されているらしいの。

その竜涎香が近くにあると睨んだオーヴィッドさんはギルドは依頼を出したというの。

そこであたしたちは回収できる可能性のあるパルム間道とアグリア旧道を探すことに。

オーヴィッドさんに見せてもらったサンプル品をアルが写真に撮って、それらしいのを探し出した。

探し出した物をオーヴィッドさんに鑑定してもらうと、確かに竜涎香だった。

お礼にと、オーヴィッドさんにいくつかの魔獣食材をもらった。

それにしても、学生服を着た見所のある若者って、まさかねえ……  
希少食材の回収 達成

「ユウナ side out」

「アルティナ side」 徴兵家族支援基金について

パルムに戻った私たちは、依頼人のガラート親方さんに会うことになりました。

親方さんは依頼書にもある、徴兵家族支援基金について調べてほしいそうです。

その名の通り、徴兵されて働き手を失い残された家族を支援するために発足されたものだそうです。親方さんはどうも違和感が拭えないそうです。

教官とキリコさんもあまりに綺麗すぎるとして、調べてみようということになりました。

ちなみに私も疑っています。

パルムで聞き込みを続けるうちに、その違和感が現実のものになってきました。

徴収された金額の割りにミラの流れがかなり不透明であることが分かり、情報をまとめるべく親方さんの工房へと急ぎます。

すると、パルムの入り口に黒ずくめの導力車が停まっていました。

そこにいたのは以前、オルデイスで会ったクライスト商会のホームページでした。



どうやら彼が鍵を握っていると読んだ教官は導力車を追いますが、走り出してしまいました。

それでもなお導力車を追うべく、馬で追いかけることに。

途中で導力車は三体の魔獣の襲撃に遭い、足止めされていました。私たちは導力車に気を配りつつ、魔獣と戦闘することになりました。

なんとか魔獣を倒すと、導力車の中からハーマンさんが出てきました。

さつそく聞き出そうとすると、セントアーク方面から一台の導力車がやってきました。

出てきたのは眼鏡をかけた中年の男性でした。

営業本部長を名乗るワッツさんに徴兵家族支援基金は詐欺行為に触れることだと声高に言うと、ワッツさんは失笑し、国家総動員法の名の元に行つたいる正当行為だと口にしました。

さらに衛士隊やTMPに通報する義務があると言いました。言うまでもなく脅迫行為ですが、国家総動員法の金看板を持ち出された以上、私たちは反論に窮しました。

ワッツさんは不敵な笑みを浮かべたまま、ハーマンさんと共に去って行きました。

ユウナさんは怒りに震えていました。

ですが、国家総動員法が悪法だとしても施行されている以上、罪には問えません。

その後、親方さんに報告して依頼は達成しました。

胸のモヤモヤが晴れず、ほろ苦い結果になりました。

徴兵家族支援基金について 達成

「アルティナ side out」

「キリコ side」 おかしくなった愛馬

セントアークに戻り、馬を返そうとすると、乗馬クラブのアルベールとワンダーから相談を受けた。

なんでも、俺たちが戻る少し前に一頭の馬が怯えるように暴れ出

し、北サザラント街道に走って行ってしまったらしい。

正直、時間が惜しかったが教官が二つ返事で捜索を引き受けてしまった。

文句を言っても仕方ない。俺たちは北サザラント街道に出た。北サザラント街道をくまなく探っていると、一頭の馬がいた。足音を立てないように近づくも、馬は逃げてしまった。

ここで疑問が生まれた。

あの馬は異常なまでに怯えている。

だが周りを見渡しても魔獣の気配はない。

かなり繊細な馬なのかもしれないと、俺たちは慎重に追うことになった。

さらに進むと、俺たちが猟兵王と初めて会った場所に来た。

件の馬は木陰にいた。やはり怯えている。

原因がわからず馬を見つめていると、突然背中に冷たいものが走った。

アルティナが指さす方向を見ると、馬の幽霊のようなものが現れた。

アルティナが霊子反応と言っていたことから、あれは魔物の類いなのだろう。

教官、ユウナ、クルト、アツシユ、アンゼリカ・ログナー、俺を前衛に、アルティナ、ミュゼ、ユーシス・アルバレアを後衛に置いて、戦闘を開始した。

魔獣と明らかに違う攻撃パターンに苦戦したが、弱点のアーツとバーストアタックでなんとか撃破した。

その後、俺たちではどうにもならなかったので、乗馬クラブの二人を連れて来て馬をなだめた。

ドレックノール要塞の兵士に見つかるとう面倒なので、急ぎ足でセントアークに戻った。

時間を取られたが、まあいいだろう。

おかしくなった愛馬 達成

「キリコ side out」

午前10:25

「なるほど、そんなことがあったのか」

「みんな、お疲れ様」

ラインたちはアガットに報告し、エリオットはラインたちを労つた。

「とりあえず、一劇団員として目立たないようにバラバラに配置しとけ。白兔はこのままステージに立ってくれ」

「疲れているところ悪いけど、頼んだよ」

「……わかりました。覚悟はできています」

「いよいよ潜入作戦開始だな」

「アル、頑張つて！」

「無事に成功したら教官がパンケーキを奢ってくださいるそうですよ」

「いや待て。それは——」

「ホイップクリーム大盛、三種のベリーソース追加でお願いします」

アルティナの目の色が変わった。

「フルーツもつけてもらえよ」

「もちろんです。後、苺ミルクもお願いします」

「わ、わかった。つける、つけるから」

「言質は取りました」

アルティナは微笑みながらエリオットについて行った。

「……………」

ラインは肩を落とす。

「まあまあ、ライン君」

「そうですね。それに、アルが言ったメニューはリーヴスのベーカリーカフェのメニューですよ」

「そういえばそうですね」

「……そうだな。いずれリーヴスに戻ろう。Ⅶ組特務科全員でな」

『はい！』

「……………」

キリコは少し離れた。

「つたく、眩しいな。後、言つとくがオレはもう少しティータたちの行方を探って来るからな」

「アガットさん……？」

「やはり騒ぎになりかねませんか……」

「まあな。遊撃士のランクってのは時に枷になることもあんだ」

「バラッド侯は政府ともつながりがありますから、多かれ少なかれ影響が出るんでしょう」

「それに帝国貴族の中には遊撃士を嫌う者もいるからな。帝国で遊撃士の活動停止処分には貴族派も関わっているらしい」

「既得権益者にとつちやうるさいんだろうよ」

「……否定はしねえ。とにかく、何かあつたら連絡してくれ」

「わかりました。そろそろステージも始まるようですし」

「んじやな」

アガットはギルドに戻って行った。

「何かドキドキしてきましたね」

(頼むぞ。アルティナ、エリオット)

リインたちは演奏ステージを見届けた。

午後11:35

演奏ステージは無事に成功した。

作戦通り、退屈をもて余していたバラッド侯の目に留まり、潜入班は城館に招待されることになった。

城館の正面は衛士隊が守っていたため、横の出入り口からバラッド侯の私兵に案内され、バラッド侯が待つ執務室に通された。

バラッド侯は笑顔で出迎えたが、リインたちの顔を見て固まった。すぐさま、アルティナとエリオットが執務室全体を遮音フィールド

を展開する。

「なあっ!？」

「即興ですが上手くいきましたね」

「ふふ、これではらくは外に一切声は漏れませんかよ」

エリオットは微笑んだ。

「な、なんじやお前たちは……っ!?!」

バラッド侯はリインを見てハッと気づく。

「そなた……髪の色は違うが灰色の騎士か!?!」

「ええ。よくお気づきに」

「それにユース君に行方不明のアンゼリカ嬢まで……!」

「領邦会議以来になりますか」

「フツ、行方知れずだった事くらいは知っていてくれたようですね？」

「そ、それよりだ!そ、そこのお主は……!」

バラッド侯は幽霊を見たかのような反応をした。

「……………」

「やはりご存知でしたか」

「あ、あ、当たり前だ!恐れ多くも陛下を暗殺しようとした大罪人だぞ!」

「っ!」

アツシユは奥歯を噛む。

「それについては極めて複雑な事情があるただけお答えしておきましよう。それより挨拶が遅れました。2ヶ月ぶりですわ、大叔父様」

「ミ、ミルディーヌ……………」

バラッド侯爵はミュゼと目が合った。そして冷静さを取り戻す。

「フン、どうやら完全に嵌められたようだな。ワシも焼きが回ったものよ。領邦会議での失脚以来まるで坂を転がり落ちるよう………。ええい、本当に忌々しい」

バラッド侯はリインたちに背を向け、遠くを見つめた。そして椅子に座り直した。

「それで、何の用だ?いまや次期公爵どころか政府の傀儡に成り下がったこのワシに」

「な、何を不貞腐れて……何の用じゃないでしょう!?!」

バラッド侯の態度にユウナは腹を立てた。

「囚われたトールズ関係者、そしてアルフィン皇女殿下を解放して

頂きます！」

「トールズに、皇女殿下あ……？」

クルトの言葉にバラッド侯は目を丸くした。

「——ワーツハツハ！それはまた間の抜けたことよ！」

バラッド侯ははじけたように笑い出した。

「なっ……」

(あの笑い、嘘やごまかしではないようだな)

「……どういうことでしょうか？」

「どうもこうもない——そんな者たちは最初からここにはおらんわ。せめて皇女殿下をお迎えできていればここも華やいでいただろうがな」

「ではバラッド侯、二人は最初からいないと？」

「フン、元々はこちらで保護する予定だったのは間違いないわい。だが鉄道で帝都から来られる途中、急遽とある場所に留められたのだ。リベールの留学生とやらと共にな」

「ティータさん……！」

「鉄道の途中と言えば……」

「ドレックノール要塞か」

「そして父さんたち第四機甲師団が駐屯している場所だね」

「わかったであろう。ここには最初からワシしかおらん」

「どうやらそのようですね」

「フフ、分かればよい。さて、次はおぬしらじゃが……」

『！』

リインたちは身構えた。

「これ以上関わり合いたくもない。見逃してやるから一刻も早く出ていってくれ」

「……事を荒立てるつもりはないと？」

「当たり前だ！おぬしたちに会ってからワシのツキが下がrippばなしなのだ！」

「俺らのせいじゃねえだろうが……」

(少なくともキリコさん以外は……)  
アルティナは心の中でそう思った。

「ま、全く……イーグレット伯爵もとんだ酔狂な……こんな奴を……」

「……聞き捨てならないな」

「ヒイツー！」

キリコの鋭い視線にバラッド侯は顔を青くし、狼狽えた。

「俺のことはいい。だが、イーグレット伯爵には世話にはなったのでな」

「あ、あがが……」

キリコは殺気を纏い、バラッド侯を睨む。

「キリコさん、お祖父様はこのようなことでいちいち気分を害することはありませんよ。大丈夫です」

ミュゼはキリコの腕を掴む。

「……………」

キリコから殺気が静まる。

(やれやれ……)

(ふふ、なかなかの義侠心じゃないか)

アンゼリカはキリコの内面を垣間見た気がした。

「と、とにかく！顔も見たくない！出ていってくれ！」

我に返ったバラッド侯は両手を机におもいつきり叩きつける。

「……とりあえず、ここは撤退致しましょう」

「そうだな。アガットさんやみんなにも報告しなくちやな。では失礼いたします」

リインたちは執務室から立ち去ることにした。

午後12:15

『なるほど、そんなことが』

『よくそこまで教えてくれたもんだな』

ハイアームズ侯爵城館から戻って来たリインたちはメルカバに残る初代Ⅶ組メンバーらと話し合っていた。

「あのオジサンがすんなり教えてくれたのは意外でしたけど……」  
「嘘を言っている様子でもなかったし、彼なりの僕たちに対する意  
趣返しなんだらう。それにしても、ルスケ大佐の読みはだいたい当  
たっていましたね」

「結局はドレックノール要塞にでしたが」

「なあ、キリコ。お前はと思うよ？」

「……わざとああいう言い方をしたとしか思えない」

『わざと？』

「俺たちが城館に留まっているうちに何かを進めておく、とかな」

「つまり、何らかの策に私たちは利用されたということかい？」

『それくらいはやってのけるでしょうね。何しろ、権謀術数で大佐  
にまで登り詰めた手腕の持ち主らしいから』

「もちろん真つ当な手段なわけではない」

「くっ……!!」

「なによそれ！」

「二人とも落ち着いてください」

「いちいち怒っていてもきりがない」

憤慨するクルトとユウナをミュゼとキリコが宥める。

『アルフィン殿下はともかく、ティータさんも一緒にいさせるのは  
どうしてでしょう？』

「……普通に考えたら国外退去させそうなものだが、例のブライト  
姉弟が帝国入りしたのとも関係がありそうだな」

『ええ。間違いなく、牽制材料でしょう』

「……父さんやナイトハルトさんと全く連絡がつかないのも領ける  
ね」

「エリオットさん……」

「なあパイセン、目的なんかはわかんねえか？」

「うん。どうして殿下たちを要塞に留めたのかはわからないけど  
……多分——僕たちが来るのを読んでいるんじゃないかと思う」

「ああ、間違いないだろうな」



リインたちが振り向くと、アガットが立っていた。

「アガットさん！」

『アガット、戻ったんだ』

「ああ。鉄道方面を調べてた。お前らの読みは当たってる」

「では、やはり……！」

「ティータと皇女は第四機甲師団の監視下で丁重に保護されている。そしてそれを鉄道関係者とバラッドに口止めしなかったのはそういうことだろうよ」

「まさか……」

「俺たちを試そうとしているのか」

『この状況下でⅦ組がどんな道を示そうとしているのか——といった所でしようか』

「うん、多分ね。父さんらしいってどうか」

「ナイトハルト中佐も同じだろう」

「いずれにせよ、ドレックノール要塞は帝国南部における正規軍の最大拠点です。潜入、および殿下たちの奪還はかなりの難易度になることが予想されます」

『正直、旧都城館への侵入なんざ比喩物にならねえだろうな』  
クロウの言葉にⅦ組はしばし無言になった。

「だが、それでも退くわけにはいかない。殿下とティータが囚われているなら全力を尽くすまでだろう」

「うん、そうだね」

「海都の時も今回も上手くいったし、きつと次だって……！」

「簡単にはいかないだろうが、背を向ける理由がない」

「オレもアイツの保護者として同行させてもらうつもりだ」

アガットは前に出て、懐から小さな装置を取り出す。

「軍事要塞への潜入つてのも初めての経験じゃないしな」

「その装置は……」

「何か『方法』に心当たりがあるんですね？」

「ああ。だが色々と段取りが必要だ。さっそくお前さんたちにも手伝ってもらおうぜ……！」

新旧Ⅶ組はアガットの指示の下、動き出した。

「……なるほど……話はわかりました」

「でしよう？ならばさっそく——」

「失せろ」

「は？」

「そんな与太話に付き合ってられるほど我々は暇ではないのでね」

「し、しかし現に……！」

「それはあなたが決めることではない。このルスケもなめられたものだ」

「お、お待ちください……！」

「テイタニア中尉、ワッツ氏がお帰りだ」

テイタニアはドアを開け、帰るよう無言の圧力をかける。

「くっ……！」

ロッチナとテイタニアの迫力に屈したワッツはさすがごと引き上げで行った。

「良いのか？」

「フフフ、これで良い」

ロッチナは笑みを浮かべた。

(おのれ……このままですませるか……！)

ワッツはどこかへと通信をかけた。

## ドレックノール要塞

七耀暦1206年 8月24日

リイン、ユウナ、クルト、エリオット、アガットは貨物列車のコンテナの中に身を潜めていた。

「こんな方法、どこで……」

「言つたろ？軍事要塞への潜入は初めてじゃねえつて」

「なるほど。経験済みでしたか」

リインとエリオットは脱帽した。

「……………」

その隣でユウナとクルトは黙りこんでいた。

「大丈夫か？もしかして酔つたか？」

「い、いえ……」

「だ、大丈夫です……」

クルトとユウナは俯く。

「キツイなら無理せず言ってくれよ？」

「は、はい……」

（シユバルツァー……………）

（察してあげなよ……………）

アガットとエリオットはリインの鈍感さに呆れた。

一方、キリコ、アツシユ、ミュゼ、アルティナ、クロウと残りの初代Ⅶ組と鉄機隊はドレックノール要塞付近の二ヶ所のポイントで待機していた。

「しかし、ホントに来んのか？」

「ミュゼさんの読みによると、衛士隊の魔煌機兵部隊が強襲してくるそうです」

「そこを利用させてもらうことに致しましょう」

「Ⅶ組が今の帝国で立ち回るなら、先手に拘る必要はない」

「こういう喧嘩は先に動いた方が敗けるからな」

「まあな。にしても、いいのかよ？フェンリールで」

クロウはキリコに聞いた。

「こちらの方が都合が良い」

「都合？」

「俺が独自に動いていることにすれば、その分教官たちが動きやすくなる」

「キリコさん……」

「そりゃまあ、そうだけだよ……」

「……様子を見てくる」

ミュゼたちが無言になる中、キリコは双眼鏡を持って、北サザーラント街道方面に偵察に出た。

リインたちはドレックノール要塞内の貨物駅に降り立った。

「上手くいきましたね」

「すごいですね、その装置」

「昔、ラッセルの爺さんが作ったモンだ。たいていの導力検知器はこいつで誤魔化せる」

「だ、大丈夫なんですか？」

「今回は要人救出がメインだ。レイストーン要塞ときと同じだ」

「レイストーン要塞……」

「リベール王国最大の軍事要塞ですね」

「まあ、長くなるから後回しだ。それじゃ、行くぞ」

リインたちはドレックノール要塞に突入した。

「アルティナ、悪いが来てくれ」

偵察から戻ったキリコはアルティナについて来るよう呼び掛けた。

「何かありましたか？」

「機甲兵が隠してあった」

「機甲兵が？」

「気になるな。でも衛士隊はいなかったのか？」

「まだ来ていない」

「とりあえず急ぎましょう」

キリコたちはもう一つのポイントに連絡を入れ、機甲兵が隠されている場所へと向かった。

「こいつは……!」

アッシュたちが見たのは、12アージユはあろうかという、巨大な機甲兵だった。

「ゴライアス・ノア!」

「なんでこんな所に……?」

「おそらく……陽動作戦に用いるための機体でしょう。私たちの来訪を予知している第四機甲師団の」

「前面に集中させて、背後からズドンってか」

「気づいてよかったな」

「……腑に落ちないな」

キリコは顎に手をやる。

「あ?」

「腑に落ちない?」

「隠蔽工作が稚拙過ぎる。まるで初めから発見させようとしているみたいにな」

「待てよ、てこたあ……」

「罨、ですか」

「一応、調べてみましょう」

アルティナはクラウソラスを使ってゴライアス・ノアを調べだした。

「……」

「ど、どう?」

「……細工などは確認できませんでした」

「ますますわかんねえな」

「やはり俺たちを試そうというのかもな」

「そうですね。ではそろそろ——」

ミュゼが言い終わらないうちに、警報が鳴り響いた。

「これは……!」

「動いたか」

「じゃあ、あたしたちも——」

「お前たちは要塞に行け。俺はここで身を潜めておく」  
キリコはユウナたちにそう告げた。

「キリコ……………」

「アルティナ、フェンリールを頼む」

「……………わかりました」

アルティナはクラウソラスを出し、ゴライアス・ノアとフェンリールを入れ替えた。

「ここからは一切、俺に呼びかけるな。あくまでもⅦ組とは無関係だと装え」

「キリコさん……………」

「わかった、気をつけるよ。後輩ども、急ぐぞ！」  
クロウの号令に、新Ⅶ組は走り出した。

リインたちがドレックノール要塞に足を踏み入れた瞬間、突然アラートがけたたましく鳴り響いた。

「えっ…………!?!」

「チツ、コイツは…………!」

『来たようだな、Ⅶ組。遊撃士も一緒のようだ』

『エリオットも…………来ると思っていたぞ』

『久しぶりね、エリオット』

混乱するリインたちをよそに、天井から二人の男性と優しげな女性の声が響いてきた。

「父さん！それに姉さんも!?!」

「その声はナイトハルト中佐…………!」

エリオットは父と姉の、リインはかつての教官の声に声を上げる。

『リインさんっ!』

『アガットさんも…………!』

今度は二人の女性の声が響いてきた。

「この声…………アルフィン殿下ですね!?!」

「ティータも一緒か!?!」

『はい……！ああ、リインさん、皆さんもよくぞご無事で……』

「殿下の方こそ……！」

「心配しておりました……！」

聞こえてきたアルフィン皇女の声に、リインとクルトは安堵した。

『グスツ、アガットさん……本当に来てくれるなんて……！』

「ハッ、たりめえだ。言ったら、絶対に駆けつけるって」

アガットはティータの無事を知り、内心ホッとした。

『殿下たちの事なら安心して。こっちで丁重に保護させて頂いてい  
るわ』

『うむ、あくまで要塞の客人としてな』

ドレックノール要塞の司令室からモニター画面を見ながら、フィオ  
ナとクレイグ將軍は口を開いた。

『最上階の司令室にて待つ。殿下たちを解放したくばここまでたど  
り着き、己の手で勝ち取ってみせよ』

『ただし我ら第四機甲師団の本拠地——不本意だが人形兵器を哨戒  
させている。乗り越えたくば君たちの全力をもって挑むことだ』

「ハッ、上等じゃねえか！」

アガットは重剣を握りしめる。

「必ずや乗り越えてみせます！」

「待っていて、父さんに姉さん、ナイトハルトさんも！」

「僕たちも負けません……！」

「うん——絶対に！」

VII組も闘志を燃やす。

『フッ……』

『楽しみにしているぞ、我が息子よ』

『待っているわ、トールズVII組のみんな』

『き、気をつけてください、皆さん！』

『どうか女神の加護を……！』

アルフィン皇女の声を最後に、通話は途切れた。

「ふう、無事がわかって良かったけど、こんなに早くバレちゃうなん  
て……」

「どうやら要塞へ来ること自体読まれていたみたいですね」

「ああ、さすが俺たちⅦ組をよく知る人たちということだろう。まさかフィオナさんもいるとは思わなかったが」

「多分、父さんが呼んだんだと思う。ほら、双龍橋の一件もあつたし」

「そうか、それもそうだな」

「双龍橋の一件、ですか？」

「兄上から聞いたことがあります。フィオナさんという方は貴族連合軍に人質にされたとか」

「ああそうだ。それで俺たちが救出に乗り出したんだ。あの時の二の舞は將軍も是が非でも防ぎたいんだろう」

リインはクレイグ將軍たちの手腕を素直に評価した。

「それにしても、まさか人形兵器を要塞の哨戒に運用しているなんて……」

「衛士隊のゴリ押しもあつたんだろうな」

「断ることは出来なかつたんでしょうか……？」

「クレイグ將軍は根つからの軍人だ。個人の疑問云々よりも、政府の決定には従わざるを得ないんだろう」

「君たちがサザーラントで演習をした時も、父さんたちは動けなかつたんだ」

「そうだったんですか……」

ユウナは胸に手を当てた。

「帝国軍最強の師団に人形兵器が加わるとなると、厳しい戦いになりそうですね」

「後は外の奴らに任せるしかねえな」

「ええ、そうですね……」

リインは外へ通じるゲートを見た。

「大丈夫、リイン。僕たちの仲間を信じよう」

「何だかんだ言つて、ここまでついて来たんだ。簡単にやられるタマじゃねえのはお前さんが一番よく知ってることだろう？」

エリオットとアガットは諭すように言った。



「アルにキリコ君、アツシユにミュゼ。みんな教官に鍛えられたんですよ」

「あの四人なら大丈夫ですよ。もちろん僕たちも足手纏いになるつもりはありませんが」

新VII組も続いた。

「……そうだな。エリオット、二人とも、宜しく頼む！」

「うん！」

「はいっ！」

「アガットさんも改めて宜しくお願いします……！」

「おう！任せな！」

リインたちは円陣を組む。

「行くぞ——これより、ドレックノール要塞の攻略を開始する！」  
リインたちは改めて突入した。

【食らえや！】

【怯むな！第四機甲師団の底力を見せつけろ！】

ドレックノール要塞の外では、機動兵器同士の戦闘が繰り広げられていた。

【よう、アラン。久々だな！】

【クロウ先輩……本当に生き返ってたんですね】

【まあな。リインから聞いたが幼馴染を射止めたんだってな！】

【ど、どうも——】

【少尉、無駄口を叩くな！ここは戦場だぞ！】

【っ！……すみませんクロウ先輩。ここで倒させてもらいます！】

【来な！】

クロウが乗るオルディーネは10機の機甲兵を相手取っていた。

【アンタ、確かキリコの……】

【元第九機甲師団員にして、元上官だというライル・フラット大尉ですな】

ヘクトル式型・改とケストレルβⅡは4と9が描かれたシユピーゲ

ルSとドラツケンⅡ2機と対峙していた。

【そうか、君たちはキリコ同級生か。それと今は少佐だよ】

【昇進なされたんですね。いえ、こういう時だからこそ】

【君、いや貴女がカイエン公か。ええ、戦時特例という形ですね】  
ライル少佐はゆっくりと答えた。

【にしても、嫌なもんですな】

【息子と変わらない年頃の相手と戦わなくてはならんとは】

【ダミアン准尉、コンラート中尉。私語は慎め】

【イエツサー】

ライル少佐の言葉に二人は姿勢を正す。

【一応聞くけどよ、目溢ししてくれたり……】

【それは出来ない。理由はどうであれ、君たちは侵入者だ】  
ライル少佐はきっぱりと言った。

【では、ここは力づくでということ……!】

ヘクトル式型・改とケストレルβⅡは得物を構える。

【いいだろう。では行くぞ!】

シュピーゲルSとドラツケンⅡも構えた。

「殿下……」

ドレックノール要塞司令室では、クレイグ將軍とナイトハルト中佐がアルフィン皇女とティータに詫びていた。

「此度の一件、誠に申し訳ありません。皇族である貴女を人質に取るような無礼を、どうか……!」

「かのラツセル博士の身内であるティータ君にも申し訳ない」

クレイグ將軍とナイトハルト中佐は頭を下げた。

「お父さん……」

「はわわっ……!?!」

ティータは思わず狼狽えた。

「頭を上げてください、將軍閣下」

アルフィン皇女は首を横に振る。

「私たちを保護してくださったのは、衛士隊の手中に囚われること

を恐れてのことでしょう。現に、お母様がジュノー海上要塞に軟禁されていたとか」

「ええ。その後の調査の結果、VII組によって解放され、今はオルデイスにてレーグニッツ暫定的統括官と共におられるそうです」

「レーグニッツ氏なら安心ですわ」

アルフィン皇女は母の行方に安堵した。

「クレイグ將軍……今回のこと、手を引いて頂くわけには参りませんか？」

「それは出来かねます」

クレイグ將軍はきつぱりと言った。

「ナイトハルトさん……」

「フィオナさん、申し訳ありませんが私も閣下と同意見です」

ナイトハルト中佐も目を瞑りながら言った。

「この帝国で『第三の道』を往かんとする彼らの覚悟、見定めねばならん。殿下、もうしばらくお待ちください」

「……わかりました」

アルフィン皇女は顔を伏せた。

（集結しつつあるか）

ミュゼたちと別れたキリコは再び偵察に出た。

（ずいぶん大掛かりな兵器を持ち込んでくるようだな。あの形状、どこかで見たような……）

キリコは双眼鏡で魔煌機兵が運搬している大型の兵器を見つめる。

（おそらくあの兵器は後方に配置される）

キリコは地図を取り出した。

（第一陣はミュゼたちや第四機甲師団に任せて、俺は先に背後から第二陣を叩く。それが終わればそのまま第一陣を奇襲し、撤退。それでいこう）

キリコは作戦プランを練り上げ、フェンリールの所に戻った。

突如、ドレックノール要塞司令室の通信が入った。

「この通信暗号は……」

ナイトハルト中佐は訝しげに通信を開く。

モニターにどことなく不機嫌そうな肥満体の軍人が映った。

『こちらら衛士隊のクレープス大佐である』

「こちららは第四機甲師団のナイトハルト中佐です。クレープス大佐、何かご用でしょうか？」

『単刀直入に言う。貴公らの元にいる皇女殿下とりベールの留学生を即刻引き渡してもらおう』

「引き渡せ、とは？お二人はこちらで丁重に保護しておりますが」

『元々は我々衛士隊がお迎えするはずだったのだ。まあ、貴公らは音に聞こえし第四機甲師団。引き渡せば此度の嫌疑はなかったこととしよう』

「嫌疑？いったい我々に何の嫌疑が？」

『決まっているであろう。皇女殿下と留学生の誘拐だ』

「誘拐ですと!?先ほどもお伝えしたとおり、お二人は我々第四機甲師団が——」

『凶に乗るな、青二才が!』

クレープス大佐は怒りを露にした。

『気をつけることだ。貴様の物言いが、第四の今後を左右するといふことを忘れるな』

「クッ！」

ナイトハルト中佐は拳を握りしめ、悔しさを滲ませる。

その時——

「……我が部下を侮辱するのは止めてもらおう」

クレイグ將軍はモニターを睨み付ける。

『ク、クレイグ將軍……!』

さしものクレープス大佐も焦る。

「……一度しか言わんからよく聞け」

クレイグ將軍は姿勢を正す。

「我々第四機甲師団は、現在保護している皇女殿下とりベールからの留学生の引き渡しは拒否するっ!!」

「な……!?!」

「お父さん……!?!」

『じ、自分が何を言っているのか、わ、わかっておられるのでしょうか?!?』

「やかましい!」

クレイグ將軍は右手を叩きつける。

『ヒッ!?!』

「皇妃様をジュノーに軟禁しただけにとどまらず。あまつさえ皇女殿下を手中に納め、皇室の権威を笠に着ようとしている貴様らの言えた義理かあつ!!」

「閣下……」

(モルガン將軍よりすごいかも……)

『ぐぐつ……!?!ならばよかろう!?!正義は我らにありだつ!』

通信は唐突に切れた。

「……………」

クレイグ將軍は頭を押さえる。

「申し訳ありません。どうやら、衛士隊と一戦交えることになるようです」

「いいえ將軍。私も腹を括ります。正義などとおっしゃっていましたが、彼らのどこに正義があるのでしょうか?」

「殿下……」

「いざとなれば、私が呼びかけます。ご自分を責めないでください」

「あ……」

「お父さん」

フィオナは父の肩に触れる。

「……お強くなられましたな」

「帝国を蝕む黄昏の呪いは見て見ぬ振りをしていたアルノール家の失態です。いつまでも花よ蝶よとはいられません。ですが——」  
アルフィン皇女はティータの方を向く。

「ティータさんだけは——」

「大丈夫ですよ。私もここにいます」

「でも……」

「アガツトさんやリイン教官たちがきつと来てくれますから」  
「ティータは精一杯はにかんだ。」

「ティータさん……」

アルフィン皇女はティータの隣に座った。

「むう……」

「我らの敵う相手ではありませんでしたな」

「ええ（急いで、エリオット、みんな……）」

「そこまでです！」

ドレックノール要塞司令室を目指すリインたちは第四機甲師団の  
兵士たちと対峙していた。

「灰色の騎士殿、ここを通すわけにはいきません」

「エリオット坊っちゃんも、退いて頂けませんか？」

兵士たちは剣を構える。

「フィーから聞いていたが、本当に坊っちゃんて呼ばれてんだな」

「もう……フィーってば」

エリオットは顔をしかめる。

「申し訳ありませんが、退くわけにはいきません。押し通らせても  
らいます！」

リインたちは得物を構える。

「いいでしょう。私たちにも意地があります」

「あなた方の覚悟、見極めさせて頂きます！」

第四の兵士たちはリインたちに斬りかかった。

【カオスセイバー！】

【ぐはっ!?!】

オルディーネの10機目のドラッケンIIを倒した。

【これが……蒼の騎神………】

【くっ！抜かった………！】

【悪いな。さてと………】

クロウはアラン少尉に呼びかけた。

【おいアラン。生きてるか?】

【と、とりあえずは……】

【まだ動けんなら備えといた方がいいぜ。もうすぐ衛士隊の奴らが来る】

【衛士隊が!】

アラン少尉は仰天した。

【どうも奴ら、第四がお姫さんを誘拐したとかで、奪取しに来るみてえなんだと】

【む、無茶苦茶だ……!】

【我々は断じて誘拐などしていない!】

【衛士隊の連中、いよいよ俺たちが目障りになってきたとでもいうのか!】

クロウからもたらされた情報に、兵士たちは殺気立つ。

【……色々あるみてえだな】

【ええ。ここ最近、我が物顔に振る舞う連中が多いんです】

【特に指揮官のクレープスってブタ野郎が——】

【中尉。思っけていても口には出すな】

奥からライル少佐の乗るシュピーゲルSとヘクトル式型・改とケストレルβⅡが歩行してきた。その隣にアルティナもいた。

【ライル少佐……】

【へえ? 現行機でその二機を抑えたのかよ?】

【いや、ひたすら防御に徹した結果さ。連絡が来なかったら負けていたよ】

【連絡?】

【先ほどナイトハルト中佐殿から連絡がきた。要塞に迫り来る衛士隊を抑えろとのことだ】

【大丈夫なのでありますか? 衛士隊を敵に回して】

【まあ、第四は明日以降から政府の言いなり状態になるだろうな】

【ライル少佐……】

【そのようなことになってもいいんですか……?】

【上からの指示だからね。何より——】

ライル少佐は操縦桿を握りしめる。

【皇女殿下誘拐などと第四の金看板に泥を塗ってくれた衛士隊には思い知らせてやらなければならぬ。いったいどこの誰に喧嘩を売ってきたのかをね】

【アンタ……意外に熱血だな】

【第九機甲師団にいたからね。亡きゲルマツク閣下なら大隊を率いてカチコミをかけていたんじゃないかな】

【ハハ、言えてますね】

【コケにしくさりおつて！とか言いそうですな】

元第九機甲師団に所属していた者たちは笑みを浮かべた。

【スゲエ……】

【さすがは白兵戦において、最強と言われた第九機甲師団ですね】

【ハハ、頼もしいねえ】

クロウはライル少佐たちを見つめる。

【では布陣を組み直す。コンラート中尉らは前衛で魔煌機兵を食い止める。アラン少尉も戦列に加われ。クラム大尉らは射撃戦で前衛の支援。旧式戦車隊も加われ。一刻の猶予も無い、急げ！】

【イエス・サー!!】

ライル少佐の指揮の下、兵士たちは動き始めた。

【俺らは?】

【君たちの出る幕はない】

【なぜでしょう?】

【私たちの務めは民間人を守ることにも含まれています】

【しかし……】

【私たちが死に行くわけじゃありません。もつとも、共和国との全面戦争が始まったらどうなるかわかりませんが】

【……………】

ミュゼは顔を伏せる。

【じゃあ、そろそろ行きますね。機会があればまたどこかで】  
シユピーゲルスは北サザラント街道方面へと向かった。



【どうすんだよ?】

【要塞中に行くか、加勢に行くか、だな】

【街道ではキリコさんが控えていますか】

【……私たちは先輩方の加勢に参りましょう。アルテイナさんの言うように、向こうにはキリコさんが控えていらっしやいますのでこちらは大丈夫でしょう。それと……】

【それと?】

【少々マズイことになりそうです】

ミュゼがおもむろに口を開いた。

【ミュゼさん……?】

【どうかしたのかよ?】

【……なんか視えたのか?】

【はい、衛士隊はどうやら新兵器を投入してきます。問題はその新兵器により……】

【何が起きんだ?】

ミュゼは躊躇いしつつも、顔を上げた。

【……第四機甲師団とドレックノール要塞……どちらも崩壊します】

【待っていたぞ】

リインたちはドレックノール要塞司令室に到達、一気に突入した。執務用のデスクの前に、クレイグ將軍とナイトハルト中佐が、その斜め後ろにフィオナとアルフィン皇女とティータが立っていた。

【父さんに姉さん……ナイトハルトさんも!】

【アルフィン殿下!】

【ティータ、無事か!】

【リイン、さん……皆さんも……やっど……やっど……やっど会えた……!】

アルフィン皇女は胸に手を当てる。

【……本当にお久しぶりです。ご心配をおかけしました】

【グスツ、私たちは平気です!アガツトさんは……!?!】

ティータの目から熱いものが流れる。

「へっ、見ての通りだつての。……元氣そうで何よりだぜ」

「感謝します。将軍、中佐も。二人を丁重に扱って頂いて」

「なに、皇族に留学生ならば礼を尽くすのは当然のことだ」

「窮屈な思いをさせたのは間違いないだろうがな」

「あはは……侯爵のオジサンとずっと一緒よりはマシのような」

「……さすがにバラッド侯が不憫になってくるんだが……」

クルトは少しだけバラッド侯に同情した。

「コホン——改めてよくぞ来た。Ⅶ組、リベールの遊撃士よ。屈強なる第四の師団兵たちを越え、無事にここまでたどり着くとはな」  
クレイグ将軍はエリオットに目をやる。

「エリオット、可愛かったお前の逞しい成長、父としてこれほど嬉しいことはない」

「立派になったわね、エリオット。お姉ちゃん嬉しいわ」

「ふう、後輩たちの前で可愛いとかそういうの止めてほしいな。——乗り越えるよ、どんな壁でも。僕たち自身が決めたことだから」  
エリオットはしっかりと自身の想いを家族に告げた。

「エリオット……」

「そうか……」

「フツ、かつての戦術教官としても、以前からの知り合いとしても嬉しい限りだ。シュバルツァー、ミュラーの弟も——迷いを断ち切りつつあるようだな？」

「ええ……多くの人たちが支えてくれたおかげです。その思いに応えるためにも、ここで貴方たちを越えてみせます」

「兄上の盟友にして戦友——《剛撃》のナイトハルト中佐。未だ未熟な剣ではありますが、届かせてもらいます……！」  
リインとクルトは抜刀した。

「教官、クルト君……そうだね！」

「ハッ、上出来だぜ」

ユウナとアガットも得物を構える。

「皆さん……」

「アガツトさんも……」

アルフィン皇女とティータはリインたちの姿を目に焼きつける。

「フフ……見よ、ナイトハルト。あれが獅子心皇帝から脈々と受け継がれてきたものだろう」

「ええ——新たなVII組も確かに。ならばこちらも全力で応えるべきでしょう……！」

クレイグ將軍は斬馬刀を、ナイトハルト中佐は大剣を構える。

「これが最後の試練だ——今こそ確かめさせてもらうぞ！絶望と破滅に向かいつつある帝国におぬしらが示す力と意志を！」

「分かりました……！行くぞ、エリオット！VII組として、ツールズとしてー！」

「うん、奏でてみせる——僕たちだけの調べを！」

「俺らにとってもお隣さんだ……！問答無用で助太刀させてもらうぜ！」

リインたちはクレイグ將軍らに斬りかかった。

【ぐわっ!!】

「クツ……行かせるなあっ!!」

【……………】

一方、北サザーラント街道では熾烈な戦いが展開されていた。

「我らが同胞を幾人も屠った憎き『蒼き災厄』め！なぜ我らの邪魔をする!!」

【……………】

キリコは構うことなく引き金を引く。

【ここは我らが止める！早くその新兵器を………!!】

「りよ、了解!!」

命令を受けた衛士隊兵士は運搬車のスピードを加速させる。

【ここから先へは行かせん!】

【我らの大義、貫かせてもらう!!】

二機のゾルゲはフェンリールに斬りかかる。

【遅い】

フェンリールは二機の足元にマシンガンの銃撃を撃ち込む。続  
様に大型アイアンクロウでゾルゲの装甲を抉る。

「ぐ…………ぐふつ……………」

「……………これで良い……………これで大義が……………」

ゾルゲは崩れ落ちた。

【急ぐか】

キリコはフェンリールをドレックノール要塞に向けて走らせる。

要塞司令室でも、戦闘は激化していた。

「ジェミニニブラストII!」

「真・双剋刃!」

ユウナとクルトはクラフト技を叩き込む。

「ぬうっ!」

クレイグ將軍は斬馬刀で易々と受け止める。

「甘いわっ! サイクロンレイジ!」

「きやあつ!」

「ぐっ!」

クレイグ將軍のクラフト技を受けたユウナとクルトは吹っ飛ばさ  
れた。

「二人とも、大丈夫? ホーリーソングII!」

エリオットが二人をクラフト技で回復する。

「あ、ありがとうございます——」

「よそ見をするな! エクスクルセイド!」

隙を突くように、ナイトハルト中佐は空属性アーツを放つ。

「させない!」

クルトがユウナの盾になった。

「クルト君!」

「だ、大丈夫……………それより教官!」

「わかった! 螺旋撃!」

リインがナイトハルト中佐に接近して斬りつける。

「ぐっ……………!」

「ナイトハルト！」

「悪いが付き合ってもらおうぜ！ドラグナーエッジ！」

クレイグ將軍はアガットのクラフト技を真横から受けた。

「ぬうつ！流石はA級遊撃士と言うべきか……！」

「まだ終わってないよ！ブルーオラトリオ！」

続け様にエリオットのクラフト技が叩き込まれる。

「くっ！ティア——」

「させない！クロスブレイクII！」

ユウナのクラフト技が回復アーツの発動を防ぐ。

「しまった!？」

「クルト、行くぞ！」

「了解です！」

リインとクルトのラッシュ攻撃が放たれた。

「くっ……さすがだな……！」

直にくらったナイトハルト中佐は大剣を落とし、膝をついた。

「やるな、ならば！」

クレイグ將軍は斬馬刀を構える。

「やべえのが来るぞ！」

「遅い！デストラクトハンマー！」

クレイグ將軍渾身のクラフト技がリインたちに叩き込まれた。

その威力に、リイン、ユウナ、クルト、アガットは膝をついた。

「くっ……！」

「デタラメ過ぎでしょ……！」

「どうした、もう終わりか！それがおぬしらの限界か！」

「まだまだよ！」

エリオットが魔導杖を掲げる。

「いぎ、幻想の世界へ！ここからが本番だよ！レメデイファンタジア  
！……静聴、ありがとうございました……！」

「これは……！」

「傷が治っていく……」

エリオットのスクラフトを受けたリインたちは完全に回復した。

「さあ、今度は僕たちの番だよ！」

「ああ！行くぞみんな！」

『おおっ！』

「よかろう……来い！」

クレイグ将軍も得物を構える。

「先陣は僕が！レインスラッシュⅡ！」

「続くわ！ブレイブスマッシュⅡ！」

ユウナとクルトが突っ込む。

「ぬうっ!？」

「お次はこいつだ！ダイナストゲイル！」

続け様にアガットは重剣で薙ぐ。

「無月一刀！」

アガットと入れ代わり、リインの強化されたクラフト技が炸裂。

「ぐっ……！」

クレイグ将軍の体勢が崩れる。

「これで最後！みんな、行くよ！」

『応！』

エリオットの号令と共に、バースト攻撃が放たれる。

バースト攻撃を受けたクレイグ将軍も遂に膝をついた。

「フフフ……見事だ……！」

リインたちはクレイグ将軍たちの試しを乗り越えた。

「総員、準備を急げ！」

その頃、衛士隊は新兵器の準備を急いでいた。

「……前衛は如何致しますか？」

「捨て置け。時間を稼げればそれで良い。帝国に命を捧げられて本望だろう」

「それにしてもこんな兵器、いったいどこから……」

「余計な詮索は後回しにしろ。それより連結コネクターに問題はな

いだらうな?」

「無論です」

(ククク……ゾルゲ一機分のエネルギーと引き換えに放たれる砲撃。機甲兵など物の数ではない)

「どうやら準備が整いつつあるようです」

「そうか。いよいよだな」

「あの蒼い災厄は如何致しましょう?」

「せっかくだ、例の対機動兵器用の兵装を試してみろ」

「分かりました。さっそく配置に着かせます」

「それと、言うまでもないことだが、くれぐれも司令室は外せ。そこ以外なら吹っ飛ばしても構わん」

「ハッ!」

衛士隊兵士は前線に戻って行った。

(まあ、死んだら死んだで言い訳は効くし、いくらでもやりようはあるがな)

部隊長はほくそ笑んだ。

まもなく砲撃が始まる。

## 流星

「エリオット……本当に遅しく成長してくれた。フフ、よもやこんなにも早くこの父を超える日が来ようとはな」

戦いを終え、クレイグ將軍は穏やかに息子を見つめる。

「あはは……越えたただなんて。そんなこと少しも思っちゃいないよ。でも……」

エリオットは父の顔をしっかりと見る。

「成長できたのはリインたちと、父さんのおかげかな」

「わ、私の……?」

「だって今の僕の足場を作ったのは間違いないなくツールズだろうから。色々あつたけど士官学院に入れてくれた父さんには感謝してる——今でも」

「エリオット……!」

「坊っちゃん……ハハ、大きくなりましたね」

フィオナとナイトハルト中佐は微笑む。

「っ……!」

クレイグ將軍はエリオットたちに背を向けて顔を上げた。そして肩を震わせる。

「……母さんも、女神の下でさぞ喜んでいるであろうな」

(あ……)

(素敵なお父さんね)

(ああ、人間的にも大きな人物だな)

「……ゴホン、まあそれはともかく。じきに——」  
ズガアーーーーーン!!!!

突如、いくつもの爆音が鳴り響いた。

「なあっ!」

「きゃあああっ!」

同時に、司令室に緊急通信が入る。

「こちらナイトハルト! いったい何が起きた!」

『衛士隊です! 衛士隊の新兵器と思われまます!!』



「新兵器!?!」

「バカな!?! ここには皇女殿下たちがおられるんだぞ?!」

「チツ! 形振り構わねえってか!」

「何としてでも新兵器とやらを潰せ。こちらからも大隊を出動させる。それまで——」

『りよ、了解しま……!!』

突然ノイズが流れ、通信が途絶した。

「くっ、ジャミングか……!」

ナイトハルト中佐は両手を叩きつける。

「——どうやら一刻の猶予もない。ツールズVII組よ、二人と娘を連れて脱出してくれ」

「將軍!?!」

「お父さん!?!」

「此度の一件の総ての責任は私にある。激情に任せて衛士隊と事を構えるべきではなかったのだ」

「ですが將軍、それは……!」

「そうですね! アルフィンさんを引き渡さないようにしたためじゃないですか!」

ティータが反論した。

「……やはり殿下たちを引き渡せと言ってきたんですね?」

「ええ。お父さんたちが殿下たちを誘拐したと言ってね。貴方たちが来る前にきた通信を聞いていたんだけど、大義はこちらにあるって」

「そんな!?!」

「どこまで腐ってやがる……!」

フィオナの言葉にユウナは信じられないといったように顔を歪ませ、アガットは怒りの形相を表した。

「とにかく、ここからは我らの領分。あくまでも民間人であるおぬしらの手を借りるわけにはいかんだ」

『……………』

クレイグ將軍の毅然とした態度に、ラインたちは何も言えなかつ

た。

「……私は残るわ」

フィオナは前に進み出た。

「姉さん!」

「このままついて行ってもエリオットたちの足手纏いになりそうなもの」

「フィオナ……」

「ごめんなさい、ナイトハルトさん。でも帝都にいた頃から心配だったの。連絡のつかないお父さんと、貴方が。意に沿わない政府の命令を受けて無理しているんじゃないかって」

「それは……」

フィオナとナイトハルトの距離が縮まる。

「……」

クレイグ將軍は背を向ける。

(もしかしてお二人って……?)

(いい雰囲気なのは聞いていたけどね……)

「……わかった。確かにここに居た方が安全やもしれぬ。では改めて、トールズVII組よ。殿下たちを連れて離脱するがよい」

「……分かりました。ですが、將軍」

「?」

「……今回のことはどう考えも政府の意に沿うとは思えません。旧都に運ばれるはずだった殿下たちを留め、その上、要塞で奪われたとなれば……」

「格好の失点となるのは間違いねえだろう。共和国との戦争が激化した状況で遠慮なく戦線投入されるくらいいな」

「……」

リインとアガットの言葉にクレイグ將軍とナイトハルト中佐は無言になった。

「あ……」

「やはり、そうなんです……?」

「……ああ、我々第四機甲師団は帝国政府からある意味一目置かれ

ている存在だった。だがこれで——《大地の竜》作戦における、重要な駒として使われることになるだろう」

「そんな……!」

「ではなぜ——」

「それでも我々はおぬしらに “試練” を与えると決めた。そしておぬしらは見事に乗り越え、力と意志を示してくれた。帝国、いや世界最悪の大戦が始まろうとしている中、それでも光はある——それがわかっただけでも十分だろう」

「將軍閣下……」

「父さん……ありがとう。必ずそれに応えてみせるから。父さんや中佐、第四のみんなをこれ以上血に塗れさせないためにも……!」

「……うむ」

「健闘を祈る、シユバルツァー。他の者たちも。どうか君たち自身の征くべき道を絶望の中に見出だしてみてくれ……!」

「はい……どうかお任せを!」

「私も皇族の一員として、最後まで足掻いてみせます。リインさんたちと一緒に!」

リインたちはアルフィン皇女とティータと共に要塞離脱に向かった。

「お父さん……」

「彼らなら大丈夫だ」

「ええ、きつと……!」

クレイグ將軍とナイトハルト中佐は満足げにリインたちを見送った。

一方——

【止まるなっ! なんととしてもここで抑えろっ!】

【この新型魔導砲、貴様の好きにはさせんぞお!】

【……………】

要塞付近では激闘が繰り広げられていた。

「キリコ side」

【新型魔導砲……】

俺は衛士隊兵士が豪語していた兵器から目が離せなかった。

【見た目は完全にアストラギウスのログガンだな。基地などからエネルギーを供出し、発射する対戦艦兵器】

破壊したログガン擬きの形状から、用途を割り出す。

おそらく、機甲兵または魔煌機兵とコネクターを繋ぎ、そのエネルギーを打ち出す。その威力は見てのとおり、要塞の外壁に大きなダメージを与えるほどで、機甲兵などひとたまりもないだろう。欠点を挙げるなら使われた魔煌機兵はしばらく使い物にならなくなるぐらいか。

だが魔煌機兵を主戦力とする衛士隊は物量をカバーできるほどの生産拠点を持っているはず。だからその欠点は無いと同義だ。

【とはいえ、配備されているのは僅か。さっさと叩き潰す】

俺は他のログガン擬きを破壊しながら、さらに前進した。

だが撃つてくることはなかった。

【攻撃が止んだ……既に移動したのか？】

このまま行けば展開しているはずの第四機甲師団とかち合うことになる。

【その時はある程度損害を与えて撤退すればいいか】

この時俺は不覚にも、ここが何でもありの戦場だということを忘れていた。

「今だっ！」

【!?】

突如、四方からワイヤーのようなものが飛んできた。

下がろうとしたが既に遅く、フェンリールの両腕と両脚がワイヤーのようなものに捕まっていた。

「ククク……かかったな」

【チッ！】

「散々辛酸を舐めさせてくれた蒼き災厄めが。どこまで耐えられるかな？」

ターレットレンズ越しに見ると、衛士隊の隊長格がスイッチのリモコンを持っていた。

【まさか……！】

「フンッ！」

衛士隊の隊長格がスイッチを入れた。

その瞬間、電流が流れた。

【ぐっ……ぐぐぐ……！】

耐压服を着ている俺は多少は耐えられる。だが向こうはさらに電圧を上げる。

【ぐぐっ……ぐああああっ!!】

もはや操縦桿すら握れなかった。

「ハハハ！そうだ苦しめ！我らに楯突いた報いを受けろおっ!!」

【!!!】

俺の目の前が真っ暗になっていった。

「キリコ side out」

「……どうやら油断したか」

「キリコに限ってそれはないと思ったが……」

近くの高台からフェンリールが動かなくなる光景を見ていた者たちが出た。

「このところ、キリコは格下相手ばかりだったからな。本人も気づかぬ内に緩慢になっていたのだろう」

「キリコめ……」

「フフ、かつての想い人が心配か？」

「口に気をつける。首を刎ねられたいか？」

女は目に殺気を宿す。

「おっと失礼」

男は肩を竦める。

「まあ、奴のことだ。我々の予想を超える何かを見せてくれるだろう」

「だどいいがな」

【しよ、少佐……あれはいつたい……】

【おそらく、高圧電流を流し込むことで機甲兵を乗り手ごと破壊する兵装だろう】

【まさか、あんなものを持ち込むとは……】

【いくら蒼き災厄だからといって……】

魔煌機兵部隊を突破したライル少佐たちが見たのは、巷で噂されている蒼き災厄が両腕両脚を封じられ、大量の煙を上げている光景だった。

「ククク、こんなものでは済まさんわ。だがまずは裏切り者の第四機甲師団の処罰が先だ。一応弱い電流を流したままにしておけ。まあ、あれだけの電流を受けた以上、もう死んでるだろうがな」

次に衛士隊の隊長格はライル少佐の乗るシユピーゲルスを睨み付ける。

「貴様ら……我々衛士隊に弓引くとは。皇女殿下誘拐にあきたらず、蒼き災厄まで囲っていたとはな」

【その蒼き災厄と我々は無関係だ。それよりも、皇女殿下誘拐などという発言、取り消してもらいたい】

「フンツ！盗人猛々しいとはこのこと。貴様らがセントアークに護送中だった皇女殿下を無理やり留め、要塞内に監禁していたのは明白。この上さらに皇女殿下を売り渡そうなどと……畜生にも劣る不届き者共がっ!!」

【なんだと……!?】

【お前たちこそ、ジュノーに皇妃様を閉じ込めていたそうじゃないか！】

【しかもそれを盾にして、第三機甲師団を冷遇してたくせに！】

【お前たちの魂胆はわかってんだ！】

ライル少佐の部下たちは口々に叫んだ。

「フツ、いくら戯れ言を並べ立てようと正義は我々にある。さあ、裏切りは死を以て償ってもら——」

『何を身勝手なことを言っているのです!!』

突如、上空から声が響いた。

直後、一台の飛行艇が姿を現した。

「なっ……!?!」

【あ、あれは……】

【あの紋章は確か教会の……】

戦場に戸惑いが走る。

『私はユーゲント三世が娘、アルフィン・ライゼ・アルノールです』

【おおっ!あの声は……!】

【間違いない!アルフィン皇女殿下だ!】

【ラインたち、やったんだな!】

第四機甲師団はアルフィン皇女の声を聞き、歓喜した。

『衛士隊に命令します。今すぐ兵を退きなさい。クレイグ將軍閣下が私とリベールから参られたティータさんを匿ったのは何を隠そう、私の命令です』

「な、なんですと?!」

【殿下……】

【我々を庇って……】

『あなた方衛士隊の魂胆はわかっています。私を祭り上げ、戦争に疑問を持つ方々への牽制にすること。違いますか?』

「ま、祭り上げるとは滅相もない!皇族のあるべき姿にすることが……」

『……要塞の中に閉じ込め、不本意な方々を無理やり従わせるための飾り物。そのどこが皇族のあるべき姿だと?』

【ぐぐぐ……!】

衛士隊の隊長格は歯ぎしりをした。

そしてとんでもないことを言い出した。

「総員、耳を貸すな!これは少しでも罪から逃れたいという第四の浅ましい作戦だ!本物の皇女殿下ならばあのような発言をなさるはずがないっ!!」

『な……!?!』

「おのれ第四機甲師団！総員突撃！裏切り者たちに鉄槌を食らわせ  
てやれい！」

『ハッ!!』

【こ、こいつら！】

【そこまで堕ちたか！】

【少佐、ご指示を！】

【仕方ない……！迎え撃て！】

再び戦闘が始まった。

「そんな……」

アルフィン皇女は眼前の光景に項垂れた。

「殿下……ご立派でした」

トワがアルフィン皇女を労った。

「だがどうする。このままでは撃破されるのも時間の問題だ」

「ここからだとわかんないけど、フェンリールは動けないみたい」

「それは……」

トワはチラリとフェンリールを見る。

「……ご存知なのですか？あの蒼い機甲兵を」

「見たこともない機種です。もしや新型の……?」

「トワ……」

「うん……」

アンゼリカに促されたトワは深呼吸をして、口を開く。

「あの機体は黒の工房で製作された実験用機甲兵で機体名をフェン  
リールといいます」

「黒の工房製の……」

「フェンリール……確か北方の神話の」

「そしてあれに乗っているのは……キリコ君です」

「……え……?」

アルフィン皇女とティータはの思考が止まる。

「落ち着いて聞いてください」



トワは二人に知っている限りのことを全て話した。

「……………」

二人は呆然となった。

「俺もフィーとサラから聞いた時も驚いたけどよ。どうも本当のことらしいぜ」

「キリコさんが……………」

ティータは二の句が告げずにいた。

「……………」

アルフィン皇女は顔を伏せる。

「殿下……………」

「その……………」

「……………大丈夫です」

アルフィン皇女は深呼吸をした。

「本当なんですネ…………キリコさんがお母様を救出したというのは……………」

「はい。キリコ君は単身ジュノーに乗り込み、プリシラ皇妃様と私を助けに来てくれたんです」

トワはジュノーでの一件をアルフィン皇女に話した。

「……………ならば迷うことはありません。一刻も早くキリコさんをお助けしましょう！」

『その御言葉、待っていました』

『あたしたちに任せてください！』

突如通信が入り、クルトとユウナの声が響いた。

『つたく、拒絶されたらとか考えなかったのかよ？』

『そうなたら別の手段を考えてました。残念ながら不発になりそうです♥？』

『…………ゴホン。そこまでにしてくれ。みんな、わかっているとは…………』

「くどいぞ、リイン」

「キリコも私たちⅦ組の一員じゃない」

「そして僕たちの後輩の一人だからな」

「脛に傷があるのは同じ」

「フイ、フイーちゃん……」

初代Ⅶ組の面々はリインの背中を押す。

『……わかった。ではこれより、キリコ救出に向かいます』

「分かりました。お気をつけて」

『イエス・ユア・ハインス！』

新Ⅶ組の返事とともに通信は切れた。

「……ああは言ったものの」

「はい？」

「キリコを憎んでいるわけではないのですか？」

ラウラはアルフィン皇女に問いかけた。

「……最初はラウラさんの言うとおり、憎かったです。ですが、セドリックから呪いのこと、アルノール家が抱えてきた秘密を告げられた時、全てが繋がりました」

「皇太子殿下とお会いになられたのですか!？」

エマは驚いた。

「いえ、通信越しにだけです。キリコさんはただ、巻き込まれただけ。本当の黒幕はそれを利用せんとする者たちです」

「宰相や兄上……ですね」

「……………」

アルフィン皇女は前に出る。

「とにかく今は、全員でここから離脱することが先決です。皆さん、よろしくお願いいたします」

「分かりました。アンゼリカ先輩、北サザーラント街道ポイントXまで」

「ヨーソロー！」

アンゼリカは舵を切った。

【そらよっー！】

【はあああっー！】

ヘクトル式型・改とシユピーゲルSS試作型が魔煌機兵部隊に切り

込む。

【ジェミニブラストⅡ！】

【ムーランルーリュⅡ！】

ドラツケンⅢ・プロトタイプとケストレルβⅡがクラフト技を放つ。

「ノワール・バリア！」

【閃光斬！】

アルティナのサポートを受けたヴァリマールがクラフト技でゾルゲを斬り伏せる。

【くっ!? 貴様ら……!】

【トールズのⅦ組！何をしているのか分かった上でのことなのだろうな！】

【笑わせるな……】

リインは静かに怒りをたたえた。

【自分たちのことは棚に上げ、身勝手な正義を振りかざすあんたちこそ、何をしているのかわかっているのか】

【さらにプリシラ皇妃様やアルフィン皇女殿下を私利私欲のために祭り上げようなどという蛮行、ヴァンダールに連なる者として……見過ごすわけにはいかない！】

クルトは操縦桿を握りしめる。

【くっ！】

【貴様ら……!】

魔煌機兵部隊は苦々しげにⅦ組の機甲兵を睨む。

【き、君たち……】

【ライル少佐、ここは自分たちも加勢します】

【し、しかし……!】

【そんなボロボロな機甲兵じゃ無理だろ。ここは俺らが引き受けてやっからよ】

【ここで果てるのは本望ではないはずです】

【………わかった】

ライル少佐は目を伏せながら言った。

【動ける者はトールズVII組と協力して敵を押し返す！】

『イエス・サー!!』

動ける機甲兵はVII組の機甲兵と並ぶ。

【リイン！】

【アランか。魔煌機兵に乗っていたんじゃないんだな】

【ああ。フラット少佐が転属願いを出す寸前に止めてくださったかな。でなきや今頃、連中みたいにおかしくなっていたらどうな】

【そうか。それじゃ、行くか！】

【ああ！後輩たちに負けてられないからな！トールズ魂を見せてやろうぜ！】

『おおっ!!』

再び戦闘が始まった。

「くっ！どうなっている！」

高台の近くから戦闘を見ていた者がいた。

「トールズVII組は政府から指名手配されていたはず！なのにどうして第四が協力するんだ!？」

「それはそちらの情報不足というものだ」

「な……………」

眼鏡をかけた男に、二人の男女が近寄る。

「クライスト商会営業部長のワッツだな?」

「ル、ルスケ大佐……………」

「トールズVII組の指名手配はあくまで衛士隊と鉄道憲兵隊と帝都憲兵隊に限定される。ましてや身内のいる第四機甲師団が無条件に引っ捕らえるはずがなからう」

「ば、ばかな……………」

「数字にしか真価を見出だせない商人ならではの浅知恵だな。少し調べれば第四のクレイグ将軍がVII組を評価していることは分かるものを」

「な、ならば情報局はどうです!？」

ワッツはロツチナに懇願するようにすり寄る。

「何？」

「情報局の力を以てすれば、忌々しいⅦ組をテロリストに仕立て上げることぐらい——」

「呆れて物が言えない」

「ハッ………？」

「彼らは既に帝国で名をいくつも揚げています。こんな世の中でも彼らを英雄視する者はいらる。当然その中には権力を持つ者がいます。そういう者に無駄金を遣えと？」

「で、ですが……！」

「いい加減悟りたまえ。君のくだらん詐欺じみた事業など破綻している。君の個人的な復讐に手を貸すほど暇をもて余しているわけじゃないんだ」

「わ、私はただ——」

「失せろ。この寄生虫め」

「………」

ロツチナに冷徹に寄生虫と言われたワッツは愕然となった。

「行くぞ」

「あれはいいのか？」

「捨て置いている」

ロツチナとテイタニアは歩き出した。

「う、うあああああつ!!」

ワッツは隠し持った拳銃でロツチナを狙った。

「！」

だが一瞬早く、テイタニアが撃ち落とした。

「フッ」

ロツチナは勝ち誇った笑みを浮かべる。

「後はお任せしますよ。ヒューゴ支社長」

「………お手数おかけします。ルスケ大佐」

歩いてきたのはヒューゴ・クライストだった。

「わ、若!？」

「ワッツズ…………お前には失望した」

「ま、待ってください!私は…………!」

「商会の看板に泥を塗ったお前に居場所はない。お前は今日付けでクビだ」

「ク…………クビ…………?この私が…………クビ?」

ワッツズは呆然となった。

「若が小さい頃から商会に仕えた私がクビ…………クビ…………クビ…………クビ…………ヒビ…………ヒビ…………」

ワッツズは四つん這いになり、その場で唾っていた。

「……………」

ヒューゴはそれを哀しげに見つめていた。

「くっ…………!おのれ第四機甲師団!おのれツールズⅦ組!

部隊長格の兵士はサーベルを握りしめる。

魔煌機兵部隊のおよそ4分の3は討ち取られていた。

「既に勝負はついた。今すぐ撤退してください」

リインは交渉役を買って出た。

「撤退だと!？」

「そちらの士気はもはや落ちている。我々としてもこれ以上血を流すことは望みません」

「…………ククク…………」

部隊長格の兵士は笑い出した。

「な、何がおかしいのよ!」

「ハツハツハアツ!まさかもう勝った気でいるとはなあ!」

「なにっ!？」

「ならば見るがいい。魔煌機兵の恐ろしさを!」

すると、討ち取られたはずの魔煌機兵が黒いオーラを纏って立ち上がった。

「これは…………!？」

「まさか…………魔導の力で無理やり動いて…………!？」

「ッ！来ます！」

【オオオオオオッ！】

一機のゾルゲがシュピーゲルSS試作型に斬りかかる。

【くっ……………!?!】

双剣で受け止めるが、シュピーゲルSS試作型は後方に押しきられる。

【なんてパワーだ！】

【改修前ならまじでイカれてたかもな！】

【そ、そうだ！キリコ君は……………?】

「ユウナさんから見て11時の方向、フェンリールです！」

『!?!』

リインたちはアルティナの言う方向を見て啞然とした。

フェンリールは両腕両脚にワイヤーが巻かれ、あちこちから煙が吹いていた。

【そんな……………】

【負けたってのか!?!】

ユウナとアツシユは思わず言葉が漏れた。

だがこれがいけなかった。

「む？奴を知って……………そうか。蒼き災厄は貴様らと繋がりがあつたのだな？」

【あ、蒼き災厄……………?】

「しらばっくれても無駄だ。なるほど……………罪人同士結び付いていたとはな」

【な、何この人……………】

「どうやら、思い込みの激しい方のようです」

【マズイ……………!こうなってくると……………】

「スイッチを入れろ！見せしめにしてやれっ!!」

部隊長格の兵士が言い終わるか言い終わらない内に、フェンリールに高圧電流が流される。

【止めろ！】

「くあはははははー！」

【てめえっ……】

ヘクトル式型・改は斬り込もうとしたが、数機のゾルゲに阻まれる。

【離さないよっ！】

【くっ！どけえっ！】

【ククク……どれ、最大を試してみるか……】

【させません！ブリューナク、照射！】

クラウソラスから放たれた光線がスイッチを撃ち抜いた。

【チッ！だがもう手遅れよ！】

部隊長格の兵士はニヤリと嗤う。

フェンリールからは煙が立ち上ぼり、もはや誰が見ても行動不可の状態だった。

【そ……そんな……】

【バカ、な……】

ユウナとクルトは震えが止まらなかった。

【フザ……けんなっ！】

アッシュは両手を叩きつける。

【ぐぐっ……!?】

リインは湧き上がる力を必死に抑え込む。

「ふふふ、観念したか。増援が到着次第、全員処刑してやる」

部隊長格の兵士は勝ち誇った笑みを浮かべる。

【………まだです】

だがまだ諦めていない者がいた。

【ミュゼ……】

【まだ………終わってなど！】

ミュゼはARCUSSⅡを取り出し、キリコのARCUSSⅡに通信をかける。

【キリコさん……！】

【………】

ARCUSSⅡからは何も応答がなかった。

【貴方にはまだやるべきことが残っているはず。それを終わらせずして死ぬつもりですか………?】



【ミュゼっ!?】

【貴方は……私たちに黙って行動していました。また同じことを……繰り返し返すおつもりですか?】

「ミュゼさん……」

【ですが貴方はⅦ組の一員。もう自己中心的な考えは……通用しないですよ……?だから……だから……】

ミュゼはここまでが限界だった。

【だから……お願い……目を……目を開けてえっ!!】

ミュゼの両目は涙で溢れた。

【てめえ……さっさと目を開けやがれっ! てめえはこの程度じゃ死なねえんだろ!!】

【人にあれだけ偉そうに言ってきたんだ! 最後まで責任を取れっ!!】

【女の子泣かshoいて、無視決め込んでんじやないわよっ!!】

「まだやるべきことはまだ何も終了していません! 死んで終わりにしないでください!!」

新Ⅶ組もARCUSSⅡを開き、必死呼び掛ける。

『キリコオオオオツ!!!』

【……………】

ほんの僅か、指が動いた。

「キリコ side」

もう……耐えられそうにない

高圧電流を浴びせられ、俺の気力も限界だった。

僅かに動かすだけで激痛が走り、呼吸をしようとしても酸素が入っていない。

(たとえ生き延びても……俺に待つのは廃人か……)

それも悪くないときえ思えてくる。

肉体はもう楽になることを選んでいるのか、力が入らない。

後は受け入れるだけだ。

そんな時、ポーチが焼き切れたのかARCUSSⅡが落ちた。

偶然、蓋が開いたようだがもう考える力もない。  
目を閉じようとした時、ミュゼの叫びが聞こえた。  
その直後、アツシユ、クルト、ユウナ、アルティナの叫びも聞こえた。

【……………そうだ。まだ……………俺、は……………】  
激痛が走るのも構わず、操縦桿を掴む。

動かないのはもうわかっていた。それでも動かさずにはいられなかった。

【まだ……………終わって……………いない……………！】  
まだ……………まだ……………まだ……………！

【俺は……………死ねないっ!!】

突如、不思議な何かを感じた。

「キリコ side out」

【な……………なんだと……………!?!】

部隊長格の兵士は目の前の光景が信じられなかった。

既に動かなくなったはずのフェンリールがゆっくりと立ち上がった。  
さらに、フェンリールの全身は蒼いオーラのようなもので包まれていた。

「くっ……………! そんな虚仮落としにいつ!」

部隊長格の兵士は攻撃命令を出した。

【キリコさんっ!】

ミュゼは援護しようと、ゾルゲの背後に狙いをつけた。

【……………】

フェンリールは真正面からゾルゲに向かって行った。

だがそのスピードは先ほどとは桁違いだった。

【なっ……………!?!】

思わず動きが鈍ったゾルゲの右肩をフェンリールの大型アイアンクローが炸裂した。

ゾルゲは右肩を斬り裂かれたばかりか、そのまま地面に叩きつけら

れた。

【なんだとっ……!?】

近くにいたゾルゲは盾を構えて防御の姿勢を取った。

【……………】

フェンリールはお構い無しにショルダータックルをぶちかます。

【ッ!?】

ゾルゲはまるで砲弾を当てられたかのように吹っ飛ばされて動かなくなった。

【……………】

立ち尽くすゾルゲに、ハンディソリッドシューターの砲撃が叩き込まれる。

【がっ……!】

砲撃をまともに受けたゾルゲのコックピット付近に風穴があく。

【こ、これなら……】

数機のゾルゲはアサルトライフルを構える。

フェンリールはすぐさま狙いを定め、ゾルゲに突っ込む。

ゾルゲ数機はすれ違いざまに吹っ飛ばされ、大きく損傷した。

【バ、バカな……!?!】

【ど、どうなっている……!?!】

衛士隊に次第に恐怖に似た感情が広がりつつあった。

【す、すごい……!】

【力も速さも、僕たちの知る以上だ……!】

新VII組も驚きを隠せなかった。

【これは……!】

【なんだよ、チビウサ】

【フェンリールから、霊的な反応が感知されました!】

【霊的な……?】

【フェンリールは黒の工房製というが、もしかしたらまだまだ知らない何かがあるのかもしれないな】

リインは押さえつけにかかったゾルゲを制しながら言った。

【それにしても、綺麗ですね】

【ああ。アタックする時のあの蒼い軌跡……】

【まるで……流星】

「なんだあれは……」

テイタニアは立ち尽くした。

「お前は知らないのか？」

「私も驚いている……。あのような機能などなかったはずだ」

ロツチナはフェンリールの動きを目に焼き付けるように身をのり出す。

「……そちらも知らないようだな？」

「まあね……」

ロツチナの隣に魔法陣が顕れ、カンパネルラが姿を現した。

「道化師か……」

「やあ、確かテイタニア・ダ・モンテールウエルズだったね」

「……気安く呼ばれる筋合いはない」

テイタニアはカンパネルラを睨んだ。

「おっとっと、これは失礼」

カンパネルラは恭しくテイタニアに謝罪した。

「先ほどの問いだが、そちらは知らないんだな？」

「……ひよっとすると」

「？」

「クルダレゴン合金が作用してるのかも」

「クルダレゴン合金が？」

「知ってのとおり、フェンリールは装甲とフレームがクルダレゴン合金で造られた、言わばフル・クルダレゴンマシン。そして知ってのとおり、クルダレゴン合金は神機の装甲にも用いられている」

「うむ。だが神機と関係があるのか？」

「クロスベル事変の時もそうだったように、クルダレゴン合金は精神感応が著しく高い。とはいえ、それは碧の御子がいたからなんだけど」

「精神感応……キリコの意志、というより生存本能が感応したと？」

「彼ら在必死に呼びかけてたでしょ？ 不死の異能者が持つ生存本能に戦術リンクの繋がり、それらが意志の力としてクルダレゴン合金に感応した結果、ああなった。おまけに機体の全能力も向上しているみたいだ」

「ずいぶんと強引な解釈だな」

「仕方ないでしょ。神機に比べて規模が小さいとは言え、あんなの1リジユも想定してなかったんだから」

「小さい器に水を注げばすぐに満杯になるように、機甲兵サイズなら工夫次第で常人でも感応させられる、か」

「あゝ、どうしよう……」

「どうした？」

「こんなイレギュラー、ノバルティス博士にどう報告しよう……」

「ほう、あのマッドサイエンティストで有名な御仁か。展開次第では十三工房がキリコに潰されるな。それはそれで面白そうだ」

「……他人事だと思って」

カンパネルラは肩を竦めた。

「これでキリコは強力な武器を手にしたということか」

「とても武器とは言えんさ。私の見立てでは、あれを発動させるにはキリコとフェンリールをかなり追い込まなくてはならない。それを許すVII組ではないだろう」

「ずいぶんと気にいっているんだね。彼らをさ」

「フフフ、そちらほどもない」

カンパネルラとロツチナは互いに不敵な笑みを浮かべる。

(キリコ……)

テイタニアは無双するフェンリールを見つめる。

「あり得ん……あり得ん……あり得ん!？」

部隊長格の兵士はその場で動けなくなった。

【……………】

フェンリールの猛攻により、ゾルゲやメルギアは次々に討ち取られていった。

増援としてセントアーク方面から魔煌機兵の小隊が駆けつけたがまるで意味を成さず、僅かな間に全滅した。

結果、フェンリールの周りには魔煌機兵の残骸が山となっていた。

「くっ……くっ……くっ……おっ！」

部隊長格の兵士は一目散に逃げ出した。

【あっ!?!】

【放っておいていい。それよりも……】

リインはヴァリマールから降りて、動かなくなったフェンリールに近寄る。

すると、コックピットが開き、中からあちこちが黒焦げになったキリコが滑り落ちるように降りてきた。

「キリコー！」

「キリコさん!!」

新VII組もキリコに駆け寄った。

「きよ、教官……！」

「待て。もしかしたら……」

リインはヘルメットを取り、耐圧服の焼け焦げた部分を剥がす。

キリコは軽い火傷程度で、ほとんど傷を負っていなかった。

「これは……」

「どうやら耐圧服を着ていたことにより、電流のダメージは見た目ほど負ってはいないようです」

「よ、よかった〜！」

ユウナは心から安堵した。

(キリコさん……！……！)

ミュゼは涙を拭う。

「喜ぶのもその辺にしとけ。そろそろ来んぞ」

「撤回しましょう。教官」

「ああ。ポイントXに急ぐぞ」

リインたちは急いでドレックノール要塞から脱出した。

(まさかとは思ったが、本当にキリコだったなんてな)

(せっかく生きていたんだ。もう二度と死ぬんじゃないぞ)

(Ⅶ組の皆さん……パルミス孤児院の弟を、元部下をよろしくお願  
いいたします！)

陰で見っていたライル少佐は去っていく新Ⅶ組に敬礼で見送った。

「さてさて、僕もそろそろ行こうかな」

「面白いものは見れたかね？」

「まあね。それよりテイタニア特務中尉は？」

「呼んだか？」

テイタニアは下から歩いて来た。

「始末は？」

「問題ない」

「やれやれ。まあ、敵前逃亡は重罪だろうからね」

「それに今回の失態でクレープスは降格の上、閑職に回されるだろ  
う。部下の躰も出来んなら尚更だ」

「細かいねえ。まあ、それが軍人なんだろうけど」

「君たち執行者が羨ましい。我々からしたら、行動の自由など夢の  
ような話だ」

「ハハ……そりやどうも」

カンパネルラは両手を頭の後ろで組んだ。

「それで、フェンリールはどうするの？」

「とにかく持ち帰るしかあるまい。頼めるかな？」

「わかった。頃合いを見てやっておくよ」

「すまないな。では私は第四と交渉といこう」

ロッチナはテイタニアと共に、ドレックノール要塞へと向かった。

「フフフ……」

カンパネルラは意味深な笑みを浮かべ、転移していった。

「……………」

夜、キリコはローゼリアのアトリエのキッチンで水を飲んでいた。

北サザーラント街道から脱出したⅦ組は一目散にエリンの里へと飛んだ。

ユウナたちは比較的軽傷だったが、キリコは一時昏睡状態に陥った。

時計の針が11時を差す頃に目が覚め、起き上がった。

(教官やユウナたちが言うには、フェンリールが蒼いオーラに包まれ、鬼神のような強さで魔煌機兵部隊を圧倒したという。だが正直言って何も覚えていない)

(まだ死ねない。そう思った瞬間、何か起きたのはわかった。だが同時に気を失って、気づいたらベッドの上だった)

キリコはグラスの水を飲み干し、グラスを流しで洗う。

「キリコ……さん……?」

キリコが振り向くと、そこには寝間着姿のアルフィン皇女がいた。

「アルフィン皇女か……」

「も、もうお怪我はよろしいんですか?」

「ああ……」

「そうですね……。リンさんたちからお聞きしましたが、本当にお強い体をお持ちなんですね」

「聞いたのか……」

「はい……そしてキリコさんがお母様をお助けしてくださったことも」

「……」

アルフィン皇女はゆつくりと椅子に座り、キリコもそれに倣う。

「改めまして、お久しぶりです」

「ああ……」

「それにしても、異世界から転生された異能者だなんて。まるでお伽噺ですね」

「……」

キリコはグラスの水を飲む。

「……俺はあんたの父親を撃った」

「はい……」



「怨み辛みくらいあるはずだ」

「……正直、複雑な思いです」

「……………」

「ですが、黄昏が起きた翌日にセドリツクから全て聞きました。なぜ貴方がお父様を撃ったのかを」

「セドリツクからか……」

「はい。それに、リインさんたちにも申し上げましたが、私はキリコさんが全ての元凶などと思ってなどおりません。ですから……」

アルフィン皇女はキリコの目を見ながら言った。

「もうぐ（無理をなさらないでください）」

「……………」

キリコはグラスの水を飲み干した。

「それでも……俺は進まなくてはならない」

「キリコさん……」

「それが俺に出来る精一杯の償いだ」

「……不甲斐ないです」

「?」

「本来、その責は私たちが負うべきもの。それを他の誰かに押しつけてしまうなんて……」

「それが定めだった。そう思うしかない」

「……………」

「だからこそ、終わらせる」

「キリコさん……そうですね。終わらせましょう」

アルフィン皇女に少しだけ笑顔が戻った。

「それともう一つ、お聞きしたいことがあります」

「?」

「キリコさんはミルディーヌを、あの子をどう想っていらっしやるんですか?」

「ミュゼ?」

「ほぐ」

アルフィン皇女はニコニコしだした。

「あの子とは聖アストラリア初等部からの付き合いになるのですが、あの子はキリコさんという時が一番素直に見えるんです」

「……………」

「夏至祭の時も、キリコさんと一緒にいる時だけ、あの子は心の底から嬉しそうでした。ちよつぴり妬けてしまいそうです♥?」

「……………」

アルフィン皇女は身をのりだした。

「それを踏まえてお聞きしたいのですが、キリコさんはあの子のこととを——」

「ひゅめくさくま〜?」

アルフィン皇女の後ろでミュゼが真っ赤になりながら立っていた。

「あらミルディーヌ、こんばんは」

「こんばんはじゃありません! いったい何をしているんですか!」

「何ってキリコさんのお話に決まってるじゃない。お母様の一件と今日のことについて」

「明日、というか昼間でもいいではないですか!」

「ちようどキリコさんがおられたんだし、ゆっくりお話ができるいい機会だと思っただんだもの」

「うう…………」

(それに聞いておきたいこともあつたしね♪)

「もう〜〜!」

ミュゼはアルフィン皇女を軽く睨んだ後、キリコに向き直る。

「キリコさんもキリコさんです! 貴方は重傷者なんですよ! 何ベッドを抜け出しているんですかっ!」

「喉が渴いた」

「ならば早くベッドに戻ってください! 今すぐに!」

「……………わかった」

キリコはグラスを洗い、自室へと向かった。

「ふふふ♪」

「何が可笑しいんですか」

「だってミルデイーヌだったら、あんなに必死な顔をしてるんだもの」  
「そ、それは……！」

「それに気づいてる？ 貴女、キリコさんのことになるかと性格が変わってるって」

「ううう………」

「やっぱり恋する乙女の力は偉大ね♥？」

「知りません！」

真つ赤になったミュゼはアルフィン皇女を引っ張りながら、二階へと上がった。

「これは素晴らしい！カンパネルラ君、この若者にぜひ会わせてくれ！ いやいつそ、執行者に取り立てたまえ！ ううむ、我が研究のサンプルとして申し分ない！ それにしてもクルダレゴンをダウンサイジングするところのような現象が発現するとは。 さっそく実験に移してみるか。 乗り手は研究中のアレを試すか。 いやまずは本人を造ってから…… ああ、そうだ。 その前にデータを取らねばならんな。 さあ、愉しくなってきたぞ………」

(あゝあ、はじまった………)

カンパネルラは嘆息した。

## 餓狼

七耀暦1206年 8月24日 午前7:30

「すごい……機体の性能がこんなにも……！」

「見た限り、全ての能力が向上している。魔煌機兵すら相手にならないほどにな」

ローゼリアのアトリエの一階では、ティータとキリコが昨日の戦いの映像を見ていた。二人はフェンリールに起きた現象の解析に取りかかっていた。

「キリコさんから頂いたフェンリールのスペック表と現行の機甲兵データ、そして魔煌機兵の映像と見比べてみても、おそらく最大値をマークしているでしょう」

「それほどにか」

「はい。この機能の名称を『最大値への転換』という意味から、『V-MAX』と呼ぶことにします」

「そこは任せる」

「分かりました。ただ問題が……」

「発動条件か」

「はい……おそらくV-MAXを発動するには、機体の損傷率を80、いえ90%台にまでしなければならないかもしれません」

「あの時はフェンリールの四肢から高圧電流を流されて行動不能にまで陥った。それが発動条件に叶ったんだろう」

「……本当によく生きてられましたね……」

「ああ……」

呆れ顔のティータにキリコはそっけなく返す。

「それはそうと、なぜこうなったか分かるか？」

「映像を見る限り、フェンリールそのものから蒼い光が出ているようです。後VII組の皆さんの戦術リンクが鍵となっているみたいです」

「だが戦術リンクを繋いだのは初めてじゃない。何か別の要因があるはずだ」

「うーん……………レンちゃんなら何か知ってると思うんですけど」

「レン・ブライトが？」

「はい、その……………」

「どうした？」

「レンちゃんは元々結社に所属していたんです」

「何？」

キリコは関心を抱いた。

「……………執行者ナンバーXIV《殲滅天使》。そいつがレンの過去だ」

アガツトが歩いて来た。

「それはわかった。だがそれとどう繋がる？」

「少し前に大破しちまったが、レンはパテルⅡマテルという神機並みの人形兵器を操ってた。そいつに使われていたのもクルダレゴン合金だって話だ」

「……………なるほどな」

「パテルⅡマテルと同じ材質ならある程度説明はつきますね。もう少し調査は必要でしょうが」

「それで彼女はどこにいる？」

「それが、なかなか連絡が取れなくて……………」

「もうとつくにエステルたちと合流してると思うんだがな……………」

ティータとアガツトは揃ってため息をついた。

「そこは追々詰めていくしかないな。とりあえず、そろそろ片付けるようにしましょう」

「そうですね。それにしても、現物があれば良かったんですけど」

「おそらく回収されただろう。近いうちにロツチナから連絡が来るはずだ」

キリコとティータは片付けを始めた。

午前8:00

キリコはリインに解析の報告をしていた。

「そうか。解析ご苦労だったな」

「いえ。それで教官、新機能のV-MAXは……………」

「ああ。当然、使用は厳禁とする」

リインは毅然とした態度で言った。

「二応、君は現時点ではまだ第二分校生徒だ。担当教官である以上、そんな自殺同然の力の使用は認められない」

「分かりました」

「やけに素直じゃない?」

猫のセリーヌはキリコを見上げる。

「不合理極まりないからな」

「そういう意味で言ったんじゃないが、とにかくそういうことだ」

「分かりました（もし勝手に発動した場合はその限りではないがな）」

キリコはリインの目を見つつ、密かにそう思った。

「教官はこれから巡回ですか?」

「ああ。ジュノー海上要塞とドレックノール要塞の一件もあつて、リーヴス周辺が手薄になりつつあるらしい。そこで、哨戒と情報収集を兼ねた巡回に出発することになった」

「なるほど……」

「キリコは何人かと里に残ってほしい。昨日のダメージも抜けきっていないだろう」

「分かりました。ですが……」

「わかっている。リーヴス及び第二分校奪還の時には参加してもらうつもりだ。ただ、キリコ……」

「……」

「本当に退学するつもりなのか……?」

「理由は話すまでもないでしょう」

「分校のことなら何も心配する必要はないんだぞ。それに、君と陛下とのやり取りはいずれ陛下御自身がご説明してくださるだろうし」

「仮に分校に復学したところで、またいらん所で争いになる。落とす所にもっていくにはこれが最適です。教官とてそう思っているはずですが」

「それは……」

「これでいい」

キリコはそう言ってリインに背を向ける。

「キリコ……………」

リインは思わず、顔を伏せた。

午前9：00

キリコはミュゼ、テイータ、アガット、アンゼリカ、ガイウス、デュバリイ、アイネス、エンネアらと魔の森を巡回していた。

「それにしても、ガイウスさんは行かなくてよろしかったんですか？」

「要塞の一件でメルカバがかなり目立ってしまったのでな。今回は出動を控えさせてもらった。それに……………」

「それに？」

「…………アルテリア方面で事が起こった、だろ？」

言いづらそうなガイウスを見かねたアガットは口をはさむ。

「アルテリア法国が!？」

「結社、ですね？」

「ふう、やはりわかってしまうか」

「ふふふ……………」

ガイウスは苦笑しながら口を開いた。

「黄昏が起こって以来、結社との衝突が増えつつあるそうだ。ロジータたちにはそちらに行ってもらった」

「教会と結社は、俺ら以上に因縁を抱えている。本来ならお前さんも呼んで然るべしなんだろうが」

「副長から命令が下りまして、法国よりもVII組を優先せよとのこと  
です」

「なるほどな」

「まあ、法国には守護騎士もいるでしょうから、一人や二人抜けても問題はないでしょう」

「フフ、まあ新米の出る幕ではないと言いたいのかもしれないが」

一行は話しつつも警戒を怠らないように魔の森を進んで行った。

午前9:20

「こ、これは……」

一行の目の前には、夥しい数の魔獣の死体が転がっていた。

「惨いですね……」

「ウツ……」

ティータは思わず顔を背けた。

「……………」

キリコは構わず死体に近づいた。

「何かわかった?」

「……………全て撲殺されている」

「えっ!?!」

「撲殺って、素手で魔獣を……?」

ティータとミュゼは驚きを隠せなかった。

「ほとんどが肉を潰され骨を砕かれている。それに硝煙の匂いを全く感じない」

(こんなことができるのは……)

(うむ。だが……)

(確か、アルテリア方面に……)

デユバリイたちは魔獣の死体を見つめた。

(まさか……)

アガットは重剣を握りしめる。

「……………」

キリコはアガットたちの態度が気になりつつも、周囲を調べた。

「……………血の跡はこの先に続いているようだ」

「わかった。キリコ、悪いがティータやお嬢さんたちを連れて里に

戻ってくれるか」

「アガットさん!?!」

「コイツらをこんな風に出来る奴は俺の知る限り一人しかいねえ。

何でこんな所に来てるのか分からねえが」

「……………相当なお相手というわけですね?」



「ええ。ここからは私たちと重剣で参ります。貴女方は里に戻ってくださいな」

「で、でも……」

「……………師匠の言っていた、狼殿のことでしょうか？」

黙っていたアンゼリカが口を開いた。

「なぜそれを……」

「そういやお前さん、キリカの弟子らしいな」

「キリカさんの!?!」

「知っているのか？」

「確か《飛燕紅児》と呼ばれるほどの名うての泰斗流拳士だとか？」

「そうだね。一時期、遊撃士ギルドの受付をしてたらしいしね」

「はい！ツアイス支部で受付をしてました」

「まあな。それで、奴とも？」

「いえ、顔を拝見したことはないですね。ただ師匠からは「拳は正しく使うこと。さもなければ魔道に堕ちる」と教わりましたが」

「なるほどな……」

アガットは顎に手をやる。

「わかった。お前さんも加われ。その代わり——」

「私も行きます！」

ティータは思わず叫んだ。

「あのな、お前も知ってたんだろ。あいつの拳の威力はただでさえやべえってことを」

「だからこそです！アガットさんや皆さんだけ危険を所に行かせるわけにはいきません！」

「あのなあ……」

「まあまあ。アガットさんがティータさんをお守りすれば良いじゃないですか」

「フフ、ティータ君にはナイトが付いているんだしね」

ミュゼとアンゼリカが微笑む。

「ほら、行くなら行きますわよ」

「つたく、わかったよ。その代わりティータ、俺の側を離れんなよ」

「ふえっ!?!は、はい!」

「まあ♥?」

「重剣殿は少々過保護ではないか?」

「なんかあつたらコイツの母親に俺が殺される」

アガツトは断言した。

「キリコさん、何かあつたら守ってくださいね♥?」

ミュゼはキリコの左腕にすり寄る。

「動きづらいから離れろ」

キリコは何ら態度を変えることはなかった。

「ああん……キリコさんのいけず♥?」

「くううう……なんて羨ましいっ!」

アンゼリカは歯ぎしりをしながらキリコとミュゼのやり取りを見つめる。

「キリコ君は相変わらずの鉄面皮ね」

「ああもう、早く行きますわよ!」

緩んだ空気にデユバリーが一喝した。

「こ、これって……」

「すさまじいな……」

血の跡を追って、一行はサングラール迷宮に着いた。

迷宮の入口が破壊され、その周りは魔獣の死体が散らばっていた。

「……先ほどの死体より温かい。やはり奥か」

キリコは死体に触れ、点々とひかる血の跡を見つめる。

「よく平気でいられますわね」

「こういう臭いは嗅ぎなれている。それだけのことだ」

「キリコさん……」

「アストラギウス……とんでもねえ場所だったみてえだな」

「何度聞いても信じられません」

「……………」

キリコは血糊を拭い、アーマーマグナムに弾丸を込める。

「そろそろ教えてくれ。その狼というのは?」

「ああ……」

アガツトは腕を組んだ。

「薄々は察してるだろうが、そいつは結社の執行者だ。執行者N.O.  
VIII《痩せ狼》ヴァルター》

「痩せ狼……」

「私と同じ泰斗流の使い手にして、武術の暗黒面である殺人拳の求道者だという」

「そうか」

「怖くはないのか？」

「あいにくそちらについてはからつきしだからな。それに武術というからには暴力や殺生は当然だろう」

「つたく、頼もしいもんだな」

「では参りましょう」

一行は得物を取り出し、サングラール迷宮に突入した。

「こんな所に連れてきて何させようってんだ？」

サングラール迷宮の最奥では、サングラスをかけた男が金髪の女を見据えていた。

「フフフ、貴方は不死と戦ってみたくはあつて？」

「不死？ああ、カンパネルラが言ってたつう」

サングラスの男は首を鳴らしながら言った。

「その不死の力を持つ方がまっすぐここを目指してやって来るでしょう。貴方にはその方々を叩きのめしてほしいんですの」

「へッ、それでわざわざダミーをばら撒いたつてのか」

「フフ、それに貴方がリベールで会ったという赤毛の遊撃士の他、星杯の守護騎士もおられるようすわ」

「ほー、少しは楽しめそうだな」

サングラスの男は指を鳴らし、笑みを浮かべる。

「では、お任せしましたわ」

「待ちな。あんたはここに何の用があるんだ？」

「フフ、ちよつとした戯れですわ」

金髪の女はどこかへ転移して行った。

「ククク……まあいい。法国では『銀』とも『風の剣聖』とも満足に殺り合えなかったしな……」

血に餓えた狼は闘志を研ぎ澄ませる。

「かなり奥まで来たな」

キリコたちはサングラール迷宮内に施された仕掛けを解きながら着実に進んでいた。

「それにしても霊体型の魔獣しか見ませんね」

「……実体がある魔獣はほとんどを狩り尽くされたのかもね」

アンゼリカは反吐を見るような目付きで言った。

「ログナーのお嬢さんじゃなくても反吐が出るぜ。あの野郎……！」

「戦いそのものに喜びを覚えるタイプか……」

「戦闘狂という点においては、あの戦鬼殿と肩を並べるほどでしょう」

「いずれにしても、強敵なのは間違いないでしょうね」

「そういうこった。気合い入れろよ」

一行は覚悟を決め、最奥へと歩を進める。

「遅かったなあ？」

サン格拉斯の男——ヴァルターはキリコたちを見据える。

「こいつが……」

「ああ。さつき話したヴァルターだ」

「痩せ狼という異名にふさわしい気を纏っているな」

「師から聞いていたとおりの御仁だね」

ガイウスとアンゼリカは得物を構える。

「痩せ狼殿……確か貴公はアルテリア法国に出向いていたはずでは？」

「ああ、錬金術師に連れて来られてな。てめえらを叩き潰せだどよ」  
「錬金術師って……」

「マリアベル・クロイスとか言う女か」

「面倒くせえつたらありやしねえんだがなるほど、そこそこ歯こたえがありそうじゃねえか」

ヴァルターは一人一人を値踏みするように見る。

「リベールで殺り合った二人に鉄機隊のオンナ共。守護騎士に不死身の異能者。そのガキ二人は知らねえが」

「ふふ、現カイエン公爵を襲名致しました、ミルディーヌ・ユーゼリス・ド・カイエンと申します」

ミュゼは不敵な笑みを浮かべる。

「ログナー侯爵が息女、アンゼリカ・ログナーだ。そしてキリカ・ロウランの弟子を名乗らせて頂いている」

アンゼリカは泰斗流独自の構えをとる。

「へえ？あいつの弟子か……前言撤回だ。こいつは楽しめそうだ……！」

ヴァルターから赤いオーラが迸る。

「くっ……!?!」

「やる気十分というわけか」

「気合い入れていきますわよ！」

『おおっ!!』

戦闘が始まった。

「はっ!!」

ヴァルターの拳が石柱を撃ち抜く。

「これは……!」

「頸か。それもかなり練っているね」

「チッ！相変わらずふざけた威力だ！」

アガットは降ってきた石を払いながらヴァルターを睨み付ける。  
「こんなもんじゃねえだろ？てめえらの実力はよおっ！」

ヴァルターはオーバルギアⅢに乗るティータに殴りかかる。

「ゼロ・インパクト！」

ティータの前にアンゼリカが飛び出し、寸頸を叩き込む。

「ほう？」

ヴァルターは拳でアンゼリカの拳を受け止める。

「か弱いレディにずいぶんな振る舞いなのは……？」

「ここは修羅の庭……女子供もねえだろうがよ」

「くっ……！」

「なかなか大した頸だ。だがな！」

ヴァルターの拳からすさまじい力は放たれた。

「がっ……!？」

アンゼリカは後ろに吹っ飛ばされた。

「同じ頸でも、俺の方が上だ」

ヴァルターは拳の埃を払う。

「そこですわっ！」

「くらうがいい！」

デュバリイとアイネスが両方向から仕掛ける。

「ふんっ！」

ヴァルターは剣を手刀で制し、デュバリイに膝蹴りを当てる。

さらに体を回転させハルバードを蹴りで弾き、アイネスに拳を叩き

込む。

「ぐっ……!？」

「相も変わらずか……」

「へっ……レイザーバレット！」

だめ押しのクラフト技が二人に放たれる。

「がっ……!？」

「ぐうっ……!？」

「鋼仕込みの技か、悪かねえ。だがもう少し——」

「オワゾーブブルーⅡ！」

「メデューサーロー！」

ヴァルターが言い終わらないうちに、ミュゼとエンネアの技が放た

れる。

「……フン」

ヴァルターは体を反らすように避ける。

「水差すんならもう少し上手くやれや——」

「ええ。ですからお願いします」

「心得た!」

「あ?」

ヴァルターは上を見た。

「絶空鳳翼の力、思い知るがいい。我が深淵にて煌めく金色の刻印よ。その猛き咆哮を以て、我が槍に無双の力を与えたまえ! 吼天鳳翼衝!!」

聖痕の力を引き出したガイウスがヴァルターの頭上からスクラフトを仕掛ける。

「チツ!」

不意を突かれたヴァルターは後方へ回避し、直撃は免れたが、爆風を浴びた。

「動くな」

キリコがヴァルターのこめかみにアーマーマグナムの銃口を突きつける。

「ようやく捕まえたか。テイータ、いつでも撃てるようにしとけ」

「は、はい!」

オーバルギアⅢの砲身はヴァルターに狙いを定めた。

「ククク……………」

危機的状況にもかかわらず、ヴァルターは笑みを浮かべる。

「何がおかしい?」

「おかしいだど? ああ、おかしくてたまらねえ……………」

ヴァルターから笑みが消える。

「てめえらの歯ごたえの無さになあつ!!」

ヴァルターがオーラを爆発させる。

「しまっ……………」

オーラに弾かれ、キリコに隙が出来る。

その瞬間、キリコの腹部に衝撃が走る。

「キリコさん!？」

「てめえ!」

アガットが重剣を振り下ろすも、ヴァルターは悠々とかわす。

「ツイン・インパクト!」

ヴァルターはガイウスとアガットに諸手突きを放つ。

ガイウスとアガットは得物で防御するも、こらえきれず吹っ飛ばされた。

「レイザーシユート!」

威力を上げたクラフト技がミュゼとエンネアを襲う。

「このっ……!」

「遅えんだよ!」

ヴァルターの裏拳がアイネスの顔面をとらえる。

「アイネス!」

「はっ!!」

続けざまにデュバリイに延髄打ちを叩き込む。

「へ、へヴィアクセル!」

オーバルギアⅢがヴァルターに突っ込む。

「フーン!」

ヴァルターは激突寸前に真上に飛ぶ。

そのまま落下の速度に乗せた踵落としを叩き込む。

踵落としを受けたオーバルギアⅢは一撃で中破した。

僅かな間に、キリコたちは叩き伏せられた。

「そ、そんな……」

「これが痩せ狼の実力……」

「いや、前より上がってやがる……」

「無茶苦茶ですわ……」

「……………」

周囲が肩で息をする中、キリコは呼吸を整え、ゆっくりと立ち上がる。

「ほう?ちつとばかりしホネがあるじゃねえか」



「キ、キリコさん……!」

「……………」

キリコはヴァルターをジッと睨む。

「良いねえ良いねえ。追い込まれても一切怯まないっつーその眼。いい感じにムカつかせてくれるじゃねえか」

「や、やべえ……!」

「と、とにかく回復……………」

ガイウスは息もたえだえながら、回復アーツを使おうとした。

「無駄に足掻きやがって。まあいい……竜神功」

ヴァルターから力が溢れ出す。

「死んどけ」

ヴァルターはキリコに突っ込む。

「アルティメットブロー!!!」

ヴァルターはキリコめがけて、正拳突きを叩き込む。

爆発音が響き、キリコとヴァルターは舞い上がった煙に包まれた。

「痩せ狼の正拳突き……………」

「リベールの王都の城門を破壊したという……………」

突然、ドサツという音がした。

「そんな……………」

「まさか……………」

「キリコさん……………キリコさん!!!」

ミュゼの悲痛の声が響き渡る。

やがて、視界が晴れた。

「え……………?」

「なっ!」

そこには、キリコではなくヴァルターが膝をついていた。

「ぐっ……………」

「はあ……………はあ……………はあ……………!」

キリコの左手にはアーマーマグナムが握られており、銃口から白い煙がたちのぼっていた。

ヴァルターは脇腹を撃たれたのか、血を流していた。

「ぐぐっ……………このガキ……………!」

『キリコ(さん)!!』

ある程度回復したミュゼたちが駆け寄る。

「ど、どうして……………!?!」

「あのタイミングでカウンターを取ったと?!」

「いや、こいつは完全に遅れたはずだ」

「……………ガードしただけだ」

キリコの右腕がだらんとなった。

「キ、キリコさん……………?」

「ククク……………!」

ヴァルターが嗤った。

「イカれた野郎だ。まさか……………右肘を盾にしやがるとはな」

「右肘!?!」

「っ!キリコ君、借りるぞ!」

アンゼリカがキリコの腰のナイフで耐圧服の右の袖を切った。

「あ……………」

「こ、こいつは……………」

キリコの右腕はおそろしいほどに紫色に変色していた。

「す、すぐに治療します!」

ミュゼとティータがキリコの右腕に回復アーツをかけ続ける。

「右肘を突きだしながら俺に接近して、俺の腕が伸びきる前に右肘に当てさせた、か。技の勢いと威力を殺しつつ俺の右拳を割るとはな。だがてめえの右腕もただじゃ済まないはずだが」

「これくらい安いものだ。お前を確実に殺せるならな」

キリコはヴァルターの眉間にアーマーマグナムを突きつける。

「面白れえ……………このまま——」

「残念ですが……………ここまでですわ」

突然、ヴァルターの後ろに魔法陣が顕れた。

「なんだ!?!」

「フフフ……………」

「この笑い声は……………」

「…………その耳に障る笑い方、貴女でしたか。根源の錬金術師殿」  
「そのとおりですわ」

魔法陣から根源の錬金術師マリアベルが現れた。

「ごきげんよう、皆さん」

「この方がユウナさんのおっしやっていた……」

「根源の錬金術師マリアベル・クロイスさんですね」

「フフフ、カイエン公爵におかれましてはご機嫌麗しゅう」

マリアベルは恭しく挨拶をした。

「これはご丁寧に。ここに来られた目的はなんですか？」

「ちよつとした戯れですわ」

「戯れ、と言うには度が過ぎませんか？」

「フフ……」

マリアベルは微笑み、杖を取り出した。

「端的に言えば、ここで消えてもらいたいんです。これ以上、我々の計画を邪魔されないようにね」

「この人数を相手に戦うおつもりですか？」

デュバリイが得物を構える。

「待てや」

ヴァルターが立ち上がる。

「いきなり出て来て何ぬかしてやる」

「これは失礼。ですが、お楽しみもそろそろお開きにしていただかないと」

「……チツ！」

ヴァルターは転移の魔法陣を出した。

「あら？」

「興が削がれた。それとお前」

「？」

ヴァルターはキリコを見つめる。

「名は？」

「キリコ・キュービー」

「キリコ、そのツラは覚えとくぜ」  
ヴァルターはどこかへ転移して行つた。  
「貴方も厄介なのに目をつけられましたね」  
「どうでもいい。それより……」  
キリコはマリアベルに目をやる。  
「こいつをなんとかする」  
「フフフ、試してみますか?」  
マリアベルは杖を携えた。

「ダイナストゲイル!」

「影技・剣帝陣!」

「兜割り!」

アガツト、デユバリイ、アイネスがクラフト技で仕掛ける。

「フフフ……」

マリアベルは微笑みながら障壁を張る。

「これは!?!」

「魔導の障壁か……!」

アガツトたちのクラフト技はマリアベルに届かなかつた。

「……………」

キリコがアーマーマグナムの引き金を引くが、弾丸は弾かれた。

「これもダメか」

「でしたら、エアリアル!」

「シルバーソーン!」

「ゴルトスファイア!」

ミュゼ、エンネア、ティータがアーツを放つ。

「あらあら」

マリアベルは杖を振り、色の違う障壁を出した。  
放たれたアーツは全て跳ね返された。

「キャアツ!?!」

「物理無効にアーツ反射の障壁ですか……!」

「なら話は簡単だ。全員で——」

「させませんよ」

マリアベルは五体の人形を出した。

「に、人形!？」

「気を抜くな。おそらく自立型の兵器だ」

「さすがですわね。ですので」

マリアベルが杖を振ると、人形たちは一斉にキリコに襲いかかる。

「させるか!」

アンゼリカが人形たちを蹴りでなぎはらう。

人形たちはさっさと後退した。

「……チツ」

アンゼリカは舌打ちをした。

「人形の分際で……!」

「フフフフ……破れますか?」

マリアベルは不敵な笑みを浮かべた。

「上等……!」

「お遊戯会もたいがいにしとけや」

「ここで倒させていただきます!」

ミュゼたちは闘志を燃え上がらせた。

「ドラグナーエツジ!」

「エアリアル!」

「タービュランスII!」

「カルバリーエツジ!」

「ハードストレイフ!」

アガットたちはクラフト技とアーツを交互に放つ。

「ッ!」

(やはり一度に二つは張れないようだな)

マリアベルは平静を装っていたが、キリコは戦術の穴を見逃さな  
かった。

「行きますわよ」

「心得た」

「合わせるわ」

「「デルタ・ストリーム!!」」

鉄機隊が星煌陣の合わせ技でマリアベルの人形たちを完全に破壊する。

「私のかわいい人形たちを……!」

「それなら使わなければいいでしょう。ブルーアセンション!」

ミュゼが水属性のアーツは発動した。

「甘いですわ!」

マリアベルはアーツ反射の障壁を張った。

「これで……っ!」

ミュゼは反射されたアーツをまともに受ける。

「ミュゼちゃん!!」

「フッフ、無駄なことを——」

「無駄じゃない」

「なっ!?!」

マリアベルの背後からキリコが現れた。

「くっ!」

「遅い」

キリコはアーマーマグナムの引き金を引いた。

「フフ!」

が、間一髪マリアベルの方が早かった。

弾丸は障壁に弾かれた。

「これでチェックメイトですわ——」

「ファイアボルト」

キリコは以前から持ち歩いていた旧式の戦術器から火属性のアーツを放った。

「ぐっ!?!」

マリアベルの視界が真っ赤に染まる。

「終わりだ」

キリコは万力の力を込めて、マリアベルの顔面に右フックを叩き込む。

「があっ!？」

マリアベルは地面に転がった。

「……………」

キリコは激痛が走る右腕に構うことなく、倒れたマリアベルを見下ろした。

「やったか……………」

「ようやく一矢報いたな」

「それはいいんだけど……………」

エンネアは手当てを受けるミュゼを見る。

「だ、大丈夫、ミュゼちゃん」

「は、はい……………大したことは」

「ふう、あまり心配させないでください」

アンゼリカは空属性の回復アーツを発動させた。

「くっ……………」

マリアベルは顔をおさえながら立ち上がった。

「女の顔によくも……………」

「……………痩せ狼ではないが」

キリコはアーマーマグナムの銃口を向ける。

「戦場に女も子供もない。俺たちの攻撃に耐えられなかったお前が弱かった。それだけだ」

「……………ッ!!」

マリアベルは憎々しげにキリコたちを睨む。

「同感ですわね」

「強い者が勝つのではなく、勝った者が強い。戦闘の鉄則だ」

「貴女は確かに強いけど、こちらが上回った結果ね」

鉄機隊がキリコに続く。

「その減らず口、二度と——」

「追いついたぞー!」

「!？」

「時間切れのようだな」

キリコたちの後ろから、巡回に出ていたリインたちが走って来た。

「キ、キリコ君!？」

「それに皆さんも……」

「それもだけど、まさか根源の錬金術師がここにいるなんてね」

サラはマリアベルを睨み付ける。

「……………どうやらここまでのようですね」

マリアベルは魔法陣を出した。

「ですが、覚えておくことです。あなた方がいくら足掻いても結果は変わらないということを」

マリアベルはそれだけ言って、転移して行った。

「……………」

キリコは疲労から、膝をついた。

「キリコさん!」

「な、何あの腕!？」

「濃い紫色に変色しています!」

「おいパイセン!」

「わかってます。エリオットさん!」

「わかった!」

エマとエリオットは新VII組と共にキリコに駆け寄る。

その間、リインたちはアガットから事の詳細を聞いた。

「そんなことが……………」

「痩せ狼……………ジンから聞いていた以上にヤバいね」

「ジン? 知っているのか?」

「うん。前に仕事で一緒になった」

『《不動》の異名を持つ、カルバードのA級遊撃士よ。確かりベールの異変にも関わっていたのよね?』

「ああ。エステルたちやスチャラカ皇子とも顔見知りだ」

「オリヴァルト殿下とも……………」

「本当なら、でばって来てもおかしくはねえんだが……………」

「何かあるんですか?」



「そのブライト兄弟と同様、帝国入りが難しいとか？」

「いや、というより……」

「もしかして……」

リインの頭にあることが浮かぶ。

「共和国側が認めていない、とか？」

「……………」

アガットは仏頂面になった。

「ア、アガットさん……!?!」

「やっぱりそうなのね……」

「シユバルツァーの指摘通りだ。数日前、選挙でロックスミス大統領率いる与党が大敗してな。野党第一党の党首が遊撃士ギルドに対して圧力をかけてやがんのさ」

「バカな……!」

「帝国とは似ているようで違うね。こちらはギルドとして活動は停止していても、遊撃士としては認めている」

「だがその野党第一党のやり方は遊撃士として活動するなど言っているようなもの」

「そういうことね。現に、レマン自治州の本部は正式に抗議を出しているわ」

「それでも効き目がなかったと？」

「ああ。政権移行によるゴタゴタで国内に集中させたいってのが新政権の回答らしい」

「遊撃士が国のゴタゴタに巻き込まれるのは珍しくない。でも……………」

「……………」

『……………』

アガットの言葉に、リインたちの表情はすぐれない。

「教官！」

リインが振り向くと、ユウナが立っていた。

「ん？ああ、そっちは終わったのか」

「はい。エリオットさんとエマさんとセリーヌがキリコ君の腕の治

療を行ってくれたんです」

「そうか。しかし、右腕の粉碎骨折とはな」

「あのヴァルターって執行者にやられた時はかろうじてくつついていたみたいなんです……」

「が？」

「どうも……マリアベルさんを殴打した時の衝撃で完全に折れたみたいで……」

「……後で説教だな」

「あははは……」

ユウナは頬を掻いた。

午後6:30

「……」

キリコは妖精の湯に浸かっていた。

(痩せ狼……あれだけの手練れがいるとはな。なめていたつもりはないが……)

キリコは腕をさすった。

「やあ、隣良いか？」

「ははっ、湯治の真っ最中ってどこか」

キリコの隣にリインとアガットが座る。

「今日は悪かったな」

「腕のことならいい。まだくつついている」

「つつたく、口が減らねえな」

「……」

キリコは左手で顔を拭った。

「それでキリコ。明日の作戦、行くのか？」

「これもけじめですので」

「けじめ、ね」

アガットは髪をかきあげる。

「お前が背負ってるモンは俺にはきつとわからねえ。けどよ、全部背負い込むことはねえんじやねえか？」

「俺の問題だ」

「肩肘張るのも結構だけどよ。それじゃ、求めてるモンにはたどり着けやしねえんだぜ？」

「アガットさん……」

「ま、頭ん中に留めておけや」

「……………」

キリコはもう一度、左手で顔を拭った。

「あら、先客がいらしていたんですね」

「「？」」

声のする方向にはアルフィン皇女が立っていた。

その後ろにはミュゼとティータ、トワとアンゼリカが立っていた。

「お前さんらか」

「ふふ、お邪魔しますね」

アルフィン皇女たちはキリコとアガットの隣にミュゼとティータが座れるようにして、円を描くように座った。

「……………」

ミュゼとティータは俯いていた。

「ふう。気持ちいいです」

「エルモの温泉とは違うが、これはこれで悪くねえ湯だな。――」

「……何やってんだ、ティータ？気分でも悪いのか？」

「い、いえ、そんなことは……」

「……………ううつ、2年くらい前まではお姉ちゃんやお祖父ちゃんたちと一緒にアガットさんとも温泉に入っていたのに……………な、なんであることが出来ちゃってたんだろ、わたしっ!?!」

ティータは過去の自分を責めていた。

「それは思っていましたよ？お祖父様とお祖母様とセツナさんとリーファさんと温泉に行きたいと。出来ればキリコさんとも行ってみたいと妄想してはいましたよ？」

「(ですが……………こんなに近くにいるなんて予想しているわけないでしょうっ!?!)」

ミュゼは半ばパニックになっていた。

(うんうん。初々しい反応だねえ♥?)

アンゼリカは頬を赤らめていた。

「そ、そう言えばアガットさんはティータちゃんとは4年前からの  
お知り合いなんですよね?」

隣から不穏な空気を察したトワがアガットに話しかける。

「ああ。当時は12かそこらのチビスケだったからな。ただ……」  
アガットはティータを見る。

「……なんつーか眩しいくらい年頃の娘らしくなってきたと思  
うぜ。俺にも妹がいたから、生きていれば似たような感じだったかもし  
れねえ」

「あ……」

「そう……ですか。少々伺ってはいますが」

(アガットさんにも色々あるみたいだな……)

「……………」

「ですが……」

アルフィン皇女が口を開く。

「それは『同じような感じ』ではなくあくまで『似たような感じ』  
なのですね?」

「……………」

「ああん……?そりや妹とティータは違うしな。そもそも見た目も  
性格も全然違うし、まあ愛嬌はある方だったがこんな美人なっただか  
といやあ……………——って何言わせやがる!」

アガットがつつこむ。

「……………」

「うふふ、援護射撃成功ですね♥?」

「援護射撃じゃねえんだよ。つまんねえとこばつか似やがって」

「アガットさんのことはお兄様から聞いておりましたので」

「あのバカ皇子……………」

(世界広しといえども、オリヴァルト殿下をそう呼べるのはリベ  
ルの異変を経験したメンバーだけなんだろうなあ)

リインは苦笑いを浮かべた。

「……………」

ミュゼは何うようにアガツトたちのやり取りを見ていた。

「どうかしたか?」

キリコはミュゼに問いかける。

「ふえっ!?いい、いえなんでも……………」

「そうか」

キリコは空を見上げる。

「……………キリコさん」

ミュゼが口を開く。

「?」

「いいお湯、ですね」

「ああ」

「も、もう少し、腕を浸けてはいかがですか。ここの温泉は骨折にもよく効くとか……………」

「らしいな」

「あ、あうう……………」

ミュゼは顔を伏せる。

「……………また無茶をすることになるな」

「キリコさん……………」

「こんな茶番、さっさと終わらせたいものだな」

「はい……………」

ミュゼはキリコの顔を見上げた。

「どうした?」

キリコはミュゼの方を見た。

「い、いえその……………わ、わたし……………」

「?」

(ミュゼちゃん……………)

いつの間にか離れていたティータは見守っていた。

「わ、わたし——」

「ぎよえーっ!!」

突如、遠くから奇声のようなものが聞こえてきた。

「きゃあ!」

ミュゼは動転してしまった。

「ふえっ!」

「こ、これは……!」

「あ、あらあら……」

「リ、リイン君はダメ!」

トワはリインの目と耳を塞ぐ。

「ト、トワ先輩!」

「あ……」

「……」

ミュゼはキリコに抱きつき、唇がキリコの顔に触れる手前まで接近していった。

「!!??」

ミュゼは耳まで真っ赤になった。

「……」

キリコは何も言わず目を瞑り、空を見上げる。

「(ぎ)……」

「……」

「ごめんなさあああいつ!!」

ミュゼは叫んで走って行った。

「……」

キリコは無言で脱衣場に向かった。

ちなみに奇声の原因はあまりのワガママさに怒りの焰を燃やしたエマとセリーヌの幻術を受けたローゼリアによるものだった。

原因を知ったユウナらによって、ミュゼは一晩中宥められることになった。

## 矜持①

七耀暦1206年 8月25日

「……………」

キリコは自室で軽いストレッチをしていた。

(少し違和感を感じるが、なんとかかなりそうだな)

「キリコ、ここにいたのか」

クルトがキリコに声をかける。

「もう、いいのか？」

「ああ」

「本当に呆れた回復力だな。それより来てくれ。教官が呼んでる」

「わかった」

キリコはクルトと共に一階に降りた。

キリコが一階に降りると、リインとアツシユがいた。

「やつと来やがったか」

「腕はもういいのか？」

「はい」

「わかった。それなら大丈夫だな」

「では…………」

「ああ。今日、リーヴスへと向かう」

「…………構成は？」

「俺たちⅦ組特務科にテイータとトワ教官が加わる。残りのメン  
バーはメルカバで待機することになっている」

「わかりました。では準備に取りかかります」

「キリコ」

リインはキリコに真剣な眼差しを向ける。

「自主退学の件だが、正直俺は考え直してほしいと思っている。ア  
ルフイン殿下も君の名誉回復のために動こうとなさっているしな」

「……………」

キリコは立ち止まるも一瞥することなく、アトリエを出た。

「キリコ……」

「チツ！」

クルトとアツシユは背中を複雑な目で見ていた。

「あ、キリコ君」

「おはようございます」

キリコが万屋レムリックで道具を見繕っていると、ユウナとアルテイナが声をかけてきた。

「お前たちは準備はいいのか？」

「うん。だいたいは出来てるかな」

「後はアクセサリくらいですね」

「そうか」

キリコは見繕った道具の会計を済ませる。

「いよいよだね」

「そうだな」

「あれから一月以上経ちましたか」

「あたし、絶対に取り戻したい。捨て石とか言われながらも、みんなで切磋琢磨して笑っていられるあの場所を」

「わたしもです」

「……そうだな」

キリコはユウナが眩しく映った。

「あ、そうそう」

「？」

「昨日のことだけどね。原因はローゼリアさんらしいけど、ミュゼにちゃんと言つとかなきゃダメだからね」

「俺がか？」

「ミュゼさんはティータさんと工房にいましたよ」

「わかった後で伝えておく——」

「ダメ！ギクシャクする前に済ませること！」

「とにかく行ってください」

「お、おい……」



キリコはレムリックから閉め出された。

(……仕方ない)

キリコはガンドルフの工房に向かった。

(あわわわ………！)

ミュゼは一気に赤くなった。

「……………」

キリコは工房でARCU SⅡの調整を頼んでいた。

(ど、どどどどうしましょう………!?)

(大丈夫だよ、ミュゼちゃん。キリコさんだって怒っているわけじゃなかったよ)

(で、ですけど………！)

「ミュゼ」

「ひゃいっ!？」

ミュゼの声は思わず裏返る。

「あ、あの……」

「夕べはすまなかったな」

「ふえっ………!？」

「いらん恥をかかせてしまった」

「い、いえ、お気になさらず。わ、私の方こそすみませんでした。はしたない真似をしてしまって」

「すまない」

「だ、大丈夫です……」

「……………」

「そ、それよりもキリコさん、調整が終わったみたいですよ?」

「あ、ああ」

キリコはガンドルフからARCU SⅡを受けとる。

「キ、キリコさんも行かれるんですね?」

「リーヴスにはセドリックがいるらしいからな。これもけじめだ」

「そう、ですか……」

「最後までよろしく頼む」

「キリコさん……」

ミュゼは胸をおさえた。

(この戦いが終わったら、キリコさんはいなくなってしまう……その時は私は……)

(ミュゼちゃん?)

ティータは不穏な空気を察した。

「それとティータ」

「はい？」

キリコはティータに話しかける。

「悪いとは思っているが、技術部は解散ということになる」

「キリコさん……」

「許せとは言わん」

「いえ。ただキリコさん……」

「……」

「あの博士の説得はどうするんです？」

「会って話すしかない。それに説得材料はある」

「もしかして、これまでの戦闘データですか？」

ティータはキリコの言う説得材料を思い浮かべた。

「そうだ。それにミュゼたちの機甲兵のデータも合わせてな」

「周到ですね」

「これぐらいはしなければなるまい」

「やっぱりキリコさんは」

「クソ真面目、ですね♪」

ティータとミュゼは互いに微笑む。

「……」

キリコはミュゼとティータと共に、空き地にやって来た。

「これで揃ったな」

「キリコ君もちゃんとミュゼと話せたみたいだしね」

「ああ」

「へ？」

「ああ、ミュゼさん。実は……」

アルティナはミュゼに説明した。

「な、ななな……!」

ミュゼは赤くなった。

「お節介も大概にしろつての」

「ユウナさんの美点なので致し方ないかと」

「ちよつとアル!それどういう意味!」

「そのまんまの意味だと思うけど」

「あははは……」

クルトのストレートな言い方にティータは苦笑いを浮かべる。

「なんでもかんでも首をつっこんだ挙げ句、事態を良くも悪くも変える。美点と言われれば美点かもしれないな」

「もくもく!キリコ君まで!」

(ククク、皮肉ってやがる)

アッシュはほくそ笑んだ。

「全員、揃っているみたいだね」

「気負いはなさそうですね」

トワとリインが歩いて来た。

「教官……」

「そちらも準備は終わったようですね」

「ああ。それじゃ、時間も惜しいから出発しよう」

『イエス・サー!』

リインたちは転位石を使って、転移して行った。

「キリコ side」

魔の森を抜け、エイボン丘陵を越えた俺たちはミルサンテで小休止していた。

「ここにシドニーが?」

「うん。宿酒場のご主人がシドニー君の叔父さんなんだって」

「そうか」

話を聞く限り、元気そうだ。となると気になることがある。

「そういえば、他のメンバーとはどこで会った？」

「あ、私も聞きたいです」

ティータも気がかりのようだ。

「最初にセントアークでカイリ君、パルムの町でパブロ君とタチアナに会ったのよね」

「次にオルデイスでレオノーラとマヤ、アルスターでグスタフとサンディと会ったんだっただな」

「最後にクロスベルでルイゼさんとフレディさんとスタークさんとヴァレリーさんに再会しました」

ユウナ、クルト、アルティナがそれぞれ答えた。

「なるほどな」

見事に散り散りだな。

「では残っているのはゼシカとウェインか」

「そうですね。お二人は先ほど挙げたどの街にもいらっしやいませんでした」

「二人とも、どこにいるんだろ？」

「あ？んなの一つつきやねえだろ」

「……リーヴスカ」

「ああ。おそろくそうだろう」

リイン教官も大きく頷く。

「他の皆さんも来ているのでしょうか？」

「それは行ってみないとわからない。だがクロスベルにいる三人は厳しいだろう」

「僕たち第二分校は指名手配されているらしいから現状、クロスベルを出る手段がない」

「特にヴァレリーさんは聖ウルスラ病院で看護師をなさっていますからなおさらでしょう」

「うーん」

ユウナたちは顔を伏せている。

不安なのは分からなくもない。

「大丈夫だ」

空気を察したりイン教官が口を開く。

「ゼシカは自分の迷いを振り切って修練に励んでいたようだし、ウエインは第二分校でも一二を争う根性の持ち主だ。それは君たちがよく知っているんじゃないか？」

「教官……そうですね」

「確かに、私たちが知っていることでしたね」

「心配なんざいらねえだろ」

ユウナたちの表情が変化した。

「それじゃ、そろそろ行こうか」

『イエス・ママ』

俺たちはミルサンテからガラ湖周遊道に下りて行った。

「キリコ side out」

「……………」

キリコたちはガラ湖周遊道で独自の魔獣を蹴散らしながら進んでいた。

そこで意外な人物と再会した。

VIII組戦術科教官のランディと第二分校主任教官のミハイル・アーヴィングだった。

二人はVII組特務科との再会にホツとする一方、皇帝暗殺未遂の罪で処刑されたはずのキリコを見て思考が止まった。

慌てた二代目VII組が二人にこれまでの経緯を話した後、二人は冷静さを取り戻した。

「……なるほどな。キリコが皇帝を撃つたのは合意の上でなんだな？　それで処刑されたつてのは他の死刑囚だったと」

「ま、まさかルスケ大佐とそんな繋がりがあったとは。どおりで分校での活動レポートを回せとおっしゃるわけだ」

(ロツチナ……)

キリコは怒りを通り越して呆れた。

「にしても、不死の異能者ねえ……さすがにブツたまげたぜ」

「……正直、まだ混乱しているが」

ミハイルはキリコの方を向く。

「俺を捕らえますか？」

「……今の私は教官という立場故、軍からは離れている。君はもちろん、Ⅶ組特務科を捕らえる権限はない」

「ミハイル教官……！」

「だがリーヴスに常駐しているTMPは別だ。もつとも、今は街から離れているがな」

「ど、どういうことでしょうか？」

「各地の鎮圧のためにな。戦争目前ということもあるが、西部での騒動を切欠に各地で不安が暴発しているのだ」

「無理もない。立て続けに事が起これば……」

「なあキリコ、こいつも」

「ああ。ワイズマンの目論見どおりだろう」

「異世界の神様ねえ……とんだモンを背負ってたんだな」

「いまさらどうこう言っても仕方ないので。それよりランディ教官」

「ん？」

「謝らなければならないことが」

「え……？」

キリコはクロスベルでの出来事を話した。

「……マジかよ？」

「はい」

「少し前にテイオすけがとクロスベルでの情報を持ってきたことがあったが、まさかそれがキリコだとはな」

「あたしもキーアちゃんから聞いた時はびっくりしましたけど」

「それとランディ教官。アレックス・ダドリーとノエル・シーカー。

この二人に覚えは？」

「ああ。もちろん知ってる。ノエルは元警備隊で特務支援課に出向しててな。ダドリーはクロスベル警察捜査一課のエリートだ」

「そうでしたか」

「てかキリコ君、ジオフロントの水路から脱出したんだ……」

「相変わらず人間離れしていますね」

「さすが元兵士」

「脱走兵の間違いだろ？」

「異能者では？」

「とにかく」

ミハイルは全員を向き直らせた。

「分校に行くならば用心することだ。現在、本校生徒たちが君たちを迎撃すべく待ち構えている」

「本校生徒が……」

「セドリツク殿下を筆頭に、トールズの矜持を示さんがためにな」

「矜持、ですか」

「ならこちらも同じですね」

「ああ」

リインたちはミハイルの方を向く。

「わざわざのご忠告、感謝します」

「礼には及ばない。君たちの武運を祈る」

ミハイルはそれだけ言って、去って行った。

「まさかミハイル教官と会うなんてね」

「まったくだよな」

「そういえば、ランディ先輩はどうしてここに？」

「つと、いけねえ。大事なことがあんだった」

「しつかりしろや」

「大事ことですか？」

「ああ。今分校にやティオすけがいるんだよ」

「ティオ先輩が!？」

ユウナは弾かれたように驚く。

「それだけじゃねえ。リイン、お前の妹もいるらしいぜ」

「エリゼが……」

「ですが何のために……」

「……ティータ」

「……たぶん」

キリコとティータはあることが頭に浮かんだ。

「キリコ君？ティータちゃん？」

「何かあんのか？」

「それは——」

「……シユミット博士、ですね？」

キリコが言う前にミュゼが口にした。

「あの博士がか？」

「これまで色々な場所を訪れたが、博士だけは見つからなかった」

「となると、残るはリーヴスくらいしかなくて」

「分校にはアインヘル小要塞があったな。おそらく、ティオ主任と

エリゼさんはそこに……」

「まあ、あの博士ならひどいことはしないだろう。おそらく、自分の研究の手伝いとかをさせているんだろうな」

「あり得ますね」

「ミツシヨンが増えちまったな」

「問題ない」

「とにかく、まずは街に行こう。ランデイさんもよろしくお願いしますね」

「おお、任せろ！」

ランデイを加えたリインたちはリーヴス目指して走り出した。

「帰って……きたんだ」

「あ……」

「はい……」

「そんなに離れていないのに、なんだか懐かしいような……」

「そうですね……」

「ああ……」

ユウナたちはリーヴスの街並みに感動さえ覚えた。

「……」

キリコもまた、街を見渡した。



「みんな……」

「ここがあいつらの場所だもんな」

「ええ……!」

リインはかつての自分と重ね合わせた。

「まずは学生寮ですね」

「もしかしたら、本校生徒が使っているのかもしれないな」

「とにかく、入ってみようよ」

「そうだな」

キリコたちは学生寮の扉を開けた。

学生寮の中はガランとしていた。

キリコたちはそれぞれ手分けして寮の中を見てまわった。

「うーん……」

「どうやら、ここは使われていないみたいですね」

「確かに、人がいた形跡がないな」

「部屋も荒らされた感じはしねえ。ただ……」

「清掃されていた、か」

「そうですね。床も埃一つ落ちていません」

アルティナは床を指でなぞる。

「……たぶん、殿下の指示だと思う」

「セドリック殿下の？」

「いつでも俺たちを迎えられるようにか」

「うん。殿下はわかってらっしゃったんだと思う。僕たちと本校が

雌雄を決する日があることを」

「皇太子殿下なりの礼節なのでしょう」

「なら話は早え。正面からやっちゃまおうぜ」

「コラコラ。行動を起こすのはまだ早計だぞ」

リインたちが降りてきた。その中でランデイが一人だけ肩を落と  
していた。

「ランデイ先輩？」

「どうかしたんですか？」

「やってくれたぜ……………」

「え？」

「シャーリーのヤツ、俺の部屋で寝泊まりしてたみたいなんだが、私服は脱ぎ散らかすし私物は出しっぱなし、大荒れだった」

(シャーリーはセドリックに付いていたらしいが…………)

「なんでアイツの脱ぎ散らかした下着を片付けなきやいけねえんだ……………」

「そ、それは……………」

「御愁傷様です……………」

ユウナたちはランディを慰める。

「それより、そちらの調査はどうでしたか？」

「う、うん。結論から言うと、ティオ主任もエリゼちゃんも寮にはいないね。たぶん、分校内で寝泊まりしているんだと思う」

「確かに、仮眠スペースもありますから」

「学校に仮眠スペース……………」

「そういえば以前、ライン教官とランディ教官は分校に寝泊まりしたことがありましたね」

「書類が多過ぎてとてもじゃないが帰れなくてな……………」

「残業代にその他諸々はきちんと出てたけどな……………」

ラインとランディは揃って額をおさえる。

(教官、先輩…………)

(労働形態が悪すぎるだろう…………！)

(うちの工房より大変かも…………)

(今巷で聞く、ブラック企業とでも言うんでしょうか…………)

(ぜってえーここには就職しねえ…………)

(…………分校長に掛け合ってみましようか)

ユウナたちはラインとランディに同情した。

「あはは、ユウナちゃんたちが心配することじゃないよ。各地での功績が認められたとかで来年度は人を増やすみたいだから」

「そ、そうですか……………」

「とりあえず次行こうよ」

「ならナインヴァリに寄ってくださいますか？」

「ナインヴァリに？でもジンゴちゃんは……」

「母親が来ているらしい。これを渡せと」

キリコは懐から一通の封筒を取り出した。

「いつの間に……」

「しゃーねーな」

「では参りましょう（お二人の反応が楽しみですね）」

キリコたちは人目を避けながら、ナインヴァリに向かった。

（誰かいるな）

ナインヴァリの扉に手を掛けかけたキリコは気配を感じた。

キリコは即座に静かにするようハンドサインを出した。

「どうかしたの？」

「気配を感じた」

「間違いなくお二人でしょう」

「なら入ろうか——」

「待てよ。とりあえずキリコは呼ぶまで待ってろ」

アッシュが待ったをかける。

「アッシュユさん？」

「その方が面白えだろ」

「面白いつて……」

「まあ、いきなり会ったらパニックになるかもしれないしな。悪い  
がキリコ——」

「分かりました」

キリコは入り口付近の壁に寄りかかる。

「それじゃ、入ろう」

リインたちは先にナインヴァリに入った。

数分後、ユウナが呼びに来た。

キリコはナインヴァリに足を踏み入れた。

「……………」

店内にいたゼシカとウェインは現れた人物に固まった。

「ゼシカ？ ウェイン？」

「ゆ……………」

「ゆ？」

「幽霊?!？」

ゼシカとウェインは仰天した。

「……………」

「やっぱりビビるよな、そりゃ」

(予想通りですね)

「落ち着いてください。幽霊ではありませんよ」

「とりあえず話を聞いてくれ」

ゼシカとウェインはユウナたち、そしてキリコの話聞いて啞然とした。

「正直、理解が追いつかないけど……………」

「ま、まさかそんな事情があったとは……………」

「そう思うのも当然だ」

「帝国を覆う呪い……………そしてキリコ君はその根源と浅からぬ因縁が……………」

「そ、それもそうだが、陛下を撃つたのは合意の上だとは……………」

「まあ、それが一番の驚きだろうな。俺でさえすぐには納得しなかったからな」

「教官……………」

「とにかく、生きていたんだな」

ウェインはキリコの背中に腕を回す。

「この大馬鹿が……………俺やスタークがどれだけ悲しんだと思うんだ」

「ウェイン君……………」

「ウェインさんもスタークさんもある意味、キリコさんのお付き合ひも長かったでしょうから」

「男の子の友情ってやつね」

ユウナは腕組みをして微笑む。

「許せとは言わん」

「ああ、わかってる……」

「……それはそうと」

ゼシカは咳払いをした。

「ユウナたちもやっぱり分校を取り戻すために？」

「うん。そうよ」

「やっぱりね」

「TMPも騒動の鎮圧で出払っている今こそ、好機と思っていたんだ。もしかしたらⅦ組が来るかもしれないからな。」

「まさかキリコが生きていて加わっているとは思わなかったが」

「でもキリコ君、大丈夫なの？」

「何がだ」

「校舎には皇太子殿下もおられるのに……」

「これもけじめだ」

「けじめって……」

「どちらにせよ、俺が分校に戻ることはない」

「え!？」

「な!？」

「キリコ……」

「ああ、実は——」

リインは二人に説明した。

「自主退学……」

「本気なのか……!」

「既に分校長に渡してある」

「で、でもそれでいいの!？」

「丸く納めるにはこれが最善だ。下手をすれば分校そのものが無くなる」

「それは……」

「これでいい」

キリコはゼシカたちをまっすぐ見た。

「他の連中は？」

「昨日までは連絡は取れていたんだけど、今日になってから繋がら

なくて」

「そうか……」

キリコは腕組みをした。

「そちらも気になるが、そろそろ行動に移る頃合いだろう」

リインはⅦ組を向かせた。

「そう、ですね」

「ぐずぐずしている時間はありませんね」

「ならチームを二つに分けるぞ。リインたちⅦ組をA班、残りをB班つてぐあいにな」

「B班の方が少なくないですか？」

「俺らは正門から仕掛けて引き付ける筈だ。本命のA班は分校の裏つ側から入ってもらおう」

「分かりました。それで行きましょう」

リインたちはランディの案に賛成した。

「けどよ、こいつはどうすんだ？」

「キリコはA班とは独立して動いてもらう。先にあの皇子様んところを目指してもらおうぜ」

「了解」

キリコは迷うことなく返事した。

「俺たちは分校各所を解放しつつ、テイオ主任とエリゼを救出に向かいます」

「それなら教官、プラトー主任とエリゼさんはアインヘル小要塞にいるみたいです」

「わかった。でもどうしてそれを？」

「数日前、私のARCUSSⅡにメッセージが。すぐに削除されてしまいました」

ゼシカは自身のARCUSSⅡを見せながら言った。

「そうかわかった。では行動を開始しよう——」

「どうやら決まったようだね」

店の奥からジongoの母親のアシュリーが出てきた。

「ア、アシュリーさん……」

「お久しぶりですね。帝都ではお世話になりました」

「別に構わないよ。それよりキリコ・キュービー、ジングからの届け物ってのがあるんだろ？」

「ああ」

キリコはアシュリーに手紙を渡した。

「ご苦労。それはそうと何か入り用かい？」

アシュリーは封筒をしまい、カウンターに立つ。

「ワイヤーガンをくれ。後、アーマーマグナム用の弾丸もだ」

「いいけど高いよ？」

「いくらだ？」

「ざつと50億」

『高っ!?!』

アシュリーの提示した値段にリインたちは仰天した。

「クツクツク………あんたの賞金と同額だね」

「しよ、賞金……?」

「いったい何のことだ……?」

「まあ、気にしないことだな」

クルトはゼシカとウェインに釘を刺した。

「知っているようだな」

「闇ブローカーの中でも相当深く精通しているみたいですね」

「あんたほどじゃないさ、カイエン公爵さん？」

「カ、カイエン公!」

「ミュゼが!」

ウェインとゼシカはまたも仰天した。

「あ、そういえば二人は知らなかったんだ」

「私たちも最初はお二人みたいに驚きましたが」

ユウナとアルティナは落ち着きをはらっていた。

「それで、渡すのか？」

「良いだろう。持ってきな」

アシュリーは戸棚からキリコの注文の品を取り出した。

「それでいくらだ？」

「ワイヤーガン一丁と弾丸60発分。しめて3万ミラつてとこだね」

「3万ミラか……」

「それでも高いわね……」

「こいつはとある場所から仕入れた特注品でね。これ以上は信用に  
関わるから下げられないね」

「わかった」

キリコは財布から一万ミラ紙幣を三枚取り出して、渡した

「毎度あり」

「よ、良かったの？」

「モノは確かだ。悪くない買い物と言える」

キリコはワイヤーガンを手に取り、ユウナの疑問に答えた。

「そ、そうなんだ」

「ではそろそろ出発しよう。ではランディさんたちもお気をつけ  
て」

「ああ。こっちは任せな」

「みんなも気をつけてね」

「はい……!」

「いって参ります」

A班は分校の裏側を目指して、ガラ湖周遊道へ出た。

「あっそ、なら任せといて。そっちはパパの所に戻るんでしょ？」

同時刻、第二分校屋上でシャーリーはどこかと通信していた。

「うん、うん。それじゃあねえ」

「シャーリーさん」

「ん?どしたの？」

「どうしたはこっちの台詞ですよ。リンさんたちが来たんですか  
?」

「みたいだよ。リーヴスで張ってた斥候から通信が来たから」

「そうですね。正門には手配しておいて良かったですよ」

「それがドーもさ、正門にはランディ兄たちが来てて、灰のお兄さん



「私たちは周遊道に行つたつてさ」

「なるほど、裏側に回るつもりか……」

セドリツクは顎に手をやる。

「どーする？そつちにも回す？」

「いえ、その必要はないでしょう。分校各所には生徒たちが張つていますから、わざわざ配置を変えることはないでしょう」

「甘くみてる……つてわけじゃなさそうだね。安心したよ」

「リインさんたちを相手にそんなこと出来ませんよ。それはそうとシャーリイさん……」

セドリツクの顔が険しくなる。

「本当に彼が、キリコが来ていると？」

「うん。途中でお兄さんたちと別れたみたいだから単独で動くつもりなんじゃない？」

「貴女にキリコの生存を教えられた時は驚きましたよ。しかも以前起きた魔煌機兵の暴走はキリコが原因ですつて？」

「正確には、暴走に見せかけたキリコの襲撃だけだね」

「その結果、リーヴスの街は衛士隊に接收されることなく、アルノール家の名の元に保護されるようになったと」

「教えたのはあたしだけだね」

「まあ、その点は感謝してますよ。彼らは衛士隊の中でも血の気が多い者が多かったらしいです。もつとも、これも黄昏の呪いが原因でしょうが」

「ふーん、まあいいや。それじゃあたしはランディ兄を抑えに行つて来るよ」

「キリコのごことは良いんですか？」

「キリコとは契約を交わしてるしき。それは知ってるでしょ？」

(話を聞く限り、キリコは同意してないような……？)

セドリツクは苦笑いを浮かべた。

「それじゃ、行ってくるね」

「分かりました。お気をつけて」

シャーリイは屋上から飛び降りた。

「じゃあ、そろそろ僕も」

セドリツクは腰のサーベルを抜いた。

（キリコ、君には母上やアルフィンを手付けてもらった恩がある。アルノール家の問題に巻き込んでしまった負い目がある。だが、それとこれとは別物だ）

（リインさんやクロウさんとの相克のこともあるが、まずはキリコ。君と決着をつける！）

セドリツクはサーベルを高く掲げ、決意を露にした。

## 矜持②

リインたちA班はガラ湖周遊道を回り、分校の裏側にたどり着いた。

「今のところはバレていないみたいね？」

「いや……」

キリコはユウナの言葉を否定した。

「さすがキリコ。感じたか」

「ナインヴァリを出た辺りででしょうか？」

「え？え？それって……」

「どうやら斥候がいたようですね」

「本校のやつらじゃねえよな」

「おそらく、赤い星座だろう」

「なるほど。シャリーイさんが本校に属している以上、星座の存在は十分に考えられますね」

「ちよつと待って、それじゃ……」

「ああ。僕たちのことは伝わっているだろう」

「今さら中止なんざ出来ねえぞ」

「わかってる。今が絶好のチャンスだってことくらい」

ユウナは闘志を燃やす。

「では先に」

「気をつけてくれ。なるべく急ぎ足で行く」

「それまで時間を稼いでおきます」

キリコは先に農園内に足を踏み入れた。

「私たちも急ぎましょう」

「真正面から行くのか？」

「いや、このまま線路をつたってホームから入る。そこから校舎に突入しよう」

「分かりました」

「行きましょうー！」

リインたちはホームを目指して走り出した。

「キリコ side」

(ここまでは順調だな)

一足先に潜入した俺はワイヤーガンを使ってクラブハウス二階に入った。

クラブハウスはあまり重要視されていないのか、人の気配はあまり感じない。

(まずは屋上に出ることが先決か……!?)

階段の下から足音が聞こえてきた。

やむを得ず、文芸部の部屋に身を潜めた。

「まったく、侵入者ごときにオタオタしよって。誉れ高きツールズの看板に傷をつける気かね」

神経質そうな男の声が聞こえてきた。

「しかも分校などという下等な場所を護れだの、もう少し皇族の威厳というものを……」

他に声が聞こえない以上、男の独り言のようだ。

だがスルーする気はない。

俺はわざと物音を立てた。

「ん!?誰かそこにいるのかね!?!」

素頓狂な声を上げた。どうやらかなりの小心者らしい。

男は部屋に飛び込んで来た。

俺はドアの陰で息を殺す。

「な、なんだ空耳か……まったく私ともある——」

「寝てろ」

「ぐう……」

男が背を向けた瞬間を狙い、絞め落とした。

男は悲鳴を上げずに気絶した。

俺は部屋に引っ張りこんだ。

(身なりからして、貴族のようだな。それにしてもどこかで………ん?)

男の懐から何かが落ちた。

(これは……?)

落ちていたのは写真の束だった。写っていたのは踊り子のような衣装を着た女だった。

(ユウナが以前話していた、確かリーシャ・マオとか言う舞台女優か)

俺は男の体の上に写真の束を放り、屋上へと向かった。

「キリコ side out」

その頃、A班はホーム内で二人の男女と対峙していた。

「よお、リイン。久しぶりだな」

「卒業式以来ですね、リイン君」

「お久しぶりですね、マカロフ教官、メアリー教官」

リインはかつての教官であるマカロフとメアリーに頭を下げる。

「教官、ということはツールズ本校の?」

「ああ。本校で導力学を担当されているマカロフ教官と音楽芸術を担当されているメアリー教官だ」

「そいつらがお前さんの教え子か。ミントが言ってた博士の弟子四号ってのは?」

「ティータならこちらにはいませんよ」

「そうか。あのラッセル博士の身内って言うから会ってみたかったが、仕方がないか」

マカロフは残念そうに煙草を吹かす。

「ミントさんともお知り合いのようですね」

「ああ、あいつの叔父になる。どうなんだ?あの暴走娘は」

「大丈夫ですよ。二日に一度はシュミット博士の雷を落とされていきますが」

「そのとばつちりは助手や弟子に降りかかっているみたいだぜ?」

「はあ……」

アルティナとアッシュの言葉にマカロフは額をおさえる。

「まあまあ」

「それで教官、メアリー教官とはもしかやアルトハイム伯爵家の?」

「クルト君、でしたね。やっぱり知ってるみたいですね」

「は、はい。アルトハイム伯爵家と言えば、セントアーク指折りの名家ですから」

「そ、そうなんだ……」

「アルトハイム伯爵閣下とお祖父様は共通の趣味のご友人だとか」

「あの多趣味の爺さんな」

「ふふ、イーグレット伯爵閣下もお元気そうで何よりです」

メアリーは微笑む。

「教官、そろそろ」

アルティナがリインを促す。

「ああ。お二方、どうかそこを通していただけませんか？」

「そいつは出来ねえ相談だな。ある人から壁の役目を任されてっからな」

「ある人……？」

「やはりシュミット博士でしょうか？」

「半分だけ正解です」

「半分……？」

「なるほど……」

リインは納得したように笑みを浮かべる。

「博士とあの方による課題ですか」

「そう思ってくれて構わねえ。そろそろ始めるぞ」

マカロフがリモコンで操作すると、二体の人型兵器が歩行してきた。

「なっ!？」

「機甲兵……!？」

「いえ、あれは……」

「魔煌機兵だ！」

魔煌機兵はマカロフたちの近くで停止した。

「新型の魔煌機兵でな、重装甲と馬力に優れるハンニバルと、高い機動力と短時間ながら飛行能力を持つモルドレッドだ」

「ハンニバルとモルドレッド……」

「ヘクトル系とケストレル系それぞれの流れを汲む機体のようですね」

「まあそういうわけだな」

マカロフは懐からカードキーを出した。

「アインヘル小要塞へのカードキーはここにある。欲しかったら実力を見せてみな。Ⅶ組特務科」

「あなた方の想い、見せてください」

マカロフはハンニバル、メアリーはモルドレットに乗り込んだ。

「……………」

ユウナたちは互いに頷きあつた。

「教官」

「ここは僕たちに任せてくれませんか？」

ユウナとクルトが決意を秘めた目をリインに向ける。

「君たち……………」

「あいつは一人で破ったらしいしな」

「そろそろあの人に追いつきましょう」

アッシュは闘志を燃やし、ミュゼは笑みを浮かべる。

「私のは少々運用しづらいので、皆さんのサポートをさせていただきます」

アルティナはクラウⅡソラスをスタンバイさせる。

「ほう？なかなか良い気概だな。リイン、お前さんはどうなんだ？」

「そうですね……………」

リインはユウナたちの顔を見渡す。

「止める理由はありません。それにもしかしたら……………」

「教官……………」

（まさか……………」

【では、決まりですね】

ハンニバルはメイスを、モルドレットはライフルを構えた。

「アル、お願い！」

「了解しました」

アルティナはクラウⅡソラスから、ドラツケンⅢ・プロトタイプ、

シユピーゲルSS試作型、ヘクトル式型・改、ケストレルβⅡを顕現させた。

【行きますよ！】

【乗り越えさせてもらいます！】

【ブツ潰させてもらうぜ！】

【参ります！】

四機はそれぞれ向かった。

「来ましたね」

「……………」

少し前、キリコは屋上へとたどり着いた。

だが、そこにはセドリックではなく、本校の学院長であるベアトリクスが立っていた。

「セドリ……………皇太子は？」

「殿下はこちらです。それと、いつもの通りで構いませんよ」

ベアトリクスは微笑みながら言った。

「……………本校の学院長までいるとはな」

「殿下を始めとする生徒たちの想いに乗っただけですよ。いずれ訪れる分校生徒の皆さんの代わりにこの分校と街を守りたいというね」

「そうか……………」

「では、時間もありませんし、ついてきてください」

「……………」

キリコはベアトリクスの後を黙ってついて行った。

「待っていたよ、キリコ」

「……………」

キリコは練武場でセドリックと対峙した。

「ありがとうございます、学院長」

「いいえ、礼を言われることはありませんわ」

ベアトリクスはキリコとセドリックの間に立つ。

「僭越ながら、見届けさせていただきます」



「分かりました。キリコは？」

「異存はない」

キリコはまっすぐセドリックを見つめる。

「わざわざここを選ぶとはな」

「ギャラリーは不要だよ。君と決着をつけるにはね」

「あの二人もか？」

「ああ。エイダとフリッツは正門の方に行かせたよ」

セドリックもキリコを見つめた。

「キリコ……」

「……………」

「君には感謝しかない」

「……………」

「皇族の地位に胡座をかいて自惚れて、性根まで傲慢だった僕を、強く正しくしてくれた」

セドリックは微笑んだ。

「今思えば、呪いに侵されつつあったんだろう。もしかしたら唾棄するほど嫌なヤツになってたかもね」

「そうかもな……………」

「母上とアルフィンを助けてくれてありがとう」

「これもけじめだ」

「けじめ、か。君らしいな」

セドリックはフツと笑い、再びキリコを見つめる。

「そして……………本当に済まない。真実を見抜くことも出来ず、大罪人の汚名を着せてしまつて……………」

「気にしなくていい。これも俺の運命だ」

「キリコ……………」

セドリックは顔を伏せる。そしてゆっくりと上げる。

「だが、それとこれとは別だ」

セドリックはサーベルを抜いた。

「キリコ・キュービーー！」

「……………」

「今日こそ、君を倒す。そして、君という最大の壁を越えてみせる！」

セドリツクはサーベルを構えた。

「……わかった」

キリコは腰のホルスターからアーマーマグナムを抜く。

「気が済むまで付き合ってやる」

キリコはアーマーマグナムの銃口をセドリツクに向ける。

「……………」

「……………」

暫し、互いに睨み合う。

「……………」

ベアトリクスは無言で手を振り下ろす。

「!!」

キリコとセドリツクは同時に動いた。

「キリコ side」

「メルトスライサー！」

「くっ!」

焰を纏った斬撃が胸の辺りを掠めた。

「ッ！」

「ぐっ!」

隙を突いて、アーマーマグナムの引き金を引く。

弾丸はセドリツクの肩を掠めただけだった。

「はあああッ！」

セドリツクはサーベルを斜めに振り下ろす。

「っ！」

咄嗟に大型ナイフで受け止める。

「くっ!やるな……!」

「もらった」

「まだっ！」

そのままアーマーマグナムの引き金を引くが、セドリツクは転がり

ながら回避した。

床を転がったためか、セドリツクの制服は埃にまみれていた。

(やはりふっ切れている。以前のセドリツクは死んだと考えるべきか)

「君と出会ってわかったことがある。恥や外聞なんて気にしてられないってね」

「あいにく、誇りや騎士道などとは無縁だからな」

「そうかい!」

セドリツクはサーベルを手に突っ込んでくる。

俺はセドリツクの動きに合わせてナイフで薙ぐ。

だが、それは間違いだった。

「かかった!!ファイアボルト!」

「なっ!」

セドリツクは至近距離で火属性アーツを発動した。

右腕でガードするが、爆風をまともに受けた。

「ぐ……!」

俺は回復アーツを詠唱しようとした。

「させない!!」

セドリツクは連続してサーベルで切りつけてきた。

「テイ……テイアラ」

手傷を負ったが、なんとか回復に成功した。

「まだ終わっていない!メルトスライサー!」

セドリツクは続けて突っ込んできた。

俺もただでやられるつもりはない。

「ハンティングスロー」

投げナイフで反撃に出る。

「うっ!」

五本投げたナイフの内、四本がセドリツクを掠め、一本が左腕に刺さった。

その隙を突いて、セドリツクの胸部に蹴りを叩き込む。

「がっ……!」

セドリツクの体はくの字に曲がる。

だめ押しにセドリツクの頭部を殴りつけた。

「がはっ……!?!」

セドリツクは大きく吹っ飛んだ。

「……………」

俺は一旦距離を置いた。

「ぐっ……ま、まだだ………!」

セドリツクはゆっくりと立ち上がる。

「……………」

さすがと言うしかないな。

「まだ………終わらないっ!」

「来い」

俺は再びセドリツクに接近した。

「キリコ side out」

一方、B班はランディの指揮の下、本校生徒たちの攻勢を凌いでいた。

「そりやっ!」

「くっ!?!」

「はあっ!」

「きやっ!?!」

ウェインとゼシカは先陣を切り、迫り来る本校生徒を押し返して行く。

「ティータちゃん!行つて!」

「はい!」

トワとティータは後衛から二人をサポートする。

そしてランディは――

「あっはははは!さすがだねえ、ランディ兄!」

「シャーリイイイイツ!!」

愛用のブレードライフルのベルゼルガーを手に、シャーリイを抑え込んでいた。

「良いじゃん良いじゃん。ベルゼルガーも復活だねえ！」

「んなことあどうだつていい。どうやってあの皇太子に取り入りやがった？」

「別に取り入ったわけじゃないよ。政府がパパと契約結んだから、その流れでね。まー派遣だよハ・ケ・ン」

「チツ！……それならどうして皇太子と一緒にやねえんだ？」

「お坊ちゃんがキリコと決着つけるんだつてさ」

「なるほど、そういうことか」

ランディはシャーリーの言葉を飲み込む。

「それでさ、ランディ兄」

「あ？」

「義理の従兄弟つて欲しくない？」

「あ!？」

ランディは仰天した。

「ふふふ、キリコならすぐにも連隊長クラスになれるだろうしね。

それとも団長直轄の特殊工作班かな？」

「………叔父貴はこのこと知つてんのか？」

「まだだよ。それよりもキリコすごいんだよ！なんか知らないけど怒った。パパの攻撃から生き延びたんだから！」

「マジか……」

ランディはキリコの能力に舌を巻いた。

「まあ今はいいや。そろそろ続きといこうよ、ランディ兄」

「ああ。曲がりなりにもここの教官だからな。力づくでも取り戻させてもらうぜ！」

ランディとシャーリーは再びぶつかった。

B班の戦いが激化する中、A班の戦いも終盤を迎えていた。

【クロスブレイクⅡ！】

【真・双剣刃！】

【ランブルスマッシュⅡ！】

【オワゾーブルーⅡ！】

新VII組の乗る機甲兵の攻撃が次々と魔煌機兵にも叩き込まれる。

「シャドウライズ！」

「ロードフレア！」

アルティナとリインのEXアーツが追撃する。

【ぐっ！】

【うう……】

ハンニバルとモルドレットはたたらを踏む。

魔煌機兵の強みは黄昏の呪いを源とする魔導の力にある。

無尽蔵に溢れ出る魔導のによるは攻撃力の上乗せは勿論、いかなるダメージも回復させる。

スペックだけ見れば、機甲兵ではとても及ばない。

だがそれはあくまで机上のことに過ぎない。

魔煌機兵に対抗するために開発された、オーダーメイドの機甲兵の性能と乗り手の経験則。

それらが組み合わされば、たとえ格上の相手だろうと凌駕する。

そしてそれはキリコを含めた新VII組が体現し続けてきたことだった。

【みんなーこれで最後よー！】

【〔応！〕〕】

【エクセルバースト!!】

ドラッケンⅢ・プロトタイプを皮切りに、シュピーゲルSS試作型、ヘクトル式型・改、ケストレルβⅡが連携技が炸裂する。

連携技を受けたハンニバルとモルドレットは後退し、膝をついた。

【つたく、やりやがる……】

【ここまでですね……】

マカロフとメアリーは笑みを浮かべ、操縦桿から手を離れた。

「はあ…はあ…はあ……！」

「ふう……ふう……！」

A班が戦いに決着をつけた頃、二人の戦いもクライマックスを迎えていた。

セドリツクは満身創痍の中、刀身にヒビが入るサーベルを強く握る。

キリコは疲労困憊の中、最後の弾丸をアーマーマグナムに装填した。

そして互いに見つめ合う。

(これが最後のようですね)

見届け人のベアトリクスは二人の動きから、限界に達していることを悟った。

(キュービー君の技量は言うまでもありませんが、殿下がこれほどまでに成長なされていたとは。私もまだまだだね)

ベアトリクスは目を瞑り、セドリツクの成長を心から喜んだ。

(これ……で……最後……！)

先に動いたのはセドリツクだった。

「っ！」

キリコはアーマーマグナムの銃口を向けるが、僅かにタイミングが遅れた。

「うあああっ!!」

セドリツクはサーベルを斜めに斬り上げた。

サーベルはキリコの胸元を斬りつけた。その際に、血がキリコ目に入る。

「ぐっ！」

キリコは思わず後退した。

「う、うおおおっ！」

キリコは無我夢中でアーマーマグナムの引き金を引いた。

放たれた弾丸は床で弾かれた。

跳弾はサーベルの刀身を砕き、セドリツクの肩を撃ち抜いた。

「ぐ……ああっ！」

セドリツクは倒れこんだ。

「く……っ！」

キリコは目に入った血を拭い、胸元を抑えながらセドリツクに一步

ずつ近寄る。

「……………」  
セドリツクは肩を抑えながらキリコを見上げる。  
「……………」

キリコも同じようにセドリツクを見つめる。

二人の顔に戦意はなかった。

「ここまでのようですね。この勝——」

『ハハハ、それはまだ早いんじゃないかなあ?』

ベアトリクスが決闘の終わりを宣言しようとした瞬間、練武場に声が響いた。

「こ、これは……………!?!」

(この声は……………まさか!?)

キリコが声の主を口にしようとした瞬間、キリコとセドリツクの真下に魔法陣が顕れた。

「くっ!?!」

「しまっ……………!?!」

キリコとセドリツクは何処かへと転移して行った。

「……………くん……………くん!」

「うう……………」

「……………リコ……………」

「ううう……………」

「キリコさん!!キリコさん!!」

「う……………あ……………」

キリコはゆっくりと目を開けた。

「あ!」

「気がつきましたか……………」

「お前たちか……………」

キリコは自身を見つめる新VII組を確認した。



「よ、良かった〜!」

ユウナは安堵した。

「突然転移させられたかと思ったら、ここに傷を負ったキリコが倒れていたからね」

「転移……?」

「ああ。そうなんだ」

リインがキリコに近寄る。

「教官……」

「応急手当ては済ませたから、とりあえずは大丈夫そうだな」

「はい……」

「セドリツク殿下と戦ったんだな?」

「わかりますか」

「君の体に刻まれていたのはほとんどが刀傷だ。それも相当な手練れと戦ったことが分かる」

「治療は教官が……?」

キリコは体に巻かれた包帯を見ながら言った。

「いや、ユウナたちだ」

「そうですね。済まなかったな」

「ううん、気にしないで」

「キリコさんもⅦ組の仲間です」

「放っておくなんて出来ませんもの」

ユウナ、アルティナ、ミュゼは微笑みながら言った。

「それよりも、お前たちもここに転移させられたのか?」

キリコは周りを見渡した。

全体が石造りの部屋のようだった。

「ああ。僕たちは分校のホーム側から潜入したんだけど、そこで本校教官のマカロフ教官とメアリー教官と戦ったんだ」

「そいつらに勝って、シユバルツァーが小要塞に入るためのカードキーを受け取った瞬間、突然足元にな」

「魔法陣が顕れたというわけか」

キリコは顎に手をやる。

「そういえば、キリコさんの方はどうしたんですか？」

「ああ、それは——」

キリコはリインたちに転移させられるまでの事を報告した。

「なるほど。そのようなことが」

「ベアトリクス学院長までいらしていたなんてな」

「ああ。あの神経質そうな貴族の男はわからんが」

（神経質そうな貴族……まさかな）

リインはとある人物を思い描いたが、首を横に振った。

「それで、あの皇太子と決闘したと」

「ああ」

「勝ったのか？」

「いや。本校の学院長が言う前に転移させられた」

「では、決着はついていらっしやらないんですね？」

「少なくともセドリツクは納得してはいないだろう」

「また決闘する羽目になったな」

「何面白そうに言ってるのよ」

ユウナはケラケラ笑うアツシユを咎める。

「その時はその時だ」

（僕も……いつか……!）

クルトは心の中で決意を固めた。

「それはそうと、ここはどこだ？」

キリコは本題を切り出した。

「まさか、またここに来ることになるうとはな」

リインは懐かしそうに石の壁に触れる。

「なんだよ、来たことあんのかよ？」

「ですが、このような場所は帝国で該当しませんか……」

「アルティナが知らないのも無理はない。何しろここに来たのは君と会おう前なんだからな」

「アルと会おう前って……結局ここはどこなんですか？」

「というか何で分かるんですか？」

「感じるんだ。姿形が変わっても」

『は？』

ユウナたちはリインの答えに啞然とした。

「……どうやら答えはあそこをあるみたいですよ？」

ミュゼが石造りの扉を指さす。

「あれか」

「そうだな。なら聞いてくれ」

リインは新VII組を向き直らせる。

「この先は複雑な造りになっていて、戦闘も予想される。覚悟が決まったなら——」

「それなら出来ていますよ」

「何やらおかしな気配がします」

「というか、こんな場所で戦闘がないなんてあり得ないでしょう」

「さっさと行こうぜ」

「私たちならば大丈夫ですよ」

「ああ」

新VII組は笑みを浮かべながら言った。

「そうか。わかった」

リインは新も笑みを浮かべる。

「なら、あの扉を開けるから手伝ってくれ」

『はいっ！』

新VII組全員は力を合わせて扉を引いた。

扉の奥はまるで、時空がねじれているようだった。

「これは……」

キリコが何か言う前に、新VII組は吸い込まれて行った。

## 決意

「ここ、これって……!?!」

新VII組が目にしたのは、暗黒竜の寝所にも似た光景だった。

「教官、ここは?」

「かつて、本校の旧校舎地下に存在した試しの場。その最下層にあたる第七の回廊、巨イナル影の領域」

「以前おつしやっていた、ヴァリマールが眠っていたという……?」

「ああ。だがあの時とは何かが違う」

「教官や先輩方が攻略された巨イナル影の領域とは異なると?」

「上手くは言えないが、あの時のような感じがしない」

「その領域そのものではないと?」

「おそらくな」

リインは腕を組んだ。

「どうでもいいけどよ、何でそんな所に飛ばされたんだよ」

「たぶん、あの声なんじゃねえか?」

「えっ!?!」

ユウナが振り向くと、そこにはクロウが立っていた。

「クロウさんも転移させられたのですね?」

「ああ。東リーヴス街道の方で動きが見られてな。降りようと思つたら声が聞こえてきてよ、気づいたらここにいた」

「僕たちと同じように……」

「それで?どうすんだリイン」

「とにかく進むしかないだろうな。キリコによると、殿下も転移させられたそうだ」

「あの皇太子も、ね。なあリイン、ひよつとしたらこいつあ……」

「断定は出来ないがな」

「ええつと……」

ユウナがゆっくりと挙手した。

「さつきから何の……」

「アホかお前」

「何よ！」

アツシユの言葉にユウナは憤慨する。

「あの皇子は緋の騎神持つてんだろ？ならやるこたあ一つだろが」

「それは……」

「第二の相克……」

「だがわざわざここに転移させるだろうか」

「ここで時間を浪費しても仕方ない」

キリコは前に出た、

「まずはセドリックに会うことだ」

「キリコさん……」

「そうだな。おそらく殿下はこここの最奥だろう」

「決まりですね」

新Ⅶ組とクロウはリインを見る。

「では教官、お願いします」

「とちるなよ」

「ああ……」

リインは前に出る。

「トールズ第二分校・Ⅶ組特務科、これより攻略を開始する。ここは暗黒竜の寝所に勝るとも劣らない難所だ。各々全力を尽くしてくれ！」

『イエス・サー！』

「クロウもよろしく頼むぞー！」

「任せなー！」

新Ⅶ組とクロウは攻略を開始した。

新Ⅶ組一行が攻略を開始した頃――

「……………」

「もう、いい加減機嫌直してよ」

「……………」

セドリックは腕を組み、懇願するカンパネルラに背を向けていた。  
「邪魔したのは悪かったつてば。でもそろそろ相克をやってもらわ

ない」と――」

「そんなことはわかってますよ。そちらのやり方に問題があるって  
言ってるんです」

「やっぱり拉致はマズかった?」

「当たり前です」

セドリツクは断言した。

「それより、ここは何なんです? 霊窟みたいな雰囲気ですが」

「ここはかつてⅦ組が受けた試練の場、巨イナル影の領域だよ」

「この場合、キリコたちⅦ組特務科ではなく、リインさんたち旧Ⅶ組  
ですね?」

「そうなるね。ただ、全部の試練を乗り越えて、灰の騎神を目覚めさ  
せたから領域は消えて無くなっているはずだから、ここはその幻影と  
いうことさ」

「なぜそんなものが顕れたんですか?」

「それはわからないなあ。騎神は時に人智の及ばない力を起こすこ  
とが出来るとはいいけど」

「……まあいいでしょう」

セドリツクは完全には納得しなかったが、今はそれで良しとした。

「それじゃあそろそろ行くね。で、勝てるの?」

「……どうでしょうね?」

「ま、いや。頑張ってるね」

カンパネルラはどこかへと転移して行った。

(やつと行ってくれたか。結社や政府の思惑がどうあれ、この闘い  
だけは邪魔されたくないしね)

セドリツクは新Ⅶ組がいるであろう方角を見つめた。

「なんだこりゃ?」

攻略を開始して数分後、新Ⅶ組とクロウの一行は結果が張られた門  
で足止めをくらっていた。

辺りを探索すると、輝く宝玉を発見した。

「何か彫ってありますね」

「これは……斜めに斬ったような形だな」

クルトは宝玉に彫られている意匠を見ながら言った。

「リイン、こいつは確か……」

「ああ。キリコ、ちよつと撃つてみてくれないか？」

「了解」

キリコはアーマーマグナムを抜き、宝玉めがけて撃った。

「!？」

宝玉は弾丸を弾き、ヒビすら入らなかった。

「う、嘘!？」

「オイオイ、どうなってやがる」

「……そういうことか」

周りが戸惑う中、キリコはからくり気づく。

「教官やクルトの剣でなくては壊せないらしいな」

「その通りだ。クルト、やってみてくれ」

「は、はい……!？」

クルトは双剣を構え、宝玉に斬りつけた。

宝玉はまるでガラスのように簡単に砕けた。

宝玉が破壊された直後、門に張られた結界が消滅した。

「こ、これは……!？」

「この宝玉は斬撃に対応した武器でなければ壊せない、特殊なスイッチの役割をしている。キリコの言うとおり、俺の太刀やクルトの双剣、後クロウの双刃なんかが適役だな」

「なるほど」

「斬撃以外にも存在するということですか？」

「そうだな。君たちの武器を鑑みるに、ユウナのガンブレイカーは射撃と突撃、クルトの双剣は斬撃と突撃、アルティナのクラウⅡソラスとキリコのアーマーマグナムは剛撃と射撃、アツシユのヴァリアブルアクスは斬撃と剛撃を兼ねている。ミュゼの魔導騎銃は射撃に特化しているようだな」

「ふふ、そう言われればそうかもしれませんね」

ミュゼは魔導騎銃を手に微笑む。

「とりあえず、宝玉が出てきた時は彫つてある意匠を確かめないと  
な」

「メンドクせえな」

「文句言わないの」

「さつきと切り抜けるぞ」

新Ⅷ組とクロウの一行は攻略を再開した。

「……………」

「……………」

セドリックは緋の騎神テスタⅡロツサと向かい合っていた。

「テスタⅡロツサ……………」

「……………」

セドリックは物言わぬテスタⅡロツサに話しかける。

「僕は勝ちたい。キリコにも、リンさんにも」

「……………」

「だけど……………未だ背中が見えない」

セドリックが顔を伏せる。

「理由をはつきりしてる。僕だって道化じゃない。いくら君が凄か  
ろうと……………肝心の僕は二流だってことだ」

「……………」

「宰相閣下やアリアンロードさんは言うに及ばず。クロウさんやル  
トガーさんのように実戦に揉まれてきたわけでもなし。リンさん  
やルーファスさんのように実力でのしあがってきたわけでもない」

「僕はエレボニア皇族という恵まれた地位に生まれた。それこそが  
僕の実力だと錯覚し、当然の権利だと言わんばかりに他人に強要して  
きた。そんなものは、本当の実力とは呼べないのにね……………」

セドリックは自嘲という笑みを浮かべる。

「僕はいったい……………何なんだろうね……………」

「……………私も道化ではない」

突然、テスタⅡロツサが声を発した。

「テスタⅡロツサ……………」



「ずっとそなたを見てきた」

「あの異能者に敗れてから、表でどれほど優雅に振る舞おうとも、陰では独りで壮絶な修練を重ねてきた」

「……………」

「案ずるな。私の役目は相克の完遂。だがそれ以上にそなたを護ることだ」

「護る……………」

「これも我が友…………ヘクトルとの約束ゆえに」

「ヘクトルⅠ世と…………？」

「いまわの際に託された。我が子孫が迷い、苦しみもがく時、友として手を差し伸べてくれとな」

「あ……………」

セドリツクの目から熱いものが流れた。

「今はただ待とう。我らが好敵手の到着を」

「うん…………うん！」

セドリツクは初めて、緋の騎神テスタⅡロツサと心を通わせることが出来た。

「業刃乱舞！」

「デイスペアースロー！」

「起動、フラガラツハⅡ！」

「ブレイブスマッシュⅡ！」

「ペンタウアショット！」

「無月一刀！」

「クイツクバーストⅡ！」

数々の障害を突破した新Ⅶ組とクロウの一行は、行く手を阻む大型の魔獣と戦っていた。

岩石を削り出したような魔獣は、その圧倒的なタフネスを武器に暴れ回る。

だが知力とスピードが欠けていると見抜かれ、新Ⅶ組とクロウの一行はバラけて攻撃を仕掛けることでの的を絞らせないようにしていた。

策は効を奏し、魔獣の攻撃は当たるとはなかった。

「リードスナイプ」

キリコの新しいクラフト技が放たれた。攻撃を受けた魔獣のバランスが崩れる。

「ここだ」

『おおっ!!』

キリコの合図と共に、新VII組とクロウは一斉攻撃を叩き込む。一斉攻撃を受けた魔獣が断末魔の悲鳴とともに消滅した。

「はあく……」

戦いを終え、ユウナは疲労から思わず座りこんだ。

「さすがにしんどいですね……」

「さつきから中型く大型の魔獣が多いですね」

「俺たちもそうだったよ。進めば進むほど今みたいな魔獣が待ち受けていた」

「マジで勘弁しろよ……」

アツシユはげんなりした表情を浮かべる。

「それはそうとキリコさん、先ほどの狙撃お見事でした」

「確かに。あの距離で仕留めるとは」

「50アージュはあったんじゃないか？」

「大した距離じゃない。ジオフロントの方が倍以上あった」

「単純に言って100アージュ以上ですか」

「確か、マヤに教わったんだっけ？」

「ああ」

キリコはスナイパーライフルを折り畳む。

「これでキリコは近・中・遠距離どれも対応できるというわけか」

「死角なしですね」

「ケッ！」

「まあまあ。そろそろ出発しよう」

「いよいよ皇太子殿下にお目見えというわけですね」

「いや？まだまだ奥だぞ？」

『え!?!』

クロウの言葉にユウナたちは一斉に振り向く。

「残念ながらクロウの言うとおりだ。この先は今までとは異なった造りになっている。気を引き締めて……………大丈夫か?」

『……………』

ユウナたちは呆然となった。

「どうせ奥に行く。なら進むだけだ」

キリコは軽く体を捻り、出発の準備を完了させる。

「さ、さすがキリコ君……………」

「この切り替えの速さは見習わないとな……………」

「ドライ過ぎかと」

ユウナたちは苦笑いを浮かべた。

「ま、行くしかねえか」

「そうですね」

「それじゃあ、行こう」

新VII組とクロウの一行は出発した。

「よお、元気そうだな」

「……………今度は貴方ですか」

セドリックは転移してきたマクバーンに話しかけられた。

「何睨んでやがる」

「睨みたくもありませんよ。突然連れて来られたんですから。貴方の

お仲間だね」

「……………正直あいつの仲間扱いは心外なんだが、まあいい。それより気づいてるか?」

「さつきから感じる鼓動のようなものですか?」

「ああ。闘争の気配がビンビンきやがる」

マクバーンの体から焔が漏れます。

「ストレス発散なら他でやってもらえるとありがたいんですけど」

「ああ。ここじゃやらねえ」

「え……………」

セドリックは意外そうな顔をした。

「鋼からもキツく言われてんだよ。相克には関わるなつてよ」

「そうだったんですか。でもそれって逆に言えば……」

「ああ……それ以外ならな……!」

「っ!」

マクバーンから焰が噴き出す。

「ま、今回は手は出さねえ。気分も乗らねえしな」

「……ふう……」

セドリックは安堵のため息をついた。

「貴方も狙いはキリコですか?」

「クク、否定はしねえ。あの根源から相当怨まれているみたいだしな」

「根源……そうですか」

セドリックの眼は冷ややかなものになる。

「聞けば、あの人はキリコから怒りを買っているそうじゃないですか。単なる逆怨みでしょう」

「ハハハ、だな」

マクバーンは可笑しそうに嗤った。

「んじゃ、そろそろ行くわ」

「帰られるんですか?」

「ああ。殺り合うなら……もつと楽しめる所だな……!」  
「っ!」

セドリックは再び息をのむ。

「ククク……」

マクバーンは転移して行った。

「ふう……本当に何しに来たんだろ?」

セドリックは冷や汗を拭った。

「まったく、メンドクせえたらありやしねえ」

新VII組とクロウは中盤に差し掛かろうとしていた。

その途中、結界が四つの分割されて張られた門の前で止まった。

さらに奥へと進むべく、新Ⅶ組とクロウは

「文句を言うな。四つの障壁を解かなくては先に進めないんだ」

「わーってるっーの」

「二人とも、言い争ってる場合じゃないでしょ」

ユウナがクルトとアツシユを窘める。

「今度はあの蛇みたいな魔獣か」

「そのようですね。動きは速くありませんが」

「分析結果、水と風属性が弱点です」

キリコとミュゼとアルティナはスイッチの前で立ちはだかる大蛇型の魔獣を分析する。

「教官、さっさと倒しちゃいましょう」

「ああ。行くぞ、Ⅶ組特務科」

『イエス・サー!』

「元気だねえ」

新Ⅶ組とクロウは戦闘を開始した。

一方、その頃

「……遅い」

アインセル小要塞には、本校生徒たちをあらかじめ無力化させたB班、ベアトリクスを始めとする本校教官、そしてG・シュミット博士が顔を合わせていた。

その中で、シュミット博士が不機嫌な顔をしていた。

「元弟子2号」

「……ウス」

マカロフが頭を掻きながら返事した。

「貴様は本当にシュバルツアーらと戦ったのだな？」

「ええまあ。突然消えましたが」

「フン、魔女か結社かは知らんがやってくれたな」

（何で説明だけでそう読めるんだ？）

（さ、さあ……？）

「さて、オルランドとハーシエル」

「―」

ランディとトワは姿勢を正す。

「シュバルツアーらが見つかるまで好きにしているがいい」

「好きに……ですか？」

「L.V. Xの調整がまだ済んどらんのでな。それと――元弟子2号」

シュミット博士は再びマカロフの方を向く。

「何をぐずぐずしておる。さっさと配置につかんか」

「やれやれ、相変わらずですな」

マカロフは苦笑いを浮かべる。

「い、良いんですか？」

「ぶつちやけ、テイオすけとエリゼちゃんとティータが居りやあ事足りるんじゃないっすか？」

「L.V. Xは色々細かい調整がいる。忌々しいが、奴の手腕が必要なのでな」

「い、忌々しいって……」

「あく、良いんだ良いんだ。付いてけなかったのは事実だからな」

マカロフはオペレーター室に向かった。

「それにしても、マカロフ教官とメアリー教官、それにベアトリクス教官にお会いするなんて」

「ふふ、ハーシエルさんもお久しぶりですね」

「貴女を教えていたことが昨日のように感じられます」

「学院長さんはキリコに会ったんすね？」

「ええ。殿下にぜひ連れて来てほしいと頼まれましたので」

「その後、キリコ君と殿下が戦い、そして消えたということでしょうか」

「はい……」

ベアトリクスは自身の胸に手を当てる。

「リインたちと合流できてりや良いんだが」

「とにかく、今は出来ることをやりましょう」

「はい。私たちは小要塞でリイン君たちを待ちます」

「衛士隊が来ないとは言え、ブラブラしてるわけにもいかねえしな」  
「わかりました。気をつけてくださいいね」

「ええ。ただ……」

ベアトリクスは困ったような顔をした。

「どうかしましたか？」

「実は、教頭も来ているのですが……」

「教頭が？」

「貴女たちが来る少し前に報告を受けたのですが、クラブハウス棟で失神していたとそうなのです」

「さ、さあ……？」

「俺らにはわからないっすね……？」

「そうですか。今は保健室で寝かされているようなので様子を見に行つてきましょう。メアリー教官、貴女は生徒たちにアイゼングラーフ号に集まるよう呼びかけてください」

「わ、わかりました……！」

ベアトリクスとメアリーは小要塞を出て行った。

「ランデイさん……」

「十中八九あいつだな……」

「や、やつと揃った……」

「さすがに疲れました……」

ユウナとアルティナとミュゼの顔に疲れが見てとれた。

「お疲れ。少し休んでいこうか？」

「いえ、大丈夫です」

「まだ動けますので」

「時間も惜しいですので」

三人は呼吸を整え、笑みを浮かべる。

「無理はしないようにな。キリコたちも大丈夫か？」

「ええ」

「大丈夫です」

「後、ちつとだろ？」

「ああ。みんなも良く頑張ってくれた。クロウもお疲れ」

「おう。リインも鬼の力のコントロールも出来つつあんじゃねえか？」

「前に比べればな。それでも暴走状態に陥ってしまうが」

「対策は万全なんですけど……」

「まあとにかく、今は置いておいていいだろう。それよりそろそろ行こう。もう一踏ん張りだ」

「ええ。急ぎましょう」

クルトは闘志を燃やす。

「クルトさん、気合いが入っていますね」

「ヴァンダー家の誇りとやらか？」

「ああ。でもそれだけじゃない」

クルトはキリコの方を向く。

「殿下がキリコを追うように、僕は殿下の背を追ってきた。あの方の隣に立つために」

「クルト君……」

「なら急がないとな」

「教官……」

「その想いの丈をぶつけるといい。殿下もきつとわかってくださるだろう」

「っ！はいっ！」

「んじゃ、行くか」

新VII組一行は最後の攻略にのり出した。

「クロウ side」

(なーんか懐かしいな……)

リインと後輩どもと一緒に影の領域もどきの攻略を開始してからそれなりに経つが、俺の胸に懐かしさがこみ上げてきやがった。

あん時は周りにバレねえように素性を悟られないようにしてたが、ヴァリマールが出てきた時はさすがにおったまげた。

黒のアルベリヒ曰く、ヴァリマールは俺のオルディーネと猟兵王の



ゼクトールと同レベルだと言う。

俺が二度もリインに勝てたのは経験の差があったからだ。

だが、あの内戦ですさまじい戦いを経て、成長したリインとヴァリマールが最後に勝った。

まあ、それについては文句はねえ。

(問題はあの皇子か……)

クルトによると、皇子が変わったのは内戦の後らしい。

煌魔城の最上階で千の武器を持つ魔神となったテストタロツサに最後の1撃をくらわせるために、俺はリインの道を拓いた。

その最中、テストタロツサの尾がオルディーネを俺ごと貫いた。

その時点で皇子はまだいたはずだ。

つまり、意識がなかったにせよ、俺は皇子に殺されたことになる。

(もしかすると、その罪悪感かもしれねえな。強くなりてえつてのは)

だとするならば、俺にも責任は降りかかることになっちまう。

それもいい。ドーセ最後は消えるんだからよ。

でもよ……

どこまでも往生際が悪いこいつらを見てつと、決意が揺れちまいそうになる。

(ああ……ちきしょう……!)

やっぱ……消えたくねえなあ……

そんなことを思っていると、俺らの前に魔甲兵が二体頭れやがった。

仕方ねえ、ここは……!

「来な、オルディーネ!」

リインやこいつらはまだまだ温存してもらわねえとな!

俺はオルディーネに乗り込み、魔甲兵を得物ごと吹っ飛ばす。

(最期まで付き合わせてもらおうぜ!リイン!)

「クロウ side out」

「待ってましたよ、リインさん。それにVII組特務科のみんな」

最後の回廊を抜けた新VII組とクロウは、最奥でテストタロツサと並

び立つセドリックと対峙していた。

「まさかクロウさんもいらっしやるとは思いませんでしたが」

「ああ。今の俺はリインの眷属って扱いらしいからな」

「眷属？」

「ええ。実は——」

リインはセドリックに第一相克の出来事を語った。

「そんなことが……」

セドリックはなんとか飲み込んだ。

「ですが僕は不死者ではありません。その場合、どうなるんだ？ テスタ||ロツサ」

「仮に敗北した場合、我は灰の一部として取り込まれる。その瞬間、そなたは起動者の資格を喪失する」

セドリックの問いにテスタ||ロツサはゆっくりと答えた。

「資格を喪失……」

「つまり負ければ殿下は……」

新VII組は二の句が継げずにいた。

「まあ、負けなければいいだけの話さ。場の空気は温まりきっているしね」

「うむ」

テスタ||ロツサがそう口にした途端、足元が輝き出した。

「なっ!？」

「闘ってもいないのに!？」

「……そういうことでしたか」

狼狽えるクルトたちとは対照的に、リインは落ち着きを払っていた。

「闘争の熱気は俺ん時以上……なるほど、こいつあ……」

「既に済んでいたか」

クロウとキリコもリインと同じ結論に達していた。

「す、済んでいたって……!？」

「いったい何時……」

「なるほど……」

答えが視えたミュゼは微笑んだ。

「私たちがこれまで戦ってきた魔獣。それらが闘争の場を温める役目をしていたのでしょう」

「マジかよ」

「ミルディーヌさんの言うとおりさ。出来ることならリインさんたちの立場に立ちたかったけどね」

「それこそ陛下やアルフィン殿下に合わせる顔がありませんよ」

リインはセドリツクの言葉に冷や汗をかいた。

「フフ、もう少し冷や汗をかいていただきましょう」

セドリツクはフツと笑い、テスタⅡロツサの中に入る。

「殿下……」

「やはりこうなりますか……」

【リインさん、いやリイン・シユバルツァー！そしてⅦ組特務科！貴方たちに決闘を申し込む！】

セドリツクは毅然と吼えた。

「……やるしかねえか」

「それしかないみたいね……！」

「アルティナさん、機甲兵を――」

「待ってくれ!!」

アルティナがクラウⅡソラスを出し、機甲兵を出そうとしたところをクルトが止めた。

「クルトさん……」

「僕に、行かせてほしい……！」

クルトの表情は真剣そのものだった。

「出来んのか？」

アッシュはクルトの顔を睨む。

「……………」

クルトは頷いた。

「……へっ、前みてえなツラ見せたらブン殴ってたぜ」

アッシュは頭の後ろに手をやり、ニヤリと笑った。

「決まりですね」

ミュゼは微笑んだ。

「頑張つて！」

ユウナは胸の前で拳に握る。

「任せる」

キリコはクルトを真つ直ぐ見た。

「では、クラウⅡソラス！」

クラウⅡソラスからシュピーゲルSS試作型を出した。

「後はリインだな」

「クロウはやはり……」

「ああ。ちつとばかり無理し過ぎた」

「すまない……」

「んなこと気にする暇があんなら呼べよ。お前こそ油断すんなよ」

「わかった。来い、ヴァリマール！」

リインは拳を高く掲げる。

その瞬間、リインの目の前にヴァリマールが顕れる。

リインはヴァリマールに乗り込んだ。

「どうやら揃ったようですね」

セドリックはヴァリマールとシュピーゲルSS試作型を見る。

「ええ。ここは俺とクルトで行かせていただきます！」

「クルト、ですか。良いんですか？彼一人で」

「以前の僕と思わないください」

クルトはセドリックの挑発とも取れる言葉を受け流した。

「以前の僕は、ただ貴方の後ろで控えるだけで満足感を得ていました」

「……………」

「ですが、それは僕自身の力じゃない」

「……………」

「多くの経験の経て、僕は剣の在り方を見出だすことが出来ました。この世界の危機において今こそ、ヴァンダール流双剣術の、僕自身の剣の在り方を見せる時だと！」

【……………】

【セドリツク・ライゼ・アルノール！ヴァンダール家のクルトとしてではなく、只のクルトとして、貴方に勝つ！】

迷いを振り切ったクルトはセドリツクを真っ直ぐ見る。

【……ありがとう、クルト】

【殿下……】

【僕はその言葉を、ずっと待っていたのかもしれないな】  
セドリツクは一瞬微笑み、直ぐに真剣な顔に戻る。

【もう言葉はいらない。行くぞ!!】

テスタロツサはサーベルを構え、突進する。

【行きましょう、教官!!】

【ああ!!】

シュピーゲルSS試作型とヴァリマールも双剣と根源たる虚無の剣を構え、突進した。

第二の相克の火蓋が切って落とされた。

## 第二相克

【魔剣プロパトール！】

テストⅡロツサが赤黒い剣でヴァリマールを斬りつける。

【ぐっ！】

ヴァリマールがたたらを踏み、動きが一瞬止まる。

【真・双剋刃！】

隙を突いてシュピーゲルSS試作型が斬撃を飛ばす。

【やるな！魔弓バルバドス！】

斬撃を受けるも、テストⅡロツサは禍々しい気を宿した矢を放つ。

【はあっ！】

ヴァリマールは根源たる虚無の剣で矢を叩き落とした。

【これはどうだ？魔槍エンノイア！】

テストⅡロツサは背中に背負っていた槍で突進した。

【ぐっ！】

シュピーゲルSS試作型は双剣で防御するも、弾かれた。

【続けて、メルト——】

【伍の型・斬月！】

テストⅡロツサの真横からヴァリマールが居合い斬りを放つ。

【しまっ!?!】

テストⅡロツサは大きく体勢を崩す。

【今だ、クルト！】

【了解です！】

ヴァリマールとシュピーゲルSS試作型のリンクアタックが叩き込まれた。

【ぐああっ！】

テストⅡロツサは後退した。

【すごい……………】

「教官とクルトさんの技量は言うまでもありませんが……………」

「緋の騎神か。想像以上にやべーな」

「セドリツクの腕もあるようだが、地力が違うように見えるが」  
「良い勘してるじゃねえか」

キリコの推測をクロウは称賛した。

「黒のアルベリヒ曰く、騎神には格が存在するそうだが、格？」

「同じ騎神なのにですか？」

「造った奴の思惑は分からねえが、これまでの相克の勝率から割り出すとそうなるらしい」

「んで、どうなんだよ？」

「騎神の中で別格に位置付けられる黒を除けば、最強は金でその次点が銀。その次が緋で、残りの灰、蒼、紫は同じくらいだそうだが」

「ヴァリマールやオルディーネが最下位!？」

「そ、そんな……」

ユウナはうなだれた。

「仕方ねえさ。今までの起動者が真価を引き出せなかったんだろうよ」

クロウはケラケラと笑う。

「それに同じ騎神でも乗り手を選ぶのもいるらしい。紫の騎神の起動者は代々傭兵みてえな曲者タイプだったらしいしな」

「煌魔城で先代カイエン公が言っていました。緋の騎神はアルノール家の人間しか動かせない」と

「マジかよ」

「とにかく、今は見守るしかない」

「そうですね」

新VII組は第二相克をじっと見守る。

【はあ……はあ……!】

【ふう……大丈夫か、クルト】

【ええ……なんとか。それにしても、これが緋の騎神……!】

【千の武器を持つ魔神、紅き終焉の魔王。だがあの時のような禍々しい気は感じない。むしろ洗練された気高さすら感じる】

【殿下、ではなく緋の騎神からですか？】

【さすがはリインさん。分かりますか】

テスタⅡロツサはゆつくりと立ち上がる。

【黄昏の呪いの成就が原因かはわかりませんが、テスタⅡロツサは長きに渡って苦しめられてきた暗黒竜の呪いから解放されたのです】

【暗黒竜の呪い……ヘクトルⅠ世の時代から続いていたという……】

【それが解放された。つまり緋の騎神本来の人格というわけですか】

【そうだ】

テスタⅡロツサはリインの言葉を肯定した。

【テスタⅡロツサ……】

【ようやく、己を取り戻すことができた。故に全身全霊を懸けて倒させてもらう】

【いいだろう。だがこちらも負けるわけにはいかない】

【僕の剣、届かせてもらう！】

【こちらもですよ。いこう、テスタⅡロツサ！】

【応！】

再び、剣戟が鳴り響く。

【どうやらまたらしいな】

キリコは別の方向を向き、アーマーマグナムを抜いた。

【またって……まさか！】

【来るぞ！】

突如空間が歪み、キリコたちの前に二体の魔甲兵が顕れた。

【ヘヴィゴラムとか言う重装甲タイプか】

【ここはあたしたちの出番ね！アル、お願い！】

【了解しました】

アルティナが右手を掲げ、クラウⅡソラスからドラツケンⅢ・プロトタイプとヘクトルⅠ式型・改とケストレルβⅡを出した。

【フルメタルドッグはいいのか？】



「改修中だ」

「ならここはサポート役だな」

そう言ってキリコとクロウは後方支援にまわった。

「それじゃ、行くわよ！」

「はしやぎ過ぎてやられんなよ！」

【参りましょう！】

ユウナたちは魔甲兵に猛然と向かって行った。

一方、リインたちの戦いも白熱していた。

【閃光斬！】

【レインスラッシュⅡ！】

【魔剣プロパトール！】

それぞれの剣が火花を散らし、削り合う。

【無月一刀！】

【真・双剋刃！】

ヴァリマールとシュピーゲルSS試作型のクラフト技がテストⅡ  
ロツサに叩き込まれる。

【ぐっ！】

テストⅡロツサは体勢を崩した。

【螺旋撃！】

だめ押しに、焰を纏った根源たる虚無の剣の一撃が叩き込まれる。

【ぐあっ！】

テストⅡロツサはたたらを踏みながら下がる。

【まだまだ！魔弓バルバドス！】

テストⅡロツサは下がりながらクラフト技を放った。

【はあっ！】

シュピーゲルSS試作型が飛んでくる矢を叩き落とす。

【メルトスライサー！】

テストⅡロツサは動きが止まったシュピーゲルSS試作型めがけて斬りつける。

【ぐっ!?!】

【その程度か！お前の剣は！】

【な……!?!】

【軽すぎてハエが止まったかと思ったよ！】

【なめるなっ！】

シュピーゲルSS試作型は双剣で十字に斬り裂いた。

【うおっ!?!】

【はああああっ！】

続け様に機体をスピンさせ、連続で斬りつける。

【これで！】

止めにエンジンを吹かして飛び上がり、真上から双剣を振り下ろす。

【そうくるかっ！】

テスタロツサはサーベルで受け止める。

だが落下のスピードが加わったシュピーゲルSS試作型の双剣の

威力が上回った。

テスタロツサのサーベルの刀身は碎け散った。

【ぐぐ……っ！】

テスタロツサはやむなく後退した。

【はあ……はあ……はあ……!?!】

【クルト……】

【こ、これで……】

クルトは勝利の手応えを感じた。

だが――

【終わってなどいないよ】

【っ！下がれ！】

リインは慌てて号令を出した。

【遅い！】

テスタロツサの右手が赤く輝く巨大な鉤爪に変化していた。

【魔爪マンティコア！】

鉤爪はシュピーゲルSS試作型の装甲を斬り裂いた。

【うぐっ！】

シュピーゲルSS試作型は煙を吹きながら、動かなくなった。

【ただだ！魔戦斧グシオン！】

次に、刃が二つ付いた戦斧をヴァリマールめがけて振り下ろした。

【くっ!?】

ヴァリマールは戦斧をギリギリで回避する。

【さすがにかわしますか】

【まさかこのような武装が……!】

【忘れてもらっては困ります。テストロツサの持つ特殊能力を】

【千の武器を持つ魔神……そういうことでしたか】

【クルトの想いは十分に受け取りました。ここからが真正銘の相克ですよ】

セドリックはシュピーゲルSS試作型を見ながら言った。

【……ご立派になりましたね】

【英雄と慕う貴方からそう言われるのは光栄です。ですから――】

【ええ!】

テストロツサとヴァリマールは再びぶつかり合った。

「あれが緋の騎神か」

「靈力は削るが、状況に応じてあらゆる武器を造りだす。異名に偽り無しだな」

「偽帝オルトロスも前カイエン公もあの能力に惹かれたのかもしれない  
ませんね」

（武器が変われば対処も変わる。敵にとってこれほど脅威はないだ  
ろう）

【おい！しゃべってんのもそれぐらいにしとけや！また来やがった  
!】

突如現れた魔法陣から、二体の魔甲兵シングルヘイムが顕れた。

「またかよっ!」

【千客万来ですね!】

【こうなったらまとめて相手してやるわ！アル！キリコ君！頼んだ  
わよ!】

「わかりました」

「了解」

アルティナとキリコはEXアーツを放った。

「疲れんのはまだ早えぜパイセン！」

「言ってる！」

クロウは二丁拳銃を撃ち込む。

（ユウナたちも限界は近い。クルトが動けない以上、教官にけりをつけてもらうしかないか）

キリコは横目でヴァリマールとテスト・ロツサの戦いを見つつ、シグルヘイムの迎撃に集中した。

【ヴォイドブレイカーⅡ！】

【ムーランルージュⅡ！】

【クロスブレイクⅡ！】

三機の機甲兵がそれぞれのクラフト技を放つ。

【ロードフレア】

【シヤドウレイズ！】

キリコ、アルティナとクロウのEXアーツが追い討ちをかける。攻撃を受けたシグルヘイムの体勢が崩れかける。

【うしっ！このままガンガン——】

【待てアツシュ！】

キリコが待ったをかけようとしたが遅かった。

グオオオオオオツ……！！

二体のシグルヘイムは連携してヘクトル式型・改に襲いかかる。

【ぐおっ!?!】

ヘクトル式型・改はたたらを踏んだ。

【大丈夫ですか!?!】

【ああ……人形のクセにやってくれるぜ】

【まさか連携してくるなんて……】

【別にあり得ないことじゃない】

【え?】

「挙動の一つ一つを見ていけば分かることだが、本能ではなく自ら考えて動いているようだ」

【つまり、意識や自我があるか?】

「黄昏以降、魔甲兵にも変化が見られるようです」

「厄介なことにな」

【ハッ!上等だ】

ヘクトル式型・改はヴァリアブルアクスを構える。

【なら立つのも嫌になるくれえブツ叩いてやるぜ!】

【どうやらアツシユさんに火がついたみたいですね】

【……好都合だ】

「あん?」

「このまま暴れてもらった方がむしろ都合が良い。セドリツクにもプレッシャーをかけられるだろう」

【……ホント冷静ね……】

「ユウナもミュゼも気が済むまで機体を酷使してくれて構わない」

「大丈夫なんですか?」

「多少無茶をしても、優しい博士が直してくれるだろう」

【キリコさんもキリコさんで腹に据えかねることもあるんですね

……】

ミュゼはキリコが抱えていたストレスの根源を見抜いた。

【クク……なら大暴れさせてもらうぜ!ランブルスマッシュ!】

ヘクトル式型・改はシングルヘイムめがけてヴァリアブルアクスを振り下ろした。

【!?!】

シングルヘイムは大剣で受け止めた。

【そこっ!】

【隙だらけです♪】

ドラッケンⅢ・プロトタイプとケストレルβⅡが追撃した。

【?!?!】

シングルヘイムの体勢が大きく崩れた。

【行くぜっ!ライオットコンボ!】

アツシユの号令で、機甲兵三機の連携技が叩き込まれた。  
シングルヘイムは倒れ、消滅した。

「グオオオオオッ!!」  
もう一体のシングルヘイムはヘクトル式型・改の背中に狙いをつけた。

「フレイムグレネードII」

「ブリューナクII、照射!」

キリコとアルティナのクラフト技がシングルヘイムの攻撃を阻止した。

「ネメシスバレットII!」

動きが鈍くなった瞬間を狙ったクロウのクラフト技がだめ押しとなり、シングルヘイムは体勢を崩した。

「今だ!」

「おうよ!」

「はい!」

クロウの号令の下、三機の攻撃がシングルヘイムに叩き込まれる。

「レゾナンスショット!」

ケストレルβIIの止めの一撃が放たれた。

シングルヘイムは断末魔の叫び上げながら消滅した。

「やりましたね」

「二応、警戒は怠るな」

「そうね。また顕れるかもしれないし」

「リインの方もそろそろだろうしな」

「教官……」

キリコたちは警戒しつつ、相克の行方を見守った。

「はあ……はあ……!」

「くっ……!」

ヴァリマールとテストアロツサは互いに攻め手を欠いており、膠着状態に陥っていた。

「さすがはリインさん。剣一本でテストアロツサの攻撃を凌ぐなん

て……】

【剣、弓、槍、手甲、戦斧、戦鎚、杖、鉄球、鎌、鎖、砲、鞭……これほどまでに多彩な武器を自在に操るとは……】

【伊達に千の武器を持つ、とは言われていませんよ】

【ですが、もう霊力も限界にきている。そうですね？】

【ふふ、分かりますか。ですが……！】

テストⅡロツサは剣を構える。

さらに機体から霊力が溢れ、剣を包んでいく。

【貴方を倒すのには十分です……！】

【わかりました……】

ヴァリマールも根源たる虚無の剣を構えた。

【我が一刀にて、決着をつけさせてもらいます！】

ヴァリマールから霊力が溢れ出す。

【ならば……！】

【いざ……！】

二体の騎神の眼には互いしか映らなかつた。

【はあああああつ！！】

【うおおおおおつ！！】

ヴァリマールとテストⅡロツサは一気に距離を詰めた。

【もらった！】

テストⅡロツサの剣が先に届く。

【っ！！】

ヴァリマールはテストⅡロツサの剣を紙一重で掻い潜る。

【夢想覇斬！！】

テストⅡロツサに無数の斬撃が叩き込まれる。

【はは……やっぱり……強いや……】

セドリツクは満足気に微笑む。

テストⅡロツサは両膝をつき、頭を垂れる。

（殿下……）

中破したシュピーゲルSS試作型の近くで見ていたクルトは寂しげな表情を浮かべた。

第二相克はリインとヴァリマールが制した。

「や、やったあ!」

「勝ちました」

「お見事です、教官」

新Ⅷ組女子はリインの勝利を喜んだ。

「はは、やりやがった」

「そういやアンタ、緋の騎神に殺られたんだろ?」

「この際どうでもいいこった。おいリイン! 早いとこ済ませちまえよ」

【あ、ああ……】

ヴァリマールは吸収されようとしたテストⅡロツサに掌を向け、光を逆流させる。

テストⅡロツサは消滅を免れ、ヴァリマールは新たな力を得た。

【ふう……。後は……】

ヴァリマールから降りたリインはテストⅡロツサから放出され、横たわるセドリックに駆け寄る。

「大丈夫ですか……!?!」

「ふふ、敗けてしまいましたね……」

セドリックは微笑んだ。

「殿下……」

クルトもセドリックの元に駆け寄る。

「クルト……君の剣、確かに届いたよ。もう立派なヴァンダールの双剣士だね……」

「それでこそ、僕の剣にふさわしいよ……」

「っ!!」

クルトの眼から熱いものが流れる。

「リインさん……お手間をかけました」

「何もおっしやらないください。殿下の気迫、お見事でした」

「はは……出来れば勝ちたかったんですが、やはり敵いませんでした」



セドリックはテストタロツサに目をやる。

「初めて心を通わせることができたよ。ありがとう、テストタロツサ」

「礼を言うのはこちらだ、セドリック」

テストタロツサはセドリックを見つめる。

「最後の時まで、共に戦おう。友よ」

「テストタロツサ……」

セドリックの意識も限界だった。

セドリックは眠るように気を失った。

「相当消耗したんだろうな」

「なら運ば——」

「それは僕の役目だよ」

クルトはセドリックを背負った。

「クルト……」

「僕は……セドリック・ライゼ・アルノールの剣だからね  
クルトは微笑む。

「どうやら時間らしいな——」

キリコが言い終わらないうちに、新VII組は轉移した。

「そんなことが……!」

「なるほどな……」

アインヘル小要塞前で新VII組を待っていたトワとランディは、目の前に現れた新VII組の姿に驚いた。

気を失っていたセドリックは保健室へと運ばれ、ベアトリクスの診察を受けた。

外傷はなく、命に別状はないことを知った新VII組は安堵し、本校生徒たちはむせび泣いた。

セドリックのことをベアトリクスらに任せ、新VII組は改めてトワたち事に事の経緯を報告した。

「本当に良かったよ。ベアトリクス学院長が来てくれていて」

「ごっちゃんもビックリしましたよ。まさか本校の教官の皆さんもいら

してたなんて」

「あの皇太子の熱意に賛同した形らしいぜ。なかなかやるよな」

「そうですね。それで、小要塞にエリゼとティオ主任が？」

「う、うん。そうなんだけど……」

トワの表情が暗くなる。

「そこから先は聞きたくねえんだが……」

「諦めましょう、アツシユさん」

「あの博士ならするだろう」

「正直、休みたいんだが……」

「はあく〜」

新VII組はこれから起きることを確信していた。

『フン。解っているならさっさと入って来い』

突如、シユミット博士の声が響く。

『は、博士〜！ユウナさんたちは相克の後なんですよ！』

『極限状態でのデータが必要なのでな。好都合というものだ』

『え、ええつと……？』

『完全無視ですね……』

『はあく。ま、というわけだ。疲れてるとこ悪いんだが、小要塞内の

エレベーター前に来てくれ』

マカロフの声を最後に聞こえなくなった。

『……………』

新VII組は固まった。

「あ、あははは……」

「その………御愁傷様」

トワとランディは申し訳なきそうになった。

「仕方ない。行くか」

「もう慣れっこよ」

「とはいえ、小要塞攻略は既に終わっているはずでは？」

「7月にLV・MAXを終えていますね。精神取り替えっこの事件も

起きましたけど」

「つまんねえこと覚えてんじやねえよ」

アツシユはミュゼを睨んだ。

「精神取り替えつこ事件？なんだそりや？」

クロウの頭にハテナが浮かぶ。

「それはですね……」

ミュゼがクロウに説明した。

「なるほどな。擬似的オーバーライズの一件か。懐かしいぜ」

「クロウさんもご存知なんですか？」

「学院祭の少し前のことだからね」

「素行の悪さから俺たちのクラスに編入したんだよな」

「別に良いだろ。今言わなくて」

クロウは頭を掻いた。

「そろそろ中に入ろう。疲れは抜けないだろうが、ここが最後の踏ん張り所だ」

「そうですね」

「参りましょう」

「トワ先輩とランデイさんも行きますか？」

「ううん、私たちは街の方を見てくるよ」

「ちよいと騒ぎになってるみてえだからな。それにTMPなんか戻ってくるかもしれねえ」

「なら俺も手伝うぜ」

クロウが拳手をした。

「クロウ……」

「良いのか？」

「ああ。ここはコイツらが行くべきだろ」

「わかりました。お気をつけて」

「皆も頑張つてね」

「終わったら西側に来てくれよ」

トワとランデイとクロウは街の方へと向かった。

「それじゃ、行こうか」

『イエス・サー！』

新VII組はアインヘル小要塞に足を踏み入れた。

## 最終試験①

「これは……」

アインセル小要塞に入った新VII組は、指定通りエレベーターの前に立った。

そこには、L.V. Xという表示があった。

「L.V. X?」

「またあからさまな名前だな」

「というより、いつの間にこんなものを……」

「キリコ君、知ってた?」

「いや、俺も知らなかった」

「私たちと合流する前ですか?」

「あの日以来、顔を合わせていなかったからな」

「あ……」

キリコのあの日という言葉に、ミュゼたちは何も言えなかった。

「そんな顔をするな。シュミット博士が何をしようかどうかだつていい」

「キリコさん……」

「まあ、そうですね」

「確かにどうだつていいわな」

「みんな言いたい放題だな。とにかく、行ってみよう」

新VII組はエレベーターに乗り込み、L.V. Xの階層に降りる。

『遅い。予定時間の10分押しだ』

L.V. Xの階層に降りて早々、新VII組はモニターに映ったシュミット博士の小言を受けた。

「仕方ないじゃないですか!こっちは相克の直後だつていうのに!」

『そんなことは私の預かり知らんことだ。さっさと準備しろ』

シュミット博士は不遜な態度を崩さずに言った。

「くくくッ!」

ユウナ菌ぎしりするほどの怒りを覚えた。

『まあまあ。画面越しですが、お久しぶりですね、皆さん。それにユウナさんも来てくれてありがとうございます』

「そんなの当然じゃないですか！本当に、無事で良かった……！」  
ユウナは涙ぐんだ。

『兄様、皆さん。ご無沙汰しております。ミュゼも無事で良かった……』

「エリゼさんもお久しぶりです」

「先輩もご無事で何よりです」

『そしてキリコさん、夏至祭以来ですね』

「……」

『トワさんやランディさんから聞きました。危険を省みず、皇妃様や姫様を助けていただいたと聞いております』

「アルフィン皇女の件は教官たちがしたことだ」

『それでも、お礼を言わせてください』

エリゼは立ち上がり、キリコに頭を下げた。

「エリゼ……」

「……」

『そろそろ始めさせてもらおうか』

突如、シユミット博士の声が響く。

『は、博士!?!』

『Ⅶ組は速やかにLⅤ・Ⅹに入れ。これは最終的な試験になる』

「試験？」

『將軍からの言伝でだ。これより帝国を覆う呪いを撃ち破るならば、最終試験を突破し、Ⅶ組の意地と覚悟を示してみせよとのことだ』

「分校長……」

「わざわざ僕たちのために……」

『元弟子二号と弟子四号はルートのサポート。プラトーとシユバルツアーはバックアップだ』

『了解』

『は、はい……！』

『頼りにしてます、エリゼさん』

『よろしくお願いいたします』

四人はコントロールパネルに向かった。

『これより、アインヘル小要塞での最終試験を始める』

シユミット博士の言葉を最後にモニター画面が暗くなった。

「……行くか」

「ボサツとしてる暇ねえなこりや」

「そうですね」

「文句言つてやんなきや気がすまないわね」

「幸い回復装置もある。これに触れてから行こう」

「ついでにARCUSSⅡも見直しましょう」

新Ⅶ組はそれぞれ攻略の準備を進める。

「ユウナ side」

数分後、準備を終えたあたしたちは扉の前で整列した。

「準備万端のようだな？」

「はい！いつでも出発出来ます！」

「ユウナさん、その前に」

アルがリイン教官の方を向く。

「いつものお願いします」

「やはりあれがなくては始まりませんから」

ホントそうよね。

「頼むぜ、シュバルツアー」

「わかった」

リイン教官は咳払いをした。

「これよりアインヘル小要塞LV・Xの攻略を開始する。この最終試験で彼らに示すぞ——俺たちの“意地”と“覚悟”を!!」

『おおっ!!』

絶対にクリアしてみせるんだから!

「ユウナ side out」

「始まりましたね」

オペレーター室では、ティオたちがLV・Xの設定を組んでいた。「以前オペレーターした時とは比べ物にならないセッティングになっているみたいですね」

「確かに、学生にやらせるレベルじゃないな。まあ、VII組なら乗り越えられるというのが念頭にあるんだろうが」

「教官とキリコさんもいますし、無策でということはないと思います」

「……フン」

シュミット博士は鼻を鳴らす。

「博士？」

「確かにキュービーでは少々物足りないか」

「はい？」

「弟子四号、今から言うデータを打ち込め」

「は、はい……」

ティータは言われるがままに、シュミット博士の言うデータをコントロールパネルに打ち込む。

「て、博士!?これって……!!?」

「な、なんですかこれは……!!?」

「よくこんなものを思いつきますね……」

「やれやれ、あいつら大丈夫か？」

「クルト side」

「これがLV・Xか……!」

「今までと比べ物になりませんね」

「徘徊している魔獣に人形兵器も手強い。みんな、薬の残数とEPには気を配るようにな」

「とにかく、進みましょう」

「待て」

キリコがユウナ待ったをかけた。何か感じたようだ。

「どうした?」



「この先を見てもろ」

キリコが前方を指さす。

そこは、広い造りになっており、さらに行く手を阻むようにシャッターが閉じていた。

「魔獣なんかは見えないけど……」

「ここは何でも疑え」

「おいおい、ビビっちゃまったのかよ?」

「……かもな」

どうやら本当に何かあるみたいだ。

「とにかく進みましょう。魔獣の出現に気をつけながらね」

「そうですね」

「……」

僕たちは広い部屋に足を踏み入れる。

「なくんだ、何もないじゃ——」

「待てユウナ!」

リイン教官が止めようとしたが遅かった。

突如、広い部屋全体が青い光の流れに包まれる。

「これは!」

「トラップか!」

「それだけではありません!」

さらに奥から人形兵器の大群がやって来た。

「マズいな」

「ここで人形兵器かよ!」

「それだけじゃない。アルティナ、サーチしてみろ」

「は、はい」

キリコの指示でアルティナはクラウⅡソラスを出し、僕たちをサーチした。

「これは……!」

「どうしたの!」

「EPがどんどん吸いとられています!」

「なんだと!」

なんて物を作ったんだあの人は!?

「早く解除しないと!」

「ですが、簡単にはいかないようです」

人形兵器たちは、コントロールパネル前を陣取っていた。

「コイツら……」

「倒さないといつまで経っても解除出来ないというわけか!」

「行くぞっ!」

『おおっ!』

僕たちは戦闘に突入した。

「クルト side out」

「シュミット博士!!」

オペレーター室では、トワがシュミット博士に食ってかかっていた。

「EP吸収フィールドなんて何を考えているんですか!」

「これは最終試験の範囲内だ。これくらい突破出来なければそれまでだ」

「だからと言って……!」

「解除しない限りEPを根こそぎ吸い取っちゃうのか。アーツが得意なやつにはキツイな……」

「ご、ごめんなさい……」

「テイータさんのせいではありませんよ。それに冷たいようですが、これも試験だと思います」

「テイオ主任……」

「大丈夫です。兄様や皆さんならばきつと乗り越えられます。これまで何度も窮地を乗り越えてこられた『VII組』なら……!」

「エリゼちゃん……」

「クク……シュバルツアの妹の方がしっかりしてるな。おっ、解除に成功したみたいだな」

マカロフはモニター画面を見つめた。

「アルティナ side」

「はあ…はあ…はあ…！」

「どうやら解除出来たみたいだな」

「な、なんとか……」

「ユウナさん、お疲れ様でした」

「それにしても手の込んだ仕掛けだな……」

わたしたちが戦っている隙を突き、キリコさんがコントロールパネルを操作しようとした。

ですが、画面には『ユウナ・クロフォード』という文字しか映らず、キリコさんでは操作が不可能でした。

急遽、キリコさんはユウナさんと交代し戦闘に参加しました。

人形兵器の増援が来ないうちにユウナさんは手こずりながらもコントロールパネルを操作し、特殊トラップをなんとか停止させました。

また、停止と同時にシャッターが開きました。

「操作する相手まで指定するとは……」

「それも含めての最終試験というわけか」

「と、とりあえず試験は合格かしら……？」

『ギリギリ及第、といったところだ』

広い部屋にシユミット博士の声が響きます。

『コントロールパネルまでの時間、解除までの時間。どれを取っても遅いと言わざるをえん。これが爆発物だった場合、全員死亡は十分に考えられる』

「そ、それは……」

確かに、シユミット博士の言い分は正しいのですが……

『まあいい。このような特殊トラップはいくつか用意されている。

せいぜい一人の失格者を出さんことだな。次に期待する』

そう言ってシユミット博士の声は途切れしました。

「まだあのか……」

「何が出てきても不思議じゃない」

「ともかく、まずは回復いたしましょう」

ミュゼさんは持っていたEPチャージIIを全員に渡しました。

「ありがとうございます」

「それにしても、解除者の指定は盲点だったな」

「キリコ君に頼っていたことが裏目に出たってわけね」

「おそらく、キリコさんは特殊トラップ解除要員には入っていないはず。私たちが解かなくてはならないでしょう」

「ならその分、俺は戦闘に力を入れる」

「任せませ」

アツシユさんは両手を頭の後ろで組みました。

「いや、楽しんでいいわけじゃないからな?」

「……チツ」

「その舌打ちはなんなのよ」

アツシユさんの感情が駄々漏れです。

「全員でクリアしてこそ、合格だと思えますよ?」

「わーってるよ」

「ほら、そろそろ出発するぞ。総員、くれぐれも見落としないようにな」

わたしたちは攻略を再開することにしました。

「アルティナ side out」

しばらく進むと、新VII組はこれまでとは違った造りの宝箱を発見した。

宝箱を開けると中には、ゴーグルのような物が入っていた。

「何、これ?」

「暗視ゴーグル、か?」

「なんでこんなのがあんだよ?」

「おそらく、この先に暗闇のフィールドが仕掛けてあるんだろう」

「そのための暗視ゴーグルというわけですか」

「……いや」

キリコが待ったをかける。

「あからさま過ぎる」

「あからさま過ぎるって、まさか？」

「その気にさせといて全然別のトラップが待ってるってか？」

「ありそうですね……」

「ほんつと良い性格してるわ！」

「今さらですね」

アルティナはため息をついた。

「とりあえずコレ、誰がつけるの？」

「キリコとユウナとアルティナは外して良いだろうから、僕かアツシユかミュゼかな？」

「え、なんであたしも？」

「ユウナさんは既に終わられていますもの。アルティナさんは確か……」

「はい。クラウⅡソラスの暗視モードでどうにかかります」

「そっちは大丈夫だな」

「なら、ここは私がつけましょう」

ミュゼが拳手をした。

「確かに、魔導騎銃を使うミュゼなら対処しやすいか……」

「なら、最後尾で指揮してくれ」

「はい、お任せください！」

「決まったな。それじゃ、出発しようか」

『イエス・サー！』

リインたちは歩き出した。

キリコの予想は外れた。

新VII組が広い部屋に入った瞬間、部屋は暗闇に包まれました。

ミュゼは即座に暗視ゴーグルを装備し、アルティナはクラウⅡソラスの暗視モードを起動した。

「ユウナさんとキリコさんは10時の方向に発砲、アツシユさんは1時の方向に仕掛けてください！」

「教官とクルトさん、12時の方向に向けて斬撃を放ってください！その方向にブリューナクⅡを撃ちます！」

「オツケー！ジエミニブラストII」

「アーマーブレイクII」

「真・緋空斬！」

「デイスペアースロー！」

「真・双剋刃！」

「ブリューナクII、照射！」

ミュゼとアルティナの指揮の下、新VII組メンバーがそれぞれ動いた。

その結果、新VII組は視覚のハンデを物ともせず、人形兵器との戦闘に勝利しました。

「ふう、なんとかなったか」

「……………」

キリコは腕を組んだ。

「キリコさんの予想、外れましたね」

「裏読みし過ぎたようだ」

「いえいえ、キリコさんが悪いわけではありませんよ」

「だが……………」

「いいえ、博士が疑われるようなことをなさるからいけないんです。普段から謙虚に振る舞ってればこんなことにはならないんです」

（ミュゼ、ほんと容赦ないわね）

（キリコさんが少しでも関わるところですね）

（もつと女郎蜘蛛みてえな掴みにくい奴だったと思ってたんだけどよ……………」

（もしかしたら、こつちが素のミュゼなのかもな。それだけカイエン公の名は重いということか）

ユウナたちは黙ってキリコとミュゼのやり取りを見守る。

「二人とも、盛り上がってる所悪いがそろそろ行くぞ」

「あ、了解です教官」

（なんでこんな時だけ気づくんだこの人は……………」

（本当に後ろから刺されそう……………」

（該当者足り得る方は多そうですね……………」

(たいがいにしやがれよマジで……)  
ユウナたちは揃ってため息をついた。

「ミュゼ side」

その後、私たちは陣形を崩さないように暗闇の中を進み、数分歩いた末、コントロールパネルを発見しました。

画面には『ミュゼ・イーグレット』と表示されました。忌憚なく操作し、特殊トラップの解除に成功しました。

解除した瞬間、部屋全体に明かりが灯りました。

「うーん、眩しい」

ユウナさんは目をこすります。

「暗闇に目が慣れたところだったからね」

「目がチカチカします」

「とりあえず、ここは合格だろ」

『フン、まあ良いだろう』

シュミット博士のお声が響いてきました。

『解除にかかる時間も上々。戦闘時における動きも悪くない。合格点をやろう』

「お粗末様です」

ああ、あのお顔に往復の平手打ちをしたい気分です。

そんな思いを隠して、シュミット博士の話を受けます。

『前半はここまでとする。次の中間は魔獣と人形兵器の戦闘レベルの向上、後半はさらに地形変化を盛り込む。せいぜい足掻いてみせろ』

通信は途切れしました。

「敵はさらに手強くなるようだな」

「加えて地形変化か……」

「さらに頭を使う状況になりそうですね」

「ここまでできたら何でも来いだろ」

「アッシュさんの言うとおりにかと思えます」

「ならさっさと行くか」

「よし、待ってなさいよ！」

私たちは気合いを入れ、さらなる攻略に進みます。

「ミュゼ side out」

「ここまでではベストタイムですね」

ティオは新VII組のタイムをまとめた。

「さすがVII組の皆さんですね」

「リインも上手く立ち回ってるな。あくまで生徒主体での攻略になるようにな」

「兄様……」

「ふふ、リインさんが心配？」

「え!？」

エリゼが振り向くと、聖アストライア女学院の制服を着たアルフィンが立っていた。

「ひ、ひ、姫様!？」

「ごめんなさい、エリゼ。リインさんたちに無理を言っで連れて来てもらったの」

「い、いえ……それはわかりましたが……」

「ふふ……」

アルフィンはエリゼを抱き締める。

「姫様……」

「本当に……無事で良かったわ……私の大切な親友……」

「……はいっ！」

エリゼも強く抱き締める。

「グスツ……良かった……!」

「うん。本当に良かったね」

ティータとトワは涙ぐむ。

「へへ……」

「エリゼさんにも笑顔が戻って良かったです」

「そうなのか？」

「どこか張りつめたような、無理をしている感じでした。ですが、こ



れでもう安心ですね」

「なら皇女にも協力してもらおうか」

「え!？」

いつの間にかシュミット博士が立っていた。

「シユバルツアーの妹の補助に入ってもらおう。作業効率は上昇するはずだ」

「いやいやいや!そりやマズインじゃ……!」

「そ、そうですよ!」

「わかりました」

「ええっ!？」

オペレーターを承諾したアルフィンにティータは驚く。

「決まりだな。さっそく作業に入ってもらおう」

「了解しましたわ」

アルフィンはエリゼの隣に座る。

「ひ、姫様……」

「ここまで来て手ぶらじゃ帰れないもの。リンさんや皆さんのお力になれるならなおさらよ」

「はあ……わかりました。ではよろしくお願いいたします」

「ええ、任せて」

「い、良いんですか?」

「こうなった姫様は梃子でも動かないんです」

「ふふ、わかってるじゃない」

「ご自分でおっしゃらないでください」

(なかなか飄々としてるな)

(さすがはオリヴァルト殿下の妹さんといった所ですね。でもエリゼさん、楽しそうですね)

(だな)

ティオとランディは二人の様子を見守った。

一方、その頃――

「アッシュ side」

「ああもう！いい加減にしなさいよ！」

「攻略中だ。集中しろ」

「そうは言ってもだな……！」

「さつきから手が痺れて得物が使えねえんだよ！」

俺らは今、電流の流れる部屋で四苦八苦してる。

足を踏み入れた瞬間、全身が痺れるような感覚がしてうざってえ。

「しかもこんな時に敵か」

キリコの言う方向を見ると、五体の人形兵器がいやがる。

「総員、距離を取れ！アーツ戦に移行する！」

『おおっ！』

それっきやねえか。

俺らは一斉にARCU S IIを駆動させる。

アーツは正直苦手だが泣き言は言ってらんねえ。

初々中級アーツを受けた人形兵器はたちまち爆散した。

「やりましたね」

「それにしても、いったいどこでこんな技術を……」

「……おそらく、黒の工房だろう」

「黒の工房が……？」

「フェンリールやお前たちの機甲兵の設計具合は既存の機甲兵と共通している。製作するついでに他の技術も吸収したんだろう」

なるほどな。あのジジイなら十分に考えられるわな。

「あり得ます」

チビウサも頷いていた。

「だからついでにここで試すことくない!？」

「僕たちはモルモットなのか……？」

どーもそんな気がしてきたぜ。

「いや、そこまではないと思うぞ……？」

シユバルツァーは苦笑いを浮かべてやがる。最後は疑問形になつてるしよ。

「とにかく、急いで解除装置を見つけましょう。解除さえしてしまえば、こちらのものです」

「それまでは無駄な戦闘は避けて行こう」

「うしつ、行こうぜ」

俺らは解除装置の探索を始めた。

途中、人形兵器の襲撃を受けたが相手なんざしてらんねえ。

ユウナがひーこら言いながら解除装置を見つけた。

モニター画面には『アツシュ・カーバイド』とあった。

こんなもん屁でもねえ。ちよいちよいと特殊トラップを解除してやった。

その直後、人形兵器が群れをなして襲つてきやがったから一体残らずブツ壊してやった。憂き晴らしにはもってこいだな。

戦闘後、ジジイが合格点をやるつつた。

上から目線が気に食わねえが、もらつといてやるかね。

「アツシュ side out」

「や、やっと休憩ね……」

ユウナは回復装置の前で座りこんだ。

「みんなお疲れ。大きなケガもなくてなりよりだ」

「教官が一番疲れているはずでしょう」

「影の領域攻略に第二相克の騎神戦に小要塞攻略。無理し過ぎかと」

「試験とはいえ、戦闘から離れても良いのでは？」

「ハハ、ありがとう。だが君たちが頑張っているのに、一人だけ楽す

るわけにはいかないさ」

「つたくよ……」

アツシュは呆れるしかなかった。

「それはそうと教官、地形変化というのは……」

「ああ。断言は出来ないが、端末か何かで床を切り替えるんだろう」

「前にやったやつか」

「正しい手順でやらないと、ずっと周り続けることになるんですよ」

「なんで嬉しそうに言うのよ……」

「だってそれは……♥?」

「離れなさい」

キリコとの距離をさりげなく縮めようとしたミュゼをユウナが押さえる。

「さて、そろそろ休憩も終わりだ——」

『お待ちください』

「え!？」

「この声は……」

「まさか……」

『はい、そのまさかです♪』

「ア、アルフィン殿下!？」

「なぜそこに……って聞くまでもありませんね」

「ごめんなさい。どうしてもエリゼに会いたくて……」

「お気になさらないでください。エリゼさんとも会えたんですよ?」

『はい。会えましたわ』

「では、皇太子殿下にも?」

『いいえ?』

「皇子はついでおよ」

『もう、姫様! 皆さんにお伝えすることがあるのでしよう!』

『あ、そうでした。実は——』

少し前——

「てめえ何しに来やがった!」

アインヘル小要塞エントランスでは一触即発の空気に満ちていた。

オペレーター室にはリインたちがいる階層の他に、エントランスの映像もリアルタイムに入るようになっていた。

たまたまランデイが目を通していると、エントランスにシャーリイが意気揚々と入って来た。

これを襲撃と読んだランデイはすぐさまエントランスに駆けつけ、得物を構えた。

また、トワはオペレーター室前の階段で導力銃を構えて身を潜めていた。

「何って、呼ばれたから来たんだよ？」

「嘘つけ！誰がお前なんかを呼ぶんだよ！」

「私と呼んだのだ」

「はあっ!？」

ランディは仰天した。

「は、博士!？」

「紅の戦鬼ならば十分にⅦ組の相手が務まる。後ろの狙撃手もな」

「ッ！ガレスも来てたか」

「はい。お久しぶりです」

「だがどういうつもりだ。ここはお前らみたいなのが来ていい所じゃ——」

「お言葉ですが若、これはG・シユミット博士からの正式な依頼です」

「そーそー！いくらランディ兄でも止められる謂れはないよ？」

「くっ！」

ガレスとシャーリイの言葉にランディは思わず歯ぎしりをした。

「それでさ、キリコたちと闘えば良いの？」

「そうだ。Ⅶ組の最終試験は紅の戦鬼、閃撃の撃破をもって終了とする」

「……我らが返り討ちにしても？」

「構わん。さらに、敗けた場合はそれまでの合格点を全て無効とする」

「そ、そんな……!？」

「これくらい乗り越えられんで呪いとやらに打ち勝てるのか？」

「そいつぁ……」

「お前たちはエレベーターで先に行け。オランダ、ハーシエル。お前たちも戻って……」

「「お待ちください」」

「?。」

「あ？」

「き、君たちは……」

エントランスに入って来たのは、本校生徒のエイダ・グラントとフリッツ・ガイトナーだった。

「その最終試験、私たちも加えてください！」

「実力不足は重々承知しています。ですが……！」

エイダとフリッツは揃って頭を下げた。

「ま、いーんじゃない？ 足さえ引っ張らなきゃ」

「……お嬢がそうおっしゃるなら」

「おいおい……」

「良からう。ならば行くがいい」

「は、博士!？」

「じゃ、行こうか」

「くれぐれも邪魔だけはするな」

「はっ！」

シャーリイたちはエレベーターに乗った。

「良いんすか、博士？ 可哀想だがあの二人が加わったところで……」

「多くのデータが取れるならば何も文句はない。たとえばかませ犬だろうとな」

「はあ……」

どこまでもマイペースなシュミット博士にトワは大きなため息をついた。

『ということがありまして』

「博士……」

クルトは頭を抱えた。

（まさかここで戦うとはな。リーヴスに来ていた時点で考えておくべきだったな）

「本校のお二人はともかく、赤い星座の副団長と連隊長ですか」

「何もこんな時じゃなくても……」

「超絶めんどくせえ……」

「さらに気合いを入れなければなりませんね」

「わかりました。わざわざありがとうございます」

『いえ。それとリインさん、この先の地形変化のフィールドは私とエリゼがサポートいたします』

「そうなんですか!？」

『は、はい！一生懸命サポートさせていただきます！』

「感謝する」

『はい。頑張ってください』

通信は切れた。

「ホントろくなことしないわね!!」

「思わぬ強敵の出現ですね」

「しかも負けたら全員不合格だあ？ナメやがって」

「こうなれば意地でも勝つしかないな」

「当たり前です!」

「とにかく」

リインが口を開く。

「最後の相手のことは一旦置いてくれ。俺たちはまだ完全に攻略したわけじゃない」

「あ」

「そうでした……」

「では改めて出発する。最後まで気を抜かないようにな」

『イエス・サー!』

新VII組は最後の攻略に向けて歩き出した。

## 最終試験②

「これって……」

新VII組の目の前には鉄柵で囲まれていた。

その先は、ブロック状の床が全てせり上がっていた。

『これより、アインヘル小要塞LV・X地形変化の試験を始めます』

「いよいよか」

「いつでもいけますー！」

「ここにあるコントロールドールパネルを操作すれば良いんでしょうか？」

『はい。なお、そこにありますコントロールドールパネルを起動した瞬間にタイマーが動き出します。制限時間内にクリアを目指してください』

「制限時間があんのか」

「試験ですから至極当然かと」

『では、スタートしてください』

「わかりました」

アルフィンの指示に従って、リインはコントロールドールパネルの解除ボタンを押した。

すると、鉄柵の一部といくつかの床が下がっていった。

『起動を確認しました。頑張ってください』

通信は途絶えた。

「よっしゃ、行こうぜ」

「焦らないで行くぞ。不合格にはなりたくないだろう？」

「もちろんです」

「参りましょう」

新VII組は最奥目指して歩き出した。

「キリコ side」

「……………」

「え、えつと……」



「ユ、ユウナさん……」

ユウナから不穏な気配を感じる。

エリゼとアルフィンのサポートの元、俺たちは順調に進んでいた。床の切り替えにより、変化したルートを踏破するために遠回りすることになったが、奥まで進むと、行き止まりだった。

アルティナとミュゼが壁を調べるとダクトの出入口を発見した。ダクトを潜り抜けて進めというアルフィン皇女の指示に、ユウナの機嫌は悪くなった。

思えばユウナとダクトは相性最悪だったな。

だがいつまでも留まってはられない。

「教官」

「わかってる。俺たちが先に入るから君たちたちは後から来てくれ。だがなるべく急いでな」

そういつてリイン教官がダクトに入り、俺、アツシユ、クルトが続いた。

「……………」

「ユ、ユウナ。気持ちはわかるがその殺気をしまつてくれないか？」

「クルトさんに一票です」

「同じく」

会話の距離からして、ユウナ、アルティナ、ミュゼか。

確かに妙な感じがするな。

何度か角を曲がり、ようやくダクトを出た。

「うーし、この調子で進むか」

「あつたり前よー」

ユウナの我慢も限界のようだ。

「その気持ち、あれにぶつける」

「え？」

俺が指さす方向から、道化師のような人形兵器がやって来た。

「あれは……」

「奇襲・暗殺用のバランシングクラウドですか」

「数は……三体か」

「上等じゃない！」

ユウナはガンブレイカーを構えた。

「あの時よりはるかに強くなってるってこと、思い知らせてあげるんだから！」

「そうだな……！」

「はい……！」

クルトは双剣を構え、アルティナはクラウⅡソラスを出した。

「当然、俺らもな」

「参りましょう、キリコさん。教官！」

アツシユとミュゼも得物を構える。

「行くぞ、キリコ」

「了解」

俺たちはバランシングクラウンと戦闘を開始した。

「キリコ side out」

「クロスブレイクⅡ！」

「テンペストエッジⅡ！」

「フラガラツハⅡ！」

「ムーランルージュⅡ！」

「ヴォイドブレイカーⅡ！」

ユウナたちはそれぞれのクラフト技を叩き込む。

「クリアブラストⅡ」

キリコのクラフト技がバランシングクラウンに炸裂した。

「秘技・裏疾風！」

疾風を進化させたリインの新たなクラフト技が止めとなった。

バランシングクラウンは機体に電流が走り、爆発した。

「やったか」

リインは肩で息をしつつ、納刀した。

「教官、今のは……」

「アリオスさんが使っていた……」

「風の剣聖アリオス・マクレインの最も得意とする剣技、裏疾風。よ

うやくその呼吸を掴めた」

「お見事です」

(最初に敵を連続で斬りつけ、止めに背後からの横風ぎの一閃。まともに食らえばタダでは済むまい)

キリコはリインの一連の動きを思い返した。

「で？ 剣聖とやらになれたのかよ？」

「いや。そもそも剣聖の位は老師か他の剣聖の立ち会いの元に決められる。上伝クラスくらいに成れば嬉しいんだけどな」

「ふふっ……いー」

ミュゼは陰で意味深に微笑んだ。

「さあ、行こう。最奥はまだ先だからな」

「油断せず進みましょう」

息を整えた新VII組は攻略を再開した。

「お見事です」

「さすがリインさんですね」

オペレーター室では先ほどの戦闘の様子を細かくチェックしていた。  
た。

「アリオスのおっさんの剣技か、またリインに差あつけられちまったな」

「そういう割には嬉しそうじゃねえか？」

「確かに、ランデイさん嬉しそうですね」

「ふふ……」

「……フム」

シュミット博士は顎に手をやり、思索していた。

「博士？」

「剣聖とやらに匹敵する力、興味深いな」

「また何か企んでるんすか？」

「なに、新プロジェクトに関することだ」

「新プロジェクト？」

「なるほど、新しい機甲兵についてのプロジェクトですか」

「新しい機甲兵!?!」

「そうだ」

シユミット博士はデータたちを見据えた。

「これまで小要塞でのデータに加え、キュービィーからもたらされた戦闘データを元に全く新しい機甲兵を造り出す」

「その名も《プロジェクト・テイルフィング》」

「テイルフィング……それが新しい機甲兵の名称ですか」

「その時は元弟子二号と弟子四号、手伝ってもらおうぞ」

「俺もですか?」

「あやつ亡き今、貴様以外誰がいる」

「……そうですね」

（あやつ……?）

（誰のことでしょう?）

「ぼやぼやするな。まだ最終試験は終わっておらん」

「は、はいっ!」

エリゼとアルフィンはモニターに集中した。

「博士……」

「皇女様にも容赦ねえな……」

トワとランディは呆れかえった。

「これは……?」

L.V. X 攻略中、キリコは人形のようなものを宝箱の中から入手した。

「これって、身代わりパペット?」

「持っている、甚大なダメージを受けた際に破壊され、文字通り身代わりになってくれるアクセサリだな」

「ならこいつは……」

「あん? てめえが持つてろよ」

アッシュが待ったをかける。

「なに?」

「現在、わたしたちⅦ組で最も負傷率が高いのはキリコさんです」

「よくよく見ると、キリコは強化系アクセサリは着けているが、防御系アクセサリは着けていないからな」

「……………」

「こういうのは理屈じゃなくて、一発逆転を狙えるんですから着けていた方が絶対良いですよ」

ミュゼはキリコに力説する。

「……………わかった」

キリコは懐に身代わりパペットを入れた。

「改めて先に進もう。そろそろ何かあってもおかしくない」

「教官」

キリコはリインに話しかけた。

「どうした?」

「さっそく何かあるようです」

キリコは通路の先を指さした。

「なんだこりや?」

新Ⅶ組は道が左右に分かれた場所にたどり着いた。

「片方はそのままコントロールパネルに行けるけど…………」

「もう片方はシャッターで閉じられていますね」

「段階を踏んで解除する仕組みなのは分かるんだが…………」

「…………あの博士がただ設置するはずがない」

「だよな」

新Ⅶ組は怪訝な表情を浮かべる。

(かなり疑っているな。もしかしてこれが狙いか…………?)

リインは頬を掻きながらそう思った。

「…………罫が開かない。シャッター付近で待機してくれ」

キリコは一歩前に出た。

「だ、大丈夫なの?」

「止まっただけでも進めない。ユウナとミュゼは備えていてくれ」

「わかった。ガンナーモードにしておくね」

「いつでも撃てるようにしておきます」

ユウナとミュゼは不測の事態に備えられるよう準備した。

「……よし」

キリコはコントロールパネルに近づき、起動させる。

「……………」

キリコは慎重に操作し、解除した。

その瞬間――

「ッ!？」

キリコの頭上から柱状の光が降り注ぐ。

光を浴びたキリコはいきなりうつ伏せになった。

「なんだ!？」

「おい!？」

「来るなっ!？」

キリコは吼えた。

『それは研究中の重力波装置だ』

シュミット博士の声が響く。

「重力波装置……?」

『現在、キュービイーに普段我々が受けている倍の重力の波を流している。理解出来るとは思っていないから詳細は省くが、キュービイーは体感的に自身の体重の二倍の負荷をかけられている』

「に、二倍……!？」

『さっさと逆側の装置で解除せんと、重力波は通路全体を覆う。貴様らもキュービイーと同じようにじきに指一本動かせなくなる』

『ちよ、ちよつと博士!?!』

「急げ!？」

「はいっ!？」

ユウナたちは急いでコントロールパネルに駆け寄る。

だが――

「うぐっ!？」

「なんだこりゃ!?!」

クルトとアツシユは重力波を浴びてしまい、うつ伏せになった。

「か、体が……」

「ピクリとも動きません……!」

ユウナとミュゼも四つんばいになった。

「くっ!こうなったら……」

「任せてください、教官」

鬼気解放を行おうとしたリインを留め、アルティナはクラウドⅡソラスを出した。

「ふうんっ!」

アルティナはクラウドⅡソラスを操作し、ユウナたちの真上に障壁を張る。

「これは!」

「い、今です!」

「わかった!」

クルトがコントロールドパネルに駆け寄り、重力波を止めた。

「成功……してみたいですね……」

アルティナはフラフラと座りこむ。

「アル!大丈夫!」

「はい……少し休めば」

「上手くいったようだな」

反対側からキリコが歩いて来た。

「キリコさん!」

「お疲れ。大丈夫だったか?」

「ええ」

「あのジジイ、フザけた真似しやがって」

「ホントよ!アルがいなかったらどうなってたか!」

「……それも計算の内だとしたら?」

思案していたミュゼが顔を上げた。

「計算の内……?」

「アルティナがやった方法が乗り越えられる唯一の正解、そういうことか」

「おそらくは。あのまま教官が焦って出ていけば、全員捕まっていたと思われれます」

「確かに俺にも焦りがあったことは事実だからな。ありがとう、アルティナ」

「いえ。それより、休息も十分です。後は進むだけでしよう」

「大丈夫なの？」

「無理すんなよ」

「大丈夫です。皆さんがいますから」

アルティナは微笑んだ。

「アルティナさん……」

「……念のため、後方にいろ」

「はい。ありがとうございます」

「では、行きましようか」

「ああ。行くぞ、みんな」

『イエス・サー！』

L.V. X攻略も終盤を迎えた。

「はあ〜っ！」

気を張っていたマカロフは脱力した。

「だ、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。博士、あんなもんどつから持ってきたんです？」

「黒の工房でだ」

「ええっ!？」

「やはりですか……」

驚くエリゼを横に、テイオは納得した。

「もしかして、今巷で噂になっている蒼い災厄というのは……」

「フン、そんな名前に興味はないが、確かにフェンリールは私が設計した」

「やっぱり……」

「キリコ君も疑ってましたし……」

「でもよ、何で黒の工房はフェンリールをブツ壊しに来ねえんだ？」

「そもそも、あれだけの機体をどうやってバレないように造ることが出来たんですか？」



「知らん。大方、道化師が絡んでいるのだろう」

「カンパネルラさんですか……」

「ティータさんはご存知でしたね」

「はい。原理はわからないんですが、色々と不思議な技を使う人です」

「もしかすると、特定の人物だけに認識させないようにしたのかも  
しれません」

「んなバカなっ言いてえが、奴らの実力を見ちまうとなあ……」  
ランディはため息をついた。

「でも、認識というなら、ヴィータさんの方が得意分野では？」

「あのお姉さんは結社抜けたんだろ？」

「雑談はそこまでにしろ。Ⅶ組はそろそろ最奥に到達する」  
シュミット博士が場の空気を引き締める。

「っ！いいいよですね」

「ここでリインさんたちの評価が決まるということですね」

「ここが正念場です」

「頑張れよ、リイン。Ⅶ組も」

オペレーター室に一気に緊張が走る。

「やつと着いた……」

「ここが最後の休憩場所か……」

「ちつと休もうぜ……」

「さすがに大型魔獣の三連戦は堪えます……」

新Ⅶ組は最上回復装置を囲むように座った。

「みんなお疲れ。ここまでよく頑張ったな」

「後は、この先で待つ方々を倒すだけですな」

「簡単に言うけどよ、一筋縄じゃいかねえだろ」

「赤い星座の副団長と連隊長、格上なのは言うまでもない」

「エイダとフリッツ君も侮れないもんね」

「……どちらも倒せばいい」

キリコは口を開いた。

「キリコ……？」

「俺たちは赤い星座にも本校にも借りがある。その両方を返すチャンスだ」

『あ……！』

ユウナたちはキリコの言葉を飲み込んだ。

「そっか……そうよね！」

「確かに、サザーラントでの借りを返すにはまたとないチャンスかもしれないな」

「分校と帝都での一件に決着をつける必要がありますね」

「こりやますます負けるわけにゃいかねえな！」

「ふふ、リベンジと参りましょう……！」

ユウナたちの土気に火がついた。

「よし！Ⅶ組特務科、行くぞ！」

『おおっ！』

新Ⅶ組は最奥へと足を踏み入れた。

「待ってたよ」

最奥に足を踏み入れた新Ⅶ組を、シャーリイは笑顔で迎えた。

「タイムもまずまず。どうやら不合格にはなりそうもありませんな」

ガレスは懐に懐中時計をしまった。

「それはどうも……」

「ここまで来るのにだいぶ苦労されたみたいですね」

「佇まいでわかる。L.V. Xとやらの内容の凄まじさを」

エイダとフリッツは新Ⅶ組に対し、笑みを浮かべる。

「ま、そんなのはどうでもいいんだけどね」

シャーリイはテスタ・ロツサを取り出す。

「紅の戦鬼の得物……！」

「相変わらず凶暴そうな造りですね」

「あはは。褒め言葉として受け取っておくよ。それよりさ……」  
「？」

「この勝負にあたしが勝ったら……」

「……勝ったら?」

「新VII組は身構えた。」

「キリコちよーだい♪」

シャーリイは満面の笑みを浮かべた。

「「……は?」」

「はあく〜っ!」

ユウナたちは呆然とし、ミュゼはあり得ないものを見たような表情を浮かべた。

「な、な、何を言ってるんですか!」

「だってキリコなら直ぐにでも部隊長にはなれるくらいの実力持ってるんだよ?その気になれば連隊長にも特殊部隊の総隊長にもね」

「ずいぶんキリコさんを買っているんですね」

「そりやそうだよ。それにね……♥?」

シャーリイは頬に手をやりながらキリコを見つめる。

「こっちが本音みたいだな……」

（キリコ君ってモテるよね）

（教官のように不埒なことをすることはありませんし）

（オンナの方から寄って来んだもんな）

ユウナたちは声を落としました。

「そ、そんなこと認められるわけないでしょう!」

「ん〜?なんでカイエン公が出て来るのさ?」

「爵位は関係ありません!だいたい貴女は二度も断られているでしょう!」

「欲しいものがあつたら力を示すのが獵兵の流儀だもん。それにあたし、キリコが好きだもん」

「ふぬぬ……!」

ミュゼはシャーリイを睨む。

「悔しければ勝ってみればあ?」

「キリコさんを貴女などに渡しません！」  
ミュゼとシャーリーの間に火花が飛んだ。

「……………」

当のキリコは目を閉じ、二人のやり取りを無視していた。

「…………お嬢、その辺りで」

見かねたガレスがシャーリーを止める。

「ゴ、ゴホン……………」

「……………」

エイダは顔を赤らめ、フリッツは顔をしかめる。

「ミュ、ミュゼも落ち着いて。どっちみちここで負けたら終わりなんだから」

「私たちの最終目的は試験の合格です。戦闘そのものではないはず  
です」

「……………そうですね」

ミュゼは平静さを取り戻した。

「なら、始めようか」

「とりま、勝てば良いんだしな」

「へえ？」

「ふむ……………」

シャーリーとガレスに闘気が宿る。

「お二人には及びませんが」

「舐めてもらっては困る……………」

エイダとフリッツは得物を構える。

「舐めてなどいない」

クルトは双剣を構える。

「勝つのは俺らだ」

アツシユはヴァリアブルアクスを肩にかける。

「これから戦わなくちゃいけないもののために」

ユウナはガンブレイカーの銃口を向ける。

「この世界に終焉をもたらさないために」

ミュゼは魔導騎銃の銃身を撫でる。

「わたしたちは負けません」

アルティナはクラウⅡソラスを出した。

「勝たせてもらう」

キリコはアーマーマグナムに弾丸を籠める。

「行くぞ、トールズ第二分校Ⅶ組特務科！この戦いを制して合格点を掴むぞ！」

『イエス・サー!!』

戦闘が始まった。

「くらいなさいっ」

エイダのアサルトライフルが火を噴いた。

「ジエミニブラストⅡ！」

ユウナも負けずに応戦する。

「ブリューナクⅡ、照射！」

横からアルティナのクラフト技が放たれる。

「まだですっ！」

エイダはクラフト技を射線から離れる。

「さすがですね」

「負けられない。行くわよ、アル！」

「はい！」

「ぬうっ！」

フリッツはサーベルを振り下ろす。

「はっ！」

クラフトは双剣で受け止める。

「クルトっ！」

「おおっ！」

クルトがサーベルを弾き、姿勢を低くした。それに合わせてアツシユが大鎌で薙ぐ。

「くっ！」

フリッツはバックステップで回避した。

「やるな！」

「当たり前だ。お前たちに勝つために修練を重ねてきたのだからな！」

「面白え、来いや！」

「マードーストレイフ！」

「無月一刀！」

シャーリイとリインのクラフト技がぶつかり合う。

「オワゾーブブルーII！」

リインの後ろからミュゼのクラフト技が放たれた。

「リードスナイプ」

「……………」

一方でキリコとガレスは射撃戦を演じていた。

（さすがに向こうが上か）

（以前は近く中距離を得意としていたが、長距離狙撃を扱えるようになっていたとはな）

「へえく？ガレスに合わせられるなんてやるじゃん」

（まだ習得して間もないだろうに、器用に使いこなしている。デユバリイさんたちの言うように、剣術を教えればそれなりの使い手になれるかもな）

「教官！来てます！」

「ツ！ああ！」

リインは根源たる虚無の剣でテスト・ロツサの刃を受け止める。

「ハンティングスロー」

一瞬の隙を突いて、キリコが投げナイフを投げる。

「！」

ガレスが立ちはだかり、狙撃銃で防ぐ。

「戦術リンクか……………」

「当然だ」

「ならば、ムーランルージュII！」

ミュゼのクラフト技がガレスに襲いかかる。

「ぐっ！」

ダメージを受けたガレスは一旦下がる。

「ブラッディクロス！」

今度はシャーリーのクラフト技がリインに放たれた。

「くううっ！」

リインは根源たる虚無の剣で防ぐも、後方へと押しやられた。

「フフ、行くよ！」

シャーリーはテスタ・ロツサを手にキリコに襲いかかる。

「クリアブラストII」

キリコはサブマシンガンで応戦する。

「おっと！」

シャーリーはギリギリで回避し、ガレスの隣に戻る。

「そっちは？」

「問題ありません」

「ならガンガン行くよ！」

「御意！」

シャーリーとガレスは闘志を燃やす。

「こちらも行くぞ！」

「はい！」

「了解」

「ソードダンス！」

クルトはクラフト技で自身を活性化させる。

「おらあ！」

アッシュはフリッツにヴァリアブルアクスを振り下ろす。

「ぐっ！まだだっ！」

フリッツはサーベルで受け流した。

「チッ！やるじゃねえか！」

「ならこれはどうだ！業刃乱舞！」

アッシュと入れ代わったクルトが連撃を仕掛ける。

「なんのっ！」

フリッツは双剣の連撃を食い止めた。

「これも防ぐか」

「当然だ！殿下の剣たるこの俺が負けていられるか！」

「そうか、君も殿下の剣たらんとしていいのか……」

「そうだ！さも当然と言わんばかりに殿下の側に立っていたお前ではなくだ！」

「それについては反論は出来ない。だが！」

クルトの目は決意に満ちていた。

「僕はもう迷わない！この先何が待っていようと殿下の、アルノールの剣であり続ける！」

クルトは双剣を構える。

「受けよ。獅子心皇帝以来、アルノール家を支え続けたヴァンダールの剣を！」

「我が全霊の以て、降魔の一撃を成す！光よ、滅せよ！こおおおっ！  
奥義・天眼無双!!」

クルトの決意を乗せたヴァンダール流双剣術の奥義がフリッツに叩き込まれる。

「ぎ、さすがだ……ヴァン……ダール…………！」

フリッツはクルトの剣技を称賛しながら気絶した。

「くらいなさいっ！」

エイダはユウナめがけて発砲した。

「クラウⅡソラス！」

クラウⅡソラスの障壁が銃弾を阻んだ。

「ブレイブスマッシュⅡ！」

「きゃあっ！」

ユウナのクラフト技がエイダを吹っ飛ばす。

「はあ……はあ……はあ…………！」

ユウナは肩で息をするほど消耗していた。



「と、とにかく教官たちと……」

「ユウナさん！」

「え——」

一瞬の隙を突かれて、ユウナはエイダの攻撃を受けた。

「く……うう……！」

ユウナのガードは間に合ったが、ダメージは決して低くなかった。

「回復します。ティア！」

アルティナはユウナに回復アーツをかける。

「あ、ありがとうアル……」

「大事なようでも何よりです。それよりも……」

「ええっ！」

ユウナは気を引き締めた。

「ふう……ふう……ふう……！」

エイダは肩で息を切らせていた。

「……………」

ユウナは息を整え、エイダを見つめる。

「あたし、負けられない」

「！」

「初めて会った時にあんなこと言われて、すっごく悔しかった。あの日以来かな、エイダに負けたくないって」

「……それは私もです」

エイダは眼鏡のブリッジを上げた。

「過去の歴史を鑑みて、属州となったクロスベル出身のユウナさんに後れを取るわけには参りませんもの」

「言ってくれるじゃない」

「フフ……」

ユウナとエイダは笑みを浮かべる。

「なら、行くわよ！」

ユウナはガンブレイカーを構えた。

「さあ、行くわよ！エネルギー充填！シユート！まだまだあつ！G

「O! ヴァリアントチャージ!!」

ユウナのSクラフトがエイダに炸裂した。

「フフ……参りました……………」

エイダは笑みを浮かべつつ、気を失った。

「はあっ!」

「くっ!」

シャーリーのテスタ・ロツサをキリコはギリギリでかわした。

「アーマーブレイクII」

振り向きざまにアーマーマグナムの引き金を引いた。

「おっと! これくらい!」

「ペンタウアショット!」

間髪入れずに、ミュゼがクラフト技を放つ。

「チッ!」

シャーリーは後方に下がる。

「お嬢! ならば!」

「させるか! 鬼気解放!」

リインは鬼の力を解放した。

「極・無月一刀!」

黒い焰を纏った根源たる虚無の剣でガレスに斬りつける。

「ぐうっ! ま、まだだ……………」

ガレスはダメージを負いつつ引き金を引く。

「遅い!」

リインは銃口の角度から弾丸の軌道を見抜き、射線ギリギリでかわした。

「秘技・鬼疾風!」

荒々しい斬撃がガレスに炸裂した。

「ぐっ……………申し訳ない、団長……………」

ガレスは膝をついた。

「後はお前だけだ……」

キリコはシャーリイにアーマーマグナムの銃口を向ける。

「一対七……ちよつとピンチかな」

「悪いが加減は出来ない」

「わかってる……だからさ」

「っ！」

キリコはシャーリイから発せられた殺気に隙を見せてしまった。

「遠慮なくイカせてあげるっ！」

「下が——」

「もう遅いよ！ディザスター・オブ・マハ!!」

シャーリイの放ったSクラフトで、新VII組は甚大なダメージを受けた。

「ぐ……っ！」

「そ、そんな……」

「こんな、ところで……」

「限界です……」

「ク、クソが……！」

リイン、ユウナ、クルト、アルティナ、アツシユは膝をついた。

「うう……」

ミュゼはボロボロになった魔導騎銃を支えに片膝をついていた。

「はあ……はあ……！」

大技を放ったシャーリイもその反動で疲労がピークに達した。

「こ、これ……で……!?!」

シャーリイは目を見開いた。

そこには、Sクラフトを受けたはずが両足で立っているキリコがいた。

「……………」

キリコの懐から何かの破片がこぼれ落ちる。

「ハハ……………」

シャーリイは力なく笑う。

「……………」

キリコはシャーリイとの距離を一気に詰める。

「……負けちゃった……」

「！」

キリコは大型ナイフの柄頭をシャーリイの首筋に叩きつけた。シャーリイは意識を手放し、ゆっくりと倒れた。

(済まない。助かった……)

キリコもゆっくりと崩れ落ちた。

『キリコ(君)(さん)！』

僅かながら回復した新VII組はキリコの元へと駆け寄る。

「……」

キリコは肩で息をしながらゆっくりと立ち上がった。

「大丈夫か!？」

「……こいつのおかげで助かった」

キリコは懐から破片を取り出す。

「これって身代わりパペットの?」

「そのようだ」

「やっぱ持つてて良かったろ?」

「ああ」

キリコはミュゼの方を向く。

「お前の進言のおかげで助かった」

「キリコさん……」

「礼を言う」

「い、いえそんなお礼なんて……キリコさんご無事だっただけでも本当に良かったです……!」

ミュゼ心から安堵した。

「フフ……」

「今回は俺たちの完敗だ」

エイダとフリッツが握手を求め。

「ありがとう。僕たちこそ、強くなれた」

「これからもよろしくね」

「いつでも来な」

「今度は武器は無しということだ」

「エイダさんも素質がありそうですね」

「そ、素質？」

エイダは頭にハテナを浮かべた。

「いずれな」

「わかった」

フリッツはキリコと固い握手を交わした。

(はは……時は移ろつてもツールズはツールズ、か)

リインは満足げに微笑んだ。

「……で、そちらは？」

アルティナはシャーリイたちに声をかける。

「あゝ、負けた。せつかくキリコをお婿さんにしようと思つてた

のにさ」

シャーリイは大の字に寝転がっていた。

「まだそんな世迷い言を……」

「まあまあ。それであなたたちはどうするんですか？」

「とりあえず帝国周辺で仕事になるかな。キリコの言う呪いの根源つて奴もわかんないし」

「そう言えばシャーリイさんはキリコとノーザンブリアで会ったんですね」

「D::G教団とか言う薄っ気味悪い連中のロッジをブツ潰したつて聞いたぜ」

「厳密にはブツ潰したのはマリアベルお嬢さんだけだね」

「あのパツキンドリル女か」

「……いくら敵とはいえ、その言い方はどうなんだ？」

「ま、とりあえず今ところは出てこないでしょ。それじゃ、そろそろ行くね」

「失礼する」

シャーリイとガレスは去って行った。

「私たちも失礼します」

「また会おう」

エイダとフリッツも続いた。

「そう言えば教官。この戦いは俺たちの勝ち、それで良いんですね？」

「ああ、それは——」

リインはここで言葉を止める。

『ああっ!?!』

新VII組の声が重なった。

「そっか！試験！」

「そうだった。忘れていたな……」

「それだけ集中していたということなんでしょうが……」

「おいジジイ！どうなってんだ！」

『落ち着け。今から合否を発表する』

シュミット博士の声がため息とともに響く。

『今回の攻略、結果としては上出来と言えるだろう。また、何名かに与えた課題もクリア出来ていた。よってVII組全員合格とする』

「や、やったあああっ！」

「ああ。やった！」

「全員無事クリアですね」

「おっしやー！」

「やりましたね」

「ああ」

新VII組は差異はあれど、喜びを露にした。

『これにてLV・Xを終了とする。とつとに戻って来い』

シュミット博士はそれだけ言っつて、通信は切れた。

「よし。それじゃ戻るぞ」

『イエス・サーー!』

新VII組はエレベーターに乗り込むべく、歩き出した。

「兄様っ！」

「エリゼ——！」

エントランスに戻ってきた新Ⅶ組はオペレーター室からエリゼたちが出てくるのを目にした。

その中でリインの姿を見たエリゼは涙目になり、リインに駆け寄った。

「ああ、よくぞご無事で……！わたし……ううっ……わたし…………！」

「エリゼ……良かった……少し痩せたみたいだな。済まない、心配ばかりかけて。この髪や、目のことも」

「ぐすっ。関係ありません……！兄様がどんな風になろうと……！兄様は戻ってきてくださいました……！こうして私のもとに来て……抱きしめてくれました……！それだけで、私は……！」

「……ありがとう。俺の方だって同じだ。本当に……本当に良かった」

リインはエリゼを力強く抱きしめた。

「ふふっ……」

「ぐすっ……良かったね、エリゼさん」

「はい……」

ミュゼたちはシュバルツァー兄妹の再会に安堵した。

「クルトさん、本当にお疲れ様でした」

「いえ。殿下こそ、よろしいのですか？」

「ふふ、今日のところはエリゼに譲らなきや」

アルフィン皇女は優しく見守る。

「キリコさんとアッシュユさんもご苦労様でした」

「ああ」

「ようやく帰れそうだな」

「その前に、ささやかながら懇親会があるみたいだよ」

「懇親……？本校と分校ですか？」

「ああ。わざわざ準備してみたんだぜ」

「リインさんたちが不合格だった場合、どうなってたんでしょう？」

「そりゃあ、がんばりましょう会になってたんじゃね？」  
「……………」

ランディの軽口にキリコは思わず呆れた。

(ここでの研究は完了——もうひとつの方も大詰めか)  
(……心置き無くアレの見届けに取りかかれそうだな)  
シユミット博士はどこか遠くを見つめる。

「とにかく、みんな学生食堂に集まってほしいって」  
「わかりました」

リインは全員を引き連れ、学生食堂へと向かった。

学生食堂はさながら立食パーティーのようだった。

本校食堂の料理人ラムゼイに学生食堂の店員ジーナやルセットの店主リーザも加わり、新VII組を出迎えた。

ユウナたちが本校生徒たちと親交を暖めている中、キリコは一人屋上で景色を眺めていた。

「……………」

「こちらにいらしたんですね」

「……ミユゼか」

「はい」

ミユゼはキリコの隣に立った。

「懇親会とやらには行かないのか？」

「ちよつと疲れちゃいまして」

「そうか……」

キリコは視線を変えずに言った。

「キリコさん……」

「ん？」

「やっぱり……辞めてしまわれるんですか……？」

「もう決めたことだ」

「そうですか……」

ミユゼは目を伏せる。

「黄昏の呪いを解くだけではダメなんですか……？」



「呪いを解いたとしても、そこで終わりじゃないだろう。帝国内に留まらず、周辺諸国からもやつかみを受けるのは目に見えてる」

「特にカルバード共和国からは顕著だろうな」

「……………」

「そもそも俺自身は呪いに突き動かされているわけじゃない。全て自分で決めた上でのことだ」

「……………」

「……………」

「それならキリコさんは……………全てが終わった後は、いったいどうなさるんです……………」

「エレボニア帝国とクロスベル自治州から永久に去る」

「っ!!」

ミュゼの体が一瞬震える。

「幸い、俺の生存を知る人間は限られている。口さえつぐんでおけば事実が表沙汰になるのは防げる。少なくとも分校には及ばないだろう」

「分校に……………そうですね」

「なら、俺に出来ることは一つだ」

「それで、良いんですか……………」

「それがこの世界の平穏につながるならな。異物でしかない俺に出来る、精一杯の償いだ」

「そう……………ですか」

ミュゼは顔を上げた。

「良かったです。キリコさんのお心が聞けて」

ミュゼは精一杯笑顔を作った。

「先に……………行っています」

ミュゼは涙をこらえ、立ち去った。

「……………」

キリコは振り返らなかつた。

「……………何を一人でたそがれているんだい」

「お前は……………」

キリコが振り向くと、そこにはセドリツクが立っていた。

「……少し顔を貸してくれないか」

「……………」

キリコは黙ってセドリツクについて行った。

## 意地

キリコはセドリックと共に、ガラ湖周遊道から外れた場所にやって来た。

「ここは？」

「先日、偶然見つけてね。ここなら話が出来そうだしね」

セドリックはキリコの前に立った。

「先ほどの話、悪いけど聞かせてもらったよ」

「そうか」

「ずいぶんと冷たいじゃないか。ミルディーヌさん、涙を堪えていたんじゃないか？」

「……………」

「確かに、君の言うとおり口をつぐんでおけば分校が消滅することはないだろう。最初から無関係だと主張すれば済む話だ」

「そうだ」

「……………本気で言ってるのかい？」

「ああ」

「君一人だけが自由になり、残される者に十字架を背負えと言うのか？」

「……………」

キリコは表情を変えなかった。

「……………なら仕方ない」

セドリックは腰のサーベルとARCUSⅡを外し、地面に捨てた。

「武器はいいのか？」

「ここにあるじゃないか」

セドリックは指を鳴らした。

「……………」

キリコも所持していた武器とARCUSⅡを外し、地面に捨てた。

「互いにハンデはなくなった。キリコ、最後の勝負といこう」

「わかった……………」

キリコとセドリックは互いに構えた。

「……………」

「……………」

「暫し、睨み合った。」

その時、近くで魚が跳ねたような水音が鳴った。

「つ!!」

二人は同時に動いた。

「まだ見つからないのか?」

一方、第Ⅱ分校校舎では、リインたちと本校Ⅰ組がキリコとセドリックを探し回っていた。

「本当にドコ行っちゃったんだろ?」

「懇親会が終わって間もないですから、そう遠くへは行っていないはずです」

「いくつか心当たりがある場所には行ったが、こうも見つからないとは…………」

「屋上、校庭、練武場。どこも空振りだったわ」

「二応、アインヘル小要塞にも行って見たが、防犯カメラには映っていないかったな」

「新Ⅶ組も本校Ⅰ組もお手上げと言った具合だった。」

「全くもう…………!」

アルフィンが腕を組んで怒りを露にした。

「ひ、姫様…………」

「セドリックの心根はわかってるわ。キリコさんと決着を着けるつもりなのよ」

「キリコと、ですか…………?」

「ええ。聞けば、セドリックはキリコさんとの勝負が着く瞬間に転移させられたそうですね。それをギャラリーに見られるのはイヤだとか言ってる、どこか人目のつかない場所に連れて行ったに決まっています!」

「ま、まあまあ…………」

リインはヒートアップするアルフィンを宥める。

「となると、分校の外でしようか……」

「探索範囲も滅茶苦茶広くなるぜ」

「とにかく、探し出すしかありません。アルティナさん、手伝ってくださいますか?」

「分かりました、プラトール主任」

ティオは魔導杖を掲げ、アルティナはクラウドⅡソラスを出した。

「起動。エイオンシステム、アクセス」

「クラウドⅡソラス。探索モード、ON」

ティオとアルティナは青い光に包まれる。

「いつ見てもすごいな」

「ま、ティオすけに探せないものはねえからな」

「殿下にキリコ君、無事だと良いけれど……」

トワは固唾をのんで見守る。

「……………」

「……………」

やがて青い光は消えた。

「……反応がありました」

「どうやら、ガラ湖周遊道付近のようです」

「周遊道付近……」

「では参りましょう——」

「待ってください」

アルティナが待ったをかけた。

「どうしたの?」

「少々、マズイかもしれません」

「マズイ?」

「何か来てんのか?」

「東側から、TMPの車両が向かっているみたいです」

「TMPが……」

「一応、俺らは追われてる身だしなあ……」

「急ぎましょう」

ラインたちはガラ湖周遊道方面に向かおうとした。

「お待ちください」

エイダが止めた。

「エイダ？」

「TMPでしたら、私どもが止めておきます」

「皆さんは早く行ってください」

「フリッツ……」

「良いのか？」

「無論です」

「また、どこかで」

エイダとフリッツは本校I組生徒全員を引き連れ、急行した。

「教官、僕たちも」

「ゼシカたちも行くんでしょ？」

「申し訳ありませんが私たちがここまでです」

ゼシカとウエインは立ち止まった。

「え!?! どうして!?!」

「今は理由は明かせませんが、必ずまたお会いできます」

「ウエイン……」

「……わかった。何かあてがあるんだろう。それまで無事でいてく

れよな」

ランディは笑みを浮かべた。

「ありがとうございます」

「さあ、行ってください」

「わかった。行こう！」

リンたちはゼシカとウエインと別れ、ポイントへと向かった。

「はあっ！」

「っ！」

セドリックとキリコは素手で殴り合っていた。

セドリックの右ストレートがキリコの顔面を捉えれば、キリコの右フックがセドリックの脇腹を打ち抜く。

「まだまだあっ！」

セドリツクは左の拳でフェイントを入れ、右のローキックを放つ。

「甘い……!」

キリコはローキックを足でガードし、セドリツクの頭を掴み、腹部に膝蹴りを入れた。

「うぐっ!」

セドリツクの動きが止まる。

「っ!」

さらにキリコは右のミドルキックを叩き込む。

「ぐっ!」

セドリツクはガードしたものの、横に転がった。

「……………」

キリコは呼吸をしながらも、構えを解かなかった。

「ははは……………」

セドリツクはゆっくりと立ち上がった。

「喧嘩も馴れているみたいだね……………」

「お前とは違うからな」

「そう……………かいっ!」

セドリツクはキリコにタツクルを仕掛ける。

「!」

キリコはタツクルに捕まり、背中を木の幹にぶち当てた。

「くっ……………」

「お返しだっ!」

セドリツクはキリコの胸部に膝蹴りを入れ、さらにキリコの顔面にヘッドバットを叩き込んだ。

「っ!」

キリコの体勢が低くなった。

「うおおおっ!」

セドリツクはさらに肘打ちを当てる。

「調子に、乗るな……………」

キリコはセドリツクの右腕を掴み、一本背負いで投げた。

「なっ!」

セドリツクは受け身を取り、立ち上がろうとした。

「！」

立ち上がろうとした時、キリコのローキックがセドリツクの背中を捉えた。

「がつー！」

セドリツクは前に倒れこんだ。

「……………」

キリコは倒れたセドリツクを掴み、立ち上がらせた。

そして右ストレートを打った。

「つー！」

セドリツクは直撃するギリギリでかわした。

「ああつー！」

セドリツクはキリコにボディブローを叩き込んだ。

「つー！」

キリコは腹筋に力を入れ、防いだ。

そして即座に左右一発ずつパンチを入れた。

「くっ……………」

セドリツクはかろうじて耐えた。

「このつー！」

セドリツクは地面を蹴りあげる。

「つー！」

キリコは反射的にガードした。

「もらったー！」

セドリツクは縦拳のアップパーパンチを放った。

ガードをすり抜けるような拳はキリコの顎にヒットした。

「くっつー！」

キリコは顎を跳ね上げられ、二、三步下がった。

「うおおつー！」

セドリツクはなおもキリコに殴りかかる。

「……………甘いな」

キリコは左の裏拳でセドリツクの顔面を跳ね上げる。



「ぐふっ!？」

今度はセドリツクが二、三步下がった。

「ふー、頑張るねえ……」

二人の勝負を空中から見ている者がいた。

「灰のお兄さんたちが早く来ても興醒めだし、少しだけ……」

見ている者——カンパネルラはフィンガースナップを鳴らした。

キリコとセドリツクの周りを結界が包んだが、二人には見えていないようだった。

「これでよしつと」

カンパネルラは続きを見ずにどこかへと転移して行った。

「……なんでだ」

「?」

「なんで……仲間を必要としない?」

セドリツクは肩で息をしながら、顔を上げた。

「君にとつて……Ⅶ組は……彼らは……大切だったんじゃないかな  
かったのかい……?」

「だからこそだ」

「違うね……君は……彼らを何とも……思っちゃいない……!」

「違う」

「そうだ……否定してみせろ!」

セドリツクは呼吸を整えた。

「セドリツク……」

「仲間を思う気持ちがあるなら……どうして応えようと思わないんだ  
!」

「十分応えているつもりだ」

「だったら……ミルディーヌさんの気持ちも考えてやれよっ!」

「……っ!」

キリコは僅かながら目を見開いた。

「彼女を見ていれば多少なりとも分かるさ。彼女がキリコ、君のこ

とを大切に想っているってのが……君を好きだっということが解らないのかっ!？」

「ミュゼか……だからなんだ？」

「キリコ……!」

「まだ勝負は終わってない。言いたいことがあるなら……」

キリコは構えた。

「くっ……キリコオオオッ!」

セドリックはキリコにぶつかって行った。

(ミュゼの、あいつの気持ちは気づいていた。だが俺には応えられない)  
そうにない)

(戦いから逃れられず、一時の安息も許されない俺にはな)

キリコはセドリックに向かって行った。

「どうだ、みんな!」

「周遊道はほぼ全て回りましたが、見つかりませんでした」

「ミルサンテの方にも行ってみましたが、見た人はいませんでした」

「となると後は林の中か」

リインたちは林の方を見た。

「テイオ先輩、お願いします」

「アルティナさん……!」

「お任せください」

「始めます」

テイオとアルティナは再びサーチを始めた。

「うおおおっ!」

「っ!」

一方、キリコとセドリックの勝負は激しさを増していた。

互いの顔に痣を作り、両手は腫れ、衣服は血と埃で汚れていた。

「っ!」

キリコの右ストレートが顔面を捉えた。

「がふっ!」

セドリックはよろよろと後ろに下がる。

「何をっ！」

セドリックも負けじと右のミドルキックを放つ。

「っ！」

キリコはミドルキックを受け止める。

「かかった！」

セドリックは左足でキリコの腹を蹴りあげる。

「ぐっ！」

キリコはたたたらを踏んだ。

「来いよ、キリコっ!!」

「!!」

二人を中心に打撃の鈍い音が響く。

だが張られた結界のせい、二人の勝負は魔獣さえも気づかなかつた。

故に二人は互いしか見えなかった。

「キリコ side」

「このっ……!!」

セドリックは俺の右足にしがみついてきた。

「くっ!!」

俺はバランスを崩してしまった。

普段ならこの程度でバランスを崩したりはしないが、やはり小要塞攻略の疲労が影響しているようだ。

「もらった！」

「！」

セドリックは馬乗りになり、顔面目掛けてマウントパンチを放ってきた。

ガードしようとしたが、二の腕にまで乗っているので動かせない。

「ぐぐっ……!!」

いくらセドリックが俺より体格が劣るとはいえ、パンチまで軽いというわけじゃない。

上から矢継ぎ早に繰り出されるマウントパンチに意識が削られていくのがわかる。

「調子に……乗るなっ!」

俺はセドリツクのパンチが下がった瞬間を狙い、一気に起き上がる。

「なっ!」

セドリツクは思わずのけ反った。

そこを狙い、セドリツクの腹を殴りつける。

「がはっ!」

セドリツクは背中から後ろに吹っ飛ばされた。

（今だ!）

俺はセドリツクに馬乗りになり、同じようにマウントパンチを叩き込む。

（少々強引だが、気絶してもらおう）

だが俺はまだセドリツクという男を見くびっていた節があったよ  
うだ。

セドリツクは俺の脇腹を殴り、俺の動きが鈍ったところを上手く脱出した。

（実戦経験が不足していると思っていたが、考え直した方がいいな）

「や、やるじゃないか……!」

「出来れば決めたかった」

「そうはいかないさ……!」

強気な笑みを浮かべているが、向こうも余裕はないはずだ。  
練武場で言ったとおり、気が済むまで付き合ってやる。

「キリコ side out」

「はあっ!」

セドリツクはキリコに右ストレートを放つ。

「っ!」

キリコはそれを左の掌で受け止めた。

すかさず右フックでセドリツクの顔面を捉える。



「……………」

キリコの体力も限界を超えていた。  
キリコは木にもたれかかり、座りこんだ。  
勝負はキリコが制した。

「キリコ side」

セドリツクとの勝負は俺が勝った。

柄にもなく感情を出したせいかわ、何やら清々しさすら感じる。

前世を含めて、戦いに清々しさを感じたことは少なく、それこそ片手で足りる。

「……………生きているか？」

俺は倒れているセドリツクに声をかけた。

「う……………うるさい……………」

セドリツクは痙攣する手をなんとか振っている。

「殺す気……………だったろ……………」

「手心を加えた方が……………良かったか……………」

「そしたら……………一生……………恨むよ……………」

「そういうことだ……………」

「は……………」

セドリツクは力なく笑う。

「また、負けたのか……………」

「これで、四勝目だ……………」

「言う、なよ……………」

セドリツクの身体が小刻みに震える。

「……………泣いているのか……………」

「う、うるさい……………な、泣いてないよ……………」

「……………」

強がっているが、小さな嗚咽が聞こえる。

「キ、キリコ……………」

「……………」

「最後まで……………よろしくな、親友」

「ああ……………親友」

俺は自然と「親友」という言葉を呟いた。

プリシラ皇妃の言葉が浮かぶ。

俺はセドリックと、友になれたのだろうか。

「……………」

セドリックは気絶したようだ。

(俺も……………限界……………か……………)

急激に眠気が襲ってきた。

俺の意識はそこで途絶えた。

「キリコ side out」

「いたたたたっ!!」

「我慢しなさいっ!」

「ア、アルフィン……………もう少し丁寧に……………」

「黙ってなさい!」

セドリックは鬼の形相のアルフィンに手当てを受けていた。

キリコとセドリックの勝負が着いた直後、カンパネルラの張った結

界が解除された。

突然の反応に驚いたリインたちがポイントに駆けつけると、そこには血まみれの二人が倒れていた。

第Ⅱ分校まで戻る手間を惜しみ、リインたちは二人を急いでメルカバへと運び込んだ。

回復アーツに現代医学、魔術に法術まで駆使した甲斐あって、二人はベッドから起き上がれるほどに回復した。

また、大事を取ってセドリックは医務室、キリコは仮眠室と分けられた。

そして現在に至る。

「このおバカ!」

「お、おバカはひどくない!」

「おバカで十分よ! だいたいなんでキリコさんと殴り合いの喧嘩なんてしてるのよっ!」

「キ、キリコとはどうしても決着をつけなきゃと思ったからさ」

「そもそもセドリックはキリコさんと体格の差で負けてるのよ！どう考えたって不利じゃない！」

「そ、そりゃあ僕にだって男の意地つてものが……」

「意地で済んだら世話ないわよ！」

アルフィンが叫びながらも、セドリックの手当てを終える。

「ねえ、セドリック……」

「ん？」

「本当はキリコさんのことでしょ？」

「……まあね」

「そうよね……」

アルフィンはセドリックの隣に座る。

「あの子のことも？」

「うん。たぶんキリコは気づいてる。ミルディーヌさんの気持ちに」

「でも、キリコさんは……」

「分かかって無視している。不死の異能と呪いの根源とやらのせい  
で……」

「そうね……優しいもの、キリコさんは」

アルフィンとセドリックは同時にため息をついた。

「お節介なのはわかってる。でも、このままじゃ救われない。ミル  
ディーヌさんが、何よりキリコが」

「異世界のことにはわからないけど、キリコさんにはこの世界で生き  
ること、何よりも幸せになる権利はあるわ」

「そうだね」

「でも、これはユウナさんから聞いているんだけど、キリコさんとミ  
ルディーヌのことはあまり干渉せず見守ろうってことで一致して  
るんですけど」

「紳士協定ならぬ淑女協定か。なら僕もそれに倣うか……」

「だからって黒星を増やしてたら意味無いわよ？」

「なんで蒸し返すかなあ……」



セドリックは大きなため息をついた。

「じゃあ、キリコ。本当に殿下は決着を着けようか？」  
「はい」

キリコは手当てを終え、リインたちに事の詳細を話していた。

「まさか皇太子殿下と素手の殴り合いをしていたとはな」

「互いの合意の上で、だがな」

「勝ちを譲る気はなかったのか？」

「一生恨むと言われたのでな」

「マキアス、ここは殿下とキリコの言い分が正しいと見るべきであ  
ろう」

「うん。あの皇子様なら本当に実行しそう」

「フイ、フイーちゃん……」

「それだけキリコに勝ちたかったのだろう」

「そうかもね」

「ほとんど意地だよな」

「うんうん♪これも青春ね」

「いやいや、そういう問題ですかっ!？」

サラの言葉にクルトがつっこむ。

「でも、キリコ君も殿下も無事で良かったね」

「さすがにあの状況は予想出来ませんでした」

「しこたま殴り合ってたって感じだったな」

(本当に……本当にご無事で何よりです……)

ミュゼは心から安堵した。

「それで、本当に殿下も一緒に？」

「はい。そうしたいと考えています」

セドリックが手当てを終えたと聞いたリインはセドリックの元へ  
とやってきた。

そこでリインはセドリックから自分も同行すると伝えられた。

「しかし……本校の方はよろしいのですか？」

「実を言うと、学院長には前々から伝えておいたんです。もしリインさんたちが分校を取り戻した暁には、リインさんたちに同行すると」

「殿下……」

「これは、アルノール家長男としてだけではありません。テストⅡロツサの起動者として、何より帝国を愛する者として、立ち上がりたいんです」

「そこまで……」

「お願いします……!」

「私からもお願いいたします」

セドリツクとアルフィンは頭を下げた。

「頭をおあげください」

リインは微笑みながら言った。

「お二人のお心、よくわかりました。こちらこそ、ありがとうございます」

リインたちも頭を下げた。

「あ、ありがとうございます!」

「礼には及びません。それではこれから――」

『なんででめえがいやがる!』

突如、ランデイの大声が響いた。

「ランデイさん?」

「なんででしょう?」

「とにかく、行ってみましょう」

リインたちは声のする方向へと向かった。

「やつほ――!」

「シヤ、シャーリイさん!」

セドリツクはいつの間にか乗り込んでいたシャーリイに仰天した。

「ど、どうしてここに……」

「あゝ。あたし一応、お坊ちゃんの護衛も任されているからさ。護衛対象に好き勝手されんの困るんだよね」

「そ、それで何しに……?」

「しようがないからあたしも灰のお兄さんたちについてくよ」

「ええっ!」

「ふざけんな!今すぐ降りろ!」

ランディはシャーリーの提案に憤慨した。

「でももう目的地だよね?」

「こ、この……!」

「待ってください、ランディさん」

セドリックが止める。

「こうなったらシャーリーさんにも同行してもらいましょう」

「殿下!」

「おいおい、本気かよ……!」

「ここでシャーリーさんを解放しても、情報は他の猟兵団にも伝わるでしょう。開戦が近い今、余計なトラブルは慎まなければなりません」

「だけだよ……」

「まあまあ。シャーリーさん」

「ん?」

「護衛の仕事はそのまま継続してください。ただし僕だけでなく、アルフィンやエリゼさんも対象に加えてください」

「私もですか?」

「誤解を恐れずに言いますが、エリゼさんとアルフィンは戦力としては役不足です」

「っ!」

アルフィンとエリゼの身体がビクンと震える。

「それは……」

(確かに戦力としては計算するのは難しいか……)

「オツケー。その分の報酬は期待してるね」

「お願いしますよ。特にエリゼさんに何かあった場合……」

「場合?」

「リーインさんの籠が外れかねませんから」

「……その節は申し訳ありませんでした」  
リインは申し訳なさそうに頭を掻く。

「冗談ですよ。僕もアルフィンに何かあったら同じようになるかもしれないし」

「殿下……」

「それに、アルフィンとエリゼさんを護衛対象とすることで、シャーリイさんを見張る目が増えるわけですから」

「ふーん？信用ないんだ？」

「クロスベルでの出来事は聞き及んでますし、そもそも貴女は結社の執行者じゃないですか」

「ま、今は休業中だけどね」

「……」

シャーリイの言葉にアリサは複雑な表情を浮かべる。

「アリサさん……？」

「……シャロンさんのことですね？」

「う、うん……」

「あの死線のお姉さんかく、結社というより黒のアルベリヒに付いてる感じだね」

「黒のアルベリヒ……」

（僕にとつても仇だ。たとえアリサさんに恨まれようと必ず……）

セドリツクは一旦思考を止める。

（そうか……キリコもこんな気持ちなのか。いや、よそう）  
セドリツクは頭を振って忘れようとした。

「殿下？」

「いや、なんでもありません。それよりどこへ？」

「ああ、それがありませんでした。自分たちはこれから——」

リインはセドリツクたちに目的地のことを話した。

「……それで皇太子たちを連れて来たのか」

ローゼリアはセドリツクたちを見回す。

エイボン丘陵から転位石を経て、魔の森を抜け、たどり着いたエリンの里にセドリツクたちは言葉を失った。

逸る気持ちを抑え、ラインたちと共に里長のローゼリアと対面した。

「ま、まさか貴女までが来るとは……」

「久しぶりだね。三人とも灰のお兄さんたちと行動してたなんてね」

「まあ成り行きだ」

「魔女の里、なかなか刺激的よ」

「まあ色んな意味で刺激的だな……」

「シャーリイさんや鉄機隊の皆さんとは戦ったことがありますし」

（呉越同舟じゃな。面倒なことにならないければよいがのう……）

ローゼリアは小さくため息をついた。

「そんなにもあったね。ま、この一件が終わるまでは手出さないから」

「ホントか？」

「うん。でもさ……」

「でも……?」

「ちよつとくらいあやかっても良いよね？」

シャーリイは両手の指を上下に動かす。

「なに考えてんですのっ!？」

「え〜?だってなかなかすごいお姉さん多いからさ。良いじゃん、減るもんじゃないし」

『良くありません!!』

女性メンバーがシャーリイにつっこんだ。

「ほほう。お主なかなかの眼力じゃのう♪」

「でしょでしょ♪シャーリイ的にはラインフォルトのお姉さんが——」

「いやいや。妾の孫娘が——」

ひよんなことからローゼリアとシャーリイは意気投合した。

「そういえば、分校はどうなったの？」

エンネアはリインに聞いた。

「結論を言うと、取り戻しましたよ」

「では、トールズ本校の雛鳥たちは去って行ったんですの？」

「いえ、そういうわけではなくてですね……」

トワが前に出る。

「私と殿下との間で契約を交わしたんです。第二分校の所有を分校関係者とすることを。そして本校生徒の皆さんに分校を一時預けることを」

「本校の生徒に？」

「なるほど。本校が絡んでいるならTMPも衛士隊も手は出しにくいはず」

「さすがトワさんですね」

「才色兼備とはこのことですね♪」

「そ、そんな……！おそれ多いです……」

トワはアルフィンの言葉に狼狽えた。

「でもこれでVII組やティータは帰る場所が出来たんだよな」

「はい……！」

「そう言っただけで良かったです」  
セドリックは微笑んだ。

「にしても、ホントにあのスチャラカ皇子の弟か？」

「フフ、本当ですよ。ティータさんとはリベールの異変以前からの相思相愛、年の差カップルと聞いておりますよ。アガット・クロスナーさん？」

「ふ、ふええええっ……!?!」

「前言撤回。っーか何を吹き込んでやがる、あのボケ皇子……!」  
ティータは赤面し、アガットは頭痛のする頭を押さえた。

「それはそうと、あれはどうなっている？」

「お主の予想通りよ」

キリコとローゼリアのやり取りに事情を知る者たちはハツとなっ

た。

「そ、そっか。それがあつたわね」

「第二相克をクリアしたから……」

「???……いったい何を……」

エリゼは話について行けず、困惑した。

「ああ、そうか。エリゼたちは知らないんだったな」

リインはエリゼたちに記憶の部屋について説明した。

「そのような部屋がここの地下に？」

「キリコさんの前世……興味はありますが……」

「その様子ですと、到底愉快なものではなさそうですね」

「正確です。皇太子殿下」

『あっ！』

リインたちが振り向くと軍帽を被った軍人が歩いて来た。

「貴方は……?」

「情報局長のルスケ大佐、でしたね」

「情報局!?!」

エリゼは思わず身構えた。

「意外な大物、ですね」

「あのカカシ男の親玉か……!」

ティオとランディは身構えた。

「フフ、あくまで情報局全体での話だよ。彼とはセクションが異なるのですね」

「それはどうでもよい。お主、またあの不良娘に？」

「ええ」

「あの……」

エマが前に出た。

「ルスケ大佐、姉さんの行方は……」

「残念ながら、場所までは特定出来なくてね。このペンデュラムが光った時だけ、里に向かってくれとだけ言われているんだ」

「そうですか……」

エマはため息をついた。

「まあ、世界情勢が逼迫する時勢だ。案外ひよっこり顔を出すのではないかな?」

「だと良いんだけどよ……」

クロウは頭を掻いた。

「とりあえず、百聞は一見にしかず。キリコ、お前から行け」

「……………」

キリコは不満げな表情を浮かべながらも、記憶の部屋へと向かった。

「キリコ君……………」

「おもいつきり顔に出てるな……………」

「そんなに嫌なんでしょうか……………」

「そりゃあ、過去をほじくられるようなもんだしね」

「違うな。奴は頭ごなしに命令されることに不満なのさ」

「え……………」

「キリコは誰にも従わない。たとえそれが神だろうともだ」

「従わない……………」

「まあ、それは記憶の部屋でたっぷり体感してもらおう」

ロッチナは鼻歌を歌いながら行って行った。



## 飛行船

七耀暦1206年 8月26日 午前6:00

エリンの里は慌ただしい空気に包まれていた。

「では転移させるぞ。二代目VII組とシユバルツァーの妹、配置につ  
け」

『はい』

にVII組とエリゼは転移石の前に立った。

「俺たちもメルカバで追いつく。リインたちは救出に専念してく  
れ」

「わかった。セドリツク殿下、アルフィン殿下、よろしくお願いしま  
す」

「任せてください」

「アルノールの名にかけて」

セドリツクとアルフィンは頷いた。

「ではゆくぞ」

ローゼリアは二代目VII組とエリゼを転移させた。

午前6:30

「ここは……？」

二代目VII組とエリゼは石碑の前に立っていた。

「ここはユミルとアイゼンガルド連峰を結ぶ登山道です。キリコさ  
んは一度いらしてるとか」

「ああ。アイゼンガルド連峰に精霊窟が現れたから手伝えと鋼の聖  
女に呼ばれてな」

「そ、そんなことが……」

「父さんにも会ったんだな？」

「ええ。犬を連れていました」

「ああ、バドのことだな」

「シユバルツァー男爵閣下は鷹狩りの名人で、帝都での催しにも参  
加なさっていたとか？」

「らしいな。そろそろ行こう。もし、今回のハイジャック犯が衛士隊と繋がっているなら、連中はどんな手を使ってくるかわからない」

「間違いなく、口封じに出るでしょう」

「死人に口なしってか？」

「ですが、こうも露骨な手に出るということは相当焦っていること  
の目白押しだと思います」

「そっか！下手すれば自分たちにダメージが及ぶもんね！」

「何かしらの手は考えられる。行くぞ、Ⅶ組特務科！」

『イエス・サー！』

「エリゼは無理せず後方に来てくれ！」

「は、はい……！」

二代目Ⅶ組とエリゼはアイゼンガルド連峰を指す。

その頃、ユミルは異様な空気に包まれていた。

「我らユミルの民はハイジャックなどに手を貸したりはしない」

「ならばなぜ、我々に協力しない？」

「協力しないとは言っていない。だが銃を持って高圧的に乗り込んで  
来た貴君らに警戒するなどは無理があるだろう」

「貴様！」

衛士隊の兵士の一人がシュバルツアー男爵に銃を向ける。

「っ！」

「男爵様!？」

「よせ。所詮は田舎に引きこもる傍観者の言葉。多少の無礼も大目  
に見てやろうではないか」

「くっ……！」

「あいつら……！」

ユミルの領民たちは怒りを必死におさえる。

ここで手向かいをすればどうなるかはわかりきっていた。

「ふっ。その反抗的な目……気にいらんなあ〜」

隊長は導力銃を取り出し、シュバルツアー男爵の眉間に突きつけ  
る。

「あなたっ!？」

「もはや是非もなし。国家総動員法に背いた貴様と領民どもはすべて銃殺する」

兵士たちは銃剣を構える。

「そのような暴論が罷り通ると思うのか!」

「通るのだよ。我らは正義の軍。我らが悪と言えば悪。悪は滅せねばならない」

「それは皇室の意志か?」

「死ぬ者には必要なだろう」

隊長は引き金に指をかける。

「男爵様っ!!」

「お前らっ!!」

領民たちは口々に叫ぶ。

「そいつらを黙らせろ。これより処刑を——」

『即刻、中止せよ』

ユミルの頭上に何かが飛んで来た。

「なんだあれは?!!」

「あの紋章は、教会の?」

地面に魔法陣が描かれ、二人の人物が現れた。

「なんだ、貴様らは……………」

「まったく、主君筋の顔も忘れたとは」

「呆れてものが言えませんか」

二人はため息をつき、衛士隊をまつすぐ見る。

「あ、あ、あ……………貴方は……………!!」

隊長はようやくやく気づいた。

『皇太子殿下に皇女殿下!?!』

衛士隊は愕然となった。

「ど、どけー!」

隊長はセドリックとアルフィンの前でひざまづいた。

「ご、皇太子殿下並びに皇女殿下におかれましては、ご機嫌麗しく……………」

「挨拶は不要だ。シュバルツアー卿及びユミル領民の拘束を今すぐ解き、ルーレまで撤退せよ」

「し、しかし殿下!?我々は飛行船……」

「それには及びませんわ」

セドリツクの後ろからアルフィンが歩いてきた。

「皇女殿下……」

シュバルツアー男爵は驚きを隠せなかった。

「現在、アイゼンガルド連峰には調査隊を派遣しております。この帝国の守護を任務とするあなた方衛士隊のお手を煩わせるまでもありません」

「君たちには君たちの任務があるはず。それを放棄してまでこの事件に関わる理由があるのか?」

「で、ですが……!」

「おかしいな。君たちの上官にあたる司令官殿に問い合わせたら、撤退の命令を出すと言っていたのだけど」

「し、司令官が……?」

「もしかして、僕とアルフィンは一杯食わされたのかな?」

「め、滅相もございません!ご命令通りに致します!」

隊長は慌てて敬礼した。

そこからの動きは速かった。

隊長は撤退の指示を出し、衛士隊はユミルを去って行った。

「さて、と」

セドリツクはシュバルツアー男爵らの方を向いた。

「シュバルツアー卿、皆さん。ご無事ですか!」

「殿下、なぜこのような場所に」

「シュバルツアー男爵家はアルノール家に連なる家柄。それを差し引いても、帝国臣民を見捨てるなど、どうして皇族を名乗れましょう」

「ユミルは親友の故郷。その危機とあらばいつでも駆けつけますわ」

「殿下……」

「お強くなりましたね」

シュバルツアー男爵夫妻は感謝の意を示す。

再び魔法陣が描かれ、初代Ⅶ組が現れた。

「どうやら去ったみたいです」

「お久しぶりです。シュバルツアー男爵閣下」

「皆さん……」

「なるほど。皇太子殿下のおっしゃられた調査隊とはリインたちのことか」

「はい。エリゼさんもついて行きましたが」

「そうですか。エリゼも無事でしたか……」

シュバルツアー男爵夫人は女神に祈った。

「それにしても、殿下はいつの間に衛士隊の司令官と連絡を？」

「上手く乗ってくれて幸いでしたよ」

セドリツクは微笑みながら言った。

「なっ!？」

「司令官という言葉の方がより効くと思っただですよ」

「つまりハツタリ？」

「大丈夫ですよ。今頃……」

セドリツクはルーレ方面を見た。

「あははは！この程度？」

ユミルとルーレを結ぶ街道では、シャーリイと鉄機隊が衛士隊を襲撃していた。

「き、貴様ら……!」

「本来であれば、あなた方と事を構えるなど無用のこと。ですが」

「我らにも事情がある」

「とりあえず、ここで出会った不運を恨んでちょうだい」

「く、くそおっ!」

衛士隊小隊は瞬く間に壊滅した。

「とりあえずこんなもん？」

「そうですわね。ルーレが動かないのは気になりますが」

「そつちは遊撃士の三人と特務支援課が調べに行ってるわ。それにしても、あの皇子様の慧眼には脱帽ね」

「キュービィーとの敗北を機に、己を一から鍛え直したと聞く。武ではともかく、知では相当なものだろう」

「とりあえず、星座なら参謀補佐の補佐くらいにはなれるんじゃない？」

「手厳しいですわね」

「戦場つてのは上と横を見なけりゃね」

「上と横？」

「つまり、地図上と戦場に立って見る眼力か」

「そんなとこ。さすが剛毅のお姉さんだね」

「それはともかく」

デュバリイは咳払いした。

「後は新VII組の働き次第ですわね」

「そうね」

「うむ」

「ま、キリコがいるなら問題ないでしょ」

シャーリイと鉄機隊はアイゼンガルド連峰の方角を見た。

「これは……」

「予想外の光景ですわね」

二代目VII組とエリゼは飛行船の着陸地点を発見し、様子を伺っていた。

そこには、猟兵と思わしき風体の者たちが飛行船の周りを囲っていた。

「雑多な見た目からして、寄せ集めのようだな」

「数だけは立派だな。めんどくせえつたらありやしねえ」

「何とか潜り込めませんか？」

「闇雲に突っ込むのはリスクが大き過ぎる。それに奇襲が上手くいっても人質に危険が及んでしまう」

「くっ！ 打つ手無しですか……！」

クルトは奥歯を噛む。

「いや……」

キリコは周りを見渡した。

「少々危険だが、策はある」

「策？」

「どのようなものですか？」

「アツシユ、協力してくれ」

「ハッ、いいぜ」

「ど、どうするの？」

「すぐに戻る」

キリコとアツシユはリインたちから離れた。

数分後、二人は猟兵の格好で戻ってきた。

「戻りました」

「練度は高くはねえ。分かりやすい罠にも引つかかるんだからよお」

「なるほど。変装して潜り込むんですね」

「……ちなみに元々着ていた人物はどうした？」

「縛りあげて放っておいてます」

「近くに魔獣避けのガスを焚いておいたから食われることあねえだろ」

「魔獣避けのガス？」

「強い催涙効果があるとかで、小一時間涙と鼻水が止まらなくなる代物だとか」

「そんなものどこで仕入れたんだ？」

「ジongoに頼んで調達してもらいました」

「だからといって、使う？」

「アツシユさんですが……キリコさんもかなりアウトロー寄りですよね」

「そこにしびれるんです♥？」

「ゴホン……それで、これからどうするんだ？」

「とりあえず捕まってもらいます」

キリコは持っていたアサルトライフルをリインたちに突きつける。  
「おい、ここに怪しい奴らがいるぞ〜!」

アツシユはニヤニヤしながら他の猟兵を呼ぶ。

「……結局こうになりましたか」

「まあ仕方ない。ここは大人しく案内してもらおう」

リインは両手を挙げた。

「教官、開き直ってません?」

「君たちを受け持っていたら普通の神経じゃ務まらない」

「兄様……………」

エリゼは兄の言葉を聞き、何とも言えない顔をした。

「さつきと歩け」

キリコはアサルトライフルを突き付けながらリインたちに進むよう促す。

「気をつけろよ。灰の騎士と言えば有名な人たらしだ。口を聞いていると、うっかり乗せられかねえぞ」

「なるほど。気をつけなければな」

「そうなのか?」

キリコとアツシユが話していると、他の猟兵が話しかけてきた。

「ああ、専らの噂だけ」

「噂といえば、その口の上手で女を虜にしてやまないそうだ」

「うーむ、とんでもないな」

（教官……………風評被害が……………）

（でもキリコさんのおっしゃったことは事実ですよ?）

（というか、なんでキリコはそのことを知ってるんだ?）

（……………）

アルティナはそつと顔を背けた。

（どうやらアルティナから伝わったみたいだな）

リインは無反応を装った。

「ほう? お前らみたい/new入りが灰色の騎士とガキどもを捕らえるとはな」



獵兵団の団長らしき男が品定めするような視線を向ける。

「近くに潜んでおりました」

「他にも仲間がいるかもしれないやせんぜ」

「ふむ……第三班、念のために辺りを浚ってこい。怪しい奴は見つけ次第捕らえろ。抵抗するなら射殺していい」

「第二班は引き続き人質の見張り、第一班はキャンプの防衛にあたれ。お前ら二人は二班に加われ。以上だ」

「こいつらは？」

「人質とまとめとけ。武装は解除してあるだろうな」

「無論です」

「ならいい。さっさと行動しろ」

団長らしき男は指示を飛ばし、一番大きなテントに戻った。

「運が良かったな。お前ら」

「は？」

「団長がお楽しみの後だよ」

「そうか……」

キリコとアツシユは聞かなかったことにして、リインたちを飛行艇に連れて行った。

「……そろそろいいか」

「ん？どうかしたのか？」

「悪いな」

「!？」

獵兵はアツシユに気絶させられた。

「とりあえず、第一段階は成ったな」

「お次はお祖父様たちが閉じ込められている場所の特定ですね」

「該当しそうなのはやっぱり客席かな？」

「おそらくはね。ただ、簡単には入れないと思った方が良くかもしれない」

「最近の飛行船は大半がカードキー式だ。まずはカードキーを探す」

「となると、やはり隅々まで探索する必要がありますね」

二代目Ⅶ組は限られた情報から、作戦行動プランを練り出す。

「兄様は発言なさらないのですか？」

「Ⅶ組特務科は基本、生徒の自主性を重んじる。余程のことがない限り手は出さない」

「おかげさまで、こういう状況に慣れちゃいましたよ」

「テンパることなく、冷静に行動できる力を得られた気がするな」

「キリコさんとアルティナさんは元からでしたが」

「逆に言や、コイツらがテンパるほどの危機じゃねえってこった」  
「……………」

「私は別に危機探知機ではありませんが……」

アルティナは無然となった。

「まあまあ。キリコさん、何か策はありますか？」

「ここで二手に別れる」

「二手に？」

「ユウナとアルティナは俺と別行動をする」

「何か作戦が？」

「ああ。クルトたちは人質の見張りを片付けておいてくれ」

「わかった。気をつけてくれ。」

クルトたちは頷き、上へと向かった。

「それで、どうするの？」

「まずは地下に向かう。それから——」

キリコはユウナとアルティナに作戦を話した。

「破壊されていないなかったのは幸いだな」

「少なくとも、能はあるみたいね」

「考え無しに破壊しても邪魔になるだけです。とりあえず地下の調査はここまででいいと思います」

「念のため施錠し、操縦室に向かう」

キリコたちは地下から一階に上がる。

「……操縦室内に数人いるようです」

「どうする？ 一気に乗り込む？」

「いや」

キリコは懐からスプレー缶のようなものを取り出した。

「それは、催眠ガス？」

「本来は暴徒鎮圧用だそうだ」

「それもジンゴちゃんから？」

「特務支援課設立以前の横流し品と言っていたが」

「当時のクロスベル警察は各セクションで腐敗があったとか」

「聞きたくない」

ユウナは両耳を押さえた。

「すまない。遅くなった」

クルトがキリコたちと合流した。

「クルトさん」

「教官たちと一緒にじゃないのか？」

「どうやら、カードキーは操縦室からロックがかけられているそう

なんだ」

「それでクルト君が来たってわけね」

「わかった。では始める」

キリコはドアを少しだけ開けて、ガス缶を転がすように入れた。

「ぐっ……」

「な、なんだこれ……は……」

中から倒れこむような音が響いた。

「布か何かを口に当てて、入るぞ」

「わかった」

キリコたちは持っていたハンカチーフなどを口に当て、中に入った。

猟兵たちは一人残らず眠りこけていた。

「換気扇つけるね」

ユウナは操縦室の換気扇をつけた。

「キリコさん、猟兵の拘束完了しました」

「わかった。クルト、カードキーをセットしてくれ」

「わかった」

クルトはカードキーをセットした。

「……………」

キリコはアンロックを確認し、いくつか操作した。

「何したの？」

「この飛行船はラインフォルトの最新鋭モデルだ。確か、半自動操縦システムが内臓されていたはずだ」

「ある程度は飛行船自体がルート上を飛んでくれるというものでしたか」

「これでルーレ付近まで飛ぶ」

「ルーレへ？」

「アンゼリカ曰く、ログナー侯爵は衛士隊のやり方には腹を据えかねているらしい」

「どうして？」

「ログナー侯爵は内戦には貴族連合軍に与したが、皇室への忠誠心は一二を争うほど高いという」

「だからこそ、衛士隊の振る舞いに思う所があるのじやろう」

『!』

キリコたちが振り向くと、ハイアームズ侯爵とイーグレット伯爵が立っていた。

「あなた方は……………」

「久しぶりだね。ツールズ新VII組の諸君」

「キリコ君も元気そうじやのう」

「なぜここに？」

「リイン君に無理を言って連れて来てもらったんだ。救出に来てくれたこと、本当に感謝するよ」

ハイアームズ侯爵は胸に手を当て、礼を言った。

「義理の孫になるかもしれぬ彼の働きを見物してみたくてな」  
イーグレット伯爵は茶目っ気たっぷりに言った。

「そ、それでわざわざわざわざこちらに？」

「そういうことじやな。それでキリコ君。飛べるのかね？」

「エンジンそのものは無傷なので後数分もすれば」

「周りの猟兵たちはどうするんだね？」

「ご心配には及びません」

リインが二人の後ろから声をかけた。

「初代VII組のみんながアイゼンガルド連峰に到達したと連絡を受けました。離陸を合図に奇襲をかけます」

「そうか。ならば、このまま君たちに任せるよ」

「閣下たちはルーレのログナー侯の元に？」

「うむ。儂もハイアームズ侯も決起軍に絡んでおる。もちろんログナー侯もな」

「あなた方も……」

「実を言うと、この飛行船に乗客のほとんどが決起軍関係者なのだ」

「そ、そうなんですか!？」

「それがなぜ飛行船に？」

「儂らを捕らえて人質にしようということじゃろう。少なくとも、決起軍の士気に影響する」

「そんなことのために……」

「……もうじき準備が整います。二人は客席にお戻りください」

「なんじゃ、キリコ君は来ないのか？」

「いくら自動操縦といえど、万が一のことがあつてはいけないので」

「いや、キリコ。ここは俺が請け負うよ」

「教官、動かせるんですか？」

「初代VII組が解散した後、トールズ本校で学生をしながら様々なオーダーをこなしていたのは知ってるな。その一環で飛行挺の操縦もやってたんだ」

「そんなことが……」

「アルは知ってたの？」

「はい。任務で同行する機会もありましたから」

「それなら安心じゃな。ではキリコ君、行こう」

「では教官、お願いします」

「ああ」

キリコはイーグレット伯爵らと共に客席へと向かった。

「本当に久しぶりね。キリコ君」

「お久しぶりでございます、キリコ様」

「ご無沙汰しています。シエザンヌ夫人、セツナさん」

「お、お久しぶりです！」

「ああ、6月の演習以来か」

シエザンヌ夫人とメイドのセツナは微笑み、メイド見習いのリーファはやや緊張しながら挨拶をした。

「ほほほ、やっと全員が揃ったのう」

「ふふふ、そうですね」

イーグレット伯爵とミュゼが微笑む。

「キリコ君。君のことはオーレリアから聞いておる。なかなか壮絶なものを背負ったたんじゃな」

「はい……」

「じやが、そのようなものは関係ない。儂が知つとるのは生真面目で、誠実で、静かな優しさを持っているキリコ・キュービー君なわけじゃからな」

「……ありがとうございます」

「じやからキリコ君……」

イーグレット伯爵はキリコの肩に手をやり、その場を離れる。

「あの子の側から離れんでやってくれんか……？」

「……………」

「娘夫婦——あの子の両親が海難事故で亡くなった時、あの子は幾日も泣いていた。自分のせいだと言わんばかりに」

「自分の………もしや、異能の力ですか？」

「当時は漠然とじやろうが、おそろくはな」

イーグレット伯爵の表情が悲痛なものに変わった。

「当時の儂らにはわからなかった。あの子がいったい何を見たのか、何を知ったのかを。単なる空想だと決めつけてしまった」

「無理もないでしょう」

「じゃが、もしもあの時信じていけば……あの時視察を中止させていけば、こうはならなかったかもしれない……」

「……………」

「娘夫婦に先立たれてから、儂らが望むのはあの子が心から幸せになつてくれることだけじゃ。そしてそれができるのは……………」

イーグレット伯爵はキリコを見る。

「君だけじゃ、キリコ君」

「…………それはお門違いです」

キリコは無表情のまま言った。

「キリコ君…………」

「俺にそんな資格はありません。本当にお孫さんのことを想うなら…………」

キリコは背を向けた。

「俺と切り離すことです」

「っー」

キリコの眼を見たイーグレット伯爵は息を飲んだ。  
すると、キリコたちの足元が揺れる。

「どうやら離陸するようです。俺は万一に備えて甲板にいるので」  
キリコは甲板に向かった。

「キリコ君…………」

イーグレット伯爵はキリコの背中を見送る。

（なんとという悲しい眼じゃ。儂らには想像も出来ん体験をしてきたのじゃな。じゃがな、キリコ君…………）

（幸せになることを放棄していい理由などありやせんのだ）

「キリコ side」

イーグレット伯爵と別れた後、俺は猟兵たちの襲撃に備えた。  
だがそれは杞憂だった。

飛行船が飛び立った時、猟兵たちは何が起きたのかわからないようだった。

離陸と同時に初代Ⅶ組らに奇襲を受けてやっとな事態を把握するほ

どの体たらくだった。

後日クラウゼルに聞くと、連中は各猟兵団からドロップアウトした者たちで構成された烏合の衆で、人質さえいなければ俺たちだけで撃破できるくらいのリベルだったらしい。

初代VII組の奇襲は成功し、猟兵たちは残らず拘束された。

連中の身柄はルーレに常駐していたログナー侯爵率いる地方軍に引き渡された。

ここまでくれば、もう俺たちに出来ることはない。

後は、今日の正午に行われるという会議に備えるだけだ。

「キリコ side out」

午前11:06

「これで後顧の憂いは断てたのかな？」

「後顧の憂いと呼べるかどうかは不明だがな」

「そんなに弱かったの？」

「はつきり言つて、二代目VII組だけでも勝てたかも」

「そんなにですか？」

「君たちから見てどうだったの？」

「見た目は結構雑多だったよね」

「赤や緑に黒。ありきたりの配色が多かったと思います」

「武装も統一されていませんでしたね」

「文字通りの寄せ集めか」

VII組と特務支援課と結社関係者は二隻のメルカバの通信を使って話し合っていた。

「それにしても、ログナー侯が出迎えてくれたのは驚きましたね」

「最初っから身柄の引き渡しにに応じてくれたしな」

「まあ、皇室への忠誠心は決して低くはないからね」

「そういうえば、アンゼリカさんは会わなくてよかったですか？」

「問題ないさ。たかが父娘喧嘩で時間を使いたくないしね」

「お、父娘喧嘩!？」

「そういや、ゼリカは親父と機甲兵同士の殴り合いをやったらしい



な」

「機甲兵同士で素手喧嘩かよ……」

「その時に勝ったことで、ノルティア州領邦軍を貴族連合軍から手を引いてもらったんでしたね」

「フフ……」

アンゼリカはにんまりと笑う。

「とにかく、これでユミルに手出しをする方は現れないでしょう」

「ログナー侯も警戒を強めていただくことを約束していただきましたから」

「本当に……ありがとうございます!!」

「俺からも礼を言わせてください。本当にありがとうございますました」

「親友とそのお兄様の故郷ですもの。いくらでも骨を折りますわ」

「それを差し引いても、臣民の危機を見捨ててどうして皇位継承者を名乗れましょう」

アルフィンとセドリック微笑んだ。

「これで、一件落着だね」

「後は、会議とやらか」

「ああ。ミュゼ、会議というのはどこで?」

「はい」

ミュゼは前に出た。

「ガイウスさん、トマス副長。この座標に向かってください」

ミュゼは地図にとある座標を打ち込んだ。

「ここは……!」

「なるほど。ここを選ぶとはさすがですね」

「教官、ここって……」

「エレボニア、カルバード、リベール三か国の国境が重なり合う場所だ。ゆえにここら一体は非武装地帯に指定されている」

「非武装地帯……」

「いかなる理由があろうと、一切の戦闘行為を禁じる場所のことだな」

(不可侵宙域と同じものか)

「でも、岩山ばかりに見えますが」

「……空か」

キリコが呟いた。

「空？」

「まさか……」

「はい」

ミュゼはとある画像をモニターに映す。

「これは!？」

「内戦以来所在が知れなかったと聞いているが……!」

「よもや、またお目にかかれるとはな」

「ミュゼ、貴女……」

「ここが会議場になります」

ミュゼは咳払いをした。

「それではご案内致します。貴族連合軍の旗艦にしてヴァイスラント決起軍旗艦、パンタグリユエルへ」

世界の命運が決定付けられるまで後、2時間あまり――

(いよいよ始まる。だが、それは平和を話し合うものではあるまい。会議の行方次第でこの世界が百年戦争の二の舞になるか否かが決まる。だが――)

キリコの胸に、次なる戦いの予感がこみ上げる。

(ミュゼの精神力ももう限界のはず。会議の結果如何に問わず、その時はおそらく……)

キリコはそつとミュゼに目をやった。

「ミュゼ side」

(これで全てが決まります)

パンタグリユエルに到着するまで、私は甲板に立っていました。

(エレボニア、カルバード、リベール。それぞれの代表が一堂に会し、世界の命運を決める。端から聞けば素晴らしく映るでしょう)

(ですが、この会議で決まるのは共和国軍との全面戦争の一択。一

度火がつけば十年は消えないものとなる)

私は鉄柵をギョツと握りしめました。

(これで多くの人が死ぬ。世界は荒れ果て、人心は喪われる。その引き金を私が引くことになる……)

私は懐から裝飾された小型の銃を取り出しました。

(私の旅路はここまですね……)

「ミュゼ side out」

## 会議①

七耀暦1206年 8月26日 午前11:15

メルカバはパンタグリュエルの発着ポートに入渠した。

「久しぶりだな。こんな形で足を踏み入れることになるなんてな」

「違えねえ……」

リインとクロウは懐かしげに見回す。

「教官……」

「教官とクロウさんは一時とはいえ、この艦に乗っていましたから」

「オメーもか?」

「はい」

アルティナは肯定した。

「南と北東からの船か……」

キリコは続々と向かって来る飛行艇を見つめる。

「南…… (もしかしなくても……)」

「北東…… 大陸地図だとあそこだね」

ティータとシャーリイはそれぞれあたりをつける。

「そして東か……」

「へえ? カイエン公もえらいの呼んだみたいだね」

「あ、あの国旗って……!?!」

「もう気づいておりますでしょうが……」

メルカバの中で正装に着替えたミルディーヌが歩いて来た。

「南はリベール王国、北東はレミフェリア公国。そして東はカル

バード共和国から〃とある方々〃を招待しました。遊撃士協会と特

務支援課の方々にも立ち会っていたたく予定です」

「無論、僕たちもね」

キリコたちの後ろから正装したセドリツクとアルフィンが歩いて来た。

「皇太子殿下……」

「姫様も……」

「まずは中に入りましょう。リインさん、エスコートをお願いできませんか?」

「自分がですか?」

「はい。リインさんとは一度、逃避行をした仲ですもの♥?」

「教く官く?」

「そんなことが……」

「不埒です」

「ククク……なるほどねえ?」

アルフィンの言葉に二代目Ⅶ組が反応した。

「……………」

キリコにとってはどうでもよかった。

「諸君、よく来てくれたな」

パンタグリュエル前方区画でリインたちを出迎えたのはウオレス少将だった。

「お久しぶりです、少将」

「シユバルツアーも久しぶりだ。ずいぶんと見た目が変わったな」

「ええ。色々ありました」

「まあ壮健そうで何よりだ。セドリツク殿下、アルフィン殿下、アンゼリカ嬢もご無事で何よりでした」

「ありがとうございます、少将」

「こんな形でまた訪れるとは思いませんでしたが」

「その節は平にご容赦を。そして——」

ウオレス少将はキリコと目が合った。

「久しぶりだな。報告を聞いたが、本当に存命しているとは思わなかったぞ」

「そうか」

「フフ。らしくなってきたな」

ウオレス少将は口角を上げた。

「これから起こることは理解しているようだな」

「歴史が変わる。そう思っている」

「そうだ。ここからは正に混沌。そなたの背負っているものを含めてな」

ウォレス少将の後ろからオーレリアが歩いて来た。

「ご無沙汰しています、オーレリア將軍」

「皇太子殿下におかれましてもご無事で何よりです。聞けばキュービーと決着をつけたとか？」

「ええ。恨みっこなしの真剣勝負でした。敗北しても清々しさすら感じました」

「フッフ、それは何より。いずれ私も奴と決着をつけねばなりません」

（キリコ君……………）

（本気で同情してしまうな……………）

（本人はあまり気にしていなさそうですが）

「……………」

「まあよい。それより、ここにいる何人に縁がある者たちが先に来ている」

「縁、ですか」

（それって……………）

ティータは確信めいた予感がした。

「ここから先は私が案内しよう。ウォレス、警備は抜かるなよ」

「はっ」

ウォレス少将と別れ、リインたちは奥へと進んだ。

「ご、豪華なんてもんじゃない気がするんですけど……………」

「すごいな……………」

「ククク、マジかよ」

オーレリアにつれられたリインたちはパンタグリユエルの後方貴賓区画へとやって来た。

オーレリアは準備があると言って、先に向かった。

残されたリインたちの内、何人かはその豪華絢爛さに言葉を失っ

た。

「かつて貴族連合軍の旗艦として帝国に名を轟かせただけのことはあるな」

「もしかすればユーシスも加わっていたかもしれないのだったな」

「そうか、ユーシスさんはアルバレア公爵家の一員だから……」

「まあ、早めに見限ったのは正解だったということだ」

ユーシスは特に気にしていなかった。

「そういえば、アルと教官はここで会っているんだっけ？」

「ええ、二度も不埒なことをされかけた場所ですね」

「……兄様？」

「リイン……？」

エリゼとアリサは揃ってジト目を向ける。

「全くの誤解です」

「うーん……リインの場合、あながち誤解とは言い切れないんじゃないかなあ」

「まあ教官にも悪気はなかったと思いますし……」

「いや、リインの場合はそれがむしろ問題なんだろう」

「ああ、善意しかないのが逆にタチが悪いと言おうか」

「ハハ、言い得て妙じゃねえか」

「あの一、君たち？」

リインの額を嫌な汗が流れる。

「まあ。リインの朴念仁ぶりは今更のことである」

「わたしたちはとつくに諦めてる」

「ふふ、また巡り合わせが絶妙に良いといえますか」

「……悪いの間違いじゃないの？」

「……えつと……」

リインは言葉が続かなくなった。

「先ほども申し上げましたとおり、私リインさんと逃避行いたしました。お姫様抱っこしてもらいましたし♥？」

「へえ……そんなことが……」

「ハハ、あん時は凄かったよな」

「そ、そうなんですか？」

「へえ？やるじゃねえか」

「ふむ、人は見かけによらないと言いますか」

「はは、アイツ以上に爆発しろって感じだよな」

「……………教官、先輩。泣いていいですか？」

リインのハートは傷だらけだった。

「あー、我慢しなさい」

「ふふっ、それだけみんなに愛されているってコトで」

「果報者だねえ、リイン君は」

トワとアンゼリカがフォローを入れた。

「ハハ……………盛り上がっているな」

「あはは、まさかこんな形でお目にかかれるなんて」

奥から黒髪の青年と栗色の髪の娘が歩いてきた。

「……………」

キリコは歩いてきた二人を見つめた。

「……………あ……………」

「ハハ……………」

ユウナとランディには見覚えがあった。

「ハッ、やっぱ来てやがったか」

「久しぶりね、ティータ」

「5ヶ月ぶりくらいかな。ちよっと背が伸びたかい？」

「エステルお姉ちゃん、ヨシユアお兄ちゃん。それに……………それに……………」

「ふふっ……………約束、果たせそうかしら？」

二人の後ろからスミレ色の髪の子が顔を出した。

「レンちゃん……………」

ティータは駆け出し、エステルとレンの二人に抱きついた。

「やっと……………やっと会えた……………」

「ぐすっ……………それはこちらの台詞よ……………」

「まったく二人とも……………年上なのに泣き虫なんだから」



「そういうレンこそ目が赤くなってるけどね。それとアガットさん、ご無事で何よりでした」

「ハッ、たりめーだろ。……色々残ってはいるがまずは一区切りつてどこか」

「ええ、色々な意味でまだ気は抜けないけどね」

「あ！サラさん！えへへ、お久しぶりです」

「ご無沙汰しています、本当に」

「3年ぶりくらいかしらね。紹介するわ、あたしの教え子で後輩のファイよ」

「ども」

サラに呼ばれたファイはいつもの調子を崩さなかった。

「わわっ！貴女がファイさん!?可愛いのに滅茶苦茶強いって噂の！」

「よろしく。妖精の活躍は耳にしているよ」

「ファイで構わない。こちらも二人の活躍は聞いている。アガットとシエラザードから」

「ふふっ……そっか」

エステルは微笑んだ。

「それはそうと、不死のお兄さんのことは良いの？」

「あ……うん」

レンにファイに促した。

「不死？」

「ああ。クロスベルでお前らと会ってるそうだ」  
アガットはキリコに目を向けた。

「あ……」

「その服装は……」

エステルとヨシユアは目を見開いた。

「レンはもう会ってるんだよな？」

「ええ。キーアと一緒にね」

「あの時の……」

エステルは決意したかのようにキリコに近づく。

「お、お姉ちゃん……」

ティータは不安そうに見守る。

「君……」

「……………」

キリコはエステルの目を見る。

「やっぱり当たってなかったわよね!」

「へ?」

「エステル……?」

エステルの予想外の言葉に何人かが唾然となった。

「あの時、正確に突いたけど手応えがほとんどなくなって、気のせいかと思つてたけどやっぱり当たってなかったわよね!」

「お兄さんから直接聞いたんだけど、当たる瞬間に体を引いて威力を最小限に留めていたみたいよ。そして持っていたワイヤーフックを柱に引っかけて上手く着地して脱出したそうよ」

「凄いな……レンから聞いていたけど、ここまでとはね」

ヨシユアもキリコに近づいた。

「責める気はないのか?」

「レンから聞いたけど、キリコ君にも事情があつて、あたしたちを足止めてたんでしょ。そんなことで恨みなんて持つわけないじゃない?」

エステルは笑みを浮かべた。

「僕もエステルと同じ考えかな。ベクトルは違つても、目指すところは同じだと思う。ただすれ違つていただけで」

ヨシユアは右手を差し出した。

「……………」

「ダメかな……?」

「……………」

キリコも右手を差し出し、握手を交わした。

「よろしくね、キリコ君」

エステルもキリコと握手を交わした。

「お兄ちゃん……お姉ちゃん……」

「ふふ……」

「相変わらず底抜けのお人好しだな」

「エステルちゃんはああじゃなきゃな」

「なんと言うか、太陽みたいですね」

「だな」

アガツトは笑みを浮かべた。

（良かったね、キリコ君）

（たとえ罵倒されようと、キリコは受け止めるつもりだったんだろ  
うな）

（おそろくは）

ユウナたちはキリコの心底を見抜いた。

「……………」

アツシユはヨシユアと目が合う前に視線を逸らした。

（まさか……彼は）

ヨシユアは過去の記憶を辿った。

「エステルさんたちが来ているということは……」

「来てるんだろ？」

「うん。そろそろ——」

「ティオ——」

奥から走ってきた緑色の髪の子がティオの胸に飛び込んだ。

「つと。ふふつ……いいタックルです、キア。ロイドさん、エリイ

さんもお疲れ様でした」

「ああ、ティオこそお疲れ」

「ああもう……私も抱きしめさせて」

エリイはティオを抱きしめる。

「エ、エリイさん……ちよつと苦しいです」

「……ティオちゃん。無事で本当に良かった。ヨナ君も心配してた  
んだからね？」

「そうですねか……あの、それより息が……」

テイオの呼吸が徐々に小さくなる。

「ハハ……」

「やれやれ、お嬢、また育ったんじゃねえか？」

「お疲れ、ランディ！」

「お前こそな、ロイド」

ロイドとランディは拳を突き合わせる。

「……ちよつとランディ？聞こえてるわよ？」

エリイは笑ってない目をランディに向ける。

「おつと、やべえやべえ」

「まあ、ランディさんらしいと言えらしいですけど」

「あはは……」

「……ユウナもお疲れ。キアから話は聞いたよ」

「テイオちゃんの解放にも力になってくれたんですつてね？」

「えへへ、まあⅦ組としてのミッションでもあったので。支援課の

皆さんが再会でできてあたしも他人事ながら嬉しいです」

「ユウナは他人じゃないよー」

キアが首を横に振った。

「ええ、わたしたちにとっては文字通り“後輩”ですね」

「ええ……クロスベルの意志を別の形で受け継いでくれている」

「君が俺たちのことを誇りに思っただけで暮れるのと同じように……俺た

ちも君のことを誇りに思うよ、ユウナ」

「……あ……グス……はいつ!!」

ユウナは涙を浮かべつつ、返事をした。

その後、エステルとヨシユア、ロイドはラインたち初代Ⅶ組と言葉を交わした。

「さてと……」

ロイドはキリコと目が合った。

「キリコ・キュービー、で良かったんだよな？」

「ああ……」

「よろしく頼むよ」

ロイドは右手を差し出した。

「クロスベルでの一件は聞いているはずだ」

「ああ。君がオーダーで動いていたこともな。まさかノエルやダドリー警部と戦っていたとは思わなかったが」

「俺はあんたの仲間を撃とうとした。なんなら後輩も傷つけた」

「そうだな」

ロイドは微笑む。

「君のことはランディやテイオ、ユウナの話からでしか知らない。だがこれだけはわかる。君は本心からそうしようとはしなかったはずだ」

「……………」

「リインにも言ったが、俺は捜査官だ。起きた事件の表面だけを見たりはしない」

「……………」

「不幸にも、俺たちと敵対してしまったが、それは互いに譲れない都合があったからだろうから」

「……………」

「世界を終わらせたくないという気持ちは、俺たちと何ら変わりないはずだ。キリコ、俺たちに力を貸してほしい。この世界を救うために」

「ロイド先輩……………」

「もちろん、あたしたちリベール組もお願いするわ」

「お姉ちゃん……………」

「それに、キリコ君を苦しめている原因があたしたちの立ち向かう相手かもしれないならなおさらよ」

「エステル……………」

「……………」

キリコは顔を上げた。

「……………元を辿れば、俺とワイズマンの因縁に過ぎない」

「キリコさん……………」

「その因縁は俺たちだけでよかった。だが奴がこの世界を巻き込む

なら……」

キリコは前に出た。

「俺でよければ力を貸そう」

「キリコ君……!」

「ありがとう、キリコ」

ロイドはキリコと固い握手をした。

「良かったね」

「ええ。わだかまりもなくて何よりだわ」

キーアとレンは笑みを浮かべた。

「フフ……揃っているようだな」

奥から、オーレリアが現れた。

「分隊長……」

「ふふ、お疲れ様です」

(……あれが……)

(ヴァイスラント決起軍指令、オーレリア・ルグイン將軍ね……)

(……つ、強そうね……)

(ああ……当代最高の剣士の一人だろう)

ロイド、エリイ、エステル、ヨシユアはオーレリアの存在感に目を離せなかった。

「リベール遊撃士協会、ならびに特務支援課の諸君。オーレリア・ルグインだ。お初にお目にかかる」

オーレリアはエステルたちを見回す。

「その前にキュービー、そなたにはやってもらうことがある。そちらへ」

『!』

その場にいる者たちはキリコを見た。

「……」

キリコは無言で近くの部屋に入った。

「他の者ともそれぞれじっくり話したい所だが早速、会議を始めた  
いと思っいな」

オーレリアは姿勢を正し、奥の方を見た。

「あ——」

「なっ……!?!」

(……やっぱり……)

奥から、黒服を連れた温厚そうな男性と、帝国とは異なる兵士を連れた抜け目なさそうな男性が現れた。

「やあ、特務支援課の諸君。2年ぶりくらいになるのかな？アリオス君は来ていないみたいだが」

温厚そうな男性は特務支援課に話しかけた。

「ご無沙汰しています、閣下」

「アリオスさんは別件で今回は立ち会えませんでした。閣下によりしくと言付かっております」

ロイドは胸に手を当てながら答えた。

「そうか……まあ彼の立場なら忙しいのも無理はないだろう」  
温厚そうな男性はスーツの襟元を整えた。

「皇太子殿下、アルフィン殿下。ご無沙汰しております。ユーゲント陛下の一件とオリヴァルト殿下の不運……遅まきながらお悔やみを述べさせていただきます」

「……ありがとうございます、閣下」

「まさか閣下御自らいらっしやるとは夢にも思いませんでした」

「ふふ、私としても信じられないような心境ですよ」

温厚そうな男性はミュゼに向き直った。

「ミルディーヌ公女殿下。改めてお招きいただき感謝します」

「ふふ、こちらこそ。お目にかかれて光栄です、閣下」

ミュゼは優雅にお辞儀をした。

「ハハ、非公式ではあるが、まさに歴史に残る会議となりそうですね。おっと、特務支援課の諸君とは2年ぶりくらいだったか？」

「ええ、西ゼムリア通商会議以来ですね」

「ご無沙汰しています、閣下」

「うむ。そうだったな」

抜け目なさそうな男性はセドリツクたちの方を向いた。

「皇太子殿下にアルフィン殿下、公女殿下もお初にお目にかかります。ちなみに——わたくしの事はご存知でいらつしやいますかな？以前、兄君とは一度、会議で——緒させていただきましたが」

「ふふ……はじめまして。ようこそお運びくださいました。ロツクスミス大統領閣下」

『!』

ミュゼの言った名前にリインたちはぎよつとした。

「ま、まさか……」

「ハハ……そう来たかよ」

「呆れましたわね……」

「ハハ、大公閣下。改めて名乗った方が良さそうですね？」

「ええ——では私の方から」

温厚そうな男性は胸を張った。

「レミフェリア大公、アルバート・フォン・バルトロメウスだ。お初にお目にかかる、トールズ士官学院の諸君」

「おほん……」

抜け目なさそうな男性は咳払いをした。

「カルバード共和国大統領、サミュエル・ロツクスミスという。恐らく今、この場にいる者としては最もあり得ないかもしれないがね」

(……レミフェリアのトップにまさかの共和国大統領か)

(ああ……よもや影武者でもあるまい)

(だ、だがおかしいだろう!?共和国大統領がこんな場に……)

「まあ、それだけの事態という訳だ。マキアス・レーグニツツ君。それとユーシス・アルバレア公爵代行にフィー・クラウゼル君だったかな？」

「な……」

「先輩たちのことを……」

「……なるほど。そっちのお姉さんか」

「やはり共和国の諜報関係者だったようですね」

フィーとアルティナはロツクスミス大統領の側にいる女性を見つ



める。

「ええ。私はCID（共和国中央情報省）のカエラ・マクミラン特務少尉よ。ハーキュリーズにも籍があるわ。その節は世話になったわね」

「じゃあ、そちらの方は……」

「改めまして——大公付秘書官、ルーシー・セイランドといいます。ふふ、先日は失礼しました」

「セイランドって、聖ウルスラ医科大学の……？」

「ええ。私の叔母に当たるの。大公閣下ともご学友なの」

「彼女はユーゲント陛下の手術の執刀医を任されると聞いた。両殿下、彼女の医師としての腕は本物です。必ずや、陛下はご快復なさるでしょう」

「ありがとうございます、大公閣下」

「そのお言葉だけでも十分ですわ」

セドリックとアルフィンはアルバート大公に礼を言った。

「ところで、例の青年とやらは？」

ロックスミス大統領は口を開いた。

「例の青年？」

「閣下、それは……」

「いや、オーレリア將軍から聞いたのだが、公女殿下には専属の護衛人がいると聞いたのでな」

「専属の護衛人？」

「ミュゼ？」

「え、ええ……」

「そやつなら……ああ、来たようです」

オーレリアの見つめる先から、黒いスーツを着こなし、サングラスをかけたキリコが歩いて来た。

「……………え？」

「キリコ……………？」

「ふふふ……………」

「……………」

ほとんどが呆気にとられる中、アンゼリカは微笑み、ミュゼは密かにオーレリアを睨んだ。

「ほう、彼が公女殿下の」

「年若いが、腕の立ちそうな人物ではありませんね」

ロックスミス大統領とアルバート大公はキリコを見つめる。

「……………」

キリコは姿勢を正し、無言で受け流していた。

(キリコさんがミュゼちゃん護衛人……?)

(どういうことでしょう、ユーシスさん)

(いずれも話す。今は置いておけ)

ユーシスはアルティナに抑えるよう言った。

「レミフェリアと共和国のトップが来てるってことは……………」

「ああ、南より訪れたもう一組のゲストというのは……………」

「……………」

「……………」

「ふう、来たみたいね」

エステルはため息混じりに笑みを浮かべた。

「おいおい……………」

「……………」

リベール組は歩いて来たゲストを見つめる。

「あ……………」

「リベールの至宝……………」

「ふふ、まさかこの場にいらっしやるなんてね」

「……………」

リインは目を見開いた。

「遅くなりました」

「いや、しかし豪華な艦ですなあ」

「お招きいただき、誠にありがとうございます」

青い軍服の女性と軍服の中年男性と可憐な娘はリインたちの前に

歩いて来た。

「リベール女王アリシアが名代、クロードディア・フォン・アウスレーゼと申します。皆様、どうぞお見知りおきを」

「同じくりベール王国軍中将、カシウス・ブライトであります」

「同じくりベール王国軍王室親衛隊少佐、ユリア・シュバルツと申します」

リベールからのゲストたちはそれぞれ挨拶をした。

「時間が惜しい——早速ですが会議を始めるとしまししょうか？」

「そうですね」

「確かに時間も惜しい」

「では、参りましょう」

「行つて参りますね」

カシウス中将の一声で、アルバート大公、ロックスミス大統領、セドリック、アルフィンが続く。

「参りましょう、公女殿下。それとキュービー、そなたもな」  
「……………」

キリコはミュゼとオーレリアと共に奥の会議場に向かった。

「はあ~~~~！」

ユウナは大きく息を吐いた。

「大丈夫かい？」

「は、はいなんとか…………」

「それにしてもキリコさんがミュゼさんの専属護衛人ですか…………」

「ユーシスとゼリカは知ってんだろ？」

「ああ」

「抑止力つてやつさ」

「抑止力？」

「キリコ君は内戦時に貴族連合軍をたびたび脅かしていた。内戦が終結し、領邦軍が統合地方軍に再編成された今でもキリコ君の脅威は深く刻まれているそうなんだ」

「よっぽどおっかなかつたんだな」

「僕たちも本気のキリコの前には手も足も出ませんでしたから……」

「ロイド先輩やエステルさんたちが来てくれなかったらどうなってたか……」

「湿地の時か……」

「でも話を聞く限り、ユウナちゃんたちを諦めさせるつもりだったみたいね」

「でも、大きな誤算だったみたいですね」

「ああ。諦めるってことを知らねえ奴らだからな」

「そうだね」

特務支援課のメンバーは笑みを浮かべた。

「それからどうなったのですか？」

「うん。他にもキリコ君を取り除こうという動きがあることがあったそうなんだ。リイン君たちが遭遇したチャールズ・ジギストムンド一派は暴走に近かったようだけどね」

「統合地方軍内でもリインと違い、しこりが残っていたそうだ」

「そんなことが……」

「そこでオーレリア將軍とイーグレット伯爵、そして私が相談して決めたんだ。彼女がカイエン公就任と同時に、彼をカイエン公専属護衛人として発表することで取り込んだポーズを取ろうとね」

「厄介な存在なら取り込むことで反発を抑える効果もあるからな」

「そういうことだったんですね」

「ま、本人は取り込まれたとは毛ほども思っていないだろうしね」

アンゼリカは笑みを浮かべた。

「良いんですか、それで」

「単なるポーズのためだからね。アルバイトだと思えばいいさ」

「どんなバイトですか……」

アンゼリカの言葉にリインは呆れた。

「キリコ side」

ミュゼの後ろで聞いていたが、やはり尋常ではない。

リベール、カルバード、レミアフェリアの三国軍による反攻作戦。さらに教会や猟兵团などの第三勢力も取り入って帝国軍を迎え討つという。

正に世界大戦と呼ぶにふさわしいだろう。

ミュゼは一見堂々としているが、僅かに肩が震えている。

オーレリアからも注視しておけと言われたが、やはり無理をしている。

ユウナのように何かのきっかけで暴発することもあるかもしれない。

(最悪の事態に備えておく必要があるな)

会議は一旦休憩に入った。

会議の参加者たちは新旧Ⅶ組、リベール組、特務支援課、その他と雑談していた。

俺はミュゼと共に大公らと話していた。

「それにしてもお美しくなられた。亡きアルフレッド公子殿や奥方もお喜びになられているだろう」

「ありがとうございます、おじ様」

セイランド秘書官によると、ミュゼの父親と大公は友人同士だったらしい。

「そういえばおじ様、彼女はお元気ですか？」

「ああ、幼少の頃によく一緒に遊んでいたんだね。元気……と

言えば元気だが……はあ……」

大公はやけに大きなため息をついた。

「？」

「キリコさんはエルフェンテック社という企業をご存知ですか？」

セイランド秘書官は俺に問いかけてきた。

「確か、クロスベルにある投資会社か。荒稼ぎと揶揄される強引なビジネスで有名らしいが」

「やはり知っていたか……」

大公はさらにため息をついた。

「？」

「エルフェンテック社の取締役はリーヴスラシル・フォン・バルトロメウス。レミフェリア公国の第一公女にあたる方です」

「ということは大公の」

「姪っ子さんにあたりますね」

「女の子だからと甘やかし過ぎたよ……」

大公は肩を落としていたが、どうでもいい。

次に、クローディア王太女とブライト中将与話すことになった。

「うちのじゃじゃ馬が世話をかけたみたいだな」

「どちらかと言えば、俺の方ですが」

俺はブライト中将与クロスベルでの出来事を話していた。

「しかし見れば見るほど凄いな。会議の時も感じていたが、隙がない。君くらいの年の頃の俺でさえこうはならなかった」

「そうですね」

「それを踏まえてなんだが、リベール王国軍に――」

「謹んで辞退します」

今さら軍に入る理由もないしな。

「ラインフォルト社にZCF、結社、二大猟兵団。それに続いてリベール王国軍ですか」

「………とんでもないスカウトですな」

「すごいですね」

「ちなみにお聞きしますが……」

「大丈夫です。キリコさんは全て断っています。そもそも、誰かの下に付く方ではありませんので」

「うーん、彼のような人材がいれば私も堂々と退役出来るんですが」

「ダメですよ。まだまだ頑張っていたただかないと」

「クローゼの言うとおりにか」

クローディア王太女とユリア少佐は微笑みを見せている。

「誰か俺を引退させてくれないものか……」

ブライト中将是深いため息をついた。

クローディア王太女らと入れ替わりに、ロックスミス大統領らがやってきた。

「素晴らしい艦ですな」

「ありがとうございます」

「ここから見る景色が初めて最後と思うと、惜しい気がしますなあ」

「閣下……」

確かロックスミス大統領の任期は今年度までらしいな。

「お疲れ様でした、と申し上げるべきでしょうか……？」

「ありがとうございます。まあ、これを機に楽をさせていただきますますよ。後のことは彼に任せておけば良いでしょうし」

「ですが閣下、あの選挙のことは……」

「カエラ君」

ロックスミス大統領がマクミラン特務少尉をやんわりと叱責する。

「も、申し訳ありません……」

「申し訳ない。お見苦しい所を」

「いえ。政治とはそういうものでしょうから」

「お気遣い痛みいります」

どうやら裏で色々あったようだが、俺には関係ない。

「とはいえ、これは大統領としての最後の仕事。残る気力を振り絞って努めさせていただきますよ」

「はい。よろしく願います」

ミュゼの言葉を機に、ロックスミス大統領らは他の所に行った。

「キリコ side out」

「ぶーっ」

ミュゼはソファアに座った。

「……………」

キリコは紅茶をそっと出し、ミュゼの前に座った。

「ありがとうございます」

ミュゼは紅茶を飲んだ。

「落ち着いたか？」

「はい、なんとか……」

「……………」

「来る所まで来てしまいましたね……」

「そうだな」

「数日後には開戦、ですね」

「大地の竜作戦と同日だったか」

「はい……」

ミュゼは目を伏せた。

「キリコさん……私は……」

「無理はするな」

「え……」

ミュゼの肩が一瞬揺れる。

「む、無理だなんて……」

「誤魔化せるとでも思ったか？」

キリコはミュゼを見つめる。

「俺だけでなく、オーレリアやセドリックは気づいている。おそろ

くブライト中将もな」

「……会議後のアイコンタクトはそういうことだったんですね

……………」

ミュゼは再び目を伏せた。

「ごめんなさい……」

「責めているわけじゃない。兵士の視点からでしか戦争を知らない

俺には、お前の苦しみは憶測でしかわからない」

「いえ……きつとキリコさんが考えているとおриだと思えます」

ミュゼは立ち上がり、キリコの隣に座った。

「もう……疲れちゃいました……」

「……………」

「どれほど策を練っても、どれほど先を視ても、帝国側に有利な状況は変えられません。さらにこれから、宰相の息のかかった方々がこのパンタグリユエルを潰しに来るでしょう」



「……………」

「結局……私には越えられなかったんです。時代が生んだ傑物、ギリアス・オズボーンに……」

「……………」

「……………キリコさん」

「なんだ」

「私は……どうしたら良かったんですか……?」

「ミュゼは懇願するように問いかけた。

「お前にわからないものが俺にわかるはずないだろう」

「キリコは素っ気なく言った。

「……………」

「ミュゼの顔は深く沈んだ。

「……………」

「……………」

「あいつらなら、Ⅶ組ならわかるかもしれないな」

「それ……は……」

「そろそろ、あいつらを頼ってもいいだろう」

「はい……………」

「それと」

「キリコはミュゼと目が合った。

「俺はお前の護衛人だからな。お前を守るのが仕事だ」

「……………」

「ミュゼの目から涙が溢れる。

「だから無理はするな」

「っ!」

「ミュゼはキリコに抱きついた。

「キリコ……さん……………」

「どうした」

「もう少し……………このままで……………いてください……………」

「……………ああ」

「うう……………ぐすつ……………ひぐつ……………」

「……………」

「うっ……ああああ……っ！」

ミュゼの心の奥底に溜め続けていた想いが一気に溢れ出た。

(ワイズマン……これもお前のシナリオの内だとするならお前は間違えた)

ミュゼの想いを悟ったキリコは静かな怒りの炎を燃やす。

(必ずこの世界から葬ってやる。それまでせいぜい神を気取っていろ……！)

## 会議②

「キリコ side」

その後、会議が再開され、千の陽炎作戦はまとまっていた。主宰はあくまでもミュゼだったが、軍の顔役とも言える最高司令官はブライト中將が引き受けることになった。

過去の功績もそうだが、これはブライト中將なりの配慮だろう。

いくら異能を持つていようと所詮は貴族の子女。

何十、何百万人の犠牲が出るであろう戦争を間近で見れば平静ではいられないはずがない。

下手をすれば心が壊れるだろう。

それは二代目VII組にも言えるだろうが。

「キリコ side out」

「てつきりアンタが引き受けると思ったが」

「フフ、この場において、彼以上の適任者はおるまい」

会議が終わり、会食の準備が進む中、キリコはオーレリアと話していた。

「それはそうと、ミルディーヌ様の心の壁を取り去ったこと、褒めてやろう」

オーレリアは笑みを浮かべた。

「褒められる謂れはない」

「そういうな。そなたの生存が確認出来ぬ間はあまりに張り詰めていた。この会議そのものが頓挫するやもしれなかったのだ」

「そうか……」

キリコは会食前に雑談するゲストたちを見回した。

「……キュービィー」

「なんだ」

「そなた、本気でこの地を去るつもりか？」

「それで丸く収まるならな」

「イーグレット伯爵閣下にも言われたそうだな。ミルディーヌ様が

ら離れるなど」

「俺にそんな資格はない」

キリコは別の場所へと行こうとした。

「F……ファイナ、だったか」

「……………」

「そなたの前世の恋人らしいが、やはりそちらを選ぶのか？」

「……ファイナは死んだ。いや……………」

キリコは振り返った。

「……………俺が殺した……………」

「!？」

予想外の言葉にオーレリアは硬直した。

「……………」

キリコはそのまま行つた。

「……………」

オーレリアは呼び止めることすら出来なかった。

その後、各国首脳を含めた客人全員が饗応の間に集い、カイエン公爵家主宰によるささやかだが豪華な会食が始まった。

遅めの昼食だったが、参加者全員が舌鼓を打ちつつ会話に花を咲かせ、こういう機会でもなければ縁がないような出席者同士の交流も深められた。

楽しかった会食も終わり、とうとう今回の会議の目玉である千の陽炎作戦の内容が明かされた。

「以上が、大地の竜に対抗する千の陽炎の概要となります」

「……………」

遂に明かされた千の陽炎作戦の内容に会議の出席者以外は言葉をなくした。

「……………やはり……………」

「大方、予想通りだけど……………」

「こうして見てみると……………凄まじい内容の作戦になりますね」

「おそらくゼムリア史上、類を見ないものとなるでしょう」

「……状況は把握しているからこうなった事情も理解はできます。でも、本気なんですか？」

エステルは会議の出席者たちに問いかけた。

「……大規模な徴兵によって帝国軍の兵力は激増しています。現時点でおよそ120万……開戦までもう少し増えるでしょう」

「対して共和国軍はどんなにかき集めても80万……対抗して徴兵しようにも先の選挙で政権自体が不安定だ」

「……っ！」

ランデイの指摘にカエラ少尉は奥歯を噛んだ。

「加えて兵器の性能差に圧倒的な物量の差もありますね。飛行戦艦や主力戦車の性能差も現時点ではエレボニアが有利。機甲兵の存在も大きいでしょう」

「ええ……ヴェルヌ社の生産ラインが追いついていないということもあるけど。それ以上に、帝国はこの数年の積み重ねを全て戦争のために投入できる……」

「そうすると、2年前の戦争も布石だった可能性があるわけね」

レンはアリスの話から仮説を立てた。

「ええ、間違いないでしょう。4年前の我が国での異変、14年前の百日戦役すら……大地の竜の遠大な布石であったとわたくしたちは結論しています」

「ッ……」

「……………」

「クソツたれが……」

アッシュ、ヨシユア、アガットは百日戦役という言葉に複雑な想いを抱いた。

「その大地の竜を制するのがミルディーヌ公女の千の陽炎。共和国軍、リベール軍、レミフェリア軍、ヴァイスラント決起軍。さらにレマン、オレドの義勇軍にクロスベル、ノーザンブリアの抵抗勢力」

「それら全てを連携させる対帝国軍・各個撃破作戦ですか」

「うむ、その通りだ」

ユーシスの指摘にロックスミス大統領は頷いた。

「先ほど出たように我がカルバードの総兵力は80万人。そこに決起軍10万人が協力する形となります」

「さらにレミフェリア公国軍の総兵力が8万人、リベール王国軍の兵力がおおよそ12万人となりますね」

「加えてレマンとオレドの義勇軍が合わせて2万、クロスベルやノーザンブリアから1万が見込まれている」

カエラ少尉、ルーシー秘書官、アルバート大公はそれぞれの兵力を挙げた。

「他にも、非公式ながら教会の騎士団や典礼省直属の僧兵庁も動く段取りになっているのだろう」

「僧兵庁とやらはどれくらいが見込める?」

「3万だな。法国の治安維持全般を任されているから、数はかなりのものだ」

ガイウスは事情を知らない者たちに説明した。

「大小様々な猟兵団か。おおよそだけど4万は見込めるかな?」

「そんなに……」

「当然、あたしたちも入ってるよ」

「……星座はどれくらい投入する?」

「大隊一個ぐらいだから……1200人くらいかな」

「指揮は?」

「ガレスに任せるつもり。あたしはキリコとお坊っちゃんについてくから」

「本当に叔父貴は来ねえんだな?」

「どっちが勝っても世の中荒れるだろうからって静観決め込むみたい」

『っ!』

シャーリイの遠慮のない言葉に、何人かが奥歯を噛む。

「それが戦争というものだ。あの百日戦役後、リベールも帝国もかなり荒れたと聞く」

見かねたカシウス中將が口を開いた。

「父さん……」

「……………」

エステルとアガットは複雑そうにカシウス中將を見た。

「続いて、人事に参りたいと思います」

ミュゼは全員に聞こえるように告げた。

「人事……………」

「元々別個の軍事組織を連携させるのは至難であることは承知しています。そのため、会議で決定したのが本作戦の要となる人事です」  
(それなら分校長なんじゃ……………)

「リベール王国軍、カシウス・ブライト中将閣下に千の陽炎作戦の最高司令官をお願いすることになりました」

「……………」

「……………な……………」

リインとデユバリイは言葉をなくす。

「…………クク。凄まじい手を考えやがる」

「カシウス・ブライトといえば教団掃討作戦でも総指揮を執った……………」

「おまけに過去、帝国軍を破った当代最高の軍略家ですか……………」

「……………やっぱりそうなるのか」

「それを、父さんも引き受けたのね？その作戦が何をもたらすのか全部わかった上で」

ヨシユアとエステルは父を見つめる。

「ああ……………史上最大規模の戦争……………莫大な数の戦死者に民間人の被害も相当でるだろう。数十万、場合によっては数百万の犠牲者が出るかもしれない」

「だったら……………」

「……………言うまでもなく最悪と言える選択肢だと思えます。ですが、共和国侵攻の真の狙いが2つの至宝に関係するもの、そして帝国が呑み込んだ地域が呪いに侵されるとなれば話は別です」

クローディア王太女はエステルを制止しつつ、言葉を発した。

「あ……………」

「それは……………」

「表と裏の連動……………」

「そうだ。このままでは帝国は共和国を呑み込み、全土を呪いで染め上げるだろう。そうなれば最後、周辺諸国、そして大陸全土を呑み込んで行くはずだ。巨イナルー、だったか。究極の存在を生み出す目的のために」

（だとしたら、ワイズマンの目的はなんだ？）

キリコは宿敵の狙いを掴みあぐねた。

「それだけは避けなくてはならない。最悪の選択を撰んだとしても、世界を終わらせないために」

「……………両殿下もご了承されたのですね？」

「……………はい。元をたどれば帝国に端を発する話ではありませんが」

「賛成はとも出来ませんが……………皇帝家の人間として了承いたしました」

セドリックとアルフィンは毅然と答えた。

「……………姫様……………」

『……………』

リインたちは複雑な表情を浮かべた。

「これが今回の会議の結論だ。我々が集まったのも理解してもらえないのではないか？」

「その上で諸君らに聞きたい。本作戦に同意するか否か。更に協力してもらえるかどうかを」

「当然、相談すべき相手が他にいるなどの事情もあるだろうが、時間がない。この場をもって返答をもらいたい」

「遊撃士協会、特務支援課。そしてトールズVII組メンバーを含む、トールズ士官学院の三者にな」

ロックスミス大統領らの言葉を受け、リイン、エステル。ロイドが代表してそれぞれ領いた。

最初にロイドが前に出た。



「自分たち特務支援課はあくまでも旧自治州警察の一部署です。各国の方針に反対できる立場でもなく、事態の深刻さも理解しているつもりです」

ロイドは顔を上げた。

「ですが到底、作戦には同意出来ません。この事態を何とかするための可能性——あくまでそれを探っていきたいと思います。いつかクロスベルが自治と独立を堂々と取り戻せるようになるためにも」

「……！」

「……そうか……」

続いてエステルが前に出た。

「遊撃士協会も、作戦に同意は出来ません。あたしたちは支える籠手——民間人の安全と保護を第一とします。と言っても、首脳の皆さんがその結論に至った理由も分かるから……」

エステルは胸に手を当てた。

「だからレマン総本部に掛け合って民間人の避難準備はしてもらいます。同時に、ロイド君たちと同じく、あたしたちなりに他の解決の糸口を探る——それが遊撃士協会の総意です」

「エステルさん……」

「……フフ……」

最後にリインが前に出た。

「いまだ行方不明者も多いため、ツールズ全体としてではありませんが……ツールズのⅦ組として改めて意思表明をさせていただきます」

「《世の礎たれ》——思えばその言葉が自分たち全員の根底にずっとありました。無論、大戦の果てに呪いを制し、荒廃の中に礎を見出す方法もあるにはあるでしょう」

「ですが、呪いは絶対ではありません。目に見えぬ大きな流れに翻弄されながらも懸命に抗い、手を繋ごうとする人々は大勢いる……自分たちはそれを確信しました」

「世界にとって保険は必要でしょう。そちらは千の陽炎にお任せします。ですが自分たちもギルドや特務支援課同様、第三の道を見出だ

したいと思っています。呪いが引き起こした事件への対処、そして異世界の干渉が混じり合った七の相克にどう向き合うか」

リインは胸に手を当てた。

「残された時間はあまりに少なく、可能性があるのか動画すらわからない……ですが一歩一歩踏みしめつつ、前へ」

「それが亡きオリヴァルト殿下が目指していた道でもあるでしょうから」

「……あ………」

「……リインさん………」

リインの言葉はセドリックとアルフィンの胸に深く染み渡った。

「……グス……そうね………」

エステルは目尻をこすった。

「……オリヴァルト殿下が目指していた道、か」

ロイドは感慨深げに腕を組んだ。

「……ふふっ………」

ミュゼは微笑んだ。

「やれやれ……甘いというか、若いのが。だがいつの時代も世を変えるのは若者に馬鹿者か。そう思わんか、カエラ君」

「はい……100年前に革命を起こしたシーナ・デイルクも、うら若き乙女だったとか」

「加えてよそ者という説もありますな。いずれも枠組みに囚われぬ存在……考えてみればオリヴァルト殿下は全ての条件を満たしているらっしゃったのか」

「ハハ……そうですね。そしてその精神は確実に次の世代へと受け継がれている」

「皆さんのご意志、拝聴しました。千の陽炎は既に動いていますが、互いに配慮できればと思います」

「作戦の参加は不要——だが出来る範囲の協力をお願いします。情報共有や民間人への配慮などな」

「少なくとも大地の竜よりは互いに協力し合える余地は多かろう。」

リベール遊撃士協会に特務支援課、かつての大事件を解決した英雄たちが何をやってくれるか興味深くもある」

「……恐縮です」

「英雄なんて面映ゆいですけど、協会できそうな所はお願いします！」

ロイドとエステルの言葉をもって、今後の方針が固まった。

「ふう……一時はどうなるかと思っただが」

マキアスは肩を竦めた。

「厳しい状況も再認識したが、果たすべき使命も見えてきたな」  
ラウラは腕を組んだ。

「はい、戦争開始までに来ること——ううん、たとえ戦争が始まってもやれることはあるはずですよね！」

「ああ。それもⅦ組やツールズとしてどう動くか……教官たちの相克と合わせて見極めていく必要があるだろう」

「デツケエ借りもあることだしな」

「はい……！」

「……………」

二代目Ⅶ組は決意を固めた。

「ハハ……調子出てきたじゃねえか」

クロウは笑みを浮かべた。

「まあ、少しばかり楽観的すぎる気もしますが」

「良いんじゃない？これくらいは」

デュバリーの横でシャーリイが手を頭の後ろで組んだ。

『ウフフ、同感だよ』

不意にモニターが消え、スピーカーから音声が流れた。

「今のって……!?!」

「この声、以前聞いた……」

「現れやがったか……!」

(奴か……)

キリコは頭を切り換えた。

「身喰らう蛇が執行者No.0——」

「カンパネルラ、お出ましね！」

『アハハ、やってるみたいだねえ』

モニターにカンパネルラが映った。

「出たか、道化師……！」

『お久しぶりだねえ、クローディア王太女にカシウス中將。こうして見るとそうそうたるメンバーが揃ってるじゃないか』

『ウフフ、そうでしょう？』

モニターに新たに金髪の女性が映った。

「ベル！」

「蛇の使徒第三柱、根源の錬金術師か……」

『公女殿下ならびに各国の首脳方もごきげんよう。初めての方も、

お久しぶりの方もいらつしやいますわね？』

(マリアベル・クロイス……！)

「ディーター氏のご令嬢か……噂には聞いていたが」

「今や犯罪組織の最高幹部か。いやはや、大胆不敵な娘だのう」

「あはは、それは同感だけどね」

『いやいや、お前さんも人のことは言えないんじゃないやねえか？』

モニターに中年の男が映った。

『西風の旅団、参上するぜ』

「あれが西風の猟兵王……戦死したと聞いていたけど」

「団長……ゼノとレオもいるみたいだね」

『まあな。カシウスのとつつあんも久しぶりだな』

「そうだな。娘をほったらかしにしてるとは思わなかったが」

『それについてちやあ、反論できねえな』

ルトガーは頭を掻いた。

「カシウス中將もご存知とは……」

「かつては大陸に4人しかいないS級遊撃士の一人。遭遇してもおかしくない」

「ちなみにランデイさんはご存知でした？」

「噂でしか聞いたことねえ。ただ親父と叔父貴には関わるなって聞

かされたぜ」

「ま、ヤバいオジサンだったのは一目瞭然だしね」

「化け物呼ばわりはよしてもらいたいな……」

カシウス中将はため息をつくも、すぐに真顔に戻った。

『ハハ、それだけじゃないぜ』

『工房本拠地の時と同じとは思わないことだ』

『……失礼します』

さらに三人がモニターに追加された。

「シャロン……!」

「ジョルジュ君!」

「ここで来たか……」

「……先輩……」

「……レクター……」

『よつ、二人とも久しぶりだな』

レクター少佐は、クロードディア王太女とルーシー秘書官を見た。

「ええつと、お二人はご存知なんですか?」

「ええ。彼とはリベールのジェニス王立学園の同窓でした」

「私の先輩にもあたります……」

「そうだったんですか……」

ユウナは府に落ちた。

『お嬢様、皆様も。ご無礼をお許してください』

「シャロン……貴女は……!」

アリサはキツとシャロンを見つめる。

『アン——あのまま枷に嵌められていれば良かったものを』

「あいにく、枷に嵌められるのは嫌いでね。それは君も知っている  
だろう?」

アンゼリカはジョルジュを睨んだ。

「これで揃ったということか?」

カシウス中将はカンパネルラに問いかけた。

「いや、本当はもつというはずだったんだけど何人が抜けちゃっ

てぎ。仕方ないから三人ほど連れてきたんだ」

カンパネルラがフィンガー스ナップを鳴らすと、モニターにミント色の髪の毛の青年と顔に包帯を巻いた女性が映った。

『ごきげんよう、皆様。僕は《棘（ソーン）》のメルキオル。よろしくね♪』

『お初にお目にかかります。私は《金色（アウルム）》のオランピア』  
メルキオルとオランピアは挨拶をした。

『っ!?カンパネルラ、なぜこの二人を!』

シャロンはカンパネルラに対し、怒りの表情を見せた。

『そういえば、君ん所とは繋がりがあるんだよねえ?言ってみれば、親戚じゃないの』

『メルキオル、あまり喋り過ぎるのは』

『な、何この人たち……!?!』

『棘に金色だと……?』

『まさか……あなたたちは……!』

ヨシユアは最悪の答えにたどり着いた。

『さすがだねえ、漆黒の牙♪君とは一度殺り合いたかったんだ♥?』

『な、なんだ……?』

『無邪気なまでの邪悪……!』

『ふう……それくらいで。もう一人は動き出しているだろうし、とりあえず君たちはここで果ててもらおうよ』

『なんだと……!』

『それじゃ、後でね』

モニターが暗くなった。

『今のはハッキングか……』

『ええ。結社お得意の、《星辰（アストラル）コード》による介入かと』

ティオはキリコの言葉に続いた。

『ヨシユアはあの二人を知っているの?』

『顔を見るのは初めてだ。だが《庭園（ガーデン）》と呼ばれる組織

に、棘や金色という幹部がいるのを思い出したんだ」

エステルの質問にヨシユアはそう答えた。

「庭園……」

「結社以上に謎と言われる暗殺組織ね」

「噂では、あの教団と月光木馬團という組織が合流してできた組織だという」

「あの教団……」

(月光木馬團……確かシャロンさんの……)

ロイドとリインはそれぞれ思案した。

すると突然、アラートが鳴り響いた。

「これって……!」

「まさか、帝国の飛行艦隊か!?!」

「いや——違う!」

『こちらブリッジ、緊急連絡します! 9時方向から真紅の飛行艇が8隻接近! そ、その後方には280アージユ級の巨大飛行船を確認!』

スピーカーからパンタグリユエルクルーの焦りの声が響いた。

(真紅の飛行艇に280アージユ級の巨大飛行船だと……)

「チツ、そいつは——」

「まさか……リベールの異変で表れたって!?!」

「ええ身喰らう蛇が所有する史上最大の戦闘飛行空母……」

「紅の方舟、グロリアスよ」

レンがいい終えると、モニターに真紅の戦闘空母が映った。

「あ、あれが……!?!」

「なんて大ききだ……」

グロリアスのあまりの大ききに、ユウナとクルトは言葉を失う。

「なるほど……予告通りとなったか」

「しかも帝国の艦隊などではなく、結社の戦闘空母とはなあ」

周囲に反して、アルバート大公とロックスミス大統領は落ち着いていた。

「ど、どういう意味ですか？」

「まるでこの事態を予期していたかのような……」

「……会議の最後、公女殿下がある一つの予言をされたんです。この空域に帝国の飛行艦隊か結社の戦闘空母が現れるだろうと」

クローディア王太女が説明した。

「帝国の飛行艦隊ならばある意味、戦争の抑止力にはなった。この空域は国境上空。各国の首脳が乗っていると伝えれば帝国軍も無理に攻撃はできない」

（たとえ拿捕されてもあくまで国家間の交渉となるだろうからな）

「そ、そうなれば一旦、戦争どころじゃなくなる……その可能性に賭けてたんですね？」

「……ですが、彼らはそうせずに結社の戦闘空母を繰り出してきた。首脳方をこの地で葬り、更なる開戦の薪とするために……」

「あ……………」

エリイの言葉にティータの顔が青くなった。

「クソが……事が成ったら共和国軍の仕業にするつもりかよ!？」

「冗談じゃないわ!そんななこと認められない!」

「ええ——支える籠手の名に賭けて!」

エステルとサラは闘志を燃やす。

「にしてもあんたら……こうなるのをわかって俺たちを呼んだんだな?」

「はい。丁度良いので当てにさせていただきました」

「クク、心配せずともゲストの脱出路は確保している。それぞれの手勢を半分に分けて格納庫まで同道してもらおうか」

「甲板から敵部隊から多数入り込んでいる。残り半分はそちらの対処を頼みたい。右舷と左舷、二手に分かれてくれ」

「そこまで織り込み済みかよ!」

オーレリアたちの手腕にランデイが思わず突っ込んだ。

「良いように使ってくれ……!」

「時間がない……!とにかく分担を決めましょう!」

「了解です——!」



リインは右舷か左舷に向かう人員を決め始めた。

「キユービーイー、その格好では戦えまい。急いで支度を整えよ」

「ああ」

キリコは近くの部屋に入り、準備を整えた。

右舷と左舷に行くメンバーが決まった。

右舷はリインやロイドなどの男性チーム、左舷はエステルやエリイの女性チームとなった。

「——フフ。では行くのでしょうか」

「兄様、皆さん、ご武運を……！」

「キリコ君も気をつけてね！」

「了解です」

「シャーリイさん、お願いしますね」

「任せなよ」

キリコとシャーリイはカシウス中将、ユリア少佐、オーレリア、ウオレス少将、カエラ少尉らと共にゲストの護衛に回った。

「エステルたち、ロイド君たち——そしてリインたちもよろしく頼んだぞー！」

「うん……！」

「ええ！」

「お任せを！」

エステル、ロイド、リインは頷いた。

その隣ではティオたちが分析を行っていた。

「現在、結社の強化猟兵部隊と西風の連隊長が突入しているようです」

「ゼノとレオが来てるんだ。一筋縄じゃないかね」

「強化猟兵ならギルバートたちか……練度はともかく人形兵器は厄介ね」

フィーとエステルはそれぞれを分析する。

「さらに、二名ほど、別の箇所から入り込んでいるようです」

「やれやれ、気の早いことだ」

「では行くとしましょう」

カシウス中将の一声でそれぞれが向かう場所へと出発した。

「なあ、道化師さんよ」

グロリアスの船内では、ルトガーがカンパネルラに詰めよつていた。

「お前さん、正気か？」

「正気って、彼のこと？」

「ああ。よりによってあの化けモンを連れてくるなんてよ……！」

「やっぱり知ってたか……」

カンパネルラはため息をついた。

「二応、脱出路だけを通る者だけを相手にしてって言い含めてるんだけどね」

「そういう問題じゃねえ。あいつが動くってことが何を意味するのかってことだ」

「……《姿無き災厄(インビジブルテンペスト)》。あらゆる国や組織の部隊を屠っては目撃者さえ出さない徹底したやり口からこう呼ばれているんだっけ？」

「団を立ち上げる前、とある猟兵団にいた俺はあいつ一人に部隊を全滅させられたからな」

ルトガーは苛立ちまぎれに言った。

「はつきり言っただけじゃ済まねえだろう。たとえカシウスのとつあんや黄金の羅刹がいてもな」

「……キリコがいても？」

「おそらく……」

カンパネルラとルトガーはパンタグリユエルを見つめる。

「キリコ side」

「来たか」

「待ちくたびれたぜ」

俺たちの目の前に、イプシロンと古風な甲冑に身を包んだ男が立ち

ふさがった。

「イプシロン……」

「ジュノー以来だな……パーフェクトソルジャー」

「既に知っていたか。なら私に勝てないのは分かっているだろう」

「フツ、負けぬ自信があるから言っておるのだ。もつとも、そちらの方が幾分かそそるがな……」

「ククク……分かっているみてえだな」

「私語はここまでとしよう。いったい何者だ」

カシウス中将の目付きが険しくなる。

確かにこいつはただ者じゃない。

「俺はアリオッチつてもんだ。《塵殺》なんて呼ばれ方もするがな」

「……なんだとっ!」

カシウス中将は舌打ちをした。

「カシウス殿、ご存知か」

「大陸東部では『戦場で絶対に遭遇したくない存在』の一人と恐れられている存在です。まさか結社と繋がりがあつたとは」

「戦場で絶対に遭遇したくない存在、ですか……」

「この状況なら、結社の一員と言われても不自然ではないようですね」

「あゝ、生憎だが俺は結社の関係者じゃねえ。外部の助っ人つてやつや」

(助っ人だと?)

「大統領さんなら知ってるんじゃないか? 《A》をよ」

「A……!」

「まさか……」

ロックスミス大統領とカエラ少尉が顔をしかめる。

「どうやらこいつは共和国方面から来たようだ。」

「ご用件は、私たちの命でしょうか?」

ミュゼが毅然と言い放った。

「まあな。ついでにこの艦を沈めることだな」

アリオッチは笑いながら言った。

「くっ……!」

「戦いに悦びを覚えるタイプですか……!」

ユリア少佐はレイピアを、ルーシー秘書官は小型拳銃を抜いた。

「ならせつかくだ」

カシウス中將が前に出た。

「ここには俺を含め、腕利きが数人いる。多対一だが、やり合ってみるか?」

カシウス中將は棒を構える。それにオーレリア、ウオレス少將も続く。

「キリコ君、君はそちらの彼とも因縁があるんだろう? 紅の戦鬼共々そっちを頼む」

「了解……」

「ジュノーでの借り、ここで返すね♪」

俺とシャーリイはイプシロンと対峙した。

「僕を忘れてないかい?」

セドリツクが隣に立つ。

「セドリツク……」

「最後までよろしくと言ったはずだよ」

「……そうだったな。」

「お坊ちゃんのくせに見上げたもんだね」

「お坊ちゃんはやめてくださいってば」

「無駄口はそこまでだ。あいつは強いぞ」

「わかるよ……尋常じゃないってことくらい……!」

「1ミリジュの油断も許されないとさえ」

「上等——!」

セドリツクはサーベルを構える。

「待たせた」

俺もアーマーマグナムを抜く。

「構わん……死ぬ!」

イプシロンが一気に踏み込んで来た。

「っ!」

俺はアーマーマグナムの引き金を引いた。  
「キリコ side out」

## 塵殺

「死ねっ！キリコ！」

イプシロンは長槍を振り回し、キリコを執拗に狙っていた。「っ！」

キリコはギリギリでかわした。

「メルトスライサー！」

セドリツクがクラフト技でイプシロンの背後から斬りかかった。

「甘い！」

「がっ!？」

セドリツクの攻撃を見切っていたイプシロンは即座に反撃に出た。

セドリツクは長槍の石突きで腹部を打たれ、体勢が崩れた。

「マードーストレイフ！」

イプシロンの真横からシャーリーのクラフトが飛んできた。

「チッ！」

イプシロンは回避を優先した。

「アーマーブレイクII」

その隙を狙ってキリコがクラフト技を放った。

「当たらん！」

イプシロンには命中しなかった。

（この反応は……?）

キリコはセドリツクに薬を渡しながら、違和感を感じていた。

「す、すみませんシャーリーさん……」

「次は助けないからね」

「分かりました……!」

シャーリーの喝にセドリツクはさらに気合いを入れた。

（今まで殺し合ってきた俺だから分かる。イプシロンの反応速度は以前と全く変わらない）

（黒の工房で調整を受けてなかったのか……?）

（それとも、わざとか?）

「ククク、大したタマシやねえか」

アリオツチはオーレリアの宝剣を受け止めながら、セドリツクを横目で見た。

「いやマジで恐れ入った。普通なら萎縮しちまって無様な面になるもんだが、皇族つてのも捨てたもんじやねえな」

「将来、帝国の頂点に立つ御方だ。侮辱は止めてもらおう！」

オーレリアは一旦下がり、宝剣を振り下ろした。

「おっと！」

アリオツチは回避し距離を置いた。

「もらったっ!!」

先回りしていたウォレス少将が槍を打ち込んだ。

「ふっ……」

アリオツチは落ち着きを払い、槍の柄を掴んだ。

「ぐっ……い！」

ウォレス少将は槍を押し込もうとするが、びくともしなかった。

「良い読みだったが、ちと強引だな」

（この力……なんだこいつは!）

「さてと、ぼちぼち反撃といくかね」

アリオツチは槍を振り払い、戦斧をでウォレス少将に襲いかかる。

「くっ！」

ウォレス少将は身体を逸らして回避しようとした。

「甘え！」

アリオツチはさらに踏み込んだ。

（この速さは?!）

「でやっ！」

カシウス中将が戦斧に棒を叩きつけ、軌道をずらした。

「大丈夫か！」

「カシウス中将!かたじけない！」

「オーレリア將軍！」

「応！」

カシウス中将の動きに合わせ、オーレリアが宝剣を振り下ろした。

「ぐおっ!？」

アリオツチは風圧で胸部を斬られた。

「合わせろ少将!」

「了解!」

さらにウオレス少将が槍を打ち込んだ。

「うおっ!？」

アリオツチは脇腹に被弾した。

「ちいっ!」

アリオツチはオーレリアらから距離を取った。

「これが鏖殺か……!」

「絶対に遭遇したくない存在……これほどのものとは……!」

「それでも臆するわけにはいかない。ここで倒れば、千の陽炎そのものが潰滅する」

「さらに気合いを入れねばな!」

「無論です!」

カシウス中将らは最大限に集中した。

「くらえっ!」

イプシロンは長槍の連続突きを放った。

「は、速い……!？」

「ああ、うざったい!」

「防御に徹しろ。俺が抑える」

キリコはイプシロンの攻撃が止んだと同時に接近した。

「焦ったか! エアストライク!」

イプシロンは平静を保ちつつ、風属性のアーツを放った。

「くっ!」

キリコはギリギリで受け流し、アーマーマグナムの銃口を向けた。

「遅いっ!」

イプシロンはアーマーマグナムを長槍で払い、キリコに長槍を突き立てた。

「っ!!」



キリコの脇腹に長槍の穂先がかすり、出血した。  
だがキリコも脇を締めて長槍を押さえた。

「キリコさん！」

「もらったっ！」

シャーリイがイプシロンの背後に回り、襲いかかった。

「甘いっ！」

イプシロンは長槍を離し、体を捻る。

「いっ!?!」

そのままトラース・キックで反撃した。

「うぐっ！」

イプシロンのトラース・キックは腹部を正確に貫き、シャーリイの動きを鈍らせた。

「その程度の奇襲が通じる私ではない！」

「なら……これはどうよ？」

シャーリイはイプシロンの脚が離れる前に掴んだ。

「何!?!」

「ここまで段取ったんだから決めてよね……!」

「ええ!!」

シャーリイの後ろからセドリックが飛び出す。

「タリスマンソード！」

セドリックのクラフト技がイプシロンに炸裂した。

「ぐはっ!?!」

完全に不意を突かれたイプシロンは体勢を大きく崩した。

「クリアブラストII」

キリコのクラフト技が追い打ちをかける。

「くっ!キリコオオオッ!!」

イプシロンの表情は苦悶に歪む。

如何にパーフェクトソルジャーと言えど、ダメージを受ければ隙が生まれる。

その隙を察知したキリコはイプシロンに接近する。

「終わりだ……!」

大型ナイフをイプシロンの腹部に突き刺した。

「キ、キリ……コ……!!」

「……………」

イプシロンは血を吐いて倒れた。

「これほどとは……………」

「闇の相場にて、小国の国家予算並みの懸賞金がかけられたという突拍子もない噂がたてられたが、信じるしかなさそうですね」

「……………閣下もその事を……………」

「ええ。長いこと政治屋をしていると、ほの暗いモノは嫌でも耳にすることもあります」

ミュゼの言葉をロックスミス大統領はそう返した。

「しかし、腕利きであることには変わりない。彼らも苦戦するわけだ」

「……………ええ。認めざるを得ないようです」

カエラ少尉は複雑そうにキリコを見た。

「大統領閣下、今は良いのでは？」

「ピンチであることに変わりはありませんし……………」

クローディア王太女とアルフィンは心配そうに身構えた。

「これから国務を担う貴女方に一つ助言をさせていただきます」

ロックスミス大統領は二人の方を向いた。

「分の悪い勝負こそ、己の直感を信じることです」

「直感……………」

「私は彼らに勝利を託しました。後は後ろで構えていればよいのです。ミルディーヌ公女殿下、貴女もそうなのでは？」

「……………」

ミュゼは一旦、間を空け、顔を上げた。

「はい。私も、彼らに託しました」

「ミルディーヌ……………」

「お強くなりましたな。ご両親も草葉の陰で喜ばれておられるでしょう」

「ふふ、ありがとうございます」

ミュゼはアルバート大公に礼を言い、キリコの方を向く。

(……キリコさん……)

「やったか、キュービー」

「閣下と紅の戦鬼を真っ向から破ったというパーフェクトソルジャー……恐ろしい相手でしたな」

(なんとという男だ……追い込まれても顔色一つ変えずに。こりやとんでもない奴が現れたな……)

カシウス中将はキリコの力量に、フツと笑みを浮かべる。

「ククク、やるじゃねえか」

アリオッチはイプシロンを倒したキリコを見て、ニヤリと笑う。

「18のガキってハナシだが、あの風格はかなりの修羅場を潜ってねえと出せねえ」

「……………」

「ただ、ちと真面目過ぎるな」

「何？」

オーレリアは怪訝な顔をした。

「もつと殺し合いを楽しめよ。んな突っ張ったツラじや息が詰まるだろうよ」

アリオッチは笑みを浮かべる。

「……………」

「へえ？」

シャーリイは不敵に微笑んだ。

(ギリツ……！)

ウオレス少将は奥歯を噛む。

「悪いがそんな余裕はない」

キリコはアーマーマグナムに弾丸を装填した。

「さっさと倒す」

「フツ、そう来なくてはな」

「こっからは喰い合いだよ……！」

オーレリアとシャーリイは獰猛な笑みを浮かべる。

「殿下、参りましょうぞ」

「無論です、少将……!」

セドリツクとウオレス少将は得物を構える。

「これも若さか。俺もまだまだ負けられんな」

カシウス中將は前に出た。

「引退するつもりはないようだな?」

「君たち若者を時に導き、時に壁として立ちはだかるのも、年長者の

務めだからな」

キリコの問いにカシウス中將は泰然と答えた。

「ハハハ、良いねえ。とりあえずは」

アリオッチはイプシロンに近づき、懐から水晶のようなものを取り出した。

そして魔法陣を形成し、イプシロンを転移させた。

(イプシロン……)

「そちらも持ってたんだ、ソレ」

「生憎、俺は魔術なんかは使えねえんでな。そんじゃ、始めるとするかね……!」

アリオッチの表情が変わり、凄まじい闘気が溢れ出る。

「っ!」

「なんとという気当たり……!」

「ここからが正念場か」

「そんじゃ、行こっか!」

「行くぞ!!」

カシウス中將の指揮の下、キリコたちはアリオッチに挑む。

「イプシロンがやられたみたいだね」

パンタグリユエルの甲板でカンパネルラが呟く。

「彼、でしょうか」

「間違いないだろうね。やっぱり学習プログラムだけじゃあ、無理みたいだ」

「じゃあ、どうすんだ？」

「ロッチナ、つまりルスケ大佐曰く、イプシロンには身を焦がすほどの憎悪が必要らしい。意地になって何もしなかった工房長には気の毒だけど、勝手に進めさせてもらおうかな」

「……どうだっていい」

黒のアルベリヒの名を聞いたレクター少佐は顔をしかめた。

「OZシリーズの片割れだっけ？大層なお人形らしいけど、それこそどうだって良くない？もう死んじやったんだからさ」

「っ！」

クレア少佐はメルキオルに怒りの視線を向ける。

「アハハ、怒った？ゴメンね、僕って結構壊れちゃってるからさあ

♪

「この……！」

「メルキオル、お戯れはそこまでで。そちらもどうかお静まりください」

オランピアが止めに入った。

「聞きしに勝る人たちのようだね」

「僕だって本当は呼びたくなかったよ。だけど他にいなくて」

「あのお二人は？元月光木馬團の」

「破戒と黄金蝶は別件でノーザンブリアに行ってもらったよ。何よ、聖女さんが猛反対してさ」

「あのお二人の力を考えるなら、至極当然かと」

クルーガーは顔をしかめながら言った。

(やれやれ……こりや負け戦になりそうだな)

ルトガーは嘆息した。

その数分後、遊撃士協会、特務支援課、新旧VII組が到着した。

「ククク……こんなもんか？」

「チッ！」

「しぶと……！」

オーレリアとウオレス少将は舌打ちをした。

オーレリアたちは数の差を以て、相手を圧倒していた。

だがアリオツチの桁外れのタフネスと身に纏う甲冑の不可思議な力の前に疲労が蓄積されていった。

「あの甲冑がなんかアヤシイよね……」

「ああ。もしかすると、人外の代物なのかもしれん……」

「人外……古代遺物、か？」

「ああ。そのとおりだ」

キリコの指摘にアリオツチは笑った。

「《羅喉の牙》つつつてな、甲冑と戦斧を合わせて一つの古代遺物のさ」

「羅喉の牙……」

「ハハ、冗談であってほしいな……!」

セドリックは軽口を叩き、揺れかけた闘志を持ち直させた。

「クク、あいにく冗談じゃあねえのさ。お前さんなら分かるだろう？」

アリオツチはカシウス中将を見た。

「……先ほど打ち込んだ箇所が修復しつつある。その奴の言うとおり古代遺物なのだろう」

「だ、そうだぜ？」

「それってブツ叩いたらその都度治ってくつてこと？」

(加えてこのタフさ、これほど面倒な敵は記憶にないな……)

「だが絶望するには早計だ。治っていくというなら、修復力を上回る攻撃に出ればいい……!」

「ふ、リベールの剣聖殿は随分とスパルタですな……!」

「だが、真理ではあるな!」

「そんなじゃ、次行ってみよっか!」

「行きましょう!」

ウオレス少将、オーレリア、シャーリイ、セドリックに闘志がみなぎる。

「君はどうだ？キリコ君？」

「言われるまでもない」

キリコは集中力を高める。

「ハツハツハ！来な！」  
アリオツチは戦斧を構えた。

「フレイムグレネードⅡ」

キリコの先制攻撃を皮切りに、カシウス中将たちは動き出した。

「ブラッドデークロス！」

「メルトスライサー！」

シャーリイとセドリックが先陣を切った。

「ハアツ!!」

アリオツチは構わず突っ込んだ。

「コイツ……!?!」

「ハンテイングスロー」

キリコはオーレリアらに紛れて投げナイフを放った。

「甘えっ！」

アリオツチは兜の鉢金で投げナイフを防御した。

「なら……」

キリコは冷静にアーマーマグナムの引き金を引いた。

「続くよ！ゼルエル・カノン！」

セドリックは火属性の最上級アーツを放った。

「チッ！」

視界を遮られたアリオツチは真横に飛ぶ。

「良い仕事をしてくれる……!?!」

予め待機していたカシウス中将はアリオツチに連続突きを叩き込んだ。  
んだ。

「かはっ!?!」

アリオツチは体勢を崩し、隙を見せた。

「四耀剣！」

「光牙一閃！」

オーレリアとウオレス少将がクラフト技を放つ。

「ぐおっ！ハ、ハハハ……!?!良いぜ、それでこそ殺しがいる!!」

アリオツチは戦斧に闘気を纏わせ、薙ぎ払った。

「っ!?」

オーレリアとウオレス少将は防御したが、あまりの衝撃に後退させられた。

「まだまだあ!!」

アリオツチはさらにキリコとセドリツクに狙いを定めた。

「このっ!」

シャーリイがカウンターを取るべく斬りかかった。

「無駄だっ!!」

「っ!?」

アリオツチのクラフト技を受けたシャーリイは吹っ飛ばされた。

「シャーリイさん!」

「余所見するな!」

キリコはセドリツクを突き飛ばした。

「おらあっ!!」

そのままアリオツチの一撃を受けた。

「っ!?」

キリコは吹っ飛ばされ、鉄柵に激突した。

「く……!」

「キリコさん!」

「まだ終わってねえぞ!!」

アリオツチはキリコを追撃する。

「させん!!」

カシウス中将がアリオツチの戦斧を棒で受け止めた。

「邪魔するんじゃねえ!!」

アリオツチはさらに力を加えた。

「くっ!」

カシウス中将は徐々に押し込まれる。

「カシウスさん!」

「中将!ならば——」

「手出しは無用だ!」

カシウス中将は飛び出そうとするユリア少佐を押し留めた。



「中将……」

「まだ負けていない！」

「ハッ！ 痩せ我慢なら止めときな!!」

アリオツチはさらに戦斧を押し込む。

「くっ………こんなものか……」

「なに………ぐおっ!!」

アリオツチの右腕が何かに弾かれた。

「て、てめえ……!」

「………」

アリオツチの右腕を撃ったのはキリコだった。

「ゼルエル・カノン！」

「イクシオン・ボルト！」

セドリツクとウオレス少将の火と風の最上級アーツがアリオツチを襲った。

「ぐあっ!?!」

「ディザスター・オブ・マハ!!」

「奥義 剣乱舞踏!!」

立て続けにシャーリイとオーレリアのスクラフトが炸裂した。

「ぐ、ああああっ!?! こんなんじゃ……俺は……!」

「なら終わらせる。キリコ君、行くぞ！」

「ああ……!」

カシウス中将とキリコがアリオツチに突っ込む。

「奥義 鳳凰乱舞!!」

「フレア・デスペラード」

カシウス中将とキリコのスクラフトはアリオツチに叩き込まれた。

「ぐおおおおっ………ぐっ!! ハハ………沁みたぜ………!」

甲冑にヒビが入り、アリオツチは膝をついた。

カシウス中将たちはようやく、強敵アリオツチを倒した。

「はあ………はあ………はあ………た、倒した………?」

「油断めされるな、殿下」

「最後まで気は抜かない……!」

オーレリアとシャーリイはセドリツクを窘めつつ、動かないアリオツチを注視し続ける。

「キュービイー、まだ動けるなら一気に仕留めるぞ……!」

「……………」

キリコは頷き、アーマーマグナムの銃口をアリオツチに向けた。

「ククク……やっぱ面白いな」

アリオツチはゆつくりと立ち上がった。

『!!』

一気に緊張が走った。

「十分に楽しめた。これ以上は野暮ってもんだろ」

アリオツチは笑みを浮かべながら言った。

(化け物か……)

(コイツ……!)

キリコとセドリツクはアリオツチのタフネスに閉口した。

「ならば早々に立ち去るがよい。武人の誇りが残っているな」

「クク……仕方ねえ——!」

『!』

突如、激しい揺れに見舞われた。

「これは……!」

「爆発音!」

「既に仕掛けていたか……」

「チッ!あの野郎……!」

アリオツチは背後を睨みつけた。

「……どうやら意図していなかったようだな?」

「ああ。本来ならお前ら全員ブツ殺して一気にカタをつけるつもり

だったんだがな」

「我々に敗れることも計算に入れていたか。どこの誰かは知らないが、侮れんな」

カシウス中將は軍服の埃を払った。

「それで?引くのか?」

「仕方ねえな。今回は引いてやるよ」

アリオツチは戦斧を肩にかけた。

「それにしても千の陽炎ね……。絵空事にしちや上出来だな」

アリオツチはVIPたちを見据える。

「絵空事だと……?」

「ああ。どんなに取り繕おうと、戦争を起こすことに変わりねえ。

てめえの手を一切の血で染めずにな」

「っ！」

「まあ、戦争をやりたい連中つてのはそんなもんだらうよ。今回はガキらしいが」

「何が言いたい」

「振り回すだけ振り回す身勝手なガキに付き合わされる苦勞にや同情しちまうぜ」

「黙れ！」

オーレリアはアリオツチに斬りかかった。

「つと。じゃあな」

オーレリアの斬撃を回避したアリオツチは転移して行った。

(ここまで……ですか)

ミュゼは気づかれないよう少しずつ下がり、甲板とは真逆の方角に歩いて行った。

この時、ミュゼの胸にあったのは後悔と悲嘆と諦観だった。

(これで……良いんです。世界を振り回した身勝手な小娘、それが私に似合う姿です)

ミュゼは振り返ることなく、姿を消した。

「どうやら危機は脱したようですな」

ロックスミス大統領は胸を撫で下ろした。

「ええ、そのようです」

アルバート大公は疲労を感じていた。

「では参りましょう。一刻も早く——」

「待つてください！」

アルフィン皇女が声を張り上げた。

「アルフィン？」

「ミルディーヌが！」

「何!？」

カシウス中将らは辺りを見回すが、影も形もなかった。

「まさか……!」

「戻られたのか……!?!」

「……………」

キリコはアーマーマグナムを腰のホルスターに戻した。

「……行ってくれるか？」

「すぐ戻る」

キリコは出発しようとした。

「キリコさん！」

アルフィン皇女とエリゼが引き止めた。

「？」

「あの子をお願いします！」

「どうか!どうか！」

「わかった」

二人の懇願を聞いたキリコは走り出した。

「……彼は大丈夫なのか？」

「キュービーならば大丈夫でしょう。奴には散々手を焼かされま  
したから」

「フム……帝国の貴族軍が一機の機動兵器に手こずったという噂は  
本当のことだったのだな」

「生身でも強く、機甲兵に乗ればさらに強い。戦いにおいて奴ほど  
の大駒はおりませんまい」

「まったく。まあ、あの愛想の無さは珠に傷だがな」

「そうか……(先ほどの動き、おそらくあばら骨を痛めている。何事  
もなければ良いのだが)」

カシウス中将らは先を急いだ。

「キリコ side」

(さすがに隠せないか……)

イプシロンと塵殺から受けたダメージは確実に残っていた。呼吸をする度に痛みがはしり、目も眩みそうになる。

だが止まるわけにはいかなかった。

俺の予想が正しければ、ミュゼは命を絶つつもりだろう。

会議が始まる前から不安定なのはわかっていた。

どれだけ気丈に振る舞おうと、修羅場に身を置いたことのない少女に過ぎない。

一つ一つの言動や決断で誰かが死ぬとなれば、誰だって追いつめられる。

それに加え、塵殺の去り際の言葉が引き金になったのだろう。

自分が死ねば後は何とかなるとでも思っているんだろが、こんな所で無駄死にさせるわけにはいかない。

(ミュゼ、お前は俺とは違う。お前は死ぬべきじゃない)

(どうやら予め仕掛けてあったようだな)

あちこちから爆発音が響き、火の手が上がっている。

だが簡単に墜ちないような配置になっているようだ。

いくら大型艦と言えど、エンジン部分をやられれば簡単に墜ちる。

真綿で首を締めるようにじわじわと夥り殺しにするのが道化師の目的かもしれないな。

(急がなくては……)

俺は速度を速めた。

ようやく、俺は貴賓室のドアの前にたどり着いた。

「……………」

ドアを開けようとしたが、鍵が掛けられていた。

「離れている」

俺はアーマーマグナムでドアノブを破壊し、ドアを蹴破った。

「ッー！」

「……………」

俺はミュゼに、銃を向けられた。

「キリコ side out」

遠くから爆発音が響く中、キリコとミュゼは向かい合っていた。

「来ないでください……！」

「……………」

キリコは一步踏み出そうとした。

「来ないで！」

ミュゼの銃を握る手に力が加わる。

「もう……これしかないんです……………」

「死ぬことがか？」

「貴方だつてわかつてわかっているんでしょ?!?私のやっていることは……

ただの身勝手だつて！」

「お前がそう思うならそう思えばいい」

キリコはさらに一步踏み出す。

「だが、他人を巻き込んだ責任をどう取る？」

「だからっ！ここで死んで——」

「そんなものに意味はない」

キリコは切り捨てた。

「お前のはただの無駄死にだ」

「ッ！貴方に何がっ！」

「お前は俺と違う。背負っているものは他にもあるはずだ」

「ッ！」

ミュゼは目を瞑った。

「それに……………」

「それに……………」

「アルフィン皇女とエリゼ・シュバルツァーから頼まれている。お前を絶対に連れてこいとな」

「あ……………」

ミュゼは目を逸らした。

「ここもじきにもたなくなる。早く決めろ」

「わ、わたしは……」

ミュゼは銃を下ろす。

「ッ…伏せろ！」

突如、爆発が起こり、キリコはミュゼを庇うように覆い被さった。それと同時に窓が割れ、爆風が襲った。

「う、うーん……」

ミュゼはゆつくりと目を開けた。

「無事か？」

「は、はい……!?!」

ミュゼは目を見開いた。

「キ、キリコさん！」

「……かすり傷だ」

「な、なに言って……」

キリコの肩や背中にはガラス片が多数突き刺さっていた。

「大したことじゃない」

キリコは立ち上がった。

「立てるか？」

「せ、せめて治療を……あ痛っ！」

ミュゼは足首の痛みを目を瞑った。

「捻ったか」

「すみません……」

「なら……」

キリコはミュゼの足首に木片を当て、白い布で縛った。

「歩けるか？」

「ゆ、ゆつくりなら……」

「……仕方ない。我慢してくれ」

キリコはミュゼを抱え上げた。

「ふえっ!?!」

いわゆる、お姫様抱っこをされたミュゼの顔は一気に真っ赤になっ

た。

「嫌だろが、甲板まで我慢してくれ」

「いい、いいいい嫌じゃないです！ととと突然のことです……（あうう……お姫様抱っこなんて、私……！）」

ミュゼの頭の中は混乱に陥った。

「あまり動くな」

「は、はいいいい……」

ミュゼはキリコの言うことを素直に従った。

「行くぞ」

キリコはミュゼを抱えたまま、甲板を目指して走り出した。

「あらあらうふふ……♥？」

キリコとミュゼが立ち去った貴賓室に、一人の女性が現れた。

「なかなか面白い状況になってるじゃない。あの子……自殺しようとしたことも忘れてるみたいだし、やっぱり愛に勝るもの無しね」

「ちよつとサービスしておこうかしら」

女性は青い扇を取り出し、呪文を詠唱した。

「癒しを……」

女性は青い扇で払った。

「後は君次第よ、キリコ君」

女性はキリコの名を呟き、どこかへ転移した。

「ずいぶん派手にやったようだな、塵殺殿」

「ハハハ、それくれえは多目にみてくれよ。そもそも爆弾を仕掛けたのはメルキオルだろうぜ」

パンタグリユエルから少し離れた空域にて、ロツチナとアリオッチは様子を眺めながら談笑していた。

「棘か……噂に違わぬ狂人、いや凶人と言うべきか」

「実際間違っちゃいねえな。共和国のクソガキどももシヨンベン垂れ流して逃げ出すくれえだ」

「半グレだったか。本物の裏の人種に敵うはずがないだろう」



ロツチナは呆れ顔になった。

「こっちはクソガキどもはいねえんだな？」

「人口のほとんどが帝国人で占めているからな。共和国のように様々な人種が集っているわけではない」

「なるほどな」

アリオツチは納得した。

「そろそろ行くぜ」

「現時刻をもって、契約は終了とする。ご苦勞だったな」

「構やしねえさ。じゃあな」

アリオツチはどこかへ転移して行った。

「……………」

ロツチナは黙ってパンタグリユエルを眺めた。

「やっと思ったか」

飛行船のブリッジからテイタニアが降りてきた。

「ずいぶんと嫌っているようだな」

「当然だ。あの教団と関わり合いがあるというだけでも十分だというのに、犯罪組織も絡んでいるとなれば尚更だ」

「《アルマータ》か。狭量かつ無能な先代首領を追い落として就任した現首領《ジェラルル・ダンテス》の手腕により、共和国で勢力を増大させつつあるという犯罪組織。そして棘、金色、塵殺はそのアルマータの幹部だとか」

「キリコを試すのにずいぶん回りくどいことをしたものだな」

「仕方あるまい。キリコを試すとすると、生半可な手段では意味がない」

「それについてはいい。だが開戦まで時間がないぞ」

「フフ、物語は加速していくだけさ。キリコを中心にしてな」

ロツチナは愉快そうに笑いながら、空域を離れるよう指示した。

## リターン

「キリコ side」

(どうなっている?)

ミュゼを抱えたまま、俺は甲板を目指していた。通路を走っていたら、突然痛みが薄れていくのがわかった。いわゆるアドレナリンではなさそうだ。

(今は思索している場合じゃないな)

「後少しで甲板に到着する。それまで我慢してくれ」

「……………」

ミュゼは先ほどから一言も発しない。

爆発の振動で酔ったわけでもなさそうだ。

俺は走るスピードを速めた。

「キリコ side out」

「はーはっはっはー！この艦の中にまだいたとはねえ！」

猟兵風の男たちがキリコの行く手を阻んだ。

「……………」

隊長格の男のあまりの隙の多さにキリコは無言になった。

「君がどこの馬の骨かは問わない！即刻投降したまえ！大人しくその少女を渡せば命は助けてやろう」

隊長格の男が偉そうにキリコに降伏を迫った。

「そこをどけ。構っている暇はない」

キリコは意に介さず、隊長格の男を睨み付けた。

「どけだとう？この僕が、結社身喰らう蛇の執行者カンパネルラ様の配下と知っての暴言か？」

「道化師の配下だと？」

「そうだ！もう一度言おう、即刻投降したまえ！」

「従うつもりはない。押し通る」

「フツ。いずれ執行者となるこの僕、ギルバート・スタインの実力、その身に刻み込むといい！」

ギルバートは決めポーズを取った。

「……大言壮語も甚だしいな」

キリコはポツリと呟いた。

「なんだとう!？」

「執行者になるというなら、一人くらい倒れていてもおかしくはないだろう。だが……」

キリコはギルバートたちの近くの残骸を見やる。

「見たところ人形兵器のようだが、既に敗北しているようだな」

「う、うるさい！多勢に無勢だったただけだ！」

「執行者クラスというなら、数の差くらいどうということはないだろうにか？」

「うるさいうるさいうるさい！君たち、構わないからコイツを痛めつけてやれ！」

ギルバートは真っ赤になって、部下たちに命令を下した。

「すぐ終わる。待っている」

キリコはミュゼを降ろした。

「は、はい………」

ミュゼの目にはキリコしか映っていないなかった。

「す、すみませんでしたーっ！」

「………」

決着はあっという間に着いた。

最初にキリコはギルバート以外の強化猟兵を潰していった。

強化猟兵と言えど、異能者には遠く及ばず、数分で倒された。

隙を見計らっていたギルバートが手榴弾を投げつけるも、安全ピンを外すのを忘れたため、不発に終わった。

キリコは当初フェイクと思い距離を取った。

だが、肝心のギルバートがアサルトライフルの安全装置を外さずに引き金を引いたが、当然弾は出なかった。

しかも何度も無理やり引っ張ったりガシガシ動かしたため、アサルトライフル自体が故障して使えなくなった。

キリコは一気に距離を詰めて、ギルバートの比較的整った顔が一変するまで叩きのめした。

ギルバートは堪らず、恥も外聞も捨てて泣きながら土下座して許しを乞うた。

結果、キリコの圧勝に終わった。

「く、くそう……今日は調子が悪かったただけなんだから……!」  
「……………」

キリコはギルバートなどもはや眼中になく、再びミュゼと向き合った。

その際、キリコはギルバートに背を向けた。

「二世二代の大チャク〜ンス!」

ギルバートはナイフを取り出して、キリコに襲いかかった。

「……………」

素早く反応したキリコはギルバートを右の裏拳を当て、動きを止めた。

「ぶべっ!」

そのままの勢いで左のミドルキックをいれる。

「あわびっ!」

とどめに、右ストレートをギルバートの顔面に叩き込んだ。

「ま、待つで……………」

ギルバートは鉄柵を乗り越え、下層に落ちて行った。

「ア、アイルビー・バアアアアック!!」

「……………行くか」

キリコは何事もなかったかのように、再びミュゼを抱え上げて走り出した。

「つ……何とかみんなと合流できたけど」

「完全に膠着状態だな……………」

「フフフ、さあどうしようか?」

一方甲板では、リベール組と特務支援課と新旧Ⅶ組、結社と西風の

旅団と鉄血の子供たちがそれぞれの得物を手にし、睨み合っていた。リベール組と特務支援課が首脳たちを脱出船に送り届けている間、新旧Ⅶ組は敵の迎撃を突破すべく、立ち向かった。

だが、実力者揃いの敵の迎撃は激しく、雌雄を決することはかなわなかった。

そのため、リベール組と特務支援課が合流しても状況は好転することとはなく、膠着状態に陥っていた。

「な、何とか首脳たちを脱出船まで送り届けられたみたいだけど……」

「この空域から離脱する隙を与えないつもりね……」

サラは横目で展開する飛行艇を見る。

「悪いな。先手を打たせてさせてもらったぜ」

レクター少佐が通信機を片手に笑みを浮かべた。

「このかかし野郎が……!」

ランディがレクター少佐を睨み付ける。

(マズいな……こうしている間にも、状況が悪くなっていく……)

ロイドは得物を握りしめた。

「では、こちらは如何でしょう」

マリアベルが杖を掲げた。

「何をするつもりだ?」

「まさか——」

「教官! グロリアスに動きが!」

アルティナが声を張り上げた。

それと同時に、グロリアスの甲板に巨大な人型兵器がせり上がって来た。

「あれは……」

「3タイプの神機……」

「ク、クロスベルに現れたのと違うシルエットだけど……」

「タイプSⅡ! 複数建造していたのか!」

「ああ、そっか。Ⅶ組と違って君たちは知らなかったのか」  
カンパネルラは思い出したように言った。

「キーア・バニングスの力に頼らずともある程度コントロールできるようになってね。その分性能は落ちるけど、こんな芸当が出来るのさ」

「フフフ……」

マリアベルが手をかざすと、二体の神機はそれぞれ動き出した。

アイオンタイプβⅡは高速モードに変形し、パンタグリユールの周りを飛ぶメルカバや山猫号Ⅱに襲いかかる。

「な……!?!」

「操ってやがんのか!」

「どうだい?手応えは」

「ええ。気に入りましたわ」

マリアベルは愉悦の笑みを浮かべた。

「おーおー、ド派手だねえ」

「つたく、無茶苦茶しやがんなあ」

ルトガーは腕を組み、レクター少佐は頭を掻いた。

「噂に聞く、帝国の騎神よりもパワーがあるっていうけど……」

「それを苦もなく操るとは、さすがは結社の第三使徒ですね」

メルキオルとオランピアはマリアベルの技量を称賛した。

「クロウっ!」

「ああっ!」

リインとクロウが前に出た。

「教官!」

「呼ぶのか……!?!」

「ああ!この場は頼んだ!」

「来い——灰の騎神ヴァリマール!!」

「来な——蒼の騎神オルディーネ!!」

リインとクロウが同時に拳を突き上げた。

二人の背後にヴァリマールとオルディーネが顕れた。

「これが騎神……!」

「なんて見事な……」

騎神を初めて目にするエステルとヨシユアは息を飲んだ。

「ハッ、お出ましかい……!」

「だが、それも織り込み済み……!」

ゼノとレオニダスはルトガーを見た。

「来な——ゼクトール!!」

ルトガーは紫の騎神ゼクトールを呼び出し、乗り込んだ。

【錬金術師のお嬢さんよ、頼むぜ!】

「ウフフ、承りましたわ」

マリアベルはもう一体のアイオーン t y p e — γ II を操作し、ゼクトールの隣に配置させた。

【ハーメル村で遭遇した神機……!】

【オッサンもやる気かよ!】

リインとクロウは並び立つアイオーン t y p e — γ II とゼクトールを見つめる。

「このまま相克へと参りましょうか?」

【条件が整ってねえから無効みてえなんだがな】

ルトガーは腕組みしながら言った。

「ならば、私たちはその他の皆様のお相手ですね」

「……致し方ありません」

クルーガーとクレア少佐はそれぞれの得物を構える。

「せいぜいお人形をあてにさせてもらうぜ?」

「言われるまでもない」

レクター少佐は皮肉るように言ったが、銅のゲオルグはあまり意に介してなかった。

「ティータ! レン! エリイさん! ティオちゃん! 行くわよ!」

『ええ!』

「ランディ! ヨシユア! アガツトさん! 援護を!」

『おおっ!』

リベール組と特務支援課は闘志を燃やす。

「こつちも負けてられない!」

「ああ、行こう!」

「まだ負けていません……!」

「第2ラウンドといこうじゃねえか!」

「後輩たちだけにいい格好はさせられないね……!」

「さあ、あたしたちも行くわよ!」

『おおっ!』

VII組も闘志を燃やした。

【いい感じに燃えてきたな……!】

【ああ!行こう!】

両勢力は再びぶつかつた。

「……ダメか」

一方、キリコは舌打ちをしていた。

甲板を目指していたが、メルキオルの仕掛けた爆弾により、甲板に続く通路が瓦礫で塞がれていた。

(上に戻るしかないか……)

キリコは座っているミュゼの方を向いた。

「この瓦礫は人力では無理だ。一旦、上に戻る」

「……………」

「……聞いているのか?」

「はっ……はいっ!そ、そうですね!上に戻りましょう!」

「……………」

キリコは再びミュゼを抱え上げた。

「もう少しだけ我慢してくれ」

「い、いいえ!も、申し訳ないのはむしろ私ですから!ご迷惑をおかけした上にキリコさんの足を引っ張ってしまってるんですから!」

「気にしないでいい」

キリコは上へ向かって走り出した。

(キリコさん……)

ミュゼは申し訳なさでいっぱいになった。

「それともう一つ……」

「?」



「あの二人にはきちんと謝っておけ」

「はい……」

ミュゼの頭にアルフィン皇女とエリゼの顔が思い浮かんだ。

「叱られて……しまいましたね……」

「だろうな」

「許していただけのしょうか……」

「知らん。自分で蒔いた種だろう」

「そうですね……」

ミュゼは自虐的に微笑む。

「……ミュゼ」

キリコは急に止まった。

「どうしました?」

「荒れるようだ」

「え……っ!?」

前方から多数の人形兵器が近づいて来ていた。

「突破する。俺に掴まれるか?」

「は、はいっ!?」

ミュゼはわたわたとなった。

「俺に掴まれるか?」

「え、ええっと……その……」

「無理ならそのままでもいい。行くぞ」

キリコは走り出した。

「あ、あうう……」

「痛むか?」

「だ、大丈夫です……」

「わかった」

キリコは人形兵器の真横をすり抜けるように走る。

(うう……完全に機を逃してしまいました……でもはしたない女だと思われたくはないですし……)

ミュゼは羞恥と後悔の間で揺れていた。

「そろそろ例のポイントに到着かな？」

「ああ。現在、パンタグリユエルは結社と黒の工房の襲撃を受けているようだ」

「セドリックやアルフィン、クローゼ君にロックスミス大統領にアルバート大公の身柄が心配だね。まあ彼らがいるなら問題なさそうだけどね」

「カシウスさんに黄金の羅刹に黒旋風。あの三人がいる限り、全滅することは無いと思いますがね」

「そしてエステルたちにクロスベル警察の特務支援課、そして貴方が手塩にかけて育てたという新旧Ⅶ組とやらね」

「フフ、設立に一枚噛ませてもらったというだけさ」

「それに彼も無事に合流できたようだね。風の噂では砲火を交えたとか」

「そうらしいね。彼らには悪いが、今の彼とでは相手にもならないだろう」

「たった二日とは言え、俺たちが鍛えたんですからね」

「最初から全力でいかなきゃならなかったけどね」

「それはそうとだ、彼らに事の次第を話しても良いのではないかわざわざあの二人に口止めまでして」

「それを言うのは他でもない彼自身さ。私たちが口を挟めることではないよ」

「お前がそう言うなら俺は何も言わん。確かに俺たちが言うことではないな」

「わかってくれてなによりだよ、親友」

「フツ……」

「さて、急ぐとしよう。駆けつけて既に墜ちていましたではお話しにならないからね」

「わかっている。このまま全速前進だ」

『イエス・サー!』

「フフフ、愛しのユリア少佐の御身のためにもね♥？」

「……着いたら真っ先に叩き落としてやるからその時までの命と思

え」

「すみません調子に乗りました」

「やれやれね……」

「にしてもあいつら、無事だろうか？」

「そういえば魔女殿はどちらに？」

「ミュゼ side」

(ここまでではどうにか来られました……)

キリコさんに抱き抱えられたまま、私は上層の貴賓室へと戻って来ました。

「下から行けないとなれば、上から脱出するしかありません。ロープか何かを垂らしましょうか？」

「そうするしかない。ここで待っていてくれ」

キリコさんはロープを探しに離れました。

「キリコさん……」

私は椅子に座り、離れていくキリコさんの背中を見つめました。

「キリコさん……どうして貴方は私を……」

……その先が出てきません……

単なる仕事上なのか、利用しているに過ぎないのか。

「怖い……」

聞いてしまったら、壊れてしまう。

それがたまたまなく怖い……！

「いつそ、会わなければ……こんなに辛い思いを抱かずに済んだのかな……？ 私が好きになったりさえしなければ……」

「心にもないことを口にするものじゃないわ」

「え……!？」

目の前に現れたのは、ヴィータさんでした。

「い、今までどちらに……」

「今はさほど重要じゃないわね。今は貴女が心に嘘をついているって……よ」

「嘘……」

「そう。彼の過去を知り、彼が愛した人との間で揺れるのは仕方ないわ。でもね、貴女の愛はそんなものなの？」

「愛……………」

「そうよ」

「……………いい」

「？」

「勝手なことを言わないでくださいー！」

私は今までにないくらい、怒りに駆られました。

「所詮、私なんていないものだっただんです！キリコさんの心に、私が入る余地なんて最初からなかったんです！どんなに想っていても、どうしようもないことだってあるんです！」

「どんなに…………キリコさんが好きでも…………好きで好きでたまらなくても…………どうしようもないんです……………」

私は涙が止まりませんでした。

「それは本人から聞いたの？」

「え……………」

ヴィータさんが真剣な表情を向けます。

「キリコ君の口からはつきりと聞いたの？」

「そ、それは……………」

「悲観するのは貴女の勝手。でもそれじゃ真実は永遠に闇の中。それで良いの？」

「……………」

「…………まあいいわ。それとお節介ついでに朗報があるわ。もうすぐ、新たな翼がやって来るわ」

「翼……………」

私は息を整えて、*「視る」*ことにしました。

「つ…………、これは…………！」

「フフ……………」

ヴィータさんはニコリと笑いました。

「物語は佳境にさしかかったわ。人が勝つか呪いが勝つか。女神はどちらに微笑むのかしらね？」

そう言ってヴィータさんは転移して行きました。

キリコさんが戻って来たのはそれからまもなくでした。

「ミュゼ side out」

「くっ！」

「この、バケモノオヤジが……！」

リインとクロウは肩で息をきらせていた。

「いや、こつちもギリギリさ。血も通つちやいねえマシンリイじや  
付け入る隙もあるだろうよ」

「フフ、手厳しいですわね」

ルトガーの言葉にリアベルは微笑む。

「チツ……さすがにヤバいな」

「リインたちに早く加勢に行きたいが……」

「こつちもギリギリかも……」

「死線のお姉さんに氷の乙女さんのタツグはさすがにキツいかもね  
……」

「これが金色……庭園の管理者の実力……！」

「その人形……戦術殻とは違うみたいだけど」

「というか、カンパネルラ！ 貴方がそつちにいること自体がおかし  
くないですか!？」

「細かいことは気にしないでよ」

カンパネルラは肩を竦める。

「さて。そろそろ終演かな？」

「なんだと？」

「メルキオルの爆弾もほとんどが爆発して、この艦も機動力を失っ  
た。後は勝手に沈んでいくだけだろうね」

「チツ！ タイムアップかよ」

「だが、首脳たちは無事に脱出できたようだ」

「いざとなれば、私が皆さんを転移させます」

「我が聖痕の力を組み合わせれば、全員で離脱することも可能だろ  
う」

「エマ、ガイウス……」

「帝国に伝わる善き魔女と星杯騎士の力……!」

「なんだか凄そうね!」

「つくづくとんでもねえ奴らを集めやがったな。あのスチャラカ皇子は……!」

「ふーん?それはどうかなあ?」

カンパネルラは意に介さず、フィンガースナップを鳴らした。すると、グロリアスを中心に陣形が変わった。

小型飛行艇はパンタグリユエルを威圧するかのように取り囲んだ。

「さあ、どうする?」

「特にお二方は、分かりますわね?」

「くっ!」

「やってくれるじゃねえか……!」

「フフ、猟兵王。貴方は如何いたします?」

「夥り殺しは性に合わねえ。俺は降りるぜ」

ルトガーはそう言ってゼクトールから降りた。

「そういうことなら……」

「是非もない」

ゼノとレオニダスは下がった。

「ど、どうやら下がってくれたみたいだけど……」

「依然としてリインたちは動けない……!」

「おい猟兵王、いったいどういうつもりだ!」

ランディはルトガーに問いかけた。

「だから言ったら。夥り殺しは性に合わねえって。まあ、俺らが抜けてもお前らのピッチにや変わりねえ」

「やれやれ、フリーダムつつうか……」

「……………」

「ま、いいでしょ。そろそろ終わらせようか」

『っ!!』

カンパネルラの言葉により、場の空気が一変した。

【……クロウ】

【ああ。わかってる】

リインとクロウは冷静だった。

「リイン……?」

【ここは俺たちが引き受ける……!】

「リイン!」

【お前らは転移で離脱しな!】

「クロウ……!」

「な、何言つて……!」

【相克でない以上、殺されるってこたあねえはずだ!幸いオル  
ディーネにもヴァリマールにも飛翔能力は備わってる。適当に相手  
して逃げ出すからよ!】

【俺たちのことは心配しないでいい!キリコとミュゼも脱出してい  
るだろう】

現時点で、キリコとミュゼが艦内に残っていることを今のリインた  
ちは気づかなかった。

「で、でも……!」

「ぎげんな!聞けるわけねえだろが!」

【その命令は断固拒否します!】

二代目VII組は納得ができなかった。

【ハハ、良い教え子共じゃねえか】

【だろう?さあ、急ぐんだ。ここからは命の保証は出来ない】

「っ……」

リインの言葉にトワは目を伏せた。

「ううん。行く必要、ないんじゃないかな?」

キーアは空を見上げた。

「え……?」

「これは……」

突如、遠くから風斬り音が響いた。

「……?」

(……なんだ……?……?)

「近づいてくる……」

「敵艦……いや——」

「あれは……」

「紅い……翼……?」

デュバリイの眼には、紅い機影が映った。

「晴れの初陣だ。全クルーの諸君、ヨロシク頼む」

「さあ、蒼穹の煉獄でダンスを踊るとしようか!」

「カレイジャスⅡ、接舷突入(アボルダージユ)する! 乗り込んでく  
れたまえ!」

『イエス・キャプテン!!』

「こ、これは……!?!」

予想だにしていなかった艦の登場に、パンタグリユエル甲板にいる  
者たちは呆然となった。

カレイジャスⅡはパンタグリユエルに向かって接近する。

「来るぞ!」

「まさか!?!」

「アハハ! 接舷突入か!!」

最接近したカレイジャスⅡから何人かがパンタグリユエルに乗り  
込んだ。

「やあ——真打ち登場といった所かな?」

レイピアを携えたパトリック・T・ハイアームズが微笑む。

【パトリック!?!】

リインはパトリックの姿を見て驚いた。

【オイオイ、見せつけてくれるじゃねえの】

「ふふ、まさかの登場だね」

「僕だけではないですよ」

パトリックは後ろを見た。

「ハイ、良い子にしてた?」

「そ、それに……」



「シエラ姉!？」

「フフ、お邪魔するわね」

中東出身者を思わせる女性が鞭を構える。

「初めてのヒトはどうぞぐ」鼻屑に。リベール遊撃士官協会所属、《銀閃》シエラザード・ハーヴェイよ」

「行方不明だったというエステルさんたちの先輩の……」

「無事だったのか……」

「ええ。でもそれだけじゃなくて……」

「まさかここで貴方たちが揃い踏みとは……」

レンとヨシユアは高台を見た。

「ハツハツハ！最高の晴れ舞台のようだね？」

「ちよつと遅れちゃったかしら？まあ、帳尻は合わせましょう」

怪盗Bことブルブランとヴィータは高台に姿を現し、ナイフによる影縫いと魔法の拘束でゼクトールとアイオン t y p e γ II の動きを封じた。

「か、怪盗B……」

「姉さん……」

【ハハ、まさかゼクトールもろともデカブツを封じるとはなあ】

「流石は使徒としての先輩……ふふ、やはり興味深いですわね」

「ふふ、ゴメンなさいね？あんまりそういう気は無くて」

マリアベルとヴィータは互いに微笑む。

「何がなんだか……」

「理解しがたい世界ですね……」

「ああもう、色々突っ込みたいけどそれより何よりも……!」

「ああ、こればかりは同じく突っ込みたい気分だよ」

カンパネルラはカレイジャスIIを睨む。

「どうしてカレイジャス号に乗っていた君がそこにいるんだい？」

「まあまあ」

メルキオルが遮った。

「試してみればいいんじゃないかなあ？」

メルキオルはカレイジャスIIめがけて爆弾を放った。

「させるか！」

風属性のアーツが阻んだ。

「……ま、女神の導きと悪運の賜物ってヤツかねえ」

「貴方は……！」

「教官の知り合いの……」

「久しぶりだな、リイン。エステルにヨシユアたちも。煉獄の底から這い上がって来たぜ」

「トヴァルさん！」

「あはは……夢じゃない、よね？」

「よくぞご無事で……」

リイン、エステル、ヨシユアは《零駆動》トヴァル・ランドナーの登場に目を見開いた。

「イシユタンテイ……」

オランピアは天使型の傀儡をトヴァルに差し向けた。

「アーマーブレイクⅡ」

イシユタンテイの頭部が何かに撃ち抜かれた。

「!?」

「ハハ、来やがったか」

「やれやれ、彼じゃ抑えられなかったか」

【キリコ！】

「ミュゼさんも一緒です」

ここでキリコとミュゼが合流した。

(来たか……)

キリコはアーマーマグナムを構えまま、カレイジヤスⅡを見据える。

「さすがに気になるようだね？」

「……………」

カンパネルラはキリコに問いかけたが、キリコはあまり意に介さなかった。

「キリコ、強化猟兵たちはどうしたんだ？」

「既に始末した。道化師の配下を名乗る奴共々な」

「あの執事上がりか……」

「今までの例を鑑みると、まだ生きているのかもしれないけどね……」

（確かに、あの男はあの無能と似通っている。ヨシユア・ブライトの言うように案外、生き延びているのかもしれないな）

「ま、今は置いておいていいでしょ。問題はあっちだね」

【零駆動共々、不死者として甦ったわけでもなさそうだな？】

【ああ。俺たちとは違う、生身の人間としての気配だ】

「さつきも言ったが、女神の導きと悪運の賜物ってヤツでな。いや、悪縁と言った方がいいか」

「……………」

銅のゲオルグの顔が僅かに沈んだ。

「あらあら。聞いていた話とずいぶん違いますわね？」

「あの時、爆散したカレイジャス号には他の方々も乗っていらっしやった筈……」

シヤロンは思案した。

「ま、まさかあの艦に乗っているのは……!？」

「ああ、みんなの想像通りさ」

「ちよつとばかりハンサムになってしまったが——間違いなくボク  
さ」

カレイジャスⅡの甲板にオリヴァルト皇子が姿を現した。

「あ、兄上……」

「お兄様……ご無事だったのですね……」

オリヴァルト皇子の姿を見たセドリックとアルフィンが安堵した。

「…………ご無事で…………ご無事でいらっしやっただけです」

「うん…………行方不明だったみんなも一緒に…………」

（第Ⅱの連中も合流していたようだな。ゼシカとウェインが言っていたという当てとはこの事だったか）

「ヴァリマール共々、リイン君も久しぶりだ。お互い、少々様変わり

したね。無論、カッコいい方向にだが♪」

【オリヴァルト殿下……よくぞ、よくぞご無事で。でも、一体どうして……?】

「そうよ、心配かけてくれちゃってーリベールにいたあたし達がどれだけショックだったと思っっているの!？」

「いや、申し訳ない。これには海よりも深い事情があつてね。しかし二人とも本当に久しぶりだ。エレボニアに来てくれてありがとう」

「ハハ、お互い様でしょう。しかしシエラさんが行方不明だったのはこの事が理由だったんですね」

「一切の情報が漏れないようにするため連絡を絶たせてもらったの。保険もきちんとかけていたけど、どうやら成功だったみたいね」

「ほ、保険つて……つてごめんリイン君、割り込んじゃつて」

【いやいや……でもご無事で何よりです。ミハイル少佐やミュラー中佐も驚きですが……】

「フフ、すぐに会えるというのはこの事を指していたというわけだ」

「久しぶりだ、シユバルツァー君。クルトが世話になってるようだな。挨拶が遅れて済まない」

オリヴァルト皇子の後ろに立つミハイルとミュラー中佐はリインたちに声をかけた。

「兄上……!」

クルトは思わず顔を上げた。

「よくぞご無事で！第七が解体させられたと聞いてどうしているものかと……!」

「久しいな、クルト。見ない内に逞しくなったようだ。だが、久闊を叙するのは少しばかり後回しにしましょう」

「ああ……そのようだね」

オリヴァルト皇子の視線は、モニターに映る敵対者たちに注がれた。

「さて、ボクが——ボクたちがこのタイミングで現れた理由。それ

「が何か分かるかな？」

「フフ、もしや千の陽炎に参加されるおつもりですか？」

「いや、そちらはミュゼ君や首脳方、カシウスさんに任せるともりだ。ボクの目的はただ一つ、第三の道のための翼を提供することに他ならない」

「……………」

「……………」

（ノルドで聞かされた計画、動き出すか）

キリコはじつと耳を傾けた。

「大地の竜に千の陽炎……避けられぬ巨大な二つの流れ。その狭間にあつても諦めず、希望の光を見出ださんとする人々」

「リイン君たちにロイド君たち、そしてエステル君たち——彼らを助けようとする決して少なくない人々の存在。それとは別に——大陸各地で心ある人たちも動き始めている」

「それらの人々を繋ぐ翼にボクたちはなると決めた。太古の昔から帝国を蝕む呪いを乗り越えるため……何よりも手を繋ぎ合おうとする人々にお互いの光を届けるために」

「故にボクたちは名乗ろう——内戦時に名乗った紅き翼でもなく、帝国西部で名乗った自由への風でもなく……」

「《光まとう翼》という、第三の名前を!!」

オリヴァルト皇子は高らかに宣言した。

「……………殿下……………」

「光まとう翼、ですか……………」

「ふふっ……………素敵な名前ね」

「ハハ……………一瞬にして旨いところ全部持つて行きやがったな……………」

「フツ……………流星は我が永遠のライバル」

「セドリツク……………」

「ああ、ここから始まるんだ」

アルフィンとセドリツクは大きなうねりが起きることを確信した。

「なるほど……………これは一本取られたよ」

カンパネルラは拍手した。

「さて、どうする？ 宰相？」

『——まあ、今回はここまでで良からう』

「っ！」

「この声は……」

「やれやれ、お出ましのようだね」

上空に黒のアルベリヒの所有する黒い戦術殻が現れ、戦術殻の眼の部分から光が投影される。

投影された光が画面になり、オズボーン宰相を中心に、リアンヌ、黒のアルベリヒ、ルーファス総督が映し出された。

「オズボーン宰相……」

「マスター……！」

「………父様………」

「………兄上も………」

(揃い踏みというわけか……)

キリコはARCUSSⅡをしまい、オズボーン宰相らを見つめる。

『このような形で失礼——帝都より映像を送らせてもらっている。

両殿下におかれましてはご機嫌麗しく』

「宰相閣下……」

「………」

セドリックとアルフィンはジッと見つめる。

『首脳方にはご無沙汰しています。大統領閣下、大公閣下に王太女

殿下も』

「ハッハッハッ、まさか貴方とこの場で挨拶できるとはなあ」

「ご無沙汰している——こんな形で再会したくはなかったが」

「突然の訪問、お許し下さい」

『なに、その空域は三国にまたがる緩衝地帯。帝国政府の許可は必要ありません。——カシウス・ブライト中将、貴公とも久しぶりだな』

オズボーン宰相はカシウス中将に目をやる。

「三年前、閣下がリベールを電撃訪問されて以来ですな。何やらリベール五大都市で熱心に動かれているようですが」

『なに、R&Aリサーチなる貴国の民間団体には及ぶまい』

「R&Aリサーチ……?」

ユウナは戸惑った。

(それって帝国軍情報局との……)

(……リシャル大佐たちも必死に抵抗しているみたいだな)

事情を知るエステルとヨシユアは平静を装った。

『特務支援課の諸君も久しぶりだ。さぞ、うちのルーファスが迷惑をかけているのではないかな?』

『フフ、なるべく良い関係を築きたいとは思っていますがね』

(……どの口が、ですね)

「……」無沙汰しています、閣下」

エリイは不満をおくびにも出さずに挨拶をした。

「二年前のオルキスタワーでのお話を今更ながら思い出しているところですよ」

『フフ、激動の時代における『覚悟』の話か……懐かしいものだ。そして——』

オズボーン宰相はカレイジャスⅡに目をやる。

『お久しぶりです、皇子殿下。貴方の器を計り損ねていた不明、何とお詫びしてよいものやら。恐らく公女がたも同じ想いでしよう』

「……」

「はい、所詮は小娘の浅知恵でした」

「世辞は無用だ、宰相」

オリヴァルト皇子は制した。

「——事ここに至って大きな2つの流れは止められまい。だが宣言した通り、ボクたちは最後まで翼となろう。リン君やロイド君、エステル君たち……最後まで諦めずに光を見出だそうとする若者たちのために」

「殿下……」

「……心強いです」

「グスツ、格好付けすぎでしょ……」

『フフ、結構。最後まで足掻くとよろしい。6日後、大地の竜が動き

出すまで』

「なに……?」

『作戦の共同立案者として、この場で発表させていただきます』  
ルーファス総督は咳払いをし、眼下の者たちを見据える。

『来る9月1日の正午を以て、ヨルムンガンド作戦を発令する!』  
そして高らかに宣言した。

「……!」

「それがXデー——開戦日か」

『フフ、それに先駆けて興味深い兆しも顕れるでしょう。黄昏——  
世界の終焉に相応しい大陸全土の人間にも焼き付くような』

(地獄の釜の蓋が開かれようとしているのか……)

キリコは拳を握り締めた。

『それと同時に七の相克についても本格的に介入させてもらうつもりだ。獵兵王、ルトガー・クラウゼル殿』

【おうよ】

『そして結社第七柱、鋼の聖女、アリアンロード殿』

『ええ、異存はありません』

ルトガーとリアンヌは共に了承した。

『フフ、何故殿下たちがあの状況で無事だったのか……個人的には  
非常に興味深い。今は置いておきましょう』

「……………」

銅のゲオルグはそつと目を背けた。

(……やっぱり……)

(ああ……それとあの怪盗殿が何やら関わっていきそうだが……)  
トワとアンゼリカは銅のゲオルグの動きを見逃さなかった。

『とはいえ主よ。この状況において、敵の首魁を見逃すということ  
はありませんまい。ゲオルグ』

黒のアルベリヒが口を開き、銅のゲオルグに指示を出した。

(動くか……!)

キリコは咄嗟にミュゼの盾になった。



その瞬間、キリコらの周りを結界が覆った。

【しまった!?!】

『ハアツハツハ！これだけではない。ゲオルグ、コード・ダブルだ』  
「は、はい……」

銅のゲオルグがいくつかの操作を行った。

「これは……!?!」

「……アインヘル小要塞のトラップと同じものか。やられたな」

ミュゼとキリコは手足の痺れとEPが休息に無くなっていく感覚を味わう。

「……父……様……」

「くっ、卑劣な！」

【待ってる二人とも！今——】

「そうはさせへんで？」

「ここは戦場。些末なことに過ぎん」

ヴァリマールの行く手をゼノとレオニダスが阻んだ。

「もちろん、君たちもね♪」

メルキオルが爆弾を手のひらで遊ぶ。

「……」

オランピアがイシユタンティを配置させた。

「……」

レクター少佐とクレア少佐、クルーガーが無言で得物を構える。

「……ここまでか」

キリコは持っていた武装を全て捨てた。

「な……!?!」

「おい……!!」

「もう打つ手はない。逃げてくれ。敵の目に映らないように逃げろ」

「な、何言ってるの!?!」

「ヴィータ・クロチルダ、あんたの術なら逃がせるはずだ。俺たち以外を全員連れて転移してくれ。できるだけ遠くに、西に向けて」

「……………わかったわ」

「姉さん!？」

「ちよつとアンタ!!」

「私たちの方も限界よ」

ヴィータが言い終わるか言い終わらないうちに、アイオーン t y p e—γⅡの拘束が解けた。

【チッ!】

「……………仕方ない。ここは言うとおりにしよう。ここで果てては何にもならないからね」

「兄上!？」

セドリツクは兄の言葉に耳を疑った。

「深淵殿、頼めるかな?」

「承知しました……………」

ヴィータは両手を目一杯広げた。

キリコたち以外の足元に魔法陣が顕れた。

【ま……………!!】

キリコたち以外の姿が消えた。

それと同時にカレイジャスⅡは他の飛行船と共に西へ飛び去った。

「なんだか呆気ないものでしたわね……………」

マリアベルは思わずため息をついた。

「皇帝暗殺未遂犯なんでしょ? 仇を助ける意味なんてないないないない」

『……………』

リアンヌはキリコを見続けていた。

(ホンマに諦めよつたんか?)

【そんなはずはねえ……………こいつが簡単に投降するタマジやねえつてことくらい承知の上だぜ。お前ら無闇に近寄んなよ】

ルトガーが部下にキリコに近づかないように命令を出した。

「……………」

カンパネルラは疑惑の視線をぶつけた。

「ハツハツハツ！チエツクメイトのようだね！」  
キリコたちの後ろからギルバートが意気揚々とやって来た。

「おお！さすがは皆々様方！この憎き不埒者を捕らえたのですね  
！」

「やれやれ。遅刻だよ。後黙っててくれない？」

「は、ははあっ！」

ギルバートは敬礼をした。

（キリコさん……………）

ミュゼはキリコを不安げに見つめる。

「……………」

キリコは膝をついたまま動かなかつた。

『いい様だな。不死などと言うが、所詮戯言に過ぎんというわけだ。  
このまま例の場所に——』

「……………時間だ」

キリコは眩いた。

その瞬間、甲板のあちこちで爆発が起こった。

『なっ!?!』

「ぐっ!?!」

爆風を浴びた銅のゲオルグはリモコンを離してしまい、キリコたち  
を覆っていた結界が消滅した。

【ハハ！そうこなくちゃな！】

ルトガーは笑みを浮かべた。

「つたく、やってくれるぜ……………」

「どうやら、真下に仕掛けてあったようです……………」

「大丈夫か？」

キリコはミュゼに手を差しのべる。

「な、なんとか（あれ？なんだか……………）」

「ゴ、コラア！勝手に動くばあっ!?!」

ギルバートはキリコのアッパーカットを受けてひっくり返った。

「やれやれ……時間稼ぎかい？そして彼らを逃がしたのは爆発に巻き込まないためって所かな？」

「想像に任せる」

キリコはミュゼを抱え上げる。

「あ、あのキリコさん……」

「文句なら後でいくらでも聞く。教官やあいつらの分もまとめてな」

「そ、そうではなくてですね……」

「迎えの当てはあるの？」

カンパネルラが結界を張り、自分以外を近づけないようにした。

「問題ない」

「そ。ま、元気でね」

「追撃はなさらないんですか……？」

「これ以上は蛇足でしょ。向こうも動かないみたいだし」

カンパネルラは後ろに視線を送った。

レクター少佐を始め、ほとんどに戦意はなかった。

「西に向かって飛ぶ。怖いかな？」

「いいえ。大丈夫です（キリコさん、貴方と一緒になら……！）」

「行くぞ」

「はいっ……！」

キリコは左舷に向かって走り出した。

そして思い切り縁から大空へと飛び出した。

「ッー！」

ミュゼは目を瞑った。

その瞬間、キリコの足元に碧い魔法陣が顕れた。

キリコとミュゼは碧い魔法陣を潜り、転移した。

「どうやら彼の方が一枚上手だったようだな」

帝都ヘイムダルはバルフレイム宮の宰相執務室。

オズボーン宰相は満足げに笑みを浮かべた。

「君にとっても見過ごせないのではないかな？ルーファス総督」

「一応、貴族連合軍の旗艦ではありませんでしたので。まあ、決起軍の士気を下げられたなら、それもよろしいかと」

「フフフ……ずいぶんとあっさりしているな」

「新型戦艦に比べれば是非もないかと」

「なるほどな。それはさておき……」

オズボーン宰相は隣で苦々しげにする黒のアルベリヒに目をやる。

「目先の勝利に酔い過ぎ、足元の謀略を見落としたな……アルベリヒ」

「……面目次第もございませぬ」

「それより……例の二人はどうなっている？」

「既にいくつかの処置を終えております。いつでも出動させることができます」

「そうか……」

「奴らは靈窟に向かうはず、ならばそこを叩き一気に潰して……!」

「それはお前が決めることではない」

「ツ!?……申し訳ありません。出過ぎた真似を」

オズボーン宰相の言葉に黒のアルベリヒは頭を下げる。

「二人はあそこに配置させる」

「……そのように」

黒のアルベリヒはどこかへと転移して行つた。

「紫と銀はそれぞれ靈窟に配置させます」

「万事任せる」

「御意……」

ルーファス総督は執務室を出ていった。

(いよいよ全てが決まる。阻むのは灰か銀か金のいずれかか。それとも不死の異能者か……)

オズボーン宰相は窓から空を見つめた。

## カレイジヤスⅡ

「報告は以上です」

「いや……うん。とりあえずご苦労」

リインは微妙な顔をしながら言った。

魔法陣を潜り抜けたキリコとミュゼはカレイジヤスⅡの甲板に着地した。

甲板で待っていた者たちはキリコがミュゼを抱えている姿に驚きを隠せず、何人かは頬を赤らめ、何人かは嘸し立てた。

ミュゼをアルフィンとエリゼに引き渡した後、キリコはオリヴァルト皇子と対面した。

一悶着あるかと思われたが、オリヴァルト皇子がキリコを笑顔で迎え入れた。

オリヴァルト皇子の「こうして直に話すのはノルド高原以来だね。サプライズも大成功だ」という言葉をきっかけに、キリコはリインたちに問い質された。

各国の首脳たちが解散したのを見計らい、キリコはノルド高原での出来事をリインたちに説明することになった。

「来るべき日までご自分の生存を口外しない、それがクロスベル入りする条件だったんだな？」

「はい」

「君の口が固いのは重々承知している。だが報告してくれても良かったんじゃないか？」

「そういう取り決めでしたので」

「やれやれ、糞真面目ここに極まれりか」

「フン、大概にするがいい」

マキアスがため息をつき、ユーシスが鼻を鳴らす。

「まあまあ……」

「でも本当にご無事で良かったわ」

「ああ、めでたきことだ」

新旧Ⅶ組は胸のつかえが取れた気がした。

「そういえば、キリコ君はどうやってノルド高原に行ったの？」  
ユウナはキリコに問いかけた。

「ルーレから貨物列車に乗って向かった」

「貨物列車？」

「俺たちも特別実習でノルドに行った時と同じか」

「確か、ゼンダー門への貨物列車以外通っていないんだったわね」

「そこでお前の素性が判明したわけだな」

「もう！いいでしょそれは！」

「えっと……？」

「アリサは家名を隠して入学したんだ。頭文字のRを名乗ってな」

「わざわざ隠してですか？」

「色々あつたのよ……」

アリサはため息をついた。

「しかも不仲だった母親が理事を務める士官学院にな」

「ええっ!？」

「よく調べもせずに入學したのですか？」

「それは……あまりに迂闊というか……」

「結局、お袋さんの世話になってたわけだ」

「ふぬぬぬ……!」

二代目Ⅶ組の言葉にアリサは悔しそうに顔を歪めた。

「キリコ」

ガイウスがキリコに話しかけた。

「弟たちが世話になったようだな」

「世話になったというなら俺の方だ。途中に集落があつて助かつた」

「さすがに無茶したようだな」

「あの高原を水も食料も持たずに地図だけで行くのは無謀だね」

「……正直、俺もなめていた」

「そんなに広大なんですか？」

「ああ。この一件が終わったら、皆を招待しよう」

「良いんですか!？」

「ユウナ、落ち着いて。でも、一度は行ってみたい場所ですね」

「私は以前任務で行きましたか」

「空気読めチビウサ」

「まあまあ」

「他にも気になることがあるんだけど……」

「この戦艦に手を加えたそうだが……」

「俺がやったのは武装の火器管制とエンジンのバランス調整のサポートくらいだ」

「それだけでも十分な気もするが……」

「そして兄上にトヴァルさん、シエラザードさんにクロチルダさんからの特訓か……」

「ミユラー中佐とシエラザード・ハーヴェイから近接戦闘、トヴァル・ランドナーとヴィータ・クロチルダからアーツ戦術を叩き込まれた。さらにラッセル博士やグエン前会長からより高度なハッキング技術の手解きを受けた」

「零駆動と銀閃は遊撃士でもビッグネームよ。特に銀閃はリベールの異変でも活躍したそうよ」

「深淵の魔女殿は言うに及ばず……」

「そして言わずと知れたエプスタイン三高弟の一人であるラッセル博士に、ラインフォルトグループ前会長のグエンさんか……」

「な、なんだか凄そう……」

「その道のスペシャリストたちの指導か……」

「少なくとも有意義だったのは確かだ」

「そうか」

「とりあえず、この話はここまでにしよう」  
トワは手を叩いて締める。

「会議室で殿下がお待ちだからな」

「それじゃ、みんなついてきて」



トワを先頭に、新旧VII組は会議室へと移動した。

「失礼しま——!?!」

トワは思わず立ち止まった。

「トワ教官?」

「どうしました——!?!」

新旧VII組らも呆然となった。

そこには、正座させられたオリヴァルト皇子とその周りで見下ろすミユラー中佐とリベール組、その様子を苦笑いで見つめるセドリツクと特務支援課があった。

「え、ええつと……?」

「あ、リイン君たち」

「そつちは終わったようだね」

「あ、ああ……しかしこれは……」

「た、助けてくれたまえ……もう一時間こうしているんだ……」  
「サプライズなどとたわけたことを抜かしている貴様は後三時間そうしている」

「以前読んだ書物によると、この状態でさらに石を乗せる修行というものが東方にはあるそうね?」

「いやいやいや!それは修行じゃなくて刑罰です!」

比較的、東方に明るいリインがシエラザードにつっこんだ。

「皆さん、そろそろ始めませんか?」

「テリオすけ、ナチュラルに始めようとすんな……」

「……仕方ない。ここまでとしてやろう」

(た、助かった……)

解放されたオリヴァルト皇子はセドリツクに支えられながら席に着いた。

「終わったようですね?」

会議室の扉が開き、アルフィンとエリゼとミュゼが入って来た。

「アルフィン殿下。それにエリゼ……」

「ミュゼもだいぶ絞られたみたいね」

「はい……………」

ミュゼは俯きながら答えた。

「まあその話は後回しにさせてもらおうよ」

オリヴァルト皇子は椅子に座り、周りを見渡した。

「改めて、よく来てくれた。本当に嬉しく思う」

「殿下……………」

「それは自分たちも同じです」

「本当にご無事で何よりです……………」

ラインたちは心から安堵した。

「それと、ラウラ君…………君には詫びなくてはならない」

オリヴァルト皇子の表情は悲痛なものに変わった。

「君のお父上のことだ……………」

「っ！」

ラウラは口を固く結んだ。

「殿下……………」

「……………いったい、何があつたのでしょうか」

「あの日……………」

オリヴァルト皇子はラインたちにカレイジヤスが爆破された時の事を話した。

「そんな……………ことが……………」

ラインたちは呆然となった。

「爆発する少し前に張られた重力結界……………」

「それがジョルジュだつてんだな……………」

「ああ、間違いないだろう……………」

「ジョルジュ君……………」

（あの顔はそういうことだったのか…………）

ロイドはパンタグリユエルを見た、銅のゲオルグの表情を思い返した。

「そしてラウラのお父さんは爆発を食い止めようと単身、突っ込んだ……………」

「父上……」

ラウラは俯いた。

「それにしても、あの怪盗が墜落したオリビエたちを助けるなんて……」

「例のマジックとやらで現場から全員逃がしたみたいだし」

「しかも、殿下やクルーたちを治療したのよね？」

「ああ……俺も怪我を負ったが何の因果かカスリ傷くらいだった。閣下が結界の綻びを食い止めた時、アーツの支援もできずに……あの時ほど自分の不甲斐なさを思い知らされたことはない」

トヴァルはラウラの方を向いた。

「すまない——ラウラお嬢さん。本当に合わせる顔がないくらいだ」

「フフ……トヴァル殿が気に病むことはない。貴方が無事であることの方が父も心より安堵しているであろ」

「……そうだな……」

「子爵閣下が行方不明になってしまった事はショックだが……遺体が確認されていない以上、どこかで生き延びていると信じたい」

「……おそらく、連中の手の内かもしれないな」

キリコが口を開いた。

「連中……」

「この場合は、黒の工房か」

「私自身も仮死状態にされ、仮面を付けられて工房側の駒としてリイン君たちと敵対してしまっただけです。子爵閣下もそのような状態になってしまったことは十分に考えられます」

「なるほど……」

「少々、希望的観測ではありませんが、一考するに値するかと」

「もしくは俺みたく不死者になってるかもな」

「クロウ、それは……」

「現時点では何だっけって疑える」

リインはピシヤリと言った。

「とにかく、見極めに行く必要があるだろう。この眼で真実を掴む

ために」

「リイン……」

「うん、そうよね!」

「エステルは立ち上がった。」

「ここにいるみんなで……うん、帝国の異変に立ち向かう全員で  
真実を掴むために!」

「もちろんだ」

「ロイドは胸に手を当てた。」

「俺たちも協力する。世界を終わらせないためにも」

「エステル……ロイド……」

「当然、僕たちもね」

「帝国は私たちの故郷なんだから」

「失われつつある貴族の義務、果たす時だ」

「師から受け継いだ聖刻……存分に奮おう」

「今の私は遊撃士……民間人を守るのは当然」

「これも魔女の眷属の使命。ですが、私自身の意思でもありません  
初代Ⅶ組も笑みを浮かべる。」

「すごい……!」

「本当に大きい壁だ……」

「ひよったか?」

「まさか。越え甲斐があるさ」

「あたしたち全員でね。もちろんキリコ君も」

「……」

「二代目Ⅶ組は闘志を燃やす。」

「皆さん……」

「僕は今日ほど、君たちを誇りに思ったことはない」  
オリヴァルト皇子は微笑んだ。

「では行くでしょう。光まとう翼よ!」

『イエス・ユア・ハインス!!!』

リベール組、特務支援課、新旧Ⅶ組は改めて光まとう翼として、第  
三の道を歩むことを決意した。

「キリコ side」

決起を終えた後、それぞれがカレイジャスⅡを見て回っている。俺はカレイジャスⅡの1階の船倉にある格納庫でフルメタルドッグとフェンリールのアップデートを行っていた。

ちなみにティータはミントやカレイジャスⅡの技術スタッフと他の機甲兵のメンテナンスを行っている。

「キリコ……」

パソコンのキーボードを叩く俺の目の前に、スタークとウエインがやって来た。

「……………」

俺は作業を中断し、スタークの前に立った。

「……………」

スタークの両手が震えている。

たとえ殴られようとも、全て受け入れるつもりだった。

「っ！」

だがスタークは俺に抱きついてきた。

「バカ野郎……！」

嗚咽が聞こえる。

スタークは泣いていた。

「本当に……死んだと思ってたんだぞ」

「……………」

「やつとの思いで、クロスベルに逃れたかと思ったら、お前が処刑されたってニュースを聞いて……どれだけ辛かったと思ってるんだ……！」

「……許せとは言わない。殴りたければ、好きだけ殴れ」

「っ！できるわけないだろっ！」

スタークは俺の両肩を掴む。

「友だちに……そんなことできるわけないだろ……」

「スターク……」

「もちろん、俺もだ」

ウエインも俺の肩に手を置いた。

「友だちが生きていた。それだけで良いんだよ」

「ウエイン……」

友だち。

俺はその言葉に救われたような気がした。

だが同時に、俺は友だちを裏切らなくてはならない思いを抱いてしまっていた。

スタークとウエインが去ったかと思えば、次はグスタフとパブロとヴァレリーがやって来た。

「久しぶりだな、キリコ」

「二ヶ月以上ぶりやろか」

「元気そうね」

三人は比較的、穏やかだった。

「事の詳細はユウナたちから聞いた。とんでもないものを背負っていたんだな」

「なんで言ってくれなかったんや」

「信じてもらえない確証がないからだ。言えば信じたか？」

「たぶん、無理かもね」

ヴァレリーはため息をついた。

「だが、キリコをそこまで追いたててしまったのも、俺たちの責任だと思う」

「それは違う。全て、俺自身の意思でやったことだ」

「せやけど、もし俺らがキリコのその異能？を知っとつたら、もつと違う形になっとつたと思うねん」

「私もそう思う……」

「……………」

「とにかくキリコ、お前には俺らがついとんで」

「それだけは伝えたかったんだ」

「なぜそこまで俺に構う」

「仲間だから。それじゃ不満？」

「……………」

「ほんなら、俺らは行くで」

パブロたちは格納庫から出て行った。

仲間。

俺はいつから遠ざけていたのだろう。

機甲兵のアップデートを終え、得物のメンテナンスに取りかかっていると、マヤとルイゼとタチアナがやって来た。

「お久しぶりですね、キリコ君」

「二月ぶりくらいですね」

「こ、こんにちは……」

この三人は変わらないようだ。

だがルイゼとタチアナの顔が妙に赤い。

「何か用か？」

「先ほどの一幕、感動しちゃいました！まさに男子の友情！」

「せ、僭越ながら、スタークさんと抱擁した時はどのような感触――

――

何を言っているのかわからない。

「お二人とも、大いに興味がありますが違います。キリコ君に武器を見てもらうんですよ」

そう言ってマヤはスナイパーライフルを出した。

「あ、そうでした」

「お願いします……」

続いてルイゼが拳銃、タチアナが魔導杖を出した。

「わかった」

「じゃあ私はルイゼさんとタチアナさんの方をするので、キリコさんはマヤさんの方をお願いします」

「任せる」

俺はさっそく、スナイパーライフルのチェックに取りかかる。

それほど問題はなさそうだった。

「終わった」

「ありがとうございます。それとキリコ君」

「なんだ？」

「3階の総合訓練所でゼシカさんとレオ姉が呼んでいました」

「ゼシカとレオノーラがか？」

「はい」

「わかった。後で行くと——」

「あ、こっちは大丈夫ですよ。キリコさんは皆さんと顔を会わせて来てください」

「……わかった。訓練場だな？」

「はい」

俺は後をテイータに任せることにした。

「それとキリコ君。ミュゼさんをお姫様抱つこの件ですが」

「まさかのご登場でしたね〜！」

「あう……すごかったです……」

(女三人寄ればなんとやら、か……)

「キリコ君、事の次第をミュゼさんにお聞きしても？」

「好きにすればいいだろう」

俺はそう言つて訓練場へと向かった。

「待ってたわ」

「ハハ、久しぶりだねえ」

3階の訓練区画にある総合訓練所ではゼシカとレオノーラがそれ

ぞれの得物を手に待っていた。

「模擬戦、と見て良いんだな？」

「ま、そんなところかね。少なくともゼシカは」

「うん……」

ゼシカの表情は硬い。

「単刀直入に言うわ。勝負よ、キリコ君！」

ゼシカは槍を構えた。

「……いいだろう」

俺は先にメンテナンスを済ませていたアーマーマグナムに弾丸を



装填した。

「面倒だ。レオノーラもかかって来い」

「ハハ、言ってくれるじゃないか……!」

レオノーラもアサルトライフルを構えた。

「悪いが頼めるか？」

「良いとも」

俺は総合訓練所に入って来たログナーに見届け人を頼んだ。

「アンゼリカ様……」

「見せてもらうよ、シユライデン流の槍技を」

アンゼリカ・ログナーは笑みを浮かべた。

「それとキリコ君、ゼシカ君とレオノーラ君を傷物にしないように。

私の愛しい仔猫ちゃんたちだからね♥?」

「違う（います）!!」

ゼシカとレオノーラは同時に叫んだ。

「……始めるぞ」

「気合いは十分のようだね。では……」

アンゼリカ・ログナーは右手を高く挙げた。

「始めっ!!」

「行くわよ!」

「了解!」

「くっ……!?!」

「……まで、かい……」

勝負は俺が制した。

ゼシカが接近戦をしかけ、レオノーラが後方で銃撃戦を展開。

俺が各地を転々としている間に、Ⅶ組を含めた第Ⅱ分校生が各々で

レベルアップを果たしていることは想定内だった。

だが少しばかり見くびっていたかもしれない。

二人の技量は俺が分校にいた頃よりも遥かに精度が上がっていた。

俺は負傷を覚悟で、レオノーラに接近戦をしかけた。

弾道を見極め、アサルトライフルを叩き落とし、レオノーラの首筋

に当て身を加えた。

背後からの槍を紙一重でかわし、ゼシカの眉間にアーマーマグナムの銃口を向ける。

観念したゼシカが槍を手放したことで勝負はついた。

「はあ……………」

ゼシカはへたりこんだ。

「少しは強くなったと思ったのに……………」

「やっぱ本物の修羅場を潜り抜けてきたやつには勝てないのかねえ……………」

レオノーラもため息をつく。

「卑下しなくてもいい。俺が知る頃よりも確実に強くなっている」

「キリコ君……………」

「俺は嘘は言わん」

「ハハ……………やっぱり勝てないね……………」

「……………」

「フフ……………」

アンゼリカが笑みを浮かべながら近づいて来た。

「私の目から見ても、ゼシカ君とレオノーラ君は良い勝負をしたよ。

キリコ君、君でもヒヤリとしたんじゃないかな？」

「ああ」

アンゼリカの言うことはまぎれもない事実だ。

「リイン君から聞いていたけど、迷いは振りきれたんじゃないのかな？」

「アンゼリカ様……………」

「確かに、堂々としてたんじやない？」

「うん……………ありがとう、レオノーラ」

ゼシカとレオノーラは立ち上がり、俺の方を向いた。

「キリコ君もありがとう」

「あたしからも礼を言わせておくれ。ありがとう」

「気にしなくていい」

俺は首を振った。

「さてと、そろそろ私とも付き合ってもらおうか」

「「え？」」

「……………」

アンゼリカは不穏な笑みを浮かべている。

「キリコ君、すまないが——」

「……………」

言われるまでもなく、俺は総合訓練所を出た。

助けを求めるような声が聞こえた気がしたが、放っておいても大丈夫だろう。

「キリコ君、いらっしやい！」

「フハハ、久しぶりだな」

2階の連絡区画にある食堂へ行くと、サンデイとフレデイがカウンタ―に立っていた。

「コーヒーをくれ」

「うん！待ってて！」

「茶請けにドライフルーツはあるか？」

「もらおう」

「こいつも相変わらずのようだ。」

「お、ここにいたのか！」

「お久しぶりです、キリコさん」

振り返ると、シドニーとカイリがいた。

「はいお待たせ！シドニー君たちも何かいる？」

「じゃあ、アイスコーヒーくれ」

「僕は紅茶を」

「はい」

サンデイは作業に取りかかった。

「にしても、本当に生きてたなんてな」

「そうだな…………」

「ユウナさんたちやオリヴァルト殿下から聞きました。その……………陛

下を撃つたのはアッシュさんを救うと——」

「カイリ、飲み物が不味くなる話はよそうぜ」

「……………」

シドニーなりに気を使っているようだ。

「す、すみません……………」

「気にしなくていい」

「ま、それはともかくよ……………」

シドニーの顔つきが真剣なものに変わった。

「戦鬼のお姉さんに続いて魔弓のお姉さんとどうやって仲良くなりやがったんだ!？」

シドニーは身を乗り出してきた。

「どうなんだ? え!？」

目も血走っている。

「……………」

シドニーは恋愛感情か何かについて問いかけているのだろうが、俺にしてみれば戦力くらいにしか見ていない。

言い返すのも面倒になり、俺は聞き流すことにした。

「聞いてんのかよ! チキショー、こうなったら今までの苦労ぶちまけてやるからな!」

おかげで、カレル離宮からの撤退から今日までの愚痴に付き合う羽目になった。

カイリだけでなくサンデイやフレデイからも同情された。

「む、君か……………」

再び船倉に戻って来ると、ミハイル教官がいた。

「武装のチェックですか?」

「いや、ラッセル候補生に頼んである。少し話があるのでな」

「……………わかりました」

ミハイル教官と共に奥のスペースに移動した。

「分校長から連絡を受けてな。君は自主退学を希望しているそうだな?」

「はい」

「だがシユバルツァーを初め、分校関係者の大半が異を唱えている」  
「そうですか」

不思議と悪い気はしないな。これも未練だろうか。

「私としては君が残ろうが出ていこうが、構わない。だが、何の責任も取らずに放棄するようならば話は別だ」

「責任というならば、果たすつもりです。帝国で起きている異変を解決することだ」

「それはシユバルツァーらが行う相克ではなく、ワイズマンとやらを滅ぼしてか？」

「現時点で、ワイズマン本人なのかどうかはわかりません。ですが、確実に繋がっているでしょう」

「なるほどな……」

ミハイル教官は顎に手をやった。

おそらく納得はしていないだろう。

「ご存知かとは思いますが……」

「?」

「俺は処刑されたことになっています。それに伴い、戸籍やら何やらは全て抹消されているはずですよ」

「それについては調べがついている。間違いなく、キリコ・キュービーは存在していない」

「なら俺が何をしようと、分校には嫌疑は及ばないはずですよ」

「理屈で言えばそうだろう。だが皇太子殿下らは君の名誉挽回の為に動こうとしていらっしやるのだぞ」

「それについては撤回させます。皇室の名誉とやらに関わるでしょうし」

「キュービー候補生……」

「そう呼ばれるのも後僅かでしょう」

そう言っただけ俺は移動した。

「?」

たまたま遊戯室の前を通ると、何やら盛り上がっていた。

気になって入ってみると、特務支援課と星杯騎士団がARCUSS IIを前に談笑していた。

「よお、キリコ」

俺に気づいたランディ教官が声をかけてきた。

「やあ、キリコ君。一月ぶりですかね」

「そうだな」

「キリコ君、トマスさんと会っていたのね」

「ブロン通りでな」

「ブロン通りというと……」

「エリオットとマツキーが言うには、ヘイムダルの悪所らしいぜ」

「聞いたことがあるな……」

捜査官ともなれば知っているらしい。

『へえ。君が噂のキリコ・キュービー？』

ARCUSS IIから若い男の声が聞こえてきた。

「ご紹介しましょう。星杯騎士団は守護騎士第九位・《蒼の聖典》ワ

ジ・ヘミスフィア卿です」

『よろしくね』

「ああ」

『それにしても不死身の異能のも持ち主とはね。ヴァルドと気が合うかな？』

「いやそれは……」

「むしろ水と油のような……」

「いや、混ぜるな危険ってやつだろうよ」

「?」

「ああ、そうか知らないよな」

ロイドによると、ワジと従騎士のヴァルドはクロスベルでテストメイツとサーベルヴァイパーとかいう不良チームのヘッド同士だったという。

ワジとその副ヘッドの場合、星杯騎士としての活動を伏せるためにカムフラージュとしての意味もあったようだ。

碧の大樹事件後、アルテリア法国への帰国をきっかけにそれぞれチームを解散、ヴァルドは従騎士として仕えることになったという。ヴァルドに関して、他にも何か隠しているようだが追及はすまい。さらに驚くべきことだが、ワジの配下には帝国解放戦線の幹部もいるという。

これはトマスの根回しがあつたらしい。

『聞くところによると、君のコーヒーは絶品だそうじゃない。いつかご馳走になろうかな』

「会うことがあればな」

『期待しておくよ。それとキリコ、ロイドのことはどう思う?』

「英雄と呼ばれるだけのものは持っているようだな」

『だよねえ。恋人も多数いるみたいだし』

「……何?」

「おいワジ……」

『よく言うでしょ。英雄色を好むって。だけど八方美人でみんなやきもきさせてるよ。それでいてはつきりさせてないみたいだし』

「ワジ、あまりおかしくないことは——」

「ワジ君の言うとおりにじゃない?」

「何も間違ったことは言っていないかと」

「弟貴族、弟ブルジョワジー、草食系男子装った喰いまくりのリア充野郎、爆発しろ」

エリイ、プラトール主任、ランディ教官が揃ってロイドを睨む。

「……………」

とりあえずこいつがどういう人間かは理解した。

俺は席を立った。

「お、もう行くのか?」

「は」

「キ、キリコ……あんまり気に……………」  
弁解すらしらないとはな。

「ロイド・バニングス」

「は、はい!？」

「あんたは人でなしか」

『……………』

周囲が凍りついたようになったが、もうどうでも良かった。  
俺は遊戯室を出た。

「やあ、キリコ君」

「あ、来たんだ」

甲板に出ると、皇族とティータを除いたリベール組が談笑していた。

「風に当たりに来た、そんなところかい？」

「まあ、そんなところだ」

「ふふ、お兄さんたちって仲が良いのね？」

レンがニヤニヤしながら問いかけてきた。

「さあな」

「ひどいなあ」

セドリックが口を尖らせる。

「今のところ、セドリックの全敗よね」

「座学は勝ってるさ。もちろん実力でね」

「キリコ君はどう思っているんだい？」

「そもそも勝負をしているわけではない」

「なら、これはノーカウントね」

「アルフィンさんに一票かな……」

「エステル……失礼だよ」

ヨシユアは呆れ顔になった。

『……………』

VII組にも特務支援課にもない、彼らだからこそその絆。  
それを目の当たりにし、眩しく感じられた。

「あ、そうだ。キリコ君」

「?」



「オリビエを土下座させたって本当？」

「あ、私もお聞きしたかったです」

「別にしてくれと頼んだわけではない」

「そのとおりだ。全てこのたわけの自業自得だ」

「ミユラー中佐がオリヴァルト皇子をジロリと睨む。

「ミユラー君もキリコ君もヒドイッ！でもあの冷たい眼差しも

ちよつと……」

「キリコ君、何か鈍器のようなものは持っていないか？」

「あいにく持つてはいない。船倉から何かしら持つて来よう」

「えつと……二人とも……？そんなものどうする……」

「わざわざ剣の錆にすることもないからな」

「弾薬の無駄遣いは避けたい」

「面白そうだな。俺も混ぜろや」

「ふふ、あたしも良いかしら？」

「アガツト……シエラ姉……」

「二人ともノリノリだね」

「悪ノリの間違いじゃない？」

「では私も……」

「姫様……！」

少し騒がしくなってきたな。

「すみません調子に乘りました」

オリヴァルト皇子からの謝罪も入り、とりあえず話は終わった。

後は医務室や購買、仮眠室だが今は用は無い。

これでカレイジャスⅡの大体は回れたな。

「キリコ side out」

「お、戻ってきたな」

格納庫に戻ると、クルトとアツシュが待っていた。

「どうかしたのか？」

「オリヴァルト殿下の計らいで、大浴場を使わせていただけることになったんだ。それで、キリコも誘おうと待ってたんだ」

「風呂か……（そういえばそんなものもあったな）」

「で？行くのか？」

「ああ、行こう」

「じゃあ、行こうか」

キリコたちは大浴場へと向かった。

「君たちも来たんだね」

湯衣に着替え、大浴場に入るとエリオットとマキアスが湯船に浸かっていた。

「お二人も居られたとは」

「考えるこたあ一緒だな」

「ああ、艦の機能も把握したしちよつと汗を流そうと思ってね」

「なるほど」

「それにしても、まさかここまで本格的なお風呂だったなんてねえ……」

「ご、豪華すぎるほどじゃないが何とも贅沢極まるというか……」

エリオットとマキアスは大浴場の造りと広さに驚きを隠せなかった。

「この艦を設計したのはシュミットのジジイだったか？」

「内装に関してはリベールのラッセル博士が大半を担っていたそうだ」

「オリヴァルト殿下とも懇意だそうだし、その人の提案かもしれないというのでしょうか」

「ティータちゃんのお祖父さんだけ？ふふつ、何となくそれっぽいよね」

「なんだ、先に来ていたのか」

「はは、考えることは同じだったか」

「あ………」

キリコたちが振り返ると、リイン、ユース、ガイウス、クロウが入って来た。

「ふう、揃いも揃って何で被ってくるんだか」

「フフ、それだけ互いに影響を受け合っているのだろう」

(影響、か……)

「しかしまあ、結局全員入れちまうとはな」

「後一人くらいなら入れるかな？」

「ま、一番風呂は俺らのモンってことで良いんだろ。こういうのは分かち合わねえとなー！」

「それもそうだね」

「しかし、お湯も良いがこの景色も……」

『……………』

Ⅶ組男子は窓からの景色を眺める。

「空の果て、蒼穹の彼方か……」

「……随分と遠い場所に来てしまったような心地だな」

「うん……そうだね」

「ハハ、そんな場所でみんなして湯に浸かっているのはアレだが……」

「そうですね……」

「つたく……オラ、何をセンチになってやがる！」

しんみりした空気を察したクロウが喝を入れた。

「せっかく最新鋭艦に乗り込んだんだ。アゲめで行かないでどうすんだっつもの。せっかくだから男だけのエロトークでもしようぜ！」

「各自、下ネタかフェチポイント晒しな！」

クロウの発言が良くも悪くも空気を変えた。

「ど、どうしてそうなるんだ!？」

「馬鹿馬鹿しい……付き合う義理が何処にある」

「クロウ……流石に学生じゃないんだから」

「なら現役学生のコイツらから行ってみようじゃねえか。クルトお前、ゼリカによればあのピンクちゃんと良い仲らしいじゃねえか？」

「よ、余計なお世話です！」

「アツシュ！お前はあのシャイな子と良い感じなんだろ？」

「はっ、言ってる」

「そしてキリコ！お前は——」

「そういえば教官」

「ん？どうしたキリコ」

「アームブラストはどういった立ち位置に？」

「立ち位置？」

「あ、そういえばクロウって卒業してないんだ」

「留年扱いのままかもしれないぞ？」

「ええい、それはどうでもいいっつーの！こうなったら全員下を脱ぎやがれ！どうせガイウスが一番だろうがエリオットなんかも意外と——」

「わーっ、わーっ！いったい何を言い出してるのさ!？」

「クロウ……流石にそれは品がないだろう」

「そーいやキリコ、専らの噂だぜ。てめえの腰には二丁目のアーマーが——」

「アツシュ」

「いい加減、品というものを理解しろ」

「リンとクルトがアツシュを睨んだ。」

「というか隣の女子に聞かれたらどうするんだっ!？」

（これだけ騒げば聞こえないという方がおかしいだろう）

キリコの推測通り、隣の女風呂では大半が聞かれており、何名かが殺意を露にした。

「フツ……確かにまあ、殊勝なのは俺たちらしくはないか」

「ああ——今はこの眺めと、一番風呂を楽しませてもらおう」

クロウとアツシュを大人しくさせたVII組男子は、体が真っ赤になるまで満喫した。

この後、クロウとアツシュがVII組女子、トワとアンゼリカにお説教されたのは言うまでもない。

また、ユウナはクルト、ミュゼはキリコを避けるようにして一日を過ごした。

## 月の霊場①

七耀暦1206年 8月27日 午前8:00

新旧VII組はガラ湖周遊道を脇に逸れた場所にある月霊窟へとやって来た。

「こんな場所にあったとはな」

「それ以前はただの空き地だったらしいぜ」

「ユウナたちは来たことがあるのよね？」

「はい。あの時はガラ湖周遊道が通行止めになって、引き返そうとしたら顕れたんです」

「入ってすぐの所で大型の魔獣が現れて、倒すと不思議な光景が頭の中に流れて……」

「不思議な光景？」

「どうやら、過去の出来事のようにね。晩年のドライケルス大帝に『名状しがたい闇』が這い寄って来ていたんだ」

「名状しがたい闇……？」

「……………」

リインはそれが何なのか半ば確信めいていた。

（ローゼリア曰く、ここには帝国の呪いの最後の真実があるというが……）

キリコはカレイジャスIIでの会合を思い返した。

8月26日 午後7:00

リベール組、特務支援課、新旧VII組は会議室に集められていた。

『お初にお目にかかる。ローゼリア・ミルステインじゃ』

会議室の大型モニターにローゼリアの姿が映った。

『帝国の魔女の眷属が長にして、そのエマやヴィータの師でもある。よろしく頼むぞ、オリヴァルト殿下。リベール、クロスベルの子らも』

「フフ、初めまして。噂と伝承だけは伺っていたが。初代アルノールが帝国を興すのを見守ってくれた存在だそうだね？」

『フフ、それは“先代”じゃな。じゃが、800年前のヘクトル帝やドライケルス皇子とは懇意にしていた。ふむ、彼らの面影は余り無いがヌシはヌシで規格外なようじゃの?』

「ハハ、これは光栄の至りだ」

（うーん、レンから話は聞いていたけど……）

（800歳か……この目で見ても実感はないな）

エステルとロイドはローゼリアとオリヴァルト皇子の談笑を見つめていた。

『フフ、こちらにもヌシらのことは少しばかり聞いておるぞ? レグナートに、ツアイトからな』

「ええっ、レグナートから!？」

「つて、そうなのかよ!？」

「ツアイトもあれ以来姿を現していませんが」

『まあ、彼らが姿を消す前に少々言葉を交わしたくらいじゃ。行方については妾にも分からぬが』

「そうですね……」

「カシウス先生にもわからないそうだけど……」

「そのレグナートやツアイトというのは?」

キリコが口を開いた。

「古竜レグナートに神狼ツアイト……かの大地の聖獣と同じく、空と幻それぞれの至宝を見届けるために女神から遣わされた聖獣のことですね」

会議室に入って来たトマスがキリコの疑問に答えた。

「貴方は……」

「星杯騎士団副長、トマス・ライサンダーです。エステルさん、ロイドさんたちのお噂はかねがね。ふふ、オリヴァルト殿下はツールズ本校以来となりますね?」

「はは、まさか歴史学教官の貴方が星杯の守護騎士だったとはね。ケビン君との縁があったのに見抜けなかったのは少々悔しいな」

「そっか、あたしたちの噂もケビンさんとリースさんから……」

「俺たちの方はワジから聞いていたみたいですね?」

「ええ。両者とも帝国以外で動いてもらっている状況ですね。巨イナル一のため暗躍する他の結社勢に対抗するために」

「動いているのは第一柱、第四柱、第五柱……さらに帝国に来ていない執行者たちですか」

「あの博士は裏でここそこそそしてるみたいね。面白い研究対象でも見つかったかしら？」

レンはいたずらっ子のような視線をキリコに送った。

「……………」

「レ、レンちゃん……………」

「……………続けるぞ。更に帝国軍情報局も国外で本格的に動いているみたいだな。それと……………赤い星座の本隊——闘神シグムント・オルランドも」

「叔父貴が動き出しやがったのか……………」

「おつかしいなあ、パパってば今回の一件は静観するって言うたのに」

シャーリイは首をかしげた。

「そ、そうなんですの!？」

「叔父貴は理由もなしに動くような人間じゃねえ。何企んでやがる……………」

「逆に言えば動く理由があるということ……………」

「不気味ですね……………」

「あの……………それで他の皆さんは……………」

ユウナはおそろおそろエリイに問いかけた。

「アリオスさんとリーシャさんはそうした動きに対応すべく動いているわ……………」

「ノエルさんにセルゲイ課長、ダドリーさんも同様ですね……………」

「そうだったんですか……………」

ユウナはほっとした。

「……………」

その横でキリコはエリイとテイオの言葉尻が引つかかった。

「それで、状況はどうなってるんですか?」

「正直苦しい状況ですね。そんな中、僧兵庁も独断専行で千の陽炎に協力するようですし」

「……やはり……」

「……主導権争いをすべき時ではない筈ですが」  
ガイウスとロージーヌはため息をついた。

（宗教組織というのはどの世界も同じだな。所詮、神というお題目にすがっているような連中か）

キリコの目が鋭くなった。

（キリコ……？）

『まあ、200年前の眷属事件ですら僧兵庁とやらの横槍はあったからの。それはともかく、本題に入ろう』

『——七の相克についてじゃ』

『!!』

ローゼリアの言葉に会議室の空気は一変した。

『六日後に大地の竜が動き始めると改めて宣言されたこと——それに対抗する千の陽炎とやらが合意されたこととの関連は不明じやが………帝国全土の霊脈の乱れが今日の夕刻から更に高まり始めた』

「あ……」

「それって、今日あった出来事が影響して……!?!」

「団長たちが動き始めたのも関係してるのかもね」

「ああ、それに聖女殿も……」

「母様やシャロンたちも関係してるかもしれない……」

「……ベルもそうね。RFと協力しているみたいだし」

フィー、ラウラ、アリサ、エリィがそれぞれ身内や知己の名前を挙げた。

「原因は色々ありそうですが、もう一つ由々しき状況があります——時を同じくして、帝国だけでなく大陸全土の霊脈が活性化し始めました」

「おい、そいつは……!」

トマスの言葉にアッシュが反応した。



「……まるで『世界大戦』の予兆をそのまま反映しているようですね」

「ああそれこそが黄昏——その中で行われるのが相克だろう」

「いよいよ本格的な『錬成』の準備が整い始めたのかもしれないね……」

「ど、どうしたら……」

『……………』

会議室は沈黙に包まれた。

「……だつたら話は早い。この艦を自由に使ってくれたまえ」

オリヴァルト皇子の一言が沈黙を打ち破った。

「どうやら七の相克こそが宰相や地精たちの目的のようだが——逆に言えば、そこに破滅を回避できる唯一の光明があり得るんじゃないかな？」

「……………」

「そいつは……」

「確かに、巨大な呪いが発動する中、目に見えぬ何かに全てが導かれる……そんな状況で戦争を阻止するのは正攻法では不可能でしょう」

「だからこそ父さんやクローゼも千の陽炎に協力したんだろうしね。でも——そもそも呪いって何なのかな？」

「へ……………」

「ふむ……………」

エステルの言葉にセリーヌは弾かれたように顔を上げ、トマスは顎に手をやった。

（皇帝曰く、巨イナル一が二つの眷属の闘争本能の影響を受けて、それを呪いという形で植え付けたという。だが確かに呪いそのものについては考えたことはなかったな）

（ワイズマン、これもお前の策略か……？）

キリコは腕組みをして思索した。

「僕たちはリベールの異変で至宝を巡る災厄と向き合いました。ここでは、1200前の人の業と……現代の僕たちをつなぐ問題がありました」

「……私たちも同じですね。人の業で喪われた至宝を再現して現代に続く宿業を解決しようとする……」

「うん……もしかしたらキーンアは取り返しのない事をしてたかも。でも、ロイドたちが来てくれて……間違いをちゃんと正してくれた」  
「リベールでは願いを叶える環、クロスベルでは因果を書き換える樹。どちらも祝福であると同時に呪いでもある存在だったけど……  
エステルたちや警察のお兄さんたちはそこから目を背けずに向き合ったわ」

「ならば、真実の見極めこそ君たちが何よりも優先すべき事だろう。  
エステル君やロイド君たち、無論、我々も出来ることではない」

「帝国と、それを取り巻く地域の様々な表と裏の問題……それに粘り強く関わり続けたお前さんたちにしか出来ないんじゃないか？」

「あ………」

「……俺たちにしか、か………」

新旧Ⅶ組はエステルたちの言葉を受け止めた。

「無論、各地の第三勢力のために動くという使命も果たすつもりだが……中破したメルカバの代わりに、君たちの翼を務めることくらいは出来るだろう。先代より大型化したことで騎神3体に機甲兵6機なら積めるしね」

「お兄様……」

「……ご配慮、感謝します」

『さて、厳しいが光は見えてきたか。ならば——いよいよ妾も最後の役割を果たすでしょうか』

『!』

ローゼリアの言葉に会議室にいた者たちは一斉にモニター画面を見る。

「お婆ちゃん……?」

「最後の役割……?」

『うむ……。聞け、Ⅶ組の子らよ』

『先程言ったように、帝国全土の霊脈がかつてないほど乱れ活性化

しておる。相克の舞台たる霊窟もしかり——我ら魔女たちが唯一、古来より管理してきた月霊窟もな』

「月霊窟……」

「ミルサンテの近くにある……?」

(そんなものがあるのか……)

『うむ、代々の巡回魔女が穢れを祓ってきた水鏡の霊窟……真実を映し——黒の史書の本体とも繋がっていると思しき場所じゃ』

「……!?!」

リインはビクリと反応した。

「その名をここで聞くとは……」

「ええ、私もつい先日、教えてもらったばかりです」

『帝国の呪いについての最後の真実が知りたければ来るがよい。我が真名と使命に賭けてヌシらの疑問に答えてみせよう。必要なのはⅦ組全員の試練、それ以外はセリーヌくらいか』

『そしてキュービー、ヌシが求めている真実も掴めるやもしれぬぞ?』

「……………」

キリコの腕組みする手に力がこもる。

(キリコさん……)

(異世界の神——ワイズマン……)

(キリコとは浅からぬ因縁があるというが……)

『ああ、それともう一つ。ヌシには人型になってもらうからそのつもりでな』

「はああつ!?!」

「あのお可愛らしい姿ですわね」

「一気にあざとくなるやつだよな」

「う、うるさいっ!」

セリーヌが吠えた。

「フフ、セリーヌ君の艶姿も興味深いが真実を映す水鏡はタイムリーだろう。明日、エステル君たちを降ろした後、ガラ湖に向かうでしょうか」

「ミルサンテからある程度離れた場所に着水するといいだろう。光学迷彩による潜行モードと静音モードを使いこなしてみてくれ」

「心得ました」

アンゼリカは笑みを浮かべる。

『ともかく、待つておるぞ。VII組の子らよ』

ローゼリアとの通信が切れた。

「帝国の呪いの最後の真実か……」

「いよいよ大詰めを迎えてきたってわけだね」

「はい」

「さてと、あたしたちも動き出さないとね」

「俺たちもだ。明日、山猫号Ⅱで送ってもらおう」

エステルとロイドが立ち上がった。

「……それぞれギルドと支援課として動くんだな？」

「ああ、帝国東部やノーザンブリア、ジュライ特区方面もカバーするつもりさ」

「レマン総本部への連絡もあるしな。シエラザードたちも降りるんだろ？」

「ええ、艦の引き継ぎが終わり次第にね」

「サラ、フィー。カレイジャスⅡの事は頼んだぜ」

「ええ、任せておいて」

「要請とかあったら連絡して」

「それじゃあテイオ先輩にエリイ先輩、キーアちゃんも……」

「ええ、一度クロスベルには戻っておく必要がありますので……」

「またすぐに会えるわ……お互い頑張りましょう」

「がんばろー、ユウナ！」

「うんっ……！」

ユウナははにかんだ。

「……フフ、どうやら各方面で分担できそうですね。ガイウス君……ゴホン、ウォーゼル卿——メルカバ捌号機はロジャー君に任せるといいでしょう。近場での修理を手配しますから」

「かたじけない、副長。ロジーヌもどうか頼む」

「はい、ガイウスさんも皆さんのことをお願いします」

ロジーヌは頭を下げた。

「ではこれで決まりだね」

「はい……………」

リインは新旧Ⅶ組メンバーの方を向いた。

「では明日、月霊窟の探索を行う。Ⅶ組メンバーはゆっくり休んで準備を整えてくれ」

リインの言葉を最後に会合は終わった。

(真実…………俺が求めている真実をこの場所で得られるというのか)

キリコは月霊窟を見つめる。

「月霊窟…………前も通りかかったけど」

「確かに…………明らかな違いを感じるな」

「ああ……………」

「そうなのか？」

「はい。不思議な気配はしましたが、ここまでは」

「ロゼさんの仰っていた霊脈の活性化でしょうか…………？」

「ええ…………そうみたいね」

「僕もようやく霊気なんかを感じられるようになったが…………」

「だが、この霊窟の気配はまだ抑えられているようだな？」

ガイウスはエマに問いかけた。

「ええ、代々の巡回魔女が管理してきた唯一の霊窟…………私の母も穢れを払いに何度か訪れたと聞いています」

「そうか、話に聞いた……………」

「エマが小さい頃に亡くなったお母さんだよね？」

(そして、臆気ながらも呪いの根源に、ワイズマンにたどり着いたという…………)

「優秀な巡回魔女だったって聞いているわね。まあ、アタシが生まれる前だから話くらいしか知らないけど」

「ふふ、私も小さかったからほとんど覚えていないけど…………でも

祖母からこの霊窟の話は聞いています。祭壇の先にある霊場——そこに全てを映す水鏡があると」

「はは、ドンピシャじゃねえか」

「するとブリオニア島とは違い、祭壇の更に奥に隠された場所が？」  
「ええ、たぶん祖母が既に開いて待っていると思います。行ってみましょう、皆さん」

「ああ——だが、ちよつと待ってくれ」

「来てくれ——ヴァリマール」

リインは歩き出そうとした新旧Ⅶ組を引き止め、ヴァリマールを呼び出した。

ヴァリマールの手には、根源たる虚無の剣が握られていた。

「あ……」

「なんだ、用心のためかよ？」

「いえ、ひよつとして——」

「……Ⅶ組全員ということぞ、連れてきたということか」

「ああ、何があるか分からないし待機してもらおう価値はあるだろう。殿下やミントたちにも話しておいた」

「ふふ、そつか……」

「うん、これで全員だね」

「………はい」

アルティナは微笑んだ。

「そんじゃあ、入るとするか」

「ええ。まずは祭壇の所までね」

「？」

サラの言葉にキリコが反応した。

「そうか、キリコは知らなかったんだな」

「祭壇の所まではちよつとしたダンジョンになっているんです」

「そうか……」

キリコは所持している弾薬を確認した。

「そういえばセリーヌ、人型にならなくていいの？」

「ま、まだいいでしょ!?!ロゼから話を聞いてからよ!」

新旧Ⅶ組は月霊窟に足を踏み入れた。

(フフフ……)

新旧Ⅶ組の様子を陰から伺っている者たちがいた。

「面白くなってきたな」

「まあ、退屈にはなりそうもないですが」

「Xデイまで後数日……それまでに片付けなくてはならないことが多いからな」

「そうですねえ……例の脱走者たちの処理はどうします?」

「聞くまでもない。Ⅶ組に、キリコにやらせよう。そのように調整してくれ、アランドール少佐」

「了解しました、ルスケ大佐」

レクター少佐は敬礼をし、去って行った。

「フフフ……」

ロツチナは軍帽を被り直した。

(人の運命は女神が遊ぶ双六だとしても、あがりまでは一天地六の賽の目次第。さて、いかなる結果になるやら)

「ここが祭壇か」

一方、新旧Ⅶ組は月霊窟最奥の祭壇にたどり着いた。

(こんな造りになっているのか。いや、それよりも……)

「な、なんか前より魔獣が強くなってるような……」

ユウナはガンブレイカーをしまいながら言った。

「やはり霊脈の活性化が原因でしょうか……?」

「間違いないと思います」

「このまま活性化とやらが進めばどうなる?」

「活性化のあおりを受けた魔獣はより狂暴に、魔物はより残酷な存在になり、人の手には負えなくなる危険性があります」

エマはそう断言した。

「そんなことが……」

「戦争よりそっちの方が厄介だね」

「それも含めて世界の終焉か……」

「絶対に止めないと……!」

「ああ、その通りだ」

「その呪いの真実がこの先にあるというが……」

「とにかく、行ってみようぜ」

「そうだな……」

新旧Ⅶ組は祭壇の奥へと進む。

『!』

新旧Ⅶ組は目の前の光景に思わず立ち止まった。

「(こ、ここ)が……」

「月霊窟の奥……いえ、本体ですか」

「ええ、亜空間にある霊的な場……」

「内戦時の精霊窟とはちよつと違うね」

「ああ……夢幻回廊や暗黒竜の寝所の方が似ているな」

「確かにそうだな……」

「よく見れば、魔物の反応もあります」

「それを含めての試練とやらなんだろう——」

「にや……!?!」

リインが言い終わるか言い終わらないうちに、セリーヌの体がひかりだした。

『!』

「これは……!?!」

「ちよ、何なのよ……ニャアアアアアツ……!?!」

セリーヌは人型へと変化した。

「おおおっつ……!」

「へえ、なんか手品でも見ている感じねえ」

(これも魔女の力なのか……?)

初めて見る者たちは興味深げにセリーヌを見つめる。

「サービスいいじゃねえか。チビクロネコ」

「誰がチビクロよプリン頭っ!——じゃなくて!アタシの意思とは



関係なく勝手に……」

「ここは月の霊場——真実を映し出す聖域じゃからの」  
新旧Ⅶ組の目の前に、ローゼリアが現れた。

「ロゼ……!?!」

「お祖母ちゃん、その姿は……」

「なんだって……!?!」

「それじゃあ、この人が……」

「ローゼリアさんの元の姿というわけか……」

「ええ、あたしたちは何度かお目にかかつてますけど……」

「フフフ……」

新旧Ⅶ組の前に、幼児然とした姿ではなく、本来の姿のローゼリアが現れた。

「……」

キリコはほとんど興味を示さなかった。

「どうじゃ? なかなか『ないすばでい』じゃろ?」

ローゼリアは妖しげな視線をキリコに送った。

「……そんなものを見せるためだけに、俺たちを呼び出したのか」

『……』

周囲の空間は一気に固まった。

「……」

ローゼリアは三角座りをして分かりやすく落ち込んだ。

「す、すみません!!」

「キリコ!! 今すぐ謝るんだ!!」

「キ、キリコ君はその、おべんちゃらが言えないというか……」

「ユウナ!!」

「あ……!?!」

ユウナは思わず口に手を当てた。

「よいよい………妾も少々戯れが過ぎた………グスン………」

ローゼリアが立ち直るまで、時間を要した。

その間、キリコはリンたちに小言をもらうこととなった。

「待たせたの」

改めて、ローゼリアは新旧Ⅶ組と向かい合った。

「この姿のことじゃが、霊場の活性化によって元の姿を取り戻しておるわけじゃ。そして『真の姿』も……」

「へ……」

「真の姿……？」

(まだ何かあるのか……)

「——最奥にあるのが水鏡。代々の巡回魔女が管理した遺物じゃ。皇帝家の黒の史書とも連動する帝国の裏の歴史を映し出す神具……黄昏に至った今ならば全てを垣間見ることができよう」

ローゼリアは一呼吸置いて告げた。

「——ただし起動するためには大いなる試練が必要になるが」

「お、大いなる試練……？」

「煌魔城やら陽霊窟と同じ理屈ってワケか……」

「重要な儀式の前に必要となる闘争による準備段階……」

「どうやら同じ流儀で全て成り立っているようだな」

「フフ——ようやくその認識に至ったみたいね？」

ローゼリアの隣にヴィータが現れた。

「ね、姉さん……!?!」

「クロチルダさん！」

「どうしてアンタが……昨日別れたばかりでしょ!?!」

「ふふ、そもそも昨日外していたのは婆様の手伝いをしていたからでね。今回の試練の前座、まずは私が務めさせてもらうわ。加えてサプライズゲストも呼んだからせいぜい愉しんでちょうだい」

「サプライズゲスト、ですか……」

「ま、まさか……」

(聞くまでもないか……)

キリコはサプライズゲストが誰なのか確信した。

「あ、それとキリコ君? あんまり婆様からかっっちゃダメよ?」

「からかってなどいないが……」

キリコは真顔で答えた。

「キリコさん……」

「悪意が一切感じられません……」

「ある意味善人なんだろうけど……」

「マキアス、善人って何？」

「僕も分からなくなってきた……」

フィーからの問いにマキアスは額を押さえた。

「コホン……」

ローゼリアは咳払いをし、新旧Ⅶ組の意識を自身に向ける。

「そちらは想定外じゃが存分に役割は果たしてくれよう——それで  
はの。死ぬ気で最奥に辿り着くがよい」

そう言ってローゼリアはヴィータと共に転移して行った。

『……………』

残された新旧Ⅶ組は立ち尽くした。

「これは……大変な試練になりそうだな」

「だがこちらもⅦ組全員——誰であれ負けるわけにはいかぬ」

「ああ、その通りだ」

ユーススは一歩前に出た。

「俺も、今こそ義務を果たす時だろう。帝国の表の歴史の一角を  
担ってきた四大貴族の末裔の一人として……彼女に救われ、託された  
道をどう歩むべきか、見極めるためにも」

「あ……………」

アルティナは彼女という言葉に反応した。

「はいっ、力を合わせて真実を掴み取りましょう！」

「このクソツタレなお伽噺を終わらせるためにもな！」

（待っている……ワイズマン！）

キリコは拳を握りしめる。

「新旧Ⅶ組、これより月の霊場の攻略を開始する。エマ、セリーヌ、  
ユーススもよろしく頼んだぞ！」

「はい……………」

「任せるがいい……………」

「ああもう……こうなったら破れかぶれよ！」

新旧Ⅶ組は月の霊場へと足を踏み入れた。

『……………』

新旧Ⅶ組が進んだ直後、ローブを纏った者が現れた。

『……………』

ローブを纏った者は新旧Ⅶ組の後を追うように、進み出した。

## 月の霊場②

「まさか、これほどとはな……」

月の霊場の攻略を開始した新旧Ⅶ組は、霊脈の活性化を受けて強化された魔物に手こずっていた。

「霊窟の魔物とは格が違う……!」

「ここは霊脈の中核とも言えるべき場所です。それ故に影響力が違うのでしよう」

「それって、奥に進めば進むほど敵が強くなるってことですか？」

「考えられないことではないかと……」

「チツ！ 萎えやがらせるぜ」

「……この造りは然程複雑ではないようだ。無視して突き進むのも一つの手だと思いますが」

キリコはリインに問いかけた。

「確かにキリコの言うことも一理ある」

リインはキリコの目を見た。

「だがこれはローゼリアさんの試練でもある。俺たちⅦ組がこれから遭遇するであろう相手と互角に渡り合えるのかどうかのな」

「では全て対処すると？」

「そうだ。ローゼリアさんも死ぬ気で乗り越えて来いとも言ったしな」

「そういうことならば俺から言うことはありません」

「ありがとうキリコ。君が先のことや皆のことを考えて意見してくれたのにな」

「気になさらず」

(キリコさん……)

「僕たちのことなら気にしないで」

「ええ。この程度でバテるほどやわじゃないわ」  
エリオットとアリサは笑みを浮かべる。

「もちろん、あたしたちも!」

「僕たちももっと強くなっているはずだからな」

「テメエこそ休んでろよ」

「では、キリコさんはクルトさんと交代してください。後詰めはク  
ロウさんとマキアスさん、お願いします」

「おう、任せろ！」

「心得た！」

アルティナ主導で新旧Ⅶ組は陣形を変えた。

「では、行くとしよう」

「まずはあのアマね……！」

「わかるのか？」

「あのアマ……これ見よがしに魔力を見せつけちゃって……！」  
セリーヌは遙か先を睨み付ける。

「もう……セリーヌ」

新旧Ⅶ組はエマとセリーヌを先頭に探索を再開した。

「な〜んて、思ってたら面白いんだけどね」

「フフ……」

月の霊場の中間では、ヴィータとオーレリアが談笑していた。

「魔女殿は少々、妹分を弄び過ぎではないかな？」

「良いんですよ。あれは昔から堅すぎるといっつか生真面目ぶってい  
るので。リイン君の前ではデレデレしてるくせに」

「フフ、シユバルツァーの人徳だからこそなし得ることだろうが」

オーレリアは笑みを浮かべた。

「それより、久方ぶりに魔女殿の本気が見られそうだな」

「フフフ、お眼鏡に叶えばよろしいのですが」

ヴィータは扇子を取り出した。

「もし、リイン君たちが敗れるようなら……」

「所詮、その程度でしかなかったということだ。その時は斬って捨  
てるだけよ」

オーレリアは奥へと進んだ。

（斬って捨てる……おそらく二重の意味ね）

ヴィータは額の汗を拭った。

「リードスナイプ」

月の霊場を進む新旧Ⅶ組は襲い来る魔物を次々に倒していった。キリコの後方からのクラフト技が決まり、戦闘が終了した。

「キリコさん、お疲れ様です」

「ああ」

「良い腕してるね」

「本職のスナイパーには及ばない。それに教官とウォーゼルが引き付けていたから決めることができた」

「お役に立てたのなら何よりだ」

ガイウスは微笑んだ。

「とはいえ相当の距離だぞ、今キリコが撃った地点は」

「少しくらい得意気になってもいいのに」

「それがキリコの美点なのである」

「そうですね。キリコさんは決してそのようなことはなさいませんから」

ミュゼはキリコを見つめる。

「ミュゼ……」

「大丈夫です。それよりそろそろでしようか？」

「ええ。姉さんの魔力が強く感じられます」

「そういえば……」

ユウナが拳手をした。

「クロチルダさんって、どんな魔法を使うんですか？」

「ヴィータがよく使うのは、唄を用いた秘術だな。1年半前に煌魔城を呼び出したのも魔王の凱歌（ルシフェン・リート）とか言う唄だったな」

「そ、そうだったんですか!？」

ユウナは風聞で聞いた話の真実に驚きを隠せなかった。

「改めて聞くと厄介ですね」

「ああ。帝国オペラの主演女優なら納得だが」

「一応、あいつの名誉のために言つとくが、ステージでは秘術を用い

たことは一度もねえそうだ」

「そっちは実力で掴んだんだな」

「ハン、どうだか」

クロウとリインの言葉にセリーヌは鼻を鳴らす。

「それで、もう一つの方は？」

クルトはリインに問いかけた。

「そうだな……アーベントタイムという番組は知ってるか？」

「ええ、存じていますが」

「ラジオパーソナリティーの名前は？」

「ミスティさんでしょう？」

「そのミスティさんとクロチルダさんが同一人物だと言ったら？」

「……え……」

クルトは目を白黒させた。

「特定の人物を除いて、自身を同一人物だと認識させないようにする。そうすることで、エマとセリーヌにさえ勘づかれることなく、ラジオのパーソナリティーを務めていたそうなんだ」

「ちなみに、今年の四月から放送されていたアーベントタイムはクロチルダさんが認識を操作してあたかも目の前で喋っているかのようにならせたんだそうだ」

「なんだそりゃ……」

「すごいよね……」

「で、でもどうしてラジオのパーソナリティーを……？」

「本人曰く息抜きらしい」

「息抜き、ですか……」

「まったく！秘術の無駄遣いじゃない！」

「まあまあ」

憤慨するセリーヌをミュゼが宥めた。

「アーベントタイム、また聴きたいですね」

「ああ。学生時代、ラジオを聴きながらエマ君に負けまいと机に向かっていたことを思い出すよ」



「つたく、ガリ勉パイセンが……」

「マキアス、確か限定のステツカーが当たったんだよね」

「それは……少々興味がありますね」

「クルト君もクロチルダさんのファンなんだ……」

「まあ、帝都市民だったらヴィータ・クロチルダの名を知らない人はいないだろうし」

「あはは、僕もレコードを何枚か持ってるしね」

「まったく、男子ときたら……」

「まあまあ」

「良いんじゃない？」

「うむ。我らでは理解出来ぬ何かがあるのだろう」

「ハハ……じゃあ、そろそろ出発しよう」

『！』

リインの一言に、二代目Ⅶ組は頭を切り換えた。

「分かっているとは思いますが、ヴィータは結社の最高幹部に名を連ねる凄腕だ。油断すんじゃないぞ」

クロウは念を押すように言った。

「はいー！」

「覚悟は出来ています……！」

「引き下がるわけにはいきません……！」

「相手にとって不足はねえな！」

二代目Ⅶ組は闘志を燃やした。

（使わせてもらおう時が参りました……）

ミュゼは装飾が彫られた小型拳銃を取り出した。

「その銃は……」

小型拳銃を見たエマはミュゼに問いかけた。

「お守りにとクロチルダさんが持たせてくれた物です。特別なまじないがかけてあるとか」

「そうですか……」

（そんなもので自害するつもりだったのか……）

キリコはアーマーマグナムに弾丸を装填しながらミュゼとエマの

会話を聞いていた。

「では行こう」

新旧Ⅶ組はヴィータが待つ場所へと歩き出した。

「そろそろヴィータと会いまみえる頃かのう」

最奥で待つローゼリアは月の霊場の入り口の方向を見つめた。

「ここは我ら魔女の眷属が穢れを払う場であり、修行を積んだ魔女への試練の場。見事これを打ち破れるならば、エマを次の長に指名出来るというもの……」

ローゼリアは微笑みながら、孫娘を想った。

「しかし退屈じゃのう。椅子とテーブルとティーセット一式を持ってくるんじゃないわい」

ローゼリアはため息をついた。

「ふふ。来たわね」

ヴィータは微笑みながら新旧Ⅶ組を迎えた。

「早速始めるとしましょうか？」

「やれやれ……さっそく臨戦体勢かよ」

「どうやらお忙しい最中に来て下さったみたいですね？」

「ええ、千の陽炎の準備に他の使徒たちへの対処もしているわ。でも——この水鏡の真実が明らかになるなら安いものでしょう。かつて巡回魔女だったイソラさんの遺志でもあるしね」

「お母さんの……」

「そーいやアンタ、結構懐いていたみたいね？」

「そのイソラさんというのがエマさんのお母さん……」

「先々代の巡回魔女というわけですか」

「ええ——魔女としての使命や相克についても調べていた人。あの人の影響で私も独自に調べ始め、盟主との邂逅にも至った。ならばこれはあの人やグリアノスへの最後の手向けでしょう」

「え……」

「……兄上が斬った……」

エマとユーシスの頭に蒼い鳥が浮かんだ。

「？」

キリコは首を傾げた。

「キリコ君は知らなくて当然ね。私もセリーヌと同じ使い魔を持っていたのよ。ちなみに婆様がちんちくりんなのは、グリアノスとセリーヌを生み出したからなのよ」

キリコの疑問を察したヴィータが説明をした。

「なるほどな……」

「それはそうと、エマの母親はともかく、グリアノスまでどうして……!?」

「ふふ、この水鏡は800年前に役割を果たした。そのあたりはセリーヌ——婆様から聞くといいでしょう。私と、この後待ち受けるもう一人の試練を乗り越えてね」

ヴィータから蒼い霊力が吹き上がった。

「くっ……」

「……来ます……!」

「使徒第二柱——《蒼の深淵》の全力……!」

「いや、前よりも強い波動を感じる!」

リインは根源たる虚無の剣を盾にしながら叫んだ。

「チツ……強化されてやがんのか!」

「さあ——見せてもらうわ。エマ、リイン君、クロウ、キリコ君たちも。隠された真実に至り——相克を乗り越えられるか否かを!」

「魔剣舞踏!」

ヴィータが召喚した魔剣が斬りかかった。

「くっ!」

「おのれ!」

リインとユーシスがそれぞれの得物で叩き落とした。

「突っ込む、真・絶光石火!」

「続け、ランブルスマッシュII!」

サラとアッシュが反撃に撃って出た。

「ふふ……」

ヴィータは落ち着きをはらって、扇を振り上げた。

「!?」

その瞬間、魔法陣が顕れ、二人は凍結した。

「無間氷獄……如何かしら?」

「アツシユ!サラさん!」

「ならば、レキュリア!」

ガイウスが治療のアーツを詠唱し、二人を助け出した。

「真・双剋刃!」

「真・蒼列斬!」

同時に、クルトとラウラが飛ぶ斬撃をくり出した。

「行きますよ、ドレッドブレイカー!」

「リードスナイプ」

立て続けにマキアスとキリコがクラフト技を放った。

「なかなかやるわね。でもこれならどう?」

ヴィータは魔導の障壁を張り、攻撃を防いだ。

「それは——」

「読んでいました……!」

「ゼルエル・カノン!」

「ダイヤモンド・ノヴァ!」

エマとミュゼは火属性と水属性の上位アーツを詠唱した。

「っ!」

ヴィータは扇を振り、上位アーツの威力を抑える。

だが無効化には至らず、ダメージを負った。

「逃がさないわ、ロゼッタアロー!」

「ブレイブスマッシュII!」

「ブリューナクII、照射!」

アリサとユウナとアルティナが追い撃ちを仕掛けた。

「くううっ!!」

ヴィータは膝をついた。

「や、やった——」

「違います！」

エマが叫んだと同時に、ヴィータの姿が消えた。

「これは!？」

「認識を操作して……!？」

「正確よ♥?」

無傷のヴィータは新旧Ⅶ組の背後に回っていた。

「いつの間に……!？」

「これはどうかしら?」

ヴィータは扇を振り上げ、姿を消した。

「どこに……!？」

「気をつけてください。何か仕掛けがあるはずです！」

「そこよっ!」

ユウナはガンブレイカーを構え、突っ込んだ。

「な!？」

不意を突かれたキリコはギリギリで回避した。

「そこお!」

ユウナはガンブレイカーをガンナーモードに切り換え、銃撃を放とうとした。

「させん!」

ラウラは羽交い締めをかけてユウナの動きを封じた。

「ちよ、なんでですか!？」

「ジツとしてなさい!」

セリーヌはユウナに魔術をかけた。

「あ、あれ?キリコ君……?」

「目が覚めたみてえだな」

「危うくキリコを蜂の巣にするところだったんだ」

「う、嘘……!」

ユウナの顔色が悪くなった。

「おそらく、アンタの目には他人があの子に映るように認識を歪ませられたんだわ」

「チッ！やっつけてくれるぜ！」

クロウはダブルセイバーから二丁拳銃に切り換えながら舌打ちをした。

「キリコ君、その……」

「気にするな。それより来るぞ」

キリコの頬を汗が伝う。

「っ！この感じは……！」

セリーヌは身震いを感じた。

「これはかわせるかしら？」

ヴィータは全身に膨大な霊力を滾らせていた。

「これは……!?!」

「姉さん……まさかそれは!?!」

「ロストアーツの一つよ」

ヴィータは微笑みとともに告げた。

「ロストアーツだと？」

「その名の通り、今は存在しないアーツのことです。まさかクロチルダさん……」

ミュゼは身構えた。

「出所は勘弁してね。それより、凌げるかしら？」

ヴィータは天から巨大な氷塊を降らせた。

「なら……パレス・オブ・エレギオン！」

エマはⅦ組メンバー全員に魔術の障壁を張った。

氷塊は障壁に阻まれて粉々に砕けた。

「やったー！」

「反撃開始だ——」

「そうはいかないわね」

再びヴィータから霊力が迸った。

「何!?!」

「本来、ロストアーツは一度発動したら霊力のチャージ時間を要するはず。連続して発動出来るなんてあり得ない！」

「……ロストアーツそのものでなかったとしたら？」  
キリコは口を開いた。

「さすがの慧眼ね。これは十三工房が作り上げたニセモノよ」  
ヴィータは三つの色が混ざったようなクオーツを取り出した。

「さすがに本物には及ばなくてね。一回使ったらもうただの結晶に過ぎないの」

ヴィータが言い終わるや否や、擬似クオーツは砕けた。

「そんなものが……」

「結社の十三工房……なんてものを……」

「それに婆様から教わっていないのかしら？」

ヴィータはエマとセリーヌを見つめる。

「ロストアーツは如何なる手段を用いても決して防げないことを」

「え!？」

「そ、そうなのか!？」

「……………」

エマは黙ってしまった。

「エマの絶対防御の魔術は見事よ。でもそれはあくまで物理攻撃や現存するアーツに対してだけ。喪われたアーツであるロストアーツの前では無力よ」

「っー」

「エマ……」

「さて、次は本物を見せてあげる」

ヴィータは右手を高く掲げた。

Ⅶ組の頭上に、先ほどよりも巨大な氷塊が現れた。

「アイシクル・メテオー!」

氷塊はゆっくりと落下を始めた。

「おいやべえぞー!」

「だ、だが防げないのでは……!」

「大ピンチ、だね」

Ⅶ組は氷塊を見上げることにしか出来なかった。

「……………」

周囲が騒ぐ中、キリコはARCUSⅡに空属性のクオートをセットした。

「キリコさん……?」

「……防げないなら、こうするまでだ」

「フォルトウナ」

キリコは右手を高く掲げ、空属性のアーツを発動した。

「キリコ!」

「どうするつもりだ!」

「防ぐことは出来なくてもアーツである以上、威力を弱めることは出来るはずだ」

「それでフォルトウナを……」

「全員一丸でフォルトウナを使えば半減させることくらいはできるかもしれない」

「で、でも……」

「やらないでくたばるよりマシだと思うが?」

キリコは不安そうなユウナの言葉をバツサリと斬った。

「こんな状況になっても……」

「相変わらず鉄面皮だな!」

「やるなら早い方がいい。時間がないぞ」

「確かに当たって砕けるだな。俺は乗ったぜ!」

クロウもフォルトウナをセットして発動した。

「まあ、無駄死になど御免被るがな」

ユースも続いた。

「教官」

「僕たちも!」

「ああ!行くぞ、皆!」

Ⅶ組は全員一丸となってフォルトウナを発動した。

「この力も加えさせてもらおう!」

さらにガイウスは聖痕を発動させた。

「セリーヌ……」



「ちよ、何よこんな時に——」

「私、諦めない」

エマの目に決意が宿った。

「エマ……」

「やれるのだな？」

「はいっ！」

エマは魔女の杖を掲げ、障壁を張った。

「着弾するぞ！ 衝撃に備えろ!!」

氷塊がⅦ組に直撃した。

「コホツコホツ！ きて、どうなったかしら？」

土埃を払い、ヴィータはⅦ組を注視した。

「っ!？」

そして息をのんだ。

「な……なんとか……」

「抑えられたみたい……」

決して低くはないダメージを受けていたが、Ⅶ組は誰一人膝をついていなかった。

「まさかロストアーツを凌ぎきるなんてね。でもまだよ！」

ヴィータは扇を払い、認識操作の魔術を使った。

「またか！」

「気をつけろ！ 無闇に攻撃するな！」

「ですが、このまま動かなければ……」

「待っているのは殲滅よ。魔剣舞踏！」

ヴィータはお構い無しに攻撃を仕掛ける。

「くっ！ 堅牢陣・玄武！」

リインは強化されたブレイブオーダーを起動した。

「いつまで耐えられるかしら？」

ヴィータはさらに攻撃を激化させた。

「ぐっ！」

「これじゃ近づけねえ！」

クルトとアッシュは防御しながら奥歯を噛んだ。

「せ、せめて一発くらい……!」

「だ、ダメです、ユウナさん……!」

「ガンブレイカーを構えるユウナをアルティナが押し留めた。

「悔しいでしょうね。このまま何も出来ずに終わるんだもの。せめて美しく散りなさい——」

「いや、終わるのはお前だ」

ヴィータの背後からキリコが冷徹に告げた。

「!」

ヴィータは思わず目を見開いた。

「……………」

キリコはアーマーマグナムの銃口をヴィータの首筋に向けた。

「どうやって!」

「その前に魔術を解け」

「……………」

ヴィータは認識操作の魔術を解いた。

「それでいい」

「なら教えて?どうやって私の術を……!」

振り返ったヴィータは再び目を見開いた。

キリコは左手で大型ナイフの刃を握りしめていた。

「まさか痛みで術を解いたの……!」

「これくらいどうということはない。それよりいいのか?」

「?」

「既に包囲しているぞ」

「つ!」

「その通り」

「済まないな、キリコ」

「これでようやく……」

「追い詰めたぜ」

ヴィータの後ろにはラウラ、ガイウス、クルト、アツシユが構えていた。

「悪いな」

「これで……！」

「チエック、ですね」

その周りでクロウ、ユウナ、マキアスがそれぞれの得物の銃口を向ける。

「後は合図一つで攻撃する。アーツも控えていることだしな」

キリコの視線の先にはアリサ、エリオット、エマ、ユース、アルティナ、ミュゼがARCU S IIを起動させていた。

「二応、回収しとくね」

ファイがヴィータの扇をひったくった。

「どうされますか、クロチルダさん？」

「早めに決めた方がいいわよ」

リインとサラが最後通告をした。

「……………」

ヴィータは一瞬黙りこみ、フツと息をついた。

「悔しいけど、私の負けね」

ヴィータは敗北を認めた。

「か、勝ったの……？」

「負けを認めたということはそうなのだろう」

「……………」

VII組が得物をしまう中、キリコはアーマーマグナムを下ろさなかった。

「ふう……信用されていないのはわかってたんだけどね」

ヴィータは肩を竦めた。

「キリコさん、大丈夫です」

「霊力は感じないわ。百パーセント信用しろとは言わないけど、戦う意思はなさそうよ」

「……………」

ミュゼとセリーヌに説得されたキリコはアーマーマグナムを下ろした。

「ありがとう。それより左手、早く治療した方が良いんじゃない？」  
「ああ」

キリコは大型ナイフを捨て、ティアラの薬を傷口にかけた。

「もう、乱暴なんですから」

ミュゼは回復アーツを詠唱した。

「とりあえず、第一関門突破ね」

「ずいぶんと厚い門だったがな」

「煌魔城の時よりも強くなってませんか？」

「ここは試練の場も兼ねているからだと思っわ。もちろん、まだまだ伸び代があったっていうのもあるけど」

「伸び代って……」

「さりげなく恐ろしいこと言うんじゃないよ」

クロウはため息をついた。

「とにかく、見せてもらったわ。君たちが真実に至り、相克を乗り越えられる力があることを」

ヴィータは微笑んだ。

「クロチルダさん……」

「でも安心するのは早計よ」

直後、ヴィータの顔は真剣なものへと変わった。

「これから待ち受けている人の試しは私以上に苛烈なものになるはず。気を抜いていると即座に宝剣の前に散ることになるでしょうね」

「っ！」

「いよいよか……」

「光の剣匠閣下と叔父上に習い、帝国二大流派を修めた達人……」

「黄金の羅刹……オーレリア・ルグイン」

VII組は霊場の奥を見つめる。

「……………」

治療を終えたキリコは大型ナイフの血糊を拭き取った。

「そういや、お前と黄金の羅刹は因縁があんだろ？」

「確かにキリコさんと分校長は内戦では敵同士でしたが」

「いやそれはてめえもだろ」

アッシュがつっこんだ。

「でも、キリコ君は分校長の推薦で第二分校に来たんでしょ？ だったら因縁とか関係ないんじゃないの？」

「……決着をつけるために呼んだ、ということかもしれないがな」

「それは……ありえるかもな」

「分校長だもんね……」

「分校長の性格を考察すれば……」

「俺ら以上にフリーダムだよな……」

（反論したいのですが、出てきませんね……）

キリコの言葉に二代目Ⅶ組は揃ってため息をついた。

「なんだか日常的に苦労してるみたいだね……」

「自由闊発、と言えば聞こえは良いのだろうが」

「聞いている以上にゴーイングマイウェイな方だな……」

「あははは……」

リインから乾いた笑いが出た。

「それじゃ、私は先に行ってるわね」

ヴィータの足元に魔法陣が顕れた。

「行ってるって、どこに？」

「何事も一つってことはないのよ」

「はあ？ 何を訳のわからないことを……」

（一つだけではない……そういうことか？）

キリコはヴィータの真意を推察した。

「とにかく、気をつけなさい。将軍も婆様も本気で君たちを潰しにかかるでしょうから」

「ゴクツ……」

「はっ、上等だ」

「元より越えなくてはならぬ壁。死力を尽くすのみ……！」

「勝率は一割未満と思われれます。ですが……………」

「僕たち全員の力を合わせれば……………」

「貫けぬものなどない……………」

VII組は戦意を高揚させた。

「ふふ、頼もしいわね。それとエマ」

ヴィータはエマと向き合った。

「せいぜい頑張りなさい。イソラさんにも出来なかった呪いの真意に迫りたければ」

「わかつてる」

「なら行きなさい。信じてる子たちと一緒に」

「うん、行ってくる」

「それともう一つ……………」

「？」

「リイン君と結ばれた時はいつでも駆けつけるから♥?」

「は!？」

「うふふ、ごきげんよう♪」

ヴィータは楽しそうに転移して行った。

「……………」

エマはプルプル震えていた。

「エ、エマ……………」

「その…………大丈夫ですか？」

「……………」

「エマさん？」

「姉さんの…………ばかああああっ!!」

エマのヴィータの消えた方向に向かって叫んだ。

「え、えつと…………」

「空気読みやがれ」

「今はそつとしておきましょう」

声をかけようとしたリインをアッシュとクルトが止めた。

「……………」  
喧騒をよそに、キリコはオーレリアがいる方向を見つめた。

「……………」

オーレリアは目を瞑り、宝剣を構えた。

「っ!!」

目を開き、宝剣を振り抜く。

そこからアルゼイド流とヴァンダール流の剣法を繰り返した。

「はあっ!!」

最後に袈裟斬りをし、宝剣を納めた。

「漸く身体が温まってきたか。まあⅦ組を相手にするならば当然か」

手の甲で汗を拭いながらオーレリアはⅦ組のいる方向を見つめた。

「シュバルツァー率いる初代Ⅶ組は言うに及ばず。特に妹弟子と若き守護騎士の力は楽しみだ」

「二代目Ⅶ組はもはや雛鳥を過ぎた。クロフォード、ヴァンダール、オライオン、カーバイド。それぞれがどのように成長したか、とくと見せてもらおうとしよう。そしてミルディーヌ様も」

「そしてキュービー……深く重く避けられぬ宿命に抗わんとする姿は見事と言う他ない。だが……」

オーレリアは宝剣を握りしめる。

「他者の想いも踏みにじることも厭わぬ覇道を征くならば、この手で斬る。ミルディーヌ様のために……!」

「っ!？」

セリーヌはビクリと震えた。

「どうしたんだ、セリーヌ」

「トイレなんざねえぞ」

「違うわよこのプリン頭! 霊力とは違う何かを感じたのよ」

「霊力とは違う何か……」

「おそらく分隊長——オーレリア・ルグイン將軍の気当たりだろう」

「はあ!？」

「ま、まだ先ですよね!？」

「それだけ本気なのだろう」

「今から心折れそうなんだけど……」

「それでも行くしかない」

キリコは前だけを見ていた。

「ま、それしか選択肢ないしね」

「ここまで来て今さらケツまくるわけにもいかねえか」

「無様に背を向けるわけにもゆくまい」

フィー、クロウ、ラウラはキリコに続いた。

「ほらほら、シャキツとしなさい。それともギブアップ?」

サラが発破をかけた。

「だ、大丈夫です!ちよつとふらつときただけっというか、皆もそうでしょ!？」

「ええ。武者震いというやつです」

「いつかは越えなくてはならない目標ですから」

「ぶちのめすチャンスが来やがったんだ。有効に使わねえとなあ」

「……………」

アルティナは目を瞑っていた。

「アル?」

「大丈夫です」

アルティナは目を開き、顔を上げた。

「越えましょう、全員で……………」

「アルティナ……………」

アルティナの言葉はⅦ組の迷いを断ち切らせた。

「では行こう。みんな!」

『おおつ!!』

Ⅶ組はオーレリアの待つ場所へと歩き出した。

『……………』

Ⅶ組が歩き出した後、ローブを纏った者が現れた。



『……コ……ウ……ケイシ……ヤ……』  
ローブを纏った者は呻くように言いながら、VII組の後を追った。

## 月の霊場③

「来たか」

オーレリアは新旧Ⅶ組を不敵な笑みで出迎えた。

「深淵殿と刃を交えたばかりのようだが、フフ——戦意は十分か」  
オーレリアは宝剣を肩に担いだ。

「うう……やっぱり」

「ふふ、お忙しいでしょうにご苦労様です」

「どうか付き合い良過ぎ」

「フフ、パンタグリユエルでの迎撃をそなたらに任せてしまったかな。もう一度聖女殿に挑みたたくもあつたが資格なき身では是非もあるまい。この場で試練の前座を務めるならまさに一石二鳥というものだ」

「クク……相変わらず痺れる姐さんだ」

「挑ませて頂きます、分校長」

「二対多数にはなっちまうがこちらも手は抜かねえからな？」

（まだ見くびっているのか……）

アッシュの言葉にキリコは心の中で呆れ果てた。

「二対多数か……だから何だというのだ？」

オーレリアから黄金の闘気が迸る。

「なに……!?!」

「黄金の輝き……」

「我が異名は黄金の羅刹、それは剣や機甲兵が由来ではない。我が闘気と、用兵の鮮烈さを幻視した世人がいつしか称したもの。一剣士としてではなく——将としての輝きも含めてな」

「っ……!」

「そういうことか……!」

「キュービィー、それはそなたが一番よく解っているはず」

「ああ……」

「キリコ……」

「思えば内戦時、そなたは策を弄しつつもいつも真正面から挑んで

きおつたな」

「用兵が鮮烈というが裏を返せば派手さ故に隙が大きい。そこを狙って仕掛ければいいだけのことだ」

「そのおかげでウオレス共々いつも手を焼かされた。終いにはいきり立つ兵たちの諫め役までさせられたのだぞ？」

「それも将というものだろう」

「フフ、確かにな」

オーレリアは笑みを浮かべた。

「え、えつと……」

「お二人だけで盛り上がりながらも……」

「おつと、そうであつたな」

オーレリアは咳払いをし、改めて新旧VII組と向き合う。

「今一度思い出してみるがよい。そなたらがこれから相対する者たちを」

「俺たちが相対する者……」

「団長に槍の聖女……」

「我が兄ルーファス・アルバレア……」

「そして、鉄血宰相……」

新旧VII組はそれぞれの存在を思い浮かべた。

「思い出したようだな」

オーレリアは再び黄金の鬨気を漂わせる。

「おそらく今のそなたらでは届かぬ猛者たち。ならばそなたらは全身全霊で我が試練を乗り越えるしかあるまい。かの獵兵王に槍の聖女——何よりも激動の時代に君臨する鉄血に挑むためにもな……！」

「確かにいずれも尋常ではない将の器の持ち主……！」

「彼らと同じ重みを受け止め、乗り越えるための試金石つてわけね……！」

「そして城将たる兄上にも通じる試練だ……！」

(そのさらに向こうには、奴が……！)

キリコはVII組よりもさらに先を見た。

「届かせていただく——オーレリア・ルグイン將軍！」

「最強の将にして剣士たる貴女に！」

ラウラとリインが抜刀し、全員が続いた。

「意気やよし——我は羅刹、戦場を蹂躞する黄金の軍神！我が宝剣アーケディアの前に揃って跪くがよい——！」

黄金の羅刹による試練が幕を開けた。

「リインさんたち、大丈夫でしょうか……？」

カレイジャスⅡのブリッジで待機しているアルフィンはオリヴァルト皇子に問いかけた。

「深淵の魔女殿に黄金の羅刹がいる以上、苦戦は必須だろう。新旧Ⅶ組の総力を結集してトントン、っていうのは甘いかな？」

「あの噂が間違いならな」

「噂？」

エリゼはミユラー少佐の方を向いた。

「黄金の羅刹——オーレリア・ルグイン將軍は未だ本気を出していないという噂だ」

『え……』

ブリッジにいる者たちの表情は凍りついた。

「あまりの強さに敵がいなくなり、何時しか加減しながら剣を振るっているという噂が存在するのだ。紅の戦鬼、お前は間近で戦いを見たそうだがどうだ？」

「ん、そうだねえ。イプシロンと殺りあつた時は心なしか愉しそうだったよ。何て言うか、理想の敵と出会った感じ？」

シャーリイはジュノー海上要塞での戦いを思い出しながら言った。

「……どうやら噂は真実だったようだね」

「トントンは済まなくなつたな……」

（兄様……）

エリゼは両手を組み、懸命に祈った。

「エリゼ……」

アルフィンは親友の肩に手を置くことしか出来なかった。

「キリコ side」

「ぬうんっ!」

オーレリアの一振りが爆風を生む。

「くっ!」

「まるで手がつけれねえ!」

俺たちは序盤から劣勢に追い込まれていた。

宝剣と呼ばれるだけあり、オーレリアの剣はかなりの破壊力を有していた。

あれにオーレリア自身の能力を重ねればこうなるのは当然か。だが何か気にかかる。

生身の實力は知っているはずだが、それらを上回っているような気がする。

「アーマーブレイクII」

動きが一瞬止まったのを機に狙いをつけて撃った。だが既にいなかった。

「どうしたキュービィー?」

回避したオーレリアは一気に接近してきた。

「そんなものではないだろう。そなたの、いや貴様の力は!」

オーレリアは宝剣を振り下ろしてきた。

「っ!!」

アルゼイドが咄嗟に大剣で受け止めた。

「すまない」

「構わぬ……はあっ!!」

アルゼイドがオーレリアの剣を払った。

「ほう……」

「まだまだ!」

「ならば受け取るがよい。四耀剣!」

「っ!?!」

オーレリアの一撃がアルゼイドを吹っ飛ばした。だがこれも策の内だ。

「ヴォイドブレイカーⅡ！」

「ゲイルストームⅡ！」

隙を突いてアツシユとウオーゼルが仕掛けた。

「フツ……」

オーレリアは宝剣の腹で受け止めた。

「チツ！」

「だが……！」

「ブルーアセンション！」

「エアリアル！」

「ガリオンフォート！」

二人が下がった瞬間、水、風、幻属性のアーツが襲いかかる。

「見事な連携だが、甘い！」

オーレリアは黄金の鬨気を纏わせた宝剣でアーツを文字通り斬り裂いた。

『……………』

追撃に移行しようとした者は勿論、俺でさえ動きが止まった。どうやら俺も見くびっていたようだ。

オーレリア・ルグインという化け物を。

「キリコ side out」

「嘘……でしょ……？」

「あり得ません……」

「物理攻撃ならまだしも、アーツまで防ぐとは……」

「い、いくら何でも……」

新旧Ⅶ組に動揺が広がった。

(全員……というわけではないが、オーレリアの迫力に飲まれつつあるな)

キリコは呼吸を整え、オーレリアを見据える。

「それにしても、先ほどの技はいったい……」

「フフ、亡き師父は良いものを授けてくれた」

「良いもの……？」

「ああ——」

オーレリアは宝剣に再び黄金の闘気を纏わせた。

「気を制御し、己が武器に纏わせる。魔剣と化したその剣は岩盤を切り裂き、アーツ等の魔を退ける。獲られる戦果は爆発的なものになるとな」

「な……!?!」

「東方で言う気功術……」

「まさか会得しておられたとは……!?!」

新旧VII組は呆然となった。

「まさかこれを使わせられるとは思わなんだ。旧VII組の者たちは無論、VII組特務科の皆も成長したもののよ」

「分校長……」

「……だからこそ、発揮できるというものだ」

オーレリアから先ほどとは比較にならないほどの黄金の闘気が溢れ出す。

『っ!?!』

新旧VII組はオーレリアの迫力に気圧された。

「……そういうことですか」

リインはゆっくりと口を開いた。

「貴女は未だ極みに達してはいなかった、違いますか?」

「え!?!」

「な、何だと……!?!」

「フフ……」

オーレリアは笑みを浮かべた。

「聖女殿と刃を交えたあの日から研鑽を積み、更なる境地へと進みつつある」

「成長しているのはそなたたちだけではないということだ」

「な……」

「未だ底があると……!?!」

「チート過ぎるだろうが……!?!」

「……………」

周囲が絶句する中、キリコはアーマーマグナムに弾丸を装填する。

「キリコ君……」

「やることは変わらない。こちらは数の利を最大限生かして倒す。それだけだ」

キリコはオーレリアを見据える。

「い、言うのは簡単だが……!」

「いえ、可能です」

ミュゼが顔を上げた。

「分校長がおっしゃるのように、私たちも成長しています。それに――」

ミュゼはARCU SⅡを取り出した。

「私たちには、これがあるじゃないですか」

ミュゼが言い終えると同時に、ARCU SⅡが青く光だした。

「戦術リンクの光……」

「そ、そうですよ!まだ諦めるには早すぎますよ!」

「まだ逆転の目は尽きてはいないかと」

「僕たち全員の力を合わせれば、本気の分校長にだって届くはずですよ」

ユウナの叱咤にアルティナとクルトが続いた。

「決めるのはテメエだ」

アッシュはリインに目をやる。

「……ああ、そうだな」

リインは根源たる虚無の剣を構え一呼吸置く。

「Ⅶ組の、俺たちの強みをまだ見せていないな……!」

リインが言い終えるや否や、新旧Ⅶ組全員に戦術リンクが繋がった。

「これって……!」

「僕たち全員に……」

「それだけじゃなさそうよ」

サラの視線の先で、根源たる虚無の剣が青く輝き出した。



「ミリアム……」

「彼女もⅦ組の一員である以上、当然かもしれません……」

（お姉ちゃん……）

アルティナは姉を想った。

「今こそ、真に一つとなる時だ！」

「ああ。クルト、アッシュ！」

「ー！」

二人はリインの方を向いた。

「俺、ラウラ、ユーシス、ガイウス、クロウと共に前衛を務める。やつてくれるな？」

「はい……！」

「任せろや」

「キリコとユウナはフィーとサラ教官と共に遊撃に回ってくれ！」

「了解」

「分かりました！」

「アルティナとミュゼはアリサ、エリオット、マキアス、エマと後方からの援護を担当してくれ！」

「了解しました！」

「お任せください！」

リインは教え子たちに次々と指示を飛ばす。

「フフ、中々大したものだ。だが、そんな程度で我が宝剣を阻むつもりか？」

「ではお見せしましょう……Ⅶ組の底力を！」

Ⅶ組全員が得物を構えた。

「ならば——来い！」

両者は再び激突した。

「なるほど……それで貴女がここに」

Ⅶ組がオーレリアと刃を交えている同時刻、カレイジャスⅡのブリッジでは会談が行われていた。

「リイン君たちの力量は相当なものだと判断しました。流星は殿下が

お作りになられたクラスですわね」

「私は単なる発起人に過ぎない。貴女が目を見張るほどに成長を遂げたのは彼ら自身さ」

オリヴァルト皇子は微笑んだ。

「それで、リイン君たちは今……」

「分校長さんと死闘を繰り広げている頃かしらね」

「そう……ですか……」

トワの表情が暗くなった。

「心配することはないわ。初代が結成されて以来、ずっと近くで見えてきたんだから。二代目の子たちも想像以上に強かったわ。ただ……」

ヴィータの表情が真剣なものに変わる。

「あの人の強さは文字通りの桁外れね」

「……だろうな」

『……………』

ブリッジは沈黙に包まれた。

「それでも、私は信じる。彼らの絆の強さを」

オリヴァルト皇子は笑みとともに発言した。

「彼らは学生の中から戦ってきた。それも自分たちよりも強い相手にだ」

「初代Ⅶ組設立当時は、今よりももっと厳しい状況でしたからね」

「永きに渡る身分制度の弊害……それはツールズでも同じこと。身分に関係なく集められたクラスに風当たりは強かった。………当時の僕のように」

「パトリック君……」

「俺ら支援課も最初はギルドの猿真似だの何だの言われたけどよ、あいつらはいいつらで色々あったんだな……」

ランディは頭をガシガシと掻いた。

「その強い相手にどうやって抗ってきたか。たゆまぬ努力で得た力？ 師から教わった技？ 生まれつきの異能？ ARCCUSの恩恵？ どれも違う」

「仲間と手を取り合い、如何なる困難をも乗り越える唯一無二の力……絆だよ」

オリヴァルト皇子は力強く断言した。

「そしてそれは二代目の子たちに確実に受け継がれている。特にキリコ君は顕著だと私は思うね」

「キリコ君がですか……？」

「ああ」

オリヴァルト皇子の表情は確信めいていた。

「っ！」

オーレリアのクラフト技を受け、クルトは膝を付いた。

「使え」

キリコはセラスの薬をクルトに渡した。

「す、すまない……」

「早く飲め。一々待つてはくれない」

キリコはそう言つて戦列に戻った。

「ああ、そうだな！」

クルトは一気に飲み干し、双剣を握りしめた。

（行くぞ……！）

クルトはオーレリアに斬りかかった。

「はあ……はあ……！さすがに……キツイわね……！」

ユウナは疲労困憊になっていた。

「キツイなら一旦下がれ。カバーならしてやる」

「ありがとう。でも大丈夫！」

ユウナは精一杯の笑顔で応えた。

「わかった」

キリコはそれだけ言つてアーツを詠唱した。

（ありがとう、キリコ君）

ユウナはガンブレイカーを構え、走り出した。

「おらあ!!」

アツシユはオーレリアに特攻を仕掛けた。

「遅い!」

「うおっ!」

反応したオーレリアの一振りにガードごと吹き飛ばされた。

「大丈夫か?」

キリコは身を挺してアツシユを受け止める。

「チツ、余計な真似しやがって……」

「文句は後で聞いてやる。アーマーブレイクⅡ」

キリコはアツシユを横目にクラフト技を放つ。

「チッ!」

(見てやがれ。必ずてめえを追い越してやるぜ……!)

アツシユは闘志を燃え上がらせた。

「ブリューナクⅡ、照射!」

「メルティバレットⅡ!」

アルティナとミュゼは後方からクラフト技で前衛と遊撃役の援護に努めていた。

(ミルディーヌ様を巻き込んでしまいかねないが、致し方あるまい)  
オーレリアは一足飛びに後衛に狙いを定めた。

(抜かれたか。なら背後を叩く……!)

キリコはオーレリアの背中を追う。

「フ、そう来ると思ったぞ」

オーレリアは反転してキリコを迎え撃つ。

「させません!」

ミュゼはオーレリアに狙いを定め、ARCU SⅡを起動させる。

「起動、フラガラツハⅡ!」

腕を刃に変えたクラウⅡソラスが横から攻める。

「タイミングは上々、だが!」

オーレリアは宝剣で受け止め、弾いた。

「クリアブラストⅡ」

防御した隙を狙い、キリコはクラフト技を放つ。

「ほほう……いー」

オーレリアの口角が上がる。

「ミルディーヌ様やオライオンに当たらぬ位置からの発砲……方が一にも当たっていた場合はどうするのだ？」

「外さない。それだけだ……いー」

キリコはアーマーマグナムに持ち替え、発砲した。

「フ……」

オーレリアは一足飛びに離れた。

「……無事のような」

キリコは薬を渡しながら言った。

「はい」

「ありがとうございます……いー」

「アルティナはステルスを利用して奇襲を仕掛けてくれ。前衛が合わせてくれるはずだ」

「わかりました」

アルティナは透明になり、オーレリアの近くへと移動する。

(このオーダー、応えなくてはいけませんね)

アルティナは知らず知らずのうちに拳を握りしめていた。

「キリコさん……」

ミュゼはキリコを呼び止めた。

「どうした？」

キリコは弾丸を込めながら答えた。

「いえ……」

ミュゼは目を伏せた。

「ならミュゼ、俺の動きに合わせて撃てるか？」

「はい。キリコさんが仕掛けて離れた瞬間に合わせて撃つんですね？」

「あ、ああ……」

「ふふ、援護はお任せください♪」

「わかった。だが無理はするな」

「はいっ！」

キリコはミュゼの返事を聞いて離れた。

「キリコさん……」

ミュゼは得物を構えながらキリコを目で追った。

(いいえ、今は考えている場合ではありません。今は分校長——  
オーレリアさんに勝つことだけを考えねば……)

ミュゼは気を取り直すように、オーレリアに視線を向けた。

「秘技・鬼疾風！」

リインは鬼気解放で強化させたクラフト技で斬りかかった。

「くっ！やるな……」

オーレリアは宝剣を盾にして二段構えの攻撃を凌ぎきった。

「ぐっ!？」

突如、リインは膝をついた。

「どうやら限界らしいな。もらった！」

オーレリアは宝剣を振り上げた。

「ハンティングスロー」

すかさずキリコが妨害する。

「今だ！」

「ああ！」

「応よ！」

ガイウスの一声にユースとクロウが仕掛ける。

「チイッ！」

オーレリアは一旦下がった。

「ぐううっ！」

リインから黒いものが発せられた。

「キュリア」

キリコが治療アーツをかけるとリインは正気に戻った。

「済まない、キリコ」

「気になさらず」

キリコはそれだけ言つて戦線に戻つた。

(キリコ、君の働きに応えなくてはな……！)

リインは教え子の心底を見抜き、再び立ち上がった。

(フフフ、なかなかやるな)

新旧Ⅶ組の連携の前に、オーレリアは徐々に押されていた。

(そしてキュービィー、どうやら杞憂だったようだな)

キリコの動きを見ていたオーレリアは肩の荷が下りたような気がした。

「ならば、一気に凋伏してくれよう……！」

オーレリアは闘気を放ち、宝剣を構えた。

「来るぞ!!」

『!!』

リインが叫び、初代Ⅶ組はARCUSSⅡを起動させた。

「み、皆さん……!!」

「今度は僕たちの番だよ！」

「我らが盾となり、そなたらへ繋げよう！」

「誰でもいい、止めは君たちが！」

「つたく！カッコつけやがって……！」

(勝負は一瞬……)

キリコは弾丸を込める。

「王技・剣爛舞踏!!」

凄まじい闘気と剣戟がⅦ組を襲つた。

初代Ⅶ組は必死に堪えるが、一人また一人と膝を折っていった。

(……だ……！)

それはほんの一瞬だった。

宝剣を引いた瞬間を狙い定め、キリコは引き金を引いた。

「ぐっ!」

放たれた弾丸はオーレリアの脇腹を掠めた。

「ミュゼー！」

「参りますー！」

ミュゼはオーレリアを見据えた。

「さあ、舞台の幕を開けましょう。レッツ・スタート！まだまだ、ここからが佳境です。ロード・ガラクシア!!ふふふ、ご満足いただけましたか？」

「……お見事……ですが！」

ミュゼのスクラフトを受けたオーレリアは宝剣を支えに倒れようとはしなかった。

「なら、これでは！」

ミュゼは小型拳銃を構え、引き金を引いた。

「くっ……！」

オーレリアは直撃は免れたが、体勢が崩れた。

「今ですー！」

『了解！』

キリコたち二代目Ⅶ組が総力を結集してバースト攻撃を放った。

「フッフ……抜かれたか……」

オーレリアは微笑みながら膝をついた。

新旧Ⅶ組は黄金の羅刹の試練を勝ち抜いた。

「や、やったのか……？」

「そ、そうみたいだが……」

ある程度回復を済ませた新旧Ⅶ組は膝をついたオーレリアを見つめる。

「見事也、Ⅶ組」

オーレリアは立ち上がり、宝剣を納めた。

「二度は折れかけるも持ち直し、逆転を成し遂げるとはな。そなたらの培われた絆、確かに見届けた」

「あ、ありがとうございます」

「うむ。だが——」

オーレリアは言葉を切り、新旧Ⅶ組を見据える。



「心することだ。これよりそなたらが挑む相手はその絆をも呑み込まんとするということを」

『っ!!』

新旧VII組の表情に真剣みが宿る。

「どれほどの絆を培おうと、強大な相手の前には塵と化すことさえある。それはそなたらが身を以て知っていることだろう」

『……………』

新旧VII組はそれぞれ敗北の記憶を思い浮かべる。

「フフ……」

オーレリアは腕を組み、笑みを浮かべる。

「だがそなたらは私という壁を乗り越え、その絆の強さを証明した。そなたらならば、彼らに届くであろう」

「分校長……」

「どうやら認めてくれたみたいだね」

「かなり消耗させられたけどな……」

「では分校長……!」

リインはオーレリアを真っ直ぐ見る。

「征くがいい、トールズVII組よ」

オーレリアは脇に逸れ、道を譲った。

「行こう、みんな」

新旧VII組はローゼリアの待つ最奥へと歩き出した。

「どうやら越えたようじゃな」

ローゼリアは新旧VII組がオーレリアの試練を突破したことを感じ取った。

「真の力を解放した妾でさえ苦勞するであろう相手に届かせるとは

……見事という他あるまい」

「イソラよ……お主の娘は強くなったぞい」

ローゼリアはエマの母を思い浮かべ微笑む。

「じゃが、妾として手を抜くつもりはない」

「この帝国を覆う黄昏……呪いに立ち向かえるかどうかを見極めね

ばならん。最悪、女神の下へと逝かせてしまうやもしれぬ……………」

「そうなりたくなければ、全力で来るがよい。ドライケルスの子らよ」

ローゼリアは新旧VII組が来る方向を見つめる。

「しかし——」

ローゼリアは顔をしかめた。

「先ほどから妙なものを感じる……………」

ローゼリアは霊場入口の方を見る。

「闘争の気配に紛れておくでもないものが入り込んだか……………」

『……………』

新旧VII組が進み、オーレリアが去った試練の場に、ローブを纏った者が現れた。

『……………ΦΠΔ……………ΥπΒΙΙΔ……………』

ローブを纏った者は不思議な言葉を吐きながら新旧VII組をゆつくりと追いかけ始めた。

「!？」

キリコは後ろをバツと振り返った。

「どうした?」

「何か聞こえなかったか?」

「さあ?アルティナは?」

「いえ、何も感知していませんが」

「遂に耳までおかしくなったかよ?」

「アツシュ」

「冗談でも言わないの」

「いや、いい。何でもない」

「そ、そう?」

「よし、そろそろ魔獣が出てくる頃合いだ。最後まで気を抜かないようにな」

「ああ!」

「参りましょう！」

新旧Ⅶ組は歩き出した。

(先ほど聞こえたもの……どこかで……)

キリコは何か引つかかるものを感じながら、仲間たちを追いかけた。

## 灼獣

「見事、辿り着いたか」

ヴィータ、オーレリアの試練を乗り越え、月の霊場最奥に到達した  
新旧Ⅶ組をローゼリアが出迎えた。

「お祖母ちゃん、来たわ」

エマは覚悟を決めた眼差しをローゼリアに向ける。

「それが例の水鏡ですか」

「うむ——月冥鏡という」

(あれが……)

「なんて清冽な……」

「あれが、歴代の巡回魔女が管理していたという……」

「なるほど、古代遺物の一種だったか……」

星杯騎士のガイウスは月冥鏡の正体を察知した。

「そ、そうなんですか!？」

「確かに……クロスベルの鐘に雰囲気は少し似ているような」

アルティナはクロスベルにあった鐘を思い浮かべた。

「フフ、あれはクロイス家が受け継いできた古代遺物じゃな。リ

ベールでは《四輪》や《方石》、アルノール家の《史書》——おっと、

オリヴァルト皇子の《貝殻》も同じ部類なんじゃろう」

「いずれも旧き一族に伝えられし、太古より女神より授かった神具

——」

「そしてその内の一つである魔女が受け継いだのがその鏡というわけか」

「うむ、各地の霊脈と結び付き、黒の史書とも連動する——ヌシらが各地で見た幻視などもこの水鏡が大元になっているのじゃ」

『!?!』

ローゼリアから語られる真実に新旧Ⅶ組は驚きを隠せなかった。

「そうだったのか……」

「じゃあ、内戦中に見た幻視も……」

「大元はここというわけね」

「そのとおり。ああ、記憶の部屋は別物じゃ」

「それはどうだっついていい。それより、そいつで隠された真実とやらは見れるのか？」

キリコはローゼリアを問いかけた。

「無論じゃ。ただし——」

ローゼリアは肯定した直後、真剣な表情に戻った。

「この水鏡は妾や巡回魔女にすら滅多に啓示を与えぬ神具でもあった。じゃが、黄昏が最終段階に入り、大いなる闘気がこの地を包み——巡回魔女たるエマ、呪いの贅たるシユバルツァー。妾とセリーヌが一堂に会したこの刹那ならば話は別じゃ」

ローゼリアがいい終えるや否や、緋色の闘気が揺らめきだした。

「な……!?!」

「くっ……早速やり合うつもり!?!」

「《赤い月のロゼ》……吸血鬼の真祖でしたか」

「クク、その吸血鬼というのは眷族どもによる風評被害じゃな。だが——精気を操るといふ意味では間違っているわけでもないか」

次の瞬間、緋色の闘気が膨れ上がり、ローゼリアと重なりあうように巨大な獣の姿が揺らめいた。

「……!?!」

「なん……だ……?」

「……獣……」

「ま、まさか——!」

「……アタシやグリアノスの存在の大元……」

「フフ、我が名ローゼリアとは元々は古の獣のこと。その正体は1200年前、災厄を御するため焰の一族の長と融合した存在にして……女神が遣わした聖獣……《翼ある灼獣》というわけじゃ」

「……あ……」

「おばあ……ちゃん……」

セリーヌとエマは呆然となった。

「……消えたもう一柱の聖獣……教会もその行方を探っていたが

……」

「……まさか人間と融合して新たな存在になつてたとはな……」

「繰り返すようじゃが、妾が二代目じゃな。先代の長は800年前に消えたことは知っておるな？」

「ヘクトルI世と共に暗黒竜討伐の際、その血と瘴気を受けて亡くなつたと」

「……どうやらその裏で地精どもが関与しておつたようなのじゃ」

「……ここでも地精が……」

「七の騎神を生み出して以来、袂を別つたと聞いていましたが」

「話を戻す。そしてここにいる妾は、元は使い魔——セリーヌたちと同じ立場にあつた」

「あ……」

「先代は生前、妾をこの地に連れて、己に何かあらば再訪するように言い残した。そして妾は、この月冥鏡により先代の記憶の一部と使命を受け継ぎ……二代目ローゼリアとなつたわけじゃ」

「……」

セリーヌは再び呆然となつた。

「そういえば、深淵が使役したあの鳥も蒼い翼だつたわね……」

「思えばどちらも焰の聖獣の特徴を別の形で受け継いでいたわけか……」

「そ、それじゃあ今回、セリーヌを呼んだのって……」

「うむ、黄昏が最終段階を迎えた今、地精たちとの対決も近いじやろう。相克とは別に——場合によっては妾自らが刺し違えることもあり得よう。その時の保険みたいなものじゃな」

「そんな……」

「ロゼ、アンタ……」

「ああ、別に死ぬつもりはない。どちらかというオマケじゃ。本命は、闘争の果てに水鏡が見せる黒の史書と連動した幻視——巡回魔女と真なる贄がいれば呪いの全貌が明らかになるじやろう」

「……」

「そうか、俺たちが各地で見た幻視の大元にあるものを引き出すた

めに……」

「そのために必要なのが闘争……」

「ここでロゼさんとガチでやり合う必要があるってことですか……！」

「うむ——始めるとしようか」

ローゼリアは膨大な闘気を揺らめかせつつ臨戦体勢に入った。

「っ……！」

「おおっ……!?!」

「なんとというオーラ……！」

「でも、こちらも退けない……！」

「ええ——ここが正念場よ！」

「立ちはだかるなら、倒すだけだ……！」

「新旧Ⅶ組——これより最大級の試練に挑む！」

「示すでしょう、ミリアムが護り、繋いでくれた俺たちの今を！」

「よろしくお願いします！隠された真実を引き出すために！」

「ロゼ——色々文句はあるけど全力で行かせてもらおうわよ……！」

新旧Ⅶ組は闘志を燃やし、ローゼリアを見上げる。

「うむ、かかってくるがいい。Ⅶ組の子らにセリーヌよ。魔女の長にして女神の聖獣——《灼獣ローゼリア》、参るぞ！」

月の霊場最大最後の試練が幕を開けた。

「それは本当かな？ルスケ大佐？」

「ええ。真です、殿下」

一方、カレイジャスⅡは物々しい雰囲気にもまれていた。

ヴィータとオーレリアが合流し、艦を去った時を見計らい、ロツチナが来訪した。

皇族を始め、艦にいる者全員が呆気にとられたが、重大な話があるというロツチナの言葉に平静を取り戻した。

ミハイルとトワは話はⅦ組が帰還してからにと主張したが、嫌な予感を抱いたオリヴァルト皇子が直ぐに会いたいと反対意見を押し

きった。

そこでミハイルはⅧ組区組分校生徒らを総動員し警戒体勢を取らせ、オリヴァルト皇子と分校教官三名で話を聞くことになった。

ブリーフィングルームに通されたロツチナは、ある情報をオリヴァルト皇子らに語った。

「ば、バカな……」

「脱走したとされていた共和国軍工作員がテロを起こそうとしている!？」

思いもよらない情報にブリーフィングルームは騒然となった。

「残念ながら事実のようだ。エイボン丘陵にある立ち入り禁止区域に出入りする者を見たという話を聞きつけてな。部下に慎重に探らせた所、九割方間違いないとのことだ」

「……………」

「おいおい、だったら何で分校に話を持ってくるんだよ」

言葉をなくすトワをよそにランディが拳手をした。

「そういうのは軍かアンタら情報局、TMPのやることじゃねえのか?」

「ラ、ランディさん……」

「そうしたいのはやまやまなのだが、そうもいかなくなってしまうてな」

ロツチナは目を瞑る。

「……………やはり、手が出せないのかい?」

「ええ。開戦まで残り猶予もない以上“小事”として扱う他ない状況です」

「小事だあ!？」

「落ち着け、オルランド。だからこそ、我々に回ってきたのだ」

ミハイルはいきり立つランディを抑える。

その右手はブルブルと震えていた。

「ミハイル教官……」

「……………チツ!」



ランディはドカリと座った。

「その小事というのは、宰相殿が？」

「そう仰りたいところなのですが、違います」

「え……？」

「なるほど、ルーファス君か」

オリヴァルト皇子はため息混じりに言った。

「総督殿が……」

「リイン君たちからある程度聞いてはいるが、ルーファス君は宰相殿一派とは別の思惑があるようだ。彼にしてみれば、今さら共和国軍  
作業員——ハーキュリーズのことなど二の次だと言いたいのだろう」

「ええ、まさにそうだと」

「そんな……」

トワの表情は青ざめた。

「如何致しましょう、殿下」

「答えるまでもない。そんなモノを認めるわけにはいかない」

オリヴァルト皇子は毅然と答えた。

「では殿下……」

「お引き受けくださると？」

「最終的な判断はリイン君たちが戻ってからにしよう。それでどう  
かな？ ルスケ大佐」

「構いません」

ロツチナは笑みを浮かべた。

「では、Ⅶ組が帰還するまで待たせていただいてもよろしいですか  
な？」

「構わないよ。貴公とは少々、話をしてみたくてね」

「フフ、殿下のお耳を楽しませるような話があればよいのですが」

オリヴァルト皇子とロツチナは互いに意味深な笑みを浮かべる。

（煮ても焼いても食えねえなこの二人……）

（オルランド……）

（聞こえますよ……）

「どうしたどうした！その程度か！」

月の霊場最奥では、ローゼリアが暴れ回っていた。

「これほどとはな……」

「深淵とルグインの方がマシだぜ……」

「唯一の救いは的がデカイことだがな」

そう言っけてキリコは引き金を引いた。

「確かに的は大きいね」

「では、アーツも狙い放題ですね」

フィーとミュゼも追撃に出る。

「とにかく、固まるのは悪手だ。後衛は出来る限り下がって射的を  
拡げる。前衛と遊撃は全体に散らばってくれ。とにかく走れ」

「無茶を言ってくれる……」

「だがそれしかないならば……」

「やってやりましょう！」

「行くぞ、新旧Ⅶ組！」

『おお！』

『イエス・サー！』

新旧Ⅶ組は距離を取り、狙いを絞らせないように動きだした。

「ほう、考えよったな。ならば範囲を——」

「アーマーブレイクⅡ」

「メールブレイカー！」

「双剋斬！」

ローゼリアが力を籠めるや否や、妨害の効果を持つクラフト技が炸裂した。

「くっ!？」

「フレアバタフライ！」

「エクスクルセイド！」

アリサとユースィスが火属性と空属性のアーツで追撃する。

「真・螺旋撃！」

「真・獅子連爪！」

入れ替わるようにリインとラウラが高威力のクラフト技を叩き込んだ。

「おのれ！」

ローゼリアは前肢を振り上げ、二人を狙う。

「ハンターウイング！」

「イクリプスエッジⅡ！」

ガイウスの呼んだゼオとエマの魔力で形成した剣が襲いかかる。真横から受け、ローゼリアの攻撃は空振りに終わった。

「足場を崩しましょう。ブリューナクⅡ、照射！」

「ランブルスマッシュⅡ！」

アルティナとアッシュがローゼリアの足元を攻撃する。

「ぬうっ！」

ローゼリアはこらえた。

「ほれ、クロノドライブ！」

「ありがとうございます！ございます！ブレイブスマッシュⅡ！」  
クロウの支援を受けたユウナが特攻を仕掛ける。

「ぐっ?!小癩な……！」

ローゼリアはさらにぐらつく。

「ノクターンベルⅡ！」

エリオットのクラフト技がローゼリアの視界を狂わせる。

「ダイヤモンド・ノヴァ！」

ミュゼが水属性の最上級アーツを放った。

「一斉に攻撃を！」

『応！』

全員一致のバースト攻撃が叩き込まれた。

「ぐううっ！これ以上は……！」

「後二発だ」

キリコがローゼリア目掛けて手榴弾を投げつける。

「教官、詰めを」

「わかった、緋空斬！」

リインの放った斬撃が手榴弾に直撃した。

「ぬおおっ!？」

爆風を受けたローゼリアは崩れ落ちるように後退した。

「ようやく一矢報いたか……」

「だがこれで終わるはずがない」

「ああ、そのようだ……!？」

「来ます……!？」

新旧Ⅶ組が体勢を整える間に、ローゼリアが起き上がる。

「やるではないか……人の身でありながら妾を追い込むとはな」  
ローゼリアは焰のような闘気を揺らめかせる。

「おいおい……」

「さっきまでのウォーミングアップだったって言う気かよ?」

「フッフ、だとしたらどうかの?」

「関係ない」

キリコはアーマーマグナムの銃口を向ける。

「叩きのめすだけだ……全員でな」

「キリコ……!？」

「言わずもがなだ」

「全員で乗り越える……!？」

ラウラとファイも得物を構える。

「負けられない……!？」

「みんなと一緒に……!？」

アリサとエリオットはARCU SⅡを起動させる。

「一歩も退いてなるものか!？」

「最後まで抗ってみせよう!？」

「聖痕よ、我に力を……!？」

エリオット、マキアス、ユース、ガイウスが闘志を燃やす。

「あたたしたちも忘れてもらっては困ります!？」

「僕たちだってⅦ組です!？」

(見てて……お姉ちゃん……)

「まだまだ倒れねえぞコラア!？」

「参りましょう！」

二代目Ⅶ組も気合い十分だった。

「真実を掴むために！」

「行くぞ、Ⅶ組！」

エマとリインの言葉を皮切りに、新旧Ⅶ組は動き出した。

「来るがよい、Ⅶ組よ!!」

ローゼリアは焔のような闘志を燃やし、迎え討つ。

「キリコ side」

ローゼリアは先ほどよりも苛烈な姿勢で攻撃をくり出してくる。

その威力の前に、俺たちは何度も膝を屈しそうになった。

（攻撃力は勿論だが、覆っているオーラは確かに危険だな）

どんな攻撃だろうと、必ずインターバルが存在する。

爪や前肢からの攻撃なら、次の攻撃に備えて一旦下がるものだ。

だがローゼリア全体を覆っているオーラが俺たちの攻撃を受け流してしまうのだ。

下がった瞬間を狙って発砲するが、あまりダメージは見られない。

「フレアバタフライ！」

「カルバリーエッジ！」

「……チツ！」

だが、ラインフォルトとミルスティンの放ったアーツを受けたローゼリアが煩わしそうに払う所を見ると、完全に受け流せるわけではないようだ。

「クリアブラストⅡ」

ここからは一点集中に切り換える。

「キリコ side out」

「どうやら糸口が見つかったみたいだな……」

マキアスは弾丸を籠めながら呟いた。

「とりま、あの面にぶちかましてやりやいいんだろ？」

「出来るだけ派手にね……！」

「やることは決まった」

回復を終えたリインが正面を向く。

「行くぞ。ここが正念場だ！」

『おおっ！』

新旧VII組は再び動き出した。

「カルバリーエツジ！」

「エクスクルセイド！」

「ガリオンフォート！」

時、空、幻属性のアーツが叩き込まれる。

「メルトストームII！」

「クリアランスII！」

続けざまにアリサとフィーのクラフト技が放たれた。

「調子に乗るでない！」

ローゼリアは闘気を放出した。

「受けよ、我が力を!!」

「うぐっ!!」

「ここ、これは!？」

「なんて……霊圧……!」

闘気を受けたVII組は苦痛に歪む。

「まだ……終わらせない!レメディファンタジアII！」

フラフラになりながらも、エリオットはSクラフトを発動し、新旧

VII組は気力を取り戻した。

「ありがとうございます、エリオットさん！」

「どういたしまして。それよりリイン！」

「ああ、反撃開始だ！」

リインは根源たる虚無の剣を正面に構える。

「鬼気解放!!」

リインの体から黒い闘気が迸った。

「極・緋空斬！」

リインは極太の斬撃を放った。

「くっ!?!」

防御したローゼリアに隙が生じた。

「仕掛ける、リードスナイプ」

「こちらも、オワゾーブブルーⅡ!」

キリコとミュゼが長距離のクラフト技を放つ。

「お足元ご注意ってなあ! デイスペアアロー!」

「業刃乱舞Ⅱ!」

アッシュとクルトがローゼリアの足元を崩す。

「チツ! またしても……!」

ローゼリアは二人に狙いを定めた。

「ません! プラチナムシールドⅡ!」

ユーシスが障壁を張って防御した。

「ありがとうございます、ユーシスさん!」

「助かったぜ」

「礼はいらん。ユウナ、行け!」

「了解です! グラヴィオン・ハンマー!」

ユウナは地属性の最上級アーツを放った。

「ぐうう……小癩な!」

ユウナの予期せぬ攻撃にローゼリアは苦々しげな表情を浮かべた。

「続けて行くぜ! ロスト・ジエネシス!」

クロウは時属性の最上級アーツを放った。

「調子に乗るでない!!」

ローゼリアはアーツを受けながらも前進する。

「クリアブラストⅡ」

「ソリッドカートⅡ!」

「ヴォーパルフレアⅡ!」

キリコ、マキアス、エマがローゼリアを止めるべく応戦した。

「そんなにモノで妾を止められるかあつ!」

ローゼリアは前肢を振り上げる。

「決める、アルティナ!」

「了解しました……!」

ステルスモードで身を潜めていたアルティナがローゼリアに迫った。

「何っ!？」

「起動、フラガラツハ!!」

直前で気づくも間に合わず、ローゼリアはアルティナ渾身のカウンターをまともに食らった。

傷を付けられたローゼリアの身体からオーラが減衰した。

「見て、ローゼリアさんから！」

「ようやく鎧を剥ぎ落としたというわけか……」

「しばらくしたらまた戻るでしょう。今のうちがチャンスです——」

「そうはいかぬ!!」

ローゼリアは再び立ち上がった。

「まだ倒れぬ!まだやられはせぬぞ!」

ローゼリアの咆哮は新旧VII組に直撃した。

「チツ!しぶてえババアだな!」

「後一息つてところなのに!」

「こちらもギリギリ……このままでは……」

(ここまでなのか……)

新旧VII組に迷いが生じた。

「……まだだ」

キリコを除いて。

「キリコさん……」

「しかしどうやって……」

「アルティナ」

キリコはアルティナに目をやった。

「武装はともかく、膂力なら申し分ないはずだ」

「膂力？」

「……わかりました」



アルティナは右手を掲げる。

「皆さん、下がってください」

アルティナの言葉に従い、新旧VII組はアルティナから距離を取った。

「何をするつもりかは知らぬが……！」

「ゼルエル・カノン」

キリコは火属性の最上級アーツでローゼリアの出鼻を挫いた。

「召喚します。ゴライアス・ノア！」

アルティナはクラウソラスからゴライアス・ノアを出した。

「ゴライアス・ノア!？」

「もう動かせるのか!？」

「はい」

アルティナはそう言っただけで乗り込んだ。

「くっ……よもやそんなモノを……！」

【行きます……！】

アルティナはゴライアス・ノアを操縦し、ローゼリアを抑え込む。如何に灼熱といえど、消耗した状態では為す術がなかった。

【抑えました！】

「わかった！みんな行くぞ！」

ラインの号令と共に、新旧VII組が一斉に動き出した。

その瞬間、不思議なことが起きた。

戦いで失われた体力と魔力が回復し、得物を握る手に力が宿った。結果、戦術リンクのバースト攻撃とは比較にならない威力となった。

だが新旧VII組は止まらなかった。

不可思議な現象に生じる迷いよりも、帝国を覆う呪いの真実を掴もうとする気概が勝った。

「ぐうう……み、見事じゃ……！」

新旧VII組の想いを受けたローゼリアは今度こそ崩れ落ちた。

「はあ……はあ……！」

「ハッ……どんなもんだっつーの……!」

「厳しかったけど……何とか上回れたハズ……!」

「そうだな。しかし……」

リインは顎に手をやった。

「最後のアレは何だったんだろう……?」

「明らかに戦術リンクではないな」

「体力やEPが多少だが回復しています。ですが……」

「ええ。そんな機能、実装されていないわ」

「アリサさん……」

「後で詳しく調べてみるわ。それより……」

「ぐぬぬ……」

ローゼリアはゆっくりと人の姿に戻っていった。

「人の子ごときにここまで食い下がられるとは……レグナートやアルグレスの悔しさが今更ながら分かるようじゃ……」

「……アルグレス……?」

「古竜はともかく……その名前は……」

「聖女の騎神にも似ているが……」

（確かアルグレオンだったか。偶然と考えるのは早計か?）

「フフ……既に人の世では喪われてしまった名であったな……」

ローゼリアは懐かしそうに腕を組んだ。

「まあよい。よくぞ我が試練を乗り越えた。エマ、シユバルツァー、皆もしかと心するがよい」

ローゼリアの視線の先で月冥鏡が起動し、輝き始める。

「……!」

「月冥鏡が……!」

（いよいよか……）

キリコは拳を握りしめる。

「水先案内をします……! 皆さん、どうか心を落ち着けて!」  
エマは魔導杖を掲げた。

「っ……」

「……こ、これは……」

「妾も知らぬ真実……黒の史書の残された欠片たち。目も逸らさずに見届けるがよい！」

新旧Ⅶ組は光に包まれた。

「キリコ side」

光に包まれたかと思えば、俺の目に様々な光景が映った。

黒のアルベリヒが猟兵王を不死者として、紫の騎神の起動者として甦らせたこと。

闘神と猟兵王の激突は最初から仕組まれていたことのようなのだ。

晩年のドライケルス大帝に每晚忍び寄る名状しがたい闇。そしてその闇を聞き出そうとする槍の聖女。

ジョルジュ・ノーム——銅のゲオルグの深層意識。どうやらそれなりに葛藤があったようだ。

赤子のリイン教官を慈悲深げに微笑む夫婦。若い頃のオズボーン宰相とその妻なのだろう。

その様子を見た槍の聖女はどこかに赴くようだ。あの方というのはおそらく結社のトップのことだろう。

黒のアルベリヒことフランツ・ラインフォルトの場面が変わった時、俺は思い違いをしていたと気づかされた。

どうやらフランツ・ラインフォルトは身体と意識を何かに乗っ取られたようだ。響いてきた声からあの闇と同じかもしれない。

そして執行者でもあるクルーガーに倒されたのだろう。最後に、オズボーン宰相の半生を見た。

およそ16年前に家を猟兵に襲われ、妻を喪い、今にも事切れそうな幼いリイン教官を抱きしめながら慟哭していると、あの声が響いた。

その声は、”どらいけるす”と言った。

気にはなるが、今は置いておく。

最後にオズボーン宰相はあの声——イシユメルガに魂と肉体を譲り渡した。

その場面を最後に、光は収まっていった。

どうやら俺の求めるものはなかったようだ。

「キリコ side out」

『……………』

その場にいる者たちは茫然自失となった。

「これが……………残された真実の全てか……………」

クロウは気落ちしながら言った。

「…………団長が亡くなったのも、ううん、決闘を仕組んだのも……………」  
「フイーは拳を握りしめる。」

「黒のアルベリヒ……………でも、彼さえもまた……………」

「どうやらジョルジュ先輩とはまた違う形みたいですね……………」

「ああ、アリサの父上の自我を乗っ取るように現れた別の自我……………」  
「？」

「…………地精の長という人格が乗っ取ったってことなのかしら？」

「うむ…………妾とは違う形で不死を実現した存在のようじゃな。恐らくは、優秀な地精の子孫に寄生・融合することで永らえる……………」

「……………父様……………」

アリサは何も考えられなかった。

「そしてアリアンロード——いやリアンヌ・サンドロットの真実。250年に渡り“彼”と帝国の行く末を真摯に案じ続けていたとは……………」

「…………まさに聖女と呼ばれるに相応しい人物ですね」

「で、でもその人が気にかけていたのって……………」

「…………ずっと疑問だった事がある」

ユーススはおもむろに口を開いた。

「疑問？」

「ああ。どうしてユーゲント陛下はあそこまで宰相を立てるのかと  
な」

「『どらいけるす』…………答えはそれだろう」

キリコはリインたちを見ながら言った。

「そうか……………そうだったんだ。陛下は知ってらっしゃったんだ！皇

帝家の黒の史書によって……！」

「……250年前の獅子戦役を終わらせた帝国中興の祖にしてトルズの創設者……かの獅子心皇帝の生まれ変わりがギリアス・オズボーン宰相であることを」

「……………ああ……………」

リインは絞り出すように言った。

「生まれ変わり……そんな事が……」

「オカルト……じゃなさそうだな。つか、コイツが既にいるしな」

「……………」

キリコはアツシユの手を払った。

「……よもや残されし真実がそのようなものじゃったとはもう……」

ローゼリアは両拳が真っ赤になるほど握りしめ、悔しさを滲ませる。

「阿呆共が——リアンヌもドライケルスも何故妾に一言相談せぬ!?

妾はヌシたちの朋友……！そう言ってくれたではないか……!?!」

「いや……どうして妾はこの250年ずっと気づけなんだ……」

「お祖母ちゃん……………」

「……………ロゼ……………」

エマとセリーヌも悲痛な表情を浮かべる。

「結局の所……」

キリコが切り出した。

「あの黒い騎神——イシユメルガとやらが関わっているんだな?」

「……………あ……………」

「た、確かに……どう考えても全ての元凶って……」

「……黒の工房の本拠地を見た時、尋常じゃないオーラを漂わせる騎神だと思ったが……」

「以前にも話したとは思うが、千年もの間も殆ど姿を現さなかった謎の騎神じゃ。250年前の獅子戦役は勿論、900年前の暗黒竜の時も居なかった。じゃが——」

「その両方……いえ、帝国の忌まわしき歴史のほぼ全てに関わっ

ていたとすれば……？」

ミュゼの頭脳が最悪の答えを導き出した。

「ま……さか……」

「……………」

アツシユは呪いに侵されていた場所を覆った。

「ヴァリマールにせよ、オルディーネにせよ、騎神にはそれぞれ自我があった。だが、その自我に何らかの形で悪意に目覚め、力を付けていけば……」

「……元々争っていたとはいえ、1200年前、地精と魔女は和解しました。巨イナル一の封印のみならず帝国の創設にも共に力を貸したそうです。なのに800年前帝都奪還を最後に彼らは一切の交渉を断った……」

(800年前……年代は符号するな)

「恐らく背後にいたのが黒の騎神。それこそ地精を眷族として取り込んだしまったのかもしれない。いや、むしろ都合のいい駒・下僕として魂まで隷属させたと言わなければならない……」

「……そして団長の件以外にも色々な所にちよっかいをかけて……黒い種を撒き散らしていった……」

「……ええ、この瞬間にも。まさにアルベリヒ自身が言っていた呪いそのものね」

「その目的は巨イナル……？」

「七の相克の果てに自分自身がそれになろうと……？」

「そんな事のために……わたしたちOZは……ミリアムさんは……………」

「……………」

「……吐き気がしてくるわ……」

新旧VII組は怒りと憎しみに包まれていった。

「……ああ……許せないな」

ラインから禍々しいオーラが漂い始めた。

「……………」

「ちよ、アンタ……」

「……そいつのせいで帝国は……周りの地もずっと苦しみ続けてきた……。クロウや聖女、猟兵王も不死者となり、ミリアムは命を落とした……。クレア少佐の家族やレクター少佐の父親、これまで犠牲になった無数の人たち……。アリスの父親にジオルジュ先輩……。俺の母親やオズボーン宰相すら……」

リインの身体は鬼気にどんどん侵食されていく。

「リイン、落ち着きなさい！」

「贄としての呪い……！」

「くっ……刺激が強すぎたか！」

「チツ、何とか押さえて——！」

「落ち着クガイイ、我が起動者ヨ」

次の瞬間、転位してきたヴァリマールと根源たる虚無の剣が月冥鏡と連動するように輝き、周囲が光に包まれた。

「ヴァリマール……!？」

「なんて温かな光……」

「そ、それよりここって……」

「騎神が起動者と契約する位相空間……?」

「いや……それとは違うみたいだな」

同じ起動者でもあるクロウは違いに気づいた。

「……ヴァリマール……」

徐々に鬼気を薄れさせるリインは相棒に語りかける。

「喋れるようになったのか……?工房の本拠地の時とも違う状況みたいだな……?」

「ウム、一時的ニデハアルガ呪イノ枷ヲ外セタヨウダ。カツテノウニ感情れべるハ大幅ニ抑エラレテイルガ……イズレ現実世界デモ言葉を取り戻シテミセヨウ」

「そうか……」

「よかった……本当に」

「聞クガイイ——りいんニ準起動者タチヨ」

涙ぐむエリオットをよそに、ヴァリマールは真剣な眼差しを向ける。

「全テガ黒ノ仕業トイウ訳デハナイ。人ノ未熟サガ招イタ事デモアルノダ。ソノ事ヲ理解セネバコノ先ノ相克モ越エラレマイ。タトエ剣を取り戻シタトシテモ」

「え……」

「……………あ……………」

ヴァリマールが言い終えると、根源たる虚無の剣はミリアムの姿へと変えた。

「な……………」

「ミリアム——！」

『あはは、ブリオニア島以来だね、みんな。クロウはホントに久しぶりだけど』

「ああ。だな……」

クロウは懐かしむように見つめた。

「し、しかしどうして……」

『ここならある程度は大丈夫みたい。それよりみんな……』

『ゴメン、やっぱりボク、まだまだ未熟だったみたい。みんなの事を守るとか、力になれた——なんて聞こえはいいけど。あんなにもみんなを哀しませるなんて夢にも思っただけだったんだ』

ミリアムは頭を下げて謝罪した。

「……………ミリアム……………」

「謝らないでちょうだい……………」

「それはいい……………そんなことはいいんだ……………!!」

ユーススは必死に叫んだ。

「……………二人とも……………また何かを伝えに来てくれたんだな？」

『うん、この状態になつてからようやく見えてきたことだけど、相克が奪い合いっていうラインたちの認識は合ってるよ。本来、不死者であるクロウは負けたら消えちゃう所だったけど……………決着に持って行ければしばらくは猶予は稼げると思う』

『……………黄昏が終了したらその限りじゃないのは確かだけど』



ミリアムは最後は言いづらそうに言った。

「ハハ……だろうな」

クロウは何でもないように答えた。

「……クロウ……」

「モウヒトツ——黒ニツイテダガ。カノ騎神ノ力ハ余リニ絶大……理カラ外レタ存在ト言エルダロウ。極言スレバ全テニ勝利デキルガ、ソレデハ闘争ノ果テの再錬成ノ条件ハ満タセヌ」

(……自身が頂点に立てれば良いというものでもないようだな)

「そうになると、最後に来れる構図は一つか」

「他ノ騎神の力ヲ手ニ入レタ一騎ガ僅カデハアルガ勝利ノ可能性ヲ手ニシ——黄昏ノ極マリシ刻ニオイテ黒ノ騎神ト対峙スルトイウ構

図二

『候補は獵兵王の紫、聖女の銀、ルーファスの金。そしてクロウの蒼と皇太子の緋を味方につけたラインの灰の4騎ってことになるね』

「それならラインが——いや俺らが行く道は既に決まってるぜ」

クロウは笑みを浮かべる。

「ああ、そうだな」

「既に殿下という強い味方を得ていますから！」

「ん、団長だって何とか説得できれば……」

「聖女については鉄機隊の方々との約定もある。何としてでもな」

「ああ、本来だったら共闘してもおかしくない立場だ！」

「行けますよ、絶対に……！」

「甘くはねえだろうが……何とか光は見えてきたかよ」

「まあ、ルーファス総督は味方には引き込めないでしょうけど……」

「それでも相克に打ち克てば彼の騎神の力を取り込めるでしょう」

「そうして味方を増やし、力を蓄えてオズボーン宰相と対峙できれ

ば……」

「たとえ僅かな可能性でも——『真の元凶』を倒せる勝機に繋がる

！」

(真の元凶……)

「ああ、俺が贄でも鬼でもなく、己自身としてヴァリマールを駆り——

—ミリアムの剣を使いこなせるなら!—

「ウム、ソレデヨイ」

『うんうん、ボクも全力で協力するつもりだよ!』  
新旧Ⅶ組は進むべき道を見つけた。

「……俺の質問にも答えてくれるか?」

キリコはヴァリマールとミリアムに問いかけた。

「キリコ……」

「質問って……そうか!」

「黒の史書にも存在を示唆されている賢者にして、キリコの宿敵  
……」

「その正体は異世界アストラギウスの神……」

「どうなんだ?」

「ウム……」

ヴァリマールは考えるような仕草をした。

『ボクにも分からないんだ。相克に関することは見えたんだけど、  
そのワイズマンっていうのに関しては全く……』

「……そうか」

「うむ、ここでもダメとなると……」

ローゼリアは腕組みをして考え込んだ。

「記憶の部屋でじっくり向き合うしかないみたいだね……」

「済まぬ。ここまで来させておいてこのような結果になってしまっ  
て」

「構わない」

キリコはもはや、月冥鏡に興味はなかった。

「しかし神サマが相手なんだろう?」

「……そうだな」

「キリコさんは姿をご覧になられたことがあるんですよね?」

「もちろんだ」

「興味本位になるが、そもそもワイズマンとはいったい……」

「そうだな——!?!」

突如、どこからともなくノイズのようなものが流れる。

「うろうろ……!?!」

「な、何この音……!?!」

「まるで赤子が呻いているような……!?!」

『み、みんな!?!』

「クツ……!?!」

「これは……!?!」

ヴァリマールと突然現れたオルディーネは片膝立ちになった。

「ヴァ、ヴァリマール!?!」

「オルディーネまで何を……!?!」

「……………」

周囲が苦しむ中、キリコは反対側を見つめる。

「キ、キリコ………?」

「いったいどうした——」

「皆さん、あれを！」

エマの視線の先に、ローブを纏った者が立っていた。

「……………」

キリコはそれをジッと見つめる。

「キリコさん、どうし——ヒッ!?!」

キリコの顔を見たミュゼは思わず立ち竦んだ。

キリコの両目に光は無く、冷たい殺気に満ちていた。

見たことのないキリコの表情に新旧Ⅶ組は声も上げられなかった。

「やはり……さつきから感じていたのは………」

キリコは一步を踏み出した。

「お前だったのか………」

「……………ワイズマン!!」

アストラギウスを影から支配し続けた神とアストラギウス最大の

禁忌たる異能者

異世界を故郷とする者たちが遂に邂逅した。

## 捕縛①

『……………』  
キリコの発した「ワイズマン」という言葉に新旧VII組は固まってしまうた。

『……………』

一方のワイズマンも一言も発することなく、立ち尽くすのみだつた。

「こ、こいつが……………」

「キリコ君の宿敵……………」

「そして……………異世界の神……………！」

新旧VII組はやつことさ言葉を絞り出した。

「そうか……………先ほどから感じておった気配はヌシか。人ならざるものと思っておったが、とんだモノが紛れ込んでおったわ」

いち早く平静さを取り戻していたローゼリアは魔力を滾らせ、ワイズマンに語りかける。

「して、ワイズマンとやら。いったい如何なる用でこの場所に来おったのか」

『……………』

「言っておくが、妾は一切の容赦はせぬぞ……………」

『……………』

ワイズマンは一言も発しなかった。

「ならば……………受けよっ！」

ローゼリアは魔力を収束し、巨大な火球を形成した。そしてワイズマンの頭上へと落とす。

『……………』

ワイズマンは微動だにしなかった。

「フ、如何に神と言えど……………」

「倒せてはいないようだ」

キリコが前が出る。

煙が晴れると、そこにはワイズマンが立っていた。

「ば、バカな……!?!」

「あれを避けたつての……!?!」

(避けた……違う。おそらく……)

『……………』

キリコが思案していると、ワイズマンは両手を広げた。そして先ほどのノイズを発した。

「っ!!」

「ま、またか……!」

「うう……気持ち悪い……!」

「や、止めて……」

新旧Ⅶ組はノイズに苦しみ悶える。

「い……いい加減にしやがれ!」

アツシユはヴァリアブルアクスを振り上げ、ワイズマンに飛びかかった。

「くらえや!!」

アツシユはそのまま振り下ろした。

『……………』

「何い!?!」

ヴァリアブルアクスはワイズマンの身体を透過した。

「ど、どうなってやがる!?!」

(……ホログラムか)

キリコはため息をつき、ワイズマンを睨む。

『……………』

ワイズマンはそのまま姿を消した。

『……………』

キリコはワイズマンがいた地点を見つめる。

「ううう……」

ノイズから解放されたリインがよろよろと立ち上がった。

「大丈夫ですか?」

「あ、ああ何とか……」

(俺以外には聞こえないどころか、こんな結果になるとはな)  
キリコはまだ青い顔をした新旧Ⅶ組の方を見る。

「ううう……」

「頭ん中ぐちやぐちやにされたみたい……」

「クソツ、流石にキツ過ぎんだろ……」

よろよろとしつつも新旧Ⅶ組は全員立ち上がった。

「それで、何故キリコさんは効かないんですか？」

「あの音波は異能者である俺にだけ通じるように出来ているらしい」

「キリコにだけ……」

「や、やっぱりキリコ君が特別な存在だから……？」

「特別……どうだっといういいことだ」

「キリコさん……？」

「と、とにかくキリコ。いったいワイズマンは何を伝えたんだ？」

リインの言葉が場の空気を変える。

「……お前には期待していない、だそうです」

『……はっ』

新旧Ⅶ組は啞然となった。

「ど、どういうこと？」

「君とワイズマンは因縁があるんじゃないやなかったのか？」

「俺にも分からない」

キリコは腕を組んだ。

「……色々と気になるが、一先ずおいておこう。それよりヴァリ  
マールとオルディーネは……」

「……………」

ヴァリマールとオルディーネは変わらず片膝立ちをしていた。

「いったいどうしてそんな風になっちゃったんだ？」

「我ニモ分カラヌ……」

「だが、絶対に逆らえぬような気がするのだ……」

「逆らえぬ……？」

「騎神ってのは起動者に従うもんじゃねえのかよ?」

「アタシに聞かないでよ!こんなこと、聞いたこともないわ」

「もしかすると……」

思案していたミュゼが顔を上げた。

「ミュゼ?」

「黒の史書に出てくる賢者があのワイズマンだとして、賢者は二つの種族を争わせたんですよね?」

「ああ。黒の史書の片隅に書かれておる事が事実ならばな」

「ということは、騎神の誕生にも関わっていることも考えられますね」

「まあ、そう考えられなくは……?!?」

「ちよつと待って——」

「ミルディーヌ公女、つまりそれは……」

「……ワイズマンはある意味、騎神の創造主というわけか」

キリコはミュゼの真意を掴んだ。

「なるほど、それなら……」

「ヴァリマールとオルディーネの行動も辻褄が合うってことか」

「あのノイズを受けながら推察していたとはな……」

「ふう、流石ね……」

「ふふ、恐れ入ります」

ミュゼは微笑んだ。

「……」

キリコは何か引つかかるようなものを覚えた。

ワイズマンが姿を消して数分後、ヴァリマールとオルディーネはようやく動けるようになった。

「心配ヲカケタ」

「ローゼリアさんたちでも知らなかったんだ。気にしないでくれ」

「うむ。カイエンの公女の推察通りならば、致し方あるまい。にし

ても……」

ローゼリアは腰に手を当て、ため息をつく。

「妾たちの想像以上の大敵のようじゃの」

「確かにな……」

「あのノイズが厄介だね。特に僕は……」

エリオットは顔をしかめる。

「だ、大丈夫ですか……」

「耳なんかやっちゃったら引退じゃねえか？」

「アツシユ！」

クルトがアツシユを叱責した。

「ミリアムは大丈夫なのか？」

『うん……一応、今のボクは精神体だから……』

「そうか……」

ユーススは安堵した。

「それで教官、奴のことは？」

「ああ、一旦置いておこうと思う。確定したわけではないが、ワイズマンの狙いがキリコではない以上、な」

「分かりました」

キリコはそれ以上の追及をしなかった。

『あ……』

ミリアムの体は徐々に透明になっていた。

「ミリアム!？」

『アハハ……ゴメン、もう時間みたい』

ミリアムは苦笑しながら言った。

「ま、待てミリアム——」

「待つてください！まだ話したいことが……」

『大丈夫。もしかしたらすぐに会えるかもしれないし』

「それってどういう……」

『とにかく、ボクはいつでもみんなと一緒にだから……！頑張ろうね！ユースス、アーちゃんたちも！』



そう言つてミリアムは根源たる虚無の剣に戻つていった。

「ソロソロ我モ限界ノヨウダ……」

ヴァリマールは呟いた。

「ヴァリマール!？」

「案ズルナ。我モママ、りいんノ側ニイル。暫シノ……別レ……ダ……」

ヴァリマールの両眼から光が消えた。

それを最後に、月の霊場最奥は静寂を取り戻していった。

「あ……」

「夢じゃ……なかつたんだね……」

「ああ……」

新旧Ⅶ組は少しずつ現実を受け止めていく。

「……」

「そうか……ちゃんと居てくれたのか」

「……お姉ちゃん……」

「グス……良かったね」

ユウナは思わず涙ぐんだ。

「お祖母ちゃん、今のつて……?」

エマはローゼリアに問いかける。

「月冥鏡が用意した場……夢と現実の狭間の邂逅じゃろう。妾が先代から役割と使命を継いだ時も同じ状況じゃった」

「こんなオマケもあるとは……長らく守った甲斐があるものじゃ」

「そうね……本当に」

「ありがとう、ローゼリアさん。エマにセリヌも」

リインは魔女たちに深々と礼をした。

「ヴィータに羅刹も含めて随分と世話になつちまったな」

「ヴァリマールは再び沈黙し、ミリアムも喋るわけではないが……」

彼らの魂は確実に存在している」

「ならば、今こそⅦ組は全員が揃い、もはや迷う必要狭間何処にも無いだろう」

「ええ……光まとう翼の一員としても！」  
クルトは力強く言った。

「ま、アンタら魔法の助けが無ければ詰んでたかもしれねえしな」  
「……一応、礼は言っておくぜ」

「私も——父やシャロンの事、改めてちゃんと向き合えると思う」  
「サンクス。全部エマたちのおかげ」

フィーは微笑んだ。

「ふふっ……」

「ア、アタシは別に……跡目の話みたいだったし」

「……でもまあ、良かったわね」

セリーヌは素直になりきれずとも、成果に喜んだ。

「フフ……妾にとつても長年の肩の荷が下りた心地じゃ。ここで得た新たな真実——妾からヴィータや星杯の副長にも伝えておくでしょう」

「ああ、お手数だがお願いする」

ガイウスはローゼリアの言葉に感謝した。

「……私も当代の巡回魔女として真実を伝える手助けができてよかった。お母さんや姉さんたち……お祖母ちゃんが護り続けたこの地で」

エマはローゼリアの手を取った。

「……ありがとう。ずっと私たち魔女を導いてくれて。それからありがとう——私を一人前の魔女に育ててくれて」

エマは師であり育ての祖母でもあるローゼリアに感謝を伝えた。

「ちよっ、何をいきなり……ババアは涙もろいんじや！そういう不意打ちをするでない！」

ローゼリアは赤面し、そっぽを向いた。

「……やれやれ」

「グス……あははっ！」

「ふふっ……この上ない成果ね」

アリサはエマとローゼリアのやり取りを見て微笑む。

「でも、キリコさんは……」

「少なくとも帝国を覆う呪いが何を齎してきたのかの真実は知れた。不満など無い」

心配そうに窺うミュゼに、キリコは己の本心を告げた。

「キリコ君……」

「だがワイズマンは……」

「ワイズマンに限らず、真実は自力で追う」

「自力でつて……」

「随分と気の長い話だな」

「ずっとそうしてきた」

「キリコ……」

「それより、艦に戻るのでは？」

「……ああ、そうだな」

リインは出口の方を向く。

「戻ろう、俺たちの新たな翼……カレイジャスⅡへ——！」

『おお!!』

新旧Ⅶ組は歩き出した。

カレイジャスⅡに戻った新旧Ⅶ組はブリーフィングルームに集まった面々に月冥鏡が齎した真実の内容を語った。

「……生まれ変わりか。宰相殿が、あのドライケルス帝の。運命の悪戯というか——色々なものが繋がった気分だ。父上がどうして彼にあそこまでの采配を託したのかもね」

オリヴァルト皇子は驚きつつも、冷静に思考をまとめる。

「はい……」

「アリサ君の御父上やジョルジュ君にも複雑な事情があったようだね」

「………はい………」

「その三人を繋ぐは黒の工房……そして黒の騎神か……」

「……想像していた以上に、凄まじい存在だったんですね………」  
ティータは怖れと共に言った。

「極めつけは黒の史書に登場する賢者。その正体は異世界の神にして、キリコ君の宿敵ワイズマン」

「……こちらともんでもない相手でした……」

「異能者であるキリコさんと違い、私たちは全くの無力でした……」

「ふうむ——キリコ君」

「？」

オリヴァルト皇子からの視線にキリコは顔を上げた。

「君の知るワイズマンの力はどれほどのものなんだい？」

「……少なくともあんなものじゃない」

『!?』

キリコの一言はブリーフィングルームの空気を変えた。

「あ、あれ以上だっていうの……!?」

「おそらく、今回の顔見せかもしれない」

「顔見せて……」

「……奴の真意は読めん」

キリコは再び目を瞑った。

「とにかく——宰相たちの真意はともあれ、帝国の呪いたる元凶は見えて来た」

ユーススは話題を逸らすように口を開く。

「そうだな……それが分かったのは途轍もないなく大きな収穫だろう」

「……七の相克を通じて逆にその元凶を何とか出来れば……」

「ああ——ローゼリアさんたちのおかげで俺も相克への覚悟を固められた。ミリアムとヴァリマールの想いに応えるためにも、今は前に進むだけだ」

「はいっ、そうですね……!」

「全力を尽くします、最後まで」

「……そうね——VII組として」

新旧VII組はさらなる前進を誓った。

「フフ……色々な意味で有意義な時間だったようだね。かの獅子心

皇帝まで絡んでいた話だ。ボクも今まで以上に力を尽くそう」

「もちろん、僕とテスタロツサも最後まで尽くします」

オリヴァルト皇子とセドリックは微笑んだ。

「ええ——わたくしたちもようやく役目も見つけられたことですし」

アルフィンにはエリゼと共に前が出る。

「その……大丈夫なのか？トワ先輩のサポートだなんて」

リインは心配そうにエリゼを見つめる。

「ご心配なさらず——女学院で端末の操作も勉強していましたし」

「ええ、マニユアルも叩き込みましたし多少はお力になれると思います」

「あはは、畏れ多いけど二人ともあつという間に慣れちゃったし。エリゼちゃん、皇女殿下も。どうかよろしくお願いしますっ」

「はいっ……—」

二人は笑顔で返事をした。

「しかし……いつの間にマニユアルの勉強なんてしたんだい？」

「フフ、キリコさんのおかげよ」

「へ……」

セドリックは呆気に取られた。

「キリコの、ですか？」

「実は今朝、キリコさんをお願いして初心者用の設問を用意していただいたのです」

「よくそんなモンあつたな」

「分校の授業でやったものを丸々アップロードしただけだ」

「ふう、いつの間に……」

リインはため息をついた。

「ふふっ、第Ⅱのみんなも頑張ってるし、僕たちもうかうかしてられないね」

「フフ、さっそく移動計画を立てるとしよう。ただ……」

オリヴァルト皇子の表情が暗くなった。

「オリヴァルト殿下……？」

「何かありましたか？」

「まあそういうことになるんだが……入ってくれたまえ」

「フフ、失礼するよ」

『!?!』

ブリーフィングルームに入って来た人物を見た新旧VII組は呆気に取られた。

「……………」

キリコは露骨に不機嫌になった。

「キリコ、そしてVII組諸君。まずは話を聞いてほしい」

人物——ロツチナは新旧VII組を前に語り始めた。

「……という訳なのだが、理解してもらえたかな？」

「……共和国の特殊部隊——ハーキュリーズが破壊工作を……………」

「まさかそんな事をしでかそうとしてはな」

ロツチナの話を聞いた新旧VII組は動揺しつつも受け入れつつあった。

「で、それを兄上は小事と切って捨てたと……………」

ユーシスの顔つきは苦々しいものへと変わった。

「ユーシス……………」

「こんな大事なことを小事って…………自分の生まれた国のピンチなのに何とも思わないの!?!」

ユウナは憤慨した。

「止めるんだユウナ」

「気持ちわかるけど、一番辛いのはユーシスさんだよ」  
クルトとセドリックはユウナを止める。

「……それで」

キリコは顔を上げた。

「ハーキュリーズの拘束又は排除。それを俺たちがやれと?」

「そういうことになるな」

「引き受けないと言ったら?」

「近隣のミルサンテとグレンヴィルに血の華が咲くことになるだろ

う」

「そうなった場合、彼らはこう思うだろう。我々は帝国の英雄たちに見捨てられたと。そうなればⅦ組や決起軍のこれからにも支障をきたすのではないかな？」

「……………」

キリコとミュゼの顔は険しいものになった。

「……ルスケ大佐」

リインはロツチナを見つめる。

「どうやら最初から自分たちに持つてくるつもりだったようですね。自分たちが断れないことを見越して」

「その通りだ」

ロツチナは悪びれもせずに応えた。

「今思えば、ルーファス・アルバレア総督が小事だと決定したのも君たちに当たらせようとするためのものなのかもしれないな」

「……チッ！」

「やってくれましたね……」

「それで？どうするのかね？」

ロツチナはリインを見据える。

「教官……」

「リイン……」

新旧Ⅶ組はリインの答えを待つ。

「その要請、我々Ⅶ組が引き受けます」

リインは真つ直ぐ答えた。

「そう言うと思っていたよ」

ロツチナは笑みを浮かべ、懐から地図を取り出した。

「詳細はここに記してある。また、とある協力者が私の部下と共にオルデイスにいるから合流してくれたまえ」

「了解しました」

「では私は戻る。実を言うと、この場にいること自体が既に軍令違反なのでね。それとキリコ」

ロツチナは軍帽を整えた。

「私は期待しているぞ」

ロツチナはそれだけ言つてカレイジヤスⅡを降りた。

「はあ……………」

リインから大きなため息が出た。

「だ、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ」

「それにしても破壊工作か……………」

「愚かな……………」

「ええ、脱走したそうですが人数はそう多くはないはず。そんな状況で事を起こしても得られる成果は微々たるものですわ」

「何か切り札でも持っているのかしら？」

「いえ……………」

ミュゼはエンネアの推測を否定した。

「じゃあカイエン公は何だつていうのさ？」

「それは——」

「……………呪いか」

「ま、そうだな」

キリコとアツシユは既に確信していた。

「それつて……………！」

「彼らも呪いの強制力に動かされていると？」

「帝国人も共和国人も関係ないはずだ」

「いちいち選んでるワケでもねえだろうしな」

「どうなの？」

「ええ。お二人のおっしやる通りでしょう」

ミュゼは微笑むも、直ぐに真剣な表情には変わった。

「そして、一刻も早く向かうことを進言いたします」

「彼らの行動が混乱のさらなる火種となる。その火種を消すという意味でも急がなくてはならないな」

リインは一呼吸置く。

「アンゼリカ先輩、西ラマール街道のポイントまでお願いします」



「了解だ。ステルスモードを展開しつつ向かう！」  
アンゼリカはブリッジへと向かった。

「初代Ⅶ組や他の人たちは要請を担当して下さい」  
「うん、任せて」

「魔獣退治ならアタシたちがやとくよ」

「……て何で私たちも含まれてるんですの!？」

「さて、どうなることやら」

「……………」

キリコは静かに牙を研ぎ始めた。

8月27日 午後1?30

「遅かったな」

「……………」

西ラマール街道に降り立った二代目Ⅶ組はトワとガイウスと共に  
導力バイクでオルデイスへと向かった。

待ち合わせ場所であるホテル《オルテンシア》で待っていたのはテ  
イタニアとカエラ特務少尉だった。

「テイタニアさんともかく……………」

「まさか貴女が居られるとは……………」

二代目Ⅶ組はカエラ特務少尉を見つめる。

「どんなワケがあるか知らねえが、アンタら敵同士なんだろう?」

(確かに普通ならありえない状況だな)

「……………」

「そろそろ話したらどうだ?」

テイタニアは俯くカエラ特務少尉に促す。

「……………弟から極秘裏に連絡があったのよ」

「弟さん…………?」

「コーデイ・マクミラン准尉。脱走したハーキュリーズの05部隊  
に所属しているの」

「それが脱走した連中か」

「ええ。問題は部隊長のリーガン大尉が状況打開のために非人道的

な破壊工作を計画していること」

「やはり呪いによる強制力でしょうか？」

「十中八九そうでしょう。私の知る限り、リーガン大尉は思慮深く指揮官としては有能です」

カエラ特務少尉は断言した。

「それでなぜ、テイタニア特務中尉と？」

「偵察を行っている所を私が発見したというだけだ」

「ええ……それにしても貴女何者なの？反撃しようと思っただけに勝負がついているなんて」

（いくら共和国軍の特殊部隊で腕を鳴らしたと言っても、人間兵器であるネクスタントには敵うまい）

キリコは驚きを隠せないカエラ特務少尉を見て思った。

「それはそうと、敵戦力は分かるか？」

「ああ、敵は総勢12名。それと共和国軍虎の子のガンシップが一艇ある」

「その内、防衛班と哨戒班がそれぞれ四人一組で編成されているそうよ」

「では、作戦内容は――」

「こちらは2チームに分かれて、片方はガンシップの奪取。もう片方はその陽動といった所ででしょうか？」

ミュゼは情報を整理し、全員に聞こえるように言った。

「では、チーム分けはどうしましょう？」

「ガンシップ奪取チームにはカエラさんとテイタニアさん、後は封鎖エリア全体の観測を目的としたオペレーター、そして奇襲に備えてもう一方必要かと」

「なら、オペレーターは私が担当するね」

トワが拳手をした。

「ではもう一人は……」

「いや、こちらはこれで良い」

「え、ですが……」

「本人がそう言うならそれでいいだろう」

見かねたキリコが待ったをかけた。

「では、俺は陽動チームに加わろう」

ガイウスは陽動チームに決定した。

「ハッ、せいぜい派手に暴れてやるぜ」

「それにしてもこの短時間でここまで……………」

「流星はカイエン公、というべきか」

「ふふ、お粗末さまです」

「もう一つ聞きたいことがあります」

アルティナが挙手をした。

「マクミラン特務少尉、貴女の行動は政府は把握しているのでしょうか？」

「それは確かに……………」

「まさか無断なわけねえよな……………」

二代目Ⅶ組はカエラ特務少尉の言葉を待った。

「それに関しては大丈夫よ。帝国政府特任のジャン大尉との交渉で今回の作戦は了承済みよ」

「……………ジャン大尉？」

キリコは顔を上げた。

「そいつは金髪で慇懃無礼な奴じゃなかったか？」

「え、ええ。慇懃無礼というか何というか……………」

「あ、あたし解っちゃったかも……………」

「おそらく該当するのは一人だろうな……………」

「え、知っているの？」

二代目Ⅶ組の反応にカエラ特務少尉は目を丸くした。

「その人、帝国軍情報局長のルスケ大佐だと思います」

「いや百パーそうだろ」

「ええっ!？」

カエラ特務少尉はふらふらと後退る。

「気づいていなかったんですか!？」

「それは迂闊というか、なんというか……………」

「特殊部隊としては致命傷ですね」

「何らかの交渉材料に用いられるかは明白かと」

「あのオッサンのこつたろうからな」

「あんたは奴の掌の上らしい」

「……………癩だけどそのようね」

二代目Ⅶ組から追及を受けたカエラ特務少尉は頭を左右に振る。

「コ、コラ！」

「す、すみませんカエラさん！」

リインとトワは慌てて謝罪した。

「……………もう大丈夫です。ではそろそろ行きましょう」

「それとカエラさん、ルスケ大佐は排除も視野に入っていますが、自分たちは保護若しくは拘束を考えています」

リインはⅦ組としてのプランを告げた。

「……………ありがとうございます。せめて本国で裁きを受けてもらいたいというのが私の本音です」

「それであるの……………弟さんは……………」

ユウナは恐る恐る聞いた。

「……………あの子も軍人よ。覚悟は出来ているでしょう」

カエラ特務少尉は迷いを振り切るように言った。

「では、参りましょうか」

「ええ、行きましょう」

二代目Ⅶ組らは出発した。

「……………ここまででは予定通りですね」

「ああ……………」

新旧Ⅶ組らの背中を見つめる者たちがいた。

「残るⅦ組の者たちもそれぞれの場所へと向かい、こちらに目は向かないでしょう」

「大した手腕だな、アランドール少佐」

複数の書類を手にロツチナは笑みを浮かべた。

「この要請がよもや、故意に作り出されたとは思えない」

「いや〜……実際苦労しましたよ」

レクター少佐は腕を組んだ。

「魔獣の巣を突いて大物を誘き出したり、工作員を使って開戦気運を煽動したり……」

「フフ……」

「……とりあえずこれで時間は稼げたとは思いますが」

「ご苦労。君は通常業務に戻ってくれたまえ」

「はっ」

レクター少佐は敬礼をして去って行った。

(ガルガンチュア級戦艦……キリコ相手ならば十分に役立ってくれ  
るだろう。その後待ち受ける猟兵王と鋼の聖女の前座としてな)

ロッチナはニヤリと笑みを浮かべ去って行った。

## 捕縛②

「ここですね」

「この奥にハーキュリーズが潜伏しているわけか……」

陽動チームとなった二代目Ⅶ組とガイウスはエイボン丘陵の封鎖区画の前に到着した。

「何とか無力化させつつ正気に戻せるといいんですが……」

「ああ、そうだな……つと」

リインのARCUSSⅡに通信が入った。

『もしもしリイン君——そちらの準備はできた？』

「ええ、先ほど所定の位置につきました。そちらが問題なければいつでも作戦を開始できます」

リインはスピーカーモードにして陽動チーム全員に聞こえるようにした。

『そっか、了解だよ』

『なお先ほどターゲットの配置を確認しましたが——やはり4人1組で行動している模様です』

『哨戒班とガンシップの防衛班、後はリーガン大尉とコーデイ准尉を含む指揮班ですね』

カエラ特務少尉は情報収集で得られた情報を述べていく。

『改めて確認すると、諸君らに頼みたいのは哨戒班の引きつけと確保——加えて指揮班を押さえることだ』

『相手は精鋭……それに黄昏の影響もある。君たちもくれぐれも気をつけることだ』

「はい——そちらもどうかお気をつけて」

『——それじゃリイン君たち。さっそく始めてもらっていいかな』

「ええ、了解です」

そう言ってリインは通信を切った。

「それでフェンスを封鎖している錠は……教官が？」

キリコは錠を見ながらリインに問いかける。

「ああ、学生の頃にケルディックで音を出さないように南京錠を斬ったこともあったが……」

リインは太刀に手をやった。

「だが、今回は相手に気付かれた方が都合がいい。なるべく派手に狼煙を上げるとしよう」

「ククク、面白くなってきやがった」

アッシュは獰猛な笑みを浮かべる。

「……………」

リインは目を閉じ、構えた。

「八葉一刀流——六ノ型・緋空斬」

目を開いたリインは斬撃を飛ばす。

錠は斬り裂かれ、大きな音をたててフェンスが開いた。

「教官——お見事です」

「ここまでやれば相手にも動きがあるはずですよ」

「では……………」

「ああ——このまま一気に突撃するぞ！」

「応——！」

陽動チームは封鎖区画へと突入した。

一方、ハーキュリーズ05部隊アジトでは——

「リーガン大尉、先ほどの物音は……………」

リインの目論見通り、アジトは色めき立っていた。

「フン、愚かな帝国人がやって来たのだろう。だが我々の計画の障害となるなら容赦はせん。哨戒班」

リーガン大尉は哨戒班を整列させた。

「奇襲をかけたつもりだろうが奴らはRAMDAの対処法までは知らんはずだ。逆に奇襲をかけて殲滅して来い」

「ハッ！」

哨戒班はRAMDAで透過させ、出発した。

「哨戒班が戻り次第、近隣の街を襲撃する。愚かで救いようの無い帝国人共に我ら共和国軍の怒りを思い知らせてやれ！」

「この新型砲弾——マレディクションでな！」

『イエス・サー！』

ハーキュリーズ05部隊の士気は熱を帯びた。

「……………」

ただ一人、コーデイ准尉を除いて。

「総員、止まれ」

魔獣を蹴散らしながら進んでいた二代目VII組は通信が入り、歩を緩める。

「トワ教官からですか？」

「ああ、何かあったのか…………」

リインはARCU S IIをスピーカーモードにして開く。

『リイン君——今ちようど岩で出来たアーチの近くにいるよね』

「はい。何かありましたか？」

『カエラ特務少尉とも話したんだけど——その先の陰に哨戒班が潜んでいる可能性が高いから警戒して欲しいんだ』

（確かに待ち伏せには最適な場所だな）

キリコは岩のアーチを注意深く見つめる。

「なるほど…………なかなか相手の気配すら感じないのでおかしいとは思っていました」

「潜入工作に長けた特殊部隊…………やはり一筋縄ではいかないな」

「ああ、例のRAMDAの機能もそうだが…………流石に手強いな」

「トワ先輩——どうもありがとうございます」

『ううん——どうか気をつけてね！』

トワとの通信は途切れた。

「ふふ、トワ教官のナビゲーションは頼りになりますね」

「ああ、これで不意を突かれなくて済みそうだな」

「ならこちらから撃って出ようぜ」

「いや、ここは念には念を入れるべきだ」

キリコは待ったをかけてアルティナの方を向いた。

「ステルスモードで空中から観察していてくれ。奇襲を仕掛けてく



る奴がいたら対処を頼む」

「了解しました」

アルティナはクラウソラスのステルスモードを起動した。

「そこまでしなくても良いんじゃないの？」

「馬鹿正直に4人全員で来るとは思えない」

「確かに。気配すら読ませねえなら奇襲は1人で足りるってわけか」

「ああ」

「ではこちらは……」

「真正面から仕掛ければいい」

「決まったようだな」

リインが声をかけた。

「では行くぞ」

陽動チームは岩のアーチへと向かった。

「そろそろ連中と接触するはずだな」

リーガン大尉は時計を見ながら呟く。

「ガンシップの調整は後どのくらいだ？」

「ハッ！最終調整も残り30分足らずで完了します」

「そうか……」

リーガン大尉は新型砲弾を見つめ、狂気的な笑みを浮かべる。

「ククク……いよいよだ。いよいよ我らの怒りを知らしめる時だ」

「ええ、まったくその通りであります」

「それを成し得るためのマレディクションですからな」

「……………」

周りが新型砲弾を見つめる中、コーデイ准尉は背を向けていた。

（マレディクションですって!!）

リーガン大尉ら指揮班の会話を盗聴していたをカエラ特務少尉の顔が青ざめる。

（カエラ少尉!?!）

(それはいったい?)

トワとテイタニアはただ事ではないことを察した。

(……共和国軍技術局が開発した新型砲弾のことよ)

(それは今の会話で理解している。知りたいのはそれがどのような結果を齎すのかだ)

テイタニアはカエラ特務少尉に詰め寄る。

(……あれはただの砲弾じゃない。複数の毒性物質をかけ合わせで造られた化学兵器よ)

(放たれば最後、半径100アージュ以内には人も動物も残らず感染すると言われているわ)

(な……!?)

テイタニアは思わず硬直した。

(兵器そのものは十月戦役よりも以前から研究されていたらしいわ。でも、開発に関わった機関があまりに非人道的な実験を行っていたとして、大統領令により研究機関は解体、出来上がったサンプルは廃棄されていたはず……)

(そ、そんなものがどうしてこんな所に……!)

(……何者かによる手引だろうか)

(そんな……)

カエラ特務少尉は愕然となった。

(そ、そんなものを使ってしまったら……)

(もはや戦争ではなくなる。そうなればハーキュリーズはもとより、共和国は終わりだろう)

(さらに周辺諸国から見捨てられるだろうな。非人道的な兵器を投入したと見做されるだろうし、世論もその方向に向かうだろう。黄昏の呪いに覆われる今の帝国なら尚更な)

(……)

トワは青ざめ、体が震え上がる。

(だが、今はガンシップを押さえるのが先決だ。気落ちしている場合ではないぞ)

テイタニアは毅然と振る舞う。

(……ええ、分かっているわ)  
カエラ特務少尉は何とか頭を切り換える。

(リイン君たち……急いで……! )  
トワは祈るように陽動チームのいる方角を見つめた。

一方、陽動チームは哨戒班との戦闘にはいつていた。

「く、クソ! こちらは完全に気配を消していたはずなのに!」  
予想だにしない状況にハーキュリーズは劣勢を強いられた。

「だ、だが錬度は此方の方が上だ! 正面から排除して――」

「フレイムグレネード!」

状況の立て直しに回ろうとした哨戒班の動きをキリコのクラフト  
技が妨害する。

「ぐあっ!?!」

「合わせろ!」

「OK! ジェミニブラスト!」

「ムーランルージュ!」

キリコの後方からユウナとミュゼの援護が決まった。

「教官! クルトさん! 今です!」

「応!」

リインとクルトが哨戒班目掛けて斬りかかった。

「秘技・裏疾風!」

「テンペストエッジ!」

二人の斬撃は哨戒班の士気を大いに削った。

「最後の押しだ。決めるぞ!」

「あいよ!」

ガイウスとアッシュが得物を構える。

「ゲイルストーム!」

「ランブルスマッシュ!」

竜巻を飛ばすクラフト技と痛烈な一撃を叩き込むクラフト技は哨  
戒班を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた哨戒班にもはや勝ち目はなくなった。

(クッ!ここは一旦退いて——)

「逃がしません」

ステルスモードを解いたクラウ||ソラスが退却しようとした哨戒班の一人を拘束した。

「ナイス、アル!」

「わたしだけ忘れてもらっては困ります」

アルティナは小さく微笑む。

「キリコの予想はズバリ的中だな」

「ああ」

「ふふ、見事にお株を奪われてしまいました♪」

ミュゼは微笑んだ。

「う、ううう……」

膝を付いた哨戒班は陽動チームを睨みつける。

「こ、ここまでか……」

「ああ……だがこれで……」

「時は稼げた……」

哨戒班は意識を手放した。

「ガイウス——彼らの様子を見てくれるか」

「ああ——任せてくれ」

ガイウスは哨戒班を調べ始めた。

数分後、ラインたちの方を向いた。

「結論から言うと……どうやら彼らは再び眷族化したわけではないようだ」

「どうやら一種の催眠状態にかかっていたみたいだが……」

「催眠?」

「操られてたってか?」

(なら、それをかけた元凶がいるということか)

キリコは哨戒班を見ながら思索した。

「察するに、隊長格の方が怪しそうですね」

「ああ……ともあれ彼らはしばらくこのままでも問題はない」

「……以前のようには全身がズタズタということはないのか？」

「ああ。本格的な眷族化ならばそうなっていただろうが、今回はそこまでではない」

キリコの疑問にガイウスは断言した。

「よ、良かった〜……」

ユウナはホッと胸を撫で下ろす。

「それよりも、一刻も早く元凶の方を何とかするべきだろう」  
「だな」

「ああ。それにこいつの言ったことが気になる」  
キリコは哨戒班の一人に目をやる。

「時は稼げた、だったな」

「このまま飛行艇で向かうってことじゃないの？」

「連中の数はそう多くはない。いくら飛行艇があろうとも、それだけでは事は成せない」

「となると、此方の知らない切り札を持っているのかもしれないな」

「切り札……」

「それはいつたい……」

「そろそろ切り換えてくれ」

リインは二代目Ⅶ組を向かせる。

「現時点では何だって疑える。今は元凶の所までたどり着くことが先決じゃないか？」

「ツ！そうですな！」

「確かにダラダラしてる暇はねえな」

「向かいましょう、教官」

「分かった——それじゃあこのまま一気に制圧するぞ」  
陽動チームは再び動き出した。

「チッ！何をチンタラしている！」

リーガン大尉は哨戒班が戻らないことに苛立ち、舌打ちを打つ。

「ガンシップの調整はどうだ!?!」

「間もなく完了します！」

「そうか……やむを得ないが、我々だけで動くしかあるまい」  
リーガン大尉は軍帽を被り直し、ガンシップに近づく。

「ククク、いよいよだ。いよいよ裁きの時だ」

「これは我々だけではない。傲慢で恥知らずな帝国の者共に振り下ろす、全ての共和国民の怒りと正義の鉄槌なのだ——」

「もう止めてください！大尉！」

コーデイ准尉の我慢も限界だった。

「もう少しで潜伏場所だな」

陽動チームは魔獣を蹴散らしながら奥へと突き進んでいた。

その時、ラインのARCUSⅡに通信が入った。

「はい、こちら陽動チームです」

『ライン君、今どの辺り!?』

トワは急かすように問いかける。

「後少しで潜伏場所に到達する見込みですが、何かありましたか？」

『いい？落ちて聞いて聞いて——』

トワはハーキュリーズ指揮班の会話とカエラ特務少尉からもたら

された情報を話した。

「な……!?!」

ラインは開いた口が塞がらなかつた。

(どうやら本当に何かあったようだな)

キリコは目を細めた。

「……分かりました。急いで向かいます」

『気をつけてね……』

ラインは通信を終えた。

「教官……」

「あまり愉快な内容ではないようですね」

「ああ……聞いてくれ」

ラインは通信内容を二代目Ⅶ組とガイウスに告げた。

「化学兵器!?!」

「バカな……正気なのか……?」

「おいエセふわ、お前が感じたことってのは……」

「ええ。でもまさかそのような代物を持ち出してくるとは……」  
さしものミュゼも化学兵器という可能性は読み切れなかった。

「キリコ、向こう側には化学兵器ってのはあんのか？」

アツシユはキリコに問いかけた。

「……それほど詳しいわけではないが、厄介なものなら聞いたことがある」

「それは？」

「VXとか言う代物だ。ほんの僅かでも吸引・接触しようものなら即座に感染。全身を激しい痙攣が襲い、内蔵を吐き出さんほどの苦痛の末に死に至るというらしいが……」

「なんだそりや……」

「さらに親油性が高く、薬品を用いなければ洗浄が出来ないらしい」

「水ではとても洗い流せないということですか」

「そ、そんなものが……!？」

「とはいえ、こちら側の技術力ではまだそこまでには至らないだろう」

「どちらにせよ、使われれば敵味方問わず、ただでは済まないだろうが」

「はい。帝国側に共和国殲滅の名分を与えるだけでなく、決起軍の結束も大きく揺らぐでしょう」

「政治的に考えれば、当然か」

「い、急いで止めないと！」

「分かっている。急ぐぞ！」

陽動チームは走り出した。

「そろそろ衝突する頃合いか」

「そうですね」

同時刻、ロツチナとレクター少佐はミルサンテのカフェテラスで紅茶を楽しんでいた。

「……ふむ、良い香りだ。ここはなかなかの穴場だな」

「ええ……」

レクター少佐はカップの紅茶を飲み干す。

「さて、そろそろ聞かせてもらいましょうか？」

「何がだね？」

「アンタ……全部知ってたんだろ？」

レクター少佐はロツチナを見据える。

「全部、というと？」

ロツチナはさらりと受け流す。

「そもそも、あの特殊部隊が拘束されていたのは情報局お抱えの場所だ。だが連中はあそこから脱出した」

「合鍵でも造られたのではないのかな？」

「ところがだ。あの鍵は特別な製法で造られていてな。その造り方は俺でも知らねえ。知ってんのはそれこそ鉄血のオツサンくらいのもんだ」

「ふむ。確かに私でも知らないな」

「だがマスターキーは存在する。それを持つてんのは、この世でア  
ンタだけだ。しかも宰相閣下の任命によってな」

「それでもシラを切るかい？ルスケ大佐殿？」

「……………」

「……………」

互いに無言になった。

「フフフフ……」

ロツチナは笑みを浮かべ、降参するように両手を挙げた。

「流石はレクター・アランドール少佐。鉄血の子供たちは伊達では  
ないな」

「な〜にが流石だよ」

ロツチナの変わり身にレクター少佐の呆れかえった。

「全てはアイツのためってわけですか」

「そうだ」

ロツチナは紅茶のお代わりを注いだ。

「私やキリコが生きたアストラギウス以上にバラエティに富んだこ



の世界に於いて、不死の異能者が何を齎すか。わたしの興味はそれに尽きる」

「なら聞くが、アイツがこの世を全部破壊し尽くしちまうようなことになっても……アンタは変わらずにいられんのか？」

レクター少佐は鋭い視線を送った。

「フフフフ……」

ロッチナは紅茶を啜り、レクター少佐を見返す。

「望むところだよ……」

「ッ!？」

狂気を孕んだ笑みにレクター少佐は思わず気圧された。

「……………」

ロッチナは微笑みながら、レクター少佐のカップに紅茶を注いだ。

「見えた……」

陽動チームはハーキュリーズ05部隊が潜伏する場所を捉えた。

「まだ動いてなさそうね」

「……キリコ、どう思う？」

「先ほどの哨戒班の帰還を当てにしているにしても、動きが無さすぎる。内部で何かあったようですね」

「だな」

「確かに動きがあってもよさそうだが」

「では、私が先行しましょうか？」

「いや、ここは正面突破だ」

クラウソラスに乘ろうとしたアルティナをリインが止めた。

「確かに不意を突くなら絶好のタイミングかと」

「でも、待ち構えてるってことはないんですか？」

「いや、連中は早く行動に移りたいはずだ。なら待ち構える意味はない」

「そ、そっか……」

ユウナは納得した。

「教官、そろそろ」

「ああ。ここからは死地だ。くれぐれも油断するな」

『イエス・サー!』

「応!」

陽動チームは潜伏ポイントへと駆け出す。

「陽動チーム、動き出しました」

「私たちも行きましょう」

「目的はガンシップ及び新型砲弾の確保。行くぞ」

陽動チームと連携して奪取チームも動き出した。

「お、お願いです、リーガン大尉……!俺たちがどう足掻いた所で……帝国に与えられるダメージなんて知れてるじゃないですか」

「それも軍事拠点じゃなくて街を対象にした破壊工作だなんて……」

「いや、それだけならまだしも……あんなモノまで持ち出すなんて正気の沙汰じゃありませんよ」

「こ、ここは大人しく投降しましょう——実は姉さんに言って、共和国に帰れる段取りもつけてもらっているんです」

「コーデイ准尉、貴様本気で言っているのか?」

陽動チームが乗り込んだ先では、コーデイ准尉がリーガン大尉ら指揮班に必死の説得を試みていた。

「貴様をこことを心底、見損なったぞ……」

「……………」

「帝国という存在は私の先輩にして貴様の父親の仇——もはやそのことを忘れたのか」

「そ、それは……」

「フン……もう貴様には期待せん」

リーガン大尉は駆けつけた陽動チームの方を向いた。

「フフ、愚かなる帝国人よ——見苦しい所を見せたな」

「……………」

「どうやら、こいつが売った情報を元にここへ来たようだが……も

「はや我々は隠れ立てはせん」

リーガン大尉ら指揮班の身体から黒いオーラから湧き上がった。

「今こそ、コノ『チカラ』デ——えればにあトイウ罪深キ国ニ鉄槌ヲ下シテヤル!!」

リーガン大尉は陽動チームの前にルキフグスを顕現させた。

『!?!』

「ひいっ……!?!あの時の赤い悪魔……!?!」

「リーガン大尉度いったか……どうやら完全に呪いに侵されてしまったようだな」

「悪魔を使役する能力……」

「このまま放置すれば、いずれは外法になる可能性も……」

「クカカツ、コレハイイ——マサニ最高の気分ダ」

ガイウスの不安を余所に、リーガン大尉は恍惚に浸る。

「サア——貴様ヲノ悲鳴ヲ聞カセテモラウゾ!」

ハーキュリーズ05部隊指揮班とルキフグスが襲いかかる。

「ッ!」

ルキフグスは錫杖を容赦なく振り下ろした。

「くっ!」

リインはギリギリで躲した。

「[RAMDA、駆動]」

ハーキュリーズ隊員の二人がアーツを放とうとRAMDAを駆動させた。

「させるか!真・双剋刃!」

クルトの放った斬撃はRAMDAの駆動を妨害した。

「ならば!」

リーガン大尉がクルトに斬りかかる。

「させない!」

「クリアブラストII」

ユウナとキリコの銃撃がそれを阻んだ。

「今です!」

「心得た！タービュランスⅡ！」

「続きます、オワゾーブルーⅡ！」

ガイウスとミュゼのクラフト技が敵を貫く。

「ッ!!」

ルキフグスは錫杖を地面に突き立て、魔法陣を展開させた。

「これは……!」

「しまっ……!?!」

魔法陣から湧き上がる瘴気を受けた者は崩れ落ちるように眠りについた。

(なら……)

瘴気を免れたキリコはレキュリアの薬を蒔き、眠っていた者たちを起こした。

「済まない、キリコ！」

「礼は後にしてください」

キリコは狙いを定めていたハーキュリーズ隊員らに発砲しながら答えた。

「くらえや、デイスペアスロー！」

ハーキュリーズ隊員らの真横に移動していたアツシユが魔力の籠もったダーツを投げつけた。

「ぐっ！小童が！」

アサルトライフルを持ったハーキュリーズ隊員が銃口をアツシユへと向けた。

「秘技・裏疾風！」

即座にリインが斬りかかり、その隙にアツシユが下がった。

「こちらも行きます。ブリューナクⅡ、照射！」

クラウⅡソラスのレーザーがルキフグスに直撃した。

「フレイムグレネードⅡ」

ダメ押しにキリコのクラフト技がルキフグスに軽くないダメージを与えた。

(どうやら効いたようだな)

「オノレ!!」

リーガン大尉は黒いオーラを滾らせてキリコに斬りかかった。

「っ！ハンティングスロー」

すかさずキリコはリーガン大尉の足に投げナイフを放つ。

「グアッ!」

リーガン大尉は動きを止めた。

(そして……!)

さらにルキフグスの頭部目掛けて引き金を引いた。

「ッ!?!」

ルキフグスの動きが鈍った。

「(ここしかないか) 教官!」

「ああ！灰ノ太刀・絶葉!!」

キリコの声を起点にラインのスクラフトが炸裂した。

ルキフグスは消滅し、ハーキュリーズ05部隊指揮班は全員膝をついた。

「コ、小癩ナ……!」

「ダガ!!」

リーガン大尉はスイッチのような物を取り出した。

「あれって……!」

「起爆装置か!」

「不味い!向こう側にはまだ先輩たちが!」

「くっ!うおおおっ!」

ラインは必死に駆け出した。

「ククク……死ネエエエツ!!!」

リーガン大尉は狂気の笑みを浮かべ、起爆装置のスイッチを押した。

少し前——

「ぐっ……!」

「バ、バカな……!?!」

「これで見張りは全部か」

陽動チームが刃を交えている頃、ガンシップの防衛班はテイタニア一人に制圧されていた。

「な、なんなの……本当に……」

「すごい……」

テイタニアの技量を目の当たりにしたカエラ特務少尉とトワは目を見開いた。

「時間が惜しい。さっさと終わらせるぞ」

テイタニアは一瞥すらせず、ガンシップに乗り込んだ。

「テ、テイタニアさん！」

「ま、待って！」

トワとカエラ特務少尉は慌ててテイタニアの後を追った。

ガンシップ内では既にテイタニアが操作にはいつていた。

「……………チツ」

最後の工程でパスワードが必要になり、テイタニアは思わず舌打ちをした。

「ここは貴女に任せた方が良さそうだな」

「え、ええ。任せて」

テイタニアと交代したカエラ特務少尉はコンソールにパスワードを打ち込もうとした。

その瞬間、警告音が鳴り響いた。

「これって!？」

「何かあったようだが？」

「……いけない！」

カエラ特務少尉の顔が青ざめた。

「新型砲弾が起爆しようとしてるわ！」

「何だと!？」

「直ぐに脱出を！」

三人はガンシップから急いで降りようとした。だが、搭載された新型砲弾が輝き出した。

「しまっ……」

「間に合わ……」

(リイン君……)

三人は覚悟を決めた。

「フフフフ……」

その時、この状況に不似合いな声が響いた。

「ソ、ソシナバカナ……!?!」

リーガン大尉は確かに起爆装置のスイッチを押した。

だがガンシップは突如として顕れた結界に覆われ、新型砲弾の起爆は完全に防がれた。

「ど、どうなってるの?」

「……どうやら、予期せぬ助けがあったようですね」

ミュゼは微笑んだ。

「そちらは置いておいていいだろう。今は——」

キリコはリーガン大尉らの方を向いた。

「こいつらを捕らえる方が先だ」

「それもそうだな」

陽動チームはリーガン大尉らとの距離を詰める。

「クッ! マダダ……!」

リーガン大尉から再び黒いオーラが吹き出る。

「帝国ノ奴ヲ……皆殺シニスルマデハ……!」

再びルキフグスが顕現した。

「これは……!」

「また顕れた!?!」

「流石にこれ以上は……」

「……いや違う!」

ルキフグスは陽動チームではなく、リーガン大尉に狙いを定める。

「ナ、ナゼダ!?!」

リーガン大尉の動きは鈍った。

「あ、悪魔め——こっちだ!」

コーデイ准尉はルキフグスを引きつけようと発砲した。

「まずい——俺たちも加勢するぞ!」

「その必要はないわ」  
突如、ルキフグスの足元から蒼い焰が吹き上がる。  
ルキフグスは断末魔の叫びと共に消滅した。

「これは、もしや……」

「……来ていたのか」

「い、今のはいったい……!?!」

黒いオーラから解放されたリーガン大尉は呆然となった。

「さあ——これで残ったのは貴方だけだ」

「これでもまだ、やり合いますか?」

「くっ……」

リーガン大尉は歯軋りをした。

「大尉……」

コーデイ准尉はやり切れない目でリーガン大尉を見つめる。

「そこまでよ、大尉」

そこにカエラ特務少尉らが駆けつける。

「カエラか……。では防衛班は——」

「既に捕縛している」

テイタニアがリーガン大尉に目を向ける。

「そちらも成功したようですね」

「う、うん。思わぬ助っ人が来てくれたんだけど……」

「それは後ほど。さて——」

リーンは再びリーガン大尉の方を向いた。

「先ほどの問いについてはまだでしたね。まだ、やり合いますか?」

「……」

「……いや……いい」

リーガン大尉は得物を地面に下ろした。

「……部下の身の保障は……してもらいたい……」

リーガン大尉は倒れ込んだ。

「気を失ったか……」

「相当な力を使っただろうし……無理もないだろうな」



その後、リインたちに回収されたハーキュリーズ隊員たちの処置が行なわれ、リーガン大尉に発生した眷族化の因子を取り去ることも成功した。

「リイン君たち、お疲れ様」

「ええ、そちらも——じゃなくて！」

笑顔で迎えたヴィータにリインが突っ込む。

「ど、どうしてこちらに!？」

「魔の気配を感じたからまさかと思つて来てみたのよ。そしたらなんだかピンチだったから手助けさせてもらったわ」

「そ、そうだったんですか」

「それはともかく、これはどうするの?」

ヴィータは結界で覆われたガンシップに目を向ける。

「こいつが残ってたな」

「ですが、このまま結界を解けば……」

「毒性物質がバラ撒かれることになるだろうな」

キリコが前に出る。

「やはり……」

「さらに、毒性物質で汚染されたガンシップや地面の洗浄も不可欠だ」

「そこまですんのか……」

「毒性物質に耐性のある魔獣によってさらに撒き散らされる可能性があるがあるからな」

テイタニアも前に出た。

「なら、どうすれば……」

「……………」

キリコは腕を組み、思索した。

「……汚染されたガンシップを周囲2アージユの地面ごと取り出して、焼却処分するしかない」

『!?!』

キリコの提案にテイタニア以外が驚愕した。

「結界で覆った状態で浮遊させることは出来るか？」

「……無理ね」

ヴィータはきつぱりと言った。

「そんな……！」

「クロチルダさんでも無理なのか……」

リインたちは肩を落とした。

「……私一人ならね」

ヴィータは微笑んだ。

「そ、それって……」

「なるほど、エマさんかローゼリアさんの協力を仰ぐのですね？」

「それでも良いんだけど……来たわね」

ヴィータの視線の先に魔法陣が顕れ、劫炎のマクバーンが転移してきた。

「なっ!？」

「ぐ、劫炎!？」

「うるせえな。寝起きに響くだろうが……」

マクバーンは気怠そうに頭を掻いた。

「んで？わざわざ呼び出しやがったのは……」

「これを処分してもらいたいのよ」

「いやいやいや！」

ユウナは思わず突っ込む。

「なんていうか、いいんですかそんな軽い感じで！」

「大丈夫よ。知らない仲じゃないし」

「で、でもクロチルダさんは今は敵ですよね!？」

「え、ええつと……」

「ね、姉さん……いったい何の……」

話についていけないカエラ特務少尉とコーデイ准尉は呆然となった。

「フフ、その前に——」

ヴィータはフィンガースナップを鳴らした。

「ッ!?!」

その瞬間、二人は固まったように動かなくなった。

「クロチルダさん!？」

「心配しなくてもいいわ。ちよつとの間だけ術をかけたただけだから。全て終わった頃には解けるから」

ヴィータはウインクをしながら答えた。

「は、ははは……」

「いい加減マヒつてきやがったな……」

「お前らも大変だな……」

マクバーンは思わず同情した。

「んで、コイツを燃やしちまえばいいんだな？」

「出来れば跡形もなくね」

「あいよ」

マクバーンは右手に高密度の焔を顕現させる。

「っ!」

「やはり見慣れませんか」

「それじゃ、いくわよ」

ヴィータは結界で覆った汚染されたガンシップを浮遊させた。

「おらよっ!」

マクバーンは高密度の焔を投げつけた。

着弾した瞬間、焔は汚染されたガンシップを包んだ。

「きやあああっ!?!」

「くっ!」

焔の勢いにリインたちは気圧されそうになった。

その間に、ガンシップは原型を失い蒸発していった。

ヴィータが結界を解くと、そこには消し炭しかなかった。

「次はガンシップの下の地面ね。どれくらい削ればいいのかしら?」

「周囲2アージュ、深さも同じくらいで頼む」

「わかったわ。でもちよつと時間をちようだいね」

ヴィータは魔法陣の調整を始めた。

「それよりも、まさかアンタが来るなんてな」

リインはマクバーンに問いかけた。

「まあ暇だからな。それよりお前」

マクバーンはトワに目をやる。

「お前の知り合いだっつうアイツ……ゲオルグだったか？」

「っ！」

「ジョルジュさん……」

「トワ教官にアンゼリカさん、クロウさんと同窓だった……」

「……………」

キリコは組んだ腕に力を込めた。

「そいつがな、あのアルベリヒと死線と一緒に何とかという戦艦に乗ってるんだと」

「!? シャロンさんと!?!」

「それにアリサさんのお父様と……」

リインたちは驚愕した。

「そ、それでその戦艦というのは……」

「さあな。そこまでは知らねえ」

マクバーンは素っ気なく返した。

（もしか、ガルガンチュア級戦艦のことか？）

テイタニアは考えこんだ。

「……………」

キリコは不審に思ったが、触れなかった。

「話し込んでる所悪いけど、出来たわよ」

ヴィータは地面結界で覆い削り取っていた。

「んじやさつさと——」

マクバーンは焰を放り込んだ。

焰は一瞬で燃やし尽くし、消し炭すら残らなかった。

「ふああ……これで終わりか？」

マクバーンは欠伸をしながら言った。

「ええ。ご苦労さま」

「フン……」

マクバーンはどこかへと転移して行った。

その後、挨拶もそこそこにヴィータも転移して行った。

カエラ特務少尉とコーデイ准尉はヴィータが去ったのと同時に我に返った。

二人の記憶が飛んでいたことも手伝い、何者かによる襲撃でガンシップは大破させられたことで落ち着いた。

現場での後始末をテイタニアに託し、リインたちはミルサンテに帰還した。

「はあ~~~~~」

リインたち大きなため息をついた。

「きよ、教官……」

「ご心中、お察しします」

「まさかクロチルダさんが来てくれるなんてね……」

ユウナ、ミュゼ、トワは苦笑した。

「とりあえず、ミッションは成功なんだろう？」

「まあ、それはそうなんだが。ハーキュリーズの人たちは共和国に送還されるんでしたね？」

「うん。一旦、帝都病院で回復を待って、それから引き渡されるみたい」

「そうですか……」

「まあ、ウルスラ病院よかいいだろ」

「ちよつと、それどういう意味？」

ユウナはアツシユをジロリと睨む。

「……皇帝と作業員を同じ病院に入れるつもりか？」

すかさずキリコが言葉を挟む。

「流石にそれはダメでしょう」

「あ……そっか」

ユウナは頬を掻いた。

「他のみんなも無事に終えたみたい」

トワはARCUSSⅡに入ったメッセージを読んだ。

「ならいよいよ……」

「相克か……」

「ああ……」

リインは顔を上げる。

「とりあえず、カレイジャスⅡに来てもらって皆と合流しよう。その後アグリア旧道を経由して龍霊窟に向かう」

「うん。あつ、来たみたい」

「リインたちの頭上をカレイジャスⅡが旋回する。」

「とりあえず、ガラ湖周遊道の空き地に来てもらおうか」

「そうですね」

リインたちはガラ湖周遊道に向かって歩き出した。

（猟兵王との戦いが始まるのか）

キリコは、次に待つ戦いに想いを馳せる。